

コードギアス～死亡キャラ生存if√(旧題：シャーリー生存√)～

スターゲイザー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはズレた物語。R2においてシャーリーの死がルルーシユの破滅への第一歩だった。だが、その死が無かったとしたらルルーシユはどうかっていただろうか。『さあ、本当を始めよう』◆※R2 TU RN 13 「過去 からの 刺客」からのIFとなります。3 / 2 7 ユーフエミア生存√を始めました。3 / 30 作品タイトルを変更しました。5 / 12 ト部生存√始めました。6 / 2 シャーリー生存√2を始めました。

# 目次

シャーンリー生存✓

第一話 シャーンリー生存✓ | 1

第二話 ブレた運命 | 12

第三話 本当を始める為に | 24

第四話 超合集国決議第壹號 | 36

第五話 汝に信ありや | 49

第六話 第二次東京決戦 | 60

第七話 裏切り | 76

第八話 皇位篡奪 | 89

第九話 『自分』 | 105

第十話 シュナイゼルの仮面 | 121

第十一話 ゼロから始める為に | 136

第十二話 ダモクレスの空 | 153

第十三話 ラグナレクの接続 | 169

第十四話 ゼロ・レクイエム | 185

最終話 皇帝ルルーシュ | 203

シャーンリー生存✓ 後日談 | 220

ユーフェミア生存✓

STAGE 1 少女は踏み出す | 229

STAGE 2 ジュリアス・キングスレイ | 241

STAGE 3 黒の騎士団解体 | 253

STAGE 4 特派 | 264

STAGE 5 特区・日本 | 278

STAGE 6 最高にして最悪な | 291

STAGE 7	E・U・戦線に異常有り	307
STAGE 8	軍師の謀	320
STAGE 9	全ては掌の上で	333
STAGE 10	朱金城に舞え	348
STAGE 11	花婿を奪還せよ	361
STAGE 12	血染めのルルーシュ	374
STAGE 13	暴かれた嘘	389
STAGE 14	憎しみの連鎖	401
STAGE 15	再誕	414
STAGE 16	ナイトメア・オブ・ナナリー	425
最終話	全てがゼロになる	437
ト部生存√		
第一話	ト部は物申す	448
第二話	暗中模索	456
第三話	その罪は重すぎた	466
第四話	告解	475
第五話	ゼロという記号	485
第六話	掌の外	500
第七話	皇帝失墜	511
最終話	0から1へ	525
シャーリー生存√2		
STAGE 0	始まり	539
STAGE 1	過去からの刺客	546
STAGE 2	嚮団対策会議	559
STAGE 3	嘘と本当と	574

STAGE 4	嚮団包囲網	586
STAGE 5	赦し	599
STAGE 6	関係の名	609
STAGE 7	共犯者	625
STAGE 8	作戦後の一幕	636
STAGE 9	信頼	646
STAGE 10	魔女の愛	663
STAGE 11	小さな変化	679
STAGE 12	決議の裏側で	691

シャーリー生存✓

第一話 シャーリー生存✓

弱者は決して強者には勝てず、搾取されるばかり。

黒の騎士団を立ち上げた稀代のテロリストであるゼロの正体であるルルーシュは獣の論理を壊す為に超大国ブリタニアに戦いを挑み、一度は完膚なきまでに敗北したものの再び立ち上がった。

人の意志では抗い様の無い定め。運命とは流れる川のようなものであると言った者がいた。

ゼロとして幾度も奇跡を起こして反ブリタニア勢力を纏めつつあるルルーシュの前に過去からの因縁が立ち塞がるのは必然だったのかもしれない。

「ジェレミア・ゴットバルト……」

ギアス嚮団より放たれた刺客であるジェレミアと単身で対峙してしまつたルルーシュは、モノレール乗り場の行き止まりを前にして振り返る。

「機械の体、ギアスキャンセラー………純血派のリーダーを気取っていた男が改造人間に落ちるとは。執念は一流だな、オレンジ」  
「なんとでも言うがいい」

禁忌のワードであるオレンジと呼んで思考を乱そうとしたルルーシュの策に、ジェレミアは髪の毛一本ほどの動揺も見せない。

策通りに進んだこの状況にルルーシュは一步踏み出したジェレミアを視界に収めながら、事前に取り出していた装置を固く握る。

（ギアスキャンセラー、確かに俺にとって天敵とも言える力だが動力源があるはず）

バッテリーなどの動力を身に着けているようには見えない。

体に動力源を仕込んでいるとすれば、ここに来るまで何度もギアスキャンセラーの力を発動したことを考えれば最も有力なのはサクラダイト。

サクラダイトに干渉し、活動を停止させる装置であるゲフィオン・デイスターバーを後の作戦の為に列車駅員をギアスで操作してモノレールに仕込んでいる。

(動力源がサクラダイトであるかは賭けになるが)

ジェレミアがサクラダイトを体に仕込んでいるならば、ゲフィオン・デイスターバーを作動させれば身動きできなくなる。

(俺は奇跡の男ゼロ！ この程度の苦難など乗り越えて見せる！)

失敗した場合のことを考えて別のプランを組み立てながら、事前の実験できるこの機会を活かさないとはいへない。

「貴様に……………いや、あなたに聞きたいことがある」

ジェレミアが二歩目を踏み出しながら言った言葉に、ルルーシュはゲフィオン・デイスターバーを作動させるボタンを押すのを一瞬留まった。

「何?」

敵を見る目ではないジェレミアに困惑したルルーシュに、ジェレミアは安易に近づくことなく片膝と両手を地面についた。

ジェレミアが直ぐに動きにくい体勢になったことで、ルルーシュはボタンを押しかけたまま止まる。

「V. V. から先代ゼロの殺害を命じられた時、その名を聞いてまさかと思いました」

騎士が王に跪くような体勢のまま、ジェレミアは当時の心境を語り始めた。

「ルルーシュ・ランペルージ……………我が敬愛するマリアンヌ皇妃の御子の名と同じ。ナナリー様が生きておられたことも考えれば、ルルーシュ様が生きておられても何もおかしいことではない。私は歓喜に打ち震えました」

「……………」

「私は初任務だったマリアンヌ皇妃の護衛にも関わらず守れず忠義を果たせなかった」

込み上げる悔しきで地についた手を固く握るジェレミアが嘘をついているようにはルルーシュにも見えなかった。

「お前は、俺を殺しに来たのではなく……」

「私の主君は、V・V・ではなくマリアンヌ様に」

そして、ジェレミアは意を決したように顔を上げる。

「ルルーシユ様、あなたは何故ゼロを演じるのです？ 祖国ブリタニアを、実の父親を敵に回すのですか？」

ジェレミアからは罨の気配は感じない。ただ真摯にルルーシユに真意を問おうとしている。

その問いにルルーシユは一度目を閉じた。

「ブリタニア皇帝シャルルは、母さんを見殺しにした。その為にナナリーは目と足を奪われ、俺達は人質として日本に送られた。その後のことは知っているだろう。ブリタニアは日本に戦争を仕掛け、占領した。俺達がいるのもお構いなしに」

母への忠義を果たせなかったと無念を明らかにしようとも、ジェレミアを信用も信頼もしないが正体は知られているのだから話を引き延ばしてロロが来るまでの時間を稼ぐ。

「仮にブリタニアに戻ろうとも政治の道具にされるだけ。ブリタニアに怯えて暮らし続けるなど御免だ」

「だから、ゼロとして立ち上がり、ブリタニアを討つと？」

ルルーシユの烈火の眼差しが言葉よりも雄弁に物語っていた。

「倒すべきはブリタニアという国と、その国の有様を歪めている弱肉強食の論理を振るう皇帝だ」

ふと、話している途中でルルーシユの脳裏を過ったのは、ジェレミアの襲撃で別れたシャーリー・フェネットのことだった。

日本が侵略され、身を隠さなければならなかったルルーシユは他人に対して臆病で疑い深く、ブリタニアからエリアーにやってきた者に対して好意的ではなかった。

シャーリーと関わったことで、間違っているのは個人ではなくブリタニアという国の体制そのものであり、その頂点に立って国を力尽くで動かしている皇帝シャルルであると気づいた。

「弱肉強食は獣のルール、俺達は人間だ。獣じゃない」

立場を変えれば誰もが強者になり弱者にも成り得ることをルルー



シユは何度も思い知った。

だからこそ、理性を持った人として獣のルールを否定する。

「ナナリーが望む世界はそんな世界じゃない」

「ルルーシユ様……」

畢竟、ルルーシユが立ち上がった理由はナナリーに収束する。

「ブリタニアと戦っていれば母さんの死の真相を知る者も出て来るだろう。コーネリアは知らなかったようだが」

「申し訳ありません。私何か知っていれば良かったのですが」

ジェレミアがあの日に関わっていたことは知らなかったが、これほど忠義に燃えている男がリアンヌのことで嘘をつくようにも見えない。

（は!? 俺は敵と何を呑気に話している!）

襲撃者の言うことを疑うことなく鵜呑みにして、のほほんと会話に興じている自分がルルーシユは信じられなかった。

「このジェレミア・ゴットバルト、微力ながらもルルーシユ様のお力になりたく」

「では、ギアス嚮団本部とV・Vの居場所を言ってみるがいい」

「中華連邦の砂漠地帯に本部があり、V・Vもそこに」

あつさりと答えられ、漫画であるならば「……………」と付きそうな顔でジェレミアを見るルルーシユ。

「あの子供の姿をした小賢しい悪魔を討つ時には必ず私も。嚮団には絶対数は多くありませんがギアスユーザーがいます。私のギアスキャンセラーの力が役に立つでしょう」

「む……」

ルルーシユが知るだけでもギアスには、自身の絶対遵守、マオの読心、シャルルの記憶改竄、ロロの体感時間停止と多種多様。

刺客を送られた以上は、ギアス嚮団との決戦は避けられない。ジェレミアのギアスキャンセラーの力は、あればかなりの力を発揮してくれるだろう。

（どうする? ジェレミアの力は使えるが信用出来るのか）

人は容易く嘘をつく。

ギアスで従わせるのが一番安心できるのだが、ジェレミアにはギアスキャンセラーがあるので絶対遵守の力が意味を為さない。

「……………良いだろう。ジェレミア卿、貴公の忠義を信じる。裏切つてくれるなよ」

様々な思考の果てにジェレミアを受け入れた上での損得を考え、仲間として受け入れることを決めた。

「イエス・ユア・ハインース！」

顔を喜びで染めて応えるジェレミアの態度は本物であると、疑い深いルルーシュにも見えた。

「この駅から目立たずに脱出しなければならない。ジェレミアは先行し、危険がないかを確かめてもらおう」

「はっ」

「仲間のロロが向かって来ているから合流しろ」

駅員を倒すジェレミアの姿は多くの人に見られたことだろう。残っていたルルーシュも見つかって尋問されるのはよろしくない。

テロ騒ぎで避難誘導が行われている中で、ルルーシュへの危険性を減らす為にジェレミアを先行させると向かって来ているロロと鉢合わせする可能性も高い。

仲間にしたことを連絡はするが、不意の遭遇戦に体が反応してしまうことは多々ある。

ロロの体感時間停止のギアスは不意を打つのに適しているので、仲間にしたジェレミアを殺されるのは困るのでギアスキャンセラーを発動させておくように言っ先行させる。

「こちらからも連絡を入れておくが一応、ギアスキャンセラーは発動しておけ。ロロのギアスは体感時間を止めるからな。他にも俺のギアスの命令下にある者もまだいるかもしれない」

ゲフィオン・デイスターバーを使わなかったこと、ジェレミアへのアドバイスをしたこと、この判断がルルーシュを違う運命の流れへと導くことになる。

ルルーシュがジエレミアに追い詰められ、ゲフィオン・デイスターバーを発動させるか迷っていた時にシャーリーとロロは出会った。

「ロロ!？」

「シャーリー、さん……」

兄であるルルーシュを狙うジエレミアを追ってやってきたロロと、奇しくもジエレミアのギアスキャンセラーで封じられていた記憶が蘇ったシャーリー。

同じ人物を求めてこの地へと集った二人は運命に導かれるように出会ってしまった。

「どうしてここに？」

「僕は兄さんと呼ばれて。シャーリーさんこそ」

屋上につけたヘリコプターからテロ騒ぎで止まったエスカレーターを駆け下りて来たロロは、問うシャーリーの手に握られた銃を見た。

「ルルに話したいことがあるの」

その言葉を聞いてロロの目の奥に嫉妬と羨望が宿る。

「それと、あなたにも聞きたいことがあるのロロ」

これは絶好の機会である、とロロの中の悪魔が囁いた。

「答えて、あなたは誰？」

「!？」

体感時間停止のギアスを発動させ、シャーリーが持つ銃で彼女を撃とうと考えていたロロは動揺したように指先を揺らした。

「な、何を言ってるの、シャーリー？ 僕はロロ・ランペルージ。兄さんの弟だよ」

「本当に？」

動揺しながらも答えたロロは疑問を呈されたことに腹を立て、キツと強い眼差しでシャーリーを睨む。

「一年前までルルに弟なんていなかった。いなかった、はず」

途中で自信を無くしたのはシャーリー自身、ルルーシユの全てを知っているわけではないから。

ナナリーという妹がいるのは確かだが、ルルーシユのアツシユフォード学園入学以前の過去を知らないから弟が絶対にいないと断言できなかった。

「私は、ルルが好き。ロロはどう?」

「好きだよ」

たった一人の兄だから、ロロに家族の温かさを教えてくれた人だから、色んな理由はあるにしても好意の気持ちにおいて他の誰にも負けるつもりはなかった。

「ルルの秘密を知っても?」

ロロの存在に疑問を覚えていたことから怪しんだが、その言葉でシャーリーがシャルルにかけられた記憶改竄のギアスが解かれているのを確信する。

「知ってるよ、僕は。きっとシャーリーよりもずっと」

ルルーシユへの独占欲の発露から、気付けばロロは勝ち誇るように唇の端を上げながらシャーリーに向かって言っていた。

「あなたは味方なのね、ルルの」

「え」

ロロには分からないが、如何なる理由によってか警戒を解いたシャーリーが銃の引き金から指を離れたのを見逃さない。

「お願い、私も仲間に入れて。私もルルを守りたいの!」

熱情を高めて行くシャーリーとは裏腹にロロの心はどこまでも冷めていく。

「取り戻してあげたいの、ルルの幸せを」

何を取り戻す必要があるのか、とロロは内心で毒づいた。

偽りの関係でありながらも兄の傍にいられる今の生活で十分なのに、目の前の女は全く違うことを言っている。

(僕と出会う前に戻すだって?)

満ち足りた今ではない。取り戻すということは、ロロがルルーシユ

と出会う前を意味している。

(兄さんを煩わせるモノが多すぎるぐらいなんだ)

ブリタニア、黒の騎士団、ギアス嚮団………極論で言えば、ルルーシュの周りにある自身以外の全てが邪魔だとすら思っている中で、シャーンリーの言葉はロロの神経を逆なでする。

「妹のナナちゃんだって、一緒に!!」

その言葉がロロにシャーンリーを害させるトリガーとなった。

ナナリーこそルルーシュの家族という自分の立場を脅かす存在である。

「ナナリーなんていらぬ」

「え?」

「シャーンリー、君は邪魔だ!」

体感時間停止のギアスを発動させてシャーンリーを止める。

シャーンリーの位置は十分にギアスの効果範囲内に含まれる。一定範囲内の相手の体感時間を止めて、行動や思考を止められたシャーンリーに向かって歩く。その目的は倒れている警備から奪い取ったであろうシャーンリーが持つ銃。

「君が悪いんだ」

ルルーシュに特別な感情を向けられるシャーンリーは、ロロにとってその存在そのものが邪魔なのだ。

彼女が持つ銃に手を伸ばす。

銃を奪ってから撃ちたいが、そうなれば他殺の疑いが強く成ってしまう。どうせならば自殺したと警察を思わせる為に、止まっているシャーンリーの腕を持って銃口をその腹へと押し付ける。

後は引き金を引けば銃口が発射されるその瞬間だった、ロロの携帯電話が鳴り出したのは。

「えっ!」

言葉のままに引き金を引こうとした指がかかったところで、突如として体感時間が停止しているはずのシャーンリーが動いた。

鳴り出した自身の携帯電話にも驚きながらも、ロロはそれでも構わずに引き金を引いた。

「あぐっ!?!」

「貴様!・何をしている!!」

弾丸がその身を貫いたシャーリーの苦痛の呻きの直後、男——  
ルルーシユに先行してこの階へと上がって来たジェレミアの叫びに  
ロロはそちらを見た。

仰向けに倒れるシャーリーに構わず、ルルーシユを狙うジェレミア  
が現れたことに舌打ちをするロロ。

(ジェレミアに僕のギアスは効かない。武器が無いと)

武器は身近にあった。シャーリーの銃で生身の部分に当てれば倒  
せる。

まだジェレミアとはかなりの距離がある。シャーリーが手放した  
銃を手にとって構えて撃つ時間は十分にあった。

「シャーリー!」

撃たれたシャーリーが手放した床に転がっている銃を拾い、向かっ  
て来るジェレミアに構えた瞬間に遅れてエスカレーターを上って来  
た携帯電話を耳に当てていたルルーシユの声さえなければ。

「はっ!」

「うっ!?!」

この階に上がって来たルルーシユの視界に自分も映っていたはず  
なのに、倒れているシャーリーしか目に入っていないルルーシユに動  
きを止めたロロは身を低くして接近したジェレミアの蹴りに拳銃を  
弾き飛ばされる。

「ロロ、貴様!」

銃を持っていたロロと腹部を抑えて倒れているシャーリー。

両者を見て、持ち前の洞察力で一瞬で状況を読み取ったルルーシユ  
の激怒の眼差しが、身に沁みついたジェレミアの追撃を避けるために  
後退したロロを射抜く。

「ち、違う兄さん! シャーリーが記憶を取り戻していて、拳銃を手に  
兄さんを追っていたから僕は」

「黙れ!! ジェレミア、ロロを殺せ!」

兄を守る為だと弁明しようとしたロロに対して、例えどんな理由で

あろうともシャーリーを傷つけたという一点だけでルルーシュには  
ロクを排除する理由に成り得た。

「イエス・ユア・ハインス！」

主の意向のままに騎士たるジエレミアは行動する。

「兄さん!？」

悲壮な叫びを上げるロクは向かって来るジエレミアに対処せざる  
をえない。

銃を失ったロクにジエレミアと戦うだけの力はない。

逃走を選んでこの場からいなくなるロクと追うジエレミア。

「シャーリー！」

いなくなったロクとジエレミアのことよりも、仰臥位で腹部の右側  
を抑えるシャーリーの下へと駆け寄ったルルーシュ。

ジエレミアが仲間になったことをロクに伝える為に電話をかけて  
いた携帯電話で救急車を呼ぶ。

「ルル……」

「今、医者を呼んだ。だから頑張ってくれ！ くそつ、まだか！」

目を開けたシャーリーに言いながら、たった今呼んだばかりの医者  
はまだ来ないのかと辺りを見渡す。

論理性の欠片もないと自覚するよりも焦りがルルーシュを支配し  
ていた。

「私ね、記憶が戻って凄く怖かった……」

抑えている腹部を中心として徐々に服が血で真っ赤に染まってい  
く。その最中に放たれたシャーリーの言葉にルルーシュは目を見開  
いた。

「偽物の先生に、記憶にない友達に、みんなが嘘をついている。世界中  
が私を見張っているような気がして」

痛みに顔中に脂汗を浮かべながらシャーリーは必死に話していた。

「ルルは こんな世界で、一人で戦ってたんだね。たった一人で。だ  
から私は、私だけは、ルルの本当になってあげたいって」

「……………シャーリー」

苦し気に語るシャーリーにルルーシュが言える言葉がない。

「私、ルルが好き……お父さんを巻き込んだって分かってても、ルルを嫌いになれなかった。ルルは……全部忘れさせてくれたのに、それでも、またルル……を好きになった……記憶を、弄られても、また……好きになった。これって、運命だよね……」

血がどンドン流れていくに従ってシャーリーの言葉も途切れ途切れになってきた。

ギアスに翻弄されて来たシャーリーには二度と使うまいと決めていた力を使ってもシャーリーを救おうと、ルルーシュは左目の特殊なコンタクトを外す。

「もう喋るなシャーリー！ 死ぬな！死ぬなっ!!」

「口を、許して……あげて……」

「シャーリー！ シャーリー!!」

やがて意識を失ったシャーリーを前にして、かけていたギアスすらも効かなくなったルルーシュに出来ることは何もなかった。



## 第二話　ズレた運命

時刻は既に日没を迎えて電灯が照らされる時間帯であるにしても、その場所は暗かった。

場所柄、灯りで煌々と照らされるには不適切と考えられたのかもしれない。救急専門外来<sup>E</sup>の待合室<sup>R</sup>にやってきた枢木スザクは不意にそんな思考を抱いてしまった自分を恥じた。

「ルルーシュ……」

スザクは緊急手術が行われている部屋の前で、嘗ての友であり敵である男の名前を呟いた。

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア、ルルーシュ・ランペルージ、そしてゼロ。数多の名を持つ男は名を呼ばれたというのにスザクの存在に気付きもせず、長椅子に座っているルルーシュは組んだ両手の指を額に当てて一心不乱に祈っている。

(ユフィを殺した君が何に祈っているつもりだ)

神か、運か。撃たれたシャーリーの命が助かることを祈るべきだと分かっているはずなのに、ユーフェミア・リ・ブリタニアを殺したゼロであるルルーシュだけが救われるのが我慢ならないとも思っている。

アツシユフオード学園で複雑な経歴を持つ自分にも分け隔てなく接してくれた友人の危難を前にしても、ゼロルルーシュへの恨みを捨てきれない。

「ルルーシュ、テロリストはまだ捕まっていない」

決して消えない憎悪を押し留めても隠しきれない強い口調で呼びかけると、ルルーシュの肩がピクリと反応した。

「君が最初にシャーリーを発見し、救急に連絡したんだろ。シャーリーを撃った犯人を見ていないのか？」

「……………見たかもしれないが白煙で後ろ姿の人影しか分からなかった」

あの駅構内のテロ騒ぎの際に火事と思われた白煙は大容量の複数

の発煙筒によるものと判明している。

警備員に任せたシャーリーがどうして駅構内に入ったのか、そもそもテロリストの目的は何だったのか、そしてルルーシユは何故駅構内にいたのか、謎は尽きない。

「シャーリーの容態は？」

数時間前に腹部を撃たれ、ルルーシユの通報で救急で運び込まれたシャーリーの手術はまだ終わっていない。

現場の責任者としてあらかじめの捜査が終わってから駆け付けたスザクは容態を詳しく聞いていない。

「分からない」

ブリタニア語で『手術中』と書かれたランプを見上げたルルーシユに仮面は見られない。

ヴィ・ブリタニアでもランペルージでもゼロでもなく、ただのルルーシユがシャーリーのことだけを想っているように見えた。

『許せないことなんてないよ。それはきつとスザク君が許さないだけ。許したくないの、きつと。私はもう、とつくに許したわ』

テロ騒ぎが起こる前にシャーリーが言った言葉が頭の中で繰り返される。

(君にも許せない何かがあったのか?)

扉一枚隔てた向こうで手術中のシャーリーのことを想う。

(僕は、俺は許せない。許せないと思っている)

ユーフェミアを殺したゼロを、ギアスをかけて虐殺皇女の汚名を被せたルルーシユを許せるはずがない。

(でも、ユフィは誰も恨んではいなかった)

最後の最期、恨み言ではなく夢想の中で死んでいった。

その夢想を本物にする為にスザクは戦っている。戦っているが、親しい人を死なせたわけではない。

(ルルーシユを許せない。許したくないのは俺だ)

シャーリーの言ったように、ルルーシユは多くの人を裏切った報いを受けている。

(外道だ。やったことは人の道に劣る畜生のやることだ)

スザクがシャルル皇帝の前に引きずり出し、偽りの記憶を植え付けて妹のナナリーを奪った。

だが、誰も死んだわけではない。シャーリーが死ねばユフィを失った自分の気持ちができるだろうと、そんな暗い気持ちがないわけではない。

同時に友人として、一人の人間としてシャーリーには助かってほしいとも思っている。

(自己矛盾か。ルルーシユを笑えないな)

人とは自己矛盾の塊であると言ったのは誰か。

「あ」

今のルルーシユを友として見るか、敵として見るか、その矛盾に囚われていたスザクが見上げていた『手術中』の赤いランプが消えた。

「シャーリー……！」

スザクの声に反して顔を上げたルルーシユが長椅子から立ち上がった。

時が止まったかのような十数秒の後に、二人が見守る中で手術室の扉が内側から開かれて手術着を着た男が出て来た。

「先生！ シャーリーは!!」

「ご家族の方ですか？」

「いえ、彼女の友達です」

「……………」一時は出血多量で危険な状態でしたが容態は安定しました。まだ意識は戻っていませんが、もう大丈夫でしょう」

医者に縋りつくように必死な顔で聞くルルーシユに、医者も気圧されたようで少しの黙考の後に本来ならば家族以外には明かさない患者の状態を話した。

「よ、良かったあ…………」

安心させるように告げた医者 of 言葉に、へなへなとへたり込むように座り込んだルルーシユの姿にスザクは同じく安堵しながらも目を細めた。

「奇跡的に臓器や血管を傷つけていませんでした。後少しズレていた間に合わなかったかもしれないですね。こう言うのも変ですが運が

良かった」

「ありがとうございます。ありがとうございます」

流石にあのテロリストがルルーシュであるという推測が的外れであることはスザクも理解していた。

（あのプライドの塊のようなルルーシュが見知らぬ相手にこんな無様を晒すはずがない。やはりルルーシュがテロリストではない、か）

第一、目撃情報にあるテロリストの容貌は大柄でガツシリとした体格の貴族然とした、体格からしてルルーシュとは真逆の男と見られている。

しかも身内に甘いルルーシュがシャーリーを傷つけるはずがないと分かっているのに、それでも疑ってしまうのはゼロ〇テロリストの図式がスザクの脳裏に刻み込まれているから。先入観も甚だしい。

首を横に振ったスザクは、取りあえず今は目の前の事件を解決することを優先することにした。

「ナイト・オブ・セブンの枢木です。彼女はテロリストに撃たれた可能性が高い。意識を取り戻したら話せますか？」

騎士としての仮面を被り、証明する免状を見せて医者に告げる。

「患者の負担になるので短時間をお願いします」

「構いません」

医者は免状とスザクの顔を往復した後、重い溜息をした後に許可を出した。

「後、麻酔の関係で目が覚めるのは明日になると思いますが」

「連絡をくれれば何時でも来ます。これが自分の連絡先です」

「分かりました」

スザクとしてもシャーリーの体のことを思えば出来るならば後にしたいが、ナイトオブブラウンズとしての仕事も果たさなければならぬ責任がある。これもまた自己矛盾の一つなのかもしれない。

「ルルーシュ、ほら」

そして今もまた友としての仮面を被り、座り込んだままルルーシュの腕を掴んで長椅子に引き上げる。

「僕は一度経過報告に政庁に戻るけど、君はどうする？」

「……………シャーリーの家族が来るまで待つ。その後は学園に戻るよ」

憔悴はしているがハッキリと言ったルルーシュに領き、仕事の残っているスザクは足早に去って行った。



合衆国日本の暫定首都・蓬萊島にある黒の騎士団の旗艦である斑鳩。

斑鳩には幹部にも入室が禁止されている部屋がある。それこそが総帥であるゼロの私室だった。

「意外だったな」

そのゼロの私室にて自由に出入りを許された二人の内の一人である、ゼロの愛人とも噂されているC・C。C・Cは配達させたピザを食べていた。

「何がだ」

当のゼロルルーシュは数日の内にC・Cが散らかした部屋の片づけをしながら返事を返す。

「シャーリーを撃つた口口を殺さずにいることだ」

「あれはジェレミアが俺の命令を守らずに勝手に勝手に捕まえたからだ」

「錯乱した主のことを案じる騎士の鏡じゃないか」

いつそ掃除機をかけた方が早いけどゼロが部下に掃除機を求めるときか、と真剣に迷っているルルーシュの姿に唇を笑みの形にしながら

C. C. は食べつくしたピザの箱を放る。

「捕まえた後で殺すことも出来ただろうに」

空き箱を受け取ってゴミ袋に入れながらルルーシュは否定も出来ず、苦虫を噛み潰したよう酷く苦々しい顔をする。

「撃たれたシャーリーがロロを許せと言ったんだ。仕方ないだろう」

「甘い奴」

身内に甘いからこそこの道を選び、道を誤りもする。

「ナナリーの居場所を奪った奴だぞ」

「分かっているっ！」

分かっているからこそ腹立たしく、ルルーシュは身内には非情に成れない。

「俺は、もうシャーリーに嘘はつけない」

一度失いかけたから、二度と失わないようにする。

ゼロの犠牲に、ギアスの力に幾度も翻弄されて来たシャーリーを傷つける選択を選べない。

『私だけは、ルルの本当になつてあげたいって』

死んでもおかしくなかったあの状況で言われた言葉を疑えるはずがない。

「まあ、いいがな」

ナナリーを中心にしているルルーシュの中に生まれた変化を面白そうに眺めながら、放っておけない懸案は未だ二人の間にある。

「ロロと黒の騎士団には殆ど繋がりは無い。だが、あいつのギアスは強力だ。逃げられないか？」

「その心配はない」

言い切ったルルーシュは集めたゴミ袋を一カ所に纏める。

「ギアスで従わせた機情で匿っているし、ロロがギアスを使おうとも抜け出せないようにしてある」

人が生活していればゴミは出るものではあるが見事にピザ箱ばかりである。これをゴミとして出してしまったらゼロの好きな物がピザにされてしまいそうだ。

「ヴィレッタを除けば、あそこは完全に俺の支配下にある。抜け出す

ことは出来ん」

「殺した方が後腐れのないと思うがな」

人間が生きるには食べ飲み排泄しなければならぬ。

食料を買うには金がかかるし、解放することも出来ないなら殺した方が手間がかからない。

「今は刺客を送って来たギアス嚮団の方が先決だ」

問題の先送りだと分かっているとしてもルルーシュは次の話題へと無理矢理に移行した。

「口から聞いていた話と最近まで嚮団にいたジェレミアの話を纏めれば本拠地を搾れている。精査の必要はあるだろうがな」

「ジェレミアの言うことを信じるのか？」

「まだ信頼は出来んが、ある程度の信用は出来る」

「母親のマリアンヌを慕っているからか。このマザコンめ」

疑い深いルルーシュにある程度とはいえ信用を得た理由が母親にあるとすれば、マザーコンプレックスと言われても仕方ない。

C・Cは反論を期待したが、ルルーシュは鼻を鳴らして顔を逸らすだけだった。

「嚮団の思惑が読めない。俺が記憶を取り戻したと判断してジェレミアを刺客として送ったのなら、ナナリーを害してもおかしくないはずだ」

「しかし、ナナリーは変わらず総督のまま」

掃除を終えたルルーシュはC・Cが座る一人用ソファではなく、数人用のソファに腰を下ろす。

「考えられるとしたら嚮団の独断」

ナナリーを害する様子がないということは、ブリタニア本国の命令ではなく嚮団独自の判断で動いていることが濃厚。

「だが、どうして嚮団が独自に俺を狙う？俺をゼロだと疑い、中華連邦を味方につけたことで嚮団の場所がバレるのを恐れたのだとしたら軽率すぎる。ジェレミアに自信があったのだとしてもな」

ギアス嚮団嚮主V・Vがシャルル皇帝の最初の同志というのなら、先代ゼロがルルーシュであることから今のゼロもと考えてもお

かしくはないが、それならばブリタニア本国と連携して機密情報局が仕掛けてくる方が圧倒的に楽だ。

「俺の記憶が戻っているという確証もないままで、今狙う意図はなんだ？」

「さあな。焦っているのかもしれない」

「焦る？」

「そう感じたただけだ。理由はない」

V・V のことを知っているC・C の言うことをルルーシュは安易に否定しなかった。

人のそういう勘は時として論理を飛び越えて答えに辿り着くことがある。論理に偏っているルルーシュはこういう動物的な勘に何度も苦しめられてきた。

「V・V とシャルルは同志。しかし、V・V はシャルルの命を受けずに勝手に行動している。これを暴走と見るか」

それとも、とルルーシュは先の言葉を続けずに黙考する。

「取るか、ギアス嚮団を」

「本気か？」

元からギアス嚮団を利用するつもりではいたが、機というモノがあるとすれば今のようない気がした。

「今回は刺客だったジェレミアを味方に引き込めたが次の刺客はそうとは限らない」

ルルーシュは自身の思考を纏めながら十重二十重に分岐させていく。

「ギアスの力は厄介だ。ブリタニアと戦っていく中で背中を気にしていられない」

「嚮団は武装組織ではないぞ。ギアスを研究しているだけの団体だ。ロロのように暗殺向きのギアスはそうではないはずだ」

「だとしても、V・V の目的が読めないのは面白くない」

対ブリタニアの合衆国構想を遂行している段階でギアスの力に惑わされるのは怖い。不確定要素は可能な限り排除しておきたいのがルルーシュの気持ちだった。



「俺個人としても嚮団の研究結果に興味もある」

今も特殊な素材で作ったコンタクトで覆われている左目のギアスを抑える。

「ギアスについては私が教えているじゃないか」

「魔女の言うことを信じるはずがない」

ルルーシュが若干の茶目つ気を込めて言うとC・C・は黙ってしまっただ。

「じよ、冗談だ。共犯者を信じないはずがないだろう」

これはマズいと言葉を撤回したがC・C・はツンと顔を逸らしたままだ。

「……………何が望みだ？」

ギアス嚮団の攻略には前嚮主というC・C・の協力が必要になる。

こうなつた時のC・C・が引かないのは散々思い知っている。根負けしたルルーシュが精神的に膝を屈してしまった。

「最近では既製品のピザばかりで飽きてきた。偶にはお前が作ったピザも食べたい」

「お前な…………」

あつさりとした笑顔を浮かべて目的を述べるC・C・にルルーシュは肩が落ちるのを抑えられない。

だが、失言は失言である。

「分かった、いいだろう」

「私の好み通りに作れよ」

「それは分かっているが」

どうにも馴らされているような気がしなくてもないが気にしないことにする。

「ギアス嚮団ではお前の不死の研究はしているのか？」

C・C・の不死の由来がどこから来ているのかは分からない。前嚮主という立場ならば実験材料になることはないだろうが、歴代の権力者達が最後に望むのは不死であることを考えても研究していてもおかしくない。

「したよ。無駄だったがな」

「無駄？」

無駄と言いつつC・C・にルルーシュは眉を顰めた。

「ギアスを与えられることから考えてギアス由来のものなのだろうが、科学的にはどうして不死なのかサツパリ不明なのだ」と

どこか忌々し気に語るC・C・にソファの端に肘を付いたルルーシュは思案気に視線を宙に彷徨わせた。

「不死を解くことも出来ないとなると自分で死ぬことも出来ない。ゾツとしないな、それは」

不老不死は古の権力者が最後には必ず望んだ願いではある。

ルルーシュからしてみれば死なないというのは便利ではあるが永遠を生きるなんて御免蒙る。

「お前も死にたいか、C・C。」

「……………」

沈黙こそが言葉よりも雄弁に物語る時もある。今がそうだった。

ルルーシュは珍しいC・C・の態度に逆に面食らっていた。『そんなわけないだろう。馬鹿か、お前は』と否定されると思っていたのに肯定されたのは予想外だった。

「……………意外だな」

素直な反応に目を瞬いていたルルーシュにC・C・が目を吊り上げる。

「じゃあ、お前がこの呪いを引き継いでくれるというのか？」

「構わんぞ」

人は驚きが限界を超えるとリアクションが単純化してしまうものらしい。

まさか受容されるとは思っていなかったのか、目を見開いているというC・C・の珍しい姿にルルーシュは何か勝った気分を味わっていた。

「今という局面において不死というのはメリットにしかないし、奇跡の男ゼロを彩るには不死はまたとない。寧ろ願ったり叶ったりだ」

一度ゼロは死んだとされている。実際にはスザクに捕まって皇帝

シャルルの前に連れて行かれ、ギアスによってゼロであった時の記憶が消されていた。

同じゼロなのか、それとも別人なのかはネット上でよく議論されている。

シャルルを殺し、ブリタニアという国をぶっ壊すつもりであるルルーシュにとって戦えなくなることこそが最も恐ろしい。つまりは死こそを恐れている。

「お前は……」

なんとも言えない感情を乗せた眼差しを向けて来るC・C.のらしくない姿の連続にルルーシュは苦笑を隠しきれない。

「で、実際に俺にお前が言う呪いを引き継がせることは出来るのか？」

「……………今は無理だ」

「今は、か。何かしらの条件がありそうだな」

先を促すもC・C.はコードを引き継ぐ条件を語ろうとはしない。

(大体、想像はつくがな)

ギアス、C・C.より与えられたこの力が条件に関わってくるだろうことは想像に難くない。

ただ、ギアスのことについてルルーシュはあまりにも知らなさ過ぎた。

(今まではC・C.からしかギアスのことを聞けなかったがジェレミアやロロに聞いてみるのもいいかもしれない)

情報とは一面だけ切り取って判断しては見誤りやすい。多角的な視点から見た物を擦り合わせて判断するものである。

ギアス能力者だったマオとは最初から敵対関係で、シャルルに至っては完全な敵である。C・C.と同じ不老不死らしいV・V.もシャルルと同様で、今までルルーシュの情報源はC・C.しかいなかった。

(ロロには会話の糸口にもなるし、ジェレミアの忠誠を計ることも出来る。可能ならば嚮団を手に入れたところだが)

C・C.が知るギアス嚮団の規模はルルーシュ個人や数人程度で掌握できるものではない。

黒の騎士団を動かせれば掌握できるが、超合衆国構想が動いている中で個人的思想で軍を動かすのは御法度。何よりも他者にギアスのことを知られるのはまずい。

「そう不安そうな顔をするな。最終的にコードを引き継げなかったとしてもお前を見捨てるようなことはしない」

「ふん、どうだかな」

拗ねているような、恥ずかしがっているような、ルルーシユの目から逃げるように逸らしたC・Cの顔は少し赤かった。

「闘いが終わった後、嚮団を手に入れてコードを解く方法を調べると約束しよう」

何気なく言った後、ルルーシユは自分が初めて戦後のことを口にした気づいた。

「お前の頭なら少しは希望も湧くか」

「そこは大人しく信じておけ、魔女」

「魔女だから嘘をつくのさ」

ようやく何時もの調子に戻った共犯者にルルーシユが安堵していると、まるでC・Cは誰かに語り掛けられたようにピタリと動きを止めた。

「っ!？」

直後、弾かれたようにソファから立ち上がったC・Cにルルーシユの方が驚いた。

「お、おい、どうしたC・C?」

問いを向けたルルーシユに対してC・Cは虚空を見ながら何事かを言った。

周りが目に入っていないC・Cの声にルルーシユは耳を澄ました。

「――V・Vが死んだだど?」

その言葉にルルーシユは目を細めるのだった。

### 第三話 本当を始める為に

アツシユフオード学園地下の機密情報局の一角にある留置室。

「何故、シャーリーを撃った？」

この留置室の初めての留置者であるロロに向けてルルーシユは問いかけた。

「……………」

椅子に座ったままのロロは問いに答えない。

シャーリーを撃ったあの日、ロロは逃亡を図ったもののジエレミアに捕縛され、この機密情報局に軟禁されている。

常時、監視カメラによって監視されている留置室で軟禁されて既に幾週間も経過しているが、ロロは一言も口にしない。

特殊強化ガラスで隔てられた先にいる偽りの弟の沈黙に慣れてしまったルルーシユは嘆息を漏らした。

「また、だんまりか」

説得も懐柔も恫喝も通用せず、ロロはルルーシユと目も合わせようとしない。絶対遵守のギアスを警戒しているのだろう。

(ロロのギアスを警戒しているのは俺も同じ)

人間の体感時間を一時的に停止させるロロのギアスはルルーシユの絶対遵守のギアスとは別方向だが強力な力である。

こうやって特殊強化ガラス越しでなければルルーシユとてロロと単身で会おうとはしないほどに。

「ロロ」

ただ、こうやって不意打ちに名前を呼べば肩が僅かに動く。

ルルーシユが抱かせた兄弟の情は未だ消えず残っていることを確認し、更なる反応を促す為に爆弾を落とす。

「V・V が死んだ」

「えっ!?!」

ギアス嚮団の嚮主V・V が死んだと聞かされては、元は嚮団から

機密情報局に派遣されている立場であるロロとしても無視し難い内容だったから顔を上げてしまった。

「安心しろ。ギアスをかけるつもりはない」

慌てて視線を避けて顔を下げるロロに苦笑して言ったが再び上がることはなかった。

「一度は殺せとまで言ったんだ。信じてもらえないだろうか」

こうやって特殊強化ガラス越しにしか会おうとしないルルーシュだってロロを信じていると言い難い。要はお互い様の現実に向かい合いながらもルルーシュは言葉を紡ぐ。

「V・V・が死んだというのはC・C・が勝手に言っていることだ。同じコードの持ち主だから分かると言っていたが、本当にV・V・が死んだかを確認する為にジェミアに嚮団に行ってもらっている」

C・C・が嘘をついているとは思えないが通信機もない状態できなり死んだと聞かされても信じ難い。

確認に行かせたジェミアにまで嘘をつかれたらどうしようもないが、その時は信じた自分が悪かったのだろうとルルーシュは思うことにしていた。

「本当にV・V・が死んでいるとなれば、そのコードの行方から考えても更なる警戒が必要になってくる」

不老不死の人間を殺すにはコードの譲渡を行うしかないとC・C・は遂に話した。

それが可能な人間は限られてくる。ルルーシュが想像する最悪な人間がコードを手にしたとすれば厄介極まりない。

「その為にお前と話がしたい、ロロ」

「……………僕の利用する為に？」

久しぶりに発したロロの声は少し擦れていた。

「いいや、敵にさえならなければいい」

確かにロロの力はあらゆる意味で有用ではある。しかし、本人がその気にならないのであれば戦う場に出なくてもルルーシュは良いと考える。

撃って良いのは撃たれる覚悟のある者だけ、とはルルーシュの理念

の一つだが、未成熟な子供に対しては当て嵌まらない。

年下というだけでナナリーを連想してしまうルルーシユの悪癖でもあるだろう。

無論、全員が全員そうではない。やはり偽りとはいえ、家族として共に過ごした記憶が無意識にルルーシユを甘くさせていた。

「今のままでは信用も信頼も出来ないだろう、俺もお前も」

結局のところ、絶対遵守のギアスを使わずに人が人を信用するには対話を重ねるしかない、ルルーシユはロロを相手にして悟った。

「ギアスをかけて操ればいいでしょう、何時ものように」

「言ったはずだ。ギアスをかけるつもりはない」

「今更」

散々、ギアスに頼ってきたにも関わらず、都合の良い時だけ使おうとしないことをロロは皮肉った。

「そうだな。だけど、そうすることでしかロロと向き合う術を俺は他に知らない」

詭弁を弄したところで逆効果。ギアスを使っても同じこと。逃げる事が出来ないのならば、後は正攻法でぶつかっていくしかない。

「……………僕が話すことは何もありません」

頑なに顔を上げようとしないうろはそれ以上、口を開こうとはしなかった。

これ以上は何を話しても無駄だろうと判断し、ルルーシユは今回は切り上げることにした。

「また来る」

去り際に振り返ってもロロは顔を上げない。

ただ、ルルーシユの姿が完全に見えなくなった後、ロロの肩は震えていた。

「兄さん、僕は…………」

留置室を離れたルルーシユにその声が届くことはない。

ルルーシユはそのまま機密情報局のシステムが集中する部屋へとやってきた。

「一度は裏切ろうとした私を殺さないのは何故だ、ルルーシユ」

その部屋で待っていたヴィレッタ・ヌウは現れたルルーシュに開口一番に問いかけた。

「お前を殺す方が面倒が多いからだよ、ヴィレッタ」

先生、とは呼ばない。二人つきりである現状では彼我の力の差は明確であつたから。

本当ならば、味方とは分からなかったジェレミアにルルーシュの居所を教えたのは明確な裏切りである。しかも結果的にせよ、シャーリーが危機に陥つた遠因とも言える。

本来ならばルルーシュが許す理由はないのだが。

「機情のトップはお前だ。いなくなれたら不審を招く。口口を動かさない以上、ギアスにかかつていないヴィレッタを安易に排除はしない」

ギアスにかかつて従わせている他の機密情報局の者達は柔軟性にかける。

仮にゼロとなつている間にルルーシュの居所を尋ねられても機密情報局の者達は『異常はない』としか答えられないだろう。絶対的に支配したと思つていた口口を拘束している以上、弱みを握っているヴィレッタを簡単に排除する選択をルルーシュは取れない。

「俺が記憶を取り戻し、ゼロであることを知られば皇帝は容赦なくナナリーを殺すだろう。最低でも人質に取る」

ナナリーはルルーシュの生命線であることはスザク経由でシャルルに知られていると見ていい。

「幸いにもシャーリーは死んでいない。ブリタニアにも俺のことは知られていないから今回の裏切りは未遂に終わったとしておこう。ただし」

次はない、と鋭い眼差しが言葉よりも雄弁に物語っている。

「……………分かつた。だが、意外だつたな」

「何がだ？」

「シャーリーを撃つた口口を殺さなかつたことだ」

ウィークポイント<sup>屬と</sup>を捕まえられているヴィレッタの反抗心がバキバキに折れる音を聞きながらルルーシュが頷いていると、C・C.と



同じことを聞いてきたことに眉を顰める。

「そんなに意外か？」

自分を良く知るC・Cに監視者のヴィレッタにまで同じことを聞かれたルルーシユは思わず聞き返していた。

「ナナリー総督の立場を奪っていたロロのことを邪魔に思っていたんじゃないのか」

「否定はしない。ロロのことは使い倒してボロ雑巾のように捨ててやる、とは考えていた」

ルルーシユは機密情報局の固いソファに座りながら、そう考えていた時のことを思い出す。

「シャルルの記憶を操るギアスによってナナリーのことを忘れさせられ、ロロのことを弟と思いつ込んでいた。その上、シャーリーを撃つた理由もちっぽけな独占欲からだろう。決して許せるものじゃない」

ナナリーがいるべき場所を奪った偽物、と憎んで利用し尽くすと決めていた。

シャーリーを撃つて殺そうとすらしめた。ルルーシユが殺す理由としては寧ろ余りあるぐらいだったはずだ。

「だが、シャーリーはロロを許せと言った。あいつの父親を奪った俺を、それでも好きだと言ってくれたシャーリーがだ」

許したのだろうか。赦せたのだろうか。

許していないのか。赦さなかったのか。

「だとしてもギアスをかけずに拘束をし続ける理由はない。本国を騙すというなら、ロロを強制的に従わせた方が手っ取り早いだろう」

機密情報局ではヴィレッタが報告を上げなければならぬとしても、ジェレミアが味方となった今は反逆する危険のあるロロを手元に置いておく理由はないはず。

「ギアスのことはシャーリーも知っている。ロロがいなくなったり、様子がおかしければ異変に気付く」

「軍人でもないただの女のことかそんなに怖いのか」

「ああ、怖いな。俺が怖いのは何時だって人だ」

あの優しい少女に関わって誰かが死ぬのが嫌だった。自分の醜い

本性を知られるのが怖かった。口口を生かしてギアスにかけないのは、たったそれだけの理由だ。

「俺はシャーリーにだけは嘘をつかない」

本当になつてくれると言つてくれたシャーリーにルルーシュが出来る精一杯の誠意だった。

「変わったな、ルルーシュ」

「そうか？」

相手によつて名前と仮面を使い分け、その真意すらも掴ませようとしないのがルルーシュという男だった。

その男が、ただのルルーシュとしての姿を垣間見せた。

これが良い変化なのか、ヴィレッタにも分からない。分からないが、仮面を使い分けていた男の本当の姿は紛い物ではないと分かつたから。

「どうせならこのまま皇帝になつてみたらどうだ」

思い付きで言つてみたヴィレッタは、しかし良い考えではないかと思つても思つた。

「何を言うんだ、突然」

鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をしたルルーシュはヴィレッタに呆れた表情を向ける。

「どつち道、私はお前が勝とうと皇帝が勝とうと碌な目に遭わない」

ブリタニアという国を破壊したいルルーシュが勝てば、崩壊した国の爵位にも意味が無くなる。

皇帝が勝つても、ルルーシュがゼロであることが知られてしまえば爵位どころか命も危うい。ルルーシュがゼロであることが知られずに負けるのが最善だが、今までのことを考えるにそう上手く行くと希望は持てない。

「ルルーシュ、お前には皇位継承権がある。ナナリー総督のように実は生きていたということになれば、継承権も復活する。ゼロが自身であることを明かせば、その能力に不満も出ない」

ルルーシュが進めている超合衆国構想をヴィレッタは知らないにしても、ブリタニアの皇子がブリタニアを破壊しようとしていること

は知っている。

「敵国を纏めた俺をブリタニア国民が認めるわけがないだろう」

幾ら君主制国家だとしても、超合衆国構想の主導者であるゼロがトップに成ることを国民も貴族も認めるはずがない。当然の論理だとルルーシユは言った。

「そうかな？　ブリタニアの国是は弱肉強食。反逆を始めた経緯を明かし、皇帝の椅子に座ってしまえば下の者達は従わざるをえない」

稀代のテロリストであるゼロならば、指導者として先導者として能力に不満は無い。

皇子としてのルルーシユは死亡したとされているので継承権はないが生きていたとなれば復活する。血筋に問題はなく、能力は十分。勝った者が正しいという弱肉強食を掲げるブリタニアの国是がここで働く。

「逆らう者を黙らせるのはお前の得意分野だろ？」

ヴィレッツタを引き込んだように、権謀術数はルルーシユのお得意の手だ。何よりもギアスがあれば味方は幾らでも増やせる。

「ナナリー総督を守るならば悪い話ではないはずだが」  
「……………」

敗残の将の扱いは戦勝国が決める。散々、ブリタニアに蹂躪されて来た各国に慈悲などあるはずもない。例え目が見えず、立つことも出来ない車椅子の少女であろうとも総督であり、皇位継承権を持つ皇女であるナナリーをどうするか想像するまでもない。

ゼロとしての立場を守りながらナナリーを守るよりも、ブリタニアに勝利後に皇帝として立った方が遥かにやりやすい。

「リスクが大きすぎる」

ゼロという指導者を失った超合衆国は纏まりを失くすかもしれない、ブリタニアも敵国のトップだったゼロが皇帝として立てば混乱するだろう。

より混乱するかもしれない危険を背負う選択を選ぶには、ルルーシユには様々な可能性が見えすぎている。

「戯言の一つだ。聞き流してくれて構わないよ」

言葉少なく思考の渦に嵌ったルルーシユに、自身でもそこまで大きな期待はしていなかったヴィレッツタは冗談として片づけた。

『組織を中から変えていくんだ!』

再会した親友が口にしていた取るに足らないはずだった戯言が今のルルーシユには深く深く突き刺さっていた。



「これでサウジの平定は済んだ。よくやった藤堂」

斑鳩の通信室にて報告を受けていたルルーシユ||ゼロは満足そうに仮面の中で微笑み、椅子にその身を深く凭れさせた。

『与えられた任務をこなしたに過ぎん』

サウジアラビアで作戦行動を行っていた藤堂鏡志朗は厳めしい顔のまま頷いている。その隣には千葉凧沙が座っていた。

『ブリタニアの脅しに屈する勢力が増えつつあると聞いている』

「合衆国憲章の批准を急いでいるが、こればかりは急いだところでどうなるものでもない」

藤堂の懸念を当然ながらルルーシユも把握している。

しかし、こればかりは今後のことにも関わる以上、ギアスを使ってというわけにもいかない。急ぎ過ぎれば逆にブリタニアに付く可能性が出てきてしまうので慎重に行わざるをえない。

『イタリアやポーランドはこちらの味方となった。現状の方針のまま、憲章への批准を各国に呼びかけていくのが最善だ』

別の通信画面に映る黎星刻もルルーシユの言葉に同調する。

大局的な視点でルルーシユに一步劣るにしても、知略に関しては伍する星刻はここで焦ってしまう方が致命的な失敗を起こすと理解している。

「計画に遅れは見られないが、ブリタニアの脅しに屈しそうな国を先に説得することを優先する」

今まで黒の騎士団においてルルーシユと同じ大局的な視点で物を見る人間がいなかったので星刻の存在は良い刺激になる。だが、同時に最大の敵にも成り得ることをルルーシユは忘れていない。

天子を救ったことで中華連邦及び星刻に貸しがあつて対ブリタニアという一点で協力関係を築けているが状況によっては敵になるかもしれない相手である。

しかし、味方である間にはこれ以上ない人間である。

「各自、他に何か報告事項はあるか？」

対ブリタニアに向けての合衆国構想に向けたルルーシユの作戦に対する報告事項はそれで終わりだった。

通信を交わしている向こうから新たな報告はなく、普段ならばそこで通信は終わるはずだった。

「……………ところで、藤堂」

珍しく通信を終了しなかったルルーシユはどうしても気になっていたことを聞かずにはいられなかった。

『なんだ、ゼロ？』

ルルーシユが仮面越しに見る通信先に映る藤堂は千葉と同じベツトに座り、恐らく千葉が剥いたであろう林檎を手に行っている。

千葉の後ろには畳まれたバスローブとタオルが二組、そして彼らが腰を下ろしているダブルベットには枕が二つ。

鈍いルルーシユとて成人した男女が同じ部屋で過ごす意味を知らないわけではない。

「千葉と同じ部屋で寝泊まりしているようだが二人は付き合っていたのか？」

『なっ!?!』

気になったので聞いてみた程度の疑問だったのだが藤堂の隣に座る千葉の反応は大きかった。

手に持っていた爪楊枝ごと林檎を落とし、その顔を真っ赤に染め上げた。反対に藤堂は眉を上げる程度の反応しかしない。

『中華連邦に資金提供をしてもらっている以上、無駄遣いは出来ん。千葉には申し訳ないが我慢を強いているんだ。誤解を招くようなことは言わないでくれ』

「そうか、すまなかつたな」

金勘定には厳しいルルーシユとしては大いに納得できる理由だった。

中華連邦の面々は少し興味があるのか、恐らく藤堂らが映る画面を良く見ようとしているのか覗き込んでいるし、千葉と同じ四聖剣の朝比奈省悟に至っては後でからかうネタでも出来たと思っっているのかにんまりと笑みを浮かべている。

「千葉もすまない。下世話な邪推を抱いてしまった」

『い、いや、気にしてないからいい……』

画面の向こうで真っ赤になった顔から打って変わってガツクリと肩を落としている千葉に、ルルーシユはどうしたのだろうと内心で首を捻っていた。

「ゼロ」

通信を終えたルルーシユの背後に控えていたディートハルト・リートが声をかけた。

「どこかお変わりになられましたね」

「そうか？」

「人間らしくなったというか」

「何を言う。私は元から人間だ」

「それは分かっているのですが」

最近、その手のことを人から良く言われるようになったルルーシユはディートハルトの言うことを特に重く捉えなかった。

「先日の会議から扇副指令に不審な点が見受けられます。いや、それ以前から彼は我らに何かを隠している」

デートハルトは仮面に覆い隠され見ることの出来ないゼロの本質を見極めるように目を細めながら告げた。

「万が一でも副指令が敵に内通していれば黒の騎士団の」

「案ずるな」

致命的な失点に繋がると続けようとしたデートハルトの諫言はゼロによって遮られた。

「扇の不審の理由は既に把握している」

先のジェレミアの襲撃の一件で、ヴィレッタから扇と連絡を取ってしまったことは聞き出していた。

関係を完全に断つために内密に会う約束を取り付けていることも、だ。

「何か対処などを為されるので？」

「いいや、何もしない。その必要もないからな」

ロクを捕縛したジェレミアが機密情報局に向かったことで逃げようとしていたヴィレッタはそのチャンスを失い、ルルーシュに逆らうことを諦めた。

機密情報局のトップを勤めなければならないので扇に会いに中華連邦に向かうことは出来ない。

「しかし、敵と密通しているとすれば重大な反逆行為。副指令がそのようなことを仕出かしたとなればゼロの求心力にも影響が出かねません」

扇は例え一人でブリタニア軍人であるヴィレッタに会いに行ったとしても、永遠に出来ない人間を待ち続けることになる。

「ブラックリベリオンの時、私は扇を切り捨てた。代わりと言ってはなんだが、今回に限っては見逃しても構わん」

「ですが」

「他にも同じ疑念を持つ者がいるのなら私の名前を出して押し留めておけ」

理由を知らないデートハルトにはゼロの言葉が信じられない様子だが、言ってはなんだがルルーシュにとっては終わってしまったことに過ぎない。

それ以上、扇の話をする必要はないと暗に込めるとデイトハルトは納得が出来ていない様子だが下がった。

「咲世子、お前に頼みたいことがある」

デイトハルトが退出後、入れ替わるように部屋に入って来た咲世子を確認したルルーシユは仮面を外した。

ゼロの正体を知る咲世子の前でゼロの仮面は必要ないが外す必要もまたない。それでも敢えてゼロの仮面を外したルルーシユは口を開いた。

「政庁に侵入し、カレンと紅蓮の搜索、非常時のナナリーの退避場所を調べてもらいたい」



## 第四話 超合集国決議第壹號

中華連邦のとある場所の森林地帯に扇要はいた。

「千草……」

約束の時間が過ぎても扇の待ち人である千草は来なかった。

「いや、ヴィレッタ・ヌウか」

来ないはずの人の待ち続けた扇は、自分の知る千草がもういないと悟って一筋の涙を零した。

「——さようなら」

存在しない思い出の中となった愛しい人に別れを告げて扇も歩き始めた。その背中を見ている目があるとも知らず。

中華連邦領、黄海に浮かぶ潮力発電用の蓬莱島に黒の騎士団がある。

デイトハルトに監視されている扇が斑鳩に戻ろうとしている頃、その蓬莱島にある本部ビルの一室にて、黒の騎士団の首領であるゼロは中華連邦の代表としてやってきた黎星刻と向かい合って座っていた。

「これで超合集国は成った」

中華連邦を味方に付ける前でも世界の三分の一を支配していたブリタニア。

幾ら列強であった中華連邦を味方に付けようとも国力の差は大きい。ことに大宦官の勢力を排除した今の中華連邦は弱体化している。

勢力の平定は済んでいるが、黒の騎士団と中華連邦だけでブリタニアと戦えると思っていなかったルルーシュが立ち上げたのが超合集

国構想だった。

「見事と言っておこう。これで対ブリタニアを標榜できる」

ルルーシュが作り上げた超合衆国構想とは、ブリタニアに脅威を覚えていた国や植民地となったエリアの抵抗勢力を取り込み、反ブリタニア同盟を作り上げようという計画である。

攻勢を強めるブリタニアとの陣取り合戦に似た、己が勢力に引き寄せる戦いはある程度の決着を見た。

「その前にゼロ、君に聞いておきたいことがある」

超合衆国が正式に世間に公開される前に、超合衆国の中軸になる中華連邦の人間として星刻は対ブリタニアの矢面に立つゼロの真意を確かめなければならなかった。

「君はあのブリタニア皇帝のように、世界に覇を唱えるつもりか？」

「それはない」

ルルーシュは仮面の中で苦笑しながら、星刻の懸念を言葉少な気にならずに否定する。

「懸念は理解できる。超合衆国の構想者、そして黒の騎士団のトップである私に全くの疑念を抱かない者などいないだろう」

黒の騎士団がここまで成り上がったのは、ゼロのカリスマ性と結果を示し続けて来たことが大きい。

ブリタニアに対抗する勢力を作り上げたゼロの非凡さは誰もが知るところであり、世界を二分する勢力のトップに上り詰めたにしてはその真意を窺い知れる者は殆どいないに等しい。

「私としては大宦官を排除出来たこと、天子様を救ってもらった二つの恩がある。が、その言葉を信用するにしても、君にはあまりにも謎が多すぎる」

「同意しよう。自分で言うのもなんだが仮面で姿を隠した者を全面的に信頼できるはずもない」

名前も姿も覆い隠した者がトップに立てば、誰だって疑念を抱かずにはいられない。

「だが、私が仮面を被るのも故あつてのこと」

誰が元とはいえ、敵国の皇子をトップに擁するか。ルルーシュがブ

リタニアと戦うにはゼロの仮面が必要なのだ。

「世界に覇を唱えるつもりも、中華連邦を乗っ取る気もない。第一、私は統治に魅力を感じない」

「仮にブリタニアに勝利すれば世界を手に入れることも容易いというのにか？」

「だとしてもだ」

もどかしい想いを抱いたことはあるし、自分ならばもつと上手く出来るという確信がルルーシュにはある。

だが、出来るからといってやりたいかはまた別の話である。

「今まで散々統治者達の苦勞を目にしてきたのでね。一国ですら大変だというのに、世界ともなれば想像も出来ん。いらぬ苦勞を背負う気は無いよ」

信じてもらうことは恐らく出来ないだろう。ゼロは戦略家としては謀略型で、かつ上昇志向も強い。そういう人間が得てして信義よりも大望を、調和よりも野心を優先しがちである。

仮面で姿を隠すゼロの真なる目的が、世界に覇を唱えるつもりなのだと考えてもおかしくはない。

しかし、覇道を突き進むブリタニア皇帝を憎悪しているルルーシュは彼と同じことを望むのを拒否する。何よりも、ルルーシュが望むのは世界などよりも大事で、もつとちっぽけなものだ。

「しかし、人は権力を持てば変わるものだ」

最初から腐っている人間は恐らく少ない。権力を持てば、理想を語っていた口でやがて人々を傷つけていくようになる。権力の魔力は容易く人を変えてしまうのだ。

「ふむ、ではブリタニアを打倒した暁には、予定されている黒の騎士団CEOの座と超合衆国におけるあらゆる地位から退くことを約束しよう」

「それは……っ!？」

星刻にとって予想もしていない言葉であったのだろう。絶句している気配に苦笑を浮かべたルルーシュに権力にしがみつく理由がない。

「今の段階では口約束に留まるが、ブリタニアを倒して戦後処理を終えれば仮面の英雄は必要なくなる。寧ろ」

「邪魔になる、か」

「英雄など普通の日常には不要なもの。素性不明・真意不明の者など厄介でしかない」

ナナリーの安全を保障し、超合衆国がブリタニアに対してやり過ぎなければルルーシュがゼロの仮面を被り続ける必要もない。

「超合衆国に各国が参加を内々に表明したのもそれが理由か」

「ブリタニアを脅威に感じているのはどこも同じだ。一国や数国だけで対抗できないのは自明の理。だが、超合衆国には私がいいた」

強いカリスマ性とブリタニアに対抗できる力を示したゼロが戦後には自ら消えるのなら、世界に覇を唱えられる立場を手に入れられるかもしれないと思っただろう。

「危うくはないか？ 戦後に超合衆国内乱が起こるぞ」

絶対的な指導者がいなくなれば、残った者達で椅子取りゲームが起こって内部分裂を起こす可能性が高いことを星刻は危惧していた。

「その可能性を摘んでから去るつもりだ。最後まで責任は果たすとも」

内乱に発展しなくても超合衆国の中軸である中華連邦が調停に走らざるをならないだろうし、そうなれば変な思惑に囚われている暇もないだろうという思惑もルルーシュにはある。

「仮に内乱に発展したとしても、私が再び仮面を被ることになる。それは彼らにとっても望むことではないだろう」

三度、立つようなことになればゼロの存在は絶対の物となる。

そうなれば民衆は政治屋ではなくゼロをこそ指導者として祭り上げることは想像に難くない。だからこそ、超合衆国に参加した者達も軽拳妄動は控えるだろうとルルーシュは考えていた。

「君がそこまで考えているならば、私が言うことはもうない」

一般的ではないゼロの考えを聞いた星刻は一応の納得をして頷く。

「では、もう一つ聞いておこう。決議第壹號で日本解放戦が選ばれた理由を教えてください」

超合衆国が成った暁に施行されている決議の一つ目は日本解放戦となつている。複数の国が同盟を結んでの最初の一戦が日本である理由を星刻は訊ねた。

「まずはエリアーと、日本の解放が世界的にも多くの影響力を及ぼすことになるのは理解している」

個人の意思によつて同盟の向かう先が決定されるのは喜ばしいことではないと暗に込めた星刻にルルーシュは腕を組んだ。

「ゼロと黒の騎士団が生まれたのが日本であることは世界的に周知の事実だろう。日本ではなく他のエリアから、となれば日本はどうしたという声はやはり出る」

超合衆国の唯一の軍隊となる黒の騎士団は日本で生まれ、ゼロも日本で立った。その事実世界的にも有名でもある。

「そしてエリアーを一番に選んだのには、今の彼の地にも理由がある」

「矯正エリアから途上エリアに昇格したことか」

「それだけに留まらず、そう遠くない内に衛星エリアにも昇格するだろう」

「また随分と早い」

総督であるナナリーが行政特区・日本を立ち上げる時に黒の騎士団をゼロとして国外追放させたことで不穏分子は減つただろう。その分だけ内政はやりやすくなっただろうし、ルルーシュも陰ながら支えていたのだがナナリーはこちらの思惑を超えていた。

「これまで日本人に対して圧政のみしか行つてこなかつた総督達と比較して、融和政策を取るナナリー総督は私にとつても好ましい。だが、日本人のブリタニアからの独立の気概を失わせかねない」

ナナリーがナンバーズに対して善政を振るうのは、戦後のことを考えれば問題ないどころか大いにプラスになる。

総督として表舞台に立つてしまった以上、戦争で負ければ敗戦国の将として扱われてしまう。しかし、融和政策を推し進めたナナリーは年齢と体のこともあって悪い扱いにはされ難い。

とはいえ、現状のナナリーはルルーシュの想定を超えてやり過ぎて

しまった。

「今、日本を解放しなければ、ゼロが立つたはずの日本の民衆がブリタニアに従わされてしまう。他の国を解放しても、日本は解放できないとあつてはゼロとしての骨子が揺らぐ。ゼロとしての骨子が揺らげば、黒の騎士団にも影響が出るだろう」

「あの総督にゼロともあろう者が随分と悩まされてるようだな」  
「笑い事ではないぞ」

目も見えず、立つことも出来ない者がエリア総督になったことは有名な事なので星刻も知悉しているが、一人の少女に世界が揺り動かされている滑稽な状況に笑みを漏らした。

「今、日本を解放しなければ後手に回らざるをえない。その事態を避けたいがための日本解放だとは理解したし納得もした」

笑みを収めて組んだ手で口元を隠した星刻は次の話題へと移る。

「あのジェレミア・ゴットバルトが仲間となったのは何故かな？」

やはり突っ込まれるか、とギアス嚮団より帰還したジェレミアを正式に黒の騎士団に迎えたルルーシュは組んでいた腕を解き、右手を軽く上げる。

「正確には元から、だ。オレンジのことは知っているだろう」

「ゼロが最初に表舞台に立った時に見逃した時のアレか」

クロヴィス暗殺の疑いをかけられたスザクを逃がす為のゼロたるルルーシュが発したオレンジに関しては完全なハツタリであり、そもそも存在しない。

これはブリタニアへの牽制、更にはジェレミアの心の隙を突くための何重にもおける策略である。そして、仕掛けたトラップが発動し取り乱したジェレミアを狙い、ゼロは「私達を全力で見逃がせ」というギアスを掛けて見逃させた。

傍目には「オレンジ」なる機密の公表を恐れたジェレミアが隠蔽のために必死でゼロを逃がしたかのように映ったため、皇族殺害の重罪人を逃がした責任を問われるだけでなく、「オレンジ疑惑」なる嫌疑までかけられることとなる。

「最初からジェレミアと繋がっていたと？」

そう疑われるのは仕方のないことで、黒の騎士団幹部からも同じ意見が出た。

「彼は私の仮面の内側を知る数少ない者だ。とはいえ、協力関係はあの一度に過ぎないはずだった」

真実を折り混ぜることで相手に嘘を信じ込ませる。

ギアスは一度しか効かないし、現にジェレミアはその後の戦いでゼロと戦い続けている。

「ジェレミアの体のことは知っているか？」

「改造処置を施されているらしいとは聞いている」

実験適合生体として体を弄られたジェレミアは、そうした者達に恨みを持っているとルルーシュに語っている。

「ブリタニアが本人の意思を無視して行ったことだ。死んだことにされて、軍籍も剥奪されているらしい」

「それで裏切ってこちらに付くとか？」

「正確には知己であった私個人に従っているといったほうが正しいか」

「ブラツクリベリオンの時にゼロを襲って戦線を離脱させた張本人だと聞いた。その方が無難だろう」

厳密には誘拐されたナナリーを追ってルルーシュが勝手に戦線を離脱したのだが、暴走していたジェレミアと戦ったのは嘘ではない。

ジェレミアは黒の騎士団との対面時に自身が暴走し、ゼロを襲ったことを謝罪している。

そういった経緯もあり、同じブリタニア人でもデイトハルトと違い、生粋の軍人であったジェレミアが仲間になるからといって即座に受け入れられるものではない。

ブラツクリベリオンでのことを消化できない者もいるので、黒の騎士団の指揮系統から独立してゼロ直属の個人戦力として動く立場に落ち着いたのは状況的に仕方のない面もあった。

「ナイトギガフォートレス………強力な機体だ。戦力として申し分ない」

ギアス嚮団に赴いてV・Vの死を確認したジェレミアが手土産

にと持ち帰ったジークフリートは、ブラックリベリオン時にガウエインと相打ちになって海底に沈んでいた物を回収して改造された物のようで、今はラクシャータ・チャウラーが更なる改造を施している。

星刻が言うように強力な機体であるが、やはりブリタニアの騎士であったジェレミアが完全に味方に成ったことを信じれてはいないようである。

「疑うならばジークフリートに爆弾を仕掛けるなり、ジェレミアに監視をつけるなりすればいい」

「裏切ることはない、それだけの信頼をゼロは彼にかけているか」  
「ああ」

自信を持って言い切ったゼロに星刻も覚悟を決めるように一度を瞼を閉じた。

「分かった。だが、もしもの時は」  
「私が責任を持とう」

決して表に出ることはない話はそれで終わりだった。

当面の懸念を話し合ったゼロと星刻は立ち上がって握手を交わす。

黒の騎士団トップの秘密の会談の数時間後、蓬莱島の式典会場にてルルーシュは己が作り上げた結果に胸を躍らせていた。

「……………場合、この憲章に基づく義務が優先することとする」

一国で打倒できるほどブリタニアは弱くもなければ小さくもないから、対抗する為に連合国家構想を打ち立てることを予想した者は多いだろう。

しかし、国ごとに形成された軍隊はどうしても連携を欠き、烏合の衆にしかなりえない。

結局は机上の空論として消えて行く定めにあるはずだった。

「最後に、合集国憲章第17条。合集国憲章を批准した国家は固有の



軍事力を永久に放棄する」

超合集国の最高評議会議長にして、合衆国日本代表である皇神楽耶が宣言する。

「その上で各合集国の安全については、どの国家にも属さない戦闘集団・黒の騎士団と契約します」

軍を黒の騎士団として統一し、指揮系統を一本化することでブリタニアと対抗する軍隊とする、合衆国構想のネックになりがちな点を排除したルルーシユの策だった。

「契約、受諾した。我ら黒の騎士団は超合集国より資金や人員を提供してもらおう。その代わり我らはすべての合集国を守る盾となり、外敵を制する剣となろう」

幾ら資金や人員を超合集国に依存したとしても、黒の騎士団が暴走した際に止められる機関がないのも問題だった。かといって個々で動けばEUを分断したシユナイゼルの餌となる。

烏合の衆を纏め上げるために権力が黒の騎士団のトップに立つゼロに集約されていた。

CEOとして黒の騎士団のトップとして立つゼロが理性的な人間で、情勢を無視した暴走など行わない良識を持った人間であると信じることができない。

(だからこそ、ゼロは戦後に黒の騎士団に残ることは出来ない)

戦後は今ほどCEOに権限はないだろうし、黒の騎士団にも多くの制約を課することになるだろう。

これだけの莫大な権限は、戦後にゼロが黒の騎士団を去ることを明言しているからこそ与えられたものである。ただ、ブリタニアに勝つ為に。

「それぞれの国が武力をもつのは騒乱の元。超合集国では最高評議会の議決によつてのみ軍事力を行使します」

マイクによつて拡大された天子の甲高い声が蓬萊島に響く。

「それでは、私から最初の動議を行う前に一つだけ」

神楽耶がルルーシユが作ったシナリオの通りに言葉を紡ぐ。

「争いは何も生みません。強者が弱者を虐げるのではなく、全ての人

が手を差し伸べ合えるような世界になるように――  
我々は神聖ブリタニア帝国との対話を望みます」

超合衆国はブリタニアとは違うのだと世界に示す為には、神楽耶は交渉のテーブルを用意する気があると告げた。

『――ゼロよ』

神楽耶が映る画面にノイズが奔り、数秒後に神聖ブリタニア帝国第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアが玉座に頬杖を突く姿が映された。

『小癩なり。だが、面白い選択だ』

ハッキングにて通信回線に乗ったシャルルは言葉とは裏腹な、つまらなげな態度で全てを見下す。

『三極の一つEUはすでに死に体。つまり貴様の作った小賢しい憲章が世界をブリタニアとそうでないものに色分けする。単純、それ故に明快。故にこそ超合衆国は我が神聖ブリタニア帝国と対等の力を得た』

あの派手好きな男のすることだからルルーシュはハッキングされる可能性を見抜いていた。だからこそ、ハッキングされても全てを乗っ取られないように事前に回線を別に分けていた。

そしてこのことは新生・黒の騎士団幹部と超合衆国の代表達にも周知してある。

『――超合衆国はブリタニアと対等のテーブルに着いた』

残っている回線を使って、乗っ取られた回線に乗っ取り返すのではなく画面の半分を取り返したゼロが静かに告げる。

『望んでいようがいまいが戦争は起こる。だが、戦争以外の方法で問題を解決できる方法があるのなら、理性ある人間として我らは対話を望む』

『ほう……………交渉によって何を望むというのだ？』

左側の画面の中でシャルルが会話に乗って来たことにルルーシュは仮面の中で眉をピクリと反応させた。

『神聖ブリタニア帝国が今まで征服した全エリアの解放、そして今まで各国が貴国によって被って来た損害賠償を支払って頂きたい』

シャルルの目論見は分からないが、もしも皇帝が対話のテーブルに着いた際の条件は既に各国代表達と纏めていた。

『下らん』

どうせ受け入れられるとはルルーシュも思っていなかった。

差別を助長し、競い奪い獲得し支配することを容認しているシャルルの一言に集約した否定に、寧ろこの男らしいとすらルルーシュには感じた。

『この場で特定のエリアの解放を匂わせ、小癩な超合衆国を崩すことは容易い』

しかし、それは剛腕を以て覇道を突き進んできたシャルル皇帝のブリタニアらしくない方法である。それこそ自身で評したように小癩なやり方だ。

『世界を二分する神聖ブリタニア帝国と超合衆国。戦いとは全てを得るか全てを失うかに集約する。単純に行こうではないか』

『つまり、交渉する気ないか？』

『原初の真理とは弱肉強食なり』

画面の中でシャルルは頬杖を止め、初めてニヤリと獯猛に笑った。

『この戦いを制した側が、世界を手に入れる。挑んで来るがいい、ゼロ』

『己が弱者となった時、同じ台詞が言えるか見物だな、シャルル』

交渉は決裂し、お互いに宣戦布告は済んだ。

出番を終えたルルーシュが下がると同時に画面の中心に神楽耶が映る。

「我が合衆国日本の国土は他国により蹂躪され、不当な占領を受け続けています。黒の騎士団の派遣を要請したいと考えますが賛成の方はご起立を」

超合衆国に参加した代表達が神楽耶の動議に賛成を示す為に席から全員が起立する。

「賛成多数。よって、超合衆国決議第壹號として黒の騎士団に日本解放を要請します！」

「いいでしょう。超合衆国決議第壹號 進軍目標は……………日本!!」

議長である神楽耶から決議の結果を受け、ゼロが腕を振るいながら日本がある方へと指差すと同時に歓声が起こる。

「ゼロー！」

式典会場のどこからか湧き上がった誰かの声が連鎖し、それは瞬間に蓬莱島全体に伝染し、会場を揺るがすほどの響きとなる。

「オール・ハイル・ブリタニア！」

式典の映像が流れるブリタニアで、各エリアのブリタニア兵達が叫ぶ。対抗するようにゼロの名が叫ばれる。

『ゼロー！』

『オール・ハイル・ブリタニア！』

連鎖する二つの叫びが、世界はたった二つの色に塗り潰されたことを示していた

エリア1の政庁にある謁見の間にて、ナイトオブ라운ズや総督であるナナリーと共に式典の中継を見ていたシュナイゼル・エル・ブリタニアは、常の柔らかい笑みを浮かべている彼らしくもなく眉を顰めていた。

「……………カノン」

「はっ」

ゼロの名と、政庁に鳴り響くオールハイルブリタニアの掛け声の最中に副官のカノン・マルディーニを呼び寄せる。

「トロモ機関の資金と人員を動かしてダモクレスの完成を急がせてほしい」

「殿下、それは……」

「方が一のことを考えてのことだよ」

耳を近づけたカノンにだけに聞こえるように指示を与えたシュナイゼルは歓声が聞こえる外とモニターに目を戻す。

「超合衆国など揺さぶれる要素は幾らでもあるというのに、現実をゲームのように遊ぶおつもりか父上」

父親であるシャルルの本質を既に見透かしているシュナイゼルは、偽りの劇場の役者を演じさせられることを不快に感じていた。

「今日という日を大事にしない人に皇帝たる資格はない」

自分を持たないシュナイゼルに生まれた静かな意志だった。

放送が流れている頃、斑鳩のゼロの私室にてC・C・はルルーシュ手作りのピザを食べていた。

ピザに齧りつきながらC・C・は寂しそうに呟く。

「私だって黒の騎士団なのに……」

居場所がバレると問題のあるC・C・は、ルルーシュにお留守番を命じられて式典に出席できなかつたのだった。

## 第五話 汝に信ありや

超合衆国決議第壹號の宣言後、政庁に潜入していた篠崎咲世子が一時帰還していて報告を受けたルルーシユは斑鳩の自室にて唸っていた。

「紅蓮が改造されているだど?」

既に個人の意思で黒の騎士団を動かせる立場では無くなったルルーシユは戦略計画の一部が崩れていくのを自覚した。

「はい。どうやら枢木スザクのKMFチームが行っていると思われるます」

「スザクのことというのは、特別派遣嚮導技術部を母体としたチームだったはずだが」

ルルーシユはゼロとなつてからスザクが駆るランスロットに散々戦略をひっくり返されて来た。

ランスロットのことを調べる過程で特別派遣嚮導技術部までは辿り着いていたが、元はシュナイゼルの管轄する技術部であったのでそれ以上は手を出すことが出来なかった。

「そこまでは……………責任者はロイド・アスプルンド主任とのことです」

覚えのある名前に、ルルーシユは戦略計画を修正しようとした考えを一時止めた。

「ロイド、聞いた名前だな」

スザク関連だけではなく、他でも聞いたような覚えがあつて記憶を呼び起こせば、明晰なルルーシユの頭脳は答えに直ぐに辿り着く。

「ラクシャータが以前に言っていた人物か」

記憶を順に穿り返していたルルーシユは科学長官に任命したラクシャータ・チャウラーが口にしていたことを思い出した。

もう一つ、アツシュフォード学園の前身生徒会長であるミレイ・アシユフォードの元婚約者なことも一緒に思い出したが、今は関係ない

ので口にはしなかった。

「本人に聞いてみるとするか」

ラクシャータはロイドと知り合いらしいので確認してみた方が手っ取り早い。

咲世子に呼んで来てもらったラクシャータを前にする時はしつかりとゼロの仮面を被る。

「で、何か用があるって」

相変わらず男の目には毒な開けた格好で現れたラクシャータは、何時も持っているキセルをユラユラと揺らしながら用件を訊ねる。

「ロイド・アスプルンドを知っているな？」

「プリン伯爵のこと？ 知ってるけど、どうかした？」

プリン伯爵とはなんだろうかと疑問に思わないではないが、本題ではないので心の奥底に押し込める。

「そのロイドに鹵獲された紅蓮が改造されていると情報が入った」

ルルーシユがそう言うところラクシャータは明らかに気に入らなげな雰囲気になり、ユラユラと揺らしていたキセルをピタリと止めた。

「君も知ってるの通り日本解放戦でカレンと紅蓮を奪い返すつもりであるが、紅蓮の状態によっては戦えない状況になっているとなれば我々としても考えなければならぬ。ロイドを知るラクシャータならば、紅蓮にどのような改造を施されているか予想できないかと思ってるね」  
「……………って言われても、私が知るのには学生だった頃のプリン伯爵のことだから当てにされても困るんだけど」

「科学者、研究者ともなれば基本的な考えは学生時代と大きく変わらないだろう。あくまで参考程度に聞いている」

明らかに不機嫌ですと顔に出ているラクシャータに内心で引きながらも、少しでも情報が欲しいルルーシユは食い下がる。

「じゃあ、言うけどロイドは典型的なマッドサイエンティストよ。ランスロットを見れば分かるわ。あれは絶対に人をKMFのパーツとしか見ていないわ」

ラクシャータは、またキセルをユラユラと揺らしながら眉間に皺を寄せる。

「セシルもいるだろうからストップパーになってるだろうけど、紅蓮があの二人に弄られるとかなるとかなりの魔改造されてるんじゃない？ まあ、私だってランスロットが手に入ったら魔改造するけど」  
「魔改造？」

改造との違いが分からないスレていないゼロの反応にラクシャータは目を細める。

「私はKMFを作る時は誰でも乗れるようにするけどプリン伯爵は違う。最高級の機体を作って合う人間を乗せるのよ」

医療サイバネティック技術の権威として名を馳せているラクシャータと、ロイドは言っていたようにマッドサイエンティストなので科学者としての思想が違うということなのだろう。

「つまり、前者が紅蓮式式で後者がランスロットということか」  
「そうそう」

紅蓮式式は誰でも操れるが、ランスロットは特定の人物にしか操縦できない特異な機体という認識をルルーシユは抱く。

「私・プリン伯爵・セシルは、それぞれ専門としている分野も違うから一概には言えないけど」

そう言っただけラクシャータは考えるようにルルーシユから中空を見る。

「斬月や紅蓮可翔式を第八世代ナイトフレームとするなら、あの二人が趣味に没頭して紅蓮を魔改造したら第九世代になっちゃうんじゃない」

「それほどか……」

「第八世代を定義する具体的な特徴はないし、私が勝手に言ってるだけであってにはしないでね」

ラクシャータにとっては戯言に過ぎなくても、彼らの技術が結果的にせよ合わされば世代を超える機体に成る可能性があることをルルーシユは思い知った。

（他人の機体とはいえ第九世代に改造出来るなら、ランスロットを第九世代に新造することもまた可能となる）

上に立つ者は常に最悪を想定していなければならない。



ルルーシユが考えるナイトメアフレーム関連で悪い思い出とは、紅蓮式式が出て来るまでランスロットに振り回されていた時期のことである。

「感謝する、ラクシャータ」

その他、細々としたことを聞いてからラクシャータに礼を言っただがらせ、ルルーシユは考えに没頭する。

「戦略が戦術に負けることはない」

ルルーシユの常からの持論ではあるが、スザクが操るランスロットによって戦略をひっくり返されて来た。

「可能性の段階だが――」

戦場は常に不確定の塊で、ルルーシユですら読み切れない何かがあるに蠢いている。

「――俺も戦術で戦略をひっくり返してみるか」

そのことを想像したルルーシユはニヤリと笑みを浮かべるのだった。

ルルーシユがシュナイゼルの吠え面を想像して嗤っている頃、ナイトオブセブンのKMF開発チームであるキヤメロットのKMFデッキにてナイトオブラウンズが集まっていた。

「ランスロットにフレイヤを？」

主任であるロイドから告げられた予想外の言葉にセシルは思わず声を上げた。

「スザク君には紅蓮を使ってもらうつもりだったんだけど」

「えっ、僕が紅蓮に？」

敵として戦い続けて来た紅蓮は鹵獲したとはいえ、やはりカレンの機体という認識が強かった枢木スザクは予想外の提案に思わず聞き返していた。

「紅蓮はカレンの機体じゃ」

「今は鹵獲してうちのものだよ」

ロイドに楽し気にそう言われても、あれだけ戦った相手を即座に味方と判断できるほどスザクは器用な人間ではなかった。

「ごめんなさいね。私もついつい乗っちゃってロイドさんと一緒に気付いたら趣味の世界に……」

「趣味？」

スザクには良く分からないことを言うセシルの言葉に紅蓮を見上げれば、以前とはかなり意匠が違う。

「要は改造しまくったことですか」

「ラクシャータのマシンだから弄り易くって。そしたら誰も乗れない物に。おめでとう！ デヴァイサーの出番だねえ」

「ロイドさんらしいっていえばらしいですけど」

ロイドが言うラクシャータというのが誰のことかは分からないが、ロイドが作る機体に他の人が乗れないことは初期のランスロットの頃からの付き合いでするので珍しいことではないと知っていたスザクも驚くことはなかった。

「あの……ロイド先生、ランスロットの件ですが」

それでも自分が紅蓮に乗るはずだったのだと聞かされて機体を見上げていたスザクの耳に、アツシユフォード学園から大分様子が変わったニーナ・アインシュタインがロイドに話しかけていた。

「戦術兵器に戦略兵器を乗せる気かい？」

当のロイドは、常の人を食ったような態度の彼にしては珍しく静かな声で訊ねた。

「それだけの理由はありません。一次制圧圏内に含まれた物質はフレイヤのコラプス効果によって完全に消滅しますから」

「待って！ そんなものをスザク君に撃たせるつもり？」

騎士として数多の戦場を駆け巡っていたスザクですら聞いていてもゾツとする内容だった。

もしもセシルが言わなければスザクがニーナを問い質していたことだろう。

「同じ民族を虐殺」

戦うのは多国籍軍隊となった黒の騎士団だとしても、恐らくトウキョウ租界にやってくるのは精鋭である中期メンバーである日本人が多いことだろうと予想したアーニャ・アールストレイムが静かに呟く。

「スザク、まだイレヴンに同族意識があるの？ 私はあなたにフレイヤを委ねたい」

「僕に、背負えと？」

アーニャの言葉をそう捉えたニーナが、信頼というにはあまりにも歪んだ目の奥の光を輝かせてスザクを見る。

「ユーフェミア様の騎士でしょ、あなたは」

イレブンを虐殺しろと命じたユーフェミア、そのユーフェミアを殺したゼロは仇である。

ニーナはゼロを日本人だと思っているのだろうが、騎士ならば主の命令を遂行しろ、騎士ならば仇を取れと言っているのだろうか。

どちらの意味を言っているのだろうかと考えたスザクは、しかしどちらであつても最終的な結果は変わらない。

「あは、ニーナくん」

即座に答えずにニーナから目を逸らしたスザクの前でクルリとロイドが一回転する。

「この矛盾はさ、スザクくんだけじゃない、君を殺すよ」

楽し気な言葉とは裏腹にどこまでも冷めた眼差しで告げたロイドにニーナは僅かに怯んだ。



超合衆国決議第壹號で日本解放戦を決議された黒の騎士団は蓬萊島より進発し、カゴシマ租界を中心にシマネ・ヤマグチ・ナガサキといった広範囲な地域に部隊を移動させて戦端を開いた。

総司令に就任した黎星刻が指揮を取る主力により有利に戦場を支配していた。

『狼狽えるな！』

その最中、ナイトオブフランスのトップであるナイトオブワンのビスマルク・ヴァルトシュタインの檄に臆し掛けていたブリタニア軍を鼓舞する。

『このエリアーさえ守り切れればオデュッセウス殿下を始めとする全ての皇族、その軍隊も超合集国領に雪崩れ込む。他のナイトオブフランスも全て最前線に出ている』

『逆に言えば、日本を解放すればブリタニアの植民エリアは次々と決起します。世界地図が塗り替わるのです』

反論するように皇神楽耶が今の状況を的確に表現している間に、当初ブリタニア軍は波打ち際での遅滞防御戦闘を行っていたが、彼軍が揚陸するタイミングで主力KMF部隊を投入。

『つまりは』

『ここが天王山！』

攻勢に勇み足を過ぎた騎士団前衛はブリタニア軍KMFと噛み合い、乱戦となった盤上において後方からの砲支援を受けることも出来ず、海上での消耗戦に持ち込まれた。

その戦いの情報を逐一仕入れているエリアーの中心であるトウキョウ租界の政庁にて、シユナイゼル・エル・ブリタニアはナイトオブブラウンズや政庁の職員らの前で鷹揚に構えていた。

「恐れることはないよ。キュウシユウには帝国最強の騎士ナイトオブワンがいる。我らはトウキョウに構え、諸外国にこれが小さな紛争にすぎないと印象づけよう」

「イエス！ユアハインス！」

氣勢も高く答える彼らを皇子らしく鷹揚に頷いたシュナイゼルは、隣で自分が纏めるべきエリアで起こっている戦闘に悲しそうにしているナナリーの肩に手を置く。

「大丈夫だよ、ナナリー。この戦いは直ぐに終わると思うよ」

シュナイゼルの言葉に嘘はなかった。嘘だけはなかった。

「——この機体はギャラハッド。ビスマルクがキュウシュウに出たか」

水中を潜行して進む斑鳩のブリッジにて戦況を観測していたルーシユはブリタニアも本気になったことを自覚する。

事前に予測した戦術にはビスマルクまで現れることは入っていない。しかし、斑鳩は隠密行動中なので戦術を変更する為の通信は行えない。

「ゼロ、キュウシュウにナイトオブブラウンズが出てきたと聞いた」

ブリッジの入り口からパイロットスーツを着た藤堂鏡志朗が四聖剣の千葉風沙と朝比奈省悟を伴って現れた。

「ナイトオブワンのビスマルク、ナイトオブテンのルキアーノが現れたようだ」

「帝国最強の騎士が!？」

「それだけブリタニアも本気になっているということだ」

皇帝の懐刀と称されているビスマルクがブリタニアを離れること自体が本来ならありえないことだった。

ナイトオブブラウンズが現れることはルーシユの予想にも入っていたが、ビスマルクの存在は完全に予想外である。

「作戦に変更はない」

「だけど」

「星刻を信じろ。私に言えるのはそれだけだ」

元からゼロに疑いを持っている朝比奈が具申しようとしたがルーシユらには援軍も出せないし、作戦を無視して自分達が動く方が本末転倒になる。

「……………作戦が始まる前に一つだけ聞いておきたい」

藤堂とて星刻を信じる以外に今の自分達が出来ることはない  
知っているから、作戦が始まる前に胸に蟠るシコリを取り払う為  
に口に訊ねた。

ルルーシユは椅子を回して背後の藤堂に向き直り、先を促した。  
「ブラックリベリオンの時に戦線を離れた理由は聞いた。しかし、  
こちらの判断を仰がずにジェレミアを仲間に加えたことといい、  
秘密が多すぎる」

旧日本軍の軍人であり、黒の騎士団の中軸を担う藤堂の疑問は  
全員が抱えていることだろう。

「日本を解放してブリタニアを倒す。ここまでは異存はない。  
だが、ブラックリベリオンの時のようなことが起きないという  
保証はない」  
勝手に戦線を離脱した前科があるゼロ。その能力が必要であり、  
才覚が無ければここまで辿り着くことは出来なかったことに  
疑いはない。

疑いを持ちながらも、互いに利用し合いながらここまで来た。

「信用してもいいんだな、ゼロ？」

個々に仮面のトップに疑念を抱いていただろうが、  
ブラックリベリオンの中の黒の騎士団は良くも悪くも  
ゼロに心酔した集団だった。

ゼロの戦線離脱は復活後も碌な弁明もしていないから  
心に棘を残したまま、今まで後回しにしていた問題だった。

「……………私が言えるのは一つだけだ」

言葉を間違えれば今度こそ決定的な亀裂を生むことになる。  
それを十分に分かった上でルルーシユは立ち上がって藤堂  
に向かって答える。

「日本を解放できなかったその時は——藤堂、お前が

私を斬れ」

「それは…………」

三度目はない。ルルーシユにとっても、黒の騎士団にとっても。

ブラックリベリオンが失敗したのはルルーシユの戦線離脱と  
ゼロに頼り切った黒の騎士団にある。

前回の失敗を糧に成長していないのであれば、次に期待する者が

たとしても上手く行くはずがない。更には、これだけの状況を整えておいて敗北したならばルルーシユの限界ということなのだろう。

「ゼロの真贋は中身ではなく、その行動によって測られる。日本を解放できなかった私はゼロに相応しくない」

結果を示せなかったルルーシユにゼロ足る資格なし。

その結果に関わらず、ルルーシユは命を賭けるというゼロの宣言に藤堂らは目を見開いた。

逃げはしない。隠れることも許されない。それだけが数多の者をギアスで操り、多くの命を捨ててきたルルーシユに出来る精一杯だった。

「……………分かった」

ゼロの全身から放散される王者の覇気に気圧されながら藤堂は重く頷いた。

「ならば、私もゼロと運命を共にしよう。この命、好きに使ってくれ」  
今は死滅した日本のサムライとして、命を捧げるに足る覚悟を見せた主君に藤堂は地面に片膝をついて跪き宣言する。

「我ら四聖剣は藤堂鏡志朗と共に」

「認めるのは癪だけどね」

その後ろで千葉と朝比奈も続く。

「感謝する」

彼らの変わりなきに仮面の中で苦笑を浮かべたルルーシユは、背後から響いたピーピーという電子音に目を細める。

「時間だ。作戦を始める、藤堂」

ブラックリベリオンでゼロは租界の基盤を支える地下基礎を爆破し、総督府を除く殆どの都市区画が展開していたブリタニア部隊ごと地盤沈下に沈んで戦局を一気に優勢に進めた。

ロロとヴィレッタを落として以来、機密情報局を我が物としたルルーシユが大人しく学生を続けていた理由。

トウキョウ租界内部に網の目に張り巡らされ、日夜走り回るモノレールは不規則に思っても決まった時間に決まった順路を通るようになっていた。ゲフィオン・デイスターバーの効果範囲は限定的だ

が、モノレールの動きを読んで租界全域をカバーできるポイントが来た段階で自動的に起動するように設定しておくだけでいい。

襲撃して来たジェレミアには結局使うことはなかったがファイオン・デイスターバーが時間が来たことで自動的に起動する。

それが作戦の始動合図。

「承知した………7号作戦開始！」

「斑鳩浮上ー！」

藤堂の宣言の後に続く艦長の南の叫びと共に斑鳩が水中から飛び立つ。

「日が沈むまでに日本を取り戻す。黒の騎士団よ、進め！」

藤堂と四聖剣の忠誠と引き換えに自らに背水の陣を敷いたルル・シユはゼロとして高らかに宣言する。

様々な思惑を抱えて、第二次ブラックリベリオンとも呼ばれる第二次東京決戦が幕を開けた。



## 第六話 第二次東京決戦

超合衆国決議第壹號が発令される数日前、雑踏と喧騒に支配された建物の内部にルルーシユの姿はあった。

「ルル……」

「シャーリー……」

二人の男女が向かい合い、湿った視線を交わしていたとしても気にもしない周りの人達。それは当然のことで、空港は別れの場所でもあるのだから。

「やつと話すことが出来るのに」

「仕方ない。お母さんの気持ちも分かるだろう？」

連れ添う旦那を失い、あわや娘も失いかけた母親の気持ちも分からないでもない。

シャーリーの母親にとっては呪われているとすら思えるエリアー1に残っていたのは娘がゴネたからでもある。だが、しかしそれも撃たれた傷が完全に癒えるまでの話。

「でもー」

十代後半ともなれば親よりも愛しい人と一緒にいたいと思う年頃。ことにシャーリーは今までの経緯が経緯だけに容易に離れがたいと思ってしまう。

「頼む」

ルルーシユは叶うならばシャーリーには傍にいてほしいと思っている。同時に否応なく、このエリアー1が戦地になってしまうことを知っているルルーシユは離れた方が良くとも思っている。

「全部終わらせて必ず会いに行く。だから」

その先の言葉が示す物は不穏であり希望であり、不確かな未来に辿り着きたいと願うルルーシユの想いでもあった。

「……………ルル」

一度だけ病院で人目が無く二人だけで話せる機会があった時にル

ルーシユは自身の全てをシャーリーに話した。

憤怒であり、憎悪であり、懺悔であり、後悔ばかりのルルーシユの全てを。

ルルーシユの生まれ、アリエス宮で起こった母と妹を襲った悲劇、皇帝からの宣告、日本でのスザクとの交流、侵略戦争後の生活、アツシユフオード、C・C、そしてギアス。

ユーフェミアの真実、ナナリーの現状、ロロの正体、ルルーシユの目的に至るまで、その全てをシャーリーに語った。

『ありがとう、話してくれて』

長かったかもしれないし、短かったかもしれない。

ルルーシユにとっては時間間隔が曖昧になりながらも全てを語り終えた後、シャーリーはただそう言つて微笑んだ。

シャーリーは許しも怒りも嘆きもしない。だからこそ、ルルーシユは救われたのだった。

『俺の方こそありがとう』

気が付けばルルーシユはそう言つていた。

全てを知るC・Cにも話したことがないようなことまで語つたルルーシユは、重い何かから解き放たれたような気持ちだった。

「ああ、その時に俺の気持ちも伝えるよ」

「待つてる。あんまり遅いと私の方から来ちゃうから」

「肝に銘じておく」

そして彼らは別れる。

少年は戦場へと赴き、少女は少年が敵と定めた国へと帰って行く。

ここで綺麗に終われたら物語的一幕にも成れるのだが、それはこの場にいるのが二人だけだったらの話。

「ところで、お二人さん。私達は何時までラブロマンスを見てればいいのかしら?」

シャーリーの見送りに来たのに完全に蚊帳の外に置かれた上に、ケリは付けたつもりでも心の奥底にくすぶり続けるルルーシユへの恋心があるミレイ・アツシユフオードとしては堪ったものではない。

「そうだよ。俺達だつて見送りに来てるんだぜ」

胡乱気な眼差しのリヴァル・カルデモンドも気に入らげに同調する。

「恋人の別れに口を挟まないで下さい」

腕を取って笑いながら言ったシャーリーにルルーシユは嬉し気に目を細めた。

「全部終わったら——」

未来は不確定であやふなものでもあっても、ルルーシユは歩んだ道の先を見据える。

「——ニーナやカレン、スザクも………ロロやみんなと一緒に花火を見よう」

シャルルのギアスによってナナリーのことを忘れているミレイとリヴァルの手前、名前は出せないけれどシャーリーには伝わったようだ。

ナナリーがエリアーの総督になった後、修学旅行に参加しなかったルルーシユの為にミレイ達がアッシュフォード学園の屋上で上げてくれた花火。

「この間のあれ？」

「でも、カレンとスザクは……」

カレンは黒の騎士団、スザクはナイトオブブラウنز、ニーナもブリタニア本国で何らかの研究をしていると聞いていたミレイとリヴァルは叶うはずのない約束を思い出していた。

「大丈夫」

敵対している勢力に所属している者達が仲良く過ごせるはずがないと諦めているリヴァルに対し、シャーリーはルルーシユの手を握りながら保証する。

「折り鶴一つでもルルが来てくれたんだもん。千羽もあればみんな来てくれるよ。私、頑張つて作るから」

シャーリーの願いを人は子供の世迷言と笑うかもしれない。

向けてくれるシャーリーのこの笑顔を守る為にルルーシユは戦うのだ。

「ああ、そうだな」

ルルーシユは必ず約束通りに皆が集まって花火をすることが出来ると信じていた。信じていたのだった。



斑鳩のKMFデッキにある蜃気楼に乗り込んだルルーシユはゼロの仮面を外してインカムを取り付ける。

「ルルーシユ」

インカムを取り付けた直後、まるで計ったかのようにC・C・から通信が入った。

「どうした、C・C・？」

蜃気楼の隣に立つ濃いピンクに塗装された暁直参仕様に乗り込んだはずのC・C・の顔を思い浮かべながらドルイドシステムを起動させる。

「特に用があるわけじゃない」

「なんだ、それは」

忙しい時に通信をしてきた理由がそれではルルーシユでなくとも文句を言いたくなる。

「用がないのなら切るぞ」

「気の短い奴め。男なら女の気持ちを察するぐらいしろ」

「察しろと言われてもな……」

この日の為に何度もチェックを繰り返してきたシステムには何の異常もない。後は発進するだけとなったので、ルルーシユは隣に立つ

暁直参仕様を見てみた。

「機体をピンクに塗る神経が信じられん」

「というか、女がピンクを良く好む論理的な理由付けも出来ないのだからルルーシュには理解できない。」

KMFの色などコンピュータによって迷彩が意味を為さない以上、極論すればなんでもいい。が、やはり濃いピンクは目立って仕方ないとルルーシュは思うのだ。

「好きな色なんだから放っておいてくれ……………全くお前に女心を分かれと言っても無駄だったな」

反論したいことは幾らでもあるが、感情で動く女心をルルーシュが理解できたことはないので藪蛇になると分かっているので口を噤んだ。

「さつさと本題を言え」

「せっかちめ」

「切るぞ」

「分かった分かった……………ナナリーのことだ」

時間に余裕があるわけではないので業を煮やしてインカムの通信を切ろうとしたルルーシュの手が止まる。

「ゲフィオン・ディスターバーによってトウキョウ租界のライフライン、通信網、そして、第五世代以前のナイトメアは機能は停止する。そうなれば奇襲する形となった黒の騎士団が有利になるだろう」

何時もC・Cは肝心なことを言おうとしない。この時もそうだった。

「各主要施設を叩き、トウキョウ租界の戦闘継続能力を奪う。ここまでは良い」

「……………政庁を攻撃しろと命令したことか？」

「幾らある程度の要人の避難場所を予測出来ているとしても、ナナリーを確実に抑えられる保証はない。しかも優先順位はカレン・紅蓮に次いで三番目だ。本当に攻撃しても良いのか？」

心配性め、とはルルーシュは思っただけで言わなかった。

「黒の騎士団はもう俺だけの、日本だけの組織じゃなくなった。ゼロ

は多くの希望を集め、その責任を背負っている」

偽りの記憶が解かれた後、ルルーシユはナナリーのいない生活を送った。記憶にある限りにおいて、今までなかったことだった。

ナナリーのいない生活など考えられなかった。生きることが出来ないとすら思っていた、そのはずだったのに。

「俺はゼロとして、黒の騎士団のCEOとしての責任を果たさなければならぬ。もう、ナナリーの兄だけでいることは出来ない」

ナナリーを取り戻す。その決意に偽りはなくとも、シャーリーや黒の騎士団たちとの約束が、願いがあつた。

「この戦いはナナリーの為だけものじゃない。日本の、世界の、そして俺自身の願いの為に」

賽は振られた以上、例えその先にどんな犠牲を払おうとも止まることは許されない。

「行くぞ、C・C。魔王たる俺に付いて来る覚悟はあるか？」

「……………私は魔女だ。魔王が為す全てを見届けてやる」

藤堂鏡志朗の斬月が開かれたデツキから発進していく大きな音にも遮ることなく相手へと言葉が伝わった。

「蜃気楼、発進どうぞー！」

千葉風咲、朝比奈省吾の青色に塗装された暁直参仕様が続いて発進し、オペレータである双葉綾芽の言葉の直後、発進シークエンスが終了して何時でも蜃気楼が出撃できる状態になった。

「了解した。蜃気楼、出るぞー！」

斑鳩を発進した蜃気楼を操るルルーシユは画面に映る太陽の高さを確認して目を僅かに細める。

予測ではゲフィオン・ディスターバーが破壊されるであろう時間は日没前。その前に政庁を落としてナナリーを手にすることが出来るか、ルルーシユにも分からない。

「地上部隊は敵がゲフィオン・ディスターバーを破壊するのを可能な限り遅らせる。朝比奈、千葉は政庁を落とせ。しかし、カレンと紅蓮がいると思われる特定のポイントには攻撃をするな」

「了解！」

「藤堂は当初の計画通り、暁部隊を率いてゲフィオン・デイスターバーが効いていない敵KMFを相手にしろ。ジェレミアはナイトオブラウンズが現れたらその相手を」

「了解した！」

「イエス・ユア・ハイネス！」

「おい、私は？」

「C・C・は私の直掩だ。蜃気楼は囷として敵を惹きつける！」

矢継ぎ早に指示を出しながらルルーシュの目は戦場を俯瞰する。

「斑鳩艦隊はトウキョウ租界上空にてシュナイゼル旗下の航空艦の相手をしてもらおう。藤堂とジェレミアの前には絶対に出るなよ！」

あのシュナイゼルならば政庁で避難するよりも航空艦に乗り込んでいるだろう。ゲフィオン・デイスターバーに対抗できるフィルターを装着した第七世代以降の敵KMFの姿も見える。

「シュナイゼルめ、トウキョウ決戦を読んでいたか。だが！」

蜃気楼はトウキョウ租界の上空に留まりながら、展開した胸部からプリズム状にした特殊な液体金属のレンズを放ち、それにビームを放って乱反射させる拡散構造相転移砲を放つ。

ゲフィオン・デイスターバーで動きを止めている第五世代と第六世代のフィルターの付いていない機体を撃ち抜いていく。

視界の端では藤堂の斬月とジェレミアのサザーランド・ジークが敵ナイトメアと戦端を開くのが見えた。

「咲世子、そちらの突入状況はどうなっている？」

敵の接近や身の安全への意識は直掩のC・C・に任せることで除外し、ルルーシュは目と頭は敵の排除を続けながら政庁に侵入している篠崎咲世子に通信を繋げる。

「政庁への侵入は成功し、紅月カレンの捜索を行っています」

ドルイドシステムと自前の頭脳を120%駆使して敵を排除しつつ、戦況の流れを見極めて優勢を確信しながらもルルーシュに慢心はない。

「潜入部隊を二つに分け、紅蓮の状態も確認させろ。シュナイゼルのことだ。機体に爆弾を積んでいないとも限らない」

ラクシャータによればロイド・アスプルンドがそんなことをさせないという話だが、あのシユナイゼルならばやりかねない上に一度は敵の手に渡ったのだから十分に注意するべきである。

「しかし、それではナナリー様が」

「優先順位を間違えるな、篠崎」

名前ではなく苗字で言うことで、ルルーシユとしてではなくゼロとして話しているのだと分らせる。

「……………了解しました、ゼロ様」

「頼んだぞ」

ナナリーの優先度を下にすることに心が張り裂けそうなほどに激情が湧き立って来るが、ゼロの仮面で押し留めさせる。

「ゼロ！」

C・Cの警戒を促す声に拡散構造相転移砲を放つのを止めると、コックピットに接近警報を鳴り響いた。

「……………やはり来たか、スザク」

直後、何度も煮え湯を味わわされてきたランスロット・コンクエスターが向かって来る姿が拡大されて画面に表示される。

「聞こえるか、ゼロ」

強制的に通信に割り込みがかけられ、スザクの声がルルーシユの耳に入ってくる。

「戦闘を停止しろ。こちらは重戦術級の弾頭を搭載している。使用されれば、4000万リータ以上の被害をもたらす。その前に……………」

「ジェレミア！」

「イエス・ユア・ハインス」

ルルーシユの呼びかけに応えたジェレミア・ゴットバルトが操るサザーランド・ジークが蜃気楼の後ろから現れてランスロット・コンクエスターを強襲する。

「ジェレミア卿ですか!? 何故!?!」

「枢木スザク、君には借りがある、情もある、引け目もある。しかしこの場合は……………忠義が勝る!」

ナイトギガフォートレスであるサザーランド・ジークはその巨体を



活かしてランスロット・コンクエスターを吹っ飛ばす。

「ゼロ、今のスザクが言ったことは……」

「脅しに過ぎん。広範囲に被害を齎す重戦術級弾頭を使えばトウキョウ租界は只ではすまん。使えるはずがない」

トウキョウ租界にはブリタニア人も多く住んでいる。超合衆国決議第壹號で日本解放戦が決議されても全員が避難できるはずがない。脅しに過ぎないとルルーシュはC・C・に言い切った。

「受けよ！ 忠義の嵐！」

ナイトオブラウンズであろうとも何十万人もいるはずのトウキョウ租界上空で重戦術級弾頭は使えない。第一、サザーランド・ジークの猛攻に晒されている今のランスロット・コンクエスターに撃つ暇はないだろう。

「俺はランスロットとの通信を完全に遮断する。何かあった時はC・C、お前に任せるぞ」

ルルーシュは自分が身内に甘い人間だと自覚している。

通信回線を開いていたら、また情が湧く可能性が高いのでスザクと会話を交わさない為にランスロット・コンクエスターと通信が出来ないように設定する。

「いいんだな？」

問うC・C・に無言で返すことで了承の返答する。

そこへ更なる接近警報が蜃気楼のkokopittoに鳴り響き、向かって来る機体を見たルルーシュは目を見開いた。

「ナイトオブラウンズの戦場に、敗北はない！」

「倒す」

「ラウンズが二機だと!？」

機体照合の結果、トリスタンとモルドレッドと出た。

ナイトオブスリーのジノ・ヴァインベルグと、ナイトオブシックスのアーニャ・アールストレイムの機体である。

「シユナイゼルは俺を墜とす気か!？」

政庁の防衛でもアヴァロンの護衛でもなく、ゼロが乗る蜃気楼を落とすべく最大戦力であるナイトオブラウンズを差し向けて来た。

「がつ!？」

「C・C……ぐっ!？」

加速力に優れるフォートレスモードになっていたジノの駆るトリスタンにC・Cが攻撃を加えられ、そちらに一瞬気を向けた瞬間にアーニヤのモルドレットが接近しながらシユタルクハドロンを放った。

蜃気楼は絶対守護領域を展開してシユタルクハドロンを防いだが、モルドレットは砲塔を押し付けて押し込んで来る。

「あなたのシールドが上か。私のシユタルクハドロンが上か」

そして間近で再びシユタルクハドロンが放たれ、絶対守護領域とぶつかり合ってルルーシユの視界を明滅する光で埋め尽くす。

「こ、これは、いくら絶対守護領域でも……」

ドルイドシステムを操作して防いでいるが、絶対守護領域を展開している蜃気楼に負荷がかかり続けている。

このままでは機体が過負荷に耐えられずにオーバーヒートし、絶対守護領域が展開できなくなる。そうなれば、シユタルクハドロンが蜃気楼を簡単に貫くだろう。

「ゼロ!？」

「来るな、藤堂！ ジエレミア！」

ナイトオブブラウنزをルルーシユに集中させるのは諸刃の剣である。

現に藤堂と暁の部隊によってアヴァロンの直掩部隊は半減している。ジエレミアもスザクを抑えているからこそ、他の戦闘場所が優位に運んでいるのだ。

このまま時間を稼げば政庁も落とせる。ルルーシユが落ちるのが早いか、政庁やシユナイゼルが落ちるのが早いか。

「ゼロの親友、玉城真一郎を忘れるんじゃねえ！」

命を賭けるにはあまりにもハイリスクな状況でルルーシユが戦っている中で、地上で玉城の操る暁が放ったバズーカが——ジノのトリスタンに向かって行く。

「良くやった、玉城！」

近くに玉城がいたのを知っていたC・C・はモルドレッドではなく、対峙していたトリスタンを狙わせた。

モルドレッドと蜃気楼の周りにはシユタルクハドロンの所為でバズーカが届かない。だからこそ、自身を囮にしてトリスタンを狙ったのだ。

バズーカの弾を避けたトリスタンが玉城の暁をしつかりと仕留めている間にC・C・が動く。しかし、その動きはトリスタンに比べれば鈍重だった。

「C・C・!?!」

機敏に反応したトリスタンから放たれたハドロンスピアがC・C・の乗る暁直参仕様の半身を抉った。射線上にモルドレッドもいたので撃墜はされないと踏んだが、もう暁直参仕様は戦えない。

「ええい!」

しかし、暁直参仕様は止まらない。破損している飛翔滑走翼を動かしてモルドレッドの背に取りつこうとしているのを見てジノは己が失策を悟った。

反対にモルドレッドのコクピットでアーニヤは背中に取りついた暁直参仕様に攻撃能力が無いことを見抜いていた。

「そんな機体で何も出来やしない」

「機体ではないかもしれないぞ」

中華連邦の戦いでC・C・はアーニヤの内に潜む者の正体を知っていた。

「目覚めろ!」

嘗て行政特区日本の式典でスザクと触れた時に偶発的に発生したショックイメージを意識的にアーニヤに叩きつけて裡にいる者を喚起させる。

「あつ、ぐつ——!?!」

C・C・が発したショックイメージによって、アーニヤは内側にいる者の記憶を叩きつけられる。

「はっ!?! な、なにこれ——」

造園の花々に囲まれて満面の笑みを浮かべる黒髪の少年。

離宮の中で立つ豪華なドレスを着た見覚えのない女性。

草原で活発に遊ぶ少女と振り回されている少年、そして彼らを見守るブリタニア皇帝。

「ハドロンが止まった？ ならば！」

背中に激突しただけに見えたC・C・の暁直参仕様によってモルドレッドのシユタルクハドロンが止まった。理由は分からずともルルーシユは両膝のスラツシユハーケンを放つ。

「C・C・！」

「だ、大丈夫だ……」

スラツシユハーケンが当たった程度でバランスを崩したモルドレッドの背にしがみ付いている暁直参仕様を回収し、離脱しながらC・C・に呼びかけると力のない声が返って来た。

「逃がさん！」

可能ならば斑鳩に連れて帰りたいが、トリスタンが行く手を阻む。

前進を止められた蜃気楼が急停止した瞬間、モニターの一部でトウキョウ租界を沈黙させていたゲフィオン・デイスターバーが全て破壊されたことを知らせてきた。

「馬鹿な、早すぎる!?!」

まだ日没には少し早い。予定よりも早すぎる破壊にルルーシユが驚愕している間に幾つもの通信が同時に入る。

「ゼロ、伏兵が！」

その通信内容を纏めれば、トウキョウ租界が狙われる可能性を読んでいたシユナイゼルは伏せていたナイトメアや工作兵を動かしてゲフィオン・デイスターバーを破壊させたのだ。

「——私を前にして余所見とは余裕だな！」

理由を考えてしまうのはルルーシユの悪癖だった。

ジノはパイロットであるルルーシユが気を逸らしていたのを如何なる方法によってか察知しており、異常な反応速度でトリスタンを駆ってMVSハーケンを蜃気楼に向けていた。

「っ!?!」

意識をジノに戻した時には絶対守護領域を発動させられるタイミ

ングではなかった。

ナナリーの名を叫ぶ暇もなく絶命するはずだったルルーシユの視界を赤い光が埋め尽くす。

——先日はどうも、ブリタニアの貴族様」

戦場で一瞬とはいえ放心したルルーシユは蜃気楼の前に立つ真っ赤な機体がトリスタンではないことに気付くのが遅れた。

「カレン、やっぱりシユタツトフェルトの名前より紅月……………：日本人であることを選んだわけか」

「そうね。だから、ジノ。戦場で会えたことを喜ぶべきかしら、悲しむべきかしら」

「ふふ、楽しむべきってのはどうだい？」

ルルーシユが見えるのは背中部分だけだが、その部分だけをとつても以前の紅蓮可翔式とは明らかに意匠自体が変わっている。

「カ、カレンか？」

蜃気楼を助けた紅蓮に乗っているとしたらカレンしか考えられないが、九死に一生を得たルルーシユは思わず訊ねていた。

「ゼロ！ 親衛隊隊長・紅月カレン。只今を以て紅蓮聖天八極式と共に戦線に復帰しました！」

戦術で戦略をひっくり返すことが出来る機体と共に戻って来たカレンは高らかに叫んだ。

「よく戻って来てくれた、カレン。早速で悪いが」

「敵を倒します！」

「そうはさせない！」

右腕を失っているトリスタンに向かおうとした紅蓮だったが、ジークフリートの拘束を脱したスザクのランスロット・コンクエスターが割り込んで来る。

放たれたメーザーバイブレーションソードを簡単に躲した紅蓮はC・Cの暁直参仕様を抱える蜃気楼を押し下がる。

「大丈夫か、アーニヤ」

「……………平気」

紅蓮はたった一機で、ナイトオブブラウズ二機とゆつくりと上がっ

て来たモルドレットの合わせて三機と対峙する。

「カレン！ どくんだ！」

「どかないよ、スザク！」

真つ先に向かっていたランスロット・コンクエスターがハドロンブラスターを放つも、紅蓮は輻射波動で受け止めながら障害などないかのように突き進む。

阻止しようとするモルドレットのシユタルクハドロンも悠々と躲し、輻射波動砲弾を円盤状に収束させてカッターにして投げ、砲塔を呆気なく破壊する。

機動力が売りのトリスタンが全く追従すらも出来ず、その翼を折られた。

「ま、マシンポテンシャルが違い過ぎる……!?!」

隔絶した機体性能を前に何も出来ず、ナイトオブブラウズが赤子の手を捻るように敗れ去って行く。

「どうしますか、ゼロ？ ここでナイトオブブラウズを」

ルルーシユですら呆然とするしかない状況でカレンからナイトオブブラウズを倒すことを優先するかと通信が入った。

「……………ランスロットは重戦術級弾頭を持っていて可能性がある。エリアでそんな物を撃とうしたことはブリタニアに打撃を与えることが出来るはずだ」

そうしている間に明らかに戦闘能力を失ったトリスタンを抱えてモルドレットが逃げる。その背に追撃を仕掛けるもブリタニアのナイトメアが次々に盾となり、捨て石になっても構わないと次々に紅蓮に飛び掛かつてはカトンボのように落ちていく。

「ランスロットを鹵獲しろ」

「それはゼロとしての判断？ それとも——ルルーシユの感情？」

紅蓮という戦術が戦略をひっくり返している中で、スザクを捕まえるという判断はどちらから出されたものかをカレンは問うた。

「パイロットを生きたまま捕まえるとは言っていない。恐らく重戦術級弾頭は背腰部のアレだ。アレさえ奪えばランスロットに用はない」

つまりはゼロとしての判断である。

「紅蓮のパワーアップのことを考えればスザクを生かしておくわけにはいかない———確実に殺せ」

下手にスザクを追い詰め過ぎれば、生きろとかけたギアスが発動してどんな行動に出るか分からない。もしかしたら重戦術級弾頭を使う可能性もある。

『———ルルーシユの感情?』

右手以外を失ったランスロット・コンクエスターを動かしていたスザクの耳に混線した通信が拾った声を届けた。

「———」

カレンの声で告げられた名前が示した意味。スザクは瞬間的に沸騰した頭と共に理解して、フレイヤの安全装置の解除の操作をしていた。

一年前のブラックリベリオンの時に神根島でルルーシユがユーフェミアを過去と言った時に湧き上がった同じ憎しみが一瞬でスザクを襲い、腰背部にランチャーの中に何が入っているかも忘れさせた。

「ルルーシユウウウウウウウウウウウウツツツツツツツ!!!」

また裏切られた。また、また、またまたまたまたまたまたまたまたまた、ルルーシユはスザクを、学園の皆を、全ての人々を裏切った。

向かって来る紅蓮のことなど頭がない。あるのはその後ろで半壊したナイトメアを抱える蜃気楼、その内にいるゼロであるルルーシユだけ。

———スザクは憎しみのままに引き金を引いた  
フレイヤ弾頭は比較的遅かった。

紅蓮は勿論のこと、距離があつたので半壊した暁直参仕様を抱えていた蜃気楼でも避けることは難しくなかった。

「まさか、あれがスザクの言っていた………ああ、ナナリー!!!」

ルルーシユが気づいた時にはもう遅い。

三機が避けたミサイルがトウキョウ租界の中心に近い場所で閃光

を放ち、やがてその輝きを高めて広がって行く。

「ルルーシユ！」

通信を拾われる可能性があるので、決してルルーシユと名前では呼ぼうとはしなかったC・C・が暁直参仕様を操作して今にも壊れそうな飛翔滑走翼で蜃気楼を押しす。

後少しで機体の足下にまで光が迫ったところで、遂に飛翔滑走翼が爆発した衝撃で我に返ったルルーシユは暁直参仕様を抱えて蜃気楼を全力で後退させた。

日が没し、トウキョウ租界があつた場所を暗黒が支配していた。ライフラインを抉り取られ、周辺地域も暗いまま。

トウキョウ租界の中心部で炸裂したフレイヤ弾頭の結果を見届けたシュナイゼルは、損傷の大きいアヴァロンのブリッジで立ち上がる。

「素晴らしい……」

光に呑み込まれ、文字通り消えてなくなった嘗てトウキョウ租界だった場所を微かに恍惚とした目で見下ろす。

「それでいいのだよ、枢木スザク」

最早、戦うどころではなくなって動きの止まった戦場の中に浮かぶランスロット・コンクエスターを確認したシュナイゼルは何時もの彼らしく笑った。



## 第七話 裏切り

神聖ブリタニア帝国第2皇女コーネリア・リ・ブリタニアは妹であるユーフェミア・リ・ブリタニアにかけられた虐殺皇女の汚名を濯ぐべく、ブリタニアの力を借りずに単独で調査を行っていた。

調査の過程でギアス嚮団の存在に行き着き、中華連邦の砂漠地帯にあつた嚮団に潜入する。

コーネリアの前の総督クロヴィス・ラ・ブリタニアの側近バトレー・アスプリウスを見つけ、ギアスの説明を受けているところで嚮主であるV・V・に捕縛されてしまった。

「V・V・が死んだだと？」

単独でギアスにまで辿り着いたコーネリアはV・V・によって危険視され、神聖ブリタニア帝国の皇女を口封じに殺すことも出来ずギアス嚮団内部に幽閉されていた。

「黄昏の部屋の前で心臓をナイフで一突きされた状態で倒れているのを発見されています」

目は窪み、頬が扱けて憔悴が目立つバトレーによつて軟禁から解放されたコーネリアは眉を顰めた。

「頭にナイフが突き刺さっても死なぬ子供だ。不老不死もあながち間違いないと思っていたが」

バトレーに嚮団を案内してもらっている時に現れたV・V・に出合い頭にナイフを投げ、深々と突き刺さつたのをコーネリアは確認している。だからこそ、死んだと聞かされても容易には信じられない。

「殺したのは誰だ？」

「分かりません」

嚮団にいた者の中でそういった行為を嚮主であるV・V・にするとなれば、それこそコーネリアぐらいなものだろう。

それほどにV・V・は嚮団内で圧倒的な立場にいるし、不老不死であることは誰もが知っていることだったのだから。

「嚮団員が皇帝陛下にご報告したとのことですが、捜査が行われる様子はありません。マリーベル皇女殿下が大グリーンダ騎士団と共に一度来られたのですが、V・V・Vが死んだのを確認すると直ぐに出て行かれたので捜査ではなかったようです」

皇女であるコーネリアがギアス嚮団のことを知らなかったのだ。表の捜査組織に入れられるはずもないが、皇帝ともなれば秘密厳守を出来る捜査員の一人や二人を投入することも出来るはずだ。

「マリーベルが？」

「はい」

神聖ブリタニア帝国の皇位継承権第88位の皇女マリーベル・メル・ブリタニアが来ていたと聞いてコーネリアは思わず聞き返していた。

「皇帝陛下はクロヴィス殿下が献上するはずだった不老不死の女を既にご存知でした。それだけではなく、ギアスのことについても」

「父上にマリーベル、そしてギアス」

コーネリアは軟禁中も考えていた皇帝シャルルに対する疑念を強くする。

既にV・V・Vが殺されてから数ヶ月が経過しており、トップがいなくなつた嚮団は混乱状態にある。

殺人に対する捜査が行われる様子も無く、皇帝に指示を仰いでも何の音沙汰もない。バトレーらが調整していたジェレミア・ゴットバルトが一時帰還し、ジークフリートを奪って離脱したことで、彼らもコーネリアと同じように軟禁状態にあつた。

「神を殺す。V・V・Vもそんなことを言っていたな」

「私の部下が立てた仮説が確かならば、史上最悪のことは行おうとしています。今の世界を滅ぼそうとしているのです」

外の世界では超合衆国が成つて決議第壹號が発令された最中に、バトレーは部下の助けで軟禁状態から抜け出し、その足でコーネリアを解放して彼女が皇女としての立場を前面に出して嚮団を制圧した。

元よりブリタニア皇女を軟禁していることに戸惑いを覚えていた嚮団員が逆らうはずもないので抵抗もなかった。



暁直参仕様を抱える蜃気楼が浮かんでいた。

蜃気楼のkokopittoでルルーシユは目を見開いて、政庁があつたはずの場所を見下ろしている。

トウキョウは政庁を中心とした地域のライフラインが途絶し、常ならば眩いばかりに照らされる灯りもなく、まるで暗黒の世界に包まれたかのように暗い。

「咲世子……………応答しろ、咲世子」

カレンが紅蓮と共に現れた後、ナナリーを見つけたとの報告をしてきた篠崎咲世子と通信を試みても、返ってくるのは無情なまでにザーザーと大量の砂が流れるような音だけ。

「ルルーシユ、ナナリーは」

疲労の色の濃いC・Cの声が通信を介してルルーシユの耳に入る。

だが、認めたくなかった。認められるはずがなかった。

咲世子が通信を送った直ぐ後にナナリーを確保して退避したならば、退避方法にもよるがギリギリで逃げられるはずとルルーシユの脳の冷静な部分が弾き出しても、そんな都合の良いことがあるはずがないと誰よりも彼自身が理解していた。

「ナナリー」

妹の名を口に出したルルーシユの目が光を映し出す。

照明弾がトウキョウ租界を照らし出す。黒の騎士団、ブリタニアのどちらが上げたかは分からないが、政庁を中心として半径10キロメートル近くを文字通り抉り取っている姿が見えた。

「学園は無事か。しかし、これは、もう戦じゃない」

モルドレッドに抱えられているトリスタンに乗っているジノ・ヴァインベルグは、通っているアッシュフォード学園が辛うじて被害を免れていることに安堵しながら表情を歪めた。

貴族であり騎士であるジノだからこそ、信念も尊厳も持たないフレイヤという兵器に嫌悪と恐怖を感じる。

「何故、何故撃ったスザク!!」

同じナイトオブラウンズとして仲が良かったからこそ、スザクの為

した結果にジノは憤らずにはいられなかった。

「この兵器をもう一度使われたら、黒の騎士団は壊滅する」

ブリタニアの旗艦と目される浮遊航空艦アヴァロンを後一步で落とせるところまで扱ぎ付けた藤堂鏡志朗もまた、フレイヤを目の当たりにして動きを止めていた。

「藤堂……」

蜃気楼から通信が入り、この状況においては静かすぎるゼロの声に藤堂はハッと我を取り戻した。

「ゼロ、ここは」

「マクハリまで後退し、戦線を立て直す」

「しかし、それは……」

藤堂とて犠牲も出ている上に動揺している將兵に戦闘を強要などしたくはない。

が、後一步で勝利という段階で軍を下げることに直ぐには賛成できなかった。

「黒の騎士団にも多くの犠牲が出ている。アレを目撃した敵も味方も戦えるものではない。それにブリタニア側に援軍が来ている。このまま戦えば負けるのは私達だ」

ハツとしてモニターを操作すれば、トウキョウに向かってブリタニアのマーカーが施された軍隊が向かって来ている。

「ナイトオブラウンズに大グリンダ騎士団だと？」

船籍・機体照合の結果、ナイトオブテンのパーシヴァルと直属の部隊であるグラウサム・ヴァルキリエ隊、ブリタニアの対テロリスト機関である大グリンダ騎士団の母艦であるとコンピューターは表示していた。

「ここで闘っても無駄死にだ。戦略を立て直す………ジエレミアを殿に、藤堂は先行して部隊を下げるんだ。斑鳩に戻った後、一度星刻と合衆国代表達と合流する」

「………了解した」

ナイトオブラウンズのルキアーノ・ブラッドリーとその部隊、ブリタニアでも強硬派で精強と名高いグリンダ騎士団の母体の両隊が戦

線に参加すれば、幾らアヴァロンを落としてもこちらも落とされる可能性が高いと藤堂も分かった。

「星刻達の戦場でもビスマルクが下がったようだ。ランスロットが重戦術級弾頭を撃った映像をデイトハルトに送っている。ここからは情報戦になるだろう」

ゼロの声を遠くに感じながら藤堂は戦略が崩れたという意味を理解する。

トウキョウ租界はブリタニアの領地なのだから戦略的には黒の騎士団がフレイヤを使った方が自然だと考える。

黒の騎士団としては、機体の映像データを抽出してナイトオブブラウズであるランスロットが撃ったことを喧伝し、ブリタニアの非道をアピールして未だ日和見を決め込んでいる国を取り込まなければならぬ。

「武士の戦場では無くなるか」

フレイヤが量産されれば、戦場はナイトメアフレームではなく遠距離からの戦術弾頭を当てるものへと変化する。

武士の挟持も何もなくなり、冷たい論理が支配するものになるかと思うと藤堂は心に冷たい風が吹くのを覚えた。

「黒の騎士団に告ぐ。マクハリまで後退せよ」

ゼロの通信を聞いて真っ先に斬月を動かしながら、藤堂はチラリと重戦術級弾頭を撃ったランスロット・コンクエスターを見て、嘗ての弟子である枢木スザクのことを思った。

「僕が、やったのか……」

黒の騎士団のことも、己が立場も忘れて憎しみのままにフレイヤを撃ってしまったスザクは己が為してしまった結果を直ぐには受け入れられなかった。

全身は震えて目を見開き、どれだけ息を吸おうとも息苦しさが消えてはくれない。

「あ………かつ、お………ああ………」

どれだけ否定しようとも現実是不変ならない。両腕で頭を抱え、我知らずに涎を垂らしながらもスザクは狂うことを許されなかった。

『どうして』『なんで』『死んだ』『誰が』『自分が撃った』『どれだけの人が』『ナナリー』

頭の中で単語だけが幾つも飛び交い、精神に押し掛かる負荷で圧死しようともスザクの目に赤い光が宿って現世に留める。

断続的に明滅を繰り返す赤い光。操縦を放棄して両腕で頭を抱えていたからランスロット・コンクエスターは力を失ったかのように落ちていく。

幾らランスロットといえどもトウキョウを見下ろせる高度から墜落すれば、中のパイロットは勿論のこと機体も無事でいられるはずもない。

「っ!？」

見開いた目から涙を流しながらも迫ってくる地面を見たスザクの体が本人の意思を無視して動き、フロートユニットを操作して急停止して軟着陸させる。

足が無いのでガシャンとうつつ伏せに倒れ込んだランスロットのコクピットで、着地の衝撃でガクンと揺れたスザクの頭。

「ユフイ」

嘗ての主に縋るように懐に右手を伸ばして、剣と白い羽を広げたような形をした騎士の証を取り出した。

「僕を許してくれ」

羽の部分を持ち、その刃先を躊躇いなく自身の首元に突き刺す――。

「――どうしてー!」

目に赤い光を滲ませたスザクは、突き刺さんとした騎士証を持つ右手を押さえつけている左手を見下ろして絶望する。

「死んで詫びることも許してはくれないのか」

あの式根島でシユナイゼルにゼロを引き止める囿として諸共に殺されようとしたスザクは『生きる』というギアスをかけられた。

スザクにだってギアスの所為で死ねないと分かっている。決してユーフェミアが許さなかったわけではない。許す許さない以前に、死者が生者に干渉することなど出来ないのだから。

「……………フッフッフッフ」

騎士の証を落とし、込み上げる絶望に肩を震わせたスザクは決定的なところで心が壊れてしまった。

「アハハハハッ……………アツハハハハッハ———！！」

血涙を零しながら狂ったように笑い続けたスザクは、嘗て自身が幼い頃に起こした結果を思い出していた。

徹底抗戦を唱えた父親である枢木ゲンブをスザクは幼い衝動的な行動で殺した。しかし、これで戦争は終わると、無駄な血が流れることはもうないのだと信じて疑わなかった。

なのに、戦いは終わらなかった。ただ、スザクは人が人を殺めるということを止めたかっただけなのに。

「君は俺に生きろと言うのか、ルルーシユ」

ゲンブを殺した時のよう憎悪一時の感情に駆られた衝動的な行動で取り返しのつかない引き金を引いた。

ギアスは人の意志を捻じ曲げる卑劣な力だ。しかし、あの瞬間においてスザクはギアスの干渉下にはなかった。全ての結果はスザクが為したものだ。

「ナイトオブワンになると決めたのに甘かった。結果より手段と言いつながら、大事にしていたのは理想や美学だった」

もう手段を選ぶ理由はなくなった。そんなことは、もう許されなくなった。

「今度こそ終わらせよう、この戦争を」

ランスロットを回収する為に降りて来るアヴァロン。

その艦にいるであろう最も皇位に近いシユナイゼルを皇帝にする<sup>と決めた</sup>スザクの目は、ルルーシユにかけられた『生きろ』というギアスが赤く光り続けていた。



半壊した暁直参仕様を抱えた蜃気楼が斑鳩に帰還した。

ラダーに捕まって足をかけ、蜃気楼から下りて来るゼロの仮面をつけたルーシユに団員達が次々に集まってくる。

「ゼロー」

「トウキョウ租界が」

「——分かつている」

団員達が次々に言葉を発するのを、落ち着いているように見えるルーシユの静かな声が押し留める。

「斑鳩艦隊は星刻と代表達の騎士団本体と合流する。ナイトメアの各パイロット達は機体の映像データを抽出して藤堂に渡せ。藤堂は集めた映像データをデータハルトに」

「了解した」

蜃気楼よりも先に帰還していた斬月に乗っていた藤堂が重く頷く。

「ブリタニアは租界で重戦術級弾頭を撃った。被害は予想も出来ない……この非道を、決して許してはならない」

破損した機体から苦労しながら降りて来たC・C. が気遣わしげに寄り添って来るのを感じながらもルーシユの口は止まらない。

「そ、そうだよ。奴らは自分達が治める土地だって遠慮なく消し飛ばすような奴らなんだ……」

集まった団員達の中から一人が声を上げれば、次々と連鎖するようにブリタニア許すまじという声が続く。

「早ければ直ぐにでも戦端が開かれる可能性もある。各自、機体を万全にし、英気を養っておけ」

「「「「「了解!!」」」」」」

改造された所為で前回とはラダーの位置が変わっている紅蓮から遅れて紅月カレンが下りてきた時、団員達は戦意も高く動き出していた。

「カレン、良かったなあ!無事で!」

「ごめんなさい、心配かけて。ねえ、ゼロは?」

特務隊長の杉山賢人が部下に指示を出した後、出迎えてくれたがカレンは動き回る団員に紛れて見失ってしまったゼロの行方を尋ね

る。

「本隊と合流するまでに戦略を練り直すって言うてたから部屋に戻ったんじゃないか」

「ありがとう」

囚われていた時にナナリーに教えてもらった優しい兄としてのルルーシユの仮面と冷静冷徹なゼロの仮面。

どちらが本当かを確かめなかったが、政庁と共に恐らく死んだだろうナナリーのこともあってルルーシユの様子が心配になったカレンは足早にKMFデツキを出て行こうとした。

「カレン」

入り口から入って来たラクシャータ・チャウラーを見て足を止めた。

「ラクシャータさん、ゼロを見ませんでした？」

「さつき、そこですれ違ったわよ」

それなら直ぐに追いつけると判断したカレンは、礼を言って入れ違いにKMFデツキから出て行く。

「紅蓮のチェックが終わったら、アンタも検査受けなさいよ」

「分かりました！」

去り際に背中にかけられた声に返答をしながら廊下を進んでいき、曲がり角を曲がったところでC・C・に寄り添われたゼロが床に座り込んでいるのを見つけた。

「カレンか」

振り返ったC・C・が背後を振り返り、そこにいるのがカレンだと分かって少し安心したようだった。

「丁度良いところに来た。こいつを運ぶのを手伝え」

「は？ 怪我したんなら医務室に行った方が」

「怪我はしてない。ただ……」

精神的なものであるのだとC・C・が言いたいことを察したカレンは傷ましげに目を伏せた。

ルルーシユのシスコン振りを何度も見て来たカレンは、政庁と運命を共にしたであろうナナリーがどうなったかを考えれば寧ろ我を忘

れることなく撤退し、騎士団に走る動揺を沈めて冷静な指示を出せることの方が異常といふべきなのだと分かっている。

なんとか部屋に戻るまで気を張っていたが、誰も見ていないことに緊張の糸が解けて動けなくなったのだろう。

「ゼロの部屋に？」

「他に行ける場所もないだろう」

ルルーシュが仮面を外せる場所がゼロの私室以外にないことに、カレンは一抹の寂しさを覚えながらもC・C・の反対側の肩を担ぎ上げる。

「軽いわね」

ゼロの体はとても軽かった。カレンの身体能力が幾ら並外れてずば抜けているとしても、それでもルルーシュの体は魂が抜け落ちてしまったかのように軽い。

日本や、世界から寄せられる期待という名の課せられた重みとは裏腹に軽いルルーシュの体を抱えてゼロの私室に着いたカレンは決心を固めた。

「おい、カレン？」

ソファに座らせればいいのに何故か通り過ぎて寝室へと向かうことにC・C・は疑念を抱くが、今のルルーシュは横にした方が良さとも思ったので付き添う。

「仮面、取るわよ」

ルルーシュをダブルベットの端に座らせたカレンはゼロの仮面に手をかけたところで止まる。

「どうやって取るの？」

「はあ、私がやろう」

普通に持てば外れるものか分からなかったカレンが聞くと、C・C・は溜息を漏らしながら仮面を持ってスライドさせて外す。

「!？」

そうして外れた仮面の内側のルルーシュの生気の抜けた死人のような顔を見たカレンは息を呑んだ。

一度固めた決心が揺らぎそうになりながらも、震える手でルルー

シユの顔に手を伸ばして。

「ルルーシユ」

顔を上げさせて、自分の顔を寄せた。

「……………おいっ!？」

塞がれた唇によく現状を認識したルルーシユが離れたカレンに何かを言おうとして、肩を押されてベットに倒れ込む。

「前にアンタが言ったんじゃない。女だから出来る慰め方を」

パイロットスーツのチャックを外してバツと腕を順に抜いたカレンは自分が暴走していることを自覚しながら、ナナリーが総督になった時にゼロを止めて逃げ出そうとしたルルーシユが慰めるように求めたのを突っぱねて頬を張った。

あの時は戦う気を完全に無くしたルルーシユが逃げていたからそうした。

夢を見せた責任を果たせと、今度こそ完璧にゼロを演じきってみせろとカレンは言い、ルルーシユはその役割を果たしている——ナナリーを失っても。

ならば、カレンもまたゼロを引き止めた責任を果たさなければならぬ。

「C. C.、アンタも手伝いなさいよ!」

まさかの驚きの展開に目を丸くしているC. C. をキツと睨んだカレンは、これからする初めてのことにテンパって混乱し、顔を林檎のように真っ赤にしながら暴走したまま叫んだ。

「カレンを止める、C. C. !」

「私は魔女だ。正義の味方の言うことなど聞くはずがないだろ」

しっかりとカレンに抑えつけられているルルーシユがもがくが彼我的身体能力の差は大きいので抜け出せない。

ある意味では変わらない二人に、力を抜いて楽し気に笑ったC.

C. は自身もパイロットスーツのチャックを下ろしていく。

「お、おい……………!？」

「もう、黙りなさい」

「観念しておけ」

状況が理解できないルルーシユの悲鳴は部屋の外には決して漏れることはなかった。

## 第八話 皇位篡奪

損傷の大きい船体を修理する為にトウキョウ租界を離れたアヴァロンのKMFデッキで、四肢の大半を失ったランスロット・コンクエスターの様子を見に来たロイド・アスプルンドはフレイヤ弾頭を放ったランチャーが外されるのを芒洋とした目で見送る。

「結局、分かっていたいなかったんです、私。どんな被害が起きるかなんて、データ上でしか理解していなかった」

フレイヤの開発者であるニーナ・アインシュタインは自身の気持ちを吐露する。

科学者が陥りやすい考え方と言われればそれまででしかない。許可したシュナイゼルや撃ったスザクに責任転嫁出来ないほどに、フレイヤ弾頭が起こした被害は大きすぎた。

「ニーナ君、君は決めなくちゃいけない」

自身には決して理解できない心境になっているニーナに、それでも先達としてロイドは言わなければならなかった。

「科学を捨てて心を守るか、心を捨てて科学に殉じるか」

被害は天文学的な数字となっているだろう。一人の命さえ人間には背負いきれないのに、それが数百、数千万ともなればニーナがこれから歩む道は必然としてその二択になる。

「そんなこと………ロイド先生も選んだんですか？」

「僕は元から壊れてるからね。それくらい自覚はあるんだ」

ロイドは生まれた時から人間として壊れているのかもしれない。科学者としては倫理を無視してでも求める物を追求できても、やはり周りの者とは違うのだと壊れていると自覚していた。

容易には選べない選択にニーナが苦悩する中、一度KMFを離れたいた枢木スザクが戻って来た。

「ロイドさん、ランスロットはどうなっていますか？」

充血しているからか、赤く光っているような目のスザクの質問にラ

ンスロット・コンクエスターのチェックをしていたセシル・クルーミーが顔を上げた。

「どうって、コアルミナスがあの状態じゃ」

「いえ、ランスロット・アルビオンの方です」

平静状態に見えるスザクがアルビオンを求める理由に察しがついて、目を細めたロイドが「ロールアウト直前」と静かに言った。

「アルビオン？」

自機の修理状態を確かめに来たジノ・ヴァインベルグが歩み寄りながら聞く。

「ああ、枢木スザク専用に開発したナイトメアなんだけど………今の君には渡したくないね」

長い付き合いなのもあってスザクの変化が良い物ではないと判断したロイドに対し、スザクはずっと目に赤い光を灯しながら表情一つ変えずにニーナを見る。

「ニーナ、大成功だよ。フレイヤ弾頭の威力は絶大だ。結果的に我がブリタニアに勝利を齎すだろう」

「おい、スザク」

ジノはスザクとの付き合い自体はロイドに比べれば短くとも、騎士として明らかにショックを受けているニーナに対して言っているセリフではないと苦言を呈しようとした。

「ナイトオブセブンとして命令します。ランスロット・アルビオンにフレイヤを載せて下さい」

冷ややか過ぎる眼差しでジノを無視したスザクがロイドとニーナに命令を下す。

「ますます、嫌になったよ」

ただでさえ、戦術兵器であるランスロット・コンクエスターに戦略兵器であるフレイヤを載せるのを嫌がっていたロイドはスザクの命令に顔を顰めて嫌悪も露わにする。

「止めておけよ、スザク。らしくないだろ」

フレイヤを放った影響でスザクが錯乱していると判断したジノは拳を握った。

ギアスが常時発動し続けているスザクはジノが行動を起こそうとしているのを感じながらも揺らがない。もう揺らぐような余裕がスザクにはないのだから。

「どうやら慌ただしいところへ来てしまったようだね」

そこへ頭に包帯を巻いた副官のカノン・マルディーニを伴ったシュナイゼル・エル・ブリタニアが現れた。

「ああ、これは……」

「いいよ、そのままで」

セシルが皇族に対して礼をしようとしたところでシュナイゼルが止める。

「シュナイゼル殿下」

厳しい面持ちのスザクがゆっくりとシュナイゼルへと歩み寄る。

「ご報告したいことがあります——ゼロの正体について」

後一步のところで足を止めたスザクはいきなり核心を言い放った。

これにはシュナイゼルよりもジノやニーナ、ロイドやセシルの方が驚いている。

「君は、知っているのかい？」

「自分が以前のゼロを捕まえた功績で、ナイトオブブラウンズに選出されたことはご存知のはずです」

ピクリと眉を動かしたシュナイゼルの問いに、スザクは感情が消えてなくなったかのように話を続ける。

「皇帝陛下は奴のゼロとしての記憶を奪い、監視を付けたとはいえ元の生活に戻しました」

「……つまり、今のゼロは記憶を取り戻した同一人物であるという事かな」

「はい。どうやったかは分かりませんが監視を欺き、ゼロとして活動しているのでしょう」

いっそ非人間的とすら思えるほどに情緒が欠けたスザクに酷く興味を引かれたシュナイゼルは、仮面ではなく本物の笑みを浮かべながら口を開く。

「そうだとするならば、皇族殺しに加えて超合衆国という強敵を作り



上げたゼロを、皇帝陛下は見逃していたことになる」

まるで同族を見つけたかのようにシュナイゼルは高揚を覚えていた。

「それでゼロの正体とは？」

「……………皇帝陛下はゼロの身柄でナイトオブセブンの称号を与えて下さりました。自分が望むのはナイトオブワンの地位です。殿下は自分に何を与えて下さるのですか？」

ゼロの正体を明かす代わりに自分をナイトオブワンにしると、子供でも分かる要求をするスザクにセシルが顔を青くする。

「枢木卿!? それはあまりにも不敬な発言」

「ナイトオブワンの任命は、皇帝陛下にしか出来ないんだよ。つまり……………」

「では 成るとしよう皇帝に。そして枢木卿をナイトオブワンに指名する」

ジノが厳しい顔つきを浮かべてスザクを睨む中、セシルが止めようとし、ロイドも翻意させようとしたがシュナイゼルはあっさりと答えた。

「殿下、その発言は……………本気ですか？」

笑みを深めるシュナイゼルに、ジノの目は必要とあれば制圧すると語っていた。

「超合衆国決議第壱號が発令された後、陛下に通信を行った時に俗事と仰ったよ、黒の騎士団との戦争のことを」

「っ!? しかし、だからといって」

「それだけではない。父上は、危険な研究にのめりこみ度々玉座を離れた。そう、政治を、戦争をゲームとして扱ったんだよ」

シャルルが玉座を度々離れていることは、ブリタニア本国を離れたジノの耳にも届いている。そして危険な研究にのめり込んでいるのも恐らく嘘ではないのだろう。

反逆と取られかねない発言をシュナイゼルがするはずがないとジノは知っていたから。

「この世界に興味を失い、みんなが苦しんでいるのをただ眺めている

だけの男に王たる資格はない」

黒の騎士団、超合衆国は最早無視できる相手ではない。にも拘らず、俗事と切り捨てた男に皇帝たる資格はないと断じたシュナイゼルに、カノンはようやく主君が決断したことに喜びを抱きつつも、どこかズレを覚えていた。

「これって クーデター？」

「そんな」

幾ら皇位継承権第二位で、第一位の凡庸なオデュッセウス・ウ・ブリタニアよりも最も皇位に近いと目されていた男とはいえど、力尽くで皇位を奪おうというならクーデターである。

スザクがナイトオブラウンズに命じられて異動になったとはいえ、元は上司であるシュナイゼルが皇位を篡奪すると宣言したも同然の発言にロイドとセシルは顔を真っ青にする。

「陛下。ラウンズの自分なら、陛下に謁見が叶います。自分に、皇帝陛下暗殺をお命じください」

「スザク！」

暗殺という決定的な言葉に我慢が出来ずに飛び掛かって来たジノを、ギアスの力の付与もあって瞬く間に制圧したスザクにシュナイゼルは笑った。

「いいや、フレイヤがあるんだ。真っ向から玉座を奪いに行こうじゃないか」

「イエス・ユア・マジエステイ」

ジノを気絶させたスザクはシュナイゼルの命令に唯々諾々と従う。

「さて、では教えてもらおうか、ゼロの正体を」

跪いて新たに皇帝となる男に忠誠を示していたスザクが顔を上げる。

「ゼロは殿下も知る者です」

「ほう」

これは裏切りだろうかとスザクは考えた。

しかし、裏切っているのはお互い様だと、赤い光が奔る目を伏せてスザクは考えることを止めた。

「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア、殿下の弟君です」

既知の名に、場に入れなかったニーナは目を見開いた。



ルルーシユは見慣れた斑鳩にある自室の見慣れた天井を見上げ続ける。

「おい、ルルーシユ。隣にこんな極上の美女がいるのに何を天井を見ている」

「ちよつと、なんで自分だけアピールしてるのよ、C.C.」

もう少し逃避していたかったルルーシユは左のC.C.、右の紅月カレンから声をかけられては現実を直視せざるをえない。

「なんで、こうなった……」

女の感情を理解できないルルーシユは、それでも現実を受け入れ難くて右腕で目を覆おうと動かそうとした。

すると、腕に抱き付いていたカレンの体が布団から出て来てルルーシユの視界を肌一色に染める。

柔らかかそうだと思ったルルーシユは、実際に柔らかかったことをこの手で触って確認したことを思い出して固まった。

「もう動かないでよ………恥ずかしいじゃない」

「すまん」

謝ってベッド上で直立不動に戻るルルーシユ。その頬はカレンに

負けず劣らず真っ赤であった。

「今更、裸程度で恥ずかしがるような仲でもないだろうに」

やることをやっというて恥ずかしがる二人を笑ったC・C。はルルーシユの腕に強く抱き付き、裸の胸を押し付けて反応する様を見て楽しんでいた。

「変なことを言うな」

「そうだな。もう坊やとも呼べないことだし」

こっちは大人になったからな、とルルーシユの太腿辺りを膝で痛くない程度に軽く蹴ったC・C。は悪戯気に笑う。

「下品よ」

と言いつつも、ルルーシユを挟んで反対側にいるカレンは布団の動きの感覚からC・C。が何を言いたいかを理解してしまった様子だった。

「俺で遊んでないか？」

「ピロートークというやつだ。それでどんな気分だ？ 女二人を手籠めにした感想は」

「どちらかという俺が手籠めにされたような気がするんだが……」

その主犯であるカレンは自分が仕出かしてしまったことが今更ながらに恥ずかしくなってしまうようで、迫った時よりも顔を真っ赤にしながらルルーシユの肩に顔を伏せる。

普段の凛々しい姿とのギャップに可愛いと思ってしまったルルーシユだった。

「男の夢だろ？ こうやって極上の美女と女を侍らせるなんてまたもないぞ」

「だから、その極上の美女って私？ アンタ？」

看過しえない問題に顔を上げたカレンの問いにC・C。は楽し気に笑うだけで答ええない。

「二人には感謝してる」

おちおち気落ちもさせてくれない二人に精神的に力を抜くルルーシユは感謝を述べた。

「感謝だけか？」

「他にどうしろと言うんだ」

「というか、やることをやっている間は時間感覚が無かったので今が何時なのかが分からない。騎士団達にはある程度の指示は出しているが、戦略を立て直すと言って部屋に戻った以上は指針だけでも決めておかなければならない。」

「ゼロの真贋は中身ではなく、その行動によって測られるんだろ。感謝も言葉だけではなく行動で示せ！」

ルルーシュが思考の渦に沈もうとしたところでC・C・が腹の上に乗ってくる。

「お、おいつ!?!」

当然、そんなことをすれば布団が捲れ上がってルルーシュの視界の中心にC・C・の裸身が現れる。

「最初は発案者のカレンに譲ってやったんだ。第二ラウンドは私からに決まっているだろ………おや、お前もやる気じゃないか」

健康的な十代後半の生理現象に正直に反応してしまったルルーシュは穴があつたら入りたい気分である。

「これから私に入れるだろ?」

「心を読むな、魔女め」

「顔に考えが出ているぞ」

ハツと顔を抑えようとする、やはり腕に抱き付いたままのカレンの体も一緒に動き、ムニユリと形を変える何かにルルーシュの膨張率が高くなる。

「性欲の有り余る年頃なんだから我慢は毒だぞ」

「ぬぐう……」

旗色が悪くて顔を横に逸らせば、ルルーシュに負けず劣らずに顔を真っ赤にしているカレンの顔があつて目が合ってしまった。

「カレンは私の次な」

C・C・に言われたカレンはプシューと耳から蒸気を噴出したかのように気持ちでルルーシュの肩に顔を埋める。

ルルーシュの匂いを嗅いでいたりするのはカレンの秘密である。C・C・が布団を捲り上げた所為でカレンのほぼ全身がルルーシュ

に見えているのにも気づいていないだろうが。

C・C・Cにカレンが対抗意識を燃やし、カレンにC・C・Cが対抗意識を燃やし、どれだけ時間が経ったのか分からなくなった頃。

太陽が見えれば白くなったり二個に見えたりすること間違いなしであろうルルーシユは通信に反応する。

「通信だ！」

何か大切な物を失ってしまったような、逆に満たされているような不思議な気持ちだったルルーシユは人の腕を持ったまま眠ってしまった二人を振り解いて通信画面に飛びつこうとする。

「ルルーシユ、仮面」

「……………すまん」

「その格好で出る気か？」

寝ぼけ眼のカレンが投げた仮面を受け取り、C・C・Cの突っ込みに自身の状態に気づくも通信は鳴り続けている。

「ええい！」

しっかりと仮面を着用してルルーシユは通信に出た。

「どうした、扇？」

『……………いや、こちらがそんなに画面に近づいてどうしたと聞きたいんだが』

重大事項を伝える通信ならば服を着ている時間も惜しい。

そのまま通信に出るしかなかったルルーシユは仮面以外を身に付けていない。一応、寝室は通信には映らない場所にあるのだが、ルルーシユの現在の姿もあってそんな状態を通信に映すわけにはいかず、苦肉の策として画面一杯に仮面が映るようにするしかなかったのだ。

「気にするな。私は気にしない」

『はあ』

ここは強硬に乗り切るしかないと論理的ではない屁理屈で言い切ると、画面の扇は理解は出来ないようだが納得することにしたらし

い。

「で、用件はなんだ？ 悪いがまだ戦略は固まっていけないぞ」

『そうなのか？ もう昼前だからゼロなら出来てると思ったいたんだけど』

「……………俺も人間だ。休む時間も必要になる。すまないが、少し休ませてもらっていた」

本当に休んでいたかは主観に寄るところが大きいが、夜も明けて半日経っていると聞いて眠い理由が分かったルルーシュは寢室を向きそうになったのを必死に自制する。

「用件がないのなら切るぞ」

下世話な意味でなく一晩中運動していたような物なので、改めて自覚すると精神的に肉体的にも疲れを自覚してしまったルルーシュは、本当にひとまず休もうと決めた。

『い、いや、すまない。用件はあるんだ』

扇はカレンの兄の親友と聞いているので後ろめたい気持ちもあり、早く通信を切りたいルルーシュは「なんだ？」と先を促した。

『驚かないで聞いてくれ、ゼロ』

「いいから早く言え。シュナイゼルが皇位篡奪を目論んだぐらいじゃないと俺は驚かんぞ」

『どうして知ってるんだ!?!』

早く通信を切りたいルルーシュがスイッチに手を伸ばしたところでピタリと止まる。

『シュナイゼルがクーデターを起こすと宣言したんだ!』

「はあっ?!」

ルルーシュが激動の半日を過ごしている間に世界の動きも加速していた。



クーデターを起こし、皇位を篡奪すると決めたシュナイゼルの行動は迅速だった。

「フレイヤの映像が流れている？ そのまま流しておいて構わないよ。その方が良い宣伝になるだろう」

デイトハルトが主に行っているブリタニアに対するネガティブキャンペーンを寧ろ助かると笑みを浮かべながら言う。

「アヴァロンの修理に時間がかかるって？ じゃあ、他の船で行こうか」

損傷著しい旗艦のアヴァロンが使えないと分かれば何の躊躇もなく他の艦に乗り換えることを決める。

「ランスロット・アルビオンの最終調整はアヴァロンの施設が無いと難しいから行かないって？ 施設をこっちに動かせば大丈夫だね。人は出させるし、君達なら出来ると信じているよ」

クーデターに涉るロイドとセシルはそんなに簡単に施設を動かせないと言ってもシュナイゼルの笑みを崩せない。

否と言わせない雰囲気シュナイゼルと近くに銃を構えた兵を用意していた副官カノンを前にして、ロイドとセシルは拒否権がないのだと思い知らされた。

「ジノ？ あの様子では仲間にはなってくれないだろうし、殺すのは流石に不憫だ。どこかの基地の牢にでも入れておこうか。これからすることの邪魔さえしなければ、それでいい。その後、敵となるか味方になるかは彼次第だ」

ナイトオブブラウنزのジノですら今のシュナイゼルには重要ではないのだろう。

ブリタニアが誇る絶対の剣に大した感慨も抱くことなく、スザクに



倒された後は薬によって眠らされたまま別の基地へと移送されて行った。

「ニーナは一緒に行かないって？ 彼女はフレイヤを開発してくれた功労者だ。十分な褒賞を渡さないとね」

エリアー1を治めることに意味を失くしたシュナイゼルは、そうして呆気なくブリタニア本国を目指した。

『第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアは皇帝の器に非ず。よつて、次の皇帝にはシュナイゼル・エル・ブリタニアが成る。皇位継承の準備をせよ』

向かっている途中でシュナイゼルはブリタニアに向け、そして世界中にも同様の内容の通信を送った。

「殿下、帝都ペンドラゴンよりナイトオブブラウングが！ ナイトオブワンを先頭にこちらに向かっています!!」

事態を呑み込める時間を与える為に一日をかけ、ゆっくりとブリタニアへと向かっていたログレス級浮遊航空艦でその報告を受けたシュナイゼルは笑みを浮かべていた。

「ブラウングの機体は確認出来ただけでも四機はいます。また、その直属部隊までが」

「ビスマルク、ドロテア、モニカ、ルキアーノの四人か。どうやらノネットはエリアー1に残ったようだね」

艦長席を玉座のように座るシュナイゼルの目が機体照合の結果を見て、あまりに予想通り過ぎて面白みにかけているようだった。

「マリーベル皇女殿下とグリンダ騎士団と共に行動しているのでしよう」

「心情としてはビスマルクに付きたいだろうが、テロを憎んでいるマリーベルがゼロを放ってエリアー1を離れられるはずがない。グリンダ騎士団を指揮下に入れていいるノネットとしては忸怩たるものがあるだろうね」

カノンの言葉に感情に振り回される者達を今は理解できるシュナイゼルは喜劇を眺めているように笑みを浮かべる。

「対してこちらのブラウングは枢木卿、ただ一人。数の上では圧倒的に

不利です」

ナイトオブブラウンズの数の上では四対一。シュナイゼル旗下の部隊が幾らかはいるが、先のトウキョウ決戦で大半が落ち、残った機体もどこかしら損傷していて修理はしているがまともに戦える機体は数える程度だろう。

反対にドロテアとモニカの隊は万全で、カゴシマ租界で星刻らと戦ったビスマルクとルキアアノの隊も数は減っているがシュナイゼルらとは比べ物にならない。

「良かったのですか、アールストレイム卿を引き止めなくて」

「コーネリアが齎してくれた資料から予測すれば、彼女が望む物を提示するのは簡単だ。だが、必ず必要というわけでもない」

シュナイゼルは仲間を募ることに積極的ではなかった。

生身では同じナイトオブブラウンズを圧倒したスザクと、ランスロット・アルビオンという第九世代のナイトメアフレームがある以上、直ぐに必要ではなかったからジノに対する扱いを見たアーニヤが同行を拒否しようとも放っておいた。

「我らはシャルル陛下に忠誠を誓った存在！ 逆賊シュナイゼルを討つ！」

ナイトオブブラウンズでシャルルの計画を知るビスマルクがギヤラハッドのkokopittoで吠える。

「ん、迎撃部隊？ しかしたった1機で……」

「ビスマルク卿、自分が相手をしよう」

「この声、そしてランスロットの意匠……… 枢木スザクか！」

ギヤラハッドにログレス級浮遊航空艦から発進したランスロット・アルビオンから通信が入り、ビスマルクはナイトオブブラウンズがクレーターに参加している姿を見て過去を思い出していた。

マリアンヌがまだナイトオブブラウンズだった血の紋章事件を。

「ナイトオブブラウンズに取り立てて下さった皇帝陛下を裏切るか。やはり貴様は主君を裏切り続ける男だったな！」

「かもしれません」

シュナイゼルの片棒を担ぎ、その計画を聞いても心が揺らぐことの

無かった今のスザクはユーフェミアにも顔向けできないことをしようとしている。

父を裏切り、祖国を裏切り、ユーフェミアを裏切り、ルルーシュを裏切り、ナナリーを裏切り、そして全てを裏切る。

これが自分に与えられた業カルマなのだ、『生きろ』というギアスが常時発動し続けている尋常ではない精神でスザクは受け入れた。

「降伏して下さい、ビスマルク卿。自分が乗るランスロット・アルビオンは第九世代ナイトメア。第八世代のギヤラハッドに勝ち目はありません」

トウキョウ決戦で紅蓮聖天八極式の圧倒的なマシンポテンシャルの差に敗れ去ったスザクだからこそ、今のランスロット・アルビオンと自分の前では第八世代のギヤラハッドに乗る帝国最強を前にしても全く脅威を感じなかった。

「ナイトオブワンとは帝国最強の証！ 貴様如きに敗れる道理はない！ 皆の者、決して手を出さないぞ！」

一対一の尋常の勝負を挑んだギヤラハッドに遅れて動き出したランスロット・アルビオンのエナジーウィングが輝く。

「なっ!?!」

ビスマルクは微塵も油断していなかった。

しかし、気づいた時にはランスロット・アルビオンとすれ違っており、シャルルが直々に命名した剛剣エクスカリバーの刀身が折られていた。

「枢木スザク、言うだけの力はあることは認めよう。しかし」

ランスロット・アルビオンの機体性能を目の当たりにしたビスマルクは目の封印を外してギアスを発動する。

「我がギアスは未来を読むギアス！ この力をマリアンヌ様以外に使うことになろうとはなっ!?!」

しかし、発動させたギアスでも真正面から向かって来たランスロット・アルビオンの軌道を捉えることは叶わず、メーザーバイブレーションソードによって残ったエクスカリバーの刀身ごとギヤラハッドを真っ二つにされた。

「うっ、マリアンヌ……様あっ!!」

ギアラハツドの爆発と共に一部も残さずに消え去ったナイトオブワンに興味を失ったスザクは、ランスロット・アルビオンを操作してフレイヤが搭載されたランチャーを構えさせる。

「撃ちますか、シユナイゼル殿下」

「ああ、撃つてくれ」

通信先である主君のシユナイゼルに最後の許可を貰い、ビスマルクの圧倒的なまでの敗北に動揺している他のナイトオブブラウンズやブリタニアの軍から離れた直上の空に狙いを定める。

トウキョウ決戦でランスロットからフレイヤが放たれたのは黒の騎士団の宣伝によって、ナイトオブブラウンズやブリタニア軍の知るところとなっている。

「――フレイヤ、発射」

少しでも被害から逃れようと高度を下げるナイトメアを無感動に見ながら、自身の命運を決めた女神の名を冠する重戦術級弾頭を何の躊躇いも無く撃った。

放たれたフレイヤ弾頭はペンドラゴン上空の雲へと飛んで行き、その姿を隠したところで太陽が突如として現れたかのような閃光が帝都を照らし出した。

光自体はそう長い時間、発し続けられたわけではない。

「素晴らしい。リミッターを外したフレイヤならば、帝都ペンドラゴンすらも跡形も無く消し飛ばすことが出来るだろう」

ペンドラゴンにいる者達は帝都を覆い隠してあまりある広さの雲を吹き飛ばしたのを見上げればフレイヤの恐ろしさを知るだろう。

「ブリタニアに通告を。十分以内に私の即位を認めないならば、次はペンドラゴンにフレイヤを撃ち込むと」

通告という名の脅しを受けたブリタニア側は、皇帝シャルルの不在も相まってシユナイゼルの前に膝をつくことしか出来なかった。

シユナイゼルがブリタニアを我が物とした、その数時間後。

政庁を失ってブリタニア本国すらもシュナイゼルの手に落ちて混乱するエリアーは、電撃的に行動を開始したゼロ率いる黒の騎士団に一部の僅かな抵抗しか出来ずに日本は解放された。

そして数日後、第九十九代皇帝となったシュナイゼルは即位式にて全世界に向けてテレビ放送を行った。

『私は前皇帝シャルルと違い、世界征服に興味はないし、エリア政策も必要とは思っていない』

間違いない世界を動かす一人となったシュナイゼルは穏やかに笑って言った。

『その手始めとして過去の柵しがらみを捨てて超合衆国・黒の騎士団と手を携えたい。その為には武器ではなく話し合いの場が必要だろう』

テレビ放送を見ている者は、これであろうやく解放される、戦争が終わると喜んだ。

『今まで征服して来た側のブリタニアの皇帝である私の言うことなど信じられぬという者も多いと思う。それほどに私達の間には大きな溝がある』

シュナイゼルを信用など出来るものかと叫ぶ者がいる。

そんな者達を慈しむような目で、手の平で踊る小さき者達を無感情な目で見つめるシュナイゼルの本当を看破しているのはたった一人だけ。

『私の誠意を示す意味を込めて、会談の場所は黒の騎士団が解放した嘗てのエリアーである日本のアッシュフォード学園を指定しよう』

その学園の名前を出された時、日本の臨時政府の政庁となった建物でテレビを見ていたルルーシュは目を見開いた。

『会談にはブリタニア側からは私一人で臨む。超合衆国にも黒の騎士団CEOであるゼロに出てもらいたい』

世界は否応も無く、次のステージへと舞台を進める。

## 第九話 『自分』

第二次トウキョウ決戦が行われている最中、第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアは直属の部下と子飼いのギアス嚮団員と共に座乗艦であるグレートブリタニアで神根島に降り立っていた。

フレイヤの発射によってトウキョウ租界が消滅し、シュナイゼル・エル・ブリタニアが勝手にエリアーを離れてクーデターを起こそうとシャルルは俗事の一言で片づけていた。

「シュナイゼルめ、このタイミングで皇位篡奪とは、まさか気づきおつたか？」

グレートブリタニアのブリッジにある皇帝専用の椅子を玉座のように座りながら、テレビ放送で流されている即位式でのシュナイゼルの姿を見てシャルルは微かな危機感を覚えていた。

「いや、あ奴はギアスのことを知らん。仮に気づいたとしても、全てを知る頃には手遅れとなっている」

シャルルが何かをしていることは察しているだろう。しかし、何をしているのかまでは分からないはず。

故にシュナイゼルの牙は決してシャルルに届くことはない。

勝利するのは自分だと確信しているシャルルは改めてモニター画面に映るシュナイゼルを見る。

「子供のようにはしゃぎおつて。仮面を被ることも忘れたか」

ブリタニアの者達はシュナイゼルが第二皇子、宰相としての仮面を被った姿しか知らないから気が触れたかと驚愕するだろうが、シャルルにはただ子供が初めて手にしたオモチャに浮かれて遊んでいるようにしか見えなかった。

「遅すぎた目覚めだったな、シュナイゼル。ゼロと遊んでいるがいい」  
今更、『自分』を獲得しようとして逆に振り回されるだけだろう。理解すれば予測も容易い。

以前のシュナイゼルならば皇帝になった段階でシャルルを確実に

排除する。しかし今のシュナイゼルは生まれた自分の欲求に抗えない――小さな子供のように。

「後少しあれば儀式を始められる。戦争という名のゲームはおしまいよ」

ゼロを擁する黒の騎士団の猛攻を受けて、エリアー1改めて日本に戻った神根島にいるシャルルにシュナイゼルが手を出すことは難しい。

敵対国である合衆国・日本に対して再び戦争を仕掛けるようなもので、仮に戦鬪のどさくさに紛れてシャルルを狙うにしても確実性は低いし後回しにするだろう。ゼロ＝ルルーシュにしても今は内政に力を入れなければならない時期だから、神根島にシャルルがいることに気付く頃には全てが終わっているだろう。

「陛下、嚮主V・V. が残した資料によると、やはりこのポイントで儀式を行うのが最適です。ですが」

「やはりC・C. のコードが無ければ完全な接続は出来んか」

「はい、陛下のコードだけではラグナレクの接続だけを行うことは可能ですが、その場合は酷く不安定になると予測されます」

卿主であったV・V. ではなくシャルルの子飼いだであるギアス嚮団員の報告を受け、シャルルは数秒だけ思考の渦に沈む。

「C・C. の行方は分かっているが、こちらからは手を出せん。いつぞ接続してしまえば、奴も協力しよう」

シャルルはC・C. が死にたがっていることを知っている。だからこそ、自分達の前から姿を消した事、未だに姿を見せぬことに疑念を覚えつつも、最終的な協力はするだろうと確信している。

「儀式は何時になったら始められる?」

「調整が必要になりますので、一週間と少しの時間を頂ければと」

シュナイゼルが恐怖によってブリタニアを支配して即位し、ゼロに会談を申し込んだのをテレビ放送で見ていたシャルルは計算する。

「あ奴らに協力されると厄介だが、決裂すれば丁度良い頃合いか」

伊達に世界に覇を唱えるほどにブリタニアを強大な国にした皇帝ではない。ルルーシュやシュナイゼルに負けず劣らずの頭脳を駆使

して弾き出した目算にシャルルは笑みを浮かべた。

「良い。そのまま進めろ」

「はっ」

シャルルにとって一番厄介なシナリオはゼロがシュナイゼルと手を取り合つて敵となることだが、これはないと予測している。

(そんなことをすればゼロは超合衆国を追放されるだろう)

幾ら皇帝が代替わりしようとも、シュナイゼルはE・U・を切り崩した張本人。中華連邦にも手を伸ばしていたことを考えれば手を組むという考えを放棄せざるをえないだろう。

「アーカーシャの剣の起動実験を行います」

ギアス嚮団員の報告後も特に変化は見受けられない。

「起動、成功しました」

変化があるのは神根島にある黄昏の間なのだからシャルルは無事に成功したことを喜ぶ。

「ふっ、こんな古の装置を使うことになるとはなあ」

ブリタニアを乗っ取つたシュナイゼルの所為で最新の装置がある中華連邦の領土内にある嚮団本部が使えない以上、調整の為に来ただけの神根島で儀式を行わなければならなくなった。

「ラグナレクの接続が成れば古い世界は破壊され、新しい世界が創造される！ 賢しき者共よ、愚か者達よ、それまで戦争のゲームに踊っているがいい!!」

シャルルは悲願の達成を前にして、高揚するままに全てを嘲笑つた。

シュナイゼルに協力せず、解放された日本に置き去りにされたアーニヤ・アールストレイムは虜囚の身となっていた。

とはいえ、手錠をされて牢屋に入るなどではなく、高級なホテルの一室に軟禁状態にある。

「シュナイゼル殿下、今は陛下か……………と戦う戦力として期待されているのだからけど」



「俺達は敵だろうに」

同じ部屋で軟禁されているジノ・ヴァインベルグは豪華なインテリアに特に感銘も受けた様子も無く、一般人では一生かかっても買えそうにないソファに力なく凭れかかっている。

在日ブリタニアの基地の牢で目覚めたが、それはもう暴れたらしいとはアーニヤも後で聞いたジノは今は反動で無気力状態になっている。

「アーニヤはどう感じた、ゼロを」

「どう、とは？」

「仮にも敵だろ、俺達。にも関わらず、俺達を味方に引き込みたい思惑ってやつだよ」

黒の騎士団というよりはゼロの思惑として、ナイトオブブラウンズであつたアーニヤとジノという戦力を有効に活用したいという思いがあるのかもしれない。

「敵の敵は味方とか」

「そうか？」

その辺り、特に興味も無いアーニヤとしては一般論を述べたつもりだがジノは不服そうだった。

「確かに俺達は皇位を篡奪したシュナイゼルとスザクを認める気は無い。だけど、だからといってゼロの味方じゃないだろ」

アーニヤはともかくとして、ジノは生粋の貴族で騎士だ。

シュナイゼルとスザクと戦う気は十分にあるが、ジノは自分がブリタニアの人間であることに疑問の余地はない。

「当面の敵はシュナイゼルだから」

「その為に俺達も利用しようってか？」

「多分」

それこそ敵の敵は味方ということなのだろう。共通の敵であるシュナイゼルと戦う間は共闘できると。

「……………決めた。ゼロに協力するよ」

暫しの黙考の後、ジノが事実上ブリタニアと戦うに等しいその言葉にアーニヤは僅かに目を見開いた。

「いいの？」

「今ならさ、カレンの気持ち分かる気がする」

生粋の貴族であり騎士であるジノが祖国と戦う決断をした背景には、トウキョウ決戦でカレンがシュタットフェルトではなく紅月を選んだのを理解してしまったから。

「あの時点ではまだブリタニアが有利だった。イレブン………今は日本人か、を選ぶよりもシュタットフェルトを選んでいた方がずっと良い生活が送れたはずだ」

仮定に意味はないけれども、カレンはそんなことを理由に名前を選んだのではなく魂に従って日本人であることを選んだ。

「俺はジノ・ヴァインベルグとして、そしてブリタニア人として今のブリタニアは受け入れられない」

恐怖で人を従わせるシュナイゼルを認められないとジノは戦う決意を固めた。

「う………」

ジノが決意を固める最中、ジノの後ろの椅子に座っていたアーニヤは頭を抑えて苦し気な声を上げた。

「どうかしたか、アーニヤ？」

「なんでもない」

しかし、ジノが振り返った時にはアーニヤは平静そのもので、今まで弄っていた携帯電話を机の上に置く。

「しかし、恐怖で支配出来るのは一時的だろうに、本当にシュナイゼルは何を考えているのかね………」

数日後には会談場所に指定したアツシユフォード学園にやってくるシュナイゼルの思惑を推測しているジノの後ろで、アーニヤもシュナイゼルが映るテレビ画面を見る。

「……………そう。始めるつもりなのね、シャルル」

決して常のアーニヤが浮かべることのない、ニヤリと楽し気に笑うその内面は別人のものだった。



トウキョウ租界の消滅に伴って出来たクレーターに落ちないように外円部にはフェンスが張り巡らされ、アツシュフォード学園の敷地との間は十メートルほどしかない。

神聖ブリタニア帝国の第九十九代皇帝に就任したシュナイゼルト、超合衆国の発起人にして黒の騎士団の創設者兼CEOのゼロ。

確実に今後の世界の行方を左右する二人の会談に、アツシュフォード学園には多くの人々が押し寄せていて黒の騎士団が厳戒態勢で警備に臨んでいた。

「こちらがブリタニア皇帝シュナイゼル陛下が指定されたアツシュフォード学園です」

奇しくも嘗ての学園に取材に訪れることになったミレイ・アツシュフォードがテレビを通して語り掛ける。

「本日ここで、黒の騎士団CEOであるゼロとの会談が——ブリタニアの皇帝専用機が見えました！」

人の身長以上のブロックを置くことで物理的に入り口が封鎖されているアツシュフォード学園の上空にブリタニア皇帝専用機が現れた。

「なあ、あれにブリタニアの皇帝が乗ってるんだろ。撃ち落としたり駄目なのか？」

「駄目に決まってるだろ」

国際常識を無視した発言をする玉城真一郎の腹に肘を叩き込んだ杉山賢人は呆れ顔を浮かべる。

万が一を考えて斑鳩で待機している扇要と南佳高らを除けば、黒の騎士団の主要メンバーの殆どがアツシユフォード学園に集まっている。警備の責任者を命じられた杉山も玉城の気持ちも分からないでもなく降りて来る皇帝専用機を見上げる。

「外交ルートを通して正式に申し込んできてる会谈だ。下手な行動、言動が開戦の理由になる。警備に専念しといた方が良い」

迂闊な一言だけでも多くの人が死ぬ戦争に発展するとなれば、一挙手一投足すら気を使わなければならない。

警備責任者として下手なことになれば物理的に首が飛びかねない立場にいる杉山が、玉城だけでなく周りにも聞こえるように少し大きめに言ったのはそれが理由だった。

「俺、口際んどくわ……」

一番迂闊な行動に出やすい玉城が自粛してくれるならば杉山も安心である。

「しかし、敵地のど真ん中に皇帝が自ら乗り込んでくるなんて」

護衛のナイトメアも無く、皇帝専用機から真っ先に降りて来た第十九代皇帝シユナイゼルの姿はテレビで見た時と何ら変わらない。

そのシユナイゼルに予定通りに近づく黒の騎士団の制服を着た者。

「黒の騎士団所属の紅月カレンです。会谈場所には私が案内させていただきます」

「お願いするよ」

皇帝らしく鷹揚に頷いたシユナイゼルにカレンは感情を抑え込みながら、その目だけは敵を見るものだった。

「お付きの方は別室となりますが、よろしいでしょうか？」

次いで皇帝専用機から遅れて来たカノン・マルディーニを見据えている間に、カレンの後ろに朝比奈省吾とその部下達がやってくる。

「ああ、カノン」

「こちらへ」

シユナイゼルが頷いた後、朝比奈が先導してカノン達随行員が別室へと案内されていく。

そしてカレンも会谈場所に案内する為に先に立って歩き、後ろに

シュナイゼルが付いて来るのを感じながら進む。

「ところで、ゼロは壮健かな」

「……………どういうことでしょうか？」

学園内に入ったところで唐突にシュナイゼルが発した問いの意味が理解できずにカレンは聞き返してしまった。

「我が軍が放ったフレイヤによるトウキョウ租界の消滅の一番近くにいたんだ。気にして体調を崩しているならフルーツでも送らなければと思っただけ」

どこの口で、とカレンは咄嗟に言いそうになったのを強い意志で自制する。

そして直ぐに疑問を覚えた。

(どうしてゼロが気にしていると考えたの?)

言っただけだがトウキョウ租界で暮らしていたのはブリタニア人が多い。日本人とされているゼロが博愛主義でないことは良く知られているので、シュナイゼルの言葉は些か不自然だった。

「それはブリタニアの非を認めるという意味でよろしいのでしょうか」

情報が足りないので、歩きながら揺さぶりの問いを放つ。

「ゼロのことを心配しているんだ」

非を認める気は更々ないようで眉をピクリと上げたカレンは、やはりゼロに関心を寄せているシュナイゼルの狙いが読めない。

「特に何も問題はありません」

としか、自分自身でも頭が良いとは思えないカレンはそう言うことしか出来なかった。

「——————ナナリーが巻き込まれたのに、ゼロに問題が起こっていないのならそれでいい」

シュナイゼルが何を気にしているのかを理解したカレンが振り向きかけたところで、到着していた会談場所選ばれた生徒会室の扉が内側から開かれてゼロが姿を見せた。

「ようこそ、シュナイゼル陛下」

「こちらこそよろしく頼むよ、ゼロ」

結局、カレンはシュナイゼルが何を掴んでいるのかをゼロに伝えることも出来ないまま、無情にも目の前で部屋の扉が締められる。

「C・C・ー!」

何も出来ないままは嫌だったカレンは同志であるC・C・に助けを求めるべく、彼女がいるというクラブハウスに向かって走り出した。

カレンが学園内を爆走している頃、短い間ではあったが暮らしたクラブハウスのルルーシュが使っていた私室のベッドに寝ころんでいたC・C・は、一人になる瞬間を待って遂に現れた者を出迎える為に体を起こした。

「直接、会うなんて久しぶりね、C・C・」

まだ高級ホテルの一室に軟禁されているはずのアーニヤが部屋の入り口に立ち、決して彼女が浮かべることのない表情をしていた。

「また他人の体を勝手に使っているのか————マリアンヌ」

違う名前で呼ばれようとも、そちらが真名であるかのように笑みを浮かべたアーニヤはニヤリと笑った。

「仕方ないじゃない。魂だけの私はこの子の体を使わなければ、表立って動くことも出来ないんだから」

「二応、他のナイトオブブラウンズと軟禁中だろ。確かジノとかいった奴と」

「こう、首をキュツとやって気絶させてきたわ。肉体鍛錬が足りてないんじゃない?」

私の頃よりも質が落ちてるわ、と同じナイトオブブラウンズを大した抵抗もさせずに気絶させ、見張りの騎士団員も寄せ付けずに辿り着いたであろう人物を前にしてC・C・は恐れるでもなく呆れた表情を

浮かべる。

「こんなところまでやってきて、そんなにルルーシユが心配か」

「あら、私がそんなに理想的な母親だと思っていたの？」

アーニヤの裡に潜む別人物の魂——ルルーシユとナナリーの母にして、前皇帝シャルルの后妃であるマリアンヌ・ヴィ・ブリタニアは悪戯気に笑った。

「思っていないが、ならどうしてここに？」

ルルーシユのベッドに座りながらマリアンヌと決して目を合わせることせず、C・C・は寧ろ無感動に訊ねる。

元よりつつけどんな対応をすることの多いC・C・の珍しくない態度を気にしないマリアンヌは腰に手を当てた。

「あなたが今でも私たちの味方なのか知りたくって」

「なにが言いたい」

二人の間にあつたのは、離れていた時間に等しい溝だった。

「C・C・、私達から離れたのは何故？」

ルルーシユが生まれる以前に彼女らは出会い、同じ目的を胸に抱いた者同士だったはずなのに、マリアンヌの肉体が殺されたアリエス宮の悲劇を切っ掛けにC・C・は姿を消した。

「シャルルなら、あなたの願いを、死にたいという思いを叶えてくれたのに」

マリアンヌは思い違いをしている。C・C・は彼らの理想に共感したわけではなかった。結果的に死ぬるならなんでも良かったのだから。

「マリアンヌ、どうしてV・V・はお前を襲ったのだと思う？」

どれだけ親しくなろうとも、幾らマリアンヌに振り回されようとも、V・V・とコードについて語ろうとも、シャルルのルルーシユ達に対する不器用過ぎる愛情を向ける姿を見ようとも。

「さあ？ 私がいるとシャルルが変わってしまうとか言ってたけど」

C・C・は外様だった。志が同じなはずの彼らのことを外から見ているからこそ分かることがあった。

「そうだな。アイツは馬鹿だよ」

きつと、元より『自分』しかないマリアンヌには理解出来ないことだろう。変化に取り残される怖さも、変わることが出来ない自分に対する絶望も。本人も自覚していなかったV・Vの秘めた想いも、きつと知りもしない。

「報いは受けたわ。一度は見逃してあげたのに、またルルーシユに刺客を向けたんだもの」

マリアンヌをその手にかけてV・Vはその死に関わっていないと恍けた。嘘の無い世界を共に誓ったシャルルに。

一度は許そう。肉体は死んだとはいえ、肉体の死を切っ掛けとして人の心を渡るギアスに目覚めたマリアンヌの精神はアーニヤの中で生きている。だが、二度目はなかった。

「だから、シャルルはV・Vのコードを奪った」

それは愛故の行動なのだろうかとC・Cは思った。

裏切ったと言うにはC・CはV・Vの気持ち理解できてしまったから。

「後はC・Cのコードさえあれば完全なラグナレクの接続が出来る。今は私にもシャルルがどこにいるのかは分からないけど、何らかのアクションがあるはずよ。後はあなたの願いを叶えたらいいわ」

「……………お前は引き止めたりしないんだな」

「死んだ人とも一つに成れるんだもの。そんな必要はないわ」

その言葉が決定的だった。

「私はルルーシユを利用していた。全てを知っていながら私自身の死という果実を得るために、あいつが生き残ることだけを優先して……………」

ルルーシユの枕を取って抱きしめたC・Cは懺悔するように告白する。

マリアンヌの死の真相も、シャルル達が望んでいることも、自分達が日本に送られた理由も、全てを知っていながら話すことなく、ルルーシユが破滅へと進んでいくのを期待して待っていた。

「永遠の時を生きる魔女が後悔を？」

「懺悔だよ。魔女と嘯っていながら人間らしさを捨てきれなかったよ



うだ」

今でも死を望む気持ちは変わらない。変わらないが、前よりも切実ではなくなった。

「今となつてはスザクに共感を覚えるよ。あいつは私に似ていた」

父・ゲンブを殺したスザクはある一点においてC・C・と良く似ていた。

「あの主君を裏切り続ける男にあなたが似てるって？ どこが？」

「死を望みながら死ねないところだ。だが、今は違う」

孤独だったルルーシュが少しずつ皆に歩み寄り、一丸となつて戦つていく姿は理想を語り合つていたシャルル達と比べても美しかった。その輪の中に確かにC・C・もいたのだ。

決定的に関係が変わつたあの一夜の逢瀬を思い出す。

ルルーシュだけでなくカレンとも感じた確かな心の繋がり。愛を与えられるのではなく、愛を与え合える関係はとても心地が良かった。

「今の私は生きていたい。ルルーシュが見るものを私も共に見たいんだ」

「C・C・、あなたは……」

枕をベッドに置き、立ち上がったC・C・は信じられないと目を見開いているリアンヌと視線を合わせる。

「……………女になったのね。まさかあなたからお義母さんと呼ばれる羽目になるなんてね」

同じ女であるからこそC・C・が変化した理由に得心がいったマリアンヌは鼻を鳴らす。

「ルルーシュに付いて、私達を裏切るといふの？」

「裏切る？」

ルルーシュに付くとはそういう意味であるが、ここに来てもマリアンヌの思い違いにC・C・は苦笑を浮かべようとして失敗した。

「違つたら、マリアンヌ。私はお前達の願いに賛同しただけで、別に理解者ではなかった」

裏切る以前の問題だ。嘘の無い世界という結果に至る過程で生ま

れる死という副産物が目的であるC・Cは同志ではなかった。

契約によって互いを利用し合う。離れた場所から見ればそんな関係だった。

「ルルーシユの目的であつた復讐は、ナナリーと………殺されたマリアンヌ、お前の為だったんだよ。その死の真相を暴き、報いを受けさせる為に」

ルルーシユにとって、マリアンヌは良き母親だった。無為に殺され、シャルルが碌な捜査もしなかったことから全てが始まった。

「私を殺したV・Vはもう死んでる。ナナリーのこと、いいえ今までの全てを知らればルルーシユも私達に協力してくれるはずよ」

親である自分達に逆らうはずがないとマリアンヌは疑いもしてない。

マリアンヌには分からないだろう。ルルーシユがどれだけの思いで行動に移し、そして失って来たかを。

「知れば傷つくだけだ」

「必要があつてのことよ」

V・Vの計画に巻き込まれて、ナナリーは足の自由を奪われた。

「偽りの目撃者に設定されたナナリーは真実を隠すための駒でもあつたけれど同時に不安要素でもあつた。ナナリーを情報弱者にして真実に辿り着く可能性を低くしてV・Vから狙われるのを防ぐ為にシャルルのギアスで記憶を変えて光を奪うしかなかった」

必要だったから。仕方なかった。だけど、本当にそうなのか。

「シャルルが二人を日本に送つたのも、私の暗殺事件に深く関わり過ぎたナナリーをV・Vから護る為よ」

敵地であつた日本に送られれば、二人がどのような扱いを受けるのか分からなかったはずがないのに。

「じゃあ、どうして日本に侵攻した？ 護る為と言いながら危険に晒したのは何故だ？」

C・Cは理由を知っている。いや、マリアンヌを良く知るC・

Cは理解していた。

「計画を優先したお前達は、死んだ人とも一つになれると知っていた

からルルーシユやナナリーが生きていようがいまいが、さして関係なかったんだ」

マリアンヌは世間一般的な母親としての愛情をルルーシユとナナリーに対して持つていなかった。シャルルが彼なりに不器用な愛情を持つていたから、二人を愛していたに過ぎない。

『自分』しかないマリアンヌは女としてシャルルを愛せても、母親として子供達を愛せない。

「だけど、問題が起こった。ラグナレクの接続にはV・Vのコードだけでは足りない。だが、私はお前達と共に歩む気は無かった」

そのことが分かったマリアンヌは、Cの世界を通してC・Cに提案した。

「ルルーシユを育て上げ、利用しよう」と

ブリタニア皇族の中でも随一のギアス資質を持つルルーシユのことを教え、契約していたマオでは己が目的を果たせないと諦めたC・Cは口車に乗った。

ルルーシユがC・Cの願いを果たせたらそれで良し。その場合はルルーシユを計画に参加させる。願いを果たせなければ、もう一度シャルル達に協力する。そういう取引をした。

二度捕まったのにルルーシユがアツシユフオード学園に戻されたのはその為だ」

ブリタニアに捕まったルルーシユがエリアーに戻されたのも、その取引があったから。

スザクやV・Vに怪しまれないように、機密情報局に監視させていたが嚴重である必要も無かった。マリアンヌ達にとっては、ルルーシユをC・Cの下に帰せれば良かったのだから。

「こんなことをルルーシユが知れば壊れる」

愛する母と憎むべき父は最初から結託し、自分を利用して目的を達成しようとしていた。

シャルルとマリアンヌと、そしてC・Cの掌で踊って数多の命を奪い、人生を狂わせてきた呵責はルルーシユを壊しかねない。

「その前に私がお前を殺そう」

真実の重みがルルーシュを押し潰すのならば、そんな真実を葬るところをC・C・は決めたのだ。

「出来るというのあなたに？」

アーニヤの肉体を殺されればマリアンヌは他人の体に渡る。しかし、この場にいるのはマリアンヌとC・C・だけ。コードの持ち主であるC・C・にギアス能力は効かない。

しかし、マリアンヌは焦りも慌てもしない。

マリアンヌの体に比べれば格段に劣るとはいえ、アーニヤもナイトオブラウンズ。格闘技を修めているわけでもなく、身体能力は同年代の少女と大差ないC・C・に後れを取るはずがない。

だからこそ、C・C・の意味があるとも思えなかった話に付き合っただのだ。

「知っているか、ギアスは消せるんだ」

V・V・はギアス能力者に対する切り札とでも呼ぶべきギアスキャンセラーをマリアンヌにもシャルルにも秘密にしていたようだ。

「何を——」

隣室のナナリーの部屋で待機していたジェレミア・ゴットバルトが発動していたギアスキャンセラーによって、警戒していたマリアンヌはギアスを解除されてCの世界へと帰って行く。

肉体を殺され、その精神もまたV・V・が深く関わった力が殺した。

「さようなら、お前のこと好きだったよ」

末期の言葉すら残せずCの世界へと帰ったマリアンヌが体から消え去り、力を失ったアーニヤの体を抱き留めたC・C・は、シャルル達によって人生を捻じ曲げられたもう一人の被害者を哀れみながらルルーシュのベッドへと寝かせる。

「マリアンヌ様は逝かれたか」

ただ一人、全てを話して協力してもらったジェレミアがドアを開けて室内に入り、眠るアーニヤの姿を見下ろす。

「すまん。お前には酷なことをさせた」

Cの世界を通してマリアンヌから会いたいと言われたC・C・は

ルルーシユに残酷な真実を知らせぬ為にジエレミアに協力を求めた。

「……………マリアンヌ様は八年前に亡くなっておられる」

ナナリーの部屋で全てを聞いたジエレミアは言葉少なに答えた。

最初はジエレミアも真実を認めなかったが、語られた真実の重みに目を閉じて息と共に吐き出した。

「C・C.こそ、良かったのか？ 友だったのであろう、マリアンヌ様は」

幻想は幻想のまま、知らないでいることの方が幸せなこともある。今の主君であるルルーシユを想うことで気持ちを入れ替えたジエレミアが顔を上げて問いかける。

「自分でも言っていたら。マリアンヌはもう死んでいたんだ」

真実は闇に葬り去られる、C・C.の罪もまた。

「それでも私は選んだ。シャルルやマリアンヌではなく、ルルーシユを」

ルルーシユと共にいる限り、罪の意識が消えることはないかもしれない。

「誰かの為に行動を起こす。これが人を愛するってことだろ」

艶やかに微笑んだC・C.は、嘗て愛を求めた少女から愛を与える女性へと成ったのだ。

## 第十話 シュナイゼルの仮面

アツシユフオード学園の生徒会室は、現状で最も世界を動かし得る二人が会談を行うには適切であるとは言えないだろう。

「何分急だったもので、座り心地が悪いかもしれないが勘弁してもらいたい」

「いや、偶にはこういうのも悪くない」

部屋の広さは十分にあるが、超重要人物が座るような椅子ではないし、間にある机も決して上等と呼べるものではない。

中小企業の会議室よりは少しマシといった程度で、アツシユフオード学園内に限って言っても学園長室や会議室の方が上等な物が置かれている。

座り慣れているルルーシユとはともかくとして、生まれた時から恵まれていたシュナイゼルに対する盤外戦術である。

「直接会うのは朱禁城以来になるのかな、ゼロ」

カツン、とシュナイゼルはルルーシユが机に無造作に置いていたチェスの駒を動かす。

「あの時の決着をお望みかな、シュナイゼル」

「それは君も同じではないかな」

ルルーシユは仮面の内側でニヤリと笑いながら、黒の駒を手にとってカツンと強い音を立てて置く。

「君を見習って私もキングを動かすでしょう」

同じように笑いながら、朱禁城でルルーシユが言った『王が動かなければ部下は着いて来ない』を引き合いに出して白のキングを動かすシュナイゼル。

「実際に自ら動き、皇位を篡奪した者らしい手だ」

対抗するように黒のキングを動かしたルルーシユの皮肉にシュナイゼルは苦笑を返した。

「前皇帝があまりにも不甲斐なくてね。このままではいけないと思っていたが兄上が立つ様子はなかった」

「だから、自分が立つしかなかったと？」

「否定はしないよ」

カツン、カツン、と時折十数秒程度の読みを挟みながらも、盤面だけではなく舌戦も行われている。

「シユナイゼル陛下、あなたは世間で自分が何と呼ばれているかご存知でしょうか？」

切り崩しに失敗して別の場所に力を入れながら、ルルーシユは雑談のように話しかけた。

「悪逆皇帝だろ。陳腐なネーミングに思わず笑ってしまったよ」

「だが、正鵠を射ている」

重戦術級弾頭であるフレイヤで帝都ペンドラゴンを恐怖の坩堝に落とし、自らへの皇位への継承を強いた男に付けられた超合衆国圏での仇名である。

父であるシャルルを追い落とし、殆どの者に望まれないタイミングで皇位に着いたシユナイゼルにピツタリと言えらるだろうと、ゼロはポーンを盤面の一番奥まで進めてプロモーションさせる。

「あなたの狙いは何ですか、悪逆皇帝シユナイゼル」

ルルーシユは盤面から顔を上げ、仮面越しではあるがシユナイゼルの他人に感情の覗かせない目を見る。

「狙いとは……………世界征服を唱えた前皇帝シャルルと違い、私には世界を征服する野望などないし、エリア政策も続ける気は無い」

テレビ放送で流された所信表明演説に偽りはないと告げたシユナイゼルの反撃の一手がルルーシユを襲う。

「今のブリタニアは、あなた達にとっても良い国になったのではないかな」

「言葉だけで捉えるならば、な」

感情のままに突き進む一手を紙一重で躲し、罨を張って誘い込む。「フレイヤによる恐怖で治めたところで一時的な物に過ぎない」

「だから、自分がブリタニアを負かすと？」

罨は切り抜かれたが次なる一手を用意していたルルーシユの手がピツタリと止まる。

「ゼロ、君は今そのまま世界でいいというのかい？」

「それは……」

「人の本質とはね、何かに支配されたいということなんだよ。民族宗教 伝統 権威………ブリタニア皇帝はそれらを演じねばならない」

対応を誤ったのを見抜いて猛攻を仕掛けるシュナイゼルの手に対応を迫られ、ルルーシュは頭脳を働かせる。

「あなたなら、演じられるというのですか？ 皇帝を」

負けてなるものかと決起し、反逆の一手を仕掛けたルルーシュに対して暖簾に腕押しとばかりにシュナイゼルは引いた。

「それが求められているなら、多分」

「出来るか出来ないかがハッキリしているあなたらしくない言葉ですな、陛下」

しかし、この場面において引いたシュナイゼルの手は、言葉と共に毒にも薬にもならない戸惑いを現しているようなものだった。

「以前の私ならば、望まれたからといってこのようなやり方で皇帝になろうとはしなかつただろう」

獲得してしまった『自分』に振り回されているのは他でもないシュナイゼル自身。

「あのフレイヤの輝きを見た時から、私の中で何かが変わってしまつた」

「あの破滅の光に魅入られたと？」

「かもしれないね」

決して以前のシュナイゼルならば打つはずのない手に、勝つ為の一手を見たルルーシュは仮面の中で目を細める。

「過程はどうあれ、私の行動によって世界が平和になるのならば良いことだろう？」

世界に覇を唱えたシャルルと違ってシュナイゼルにそのような大望はない。仲良く出来るならばそれに越したことはないと思やかに微笑む。

「世界の人々の願いだろう、平和は」



「恐怖による一時的な平和に過ぎない。それを人は、押しつけと  
言うんだ」

結果だけを見れば平和に違いなくとも、何時爆発するか分からない  
爆弾に怯え続ける日々は決して平穏とは言えない。

「飢餓や貧困、差別、腐敗、戦争とテロリズム………世界に溢れる問  
題を無くしたいと願いつつ、絶望的に人は分かり合えない」

仮面を使い分けても、決して理解し合えない人々をシュナイゼルは  
見て来た。

「親兄弟ですら分かり合えない………君のようにね」

勝ち筋が見えて来たルルーシュの手が動揺を示すように駒を取り  
落とした。

「ゼロ、クロヴィスの時から何かがおかしいと思っていた。しかし今  
の私は理解しているよ。納得も得心もいつている。今、全てのカード  
は 我が手の中にある」

今、もつとも知られてはならない人間に正体を知られたゼロは、駒  
を拾うことも忘れたルルーシュは顔を上げられない。

「悲しいね。皇族殺しのゼロ、その正体が私が最も愛し、恐れた弟――

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだとは、なんとという悲劇か」

「何故……」

「枢木卿が全てを明かしてくれたよ。ゼロの正体が、まさか学生とは  
誰も思わなかっただろうな」

そう言うシュナイゼルは笑っていた、嗤っていた、晒っていた。

「ギアスの力は確かに便利だ。私たちみんながアンフェアな戦いに身  
を投じてきた中で君だけがズルをしていた。君は、どこまで悲しみの  
連鎖を続けるつもりなんだい？」

動けない。ルルーシュの手は完全に止まった。

「動機は母であるマリアンヌの死の真相を解き明かすことと、ナナ  
リーの安全を守ることかな」

全てを知ったシュナイゼルの手の中でルルーシュは踊るしかない。

「仮面を暴いたあなたは俺に何を望む？」

もう仮面に意味はない。

ゼロの仮面を外して机に置いたルルーシユの顔を見たシュナイゼルは淡く微笑む。

「ブリタニアに抵抗する組織のトップが敵国の皇子だと知られれば誰も付いて来てはくれない。仮面を被ったことには納得するが」

だからこそ、ゼロを系譜ではなく起こした奇跡によって認めさせるしかルルーシユは表舞台に立つことすら出来なかった。

「仮にこのまま超合衆国がブリタニアを倒したところで世界はどうなる？ 賠償金を要求するなどして、結局は強者と弱者が立場を入れ替えるだけだ」

勝者という大義名分を得た超合衆国やブリタニアの恐怖に晒され続けて来た各国は、それ見たかとはかりに立場が弱くなって弱者に落ちた大国をハゲワシの如く筆り取っていくことだろう。

「力を失くしていくブリタニアは弱者に落ち、強者となった超合衆国に良いようにされる。因果応報と言えばそれまでだが、これが本当に君の望んだことなのかい？」

ルルーシユにだって言い分はある。

シャルルとブリタニアという国の在り方のみを破壊し、穏健派で宰相のシュナイゼルがいれば敗戦国になろうとも超合衆国と渡り合っていくことが出来る。ルルーシユが戦後に黒の騎士団CEOの立場を下りるのも、超合衆国が暴走した時のストッパーに成る為。

しかし、シュナイゼルがシャルルを追い落として皇帝の座に着いたことで状況が変わってしまった。

「ブリタニアの実権を握り、ゼロの正体を知った時点で私の勝利は揺るがない」

シュナイゼルが勝つのはゼロの正体を世間に明かすだけでいい。言っていたように、敵国の皇子をトップに抱いたまま戦うことは出来ないのだから。

「それでもブリタニアに勝利するまではと君を御輿に掲げ続けることはするかもしれない。では、私はその前に君自身が自分で舞台から降りるように仕向ければいい。確かシャーリーといったか」

「シュナイゼル、それは……！」

シャーリーがブリタニア本国に帰っていることはスザクも知っているのですが、身内に甘いルルーシユは人質にされれば自分から舞台を下りざるをえない。その読みは間違っではないのだから。

「安心するといい。人質に取って舞台から下りろと言う気は無いよ。唯一の敵となりそうなゼロに舞台を下りられればつまらなくなる」  
「何？」

以前の合理性の塊だったシュナイゼルならば決して取ることのない選択にルルーシユは困惑する。

「テレビを付けていいかな」

完全に手が止まったルルーシユを置いて席から立ち上がったシュナイゼルが部屋の隅に置かれていたテレビの下へ行き、電源を入れた。

『ブリタニア軍が移動を開始しました！ 黄海から日本の領海に入りつつあります!!』

「自分を囷にして奇襲を仕掛ける気か、シュナイゼル！」

誠意として通信機の類を持ち込まなかったルルーシユはテレビで流れているブリタニア軍の情報に立ち上がり、シュナイゼルの睨み付ける。

「まさか、そんな無粋なことはいらないよ」

テレビのリモコンを取ってチャンネルを何度か変えたシュナイゼルの、目的の物が映っているのを見てニヤリを笑う。

『巨大な要塞でしょうか！ 全長3キロメートルはあります！ カンボジアから飛び立った飛行物体は東シナ海をゆつくりと北上し、その進路上には日本が』

「私が作らせた天空要塞ダモクレスだよ」

子供がお気に入りのおモチヤを自慢するように言いながら、シュナイゼルはルルーシユを見る。

「ダモクレスには製造したフレイヤを搭載している。一週間後には合衆国中華の領空に入り、第二次加速に移行する。その後、地上300キロメートルまで上昇する予定だ。その位置からならば、世界中の全ての国にフレイヤを撃ち込むことが可能となる」

「そんなことをすれば、ブリタニアは国際的な信用を完全に失うことになるぞ」

「必要な、そんなものが？」

ペンドラゴンに行ったようにフレイヤでの脅しを全世界に行うと宣言したシュナイゼルには、最早国際的な信用など必要なかった。

「人はそれぞれの欲望は否定出来ないと皆思い知っただろ。だったら、心や主義主張はいらぬ。システムと力で、平和を実現すべきではないかな」

「人を恐怖で従えるつもりか！」

「恒久的な平和など幻想に過ぎぬ。幻想を現実にするためには全人類に躰けが必要だ」

二大国の戦争がその意味を変えるほどの、あまりにも傲慢な発言だった。

「ダモクレスとフレイヤという恐怖を前にした民衆はゼロという希望に縋るだろう。そしてその希望が完膚なきまでに敗れた時、人の心は容易く折れる」

シュナイゼルがゼロの正体を明かさぬ本当の理由がそれだ。

ゼロに希望を集めさせ、その上で倒せば民衆は無駄な反抗を起こす気持ち失ってしまう。

嘗てルルーシュが自身に希望を集めることでゼロという象徴を作り上げたように、シュナイゼルはゼロという象徴を利用して民衆の心を折ろうとしている。

「製造したフレイヤ弾頭は全部で五発」

そう言つてシュナイゼルは広げた右手をルルーシュに向ける。

「トウキョウ租界を消滅させたのが一発目、ペンドラゴンの脅しに使つた二発目、残りが三発ある」

親指と人差し指を折り、まだ折つていない三本の指が残るフレイヤの数であることを楽しそうに明かすシュナイゼル。

「ダモクレスの製造の為に資金を動かした所為で現状では三発しか残っていないが、君を倒した後に幾らでも量産できる」

「この場であなたを捕縛すれば、ブリタニアは動けない！」

ブリタニアはフレイヤの脅しに屈してシュナイゼルの皇位継承を認めたに過ぎない。ここでシュナイゼルを捕縛すれば、世界の悪に成ろうとしている行為からブリタニアも手を引くだろう。

「私はその程度のことを予測していないとでも？」

武器の持ち込みは出来なかったので物理的に抑え込もうと腰を落として飛び掛かろうとしたルルーシュに対し、シュナイゼルは窓を開けた。

直後、窓の外にエナジーウイングを光らせるランスロット・アルビオンが降り立つ。

ランスロット・アルビオンの着地の衝撃で地響きが立ち、飛び掛かろうとしたルルーシュはバランスを崩して膝をついてしまった。

「残る三発の内、一発は彼に預けている」

「……………脅す気か？」

「舞台を整えようというだけだよ。こんなところで決着を着けてもつまらないだろう？」

敵ナイトメアの襲来に黒の騎士団のナイトメアも直ぐに動き出すだろうが、ランスロットに紅蓮聖天八極式と同じエナジーウイングがあることから見て、トウキョウ決戦でルルーシュが危惧したように第九世代ナイトメアとなっている以上、精鋭ですら雑兵と変わらない。

犠牲を悪戯に増やすだけだ。

「そうそう、紹介しておこう。私のナイトオブ라운ズの筆頭、ナイトオブワンの枢木スザクを」

ゆつくりと開かれるコクピット部分よりパイロットがその姿を現す。

「やあ、ルルーシュ」

「スザク……………」

コクピットの中からそう言ったスザクの感情の抜けてしまった姿を見たルルーシュは目を見開く。

「お前、その目は」

コクピットを開放している為、モニター類は付いていないので薄暗い中でスザクの目が赤く光っているのが見えた。

「ああ、死にたいのに死ねないんだ。君のギアスの所為で」

ロボットですらもう少し情緒の籠った話し方をする。

スザクにかけた『生きる』というギアスが発動し続けているのだと理解したルルーシュは、その尋常ではない精神状態に歯噛みする。

「スザク、お前はシュナイゼルのやり方を認めるといふのか」

「俺は結果を求める。もう、誰も血を流さない結果を。結果が伴わなければ過程に意味はないと教えたのは君だよ、ルルーシュ」

もう日本を取り返す意味は無くなった。ならば、次は誰も血を流さなくて済む世界をスザクは求める。

「だが、恐怖で強いる平和など……」

「強制されようと、平和は平和だ」

押し付けだろうと構わないと、結果を求める為に過程を顧みなくなったスザクはシュナイゼルの世界に賛同しているのだ。

「そう言うわけだよ、ルルーシュ。世界の希望を集めて私に挑んで来るがいい」

悪意の象徴と希望の象徴の対決を心待ちにしていると、ランスロット・アルビオンが差し出した手に乗ったシュナイゼルは優雅に語り掛ける。

「逃げることは許さないよ。ナナリーと共にダモクレスにて待つ」

「ナナリー、だと……？」

トウキョウ租界でフレイヤと共に消滅したナナリーがダモクレスにいるかのような言い方に、既に死んだものと諦観していたルルーシュは反応してしまった。

「フレイヤのことを知っていた私が何の対策も取っていないと思っていたのかい？」

「ナナリーが……生きて、いる」

「グリーンダ騎士団の筆頭騎士オールドリン・ジヴオンに聞いてみるといい。ナナリーを救ったのは彼女だ」

ニーナがフレイヤを開発できたのもシュナイゼルの後援があつてこそ。一研究者に過ぎない彼女の一存だけでランスロット・コンクエスターにフレイヤを搭載できるはずがない。

全てはシュナイゼルの掌たなごころの中でしかなかった。

「ナナリーはダモクレスに乗っている。妹の為に戦う気になっただろ？」

「シュナイゼル……！」

シャルル以上に人を憎むことはないと思っていた今、シュナイゼルにそれ以上の憎しみを募らせていた。

「精々、民衆の為に華々しく散ってくれ。それが愛しい弟への私の願いだ」

ゼロでも駄目だったのだから抗うだけ無駄だと民衆に思い知らせる為に、ナナリーという人質をダモクレスに乗せたシュナイゼルはランロット・アルビオンと共に去って行く。

「くっ、シュナイゼルめ」

窓枠に取りついてランロット・アルビオンの姿が見えなくなるまで追い続けていたルルーシュは窓枠を力一杯に殴りつけた。

「ダモクレスの存在とナナリーが生きていたことを今まで隠していたのは、俺に舞台を下りさせない為だったのか。カードとして効果的に使うために」

ジンジンと痛む手すらも意識に上らないルルーシュは苦し気に息を漏らす。

「ならば、貴様のカードの切り方は絶妙だったぞ。こんなにも………」

ナナリーの優先度が下がろうとも、ルルーシュの内で彼女が占める範囲は未だに大きい。

ダモクレスとフレイヤの存在は人々に恐怖を植え付けるだろう。ペンドラゴン上空に撃たれた物を観測すれば、トウキョウ租界を消滅させた物ですらリミッターが付いていることが分かる。リミッターを外した恐ろしさは容易に一国を滅ぼし得る力を持ち、実際には使わなくとも脅しとしては十分。

恐怖に駆られた人々は奇跡の男であるゼロに継ぐ。ナナリーを救わなければならぬルルーシュも戦わずにはいられない。

「ルルーシュー！」

C・C. とジェレミアを伴ったカレンが生徒会室にやってきてもルルーシュは顔を上げられない。

「今、ランスロットが………怪我したの!？」

窓際で動こうとしないルルーシュを心配したカレンが慌てた様子でやってくる気配を感じ取り、ゼロとしての仮面を被らざるをえないことを自覚して顔を上げる。

「大丈夫だ、カレン」

シュナイゼルを倒さなければならぬという戦略目的に何も変更はない。

「嘘をつくな」

例え自分の手でナナリーを殺すことになってもシュナイゼルを止めなければならぬことに張り裂けそうになりそうなる心を無視して平静を装っていると、近づいてきたC・C. に腹を殴られた。

「おい」

「シュナイゼルに何を言われたのか知らんが、私達の前で無理をする必要はない」

殴った力自体は大したことではないが、文句を言おうとしたルルーシュにC・C. が顔に指を突きつける。

「そうよ。私達はルルーシュの剣で盾。遠慮なんかしてほしくない」

C・C. に次いで、誇らしげに胸を張るカレンにも指を突きつけられる。

「勝手な言い分だな」

「共犯者だからな」

「恋人だもん」

気心の知れた二人に言われ、ルルーシュは背負っていた世界の重みに耐えられる力を得た。

得たのだが、元とはいえブリタニア皇族であるルルーシュに恋人と言い切ったカレンにジェレミアが目を細めた。

「ルルーシュ様、後でお話があります」

「何をだ？」

「皇族とはいえ、婚姻関係を結ぶ前に二股は如何なものかと」



「……………尤もです」

どちらが主君か分かったものではない会話をしつつ、シャーリーの問題も残っているルルーシュは今更ながらに気付いて愕然とした。

シュナイゼルに勝っても残る問題にルルーシュが愕然としていると、ドタバタと近づいて来る音が聞こえてカレンが机に置かれたゼロの仮面を取りに走る。

「ゼロ！」

「どうした、朝比奈？」

「いや、こつちがどうしたと聞きたいんだが」

慌ただしい様子で生徒会室に入って来た朝比奈省吾達は、カレンが急いで被せた所為で仮面の前後ろが反対になっているゼロに聞かずにいられなかった。

「こちらには何の問題もない。シュナイゼルもランスロットも、もういなくなった」

被らされた時に打った鼻が痛い、まさか仮面が前後ろになっているとは思えないルルーシュは言い切った。

「シュナイゼルと決戦になるか」

滑稽な姿にクスクスと笑っていたC・Cはテレビに映る天空要塞ダモクレスを見てそう言った。

「ああ、奴もそれを望んでいる」

前後ろを間違えて被せてしまったカレンがどうしようかと迷い、ジエレミアが主君に指摘するべきだろうかと思案する中でルルーシュは重く頷いた。

「ナナリーを人質に取っているとも言っていた。嘘ではないだろう」

ナナリーを助けたというオールドリン・ジヴオンに確認を取る必要があるが、容易にバレるような嘘をつくほどシュナイゼルは愚かではない。

「ちよつと、ゼロ!？」

失言に気付いてカレンが誤魔化そうとするが、朝比奈は聞き逃さなかった。

「ナナリー、というとナナリー総督を人質に？　ブリタニア皇女を人

質に取ったところで何の意味もないというのに」

「いいや、人質になる。この私に対して彼女以上の人質はいない」

そう言つてゼロは仮面に手をかけた。

「む、ん？ 何故だ外れない……」

前後ろが逆なのだから通常通りでは外せないで、気を利かせたC・C・Cが仮面を外す為に手を伸ばす。

ゼロが何をしようとしているかを理解して目を見開いている朝比奈の前で、C・C・Cの手によって今まで秘密にされて来た素顔が明らかになった。

「ナナリーはこの私、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの実の妹なのだから」

「なっ!?!」

白日の下に晒された青年の顔は、黒髪であつても明らかに日本人ではなかった。そしてブリタニアの名が示す意味はただ一つ。

「ブリタニア皇族がゼロ……」

「神聖ブリタニア帝国の第11皇子であり第17位の皇位継承権を保持していた、嘗ては」

決して自棄になつたわけではない。

「朝比奈、黒の騎士団幹部を集める。直ぐに来れないのならば通信を繋げ———シュナイゼルに勝つ為の話し合いがしたい」

例え受け入れられなくても、シュナイゼルとの戦いだけはゼロを担ぎ上げる必要がある。

戦いの中でシュナイゼルはゼロの正体がルルーシュであると暴露するかもしれない。幹部クラスだけでも知つていれば、動揺を抑えて戦える可能性が残る。

「あ、ああ、分かった。ただ」

「ただ、なんだ？」

「……………鼻血は拭いておいた方が良くと思うぞ」

ゼロの正体が敵国の皇子であつたことに動揺しつつも、朝比奈は真面目な話の場で間抜けにも見える鼻血を垂らしていることを指摘せずにはいられなかった。

「ルルーシュ様」

「すまん、ジェレミア」

「えと、ごめんルルーシュ」

「なんでカレンが謝る」

「いや、だって……」

「俺のことを思っていてくれたことを怒るわけがないだろ」

置かれていたティッシュ箱を差し出すジェレミアに礼を言っ  
てティッシュを鼻に詰めるルルーシュと、しおらしいカレンの仲睦まじ  
い姿に疑うのも馬鹿らしくなった朝比奈は苦笑を漏らす。

直属の部下に秘密厳守の厳命を出して自分も部屋を出て行った。

「ここにいた」

朝比奈と入れ替わるように生徒会室に入ってきたのは、クラブハウ  
スにあるルルーシュの私室で寝かされていたアーニヤだった。

「どうして、アーニヤがここに？」

「ジノと一緒にホテルにいるはずじゃ」

ホテルの一室に軟禁しているはずのアーニヤがアツシユフオード  
学園にいることに目を顰めたルルーシュとカレン。

「あなたに用があった来た」

その横でC・C・とジェレミアが何と言いつい訳しようかと考えてい  
ると、アーニヤはテクテクとルルーシュの前まで歩み寄る。

「ゼロがあなたとは予想外だったけど、都合が良い」

「都合が良い？」

身長差の関係で見上げることになったアーニヤはジロジロとル  
ルーシュを見て、何かに得心がいったようで携帯電話を取り出して何  
かを操作して差し出す。

「これはやっぱりあなただった」

映し出されているのは八年前のまだブリタニア本国にいた時のル  
ルーシュの写真。篠崎咲世子の天然で多数の女子生徒とデートする  
羽目になった後に見せられたものだ。

あの時は皇子であったことを知られるわけにはいかなかったので  
否定したが、仮面を外したルルーシュに否定する理由もない。

「確かにそうだが……」

「そして、これを撮ったのは私」

アーニヤが言いながら当時の髪型を再現するように髪を持つ。

「……………思い出した。母さんが殺される一週間前に行儀見習いとして来ていた」

あの頃は色んなことが起こり過ぎて印象に残っていないが確かにアーニヤと同じ年頃の子供が来ていて、アリエスの離宮の花壇で写真を撮ってもらったことをルルーシユは思い出した。

「で、俺が皇子だったことを知ってどうする？ ブリタニアに売るか？」

「まさか」

ルルーシユに余計なことを言ったりすれば直ぐにでも行動しようとしているC・C.とジエレミアを見て苦笑を浮かべたアーニヤは跪いた。

「私の忠誠は最初からルルーシユ様に」

行儀見習いとしてアリエス宮に入ったアーニヤはルルーシユの下へ付いた。

アリエス宮の悲劇の後、誰かの下に仕えずにナイトオブブラウンズにまで駆け上がったアーニヤは計らずとも記憶を取り戻したことで、幼心に誓ったルルーシユへの忠誠も取り戻していた。

「……………これは何事だ？」

マリアンヌ  
アーニヤによって気絶させられ、見張りの騎士団員よりも先に目覚

めて後を追って来たジノが状況を理解できるはずがなかった。

## 第十一話 ゼロから始める為に

シュナイゼルとの会談から一時間後に、アツシュフオード学園に黒の騎士団の幹部が集結していた。

斑鳩の艦長である南とパスしたラクシャータを除いて大体のメンバーが揃っていた。逆にジノとアーニヤはホテルへと戻された。

アーニヤに口止めはしなかったため、ジノにも大体の話は伝わるだろう。

旧扇グループから扇と杉山、元日本軍から藤堂と千葉に朝比奈、超合衆国の議長である神楽耶と議員である天子、その護衛の星刻。ルーシユとC・C、カレン、ジェレミアを合わせた面子が生徒会室に集まった。

「急な呼び出しにも関わらず、良く集まってくれた。礼を言う」

会談が行われた生徒会室に集った面々を前に、仮面を被ったゼロが深々と頭を下げた。

「ディートハルトの姿が見えないが」

「あいつには先にこの集まりで話すべきだった内容を話して、別の仕事をしてもらっている」

しっかりと藤堂の隣の席を確保している千葉が集まった面々を見ながら聞いてきたので、とあることをしてからディートハルトに通信を行ったルーシユは淀みなく答える。

「ブリタニアとの決戦が近いということを分かった上で集めたのなら、大事なことだと考えてもいいのだろうか」

「残念だが、シュナイゼルとの会談とは直接の関係はない」

天子と共に出席した黎星刻はシュナイゼルの恐ろしさを知るだけに、対策の為の会議だと思つて来てみればゼロから関係のない話であると前置きされて眉を潜める。

「君も……………いや、ここにいる全員が興味があることだ」

朝比奈省吾から集められた理由を直接聞いていた藤堂鏡志朗は仮

面に手をかけたゼロを静かな眼差しで見つめる。

「お、おい……!?!」

訳も分からないまま斑鳩から呼び出されてやってきた扇要はゼロが仮面を外そうとしているのに気づいて慌てて席を立った。

「――改めて、自己紹介しよう」

外した仮面を机の上に置き、世界中の人が知りたいと思っている奇跡の男ゼロは素顔を晒していた。

「俺の本当の名はルルーシュ・ヴィ・ブリタニア………神聖ブリタニア帝国の第11皇子であり第17位の皇位継承権を持つていたことがある」

世界を動かす一大勢力のトップといっても過言ではないルルーシュは全ての真実を明かす。

「ブリタニアの皇子………それは俺達を騙していたってことか?」

「見方によってはそうなる」

恐らく最も衝撃を受けているであろう扇が唇を震わせている姿を見ながら、ルルーシュはいつそ穏やかに答える。

「皇子といっても皇位継承権は捨てている。八年前の日本侵攻時にブリタニアでは死んだことになっているから皇子でもない」

「八年前? 日本侵攻時って……」

「俺とナナリーは留学という名目で日本に送られている。戦争のドサクサに紛れて死んだことにした」

朝比奈が眉を顰める。ルルーシュが見た目通りの年齢であるならば、戦争前の日本に兄妹が送られたのが人質であったことは誰の目にも明らかだからだ。

「全ての始まりは俺の母マリアンヌが暗殺されたことに端を発している」

今でもルルーシュの胸の奥に、ジクジクと血が染み出すように傷を自覚しながら口にする。

『死んでおる。お前は、生まれた時から死んでおるのだ。身に纏ったその服は誰が与えた? 家も食事も、命すらも! 全て儂が与えた物。つまり! お前は生きたことは一度も無いのだ! 然るに! 何たる愚かし

さ!! ルルーシユ、死んでおるお前に権利など無い。ナナリーと共に日本へ渡れ。皇子と皇女ならば、良い取引材料だ』

まだルルーシユは年齢が二桁になったばかりの子供だった。親の愛情を疑わず、皇室の一員として与えられるばかりだったことに疑問を挟むことすらもしなかつた時にシャルルが発した全てがルルーシユを圧倒し、幼き体は耐えることすら出来ずに倒れ込んだ。

「俺達は常に暗殺の危険に晒されていた。日本は敵地で、ブリタニアからも狙われる可能性があった」

「ブリタニアからも？ 皇子だったのに」  
「皇子だからでしょう」

良くも悪くも一般人だった杉山賢人に、キョウト六家として高き地位を持つ皇神樂耶は強い理解を示していた。

「立場が変わろうとも血は変わりません。何かの切っ掛けでブリタニアに戻り皇位継承権が復活しないとは限りませんから、その前に敵を排除しておこうという考えを持つ者がいても何もおかしくはありません」

「ブリタニアは皇族同士で血みどろの争いを繰り返している。前皇帝シャルルも皇位継承権を持つ皇子・皇女同士を競わせ、勝ち残った者を跡継ぎにするというスタンスをとっていた。碌な護衛もない元皇子達を排除しておこうと考えてもおかしくはない、か」

高い地位の者が権力争いをするのは珍しいことではないと知っている星刻も重く頷く。

大宦官によって天子が振るうべき権力を握られていたから中華連邦ではそのようなことは起きなかつたが、ブリタニアで起こった血の紋章事件は有名な話であつたから、ルルーシユが日本にいても暗殺される可能性を危惧していたのも無理はないと捕捉する。

「話が早くて助かる」

「藤色の目をした鬼に躡けられましたから」

一般人には理解し難い話を分かりやすく表現してくれた二人に礼を言ったルルーシユに神樂耶は少し拗ねながら言った。

「鬼？」

席に座っている他の皆と違ってルルーシユの味方であることを示す為に立っていたカレンが頭を捻る。

「覚えてらしたのですね、神楽耶様」

ルルーシユですら暫く後になってから思い出した八年前の出来事に、十歳にもなっていない年頃だったはずの神楽耶が覚えているとは思っていなかったので少し驚く。

「未来の旦那様に躡けられましたもの」

冗談めかして神楽耶が言うのとルルーシユの傍に立つカレンとC・

C・の目が剣呑さを持った。

「変なことを言わないでもらいたい」

「嘘は言ってませんわ」

皇家の力を自分の力だと錯覚して増長していた神楽耶の思い上がりを正してくれた藤色の瞳をした鬼は困ったように口をもごもごさせさる。

「それに以前に言った三人官女のお話が本当になりそうですわね」

初めて自分で見つけて自分で選んだ殿方が、今の神楽耶が進む道を示してくれた鬼であったというなら運命の相手に他ならないと笑う。

「三人官女って?」

「さあ、私も知りません。後で神楽耶様に聞いてみるのが良いかと」

三人官女の意味を理解している日本組はともかく、分からなかった天子が隣の星刻に聞いている姿にルルーシユは焦りを覚えた。

「それはともかく」

これは軌道修正しないと自分が不利に追い込まれると判断したルルーシユは話を本筋に戻そうとする。

「ルルーシユ、後で話がある」

「校舎裏がいいかしら?」

「いや、クラブハウスでいいだろう。誰の物か体に思い知らせてやる」  
ルルーシユの後ろでC・C・とカレンがそんな話をして聞いたが聞こえないことになっておいた。

三人の後ろに立つジェレミアはカカシの如く黙しながら、鈍い主君に後で女心の指導をしようと心に決める。



「暗殺の危険を恐れて死を偽装して、この学園を経営しているアツシユフオードに匿われて学生として過ごして来て、去年に日本側のレジスタンスによるテロに巻き込まれた。そのレジスタンスグループこそ扇グループだったことは今更言うまでもないことだが」

つまりは平和に暮らしていたルルーシユを結果的にはいえ、闘争の場に引きずり込んだ遠因は扇らにあるということ。視線が集中する。

「俺は扇らを非難する気は無い。寧ろ感謝しているぐらいだ」

手を上げて宥めたルルーシユは苦笑を収める。

「あの日から俺はずっと嘘を吐いていた、生きているって嘘を。名前も嘘、経歴も嘘………嘘ばかりだ。全く変わらない世界に飽き飽きして、でも嘘って絶望で諦めることも出来なくて……」

C・Cからギアスの力を与えられて、ルルーシユは幼い頃に決めたブリタニアを壊すという誓いを果たす為に動き出した。

「ゼロという仮面を被ったのは正体を知られないようにする為だった。ブリタニアの皇子である以前にブリタニア人が日本を解放すると謳っても誰も信じてはくれない」

「ああ、恐らく素顔だったら俺も容易には信じなかったと思う」

助けられたといってもブリタニアに対するレジスタンス活動をしていた扇もゼロを信じることはなかっただろう。なにしろ、素顔を晒したルルーシユはどう見ても学生ぐらいの年頃にしか見えず、学生の戯言と晒ったかもしれない。

「それじゃあ、枢木スザクの処刑の時にジェレミアがゼロを逃がしたのは」

「あの一瞬にルルーシユ様より命令を下されたからだ」

ずっと疑念を覚えていた杉山も、ルルーシユに仕える今のジェレミアの姿を見れば納得せざるをえない。

「オレンジというのは口からの出任せだ。ジェレミアが協力してくれるかは未知数だったが」

「皇族の命令とあらば、どんな不名誉を被らされようとも」

騎士とはかくあるべしというように、ルルーシユの一步下がった場

所で立つジエレミアを見てギアスのことに思い至る者はいない。

「素顔を晒さない者を信じる者はいない。支援者はいたが、日本人に俺を信じさせる為には結果を示し続けるしかなかった」

帝国の皇子からただの学生に、そしてテロリストとしての仮面を被つたルルーシユが他者に信じてもらうには結果を出すしかない。

「だが、次の総督であるコーネリアにはレジスタンス程度では勝てないことが分かった」

「だから黒の騎士団を作った、か」

ルルーシユの予定では黒の騎士団の結成を明かすのは、もう少し後に公表するはずだったがホテルジャックの件で身内を助ける為に早めたことまでは言わない。

「ゼロ、いやルルーシユ。一つだけ聞きたい」

「なんだ、藤堂？」

ホテルジャックのもう少し後に黒の騎士団に入ることになった藤堂に顔を向けるルルーシユ。

「八年前、君や妹君のことは人伝ではあるが聞いていた。当時、政府と強い繋がりがあつた桐原翁は君を知っていたのだろう」

「桐原様は私と共にルルーシユ様と会っていますわ」

「そうか。ならば、キョウト六家が支援を決めたのも納得できる」

当時、藤堂はルルーシユが住んでいた枢木神社の麓の武道道場で門下生だったスザクと面識があつた。ルルーシユとの面識はないが、彼の話はスザクから何度も聞いてた。

神楽耶の言もあつて桐原泰三とルルーシユが面識があつたのならば、全面的な支援を行った背景にも納得がいった。

「黒の騎士団は、君が作り上げた超合衆国は世界の命運を握るまでの力を手に入れた。シユナイゼルに勝てば、世界を支配することだって出来る」

望む望まない以前に、出来るということが重要なのである。

ルルーシユがシユナイゼルと同じ血を引いている以上、同じことをするかもしれないという懸念がある。

「ゼロ、君はどんな世界を望む？」

ルルーシユではなく、ゼロとしてどんな世界を作るつもりなのかと藤堂は問いかけた。

「……………ナナリーは歩けず、目も見えない。世間的に見れば弱者になる。匿ってくれているアツシユフォードも何時、手の平を翻すか分からず、ブリタニアが存在する限り俺達は怯えながら暮らさなければならぬ。ブリタニアを、皇帝シャルルを廃しなければ俺達に平穩はないと思っていた」

問いに対しての返答に誰もが耳を傾ける。

「誰もが怯えて暮らす必要のない優しい世界を俺は望む」

ルルーシユが立ち上がった理由であり、行動原理でもあった。

「……………意外にロマンチストだったんだな」

「否定はしない。一度はお前達を見捨てようとしたこともな」

皮肉な朝比奈が思わず笑った直後に、再びの衝撃がルルーシユの口から暴露されて例外なく全員の目が見開かれた。

「ブラックリベリオンの時、改造されたジェレミアと戦ったのは本当のことだ。だが、その前、トウキョウを離れたのはナナリーが誘拐されたと聞いたからだ。焦って、扇を捨て駒にしようとしたことも否定しない」

逆にルルーシユは懺悔をするように目を閉じ、自身の視界を閉じた。

「扇さんに言われてゼロの後を追った私は神根島で向かい合っているゼロとスザクを見つけました。そこでゼロの正体がルルーシユだと知って動揺して逃げ出しました」

カレンの声を耳に入れたルルーシユはゆっくりと瞼を開く。

「ジェレミアとの戦闘をC・Cに任せて降りた神根島でスザクに捕まり、そのまま皇帝の前に引きずり出された俺はゼロであった記憶を消された」

「記憶を……………？ そんなことが出来るのか？」

「現に俺は記憶を失いエリアーに戻されて、思い出すまでただの学生をやっていた」

杉山が困惑しているが、ギアスのことを説明するわけにはいかない

ので事実だけを告げて納得させる。

「思えば、あの式典でのユーフェミアは、ユフィはおかしかった。彼女は俺の正体に辿り着いていて、皇籍を返上して受け入れようとしていた。そんな彼女に負けた俺と握手した瞬間、何かに抗うようにして飛び出し、日本人の虐殺を指示した。それまでのユーフェミアからは考えられない行動だ」

「つまり、ブリタニアには記憶や意識を操作する技術がある？」

千葉が信じれない様子で藤堂を見る。

人は自分を納得させる材料を提示させれば後は勝手に折り合いをつける。

「あのシャルルならば皇族が自分に逆らわないように、意の沿わない行動をしないように生まれた時から何らかの処置や偽装を施していたとしても驚かんよ俺は」

ギアスという力を知らなければ、後は事実を繋ぎ合わせた結果が真実となる。

ユーフェミアに罪はない。辻褄は後で幾らでも合わせられるのだから、ユーフェミアに恨みが行かないようにしたかった。

「シユナイゼルは倒す。ブリタニアをぶっ壊す。そして優しい世界を作る。それが今の俺が行うことであり、全てだ」

大まかなことを語り終えたルルーシュはゼロの仮面を手に取り、被った。まだゼロでいる為に。

「各自が呑み込むにも時間がかかるだろう。しかし、時間は待つてくれない。このことを公表するもよし、俺の下に付くことは出来ないし離れるもよし」

結局、ルルーシュは仮面を被るしか生きることが許されないのかもしれない。それでもこの足を止めないと決めたのだから。

「今日一日で決めろ」

決めるにしてもルルーシュがいては邪魔になる。生徒会室を出ると、そこには幹部にも関わらず、面倒事は嫌いと言って参加しなかったラクシャータが立っていた。

「どうした、ラクシャータ」

「ゼロにプレゼントを持ってきたのよ」

そう言つて渡されたのはタブレット型端末だった。

受け取ったタブレット型端末を見下ろしたルルーシユは仮面の中で目を細める。

「何かの設計図………この大きさは、まさかダモクレス？」

表示されているデータ内の構造の寸法に符合する物で真つ先に思い浮かんだのがダモクレスだった。

「ラクシャータ、これは」

「プリンより、だつてき。似合わないことをするもんでしょ、伯爵も」

物憂げなラクシャータが告げた送り主に心当たりのあつたルルーシユは、シユナイゼル側も一枚岩ではないことに気付いた。

「助かる。感謝するぞ」

「本人に言つてあげたら」

キセルをユラユラとさせて、用は済んだとばかりにラクシャータはルルーシユに背を向ける。

「ああ、そうそう」

何歩か進んで足を止めて顔だけ振り返る。

「幹部連中を集めたのに、玉城がいないのはなんで？」

「口が軽い奴が幹部なわけがないだろう」

「ははっ、違うないっ！」

一応、初期からの付き合いなのに集まりに呼ばれもしなかった玉城であつた。

「二つだけ聞いていいか？」

エンジン音だけが響く中で、仮面を付けっ放しのルルーシユは前を見たまま両隣に聞いた。

「奇遇だな。私も聞きたいことがある」

「そうそう、この車はどこに行ってるのよ」

機上の人ならぬ車上の人となったルルーシユはジェレミアに運転を頼んで車を出してもらったのだが、何故かC・C・とカレンも付いて来てしまった。

「それはともかく、どうして助手席に座ろうとした俺を後部座席に引き込んだ？ 三人で座る必要はないだろう」

頑なに目的地を明かさうとしないルルーシユは手元のタブレットを操作しながら口にする。

「ルルーシユって本当に女心が分かってないのね。C・C、今ならアంతアが言っていたことが理解出来るわ」

「分かってくれるか、カレン」

本来ならば二人用の後部座席に三人で座ると狭いことこの上ないのに、タブレットを操作する為に前傾になっているルルーシユの頭の後ろで勝手なことを言う二人。

「人の頭の後ろで勝手なことを言うな」

「流石、アーニヤだけでなく神楽耶にまで手を付けていた男は言うことが違う」

「手を付けてなどいない。だから、腕を抓るなカレン」

アーニヤのは騎士としての忠義だし、神楽耶は言っては悪いが勝手に妻を自称しているだけ。

ルルーシユに非はないのにC・Cは剣呑な目を向けて来るし、カレンは服の上から腕を抓ってくるしで引っ掻き回されている気しくない。

「じゃあ、せめてどこに行くかぐらい言ったら？」

「はあ、分かった」

シユナイゼルと戦う際の作戦案を五十ほど入力したところで観念したルルーシユは頭を上げて嘆息する。

「病院だ」

「病院？ 誰か入院してたっけ」

心当たりのないカレンが考えるも答えは出ない。当然だ。黒の騎士団やその関係者に会いに行くのではないのだから。

「コーネリアに会いに行く」

「やっぱり女の所か」

「何故、そうなる？」

コーネリアがどうして日本の病院にいるのか、今のタイミングで会いに行くのかを疑問に思うはずである。思わずルルーシユは呆れた様子で言ったC・C・を見た。

「本当のことだろ」

「そうだが……」

生物学的に言えば間違いなくコーネリアは女性だがC・C・の言い方には棘がある。

「それで、コーネリアに会いに行く理由は何だ？」

それを先に聞いてほしかったルルーシユは慚然とした面持ちを浮かべていたが答えないわけにはいかない。

「ここまで付いてきたんだ。来れば分かる」

ルルーシユがこの件についてはもう語る気は無いと分かると、カレンは気になつていたことを確かめようと口を開いた。

「ねえ、ルルーシユ。ギアスって私にもかけれる？」

「どうした、急に」

「いいから答えて」

やがて見えて来た目的の病院を視界に入れながらルルーシユは考える。

「ジェレミアのギアスキャンセラーを受ければ、恐らく可能だ」

口口に撃たれたシャーリーに『死ぬな』とかけたギアスが効いたのを覚えていた。

その前に、ジェレミアがギアスにかけられたSPのギアスを解く為に街中でギアスキャンセラーを何度も発動させたことを聞いた時、一つの推論が出来上がった。

(一度ギアスを使った人間にも、ギアスキャンセラーを使えばもう一度ギアスにかけることが出来る)

当然、その場合は以前にかけた命令は打ち消されるが利点は十分にある。

「俺はもうギアスを使う気は無いぞ」

「え、なんで？」

「ギアスは、王の力は人を孤独にする、か」

「ああ、今の俺にギアスは必要ない」

便利な物があるのならば使うべきと考えたカレンだったが、ブリタニアと同じ土俵に上がったのならば下手な行動が命取りになると知っていたルルーシュはC・C・Cの言葉にうなずきながら安易な手に頼らないことを告げる。

「失うのが怖いからだろ」

ボソリと呟いたC・Cが本音を言い当てていたが、ルルーシュはもう何も言おうとしなかった。

「でも、今のままじゃスザクに勝てない」

「スザクに勝つのは簡単だ。ジェレミアのギアスキャンセラーを使えば。生きろというギアスが常時発動している状態のあいつには致命的だ」

ギアスが発動し続けているということは、死にたいと思いつづけていると同じ。ギアスが解ければスザクは躊躇いも無く自死を選ぶ。

「それでいいの？ 本当に」

「良いも悪いもない。アイツは敵だ。それ以上でも、それ以下でもない」

仮面を被っているルルーシュの表情は何い知れない。だが、カレンはそれで良いとは思えなかった。

「でも、そのギアスキャンセラーで確実にランスロットに乗っているスザクを捉えられるの？ 足の遅いジークフリートで」

「難しいと言わざるをえんでしょうな」

テレビで見た、エナジーウイングから見て紅蓮と同じ第九世代のランスロットの機動力を思い出したジェレミアも正直な感想を口にする。

「キャンセラー発動時はどうしても無防備になってしまいます。仮にギアスを解除したとしても、攻撃が止まるかは未知数」

ジークフリートの大きさも考えれば、ギアスキャンセラーが効く間



合いにまで接近されれば如何なジェレミアであつても撃墜されるのは目に見えている。試すにはあまりにも分の悪い賭けだろう。

「ぬう、そう言われると」

改めて考えたルルーシユも唸らざるを得なかった。

「だから、私にギアスをかけて」

「ギアスをカレンに？」

「ナイトオブワンの映像を見たけど、今のスザクに勝つ為には私よりもっと強くならなくちゃいけない。でも、紅蓮はもう限界まで強くなつてるし、人間そう簡単に強く成れたら苦労もしない」

その為にカレンが思いついたのがギアスだった。

「スザクもギアスを受けて強く成つてるんですよ。なら、私だつて」

「……………だが、なんとギアスをかける？ 『生きる』とかけたスザクのあれは尋常ではない精神状態で初めて有効に活用できるものだ」

「簡単よ」

ルルーシユではなくゼロが黒の騎士団のエースであるカレンに望む物はたった一つ。

『勝て』、に決まつてるじゃない」

ジェレミアがギアスキャンセラーを発動して危うく事故を起こしかけたことで、これは仕方ないとルルーシユはカレンにギアスをかけた。

その直ぐ後、病院に到着し、ゼロの姿に騒然となる待合室に頓着せず、案内図を見て目的地の病室へと向かう。

「お久しぶりと言った方がいいかな、コーネリア」

ノックもせずに病室に入ったゼロは、開口一番にベッドで横になっているコーネリアに向かって挨拶する。

「ゼロ!? 何故ここに！」

「いい、ギルフオード」

主人の見舞いに来ていたギルバート・G・P・ギルフオードが立ち上がっていきり立ったが、ベッドから起き上がることも出来ないコーネリアが制止する。

「姫様、しかし…………」

納得のいつていないギルフオードだったが、ゼロが仮面を外すとそちらに視線を移して目を見開いた。

「ちよ、ちよつとゼロ……」

「黙ってる、カレン。私達が口を挟んではいけない」

仮にも何度も戦って来たコーネリアに正体を明かそうとしているルルーシユを止めようとしたカレンの腕をC・C・が抑えた。

「やはりお前がゼロだったか、ルルーシユ」

素顔を晒したルルーシユの顔を見ても驚きもしないコーネリアは落ち着き払っていた。

「ええ、その様子では誰かから聞いていましたか」

「シユナイゼルから、な」

恐らくそうだろうと思っていたルルーシユにも驚きはなく、嘗ては仲が良かった腹違いの姉弟はその過去を思わせない凍てついた視線を交わし合う。

「ゼロがルルーシユであると聞いて、寧ろ納得したよ。動機はやはり復讐か」

ダールトンの分析は当たっていたな、とブラツクリベリオンの時と同じことを言うコーネリアにルルーシユは目を細める。

「復讐、か。今は、どうだろうな」

「何？」

復讐だけが動機だった時間はもう過ぎ去った。ナナリーの為という理由も、一度は死んだと確信しても歩みを止めなかった時点で使えない。

「今の世界を壊し、新しい時代を作る。ナナリーが………ユファイが求めた優しい世界を作る為に俺は戦う」

ギリツ、と歯を食い縛る音が病室に響いた。

「ギアスという卑劣な力でユファイを操り、捨て駒のように殺した男の言葉とは思えんな……！」

体が動けるならばどんなことをしても殺してやると苛烈な目で語るコーネリアから放たれる殺気は、思わずカレンが身構えるほどだった。

「ユフィをギアスで操ったのは確かに俺だ。だが、ああするしかなかった」

「貴様あつ!!」

「コーネリア様っ!!」

激昂するコーネリアが痛む体を押しつけて起き上がったのを見たギルフォードが慌てて抑えつける。

「あの時にはギアスを解除する方法が無かった。俺が冗談で口にした日本人を虐殺しろという言葉でギアスにかかってしまったユフィに、あれ以上の罪を重ねさせないようにするには殺すしかなかった」

「誤ってかけただと……っ!? 世迷言を!!」

「信じれないだろうが事実だ」

傷口が開きかねない勢いにギルフォードが必死で抑える中でルルーシユは、特殊コンタクトを外してギアスのマークが常時浮かんでいる左目を見せる。

「ユフィは独力でゼロの正体に辿り着いていた。あの式典で邪魔だったユフィにゼロを騙し撃たせるのが俺の計画だった」

ルルーシユの目的は最初から皇帝シャルルとブリタニアという国の在り方を壊すだけで、多くの犠牲を望んでいたわけではない。

日本人を虐殺させては無駄にブリタニアに対する憎しみを煽り過ぎてしまう。犠牲を出すにしても最少に留めることを目標にしていた。何よりも日本人を虐殺させるなど、言うてはなんだが効率が悪すぎる。

「俺はユフィに負けた。皇位継承権を返上してでも、俺とナナリーを守ろうとしてくれたユフィに絆されたんだ」

皇族の地位にある人間にとっては自分の全てを奪われるに等しい、あの孤独と絶望感を知るルルーシユだからこそユーフェミアの決断の重みを知っていた。

「……………ギアス嚮団にあったレポートに、ギアスの力を使い過ぎればいずれはそれに呑み込まれてしまうとあった。あの時、あの瞬間にそう都合良くそんなことが起きるといえるのか」

「ユフィは俺の初恋だった」

腹違いの妹だったけれど、疑り深いルルーシュをして彼女に仮面は不要と思えたほど裏表がなく温厚で心優しい性格をしていたユーフェミアがきつとルルーシュの初恋だった。

「だから——」

何かを言おうとしたルルーシュは口を閉じた。

許しを乞おうと、謝罪しようとして、どんな建前や言い訳を述べようとも、死んだユーフェミアが生き返ることはないのだから。

「あなたには、俺を撃つ理由がある」

ルルーシュは懐から銃を取り出し、コーネリアが横たわるベッドに向かって投げた。

危なげなくキャッチしたギルフォードから銃を奪い取ったコーネリアが銃口をルルーシュに向ける。

「ルルーシュ、アンタ……!?!」

カレンが止めようとしたがC・Cに止められた。

服に防弾対策をしているジェレミアは病室の外で見張っており、幾らカレンの身体能力が並外れているように、この間合いでは銃を撃つ方が早い。

「撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ」

迫る死を前にしてもルルーシュは怯えず、ただコーネリアを見つめる。

「ルルーシュっ！ 私が撃たないと思ったか!」

「いいや、あなたがユフィを溺愛している姿を良く知っている。その愛情はブリタニアや世界を想う気持ちよりも強いこともな」

「ならば何故、私に銃を渡した!」

「言ったはずだ。あなたには俺を撃つ理由がある」

銃に弾が入っていないなんてこともない。

ジェレミアから銃を借り、弾が入っていることを確認してコーネリアに渡したのだから。

「どんな理由があろうとも、言い訳をしようともユフィを殺した事実に変わりない。シュナイゼルとの戦いにおける作戦案と非常時の対応策は一通り記しておいた。星刻と藤堂達がいれば、ゼロの中身がす

り替わっていようと問題はない」

ここでコーネリアに撃たれて死んでも、ルルーシュがいなくても回るように事前に準備は終えている。

「それだけの覚悟があるなら……」

コーネリアは未だ収まらない感情を無理に押し留めながら銃口を下げ、烈火の目でルルーシュを見つめる。

「——になれ」

「何だど？」

「それこそがお前に与える私からの罰だ」

ギルフォードやカレンにも予想外なコーネリアの要求にルルーシュは片眉を上げた。

## 第十二話 ダモクレスの空

会談前、ルルーシユは一人でアツシユフオード学園の地下にある機密情報局へと降りていた。

「ロロ」

牢というには現代的すぎる収容施設の中にいたロロはルルーシユの呼びかけに応えて顔を上げた。

「少し痩せたか」

部屋から出られず、与えられた食事だけを食べる以外に何もしていないロロは元から細かった体が更に絞られているように見えて、ルルーシユは心配げに訊ねた。

「外でのことはテレビを見て知っているよ。大変みたいだね」

「ああ、全くシユナイゼルの所為でいらぬ苦勞を背負い込んでいるよ」

「向こうもきつと同じことを思っているよ」

「かもしれない」

殆ど一日中をゼロとして過ごさなければならぬルルーシユに、こゝも軽い口を叩ける者がどれだけいるだろうか。

偽りの兄弟であつても久しいと思える会話にルルーシユの頬を自然と緩む。

「シユナイゼル……陛下と会談するんだって？」

「ああ」

「じゃあ、ここに来たのは僕を殺す為か」

今までルルーシユはロロを殺すことなく虜囚の身としたまま、それ以上は何もしなかった。

皇帝となつたシユナイゼルとの会談を前にしてロロに会いに来た理由など、どこに行つても邪魔者にしかならないロロに始末を付けに来たと思えなかつた。

「いや……」

そう言つてルルーシユは懐に手を伸ばして、取り出したリモコンのような物を操作する。

「なっ!？」

すると、ロロの脱獄を防止する為に常に下に下ろされ続けていた特殊強化ガラスが上がっていくのを見たロロは目を見開く。

やがてロロが潜り抜けられるところまで上がったところで椅子から腰を上げてモルルーシユは動かない。その後ろには誰もおらず、少なくともロロが感じられる範囲内において誰かの気配は感じられない。

「……………どういうつもり？」

「シュナイゼルが明確に敵となった以上、俺も何時まで生きていられるか分からない」

「だから、死ぬ前に僕を解放すると」

頷いてロロの言葉を肯定したルルーシユは厳しい面持ちで顔を上げる。

「幼い頃の話だがシュナイゼルとチェスをして一度も勝てたことが無い、この俺がだ」

勿論、既に大人であったシュナイゼルと子供であったルルーシユの年齢の差は考慮に入れるべきであるが、ゼロとしての中華連邦での戦いでも明確に勝利と言えるものではなかった。

「皇帝となり、シュナイゼルがその能力の全てを發揮してブリタニア軍を動かしたら俺でも確実に勝てるとは言えない」

負けるつもりはない。勝負は勝つ為にするものであって、この八年の間に積み上げて来た物を賭けてルルーシユは挑むつもりだ。

「俺が帰って来れる保証はない。だから、戦う前に全てを清算しようと思った。ヴィレッタも機情の者達も既に解放している。お前が最後だ、ロロ」

仮に帰って来ても、ルルーシユが想定している未来においてロロの兄として二度と会うことは出来ない。

「ランペルージの名は、ここに置いていく。V. V. も死んだ。ブリタニアはどうあっても形を変えていく。お前はもう自由だ」

ランペルージの名は我が青春の場所であるアッシュフォード学園に思い出と共に。

与えられた使命ではなく、自分が望むように生きろと言つてルルーシユはロロに背を向けた。

「出来るならば戦場で敵として出会いたくはないな」

カツン、カツンと遠ざかっていく足音にロロは足を踏み出した。

「……兄さん」

家族の温もりを、優しさをくれた人を追いかけたかったのかはロロにも分からない。

「……兄さん」

何を言いたいのか、何か月も考え続けても答えの出せなかった問いに直ぐに答えを出せるはずがない。

「……兄さんー」

追いついた先にいたルルーシユの背中に声をかけても、既にゼロの仮面を被った彼は振り向かなかつた。

「——達者で暮らせ、ロロ。体には気をつけてな」

そんな愛情の籠った声をかけられてはロロが何かを言えるはずも、何かを出来るはずも無かつた。

ロロは何も言えず、機密情報局から出て行つたルルーシユの残影を目の奥に感じながら膝を付いて泣いた。

「僕はずっと誰かの道具だつた。甘い言葉で利用してくれたら良かったんだ」

ギアス嚮団に体感時間停止のギアスを買われて暗殺を繰り返していた。良い様に利用されていると分かつててもロロは居場所が欲しかつた。

「兄さんは嘘つきなんだ。偽りの弟だつた僕を殺したいと思つていたはずなのに」

嘘つきが吐いた言葉を信じてしまいそうになる。その愛が本物だと信じてしまいそうになる。

「道具で良かったんだ。死ぬまで騙してくれれば」

道具は使う者がいて初めて価値が出る。

ルルーシユにならボロ雑巾のように使われて捨てられても本望だつた。どんな理由であつても必要とされているのだから。



「兄さん、僕は……………ロロ・ランペルージなんだよ」

寄る辺を失くしたロロは、初めて自分の意志で進む道を決めなければならなかった。



神聖ブリタニア帝国の第九十九代皇帝シュナイゼル・エル・ブリタニアと超合衆国所属の黒の騎士団CEOであるゼロの二大巨頭の会談は決裂したと語られている。その実態は会談中にブリタニア軍を動かして、超合衆国の領土となった支配から解放された日本に近づいたことにある。

そして何よりも大きいのは、トウキョウ租界を消滅させたフレイヤ弾頭を搭載した天空要塞ダモクレスの存在。

「ペンドラゴン上空で使われたフレイヤは、映像や画像から予測するとトウキョウ租界で使われた時と比べ、効果範囲はおよそ10倍」

シュナイゼルが指揮するブリタニア軍との決戦場としてルルーシュが選んだのはフジ山近郊。

フジ山に赴く黒の騎士団の旗艦である斑鳩のブリッジにて、超合衆国よりこの戦いに限って全権を委譲されたゼロであるルルーシュはモニターにデータを表示させる。

「このままシュナイゼルが言っていたように地上三百キロメートル上空に上がられれば手が出せず、あちらからは世界中にフレイヤを撃ち込むことが出来る」

どよめくブリッジ内にルルーシュの静かな声が響き渡る。

「各エリアの軍隊は、我々黒の騎士団と対峙しており簡単には動けない」

次にモニターに表示したのは、世界地図と二大勢力の軍が対峙していることを示していた。

「シュナイゼルが動かせるのは本国にいた部隊とダモクレスだけ」

そうは言っても残るナイトオブブラウンズであるドロテア・エルンスト、ルキアーノ・ブラッドリー、モニカ・クルシエフスキーとその直属の部隊もいる。精鋭と名高きロイヤルナイツも随行しているだろう。

「黒の騎士団は日本解放戦でトウキョウ決戦に赴いたメンバーと星刻の部隊、そして我らに付いたジノとアーニャのみ」

フレイヤの恐怖の前に超合衆国の結末も揺らいでいる。各エリアや加盟国の防衛に黒の騎士団を派遣しなければならなかった。

「数で劣り、シュナイゼルにはフレイヤがある」

救いと言えるのは、シュナイゼル軍がフレイヤで従わせられていることと、兵の質においては決して負けていないこと。

「もしもこの決戦に負ければ、パワーバランスは簡単に崩れる。全てがシュナイゼルの前に屈することになるだろう」

逃げて同じことだ。再戦は出来ず、決着はここでつけるしかない。

「鍵となるのは、ラクシャータに届けられたこのダモクレスの設計図」  
送り主は不明だが、お蔭で急造で作られたダモクレスには本来あるべき近接兵装が搭載されていないことが分かっている。

「ゼロ、本当に出るのか」

今は斑鳩にいますが、直ぐに蜃気楼で出るようになっていた総大将の前に扇要が立つ。

「王が動かなければ部下は付いて来ない」

「だが」

不安そうな扇の変わらなさに、仮面の内側でルルーシュは笑った。  
「私の役目はこの戦いで終わる。最後の仕事だ。好きにさせてくれ」

本来ならば超合衆国の加盟国の代表達しか知らないことを告げても扇の表情は変わらない。既に伝えるべきことは全部話したから。

「……………最初にゼロを認めたのは俺だ。だから、俺から言えるのは一つだけだ」

黒の騎士団がその名前になる前からの、最も初期の頃に最初にゼロに従うと決めた扇は大きく息を吸って吐き、緊張を解してた頭を下げた。

「ありがとう、今まで。俺達は最後までゼロを信じる。勝ってくれ」「ふっ、まさかあの頼りない男にそこまで言われるようになるとはな」命令を発する者と受ける者以上にも以下にもならなかった二人は、最後の最後に対等に成れたのかもしれない。

「あれが天空要塞ダモクレス……」

十数分後、フジ山を挟むようにしてブリタニア軍と黒の騎士団は対峙し、斑鳩のモニターには拡大されたダモクレスが表示される。

『この戦いこそが、世界を賭けた決戦となる』

斑鳩から発進し、その前に浮遊する蜃気楼のコックピットから出て立つゼロルルーシユの演説が始まった。

『シユナイゼルはフレイヤによる恐怖で人々を縛り、強制的な平和を押し付けようとしている。しかし、そんなものが本当に平和と呼べるのか？ 自由と呼べるのか？』

仮面の内側に内蔵されたマイクで拡大されたゼロの声が戦場全体に響き渡る。

『違う、断じて違う。確かに人の歴史は争いで彩られているといい。今後も恒久的な平和は訪れないのかもしれない。だが、だからといって諦めるのか？ シユナイゼルに与えられた恐怖に従うのであれば幸福なのか？』

黒の騎士団の大半はブリタニアによって占領された国々や脅かされて来た者達で占める。

恐怖で従わされる恐ろしさを良く知っていた。

『努力を止めた時、人類は停滞する。これは世界の、人類史の、そして我々の明日を掴む為の戦いである！』

何も変わらない停滞する日常に腐っていく心。その恐ろしさを知るからこそ彼らは戦うのだ。

『打ち砕くのだ！ 敵を！ シュナイゼルを！ 天空要塞ダモクレスを！ 明日を掴む為に！』

奇跡を起こす男であるゼロの名が連呼される。

シュナイゼルの読み通りに、世界の希望を集めて象徴となった男を砕くためにブリタニアもまた演説を行う。

『人が猿であった時から今まで、歴史の中において血が流れなかった時はない。何故か？ 人は争わずにはいられないからだ』

他者より強く、他者より先へ、他者より上へと望み続けて人は歴史を歩み続けて来た。だが、その間にどれだけの血が流れたのか、どれだけの悲劇が繰り返されてきたか。

『強者と弱者は常に互いの立場を入れ替えながら何度も同じことを繰り返す。この決戦に負ければ、今まで弱者を虐げて来たブリタニアが弱者に落ちる。そうなれば待っているのは強者に虐げられる日々だ。ブリタニアに虐げられてきた者達は言うだろうね。因果応報、お前達もやってきたことだろうと』

未来を見てどうする。明日を夢見てどうする。大事な今は今だ。喪うのは現在だ。

『争わなくていい、苦しまなくていい、泣かなくていい。君達に待っているのは血の流れない平和な世界だ。願わくば、これが人類にとって最後の戦争であることを祈りたい』

国元には大事な者達がいる。守らなければならぬ。例えば悲惨な未来が待っているとしても、彼らが今を平和に過ごせるならば不確定な未来に身を投じるよりも、確実な今日を守るためにブリタニア軍は戦う。

「カノン、全軍にパターン<sup>デルタ</sup>△を通達を」

「……………了解しました」

パターン<sup>デルタ</sup>△が示す意味を直ぐに理解したカノンは一瞬の躊躇の後、全軍と一機に向かって部隊を動かす通達を出した。

真つ先に動き出したランスロット・アルビオンとブリタニア軍の動

きは蜃気楼に乗り込んだルルーシユにも見えていた。

「軍を広範囲に展開した？ 航空部隊による通常戦闘にしては、ランスロットだけ突出させて……………まさか!？」

自分達に有利な戦況を作る為に部隊を動かしてくるところまでは予測していたルルーシユは、シュナイゼルがしようとしていることを見抜いて驚愕した。

「フレイヤが放たれる！ 全軍後退!」

「遅い」

ルルーシユが全軍に通達し、軍が後退を始める前に急速に距離を詰めたランスロット・アルビオンがランチャーを構えていてフレイヤは発射されていた。

旗艦である斑鳩ではなくトップであるゼロが乗る蜃気楼を狙って放たれたフレイヤがその威力を発揮すれば、黒の騎士団の中核が消滅する。

「間に合わない!？」

後退を続ける蜃気楼は逃げ切れる。間に合わないのは最前衛にいた部隊。

戦力として期待され、最前衛にいた特務隊隊長の杉山賢人は己の命に見切りをつけた。

「被害を最小限に抑える為には!!」

自身の隊を下がらせて暁を駆って向かって来るフレイヤを見据えた。

「無駄だよ。このフレイヤは、ダモクレスから射出された時には臨界状態にある」

起爆前に弾頭を破壊しようとしている暁をモニターで見るシュナイゼルは無駄な行動を嘲笑った。

「っ!?! 井上、吉田……………」

廻転刃で弾頭を切り裂いても光を溢れさせるフレイヤに己が失敗を悟った杉山の脳裏にブラックリベリオンで戦死した仲間達のこととが脳裏を過った。

「杉山あっ!?!」

杉山のお蔭で想定される地点よりも大分前でフレイヤは爆発したが、それでも無傷というわけにはいかない。

前衛の一部を、文字通り抉り取られた形になった黒の騎士団に大きな動揺が奔った。

「静まれ！ フレイヤの影響はそれほど大きくは」

黒の騎士団の動揺を収める為にはゼロが一喝するしかない。しかし、その瞬間を狙うようにフレイヤの影響範囲の上から回り込んで接近していたランスロット・アルビオンが蜃気楼を強襲する。

「死ぬ、ルルーシュ」

シュナイゼルの読み通りに、ルルーシュは指揮官としての役割をこなさなければならず、これほどの事態の動揺を抑える為に自身の周りに気を配れない。

総大将の立場にありながら前線に出て来たルルーシュを狙うのは常套手段。だが、あまりにも速過ぎる。

「スザク!？」

メーザーバイブレーションソードを構えたランスロット・アルビオンの速さは、蜃気楼の絶対守護領域を使う暇をルルーシュに与えない。

「兄さんをやらせない！」

シュナイゼル側がチェックメイトをかけた瞬間に、秘密裏に潜入して暁に乗り込んでいたロロが体感時間停止のギアスを発動してランスロット・アルビオンに体当たりをかける。

「……………なんだ!？」

体感時間が停止している間に突撃を受けたスザクは、暁がしがみ付いているのを見て僅かに動揺した。

「逃げて兄さん！」

「ロロ、何故!？」

「邪魔をするなら」

「させない！」

機械ならではの動きでメーザーバイブレーションソードを逆手に持ち替えたスザクに対抗するように、ロロが再びギアスを発動させ

る。

「この近距離なら幾ら最新世代って言っても」

体感時間を停止させられたパイロットに合わせて動きを止めたランスロット・アルビオンに、廻転刃刀を使ってコックピット部分を狙おうとしたロロ。

「駄目だ！ 逃げろロロ！」

「ギアス能力か……………呪われた力が！」

「そんな!？」

迫る危機にスザクにかけられた『生きろ』というギアスが反応してロロの体感時間停止のギアスを打ち破り、ランスロット・アルビオンのメーザーバイブレーションソードが逆に暁の胴体を切り裂いた。

機体が爆発する前にモジュール式の緊急脱出装置が作動して、ロロは巻き込まれる前に逃げる事が出来た。

「ギアスを持つ者は全て死ぬ」

ユーフェミアを殺したギアスに対する憎しみだけは残っていたスザクは狂相のままに、スパーヴァリスに持ち替えてパラシユートを開こうとしている暁のコクピット部分に狙いを構える。

「スザクウウウウウウウウウ!!」

放たれたスパーヴァリスの射線上に蜃気楼を滑り込ませたルルーシユは絶対守護領域を展開させ、背後のロロを守る。

「やはり邪魔をするか、ルルーシユ」

暗く赤く光る目で、しかし穏やかに笑ったスザクは放たれたハドロンショットを易々と躲し、最初に与えられた自分の役割が終わったことを自覚する。

「何故、お前は どうして…………」

「人は狂わずにはいられない時がある」

「じゃあ、あなたはもう死ぬべきよ」

もう戦えなくなったロロすらも簡単に殺そうとする嘗ての親友の姿に痛ましさを覚えるルルーシユの下に黒の騎士団のエースが救援に現れた。

「いいのかい？ 黒の騎士団を守らなくて」

スザクはあくまで先兵に過ぎない。

通信を聞いたルルーシュがハツとして戦況図を見れば、フレイヤによって動揺した黒の騎士団をブリタニア軍が呑み込んでいた。

「黒の騎士団が崩れていく……シユナイゼルめ、初めからこれを目的に」

フレイヤで黒の騎士団を動揺させ、第九世代のランスロット・アルビオンの機動力を活かして総大将のゼロを襲って指揮をさせない。

スザクに気を取られている間に、両翼からナイトオブブラウンズが進軍して各部隊で各個撃破していく。

「流石だな、この策を早々に使わせるとは」

このままでは黒の騎士団は敗れると判断したルルーシュは、今日の為に仕込んだ仕掛けを発動する為にスイッチを取り出した。

「全軍に通達する！ 五分後に作戦名『フジ』を発動する。繰り返す五分後に『フジ』を発動する!!」

出来るならば使いたくなかった作戦だが、こうなっては致し方ない。

この世に二機しかない第九世代であるランスロット・アルビオンと紅蓮聖天八極式が超速戦闘を行っている最中、ルルーシュが全軍に通達してから一分経った時点でブリタニア軍は黒の騎士団の中層にまで到達していた。

もう戦術も何もあつたものではなく、特に前線は乱戦の様相を呈している。

「ゼロ！ ダモクレスに動きが」

作戦名『フジ』が発動するまで後二分というところで斑鳩より通信が入った。

「まさか、早すぎる!? 今、フレイヤを撃てばブリタニア軍も巻き込まれるぞ!!」

しかし、センサー類が強化されている蜃気楼のモニターにはダモクレスから放たれたフレイヤ弾頭がハッキリと見えた。

「すまん！」

作戦開始を早めることすら言う時間も惜しくて、この作戦で死ぬ者



達に謝りながらルルーシュはスイッチのボタンを押し込んだ。

「っ!? エネルギー反応、フジからです」

「ブレイズルミナスの出力を強化、早く!」

ダモクレスのコントロールルームで管制官の報告を聞いたシュナイゼルは僅かに目を見開き、素早く最善と思われる指示を下した。

直後、ブレイズルミナスに守られたダモクレスの直ぐ近くのフジ山が突如として噴火して、火柱や岩石がぶち当たって揺らぐほどの衝撃を与える。

「地形を利用するのはゼロの基本戦術だったね。失念していたよ」

コンソールにしがみついて倒れることは避けたシュナイゼルの目を、溶岩が直撃して目標の地点よりも大分近くで爆発してしまったフレイヤの光が照らし出す。

「フレイヤも撃墜されてしまったか、こうでなくては」

黒の騎士団は両翼から襲い掛かるブリタニア軍によって中央に押え込まれるように戦っていたので、両側から迫られて押し出された形の前衛がフレイヤにまたも消し飛ばされた。想定では中層まで一気に消し飛ばすつもりだったが、溶岩によって着弾地点が伸びず、更にはブリタニア軍もダモクレスの防衛部隊と一部の部隊が致命的なダメージを受けた。

「下層部のブレイズルミナス発生装置がオーバーロードしました!」

「修理にどれだけかかる?」

「未定ですが最低でも30分以上はかかると思われます」

流星に溶岩の直撃を何度も受けては装置の方が持たなかったらしい。

「予定から少し目算が狂ったけど、数の上では我が軍が圧倒的に有利になったのだから良しとしよう。ウォード隊とドレットノート艦隊をダモクレスの防衛に当たらせて」

両翼から押し込むブリタニア軍と突如として襲って来るフレイヤの脅威もあって黒の騎士団は総崩れに近い。

ルルーシュが必死に戦線を立て直そうとしているが、フレイヤだけでなく溶岩等の二重被害にあって難しく益々乱戦の様相を呈してき

た。

「シュナイゼル陛下、我が軍が交戦中であるのに」

ドロテアやモニカが次々と通信を送ってるがシュナイゼルの返答は決まっていた。

「必要だった。が、私も我が軍が巻き込まれるのは避けたい。10分だけ次弾発射を待とう」

「たった10分!？」

「そんな、陛下!？」

「黒の騎士団は恐慌状態に陥って総崩れになっている。陣形も我が軍が圧倒的に有利だ。それだけあれば君達ならば出来るだろう。仮に出来なくてもフレイヤの効果範囲内から逃げればいい」

「問いではない。出来ないで何も問題はないのだから。」

「……………分かりました。10分間は手を出さないで頂きたい」

「ああ、勿論だとも」

明らかに自国のトップを見る目付きではないドロテアに続き、モニカも通信を切るとシュナイゼルは苦笑した。

「次弾発射までの準備にかかる10分の時間を随分高く貸し付けたものですね」

「彼女達ならば出来ると踏んだままでだ。それに別に出来なくても何も困りはしない」

黒の騎士団が戦線を保てているのは個々の指揮官が檄を飛ばし、各兵が奮戦しているからであるが限度がある。

「これは、もう勝ち戦だよ」

あの状況からひっくり返すには、それこそルルーシュがシュナイゼルやブリタニア軍の頭の中を全て完全に読みでもない限り不可能だ。

ギアスに似た力があるらしいことは知っているが、ルルーシュがそうでないことを知っているシュナイゼルからすれば、もうこの戦争は勝ったも同然だった。

「残るフレイヤは後一発……………ダモクレスのブレイズルミナスに穴が出来たというのに、このままではフレイヤを使われずに負けてしま

う」

焦るルルーシュだが、既に『フジ』作戦を使ってしまった以上、奇襲となるようなものは残っていない。

尋常の方法で押し返そうにも数で圧倒的に劣ってしまい、フレイヤによる混乱を深めている黒の騎士団にそれだけの力が無い。

ジェレミアのジークフリートと、藤堂や四聖剣の千葉と朝比奈の隊は数少ない有利に運べているが後は劣勢である。

「カレンー！」

「スザクー！」

星刻とルキアアノ、ジノとドロテア、アーニヤとモニカが激闘を続けている中、他のどこよりも動き回り、激しい戦いを繰り広げているのはスザクとカレンだった。

互いの陣営に一機しかない第九世代の力を存分に発揮している。

「何故、カレンが僕の動きに付いて来れる？」

幾ら三人の天才が凶らずとも協力して作り上げた分だけ紅蓮の機体性能が上であることを加味しても、ギアスが常時発動しているスザクに敵う道理はない。

「自分だけがギアスを使ってると思うな！」

そう叫んだカレンの目が赤く光る。

「そうか、君もルルーシュにギアスをかけられたのか。勝つ為に仲間を利用するなんて、卑劣な」

「違う！ 私が見んでかけてもらったんだ！」

再び憎しみが燃え上がりかけたスザクは、予想外の発言に紅蓮の呂号乙型特斬刀への対処を誤った。

右手に持っていたメーザーバイブレーションソードが切り裂かれ、使えなくなっただけで放棄する。

『勝て』とかけられたギアスが私を強くしてくれる！」

そのお蔭で常時発動はしないがスザクに負けないほどにカレンは強く成った。

「……………そうか、君が僕を殺してくれるのか」

死に場所を追い求め続けて来たスザクを殺し得る力を持ったカレ

ンが牙を向けて飛ぶ。

「時間だ」

崩れそうで完全には崩れない黒の騎士団の抵抗に、10分かかってもブリタニア軍の進軍が止まった。

「チエックメイトだ。さあ、破滅の光を魅せてくれ」

ルルーシュが後手に回り過ぎる戦況を覆せないまま最後のフレイヤ弾頭が放たれた。

そして半数のブリタニア軍と黒の騎士団を破滅の光が襲う。

「シャーリー……っ?!」

爆心地に近かったルルーシュが咄嗟に遠く離れたシャーリーを想ってしまうほどに打つ手はなかった。

その瞬間、蜃気楼の近くで戦闘していたC・Cの額のマークが光った。

「っ!」

C・Cだけがこの戦場を呑み込んで何かを理解したが、何も出来ないままCの世界へと引つ張られた。

フレイヤ弾頭が放たれる数分前、神根島のシャルル・ジ・ブリタニアは悲願の時を迎えていた。

「陛下。同調準備、完了しました」

「ようし、始めよ」

装置の調整は済んだ。シユナイゼルとルルーシュの決戦に微塵の興味も抱いていなかったシャルルは黄昏の間前で、その時を待つ。

「世界中に散らばる遺跡を同化させます」

直後、ゼロとシユナイゼルの戦闘を遠巻きに撮影しているテレビ放送を見ていた人々は異変を感じていた。

「地震か？」

揺れる地面を見下ろした人達の上空に一斉に飛び立つ鳥達。

地球自体が鳴動し、世界中のあちこちで地中から奇妙な光が溢れ出す。

森の中で人間達よりも明確に異変を感じ取った動物たちは少しでも安全な場所へ逃げようと走り出す。どこまでも、どこまでも。

「各遺跡システム、同調完了しました」

ブリタニア発祥の地とも言える旧E・Uの島国で、中央アジアの砂漠地帯で、氷に覆い尽くされた永久凍土の地で、その他にも数か所の神根島と同じ古代の遺跡が眠る土地が、その人知を超えて張り巡らされたネットワークに繋がって、神根島に収束されて黄昏の間の門に描かれたギアスのマークを赤く輝かせる。

「これで既存の神の世界は終わる。破壊と創造、ラグナレクの始まりだ」

その門に向かってシャルルは自身の右の掌に篡奪したV・Vのコードを押し付ける。

途端、神根島ごと遺跡が鳴動して、光が全てを呑み込む。

「さあ、神よ。決着の時は来た」

次の瞬間、全人類は抗い様も無く一つに成った。

## 第十三話 ラグナレクの接続

数多の人間の人生を見る。喜劇を悲劇を、一つとして同じ物はなく、誰もが様々な思いを抱えて生きて来た。

誰かが生まれた側の視点で見ること Alternatively、子供が生まれている姿を見る時もある。

視点が次々に変わり、時に脈絡がなく、しかし一定の法則性の中に個我などという曖昧なものは、やがて意味を失くしていく。

『シャルル、皇帝になってみて何か分かった？』

どれだけの人間の人生を追体験したか分からず、個人としての自我を失った中でシャルルという名前に反応した。

『みんな、うそつきばかりですよ、兄さん。相変わらずです。ブリタニアという国は……』

その場にいる者は四人。

馬が草を食む湖岸に佇む女性と少女を少年と大人が眺めている。

『それを言うなら人間というなら、だろ』

『そうかもしれないね』

豪華な衣装を着た大人が自分の二回りは下の少年に敬語で話すその不自然さに疑問を挟むことも出来ず、ただ傍観者として見ていることしか出来ない。

『シャルル、忘れてないよね、僕等の契約を』

『分かっていますよ。神を殺し、世界の嘘を壊す……』

余人には意味の分からない単語も、彼らが話す意味を既に知っている傍観者は瞬きをする。

『何なの、V・V。急な用って』

一度目を閉じて開いた時、場面は切り替わっていた。

珍しいことではない。世界に干渉することも出来ずに何億、何兆も人間の人生をただ見ることだけを強制されれば諦めもする。

『人払いはしておいたわ。コーネリアも下がらせました』

言葉に連鎖して名前を呼ばれたコーネリアの視点で下がるように言われた時の気持ちを感じる。

尊敬していたマリアンヌに指示されたコーネリアは疑いもせず、警備の手を引かせた。その後起こることを何も知らず。

『ごめんね。シャルルがいなくて』

また瞬きをすると、今度はV・V・と呼ばれた者の視点で振り返って、身長差の関係でマリアンヌを見上げていた。

美しい女性なのだろう。見覚えでもあるのか、微かに人としての意識が反応した傍観者の見ている前で、V・V・が笑ったのを感じる。

『アーカーシャの剣の件なら』

『ん？ いや。シャルルのことなんだ。君に出会ってから シャルルは変わってしまったよ。互いに理解しあつていくのが楽しくなってきたみたいだ』

用件は違うのだとV・V・と呼ばれる者の中にいる傍観者は知っていた。

そしてV・V・が抱いている危惧が本質の所では誤っているとも告げることは出来ない。これはもう終わってしまったことなのだから。

『このままだと僕たちの契約はなかったことになってしまう。僕だけ残されちゃう』

本音はそれだ。変わることが出来ない自分、変わっていつてしまう周り。

どうしても取り残される恐怖を理解できるのは、人の世界においてコードを受け継いだことのある者だけだ。

『えっ』

『神話の時代から男を惑わすのは、女だって話』

マリアンヌもV・V・が徐々に何を言いたいかを理解したのだろう。元より察しの良いマリアンヌだから、僅かに膝を曲げたのは何があるうとも彼女の中にある騎士としての精神が危機意識を覚えていたから。

『マリアンヌ様』

また瞬きをすると今度はV・V・達を見下ろす視点に移り変わった。

このアリエス宮の警護の人間だったがマリアンヌに命令されて別の場所にいたところで、V・V・の手下の者にかけてられたギアスによってこの場所に来るように思い込んだ男の内の一に傍観者は入っていた。

『っ!?! あなたたち、下がちなさいと』

アリエス宮の主である皇妃の命令を無視して現れた護衛達に、マリアンヌは聞かれてはいけないことを聞かれたかを危惧し、V・V・に背中を向けてしまった。

『さよなら、マリアンヌ』

V・V・が短機関銃を取り出して構えたのを見ても、思考を一部剥奪されている護衛達は反応も出来ない。

辛うじて異変に気付いたマリアンヌがV・V・の方へ振り向くも、あまりにも遅すぎた。

『がっ!?!』

護衛の意識は凶弾によって切り落とされ、次の瞬間には階段に倒れ伏したマリアンヌへと傍観者の意識は移っていた。

全身を走る痛み、流れ出て行く血の感触は自身が既に助からないことを、何度も潜り抜けて来た実戦の中でマリアンヌも悟った。

『終わったよ。うん、偽装を始めて。目撃者はナナリーにでもしておこうか。犯人はテロリストということにしなくっちゃね』

指一本動かすことが出来ない強い倦怠感の中で、マリアンヌが柱の陰に怯えて隠れている少女の姿を認めたことで視点が移り変わる。

『アーニヤ・アールストレイム。一週間前から行儀見習いできていた少女』

ただ、トイレに起きてきただけのアーニヤは皇妃を襲う襲撃者に何もすることが出来ず、見つからないように隠れていた。

そしてその不運を嘆くことも出来ない。

『ああ、なんてこと……』

マリアンヌの左目に鳥が羽ばたいたような紅い紋様が浮かんだ直後、傍観者とは別にアーニヤの体に移った者は、V・V・の指示でギアスで操られた偽物のテロリストが来る前に逃げ出し、近くの森



の中で喘いでいた。

『これが私のギアス………人の心を渡る力!!』

コードを持つC・C・より授けられたが目覚めることのなかったギアスが肉体の死を切っ掛けとしてアーニャに乗り移った。

傍観者は瞬きをする。

『聞いたよ。残念だったね、マリアンヌのこと』

神殿のような建物を背に、何も知らない顔を装って嘘を吐くV・V・に怒りを通り越して明確な憎悪を抱くシャルルに乗り移った傍観者は、本当に少しずつ自分を取り戻していた。

『兄さんは嘘を吐いた。嘘のない世界を作ろうと誓ったのに!!』

決して違えない約束を結んだはずの双子の兄が吐いた致命的な嘘に、シャルルは血が出んばかりに強く拳を握る。

あまりの怒りに震える拳を振り上げそうになるのを必死に抑え込む姿を、後に口口と呼ばれることになる少年が無感動に見上げていた視点に移りながら傍観者は呟いた。

「馬鹿め」

視点は移り変わる。クルクルと、際限も無く。

『なに、ナナリーの記憶を?』

先程の場面からそう離れていない場所で、小さな少女と向かい合ったシャルルは驚きに目を見張る。

『しかし、そこまでやる必要は……』

躊躇している気配を感じながらも、少女は必要な事であるとシャルルを説き伏せる。

既に為された凶行が再び為されない保証はない。シャルルにも、もうV・V・に対する信頼は無きに等しい物であったからこそ、シャルルもやがて決断を下した。

『ナナリーの記憶を変え、光を奪おう。マリアンヌよ……』

何が大切かを履き違い、愛し方を間違えた愚か者に傍観者はハツキリとした怒りを覚えた。

『皇帝陛下、母が身罷りました』

まだ幼さを色濃く残す、愛しき妻に良く似た愛息を見下ろす視点に

落ち着く。

『だから、どうした』

強い目で訴えかける息子に努めて非情に対応する。

『だから!?』

ブリタニア皇帝としての仮面を被らざるをえないシャルルの真意を決して理解しえない息子は言葉を荒げる。

『そんな事を言う為にお前はブリタニア皇帝に謁見を求めたのか？

次の者を、子供をあやしている暇は無い』

『父上!』

『イエス・ユア・マジエスティ』

護衛の兵によって皇帝の足下へ駆け寄ろうとした少年は止められる。

『何故、母さんを守らなかったのですか!』

マリアンヌは守る必要がないほどに強かった、まさかV・V・が凶行に走るとは思いもしなかったと、刹那の間にシャルルの脳裏に言葉が思い浮かび、しかし決して口に出ることはない。

『皇帝ですよ。この国で一番偉いんですよ。だったら守れたはずです。ナナリーの所にも顔を出すくらいは……』

偉いからといって横暴に振舞えばその瞬間に貴族達は皇帝を追い落としてくる。

そんな当たり前のことすらも知らない子供の浅慮に、シャルルが同じ年頃には出来たことが何故出来ないのかと理不尽な怒りが湧き上がるのを抑える。

『弱者に用は無い』

ナナリーに会いに行くことも出来ない。

偽りのテロの目撃者に仕立てられたナナリーに近づけば、真相に近づくことを危惧したV・V・が口封じに殺そうとするかもしれない。

『弱者? それが皇族というものだ』

『………なら僕は、皇位継承権なんていりません!』

『おお……』

その場の勢いもあるのだろうが、皇子が自らの特権を捨て去ると宣

言した姿にどよめく貴族たちを尻目にシャルルは僅かに目を細めた。  
皇帝の前で愚かにも吐き捨てた愛息にこれだけの気概があれば敵国でも生きていけると、シャルルは怒りの仮面を被って立ち上がった。

「そんなものは愛ではない。ただの自己満足の独り善がりだ」

過去から現在に至るまでの全ての人類の人生を見届けたルルーシユは怒りから自らを取り戻した。



フジ山空域でシュナイゼルが率いるブリタニア軍と戦っていたはずのC・Cは、ナイトメアフレームのコックピットにいたはずなのに気が付いた時には地面に立っていた。

「そうか……」

夕焼けの朱に染まった世界に一人立つC・Cは直前にコードが反応したからこそ、この変化にも直ぐに得心がいった。

C・Cが立っているのも数メートル程度の広さしかない石畳で覆われた円形の床でその先はなく、下を見れば雲だけが延々と続いている。つまりは床自体が雲の上に浮いている。

先程まで誰もいなかった背後に、突如として人の気配が生まれた。

「ラグナレクを接続したか——シャルル」

「そうだ」

この世界にいるとしたら他に考えない人物を思い浮べて振り返る

と、何時か見たままの傲岸不遜な態度そのままに第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアは立っている。

「贖いの時が来たぞ、C・C。」

「贖い？ お前のだろ」

「マリアンヌを消しておいて良く言う」

知己である二人に互いを思いやるような気持ちは、もう欠片もない。

そこにあるのは互いを隔てる致命的なまでの溝であり、可能ならば顔を見ることすら厭う空気である。

「死者がこの世にいる方がおかしい。他人の体に住み着いているよりも、いるべき場所に帰してやっただけだ」

「貴様が道理を語るか、魔女め」

コードを受け継いだことで誰よりも道理を外れた存在が道理を語ることほど滑稽なことはない。

他者を嘲笑う笑みを浮かべるシャルルに、違いないとは思って苦笑を浮かべたC・C。は頭上を見上げた。

「アーカーシャの剣、完成していたか」

空に伸び続ける異様な柱のような物が白い天に突き刺さっていた。

まるでドリルのように捻じれながら穴を開けるように昇って行く柱。その意味が指し示すものを知っていたC・C。は険しい表情を浮かべる。

「未だ剣は未完成。あれはまだCの世界と現世を繋げたに過ぎぬ」

シャルルが言った直後、同じ光景を見上げた二人の視線の先よりドレスを纏った女性が現れる。

「昨日振りね、C・C。」

アッシュフォード学園のクラブハウスにて、ジエレミアのギアスキャンセラーによってアーニヤの体から完全に消え去ってCの世界に帰って行ったはずのマリアンヌが帰還して皮肉を吐く。

「化けて出たか、マリアンヌ」

「ええ、あなたに消されちゃったけど、無事に帰って来れたわ」

皮肉を態と贅辞として受け取ったマリアンヌはその場で片足立ち

で一回転する。

「あの世はどうだった？」

「さあ？　それが良く覚えてないのよね。私の認識では消えたその瞬間にここに来たようなものだもの」

生前と何も変わらないドレス姿のまま足振り上げたり、腕を振るったり感触を確かめる。

「まだこの空間からは出れないけど、やっぱり元の姿の方が良いわね」  
ずっと性能の低いアーニヤの体で我慢していたマリアンヌは全力で動いても壊れない体を楽し気に動かし続ける。

「——マリアンヌ」

小娘のようにはしゃぐマリアンヌに呼びかけたシャルル。

「シャルル」

ようやくシャルルの存在に気付いたマリアンヌは振り上げた足と共に捲れ上がったスカートを恥ずかし気に押さえつけ、愛しい男に抱き付いた。

「こうやって本当の体で触れるのは何年振りかしら」

「もう、八年にもなる」

離れた時間を噛み締めた二人は、触れあえる肌を惜しむように離れてC・C・と対峙する。

「後は我らの刻印を一つにすれば、この世界は完全となる」

「完全？　既に世界は一つになったのではないのか」

「いいや、今はまだ薄皮一枚で辛うじて一つになったに過ぎん」

強制的に人類の心一つにしたといっても、シャルルのコードだけでは一瞬だけの不完全な物に過ぎない。

「その為に、世界を一つにした瞬間に引き込んだC・C・を思考エレベーターを使って加速したこの世界に留めておるのだ」

今の世界は衝撃を与えれば千切れてしまうような薄い糸で繋がっているようなもの。この世界を完全な物とするには、C・C・のコードを追加しなければならない。

世界を一つにした状態でC・C・のコードを問答無用に奪うことは出来ない。こうやって別空間でコードとコードを合わせなければ

コードが壊れてしまう。

「じゃあ、外の世界は」

「一秒も経っておらん。所詮、ここはCの世界の狭間にある、精神だけを抽出した空間に過ぎん」

つまりはここで起こったことは現実世界にそうとしなければ何の影響も及ぼすことは出来ず、時間の流れが違う以上は干渉することは不可能である。

「だから、厳密には私も現実世界には何も出来ないのよね」

「それもC・C・Cのコードを合わせれば可能となる」

世界は仮初であろうとも一つになり、残る他人はここに居る三人であるから計画を成就したのも同然のシャルルとマリアンヌはC・C・Cがコードを渡すことを規定事項として捉えていた。

「誰が渡すものか、お前達なんか」

C・C・Cが嫌悪も露わに吐き捨てると、とシャルルは僅かに目を見開いて驚いて、既に知っていたマリアンヌは胡乱気な眼差しを向ける。

「なに、まだルルーシユと生きたいとか言うつもり？」

マリアンヌは馬鹿にするように笑った。

当のルルーシユは人類と合一化しているのだから、他人として生きるのは事実上不可能である。

Cの世界と密接な関係にあるコードを持つC・C・Cだからこそ、合一化してしまった心がどうなっているかは簡単に予測がついている。

「だとしても、私にある全てをお前達なんかに渡してなるものか」

C・C・Cの意地だった。一度はルルーシユに身も心も全てを預けたからこそ、例え厭うていたコードであっても嫌悪を感じる者へと落ちてしまった二人に奪われることを認めることは出来なかった。

「どれだけ長く生きようと、失う瞬間には惜しくなるか」

何も分かっていないシャルルはC・C・Cの宣言を、そうやって切り捨てた。

「ま、気持ちは分からないでもないけど」

女でしかなかったマリアンヌはC・C・Cの気持ちは分かっても計

画の成就を前にしているのと、消されてCの世界に帰された恨みもあつて頓着する気はなかった。

「これで仮面は消える。皆がありのままの自分でいられるのだ」

一歩一歩確実に距離を詰めて来るシャルルから逃げもせず、キツと強い眼差しで睨み付けていたC。C。は大きく息を吸い込んだ。

「私の共犯者なら助けてみる、ルルーシュ!!」

「ふん、馬鹿なことを」

無駄な行為にシャルルが嘲笑った瞬間、世界が蠢動した。

『その願ギアスい、確かに受け取った!!』

集合的無意識と合一化していた何かがC。C。の呼びかけに応えて、この世界に現出しようとしている気配を三人が同時に感じ取る。

「馬鹿なっ!!」

三人が見上げた先で、何かが出てこようとしている。

「まさか、コードを持たない者が思考エレベーターに干渉しておるのか……っ!? 出来るはずがない! 理論を超えているのだぞ!!」

霞が集まるように中空に現出しようとしている何かがしようとしていることを看破したシャルルは信じられないと瞠目する。

やがて指が現れ、手の形を成し、腕が伸びて肩から先は連鎖的に生まれれていく。

「ルルーシュ——っ!!」

未だ不安定の形ながらも完全に現出した者の名をC。C。が叫んだ直後、雷鳴のような音と共に彼は祭壇に降り立った。

「何を人の女に手を出そうとしている」

膝をついていたルルーシュはゆっくりと立ち上がり、その裸身を晒した。

「何故、裸なんだ!」

恰好のつかない状態に思わずC。C。は叫んだ。

「ここは違うだろ! あれだけ恰好良く現れたのなら最後まで貫き通せよ!!」

「何を怒っている?」

正直、あのタイミングで助けに来てくれたことに、C。C。の少し

前に起動したばかりの乙女回路が音を立ててキュンキュンしてたのに、まさかの全裸での登場に感動が台無しである。しかも、本人は何故怒られているのか分かっていない。

「服を着ろ！」

「お、おお、そういえば忘れていた」

「なんで忘れる！」

ルルーシユにだって言い訳はある。

「なにせ全人類と一つになっていたのにな。服を着るという習慣を忘れていた」

と言いつつも、腰に手を当てて恥ずかしがる様子もないルルーシユに逆にC・Cの方が見えていて恥ずかしかった。

「まあ、問題はあるまい。俺の身体に恥ずかしいところなぞない」

「シリアスにならないから、いいから服を着ろ！」

バシコンツと音を立てて平手で殴られたルルーシユは痛みに頭を押さえながら、仕方ないと目を閉じて集中する。

「これで問題はないだろう」

パシユツと音を立ててルルーシユは思考エレベーターを操作してアツシユフオード学園の制服を身に纏う。

「ルルーシユ……っ！」

「これはこれは母上。お久しぶりです、というのは死人に対しておかしな話でしたか」

絶対にありえないはずの登場に驚愕して自身の名を呼んだ母に、いつそ冷淡なほどの顔を向けたルルーシユは冷然とした面持ちで両親を見下す。

「我が両親でありながら、また壮大な計画を立てたものだ。全く情けなくて泣けてくる」

「それは私達の計画を知った上で否定するということかしら、ルルーシユ」

「勿論」

この場において最も上に立っていたのはルルーシユだった。

シャルルもマリアンヌも、決してありえないはずのルルーシユの登



場に動揺してしまっている。

「嘘を認められないなら、他者を信じることを止めたのなら、生きていくことを止めれば良かったんだ。なのに何時までも生に惨めにもしがみ付いて………みつともない」

他人に話を合わせたari、場に溶け込む努力無くして人は生きてはいけない。でなければ、国や民族などコミュニティというものは存在出来ないのだから。

「それが出来ないのならば、せめて他人に会わない場所で暮らすなり、自分だけでも嘘を止めれば良かった。他人に強要できる資格など、誰にもありはしないというのに」

誰もが嘘を使い分ける。家族の前、友人の前、自分ではない全ての者に対して別々の仮面を付ける。社会を前にして皆、違う顔をしている、しかしそれは罪か。ならば、素顔とはなんなのか。

「お前達だって、皇妃という仮面、皇帝という仮面を被っている。最早、我々は仮面ペルソナなしでは歩めないのだから」

「違うな。未来永劫に渡って嘘がムダだと悟った時、ペルソナは無くなる。理解さえしあえれば争いはなくなるのだ」

冷静さを取り戻したシャルルが反論したが、ルルーシュは「何も知らない子供の戯言だ」と言って嘲笑った。

「子供の戯言だと？」

ルルーシュこそ何も知らない子供であると言うのは簡単だった。しかし、あまりにもルルーシュが確信に満ちているように見えたからこそ、シャルルは問い返してしまった。

「理解し合えば争いは無くなる？ それ以前の問題だ」

実際にさつきまで人類と一つになっていたルルーシュだからこそ考える必要もない。

「ありのままの良い世界とは変化がない。生きるとは言わない。完結した閉じた世界に明日はない。人々は明日を望んでいる」

誰もが秘密を抱え、仮面を被ってきた。そして誰よりも秘密と仮面を被り続けてきたルルーシュは理解していた。

「ふっ、何を言うかと思えば」

「では、試してみるか？ たった四人が立てた計画を、全人類が賛同するかどうかを」

一度は笑ったシャルルは、ルルーシュが赤いギアスのマークを浮かべた両目を見た瞬間に固まった。

「出来るはずがない！ 幾ら絶対遵守のギアスであろうとも、ラグナレクの接続が成った集合無意識に命令をするなど」

「命令などしない。求めるのさ。お前達が望んでいる世界を願えとな」

Cの世界とは人の根源。謂わば、それこそが人そのものであることを知っているシャルルは、ギアスが効くかもしれないと予測してしまった。

「集合無意識よ！ 全ての人々よ！ 俺の最後のギアスで希う!!」

「ルルーシュ！ あなたって子は……」

「邪魔はさせんよ、マリアンヌ」

「C・C・っ!?!」

ルルーシュは天に向かって大きく両腕を広げて全人類に願おうとしているのを止めようと飛び出したマリアンヌをC・C・が阻む。マリアンヌの運動能力ならば避けてルルーシュに迫ることも出来たが、思考エレベーターを使って壁を作ったC・C・によって足を止めさせられた。

「——お前達が望んでいる世界を願え！」

ルルーシュの両目から彼の中にあつたギアスそのものが飛び出し、集合的無意識に向かって鳥のように羽ばたいて向かって行く。

「出来るはずがない。神が、人類そのものが嘘を認めるなど」

シャルルが必死に否定しようとしている最中、遂に集合的無意識に辿り着いたルルーシュのギアスが輝いて……。

「そんなんっ!?!」

集合的無意識が赤く輝き、突き刺さっていたアーカーシャの剣が砕け散ったのを見たマリアンヌが悲鳴にも似た声を上げた。

「儂とマリアンヌ、兄さんの夢が全人類に否定された……」

避けようのない現実を前にしてシャルルは呆然とした声を上げる。

「あなた！」

計画の失敗はCの世界との分離、つまりは死者との別れを意味をしている。

マリアンヌの体が足の爪先からゆっくりと消えて行く。

「マリアンヌ——っ！」

せめて愛しき妻と最後の抱擁を交わそうとしたシャルルはマリアンヌと一つとなった。

彼らが望んだ通りに他者と一つに成った瞬間を見計らって、ルルーシユは自分の心もそこに混ぜた。

「——っ!？」

「えっ!？」

三者の心が混ざった時、シャルルは反射的にマリアンヌを突き飛ばしていた。

嘗てシャルルが疑いもしなかった自身の母から受けた愛と、マリアンヌがルルーシユやナナリーに向ける愛が違うと気づいてしまったから。

「これが嘘の無い結果だ。結局、お前達は目の前の相手のことすらも見えていない。自分が好きただけだったんだ」

二人の間に来た溝を無感動な目で見つめるルルーシユは彼らを哀れんだ。

「理想郷を捨て、善意と悪意が一枚のコインのように両立している世界に戻って何になるというの……!？」

「現実を振り返ろうともしなかった死者には関係のない話だ」

動くことすらも出来ずに立ち尽くすシャルルの横を通り、既に胴体にまで消滅が及んでいるマリアンヌの前に立ったルルーシユは冷酷に告げた。

「それでもあなたに感謝する」

表情も声も平坦なままだけど、ルルーシユはマリアンヌを抱きしめた。

「あなたは良き母ではなかったかもしれないけれど、それでも俺達を生んでくれた人には変わらない。だから、ありがとう」

「……………」

直ぐに抱き締めた背中も消えてしまったけれど、ルルーシユの耳元で最後にマリアンヌが残した言葉は恨み言だったのか、それとも……。

「空間が崩れる……」

母を看取ったルルーシユの下へとC・C. がやって来た時、世界が役目を終えて崩壊を始めた。

「俺達は現実を生きる。夢想の時間は終わりだ」

ルルーシユはC・C. を抱きしめて他人でいるからこそ実感できる肉の感触を味わう。現実の敗北者であるシャルルの前で。

「でも、戻ってもフレイヤが」

「その心配はない」

確信を持って言い切ったルルーシユは笑みを浮かべる。

「シャルルの計画が曲りなりにも発動できたのは、あの瞬間のフレイヤのエネルギーを取り込んだからだ。あの瞬間に呑み込まれなかった者は全員生きている」

ギアスの力を失ってもルルーシユの目に曇りはない。

「帰ろう、俺達の現実」

「それでも、戻っても戦況は圧倒的に不利だ」

「ふっ」

フレイヤの連発によって戦線が崩れている戦況を思い出して不安になったC・C. にルルーシユは笑った。彼らしく、魔王のように。

「俺を信じろ、——」

耳元でC・C. の真名を囁いたルルーシユが頬を赤くする彼女の顎を上げて優しくキスをした直後、世界は完全に崩壊した。

黒の騎士団の中核とブリタニア軍を巻き込んで爆発したフレイヤ

は霞のように消え去った。

誰もが呆然として動けない中、ただ一人だけ消滅を知っていたルーシユは蜃気楼の拡散構造相転移砲を使い、周りの敵を全て落とすしながら全軍に指示を出す。

「これでシュナイゼル軍にフレイヤはない。各指揮官は部隊の態勢を立て直せ」

決してがなり立てることはなく、寧ろ穏やかなほどの声は平静を失っていた黒の騎士団を落ち着かせて、指揮官が各部隊に指示を下していく。

「藤堂の部隊は前進、ジレミアは左翼の応援に回れ。朝比奈、右側の部隊を抑えろ——」

全人類と一度は一つとなり、その全てを覚えているルルーシユの的確な指揮が崩れかけていた戦線を立て直し、ダモクレスにて戦況図を見ていたシュナイゼルも異変に気付くほどの変化を見せる。

「何？」

シュナイゼルがフレイヤの消滅に呆然としていたのはそう長い時間ではないはずである。にも関わらず、押し込んでいたはずの部隊が反動のように、どんどん押し返されている。

「さあ、俺達の長い因縁にも決着を着けよう、シュナイゼル」

人という矮小なスケールに収まるシュナイゼルに、全人類を呑み込んだ魔王がその牙を向ける。

## 第十四話　ゼロ・レクイエム

時間をフレイヤが撃たれる数分前に巻き戻す。

シユナイゼル率いるブリタニア軍とゼロ率いる黒の騎士団の戦いは激化していた。両軍の戦闘の中で、最も激しい戦いを繰り広げている紅月カレンの紅蓮聖天八極式と枢木スザクのランスロット・アルビオンはフジの樹海に落ちても尚、争うことを止めない。

「カレン——ッ!!」

「スザク——ッ!!」

二人はお互いを憎み合っていない。それでも戦うことを止めなかった。

「死にたがりだ!!」

ルルーシユにかけられた『生きる』というギアスがなければ、とつくの昔にスザクは自死を選んでいる。

一時の感情でフレイヤという大量破壊兵器を使い、数え切れぬほどの命を奪った罪はとてつもなく重い。一人では背負いきれぬほど重すぎた。

「そうだ、俺はずっと死にたかった!」

あの夏の日、父であるゲンブを刺し殺した時から常にスザクは死を求めて来た。

誰も傷つかないことを願っただけなのに、より血が流れてしまう。罪から目を逸らし、軍務という言い訳の果てに訪れる死を望んでいた。

「俺を受け入れてくれたユフィを殺され、友を裏切り、自分を慕ってくれた子を騙し、仕えた皇帝すらも裏切った」

思えばスザクの人生は裏切られ、裏切つてばかりだ。

「もう、こんな世界を終わらせるんだ……!　苦しみに満ちた世界は沢山だ!!」

「勝手な理屈を!」

ナイトメアフレイムの四肢が、武器が激突する衝撃にコクピットの

みならず、地面すらも轟いていた。

「じゃあ、どうやって変える！ どうやったら変わるっていうんだ！」

「知るものか！」

「人は、世界は、こんなにも思い通りにならない！」

「だから 思い通りにしようって言うの?! それは傲慢なのよ!!」

「血が流れない明日がそんなに悪いっていうのか！」

「押し付けた平和は反発を生むんだって今までのことで思い知ってるでしょうが！」

既に死んでいる男が己が眼前に立ち塞がり続けることにカレンは我慢出来なかった。

「諦めた奴が………生きることを止めた奴が何時までも駄々を捏ねるな!!」

足元の木々を吹き飛ばしながら紅蓮は片手で倒立するように立ち上がり、ランスロットを蹴り飛ばす。

「なら、俺を殺してみろ!!」

ランドスピナーを使って地を噛み、即座に体勢を整えたスザクは自らを殺すように言いながらも、スーパーヴァリスを構えて紅蓮を狙う。

「やってやろうじゃないの！」

輻射推進型自在可動有線式右腕部を使って輻射波動砲弾を放ち、ランスロット・アルビオンのスーパーヴァリスを破壊したところでコクピットに流れる警報音にようやく気づいた。

「くっ、これで輻射波動も弾切れ」

「シールドエナジーも尽きた」

ランスロットが爆発するスーパーヴァリスを捨て、紅蓮と荒れ果てたフジの樹海の真ん中で向かい合う。

武装も大半を失い、機体を動かすエネルギー源も尽きかけている。次が最後になると二人は予感していた。

「全てを捨てた俺とここまで闘えるなんて、改めて君を凄いと思うよ」「スペックはこつちが上でギアスまで使っているのに互角。ふん、本当にアンタは私達の邪魔ばかりをする」

ブリタニア軍と黒の騎士団のエースとして幾度となく戦って来た相手に、初めて敬意のようなものを抱いたのかもしれない。

決着を着ける前の一瞬の静寂が訪れ、緩やかな風が一枚の葉っぱを舞い上げた。

「決着を着けましょう、私たちのすれ違いに！」

「これで、全てを終わらせる！」

示し合わせたわけでもないのに葉っぱが地面に落ちたのを切っ掛けとして、二機は全く同時に飛び出した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!」

ランドスピナーで直進した二機は中間点で激突する。

紅蓮は輻射波動の爪を突き立てんと伸ばし、ランスロットは固めた拳を叩き込まん構える。手を伸ばせば触る距離の刹那、スザクは笑った。

「ああ、ようやく——」

永遠を刹那に切り刻み、超速度の領域にありながらスローモーションのように迫る紅蓮の輻射波動の爪が見える。

カレンの技量を示すように、正確にランスロットのコクピットに迫っている。ギアスの力があつたとしても回避も防御も不可能。何もしなくてもスザクが待ち望んだ死がやってくる。

「っ!」

笑って死を受け入れたスザクは引き込まれ、何かと一つに成った。

コードを持つC・C。だけが合一されず、そのC・C。にギアスを与えられた繋がりのあるルルーシュだけが自我を取り戻せた。そして常時発動するほどのギアス効果に晒されていたスザクにも影響を及ぼす。

『——お前達が望んでいる世界を願え!』

何かと一つに成ったことすらも実感できないまま、そして切り離された感触を覚えた。

『スザク、あなたは生きて』

現世がCの世界から切り離される刹那、とても愛おしい人の声と温もりがスザクを包み込んだ。



(ユファイ！)

スザクには何も分からない。分からないまま、ギアスが消え去ったスザクは動いた。

「俺は、生きるッー！」

願われた。ただ、生きてほしいと願われたその想いを受け取ったスザクの体が動き、ランスロットの挙動が微妙に変化して……。

「っ!？」

激突した両機はまるでお互いを支え合うようにして膝を付いた。

「届かなかった……」

グラリと倒れ込んだ紅蓮のコクピットの直ぐ近くにまでランスロットの拳がめり込んでいる。対して紅蓮の爪はランスロットの肩に突き刺さるに留まっていた。

「おおおおお」

明滅するコクピットの中でスザクは声を漏らした。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おっっっっ!!!」

勝利の雄叫びではなかった。

俺は生きていると、世界に知らしめるために上げたスザクの魂の叫びだった。

「一体、何が起きている……」

天空要塞ダモクレスのオペレーター室にいたシュナイゼルは、刻一刻と不利になっていく戦況に眉を顰めていた。

そもそも、最後のフレイヤ弾頭がその本領を發揮せず、原因不明の消失をしてくからの動きがあまりにも不可解過ぎる。

「どうして我が軍が悉く後手に回る？ 対処の全てが裏目に出てしま  
うっ？」

シュナイゼルが指示を出している分も、現場指揮官の判断での行動も、悉くが読まれているとしか思えない。

「ありえない。この混沌とした戦況で全ての者の思考を予測するなご」

仮に指示を出しているシュナイゼルの思考を読まれたとしても、ドロテアやモニカ、ルキアーノといったナイトオブブラウズには現場での指揮権を預けている以上、どうしたって全てがシュナイゼルの考え通りの展開にはならない。

黒の騎士団だって現場判断で動くことはあるだろうし、一人の人間が戦場を支配することなど出来ない。

「ブラッドリー卿が撃墜されました?！」

ナイトオブブラウズの一角、ブリタニアの吸血鬼の異名を持つナイトオブテンの反応が無くなったのを見たオペレーターの声は最早裏返っていた。

相手にもラウンズやラウンズ級の者が何人もいるのだから、味方側の将が落ちることも十分にありえる。だが、戦況が不可解で、しかも不利になってきた状況で心の支柱の一つが抜け落ちた影響は大きい。

「黒の騎士団の後方よりブリタニア軍のシグナルが……」

別のオペレーターがこのタイミングで現れた援軍に喜色を露わにしたが直ぐに絶望の表情へと変わる。

「シグナルが黒の騎士団の物に変わりました」

「船籍照合………これはコーネリア皇女殿下のものです!」

「グリンドア騎士団の旗艦グランベリーも確認! マリーベル皇女殿下のシグナルも黒の騎士団の物へと変わりました?!」

援軍と思われたブリタニア軍が黒の騎士団のシグナルへと変える理由などたった一つしかない。

「シュナイゼル陛下、コーネリア皇女殿下より通信です」

「繋いでくれ」

強張っていた肩から力を抜き、椅子に深く凭れかかったシュナイゼルはおずおずと訊ねてきたオペレーターに力ない笑みを向けて言った。

『お久しぶりです、兄上』

「ああ、君を撃つて以来だね、コーネリア」

オペレーターがギョツとした目で振り返ってくるのを感じながら、この戦いの趨勢を見極めたシュナイゼルは優雅に足を組む。

「まさか君が敵に回るとは予想外だったよ」

通信先であるコーネリアは車椅子に座っているようだった。

無理もない。背後から自動小銃で撃たれたのだ。本来ならば病院から出ることも出来ない状況で無理を押ししているのは、あまり良くない顔色からも想像がつく。

『初めてあなたの予想を外れた行動を取れたことは喜ばしいはずなのに、私はなんら達成感を覚えません』

隣に立つギルフォードが主を心配するようにチラリと見た姿にシュナイゼルは苦笑を漏らす。

「カノンがノネットにまだ生きていたコーネリアを連れ出させたのは知っていた。君を殺さなかったのは私の甘さだったかな。それとも油断だったか」

『最早、どちらであろうとも意味はないでしょう』

「そうかもしれないね」

今度、シュナイゼルの口から漏れたのは失笑だった。

まるで図つたかのように通信が乗っ取られ、ナイトメアフレームのコックピットにいるゼロの姿を映し出す。

『そう、あなたは敗けたのです。躡けなければならぬと断じた人々に』

「人は恐怖を望まなかった、か」

戦況図を見上げれば、次々にシュナイゼルの指揮下にはないブリタニア軍やその軍と対峙していた黒の騎士団がこの地に集まってきている。

『あなたは世が世なら卓越する王に成れたかもしれない。だが、仮面を被ることを止めた以上、皇帝の器にはない』

フレイヤ弾頭はもうない。敵軍は自軍の数倍にまで膨れ上がり、投降して戦線を離れる者も多く離反者は止まらない。

これほどの戦力差を覆すことは如何なシュナイゼルを以てしても不可能だった。

「そうか。私はチェックメイトをかけられたのか」

「ああ……」

味方はいないし、この様子では援軍が来る気配もない。

逆転する要素が皆無とあつてはシュナイゼルも諦めざるをえない。すると、副官のカノンが溜息のような声を漏らした。

「教えてほしい。私の敗因はなんだい？ あのフレイヤが不発だったことか？」

『いいや、敗因はもつと簡単なことだ』

「簡単なこと？」

カノンにすら分かる極単純なことにシュナイゼルは気付いていない。

『以前のあなたには勝つ気が無かった。正確には、常に負けないところでゲームをしていた。しかし、今のあなたはそうではない』

シュナイゼルは状況に合わせて必然ではなく最善の手しか打たなかった。だから、『負ける』前に引くことも厭わない。『勝つ』ことに拘らないから、『勝つ』ことに拘る者に負けることはない。

『シュナイゼル、俺もずっと仮面を被って来たからこそ、あなたの仮面が見える。その虚無の内側に芽生えたものがな』

ずっと仮面を被り続けて、遂には『自分』を見失ってしまった哀れな男がシュナイゼルだった。

『あなたは子供だよ。ようやく見つけた『自分』に振り回される小さな子供でしかない。獲得した自分に振り回されて自制が利かなくなり、俯瞰してきたゲームに熱中するあまり以前のスタイルに徹しきれない』

「……………くっふふふ、子供ときたか」

言い得て妙であると自覚してしまったシュナイゼルはようやく気づく。

「勝つだけなら本当に簡単だった。ゼロさえ消えればいいのだから」  
『そうすればこんなイレギュラーが起こることも、援軍が間に合うこ

とも無かった。あなたは俺に敗れたのではない。自分自身に負けたのだ』

「ゼロのナイトメアがブレイズルミナスの破損した下層より侵入！」  
各個人で判断して動き始めている戦場に、もうゼロの指揮も必要ない。

ダモクレスに接近して防衛部隊を瞬く間に突破した蜃気楼が単機でダモクレスに突入する。

「デルタブロック、通信途絶！」

「第六フロートの制御ルームが破壊されました！ 真つ直ぐにここに向かってきますー！」

急造で建設されたダモクレスには近接兵装が搭載されていない。一度接近され、内部に侵入されてしまったらどうしようもない。

「これは設計図でも漏れたか。大方、ロイド辺りかな。彼はこういう兵器を嫌っているようだし」

迷うことなく真つ直ぐにオペレータールームに向かつて来る蜃気楼に、組んでいた足を解いて深く身を沈めたシュナイゼルは如何に自分が浮かれていたかを自覚する。

「総員に退艦許可を与える」

一度溜息を漏らしたシュナイゼルが下した命令は事実上の敗北宣言だった。

「陛下」

「カノン、君も行っていいよ」

「いえ、私は最後まで陛下と共に」

「君も物好きだね」

全てを見届けると決めたカノンと共にシュナイゼルは静かにその時を待ち続ける。

数分後、シュナイゼルとカノン以外、誰もいなくなったオペレータールームに繋がる壁を壊して現れた蜃気楼。

「ああ、もっと遊びたかったな」

淡く微笑んだシュナイゼルは悔いを漏らした直後、蜃気楼は右腕を向けてハドロシヨットを撃った。

「私に勝った褒美だ。最後の仕掛けを楽しんでくれよ」

第九十九代皇帝シユナイゼル・エル・ブリタニアは、不穏な言葉を残してこの世から影も形も無く消え去った。

「分かっているとも、全てをな」

結局、独力では乗り越えることが出来なかった腹違いの兄の最期を見届けたルルーシユは蜃気楼を駆って、ダモクレスの頂上に向かって進む。

「う、うう……」

意識を失っていたカレンは体に走る痛みに呻くようにして目を覚ました。

今は失ってしまった懐かしい人の夢を見たような気がしたが、今が戦争中であることを思い出したカレンは寝かされていた地面からバツと体を起こす。

「痛っ……!?!」

その拍子に全身に奔る痛みで絶句する。

コックピット近くまで壊された影響でカレンも無傷というわけにはいかなかったようで、感じからして骨折はしていないようだが涙が出そうなほど痛い。

「目を覚ましたのなら手伝ってくれないかな」

暫く痛みで蹲っている間もガチャガチャと何かを動かしている音が聞こえ続けていたが、気に入らない男の声も聞こえてはカレンも顔を上げずにはいられない。

「スザク……」

見上げた先にはランスロットから伸ばしたチューブを紅蓮に繋いでいるスザクがいた。

「おはよう、短い午睡から覚めた気分はどうかかな」

「最悪よ。最初に目覚めたのがアンタじゃなかったら、もう少しマシンなのよね」

「それだけ口が回るなら大丈夫そうだ」

不器用な手付きでオイルに塗れながら勝手に人の愛機を弄っているスザクにカレンは青筋を立てる。

「紅蓮に何してるのよ」

「見て分かるだろ。エネルギーを拝借してる」

ラクシャータに整備の仕方を教わったカレンも、スザクが紅蓮のエネルギーをランスロットにバイパスしようとしているのは分かった。

「武器もないし、右手もないのに、そんなことをしたって」

「飛べればいい」

黙々とバイパス処置を施しているスザクの目に赤い光はなかった。

「ねえ、アンタ、何か変わった？」

戦う気概やさつきまでの後ろ向きに突っ走る気配を感じなくて思わずカレンは問いかけていた。

「もつと真面目に生きろ、何やってんだって殴られちゃってね。勿論、君じゃないよ」

「分かってるわよ」

前後の脈絡的にそれをしたのは自分しかいないのだが、あまりにも愛情の籠った声で言うものだからサブイボが立っているところだったので、否定されて逆に安心する。

「で、心変わりしたんなら何をやるの？」

「言っただろ、飛ぶのさ。昔の約束を果たす為に」

「約束？」

分かっているかないカレンの様子を見るに、あの一瞬の間にあったことを深く心に刻んだスザクは憑き物が落ちたように笑った。

「君も手伝え。ルルーシユの騎士を自称するなら、ね」

スザクとカレンが口喧嘩をしながら作業をしている頃、遂にエナジーが尽きた蜃気楼を乗り捨ててダモクレスの頂上に辿り着いたルルーシユは一人の人物と対面していた。

「お兄様、ですね」

「そうだ」

実妹であるナナリーが目を開いて自身を見据えてもルルーシユが驚くことはない。

あの空間と共にC・C・とV・V・に連なるギアスは消えた。その効果も、二度と発揮することはない以上、ナナリーの目を覆っていた闇は既に晴らされている。

ルルーシユは仮面を外し、素顔を晒す。

「八年振りにお兄さまの顔を見ました。それが人殺しの顔なのですね」

罵倒にも等しいナナリーの言葉に、目を細めたルルーシユは気付かれないほど微かに唇の端を上げた。

「では、お前は人殺しの妹……………いや、あの征服皇帝シャルルの子供である時点で俺達に大きな違いはない」

「それでも、少なくとも私は誰かを殺めたことも、破滅に追いやったこともありません」

人生で最も辛い時期を二人で乗り越えたとは思えない会話が繰り広げられる。

「お兄様、私はあなたの敵です」

愛情の欠片もない絶対零度の瞳がルルーシユを見つめる。

「お兄様もスザクさんもずっと私に嘘をついていたのですね。本当のことをずっと黙って……………でも、私は知りました。お兄様がゼロだったと」

「ああ、そうだ」

返すルルーシユの瞳も全く温かさを見せることなく、逆にナナリーの方が怯むほどに知らない姿を見せつける。

「シュナイゼルお兄様から聞きました、ギアスのことを。私にも使



ますか、その卑劣な力を」

少しでもルルーシユを揺さぶるように、決して明かしてはならない秘密を口にする。

「私は一度でもそんなことをしてほしいなんて頼んではいません。誰かを殺め、利用し、平和を得たところで虚しいだけです。私は、ただ皆さんがいればそれでよかったのに！ あなたは何故そんな簡単なことが分からないのですか！」

車椅子のひじ掛けを力一杯に叩くナナリーは泣いていた。

「お兄様に、この世界を手にする資格はありません。ゼロを名乗って、ギアスを使って人の心を踏みにじってきたお兄様には」

「では、あのまま隠れ続ける生活を送れば良かったのか？ 暗殺に怯え続け、何時か切り捨てられる未来が望みだったとでも？」

ひぐつ、とナナリーの喉が鳴った。

冷たすぎるルルーシユの眼光と言葉は全く揺るぐことなく、ナナリーをどこまでも射抜く。

「何時、私がそんなことを頼みましたか！」

ナナリーは、兄と二人だけで暮らせられればそれで良かったのに、どうしてこうなってしまったのだろうか。

「しかし、現実には様々なものによって支配されている。抗うことは必要だ」

ルルーシユはそう言って僅かにナナリーから視線をずらし、全人類と一つに成った時に見て来たことを思い出していた。

「もつと他に良い方法はないかと言われれば、あるだろう。俺に出来たのはこんな方法だけだ」

居場所を守るためにルルーシユは自分で取れる方法を狭めていた。

「人の心を捻じ曲げて尊厳を踏みにじって来た人が今更後悔など」

「どんな責め苦も、罰も受けよう。俺はそれだけのことをしてきた」

そしてルルーシユは止めていた足を進める。

「待ちなさい！ 来ないで！」

近づかれるのを忌避するように顔を歪めるナナリー。その姿を見てもルルーシユの足は止まらない。

「あつ……ダメ、来ないで！ お兄様まで巻き込まれるなんて……」  
たった数段の階段を上り、ナナリーまで後数歩という距離にルルーシユは足を進める。

「お兄様は悪魔です。私の言うことなんて一つも聞いてくれない。卑劣で、卑怯で、なんて……なんてひどい」

「もういい」

遂にルルーシユはナナリーの下へと辿り着き、泣き伏す彼女の足下に膝をついた。

「もういいんだ、ナナリー」

兄であるルルーシユとしての顔で、泣き濡れるナナリーの頬を撫でる。

『ダモクレスの自爆シークエンスが開始されました。乗員は直ちに退避して下さい。フレイヤ着火まで残り100、99、98……』

頂上部にアナウンスが響き渡る。

「シユナイゼルの仕掛けた最後の罠か」

全人類と一つに成った時、ルルーシユはシユナイゼルが一つだけ真実を言っていないことを知った。

フレイヤ弾頭は確かに会談の時点で残り三つだった。だが、未完成品、もしくは基準値に満たないフレイヤについては口にしなかった。

弾頭として撃つことは出来ず、こうやって自爆用に残していたシユナイゼルの残した最後の仕掛け。

「ああ………ごめんさい、お兄様。お兄様まで巻き込んでしまった」

「馬鹿だな、似合わない嘘までついて」

泣き続ける妹の髪を撫でつけるルルーシユに焦りはない。

『フレイヤ着火まで残り50、49、48……』

非情なまでにカウントは進む。

ルルーシユの蜃気楼はエナジーを失っており、どんな奇跡が起こっても二人が救われる道はこの場にはない。

「なあ、ナナリー。昔のことを覚えてるか？」

そんな中であつて、ルルーシユは何時かにナナリーに子守唄を歌つ

た時のように穏やかに話しかけた。

「お兄様？」

「前にもこうやって二人でどうにもならなかった時があったな」

日本に来たばかりの頃は右も左も分からず、子供二人ではどうにもならない時が何度もあった。その時のことを思い出すルルーシュは、ゼロでもなくナナリーの兄でもなくただの男として緩やかに微笑み、囲いに覆われた空を見上げた。

「あの日も、こんな強い日差しだった」

『フレイヤ着火まで残り25、24、23……』

兄の温もりを感じながら、迫るタイムリミットを前にしてもナナリーからも恐怖は消えた。

あるのは、たった一つの予感だった。

「動けない俺達の下へやってきたアイツは言うんだ」

太陽が陰った。あの日と同じように、あの時と何も変わらないままに。

囲いを破壊して頂上部に侵入してきたランスロット・アルビオンのコックピットから身を乗り出してスザクが叫ぶ。

「ルルーシュ！ ナナリー！」

「スザクさん！」

「遅いぞ、スザク」

ルルーシュが皮肉を言うのも、あの時と同じだ。

『5、4、3、2、1、フレイヤ着火』

ダモクレスは自爆し、不完全なフレイヤに呑み込まれてこの世から完全に消滅した。

『日本にて行われていた黒の騎士団との決戦は、シュナイゼル陛下の死亡とダモクレスの消滅を以てブリタニア軍は降伏——』

ブリタニア本国にある自宅にて、テレビに釘付けになっていたシャーリー・フェネットは微動だにせず見つめ続ける。

『ナイトオブテン、ルキアーノ・ブラッドリー卿の死亡も確認されており——』

一学生でしかないシャーリーはテレビやラジオといった情報媒体でしか遠く離れた日本の状況を知る術を持たない。

何回もチャンネルを変えた末に最も最新の情報を発信している番組に固定し、母親が心配になるほどテレビの前から動こうとしない。

『前エリアーのナナリー総督、ナイトオブワンの枢木スザク卿、そして黒の騎士団のゼロの行方が分かっています。とある情報筋によれば、三人はダモクレスの自爆に巻き込まれたとの話も——』

その日、シャーリーはテレビの前から動くことはなかった。



「シュナイゼル皇帝と黒の騎士団の決戦から既に早一ヶ月が経ちました」

アナウンサーとして現場からの中継にも慣れた感のあるミレイは、またしても良く知る地に降り立っていた。

「ここ、アッシュフォード学園で行われる予定の超合衆国の最高評議会にブリタニアの皇帝が召喚されるという情報がそこかしこに流れています」

シュナイゼルとゼロの会談が決裂した、ある意味では歴史上のター

ニングポイントと呼べる場所になってしまった愛校に複雑な思いは抱けども、仕事は仕事と割り切ってリポートを行う。

「注目されますのは、アッシュフォード学園にやってくるのは誰なのか？ 大戦後に戻られた前皇帝シャルル陛下か、第一皇子であったオデュッセウス殿下や黒の騎士団に協力して悪逆皇帝シュナイゼルを討ったコーネリア殿下が即位するとの話もあり、情報が錯綜しております」

篡奪したとはいえ、皇帝を名乗ったシュナイゼルが死んだ以上、早急に次の皇帝を立てねばならないのだが、問題があった。

大戦後に何事も無かったかのように姿を見せた前皇帝シャルルが再び皇帝になるのは、ブリタニアの民も超合衆国の者達も否定的なのだ。

となれば、順当に第一皇子であるオデュッセウスか、大戦で黒の騎士団を助けたコーネリアのどちらかが有力と見られていた。

「ブリタニア政府は皇帝が出席すると明言しており、実質的にこの会議の場が新皇帝のお披露目の場ともなるのです」

しかし、オデュッセウスやコーネリアに問題がないわけではない。オデュッセウスはその人柄や性格において何の問題もないのだが、敗戦国となったブリタニアが被るであろう戦後賠償の交渉を行うには力不足との見方も出ており、ブリタニアの民から不安の声が出ていた。

かといって、征服の先鋭だったコーネリアでは各エリアに対して配慮に欠けてしまい、余計に超合衆国の勢いを煽ることになりかねない。

「……………ブリタニアの皇帝専用機がやってきました！」

ブリタニアの命運を握っていると言っても過言ではない新皇帝が乗っているであろう専用機がアッシュフォード学園にゆつくりと下りて来る。

「まず護衛が……………あれってジェレミア・ゴットバルトじゃない？」

護衛と思われる者が真っ先に降りてきたが、オレンジの仇名を付けられたジェレミアであることに直ぐに気づいたミレイは思わず近く

にいたスタッフに確認してしまった。

「あ」

同じく困惑しているスタッフの声にミレイが顔を戻すと、滅多に本気で驚かない彼女をして目を剥かざるをえない者が皇帝専用機から下りて来た。

「ゼロ!?!」

フジ山決戦でダモクレスと共に消えたはずのゼロが皇帝専用機から降り立ち、多数の護衛に囲まれながら進んでいく。

「え、一体どうなってるの?」

「ミレイ・アッシュフォードだな」

ミレイだけでなくゼロの姿を見た全員が混乱している最中、背後から名前を呼ばれて反射的に振り返ると、ブリタニア人の男が立っていた。

「皇帝陛下よりあなたがリポーターをすることを条件に中継の許可が出ています。同行して頂きたい」

ゼロが齎すカオスに内心では飛び回りながらも外面は平静を装っていたデイトハルト・リートの提案に、ミレイは幾つかの確認を行った後に同行することにした。

流石に生徒会室で超合衆国最高評議会は行えない。体育館を改装して行われることになる。

嚴重な警備の中、ミレイらが裏口から体育館の中に入った瞬間にどよめきが襲った。

「ゼロっ!?!」

「何故、ゼロがブリタニア人と共に現れるのだ!」

外の民衆と同じくゼロを死んだ者と認識していた超合衆国の議員たちは口々に驚愕を露わにする。

「単純な事だ」

議長と向き合う代表席に一人で立つゼロは、少し演技が過ぎるぐらいの動作で右腕を横に広げて仮面に手をかける。

その動作が意味するものを予測するのは容易く、興味や動揺といった様々な感情の坩堝の中心にいるゼロの仮面が遂に外された。



## 最終話 皇帝ルルーシュ

第九十九代となった皇帝シュナイゼルが死にダモクレスが消滅した後、世界の大半の地域で喝采が起こっている中で反対に沈痛な空気に満たされている場所がある。

神聖ブリタニア帝国の首都である帝都ペンドラゴンの更に中枢であるペンドラゴン皇宮の謁見の間に集まった者達が沈痛な空気を放っていた。

「まさかシュナイゼルが負けるなど。これからどうなるのだ？」

「クーデターで皇位を篡奪した者が負けたからといって我らブリタニアが負けたわけではない」

「しかし、世界はそうは見ない」

「フレイヤに屈したとはいえ、皇帝継承を認めてしまった以上はシュナイゼルは我らの皇帝だったのだ。言い訳は利かん」

「そうだ、今は喜び浮かれている民衆もやがては気付く。我らブリタニアは敗けたのだと」

逃げるように集まった貴族達が口々に不安を口にする。

皇族であるオデュツセウスやギネヴィア、カリーヌが謁見の間に現れても貴族達の不安は消えない。

「早急に新しい皇帝を立てる必要がある」

「だが、誰に？」

「順当に行けばオデュツセウス殿下だが……」

「正直、敗戦国となった我が国を背負えるかと言われれば不安が残る」  
穏やかで争い事を好まない善良な性格をしていて他の人間から恨みを買ったりすることが殆どないオデュツセウスは皇子としてはともかく、やはりこの苦難の状況を背負える器ではないと貴族達は思っている。

「アイツらお兄様に」

「止めなさい、カリーヌ」



不敬とも取れる発言を繰り返す貴族達に第5皇女であるカリーヌが動こうとしたのをオデュッセウスは止めた。

「彼らの言っていることは間違っている。私は、シュナイゼルと違ってあまりにも凡庸過ぎた」

性格を考えれば、オデュッセウスがクーデターを企むことも実行に移すこともないだろうが、この苦難の状況において適任と言えるのがシュナイゼルだというのが皮肉だった。

「悔しいね。どうして私には、弟達や妹達と違って非凡な才能や能力には恵まれなかったのだろうか」

「兄上……」

窮地に陥っているブリタニアを救うに足る器ではないと誰もが、そして自分でも思っていることに悔しさを覚えて拳を震わせるオデュッセウスの姿に第1皇女であるギネヴィアも同様に忸怩たる思いを胸に秘める。

「私やカリーヌも同じ思いです。黒の騎士団に協力したコーネリアやマリーベルがいれば、もう少し状況も変わるものの」  
「彼女らはまだ日本にいる。直ぐには戻って来れないよ」

黒の騎士団と共に悪逆皇帝となったシュナイゼルを討ったという功績がある第2皇女コーネリアと皇位継承権第88位マリーベルがいれば状況は幾らか緩和される。

「仮に二人が戻って来ていたとしても、一年間皇族としての義務を放棄していたコーネリアや継承権が低すぎるマリーベルでは、貴族達が皇帝になることを認めようとはしないだろう」

実績や人物評価、能力という面ではコーネリアが次期皇帝最有力だが彼女はブラックリベリオン以後、先のシュナイゼルとの決戦までの一年もの間、自らの意志で行方を晦ましていた。幾ら相応しかろうが、これでは皇帝とするには不安が残る。

翻って、マリーベルの問題は皇位継承権の低さに尽きる。

実績や能力はコーネリアには及ばないとはいえ、候補には上がってもジヴォン家や他が後ろ盾になっても彼女が皇帝になつたとしても安心できる要素を見い出せない。

「やはり、父上にもう一度立ってもらおうしかない」

「――皇帝陛下、御入来!!」

皇族ですら先行きに不安を覚えている中でオデュツセウスが出した結論に一周回って誰もが戻って来た直後、護衛兵の声が謁見の間に響き渡って口を紡ぐ。

カツン、カツンと歩く音の主をチラリと見た何人かが上げたドヨツとしたざわめきが謁見の間を走った。

玉座の前の最前列にいたオデュツセウスがどうしたのだろうかと思つて顔を上げた時、丁度第九十八代皇帝だったシャルル・ジブリタニアが前を通り過ぎるところだった。

「父上……」

覇気のない背中と、一ヶ月と少し見なかつた間に十年以上も年を取ってしまったかのような征服皇帝の姿に、オデュツセウスのみならず謁見の間に集つた全ての者の口から息が漏れた。

「シュナイゼルは死んだ」

嘗ての姿の面影もないほどの姿で玉座の前に立つシャルルは、力の無い声で事実だけを述べた。

「皇位を篡奪したとはいえ、あ奴が皇帝だったのは紛れもない事実。我らブリタニアは敗れたのだ」

強いブリタニアを象徴する覇気溢れた皇帝シャルルはもういない。

今のシャルルでは、窮地に陥つたブリタニアを救い導く力を欠片も持ち合わせていないと気づいた貴族達の中には、絶望に深く肩を落とす者まで現れ始めた。

「我らは弱者となつた」

弱肉強者の論理を声高に唱えていたブリタニアだからこそ、弱者から搾取することに何の罪悪感も抱いていなかった。それでも何時かは自分達が弱者に陥るのではないかという懸念がなかつたわけではない。

しかし、たった一代で世界に覇を唱えられる地位にまでブリタニアを押し上げたシャルルさえいれば、そんな未来は訪れるはずがないと信じていた。

だからこそ、シャルルが放った決定的な一言が彼らの心を折った。「我らは、ブリタニアは 陛下がもう一度立ちさえすれば……！」

最前列にいた貴族の一人が不敬を承知で進言するも、貴族達よりも先に心が折れてしまっているシャルルには響かない。

「皇位は既にシユナイゼルに継承されておる。儂は既に皇帝ではない」

玉座に座する資格があるのは皇帝のみ。既に皇帝ではないシャルルは玉座に腰を下ろすことはしなかった。

「で、では、ブリタニアはどうなるのですか？」

シャルルさえいれば、また強いブリタニアに戻るのだと理由も無く信じていた貴族の一人が泣きそうな顔を浮かべる。

「敗北者の末路は貴様らも良く知っていますよう」

そう、今まで散々他の国にしてきたことを、今度はブリタニアがされても何の文句が言えようか。

征服し搾取して支配してきたブリタニアに下る因果応報の理。

「新たな皇帝を決めねばならぬ」

敗者の国を背負う者。その者次第で、ここにいる皇族や貴族、そして数多のブリタニア国民達の運命を握る皇帝を選出しなければならぬ。

「ですが、誰に……？」

「最も相応しい者が直に来る」

この場にいるオデュツセウスやギネヴィア、カリヌではなく、他の者となれば貴族達が思い描いたのが日本にいるコーネリアだった。

「コーネリア皇女殿下でありますか？」

「いや……」

「——私だ」

皇帝が否定した直後、怜悯な声が謁見の間に響き渡った。

開かれたままの謁見の間の扉から一人の青年が玉座へと向かって歩いて行く。

「な、なんで？」

真つ直ぐに玉座に向かう学生服姿の青年の顔に記憶を呼び起こし

たカリーヌが目を見開く。

玉座の前の段差で足を止めた青年は、目の前に立つシャルルを見上げて口を開く。

「どけ。そこは私が座する場所だ」

「……………ここに座る意味を理解した上でその言葉を吐くか、ルルーシユ」

「え、ルルーシユ？ まさか本当に」

「生きていた？」

「ナナリーが見つかった時に、もしかしたらと思っただけ」

シャルルが告げた名前から、青年が元皇子であるルルーシユであると幼い彼と交流のあった皇族三人は驚きながらも二人を見上げるしかない。

「全てを理解してこの場所に来た。もう一度だけ言う、どけ」

僅かに目を細めたルルーシユは最後の段差を乗り越え、シャルルと同じ位置に上って腕を横に振るった。

嘗ての自身を超える覇気を身に纏った息子の姿に目を閉じたシャルルは、一步横に退く。シャルルの行動の意味を理解して、再びどよめく謁見の間の皇族と貴族達。

「ま、待つんだ、ルルーシユ」

そのまま玉座に座ろうとするルルーシユを慌てて呼び止めるオデュッセウス。

「何か、オデュッセウス兄上」

「生きていてくれたのは嬉しいけど、些か冗談がすぎるんじゃないか？そこは皇帝の…」

振り返り自身を見下ろす腹違いの弟から放たれる威圧に一瞬怯んだオデュッセウスは背中に冷や汗を掻きながらも言わなければならぬことがあった。

「今は空席の座だ。誰が座ろうが、皇帝の器ではないあなたが気にすることではない」

「空席であろうとも其方が座っていい席でもない！」

「そうよ！ 何の実績もない。皇位継承権も持たないアンタがいて良

い場所じゃないのよ!!」

母親同士の仲が悪く、自身もルルーシユやナナリーを嫌っていたギネヴィアやカリヌが嘔みつくど謁見の間の空気が緊迫する。

「シユナイゼルを殺したのは私だ」

その緊迫の糸をルルーシユが冷ややかな声で断ち切る。

「何、だって……?」

「聞こえなかったのか? 超合衆国を作り、黒の騎士団を率いて悪逆皇帝シユナイゼルを討つたのは私だと言っているんだ」

ルルーシユが登場した以上の衝撃を持つ言葉が染み渡るよりも早く、弁舌と人心掌握術に長けたゼロそのままに場の流れを完全に掴んだ。

「まさか自分がゼロだなんて言う気? 仮にも皇族として生まれた者がそんなことをするはずが」

「人質として日本に送られ、戦争を起こして見捨てられた私がブリタニアに何の恨みも抱かないと本気でお思いか?」

信じたくはないと思ってもカリヌの中で生まれた疑念はどんどん膨れ上がっていく。

「奇跡の男が日本に現れたのは何故だ? 幾人ものブリタニア兵が裏切ったのは? ゼロが捕まり処刑されたと発表されるまでの間にナナリーが見つかったのは本当に偶然か? 一度死んだはずのゼロが再び現れたのは?」

事実だけを羅列すれば、後は勝手に線が繋がってしまう。

「私がゼロだ」

自らが作り上げた象徴を誰にも使われないように墮としながらルルーシユが高らかに謳い上げる。

「な、ならば皇帝の座よりも反逆者として処刑して然るべきでしょう。ゼロに一体、どれだけブリタニアが迷惑を被つて来たことか」

ルルーシユの言葉を否定しようとしめないシャルルに、言っていることは本当なのかもしれないと思ってしまったギネヴィアは苦し紛れに言い放った。

「同時に私の能力の証明にもなる」

「そんなのは屁理屈でしかない」

「しかし、必要ではないのかね？ 敗者となったブリタニアには」

「それは……」

シャルルが皇帝に戻らず、シユナイゼルが亡き今、ルルーシユは誰よりも皇帝に相応しい能力を示した。

臣下のように控えるシャルルの姿がどうしても視界に入ってしまったのもあって、ギネヴィア他、カリーヌらも二の句を告げなくなった。

「私もルルーシユが皇帝になるのを支持しよう」

「及ばずながらも私もルルーシユお兄さまを支持します」

「コーネリアっ!？」

「マリーベルまで!？」

そこへ現れたコーネリアとマリーベルがルルーシユの支持を表明したことで状況は一気に加速する。

「約束しよう、私がブリタニアを敗者にさせないと」

皇帝候補だった二人と前皇帝の支持を受けたルルーシユが玉座に座るのを誰も止められない。

「本当にいいのかい、ルルーシユ？ ゼロにまでなってブリタニアへの恨みを果たそうとしたというのに」

凡庸であろうとも真理を突くことの多いオデュッセウスを見下ろしたルルーシユはフツと笑った。

「良いも悪いもない。俺は俺が望む世界の為に皇帝であることを選んだのだから」

そうして、第百代皇帝ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアは本当の名で世界に出て行くことを選んだ。



宵闇の超合衆国の最高評議会が行われたアッシュフォード学園の屋上に複数の人影があった。

「ルルーシュウウツ!!」

「引っ付くな、リヴァル」

屋上にドアを開けた途端に飛びついてきたリヴァルに抱き付けられたルルーシュは嫌そうな顔しながら引き剥がそうとする。

「俺達親友だろ!」

「だとしても、男に抱き付かれて喜ぶ趣味は俺にはない」

「俺もそんな趣味はないっての!」

一か月間もの間、姿を晦ましたと思ったら世界の重要人物として躍り出た友人の変わらない姿に、リヴァルは鼻を噉りながら離れて笑顔を浮かべた。

「すまないな。色々なことを黙っていて」

「いいさ。親友だからって何もかも話さなきゃいけないってもんでもないだろ」

間違いなくルルーシュ・ランペルージの親友だったリヴァルの言葉に肩の荷を下ろしたルルーシュは周りを見渡した。

「リヴァルだけか?」

「ああ、今じゃ学園に残っているのは俺だけだからな」

秘密裏に連絡を取ったリヴァルに頼みごとをしたルルーシュは寂し気な彼の肩を軽く叩く。

「消去法とはいえ、生徒会長に成ったんだ。そんなしみつたれた顔を  
するな」

「おい、消去法ってなんだよ、消去法って」

「そのままの意味だが」

昔よりも遠慮の無くなったルルーシュにある種の肩透かしを食らったリヴァルは昔を思い出して嬉しくなった。

「それで約束のやつは？」

「おう、ばつちりだ。とっておきのやつをかき集めたぞ」

リヴァルが親指を立てて肯定すると、床に所狭しと並べられたそれらを見て鷹揚に頷いたルルーシユの背後で扉が開けられた。

「お待ちせ、諸君！」

仕事を終えてやってきたミレイ・アツシユフォードが元気に片手を上げて現れた。

「会長……………じゃなくて、元会長。流石に卒業したのに制服を着るのは如何なものかと」

振り返ったルルーシユの目には、学制服を着て学生時代と変わらないうテンションで現れたミレイの姿があったので本音が口を零れた。

「最初の一言がそれ!? 旧生徒会で集まろうって話だったから制服を着てきたのに……………」

「会長の制服姿が見れて俺は嬉しいっす！」

「リヴァル、変態っぽいぞ」

「私もそう思う」

「なんでき——っ!!」

慰めるつもりが何故か避けられてしまう男リヴァルの魂の咆哮が屋上に響き渡った。

「うん、このやり取りも懐かしいわ。流石に社会人になったらハッチャけることも出来ないし」

うんうん、と満足した様子で一人で頷いたミレイは表情を改めてルルーシユを見る。

「ルルーシユ陛下、と呼んだ方がいいのかしら？」

「やだな、元会長。昔と同じでいいですよ、この場では」

「この場では、か」

「ええ」

ルルーシユが民主主義を標榜する最高評議会を引っ掻き回した場を問わずともその目で実際に見たミレイは場を弁えていた。

「ルルーシユ、本当に皇帝になっちまったんだな」

間違いなくセンセーショナルなニュースとなって世界を駆け巡っ



た報道に、友人が遠くなったように感じてリヴァルは寂しそうな表情を浮かべる。

「ああ、そして今日がアツシユフォード学園に来れる最後の日ともなる」

皇帝となったことで、もう学生のままでいることは許されなくなつた。それは同時にランペルージでいられるのも今日が最後ということになる。

「皇族だったことやゼロだったってこと以上に、もう一緒に遊ぶことは出来ないんだな」

「すまない」

「ルルーシユが謝ることじゃないだろ」

申し訳なさに謝るルルーシユの背を軽く叩いたりヴァルは精一杯笑つた。

「皇帝が親友な奴なんて他にいないだろ？ 俺の一生の自慢にさせてくれ」

「子孫に語り継げるほどの自慢にさせてやる」

「ははっ、期待してるよ」

一庶民でしかないリヴァルは明日になれば皇帝となるルルーシユとこうやって馴れ馴れしく話すことが許されなくなる。それどころか面と向かい合う機会すらも無くなるだろうことを予感している二人なりの別れの仕方だった。

「ところで、ルルちゃん。私、何も聞いてなかったんだけど」

麗しい友情に感動する気持ちを横に置いておき、リヴァルほどには蚊帳の外に置かれたことに納得がいつていないミレイはルルーシユを下から睨め付ける。

「アツシユフォード氏には事前には話は通してあった」

「わ・た・しは何も聞いてなかったんですけど」

私を強調するミレイから顔を逸らしたが、直ぐに顔を掴まれて引き戻される。

「……………政略結婚を破談にして勝手に家を飛び出した娘には何も教えなくていい、だそうだ」

「あの糞ジジイ……っ！」

ルルーシユがアツシユフオード氏と呼ぶのは祖父のことであると知っていたミレイは、とっておきの意趣返しにギリツと歯を噛んだ。「今までのアツシユフオードの献身は忘れない。家の再興はなるが、それでもアナウンサーを続けるんですか？」

まさかの大穴からの大逆転に大歓喜しているであろう実家の両親のことを考えたミレイはあっけらかんと笑った。

「暫くは続けるわ。私の目的の為には大事な事よ」

耳元で艶つぽく告げられた声に、大型の肉食動物に狙われたような悪寒がルルーシユの背筋に走ったが理由は分からない。

「ルルーシユ様」

疲れているから風邪でも引いたかとルルーシユが内心で考えていると、屋上に二人の人物を伴ったジェレミア・ゴットバルトが現れた。

「ニーナ、ロロ」

ルルーシユが皇帝となって実権を握ったことで解放することが出来たニーナと、偽りの弟役をこなしていたロロが姿を見せた。

「ミレイちゃん、私」

「いいのよ、ニーナ。でも、二人とも制服着てないのね」

現役生であるリヴァルと一応まだ学籍のあるルルーシユとロロ。もう籍は残っていないニーナは私服で、ロロも同様とあつては卒業生なのに制服を着て来たミレイの身の置き場がない。

「変わらないね……でも、ルルーシユがゼロだったなんて」

「そうだ。俺がユファイを殺した」

一気に緊迫する二人の間で何も言えないリヴァルとミレイ。

まだ屋上に足を踏み入れないロロを残して一歩踏み出したニーナは肩の力を抜いた。

「話はジェレミアさんから聞いた。ユーフェミア様が望んだ世界を作ると言うのは本当？」

「ああ」

「……………私は、ゼロを許しはしない。多分、一生」

睫毛を伏せたニーナは肘を抱きながら大きく息を吸う。

「でも、それとは別に私自身が仕出かしたことの答えを出さなきゃいけないと思う。だから、手伝う。それをユーフェミア様も望んでくれると思うから」

「ニーナは、強いな。俺はそこまで辿り着くのに大分時間もかかって遠回りをしてきたのに」

「強くなんかない。弱いからこうなっちゃったんだから」

自分の弱さと小ささを自覚したニーナの確かな変化に笑みを浮かべたミレイに見惚れていたリヴァルは、ハツと思いついて屋上の扉の向こうから出てこようとしないうろを引つ張り出す。

「ほら、出て来いってロロ」

「で、でも僕は皆さんを騙していて」

C・C.とV・V. 関連のギアスの能力は使えず、解けたことで偽りの記憶が解けている。どんな視線が向けられるか容易に想像が出来るロロは二の足を踏んでいた。

「ロロ、お前はロロ・ランペルージ。俺の、ルルーシュ・ランペルージの弟だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「兄さん……」

「そういうこと。今となっちゃ数少ない生徒会メンバーなんだから逃げるなよ」

「え、えっ!?!」

こいつだけは逃がすまいと捕まえて離さないリヴァルの腕の中でテンパっているロロの姿に笑みを零したルルーシュは、次に現れた者の姿に表情を綻ばせた。

「シャーリー」

「ルルー」

カンカンカンと階段を駆け上がって来たシャーリーは屋上に出て来た勢いのままにルルーシュを見つけて飛びつく。

流星にここでバランスを崩すのは格好悪いので、しっかりと待ち構えて体勢を整えていたルルーシュは二、三步よろめいただけで受け止めきった。

「ずっと心配してたんだよ」

「すまない……………つて、この調子だと今日何回謝ることになることやら」

「それだけのことをしたんだよ、ルルは」

首にしがみ付いていたシャーリーが一步離れて鼻先に指を突きつけて来る。

「そうだよ。何時も僕達はルルーシユに振り回されて来たんだから」

ナナリーの車椅子を抱えて階段を上って来たスザクが苦笑を浮かべながらシャーリーに追従する。

「やらかしたことでいえばお前も大概だと思うがな、スザク」

過去を振り返れば同じ穴のムジナであると苦笑を返すルルーシユに苦い顔になるスザク。

「そう考えるとナナちゃんも総督になって一番頑張ってたのにねえ」

「うっ、ごめんナナリー」

「すまん、ナナリー」

「いえ、大丈夫ですよ、お二人とも」

そんな二人に笑ったシャーリーの視線の先でお姫様に許される二人の姿があった。

「後はカレンだけか」

「ちよつと病院に行つて来るつて言つてから先に始めてつて連絡あつたぞ。何で病院に行くのにあんな弾んだ声が出るんだろ？」

懐かしい旧友に話が弾む旧生徒会メンバーを嬉し気に見たルルーシユの呟きに、現場責任者としてカレンから連絡を受けたリヴァルは頭を捻っていた。

「でも、まさかルルーシユが皇帝になった日にみんなが集まれるとは思わなかったよ」

用意していた物の準備を始めたリヴァルは複数のライターが入った袋をスザクに任せ、ルルーシユやロロと一緒に床に並べていく。

「私は疑つてなかったよ。ルルはちゃんと約束してくれたもん」

「そうなのですか、お兄様？」

「まだナナリーが総督だった頃にな」

その約束を果たす為に、ルルーシユはわざわざ日程調整をしたり、

予定をこつそりと入れ替えたり、様々などこにお願いしたり、神楽耶にちよつとヤバい約束をさせられたりしながら超頑張った。

「あの時いた面子だけじゃない。ナナリーやスザク、ニーナやカレンも一緒に花火をするって決めたから」

ルルーシユの原動力となった約束。

「ちゃんと千羽折った私の功績だよね」

「はいはい」

子供染みたと笑われるような願いを果たす為にルルーシユは戦つて来た。

「シャーリー、俺は皇帝になった」

「うん」

「その為に色んな物を犠牲にしなくちゃならない」

「うん」

「もう昔のように学校に通うことも出来なくなってしまった」

「うん」

「これから俺は宮廷の魔物達や世界と戦っていくことになる」

「……うん」

「今日のように皆で集まる時も俺だけは無理だ。望む世界の為に俺は自分の自由を捨てた」

「……うん」

「皇帝の身分には必ず権力が付き纏う。誰かと付き合うとか、結婚も俺自身の一存では決められない」

「……うん」

「シャーリーのことは好きだ。異性として好意を持っているとハツキリと言える。でも、それだけじゃダメなんだ」

「……うん」

「俺は今に至るまでに多くの命を奪い、人生を狂わせてきた。止まることも降りることも許されない」

「……うん」

「すまない、君の気持ちは応えられない」

「……」

屋上を沈黙が支配した。

何時の間にか、誰も話すことも作業の手も止めてルルーシユの静かな声を聞いていた。

「それでも」

立場や色んな物が邪魔した程度で諦めるなら、シャーリーはここまでの気持ちを抱いたりはしなかった。

「私は、ルルが好き」

「……………でも、俺はシャーリーに何も返せない」

父親を奪っておきながら、好意を向けてくれてもルルーシユには人並みの幸せを与えることすら出来ない。

「そこまでシャーリーも言ってるんだし、諦めて結婚しちやったら？」

「そういうわけにはいかない。俺の母マリアンヌは庶民の出だった。騎士としては最高位のナイトオブブラウンズだったにも関わらず、皇族や貴族から嫌われていた。俺自身も庶民の母の子として何度も嫌な思いを味わって来た。そんな思いをシャーリーに感じてほしくない」  
リヴァルは簡単に言うが、貴族階級でない女性が皇族に入ることの大変さを身近で知っているルルーシユだからこそ安易な選択を選べない。

「じゃあさ、仲間がいれば大丈夫じゃないの」

そこへ遅れてやってきたカレンが口を出す。

苦笑しながらカレンの背後から現れたC・Cの姿に目を止めながら本気で理解できていない顔のルルーシユは目を瞬いた。

「仲間？ 何を言っている」

「そのままの意味だ。女二人に手を出しておいて逃げるなという話だ」

C・Cが放った言葉の意味が浸透するまでに数秒がかかり、シャーリーがギギギギと油の切れたからくり人形のように頭をルルーシユに向ける。

「ルルウ〜？」

「待て!? ちょっと待ってくれ!!」



「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる——」  
本当を始めた神聖ブリタニア帝国第百代皇帝になったルルーシュは今日も戦い続ける。



## シャーリー生存√ 後日談

帝都ペンドラゴンにあるアリエス宮は嘗て悲劇の地であった。

テロリストが襲撃し、皇妃マリアンヌと執事二人が死亡。目撃したナナリー皇女殿下も足を撃たれ、事件のショックで目も見えなくなつた。事件の数日後、ルルーシユ皇子は当時のシャルル皇帝に謁見を求めた末、不評を買って日本に留学という名目で人質として送られた。

その彼が皇帝に成るなど、当時は誰も予想だにしていなかっただろう。その当人であるルルーシユ本人もまた。

「不思議なものだ」

ある意味で因縁の地であるアリエス宮の屋外テラスにて、第百代皇帝ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアは己の数奇な運命を振り返って紅茶の入ったカップを揺らす。

「何がだい？」

「こうやって俺とお前が向き合って紅茶を飲んでいることにだ、スザク」

既に賢帝とも名高いルルーシユに雑な言葉を向けられたスザクは自身の為に淹れられた紅茶には手を付けずに苦笑する。

「まあ、僕達は敵同士であったこともあるわけだけど」

「嘘をつけ。大体、敵だったじゃないか」

ちよつと天然が入っている親友の前で優雅に足を組んで座っている麗しい皇帝は鼻を鳴らした。

「俺がどれだけスザクに苦しめられてきたと思っている。二度や三度ではないぞ」

戦術で戦略をひっくり返すランスロットを操り、黒の騎士団の前に立ち塞がったことを皮肉る。

「あんまり人のことは言えないんじゃないかな」

皇帝に気を使って明言はしなかったスザクはようやく紅茶の入ったカップに手を伸ばす。

「この話題は止めておこう」

「その方が良いと思うよ」

あの頃のこととは傷を穿り返すだけなので暫し無言を挟む。

「取りあえず、ぐ苦勞と言っておいた方が良いのか」

先に次の言葉を吐いたのはルルーシユだった。

「どう致しまして………っていうのも変な話だね。僕本人としては、こんなに早く出てきてしまったことに納得はいいいなけど」

「寧ろ現場の兵でしかなかったスザクには重すぎる罰だと思うぞ、十年は」

「そうかな……」

やはり紅茶よりも緑茶の方が好ましいと思うのは日本人だからだろうか、スザクは一飲みした紅茶にそんな感想を抱いた。

「あのフレイヤのことで最も責を負うべきは指示していた指揮官だ。シュナイゼル管理職とは責任を取る為にしろ、作戦自体はシュナイゼルが決めたものだからな」

とはいえ、それでスザクもあのトウキョウ租界でフレイヤによって消滅した者達の遺族は納得しなかった。

「それで、これからどうするんだ？」

帝位を篡奪したシュナイゼルに民意はつかなかった。当然、その第一の騎士であるスザクにも。

軍事裁判にかけられ、嚴罰を望む民意もあつて自ら収監されることを望んだスザクは、つい先日にも刑期を終えて出てきたばかりであった。そこをルルーシユが呼び出したのである。

「さあ、どうしようかな」

「何も考えてないのか？」

「ずっと後悔と反省ばかりだね。未来のことなんて何も考えてなかったから……」

そう語るスザクの顔には影があった。

「じゃあ、丁度良い。土地の一部を俺が預かっている。その管理人をするといい」

恐らくそうだろうとスザクの考えを読んでいたルルーシユは机の

上の鈴を鳴らして執事を呼ぶと、預けていた書類を受け取り渡してくる。

「これって僕達が出会った……」

「お前が持つに相応しい土地だろう」

枢木神社はその名の通りスザクが所有するに相応しいと、ルルーシユは戦時のことを持ち出して土地を手に入れようとする者の機先を制して、早めに利権を奪い取られる前に対策を取っていた。

特にツツコミどころの多いスザクのことに関してはルルーシユが直々に動いていたので抜かりはない。

「君って奴は身内には甘いね」

「お前もその身内に入るんだぞ。どうせなら喧伝してみるか？」

「まさか………賢帝ルルーシユ様にそう言って頂けるだけでも、大罪人としては申し訳ない限りだよ」

「どうせなら俺の護衛でもしてみるか？ スザクなら俺も安心だ」

「嬉しい話だけどジエレミア卿の仕事を奪う気は無いつて。それに僕が傍にいたらまた厄介なことになるんじゃないのかい？」

「俺がその程度で怯む人間に見えるのか」

「まさか。ただ、やっぱり止めておくよ。今は静かに世界を見てみたい」

以前よりも更に卑屈が過ぎるようになった友人に鼻を鳴らしたルルーシユは敢えて直させようとはしなかった。

これはスザク自身が直そうとしなければならぬ問題であるからだと知っているから。

「それはそれとして、僕を連れてきたのはなんでなんだい？ わざわざ忙しい皇帝陛下が会うほどの人間ではないだろう」

「シャーリーの出産に立ち会うのを禁止されてな」

予想外の理由にスザクは目を丸くしてルルーシユを見る。

「仕事しようにも落ち着きが無くて他の者の邪魔になると追い出されて、暇になっていたところにスザクのことを思い出した」

「オメデトウと言った方がいいのだろうけど、僕は暇つぶしの口実と  
言うわけかい？」

カップを持ち上げて紅茶を含んだルルーシユはニヤリと笑って明言はしない。

用意が良かったことや、皇帝が我儘を言ったからといって服役した元罪人を安易に周りが会わせるはずがない。

スザクにはルルーシユの考えが読めない。

「しかし、あのシャーリーが出産か。奥さん達の中じゃ一番遅かったんだっけ？」

「ああ」

ルルーシユには賢帝と同時にハーレム皇帝という異名を付けられていることを思い出して内心で笑ったスザクは、全員が知り合いである彼女達のことを思い出す。

「みんなは元気にやってる？」

「元氣過ぎて俺の方が持て余しているぐらいだ。どうしてこうなったんだか正直今でも分からん」

「ルルーシユらしいね」

敵意には聡くとも好意には鈍かったルルーシユには皇帝になった経緯よりも自分に嫁いで来た女性たちの心情こそ理解できないものがあった。

「あのルルーシユに子供が出来てるなんてねえ」

幼少期と悪かった時期を知っているだけにスザクの感慨も一入だった。

「世間一般からして遅いという年齢でもないぞ。世的にも戦後の今はベビーブームで子供を作る年齢も大分早くなっている」

若干、言い訳ちつくながらもルルーシユの言が正しいことを、ベビーブームの話テレビで見たスザクも否定しない。

「僕には縁のない話だよ」

「何を言っている？ 俺は家族の為にもまだまだ働かなければならんというのに、お前は一人だけ日本で隠居をする気か」

「随分抽象的だね。本題を言ったらどうだい？」

隠居するには早すぎるだろうと暗に込められているのを感じ、スザクは苦笑する。

「身を固めたらどうだという話だ。どうせならナナリーと結婚して俺の義弟にでもなるか？」

昔ならばともかく、今となってはありえない話に苦笑を深めたスザクは首を横に振った。

「冗談にしても笑えないよ、ルルーシュ。それにナナリーは君の弟の口口と付き合っているって話じゃないか」

「結婚していなければ付き合いは自由だ。節度は守るべきだがな」

女性陣の猛攻にあって恋愛観が色々と変わってしまったルルーシュは割と本気で言っていた。

「しかし、俺の弟と妹が付き合っているというのは字面だけで見ると凄いな」

冷静に考えてみた結果、遠い目をしたルルーシュに何を今更とばかりの顔をしたスザクは消極的なツツコミを入れるべく口を開く。

「皇帝の妹弟ってだけで凄いなと思うけどね」

要はルルーシュに関わる全てが凄いなことに分類されると結論付けることにしたスザクの顔は晴れ晴れとしていた。

「そういえば、シャルル様は？」

先々代の皇帝であるシャルルのことはあまりニュースには流れないので気になったので聞いてみる。

「毎日、孫の相手をしてデレデレしてる」

「それは……」

厳しいシャルルの姿しか知らないスザクにはデレデレしている姿など想像することも出来ず、言葉に困って表情の選択に困ってしまう。

「自分はさっさと隠居してる癖に、俺が仕事を手伝えと言っても忙しいの一点張りだ。何が忙しいと言うのか。俺は子供達に会えぬ日だってあると言うのに……っ!!」

ぐぬぬぬぬ、と嫉妬やら何やらを抱えて憤懣を覚えているルルーシュが叫ぶ。

「ふふふふ、仕事を押し付ける準備は出来ている。明日は丸一日の休暇を取ったからな！ 誰にも邪魔をさせん」

「皇帝として、それはどうなんだろう」

「俺より偉い者はいない。従って俺が法だ」

「立憲君主制に移行しようとしている皇帝が言うこととは思えないね」

ルルーシユがあまりにも賢帝過ぎて、紛争以下の衝突しか起こっていない中で合衆国達も内政に集中している。

ブリタニアが敵国である以上、警戒はしているが戦争をするエネルギーを飢餓や貧困に向けられているので緩やかな平和が維持されていた。ルルーシユが次代からは絶対君主制から立憲君主制に移行しようとする準備をしているのも要因の一つであった。

「あまりにも俺に権力が集まり過ぎていて。次の皇帝が欲に駆られないように備えは必要だ」

ルルーシユが帝位を退いた際、神聖の名は消えるかもしれないがまだまだ皇帝の座を譲れる人材はいないので大分先のことになる。

無論、ルルーシユが不意に死ぬ場合もあるので備えはしてある。

「準備の良いことだね」

「第二、第三のプランを作っておくのは普通のことだろうか？」

だとしても、ルルーシユの場合はそのプランが十や二十もありそうな上に、その第二プランすらも突破することも簡単ではないのだから容易には領けない。

「ルルーシユの基準は普通じゃないんだから」

「ミレイにも同じことを言われたな」

「奥さんの言うことは聞いておいた方がいいよ」

ルルーシユの周りを固めている奥さん達がまともで良かったと一安心するスザクであった。

「まあ、何はともあれ世界が平和に向かっているのは良いことだと思う」

五人のお妃様と一人の愛人みたいな人がいるルルーシユの手腕だと思ふと少し笑ってしまうが、これでブリタニアの歴史上で最も偉大な名君になるのではないかと噂されているのだから世界はどうなるか分からない。

「それがユフィの望んだ世界だからな」

「ああ、そうだね」

少ししんみりした空気になった二人の間に沈黙の帳が下りる。  
「む」

互いに一口紅茶を含んで唇を湿らせるほどの時間の後、ルルーシユは懐からバイブモードにされている携帯端末を取り出す。

「どうかした？」

気になったスザクは携帯端末に目を落とすルルーシユに問いかける。

緊急事態なら電話などせずに先程の執事などが駆け込んで来るだろうから、それほど心配はしていなかった。

「アーニヤからだ。どうやら子供が生まれたようだ」

「は？」

「さて、行くぞ」

奥さんの一人から連絡を受けたルルーシユが立ち上がりながらも、まるで一緒に行くことが当然のような言い方にスザクは当惑する。

「行くって、まさか僕も？」

「決まっているだろう」

何が決まっているのか、とスザクは言いたくなかった。

「だから、なんで僕が」

「シャーリーがお前も連れて来いと五月蠅くてな」

当惑したままスザクはルルーシユは半ば連行されるような形で皇宮の一つに連れて行かれた。

「あ、スザク君」

「やあ、シャーリー……」

奥さんが勢揃いしている中で場違いな気分を味わっているスザクは、十年振りに出会った少女から女性に変化したクラスメイトと再会した。

「なんだ、その頭は。ちょっと触らせろ」

まだ産後直ぐで動けないシャーリーや生まれた赤ん坊に興味津々

な奥様達の中で、ルルーシユ以外は本名を知らないことが話題になっているC・C・Cが成熟した体で近寄ってきてスザクの丸坊主の頭を触ろうとして来る。

「ちよ、ちよつと」

「止めなさいってば、C・C・C。スザクが困ってるじゃない」

この十年、禁欲生活だったスザクにとって毒過ぎる接近に窮していると、これまた嘗ての活発な雰囲気から艶やかに成長したカレンがC・C・Cの頭を軽く叩いて止める。

「何をする？」

「じゃないわよ。十年振りに会ったんだから、もう少し言うことがあるでしょうに」

「私もちよつと触ってみたいかも」

パシヤリ、と携帯端末で写真を撮ったのは、これまた十年の間に大人に成長したアーニヤである。

「少し私も同意かな。なんか中毒性がありそうな感触がありそうだなね」

「会長……」

「今は会長じゃなくてお妃さままでしてよ、スザク君」

気取った物言いが似合う姿に成長したミレイにもスザクは驚くばかりである。

「ほら、スザク。この子を抱いてやってくれ」

時の流れに取り残された気分のスザクは困惑するばかりで、そんな中で生まれたばかりの我が子を看護師から受け取ったルルーシユが言った。

「え、でも」

「決めていたんだ。子供の一人には必ずお前に名付けてもらおうってな」

渡されようとしてもスザクは彼らの大事な子供を受け取ることで出来ない。

「駄目だよ。僕みたいな人殺しが」

「それを言ったら俺はどうなるんだ？」



「私もね」

「私も」

「……………規模が違うよ、みんなと僕は」

ギアスで人を操ってきたルルーシユや戦場で人を殺して来たカレンやアーニヤと違って、トウキョウ租界をフレイヤで消し飛ばしたスザクとでは被害の桁が違う。

「何も変わらないさ。例え誰であつても俺は子供が出来たらスザクに抱いてもらつて名前を決めてもらおうと決めていた」

「ルルがこう言つちやつて聞かないんだ。悪いんだけどスザク君」

母になつた顔で、旦那の我儘を聞き分けてやつてほしいと横で言われて微妙な顔をしているルルーシユの腕に包まれた女の子を見たスザクは一大決心をして受け取つた。

「小さいね…………」

「そりゃ生まれたばかりだからな」

何を当然のことを、と言いたげなルルーシユは成長しても根本的な部分では変わらないとスザクに感じさせ、同じことを思ったであろうミレイ達は微笑んでいた。

「そら、早く名前を決めてくれないと俺達も呼べないだろ」

急かさされたスザクは名前を付けろと言われた時に思い浮べた単語を口にする。

「ユーフォリア」

主であつたユーフェミアに似た語感の、この幸福な世界に生きる女の子を抱いたスザクは涙を流しながら名付けた。

「君の名前はユーフォリアだ」

腕の中でユーフォリアと名付けられた赤ん坊はスザクに赦しを与えるように手を伸ばして無邪気に笑つたのだつた。

ユーフェミア生存✓

STAGE 1 少女は踏み出す

リヴァルが運転するサイドカーに収まりながら、見るともなしに租界の街並みを見ていたルルーシュ・ランペルージは先日開催された学園祭のことを思い出していた。

『私、ユーフェミア・リ・ブリタニアは富士山周辺に行政特区日本を設立することを宣言いたします!』

この発言で、お飾りの副総督と呼ばれているユーフェミアが、ブリタニアの敵であるゼロ∥ルルーシュの最大の敵となった瞬間だった。『この行政特区日本では、イレブンは日本人という名前を取り戻すこととなります。イレブンへの規制、並びにブリタニア人の特権は特区日本には存在しません。ブリタニア人にもイレブンにも平等の世界なのです!』

侵攻し征服したブリタニアが地域制限付きとはいえ、日本を認めるというのは前代未聞のことである。

『聞こえていますか、ゼロ! あなたの過去もその仮面の下も私は問いません。ですから、あなたも特区日本に参加して下さい!』

皇族である前総督クロヴィスを殺したゼロを受け入れるとすら表明したユーフェミアに、歓喜するイレブンとは対照的にブリタニア人が困惑していたのをルルーシュはしっかりと確認していた。

誰も差別などされない平等な世界など夢物語でしかない。最も差別を行って来たブリタニアの皇族が表明するほど矛盾しているものはなかった。

『ゼロ、私と一緒にブリタニアの中に新しい未来を創りましょう!』

特区日本に入るならば黒の騎士団は武装を放棄せざるをえない。入らなければ弱者保護を謳う黒の騎士団の理念に反する。どちらを選ぼうとも黒の騎士団は詰んでいた。同時にルルーシュの道が断た

れることを意味している。

「着いたぞ、ルルーシュ」

ルルーシュはリヴァル・カルデモンドに肩を叩かれてサイドカーが車道の脇に止まっていることに気が付いた。

「悪いな、寄り道してもらって」

我を取り戻したルルーシュは慌てることなくサイドカーから降り、ヘルメットを外して風よけのバイザーも外す。

「買出しに付き合ってもらったし、シャーリーと待ち合わせて聞いたらさ」

「どうせむこうも買出しだろう。行政特区が始まるからって、騒ぎ過ぎなんだよ」

「はいはい。それより、早くシャーリーと仲直りしてくんない」と

シャーリーの名前を出されてルルーシュは胸に走った痛みを歪みそうになる顔を必死で堪えていると、諍いの声が聞こえて来た。

「何が行政特区だ！援助などするものか！」

声が聞こえた方にルルーシュが顔を向けると、イレブンの少年を足蹴にしているブリタニアの男の姿が視界に入った。

「もう平等になった気か？ 下の者は大人しく上に従っていればいいのだ!!」

これが現実だと、イレブンを虐げるブリタニアの縮図そのもの二人にルルーシュは目を細めた。

「ありやあ、貴族様かね」

足を止めているルルーシュの視線の先を追ったリヴァルが嫌な物を見たとばかりに表情を歪めている。

「あの傲慢さから見てそうだろう」

ブリタニアの庶民もナンバーズに傲慢さを見せることがあるが、その大半は徒党を組まなければ何も出来ない。お付きの者はいるが一人で虐げられるとしたら権力を持った貴族のケースが多い。

「完全な平等っていうのも気持ち悪いけど、ああいうのを見ると胸糞悪いことには変わりねえよな」

サイドカーから降りてルルーシュの隣に立ったりリヴァルの気持ち

は良く分かる。

「これが副総督の博愛の正体だ」

「辛辣だねえ。でも、変なこと考えようとするなよ、ルルーシユ」

軽いところはあるがリヴァルは察しの良い男だ。アツシユフオード学園でルルーシユとの付き合いも深いこともあって、こういう時にルルーシユがどういう行動を取るか分かっていた。

「何が？」

「助けようなんて考えるなっということさ。面倒事は御免だよ」

そう言われてしまったルルーシユが少し仏頂面を浮かべている間に、当の貴族は青年を叩きのめして気が済んだらしく、お付きの者を伴ってこちらに向かって来る。

「どけ、邪魔だ」

傲慢な物言いにギアスを使つてやろうかとも思ったが、シャーリーと待ち合わせをしているのでリヴァルが言うように面倒を起こすのもマズい。

大人しく道を空けたルルーシユに鼻を鳴らして去って行く貴族の背中を見送つたルルーシユが顔を前に戻すと、打ち据えられた青年を仲間の者達が介抱しているのが見えた。

「ほれ、シャーリーが待っているんだろ。さっさと行って来いって」

「ああ……」

リヴァルに背を押されたルルーシユが歩き出したのを上からシャーリー・フェネットが偶々見ていた。

（イレブンを助けなかった、ゼロなのに。やっぱり、ユーフェミア様と一緒にいたんだからゼロじゃないの？）

鞆の中に入れた自分が書いたはずの日記の内容を信じる事が出来ず、疑念は疑念のまままで問い質す勇気をシャーリーは持っていなかった。

時刻は既に夜。夕食前に帰宅したルルーシユはドアの前で表情を改めて室内に入る。

「ただいま」

妹に対する兄の仮面を被ったルルーシユの視界の先に、愛しい妹と使用人の篠崎咲世子がいた。

「お帰りなさい、お兄様。シャーリーさんは？」

「買い出しが終わってから別れたよ。夕食に誘おうかとも思ったけど、予定があるっていうから別れたんだ」

ギアスでルルーシユのことを忘れたシャーリーが何の用かと警戒していたが、特別な話をする必要もなく買い出しだけをして別れただけなので嘘はない。

「そうなんですか、残念です」

展開式のハンガーを手にとって広げる。

「また今度誘ってみるよ。ああ、咲世子さん、お茶を淹れてくれないか」

「はい、かしこまりました」

やはりどうしても気を使ってしまう買い出しに付き合った所為で喉が渴いたので咲世子に頼むと、彼女は快く引き受けて茶の用意を始めた。

茶が入るまでに制服の上を脱いで展開したハンガーに通し、壁にかけているとナナリーが何かを言いたそうな空気を感じて「どうかしたか？」と問いかけた。

「お兄様にお願ひがあるのです」

体のこともあってナナリーがこうして改めて求めて来ることも珍しい。制服を壁にかけたルルーシユは音を立てて椅子を引き、ナナリーの前に座る。

「なんだい？ ナナリーの願ひなら何でも叶えるよ」

「……………ユファイお姉さまと、もう一度お話がしたいです」

妹の為なら世界だって敵に回すルルーシユだが、ナナリーのこの願ひを聞いて直ぐに即答できなかった。

「何を言っているのか、本当に分かっているのか？」

自分でもナナリー相手にこんな冷やややか声が出るのかと驚くほどだった。しかし、今に限ってはルルーシュも感情を抑制する気にはなれない。

「わ、我儘を言っているのは自覚しています」

今までナナリーには良い兄としての面しか見せてこなかった。怯えている空気を感じても事が事だけにルルーシュは直ぐに改める気は無かった。

「幾ら一度知られてしまったとはいえユフィは皇族だ、俺達を捨てたブリタニアの」

殊更にブリタニアを強調して言うと、ナナリーの前にいるというのにルルーシュの頭はどこまでも冷えていき、反対に心は復讐の熱に煽られて暴走しそうなほどだった。

「理解しています。ミレイさんが中断した学園祭、もう一度やるんだって言ってましたよね？」

「あ、ああ」

「だからその時は、一緒にどうかなあと思って。あの、ごめんなさい。もう会わないって言ったのに。でも、どんな形でもいいから、もう一度だけ直接会えると」

しどろもどろになりながら自身の気持ちも全て吐き出したナナリーに、目を見開いたルルーシュは長い息を吐いた。

「ご、ごめんなさい。ご迷惑ですよ？ 何も出来ない私がお兄様とユフィ姉様にこれ以上の迷惑をかけるなんて」

「ナナリー」

ビクリと肩を震わせたナナリーを視界の中心に置きながら、ルルーシュはテーブルに肘を乗せた右手で前髪を掻き上げた。

「怒ってはいない」

この感情を正直に言うなら戸惑いだろうか。

我儘なのは否定しないし、既に構築している一部の作戦のことを考えればナナリーの思いは否定して然るべきだ。そう、ナナリーがルルーシュに迷惑がかかると分かった上でお願いさえしなければ。

「ユフィは行政特区を切り盛りしなければならず、以前とは比べ物にならないほど忙しくなる。学園祭をやり直したとしても、来るのは無理だろう」

征服国が懐柔策として似たようなことを行ったのは歴史を見れば何度かあったことだが、ブリタニアがこのような試みを行った前例はない。

発案者であり皇族であるユーフェミアは行政特区のトップに収まるだろうし、そうなれば今までのお飾りの副総督と呼ばれていた以前とは次元違いの仕事に忙殺されることが予想される。

当然、アツシユフオード学園の二度目の学園祭を訪問するのは不可能だ。

「だけど、もう一度会うぐらいならなんとか出来るかもしれない」

「お兄様——っ！」

「但し、会えるかどうかは約束できないぞ」

「はい！ ありがとうございます!!」

結局の所、ルルーシュには肩を落とすナナリーの願いを反故にすることなど出来やしなかった。幼い頃からナナリーと、そしてユーフェミアの願いを断れた試しがないのだから。

「あら、ナナリー様。何か良いことでもあったのですか？」

茶を淹れて戻って来た咲世子が気付くほどにナナリーが笑顔になったのなら、ルルーシュはどんな苦難だろうが背負ってみせる。



『こちら、行政特区日本式典会場です。会場内は既に沢山のイレヴン、いえ、日本人で埋め尽くされています。会場の外にも入場できなかった大勢の日本人が集まっています』

黒の騎士団がアジトとして使用しているトレーラーのテレビに、行政特区に関する放送が流れていた。

「なあ、俺達いつまでここにいればいいんだよ」

ソファに力無く凭れながらテレビを見ていた玉城が愚痴交じりに吐き捨てた。

「ゼロがここで待ってって言ったのに信じられないの？」

「だってよお」

偶々、隣に座ってしまったカレンは顔を顰めながら少し玉城から距離を取る。

両手を広げて座っているものだから肩に手を回されそうな感じがとても嫌なのだ。

「全てはブリタニアの真意を確かめてからだ」

黒の騎士団幹部でも恐らく一番特区日本が成功することを望んでいる扇が期待を込めてく言った。

（ブリタニアの真意、か。その前にゼロの真意をこそ知りたいが）

腕を組んで目を閉じていた藤堂は内心で重苦しく呟く。

黒の騎士団を展開することなく、こうやってアジトであるトレーラーに待機させられている。藤堂達にもゼロの真意が読めない状況は面白くなかった。

「ユーフェミア様、時間です」

「はい」

所変わって行政特区の会場にて、空いた席を見つめていたユーフェミアがダールトンに促されて開会の挨拶をする為に立ち上がった瞬間、会場に集まった人々の一部が騒めいた。

ユーフェミアが顔を上げると、以前にゼロが神根島で強奪したガウエインが上空に現れてこちらに向かって来ている。

「ようこそ、ゼロ！行政特区日本へ！」



ガウエインの肩の上に乗っているゼロに向けて放たれたユーフェミアの声に、ルルーシュは仮面の中で目を細めた。

「ユーフェミア・リ・ブリタニア、折り行ってお話したいことがあります」

「私と？」

「そちらのあなたの騎士も含めた三人で」

驚いているユーフェミアを見下ろして、最後になるかもしれない仮面を被ったルルーシュは言い放った。

会場の裏側に隣接して配備されていたブリタニア軍の地上母艦であるG1ベースの前に誘導され、着地したガウエインを降りたルルーシュは先頭を歩くユーフェミアと背後で一挙手一投足を監視しているスザクに挟まれてブリッジに辿り着いた。

ブリッジに辿り着いたルルーシュがまずしたことは、ユーフェミアを追い越してG1ベースの電源を落とすことだった。

「用心深いよね。カメラならオフにしてあるのに」

「ブリタニアと黒の騎士団は敵同士だ。警戒は当然のこと。そうだろう、枢木スザク」

「……………」

警戒しているのはお互い様だと自覚しているスザクはゼロの言葉に反論を挟まずに沈黙している。

「さて、待ち人も多い。用件だけを話すでしょう、ユーフェミア皇女殿下」

ユーフェミアの背後に立ち、ゼロが手を出そうとすれば即座に動く体勢をしているスザクを見ながらルルーシュは本題を切り出そうとした。

「その前に一つだけ訂正を」

ブリタニア軍が痺れを切らす前に終わらせたいルルーシュの性急な態度にユーフェミアは待ったをかけた。

「いずれ本国から発表があると思いますが皇位継承権を返上しまし

た。リ・ブリタニアの名と共に……………私はただのユーフェミアになります」

「なっ!？」

皇籍奉還特権を使用したのだということは、同じく知らなかっただろうスザク以上にその意味を理解したルルーシユは仮面の中でこれ以上は無いというほどに目を見開いた。

「ゆ、ユーフェミア様!？」

「これが私の覚悟です、ゼロ」

ゼロがいるというのに、恐らくこの一瞬に於いて護衛の任すらも忘れるほど慌てているスザクを見ることも無く、ユーフェミアの瞳がルルーシユを射抜く。

「……………皇籍奉還特権を使用したのは私を受け入れる為か？ また随分と買い被られたものだ」

皇族が皇族で無くなる意味をユーフェミアは想像は出来ても本当の意味で理解はしていないだろう。皇族で無くなった後に絶対に後悔する。それほどに皇族の権力は絶対だ。

だが、少なくとも伊達や酔狂でゼロを受け入れたのではないとユーフェミアの覚悟を示すという意味合いでは十分だった。

「私の我儘を聞いてもらうのですから、それなりの対価は必要でしょう?。」

ゼロが行政特区日本に参加する保証などないというのに、幾ら正体を知って信用しているとはいえあっさりと権力を手放そうとしているユーフェミアにルルーシユは気圧されていた。

「こんなテロリストを信用するなど」

「でも、スザク。弱者の保護を目指すゼロと、日本人を守ろうとしている私の目指す方向は同じよ」

「しかし…………」

「ゼロの罪は私の皇籍奉還特権で無くなる。彼は犯罪者では無くなるのだから」

受け入れ難い様子のスザクにユーフェミアは寧ろ吹っ切れたような顔で笑った。

「しかし、本当に良いのですかな？　こんなテロリストを守るために皇族の力を捨てるなど」

「知り合いの子が言っていたの。大好きな人と一緒にいられれば他に何もいらないうって。それを聞いて決心がついちゃったの。私にとって、本当に大事なものはなんだろうって。だからゼロ、私は本当の本当に大切なものは何一つ捨てるつもりはありません」

お飾りの副総督と呼ばれる姿からは想像もつかない決心の固い瞳に、ルルーシユは肩から力を抜いた。

(ナナリーがそんなことを……)

胸に手を当てたユーフェミアが誰のことを言っているのかルルーシユには直ぐに分かった。

(無茶なやり方なのに、結局全てを手に入れてしまう。考えてみれば君はいつも副総督や皇女殿下である前にただのユファイだったな)

最悪の敵だった初恋の人を見て覚悟を決めて手を伸ばす。

「え、これって?」

「君の勝ちだ、ユーフェミア」

昔からユーフェミアとナナリーに勝てた試しのないルルーシユは、嘗てのように負けを認めた。

「ゼロ!」

「皇族ではないただの人に敬称を付ける意味はない」

「む……」

「同じ立ち位置にいるのなら、同志ならば握手の一つでもするだろう?」

「は、はいっ!」

スザクは目を吊り上げているが、ユーフェミアは笑顔を浮かべて差し出されたゼロの手を握る。

「だが、部下になるわけじゃないし、黒の騎士団は特区には参加もしない」

手を離れたユーフェミアに向けてルルーシユが告げる。

「ブリタニアを信用できない者も多い。全ての日本人が特区に直ぐに参加出来るわけではない。保険は、必要だ」

「つまり、黒の騎士団は不安の受け皿になると?　そんな都合の良い

理屈が罷り通るはずが」

今までの弾圧が弾圧だけにブリタニアを即座に信用できない者もやはり多い。

総督でもないユーフェミアを超える権力を持つ者が特区日本を破壊すれば、黒の騎士団という力を失った日本は牙を折られる。

「不満ならば不安が起ころないようにしてみるといい。それにゼロや黒の騎士団が特区に入らなければ、ユーフェミア皇女殿下が皇籍奉還特権を使う必要もない」

「あ」

「君はもう少し頭を使うことを覚えた方が良いな、枢木スザク。騎士が武だけで良かった時代は遙か昔だぞ」

バサリとマントを翻したゼロがG1ベースから去ろうとしているのを見て止めようとしたスザクは、まさかの相手からのアドバイスに足を止めた。

「では、行こうか。ユーフェミア皇女殿下」

先を立って歩き始めたゼロはそう言った直後、仮面だけを振り返らせてユーフェミアを見た。

「そうそう、ナンバーズを区別するのはブリタニアの国是。変えらるれば皇帝となるしかないぞ」

笑みを含んだその声にユーフェミアの答えは……。

数分後、ゼロは参加しないものの特区日本を認める声明が出され、日本人は歓喜に沸き立った。

奇しくも、とある世界において日本人の虐殺を指示したユーフェミアの名前が会場に何時までも木霊していた。

行政特区日本が正式に始まったその日の夜。

アツシユフオード学園のクラブハウスの自室にて、ルルーシユのベッドに横になっていたC・C。Cはふと視線をもう一人の住人に目を向けた。

「お、おいつ!？」

ガバツと体を起こしたC。Cは目を見開いてルルーシユを見て大声を上げた。

「急に大声を出すな。ナナリーが起きてしまうだろう」

しかし、C・Cはそんな声すらも聞こえていない様子でベッドから下りて大股でソファに座って何かの作業をしているルルーシユの下へ行き、その顔を掴んで左目を覗き込んだ。

「間違いない。ギアスが暴走しているぞ」

「何?！」

言われたルルーシユは立ち上がってカーテンを開き、窓に薄らと映る自分の左目でギアスが発動したままなのを見てフリーズした。

「本当だな……」

これはマズいことになったと、ガラスに映る自分の左目の問題に頭を悩ますルルーシユだった。

## STAGE 2 ジュリアス・キングスレイ

行政特区日本が始まろうとも、ブリタニア資本であるアツシユフォード学園には何の影響もない。ないはずだった。

「スザク、バリカンを持っていないか？」

騒動の発端は、昼になって学園に現れて生徒会室にやってきた枢木スザクの顔を見たルルーシュ・ランペルージが言ったことから始まった。

「「「っ!?!」」」

珍しく全員が揃っていた生徒会室の空気が文字通り凍る。

驚きのあまり、ニーナが操作ミスをして貴重なデータを消してしまったり、シャーリーが運んでいた紅茶がリヴアルに降りかかって飛び上がってカレンに抱き付いてしまい殴られたり、書類にサインしていたミレイの字がビーと伸びたり、全員が等しく驚いていた。

「バリカンは持ってないな。何に使う気？ あ、もしかして何かの罰ゲームで使う気じゃないよね」

空気を読めないことには定評があるスザクが真面目に付き合っている中で、違うだろうという五人分の心の声が一致する。

「いや、使うのは俺だ」

「「「っ!?!」」」

再びの衝撃第二弾が生徒会室を襲う。

だが、流石に二度目となると回復も早く、動揺している皆の総意を束ねたミレイが立ち上がる。

「る、ルルちゃん？ バリカンなんかで何をしようとしているのかにゃー？」

ミレイの動揺は全然収まらなかったらしい。語尾がニャーに成っている上に、声まで震えてしまっている。

「何を言っているんですか会長？ バリカンなんて髪の毛を剃る以外に使い道はないでしょうに」

「誰の髪の毛を剃るの？」

「欲しがっているのは俺なんですから、俺の髪の毛に決まってるじゃ

ないですか」

「そ、それもそうよね」

何を当たり前のことを聞くのかという顔をしているルルーシュに、自分が間違っているのかと考えたミレイは椅子に座り直して考える人になった。

「会長っ！　そこで納得しないで下さいよ。ルルーシュ、バリカンで髪の毛を剃るってどういうことだよ」

「ハサミでは時間がかかるから、そっちの方が便利だからだ」

会話が通じているようで微妙に噛み合っていない友人に一度気持ちを切り替えたリヴァアルは、頬にカレンに殴られた痕をくつきりと残したまま大きく息を吸う。

「どれだけ切る気なんだい？」

「思い切って丸坊主にしようかと」

「ガッ!？」

これまた空気の読めないスザクの疑問に正直に答えたルルーシュの考えに驚いたリヴァアルは息を吸い過ぎてしまい、ブタのような声を漏らして倒れ込んだ。

「ど、どうしたんだ、リヴァアル!?　急に倒れ込んで」

「いや、アンタの所為でしょうが」

病弱の設定であるカレンも思わず素が出て突っ込んでしまった。

「何故だ？」

「鏡を見なさい」

「うん、本当に」

本気で分かっている様子がないルルーシュに再度の突っ込みを入れたカレンにシャーリーも追従する。

ルルーシュが生徒会室に置かれている姿見の近くに行って自分の姿を見ている間に、ミレイの傍に集まった一行は混乱していた。

「ルルーシュって風邪引いてるんだと思うっ?」

「それはないかと」

司会進行を行うミレイの疑問にスザクが否を突き出した。

「体力の無いルルーシュが風邪を引いたらあんなにスタスタ歩けな

「いはずだし」

「確かに」

「ルルーシュって体力ないしな」

運動能力は良い方だが、致命的なまでに体力がないルルーシュのことを良く知っている、同級生のシャーリーやリヴァルがスザクの意見を肯定する。

カレンはそこまで言わなくても良いだろうと思うのだが口には出さなかった。

「もしかしてリフレインとかの薬に手を出したとか？」

ニーナもルルーシュ個人に対して多くを知っているわけではないが、流石にいきなり丸坊主にするなんて言う人間ではないことは知っている。風邪でもないとするれば、やはり薬を疑ってしまうのは物理学に傾く彼女の論理的な思考故のことだった。

「リフレインであんな症状にはならないと思うけど」

「詳しいのね、カレン」

「……………怖い薬だから調べたことがあるの」

まさか母がリフレインの常習者だったとは言えないカレンが失敗に気付いたのも後の祭り。シャーリーから突っ込まれて顔を逸らしながら、辻褄が合うように考えながら嘘をつく。

「まあ、どんな薬を飲めば丸坊主にするなんて言い出すかなんて分からないわよね」

カレンのことよりも今はルルーシュの問題が大きすぎて、誰も気にせず背を向けているルルーシュを見る。

「じゃあ、失恋とか？」

薬でもないとなれば、一番普通のシャーリーが真つ当な意見を出した。

「それは女だけじゃないの？」

「リヴァル、それは偏見よ」

真顔になったミレイに突っ込まれたリヴァルは肩身を狭くして消えて行った。

「急に眼帯なんて付けちゃうし、何かあったんじゃ」



病弱設定を思い出しながらカレンは、今日になって左目に眼帯を付けていることも関連しているのではないかと言ってみた。

「朝、ベットから落ちて怪我をしたって言ってたけど」

「関係あるのかな」

朝一番に聞いたミレイはうくと唸り、流石に気になるニーナとしても原因を解明したい。

「そんなに気になるなら本人に聞いてみれば？」

あまり付いていけない感じのスザクが少し考えながら核心を突いた。

「誰が？」

ここであだこうだ言うよりもその方が圧倒的に早い。しかし、とんでもない理由もありえそうで怖いのでシャーリーが不安そうに皆を見る。

「ここはやっぱり言い出しっぺのスザクで」

「異論なし」

ミレイの鶴の一声にリヴアルが重く力強く頷いたことで満場一致で賛成された。

「……………というわけで、みんなルルーシュが髪を切りたい理由を知りたいんだって」

特にスザクには断る理由はなく、普通にルルーシュに声をかけてあっさりと聞いてしまった。

「特に理由はない。気分転換だ」

「嘘だ！」

これまたあっさりと答えたルルーシュにリヴアルが喝破した。

「第一、丸坊主なんて格好悪い姿をファンクラブが認めてくれないぞ！」

「ファンクラブ？ なんのことだ？」

自身の容貌を自覚はしているが、好かれているとは思っていないルルーシュは、ファンクラブがあることに気付きもしていなかった。

「お・ま・え・のファンクラブだあああああああ!!」

マイクでもあれば全力シャウトが響き渡っていそうな、とある世界

で失恋コンテストで優勝したりヴァルら生まれ持ったの敗北者達の嘆きが生徒会室をビリビリと震わせる。

「お、俺の……………俺のファンクラブっ!？」

「本当に自覚がなかったのね……………」

寧ろ自覚が無かったことに驚くカレン。ルルーシュに対して色々と思いいメージはあっても、その顔の良さに関しては認めていたのである。

「鈍いよね、ルルーシュって」

「スザクにだけには言われたくないと思うなあ」

ユーフェミアの騎士となったことや、その並外れた運動神経と女性を優先する姿勢から、スザクにも隠れファンクラブがある、ということを知っているシャーリーは言わざるを得なかった。

「知らなかった……………」

愕然としているルルーシュが頭を剃りたい理由が分かったニーナは興味を失って、消してしまったデータをなんとか復旧しようと頑張っている。

「それはともかく」

そうやって脱線した話を戻したミレイは腕を組んでルルーシュを見る。

「気分転換で丸坊主にするなんて聞いたことがないわ。正直に理由を言いなさい」

「……………じゃあ、スザクと会長にだけ」

理由に繋がる大元のことを知るの二人だけなので、不満を漏らすリヴァルとシャーリーから離れて生徒会室の隅に行く。

「俺は行政特区日本を手伝うつもりだ」

読唇されないように手で口元を隠しながら小声で言われた言葉に、スザクは喜色満面になり、ミレイは表情を消した。

「ルルーシュっ!」

「お、おい、抱き付くな馬鹿」

「それだけ嬉しいんだよ!」

何度も誘いをかけていたが行政特区に否定的だったルルーシュが

手伝いを申し出てくれたことが嬉しくて、その背景を知らなくても感極まって抱き付く。

「それは、あなたの立場を分かった上での発言かしら」

身体能力の差は如何ともし難く、背骨を折り潰されそうなルルーシュを助け出したミレイは低い声で訊ねた。

「その為の変装だ。これも、丸坊主にするのもな」

「変装のつもりだったんだ……」

幼少期から目の見えないナナリーの為に髪型を変えようとしなかったルルーシュ。眼帯を指差している姿を見て、丸坊主にするのが変装の為だと聞いて少しミレイの肩が落ちる。

「そこまで極端に走らなくても。大体、行政特区を手伝うなんてそんなリスクなことは止めるべきよ」

変装で髪型を変えるのは常套手段だが丸坊主はやり過ぎである。それ以前の話として、正体を知られるわけにはいかないルルーシュが行政特区に関わるのは危険が多すぎるとミレイは思っていた。

「学園祭でユファイに頼まれましたから」

淡く笑ったルルーシュにミレイは何も言えない。

「そういうわけだ、スザク。ユファイに知られてても他の奴にバレるわけにはいかない。俺のことは黙ってるよ」

「うん、任せて」

「会長には新しい人物を作る手助けをしてほしい。アツシユフオードで事務をしていた在日ブリタニア人辺りが良いか」

既に参加するものとして話を進めるルルーシュに、喜ぶスザクとは裏腹にミレイの顔は不安げだった。

「本当に、良いの……?」

ミレイの問いに、ルルーシュは重い荷物を下ろしたような、逆に重い荷物を背負ってしまったような複雑な顔をしていた。

「良いんですよ、これで」

ルルーシュは秘密を抱えたまま誰にも明かさない道を選び、二人にも全てを話すことはしなかった。



行政特区が始まって早一ヶ月。

政庁の執務室にて、最近は安定してきたエリアー1の内情に複雑な感情を抱きながら日々の政務を行っていたコーネリア・リ・ブリタニアは、ユーフェミアに付いている側近であるアンドレアス・ダールトンから報告を受けていた。

「ジュリアス・キングスレイ?」

はい、とダールトンが頷くのを見ながら、机に置かれた書類を手取る。

「事務能力が桁外れている、と。それほどなのか?」

「十数人分の仕事をしていると報告を受けています。それも短時間に関わらず」

一週間の勤務表が添付されている書類には、件のジュリアス・キングスレイが他の者よりも勤務日数・時間共に少ないながらも高い能率を上げていることが記されていた。

「これは凄いな。政庁の者でもここまででは出来んぞ」

自身もこういう作業に秀でていたとは言えないコーネリアも特に今は行政特区のこともあつて、シユナイゼル・エル・ブリタニアから人材を送ってもらっていることもあつて事務方の優秀さは良く知っている。

仕事内容の差はともかくとして、単純な能率だけを挙げるならば政庁の者でもここまで高くはない。

「ブリタニア人ではない、か」

「在日ブリタニア人三世なので四分の三は、ですが」

「せめてブリタニア国籍を持っていれば言うことはなかったのだがな」

これで純粋なブリタニア人ならば何も問題はないのだが、四分の三も日本の血が入っているとすれば、人を使う立場のコーネリアも残念そうな面持ちになる。

「親類がブリタニアにいれば話も変わったのでしようが、祖父が日本に永住を決めた時に縁を切っていたとのことで、七年前の日本が征服された時に戸籍や資料、両親なども全て失ってしまったとのことです。親からも祖父のことは何も聞いておらず、桐原に拾われるまで随分と苦労したようです」

七年前に日本に侵攻したのがブリタニアであるだけに、ダールトンには心情はともかくとして、外面は鉄面皮のまままで話を続ける。

「桐原というとキョウトの？」

「ええ、テロリストを援助していたグループです。証拠を抑えて手を引かせました。どうやら奴は行き場のない孤児を何人か引き取っていたようです。彼もその一人だったようで」

キョウトの一件はもう終わった話なので詳しくは話さず、ジュリアス・キングスレイの話に戻る。

「元々、桐原の下で働いていたようですが、その優秀さを買われて行政特区に派遣されたとのこと。テロリストを援助していた男から派遣された人間ですので監視を付けていましたが、今のところ怪しい点は何も」

「だが、どうしてここまで勤務日数と時間が少ない？ 能力は評価するが、これではいくら優秀だろうがユフィの側近に取り立ててやることは出来んぞ」

行政特区日本は軌道に乗っている。それに伴って人材が不足しており、宰相であるシュナイゼルにも人を出してもらっている状況である。

しかし、ナンバーズの為に働くことに難色を示すブリタニア人も多

く、本来ならば皇女であるユーフェミアの側近に取り立てられるのは名誉であるはずなのだが、騎士が名誉ブリタニア人である枢木スザクなこともあって敬遠気味なのが現状だった。

その為に自身の側近であるダールトンをユーフェミアに付けて、人材を探してもらっている状況である。

「体が丈夫ではないということのようです。写真を見て頂けると分かりますが、戦時中に傷を負った左目にも障害が残っていて、フルタイムで働くとは体調を崩すと」

「軟弱な、とは言えんか」

日本人らしい黒い短髪と右目の黒目、そして左目の場所に中が見えない機械的な眼帯を付けた、少しキザツたらしい写真に写る姿を見たコーネリアは息を吐き出した。

幾ら書類上では日本人ハイレブンだとしても、少なくとも真面目に働いて結果を出している者を無理に働かせても逆に能率を下げるだけだと理解していた。

「気質的には日本人そのものだろうから行政特区に関わらせても問題はないが」

側近不足で連日激務だというユーフェミアを少しでも楽にさせるために文官として送り込むのは簡単である。

「やはり妹君のことが気になられますか」

「分かるか」

「それはもう」

コーネリアとしては、能力は認めても名誉ブリタニア人である枢木スザクのことを受け入れ難いのに、ブリタニア人の血が入っているとはいえ日本人と変わらない気質の者を送り込むのは気が進まない。

「私としてはブリタニア人の側近で固めたいのだがな」

「もう何人も送り返されてきましたからな」

コーネリアやシュナイゼルが送り出した人材の幾人かは日本人に差別的過ぎてそぐわないと送り返されてきた。

「彼らの気持ちも分かるのだ。幾ら仕事と分かかっていてもナンバーズと平等に扱われることに我慢がならないのは」

送り返されてきた者達の気持ちも良く分かるので、コーネリアも特段処罰を与えるようなことはせず、政庁の方に回して仕事をさせている。

「ですので、能力があり、日本人にある程度は協力的な人物をリストアップしろとのことでしたので、該当したのが彼なのです」

首根っこを抑えられた状態の桐原が獅子身中の虫を送ってくるとは思えないが、警戒はして然るべきである。

「上手くはいかぬものだな」

「本人に会って直接確認しますか？」

「その方が人となりを知るのに手っ取り早いか………：……：ダールトン、まさか連れて来ているのか？」

「はい」

頼りない主を支えるのも面白いが、優秀な主に仕えることも悪くない、と感懐を抱きながらダールトンは執務室を出た。

すると、部屋の外の壁に凭れて腕を組んでいたジュリアス・キングスレイがダールトンの姿を見る。

「随分と待たせてくれたものですね。コーネリア殿下はお話が長い方なのでしょうか？」

腕を解いて壁から離れて皮肉気な笑みを向けるジュリアスに、ダールトンは苦笑した。

「其方が面倒な人物でなければ、こんなに説明に時間はかかっておらんよ」

「それは失礼」

当て擦る意図がないわけでもない返しに、ジュリアスは下手な貴族よりも優雅に礼をする。

「面倒な人物であることは否定しないのだな」

「事実ですので。否定したところで意味はありませんまい」

この数週間でジュリアスの扱いに慣れたダールトンは、一々言動や行動が大袈裟な男に突っ込んでいては終わりが無いことを良く知っている。

「言っておくが、コーネリア総督を怒らせれば私も庇えんぞ」

「ええ、承知しています。ブリタニアの魔女を怒らせるほど、私は浅慮ではありません」

今まで数多の人材を送り返させた張本人であるジュリアスに保証されても、イマイチ信用出来なかったダールトンの鉄面皮が僅かに崩れる。

「頼むから変なことを言わないでくれ」

「信用がありませんな」

「それだけのことをしてきたと自覚してくれ」

「私は何時だって場と状況と人物を弁えて行動しています」

何も嘘を言っていないのだから、このジュリアス・キングスレイは曲者なのだ。

「ユーフェミア皇女殿下の邪魔をする者を排除したに過ぎません」

ユーフェミアに邪魔になる者を容赦なく排する能力と弁舌を持ち、この忠誠心を評価したからこそダールトンはコーネリアにジュリアスの側近入りを進言したのだ。

「能力を信用されても信頼されていないことは自覚しています。下手な言動や行動は控えますよ」

疑わしい余地は残るが信用すると決めたダールトンは、執務室の扉を開こうと手を伸ばした。

「ああ、その前に一つだけ言っておきたいことが」

ドアノブに触れるか触れないかのところでかけられた声に、ダールトンは反射的にジュリアスの方を見た。

カシユンという音と共に機械的な眼帯が開かれ、隠れていた奇怪な紋様が浮かぶ左目が現れているジュリアスと目が合う。

「俺とナナリーのことを知っても誰にも言うな」

絶対遵守のギアスの光がダールトンの目の中に飛び込み、その意志を捻じ曲げる。

「分かった。誰にも言わない……………ん、すまない。少し立ち眩みがありました」

「疲れているならば休んだ方がいいのでは？」

「人を疲れさせている元凶に言われたくはない」



ギアスで意志を捻じ曲げられたことを知ることもなく、ダールトンは執務室へと入っていく。

その背中に続きながらジュリアス・キンググスレイは——ルルーシユは、閉じた機械的な眼帯を撫でて嗤った。

「全てを欺かせてもらおう、姉上」

誰も信用していないルルーシユは新たな仮面を被った。

## STAGE 3 黒の騎士団解体

ゼロがユーフェミア・リ・ブリタニアが発案した行政特区日本を認めたことをテレビで知った黒の騎士団は真つ二つに割れていた。

「黒の騎士団をどうするつもりなのだ、ゼロ」

行政特区日本が始まって数日後、未だにアジトのトレーラーにいる藤堂鏡志朗は通信画面に映る画面に向かって問うた。

『どう、とはどういうことかな?』

「我々の今後についてだ」

一度も直に姿を見せることなく、今もまた通信でしかコンタクトを取ろうとしなかったゼロに不信を覚えていた藤堂は核心を突く。

『私は特区を認めた。今後の黒の騎士団の方針を聞きたい、ということでもいいかな』

「ああ」

「俺達も気になるしな」

口を出したがる玉城真一郎が藤堂の横から通信先のゼロに向かって言った。

『その前に藤堂に一つだけ聞きたい』

大事な方針を告げる前に、ゼロは藤堂を見る。

『仮に日本を解放したとしよう。だが、その先はどうしようと考えていた?』

「何?」

あまりにも抽象的すぎる問いに藤堂は眉を顰めた。

「待ってくれ、ゼロ。それは……」

『何時まで聞えればいい? ブリタニアを倒すまでか? だが、世界のサクラダイトの七割がある日本は中華連邦にも狙われる。そういう国を全て滅ぼすまでか?』

旧日本軍に所属していた藤堂は軍事教練を受けているので、戦略的な視点で物事を見ることも出来る。勿論、ゼロには遠く及ばないにしても、日本を解放した程度で戦争が終わらないことは重々承知してい

た。

それでもまずは日本を解放しなければ何も始まらないと、胸の内を誰かに打ち明けることはなかった。

「じゃあ、特区日本に参加してブリタニアの内に入って中から変えて行こうって?」

ブリタニアのナンバーズへの扱いを見れば望みが薄いのは明白なので、吉田透はそれこそありえないと鼻で笑った。

「それよりも特区日本に参加して、ぶち壊してやった方がブリタニアの鼻を明かせるってもんだ」

あまりにも近視眼的な物言いをする玉城に幹部連中の白けた視線が集中する。

『そんなことをすれば黒の騎士団は日本人の支持を失うだけだ』

ゼロも呆れた声を上げる。計らずとも玉城以外の全員の意志が一致した瞬間だった。

『よほどブリタニアが失策を起こさない限り、特区日本は続くだろう。それまでは戦いを挑むのは下策だ』

特区日本という構想が明かされ、現実として何の問題も無く始まってしまった以上は黒の騎士団に静観する以外の選択肢は残されていなかった。

「何もするなっつか」

「というより何も出来ないってことじゃないの」

杉山賢人と井上直美はゼロが何を言いたいのかを悟り、二人で顔を見合わせる。

「相手の出方を窺うと言えば聞こえはいいが、実際は失敗を心待ちにしているようなもんだ」

「その失敗の犠牲は日本人になるだろうけどね」

最年長である仙波峻河は何が出来るかを理解しているので自身を自制出来るが、皮肉屋の朝比奈省吾は目を細めてゼロを睨む。

『日本人、日本人………そも、日本人とは何だ、藤堂?』

「なんだそんなことも分からないのかゼロは」

「黙ってろって、玉城」

個人的な事情ではあるが特区に賛成している扇要が茶々を入れる玉城の肩を抑える。

『日本人とは、民族とはなんだ？ 日本語を話せれば、日本に住んでいれば、血の繋がりがあれば、日本人と言えるのか？』

ゼロが哲学的なことを聞きたいのではないと藤堂にも直ぐに分かった。この中で『奇跡の藤堂』を持つ自分がその言葉を放つことに意味があることも。

「違うーそれは心だ！ 我らを日本人足らしめるのは土地や血ではない。日本人であるという心そのものだ！」

恐らく、画面の中でゼロは笑ったのだろう。

仮面を付けているので表情は分からないし、笑い声が漏れているわけでもないので分からないはずだが、藤堂にはゼロが笑ったのだと何故か分かった。

『私もそう思う。自覚、規範、矜持、つまり文化の根底たる心さえあれば日本人なのだ』

ゼロは卑劣だと藤堂は感じた。

『行政特区はブリタニアの旗向き次第で容易に崩れ去る。我らの抵抗活動によって特区という譲歩を引き出したがブリタニアは味方ではない。もしもの時の備えは必要だ』

「それが黒の騎士団であると、お前はそう言いたいのか、ゼロ」  
誘導されていると自覚しながらも、千葉がゼロに鋭い舌鋒を向ける。

『日本解放戦線が消えた今、黒の騎士団も消え去ればまともな抵抗活動を行える団体は存在しない。精々が散発的なテロを行って鎮圧されるだけだ』

大半の抵抗組織から離脱して黒の騎士団に入った者も多く、ゼロという絶対的なカリスマ指導者がいない以上はブリタニアに一矢報いることすら出来ないだろう。

『故にこそ、ユーフェミア皇女が皇籍奉還特権を使用して、私と黒の騎士団の罪過を免責するとの申し出があつたが断つた』  
「えっ!?!」

果たして驚きの声を上げたのは誰だったか。

藤堂自身も聞いた瞬間には目を見開き、呆然としたからこそ分からなかった。

『ここから先、私は君達に何も強制しない。潜伏するもよし。活動も続けるもよし。各自の判断で決断し、行動せよ』

「私達を見捨てて一人で逃げるか」

『ふっ、今は雌伏の時だと言っているのだ』

「言葉ではなんでも言えるよね」

ト部と千葉が鋭い視線をゼロへと向ける。

各自で行動するにせよ、大半の団員はブリタニアに顔が割れていないが藤堂や旧日本軍の四聖剣はそうはいかないのだから。

「信用してほしかったら仮面を外して見せてよ」

ゼロの言葉を信用できるかどうかは、やはり仮面の内側の素顔を見せてこそであると朝比奈は禁断の提案をした。

『私の仮面を、か』

「東京に独立国を作るとまで言ったゼロが本物かどうか。あの式典で実は殺されているんじゃないかって思うんだ」

仮面を付けていれば中身が入れ替わっていても黒の騎士団には分からない。何せ幹部ですらその素顔を知らないのだから。

「日本人ではないって話だけど、まさかブリタニア人ってわけじゃないよね?」

『——その問いには儂が答えよう』

ゼロしかいなかった通信画面が二分割された。

右にはゼロ、左には禿頭の老人が座している画面になり、老人の姿を見た誰もが目を剥いた。

「き、桐原公つ!?!」

実際に会ったことのある扇や初期のグループはキョウトの重鎮である桐原泰三その人に目を剥いて驚いた。

『久しいの、藤堂』

「はっ」

七年前の戦争時に個人的に付き合いがあった藤堂も桐原の登場は

予想しておらず、名を向けられて畏まるしかない。

『お主らを手助けをしていたことがブリタニアにバレて、あまり長い時間は話せんから手短に行こう————儂はゼロの素顔を知って黒の騎士団の援助を決めた』

ブリタニアにはNSCと呼ばれるキョウトが日本のテロリストの幫助をしていることは機密になっているが、知られているとなれば黒の騎士団は最大のスポンサーを失ったことを意味している。

「確かにあの時、桐原公はゼロがブリタニアの敵だと言った。素顔を晒せないわけにも納得がいったって」

その中で扇は桐原に会ったことを思い出していた。

『新たな援助ルートを作るまでは儂らも迂闊には動けん。今は静観するのが常道よ』

「致し方なし、か」

日本解放戦線にも援助していたキョウトが動けないとなれば、藤堂達には何も出来ない。

幾ら声高に理想を掲げようとも、人間は衣食住がなければ生きることとも覚束ない。黒の騎士団はここで活動を止めるしかない。

『私は活動の場を海外に移す。連絡網は残しておくから好きにするといい。各自の健闘を祈る』

そうしてゼロからの通信が切られて、画面には桐原だけが残った。

『藤堂達は望むならば海外逃亡を手伝おう。また連絡するまでに日本に残るかを決めておけ。殆どの者は顔も割れていない故、好きに行動するといい』

そして桐原も通信を切った。

砂嵐だけが流れる画面を黒の騎士団員は沈鬱の眼差しで見ていることしか出来なかった。

「黒の騎士団も終わりか……」

誰かが零したその声の一つの時代の終わりを示していた。

誰もが周りの行動を窺っていた中で、最初に動いたのは副指令の扇だった。

「俺は特区に参加する」

立ち上がり、黒の騎士団の制服を脱ぎ捨てた扇の行動が決定的だった。

最初の一人の行動が皆の行方を左右する中で、個人的事情で行政特区に肯定的だった扇が動いたことが決定的だった。

「じゃあ、俺も」

「私も」

扇に続いて、制服を脱ぎ捨てる者達が続出する。

止めたところで意味はない。ゼロというカリスマが去り、キョウトという援助を失った黒の騎士団は張り子の虎でしかない。先行きのない組織に残っている方がおかしいのだから。

「そういうえば、カレンは？」

「……………ブリタニア側に戻したよ。アイツはその方が幸せになれる」

連絡手段を断ち、移動したアジトの場所を教えなかった扇は少し寂しそうな表情を浮かべながら、その内心ではこれで千草とずっと一緒にいられると思っていた、この時は。

アジトであるトレーラーが隠された地点から少し離れた車の中でルルーシュは無感動だった。

「所詮、奴らもこの程度か」

団員にギアスをかけてトレーラーに仕込んだ監視カメラで、制服を次々と脱ぎ捨てる姿を見たルルーシュは黒の騎士団に興味を失くして映像を映していたパソコンを閉じた。

「向こうも同じことを思ってるだろうがな」

ルルーシュの膝の上に置かれたパソコンを横取りして開き、監視カメラの映像を見るC・C・の言葉に否定は返されなかった。

もう一人、運転手がいるがルルーシュのギアスに支配されているので何も言わない。

「俺にとつて、ゼロという仮面と黒の騎士団は左程重いものではなかった」

とはいえ、十か月近くも懸命に拡大し続けて来た組織を簡単に手放せるものではなかったが、それでもナナリーやユーフェミアと比べれば劣る。

「あいつらもゼロを利用していただけだからな」

実際、式根島でブリタニアの攻撃によって行方不明になったゼロを探すことを止めようとしたことをC・Cは覚えている。それも最も拒否したのがブリタニア人であるデイトハルトというのが皮肉が効いている。

「しかし、本当に良かったのか？ 優秀な駒だったんだろ」

「駒は幾らでも替えが効く」

あそこで踏み止まればルルーシュもギアスを存分に使って彼らを守るつもりだったが、切り捨てたのでお互い様となった。例え先に切り捨てたのがゼロに見えていたとしてもだ。

「俺の正体に辿り着きそうなデイトハルトの始末もついた」

黒の騎士団は武に偏重した組織であったからデイトハルト・リードは良く働いてくれたが、頭の使える優秀な駒は手綱を放れると非常に厄介になる。

式典から離れた後に真っ先にしたこと、ゼロの衣装の廃棄と、デイトハルトを呼び出してギアスを使って知っていることを話させることだった。すると厄介なことが分かった。

「ゼロの正体がアッシュフォード学園の学生というところまで辿り着いていたのは驚きだったな」

「全くだ。あいつの性質からして明かすことも、俺を脅すこともしないだろうが、黒の騎士団は切り時だったのかもしれない。キョウトの援助も終わりだしな」

アッシュフォード学園まで辿り着かれていますはナナリーの存在に気付かれるのも時間の問題だっただろう。スザクやユーフェミアはともかくとして、学園生以外でナナリーのことを知られたらルルーシュは容赦なくギアスを使うと決めていた。

デイトハルトはあまりにもルルーシュの正体に近づき過ぎた。だから、黒の騎士団とゼロの情報の全てを抹消し、自殺に見せかけて



殺した。下手にブリタニアに露見すれば危険が大きすぎたからだ。

「まさか咲世子さんまで黒の騎士団とは思いませんでした。ゼロが俺だと気付いている様子はない。このままナナリーの世話を続けてもらおう」

身近にいる者すらも信用できなくなっているルルーシュを横目で見たC・Cは、ギアスの魔力に囚われて行く姿に数秒だけ悲し気に目を伏せた。

「黒の騎士団は解体した。次はどうするんだ？」

結局、丸坊主は反対多数で却下されて出来なかつたが、元皇子であることを知るスザクとミレイから髪型を変えることは悪い話ではないという流れから、二人の手でルルーシュの髪は大分さっぱりしたものになった。

学園やナナリーの前にいる時は以前の髪の長さのカツラを被って過ごしているが、今は外している。

「それは……………人の頭を触って遊ぶな」

「この独特のシャリシャリ感が悪い」

かなり短くしたのにも合わせて剃った襟足の部分を隙あらば撫でて来るC・Cの手を振り払ったルルーシュは外を見る。

「桐原の協力でアッシュフォードの手を借りなくて済んだ。行政特区に潜り込み、後は真っ当に能力を示すだけでいい」

「自信家だな。しかし、良いのか？ 目立てばコーネリアに正体が露見する可能性が高くなるぞ」

「コーネリアに会うことが出来ればギアスをかけることも出来る。その為の準備も抜かりはない」

皮肉を言ったC・Cに対して真面目な顔で返したルルーシュは、出て来た人物に目を細めた。

スモークガラスで外からは中を覗き見ることは出来ないことを利用して、とある人物を待っていたルルーシュは目標が現れたのを確認してニヤリを笑みを浮かべた。

「やっぱりそれを付けるのか……………」

ゼロの仮面を作らせた要領で、別の人物を介して作らせた眼帯を付

けるルルーシユにC・C・は呆れた目を向ける。

「なんだ、格好いいだろ？」

「ゼロの時といい、自分のセンスが壊滅的であることを自覚した方がいいぞ」

黒を基調としてルルーシユが格好良いと思う要素をこれでもかと詰め込み、ゼロの時と同じようにギアスが使えるようにスライド式の機構まで組み込んだ画期的なシステムなのにC・C・には理解されないらしい。

「これだから女はロマンを理解しない」

鏡を取り出して、ミレイから教わった化粧で人相も微妙に変わっている。髪型と眼帯を合わせればルルーシユだと気づかないと自画自賛する。

「男と違って現実主義なんだよ。ほら、さっさと行け。あんまり時間をかけると対象がいなくなるぞ」

「むっ、もっと早く言え」

ナルシストと一緒にいると疲れると、早々にルルーシユを追い出したC・C・はその背を目で追う。

「妹の為に全てを利用するか。そんな奴に目を付けられた自分を恨めよ、ラクシャータ」

仲間二人と共にギアスの支配下に置かれることになるラクシャータの姿を無感動に見届けたC・C・は目を閉じた。

アッシュフォード学園の庭で特定の知り合いに片っ端から電話をかけていた紅月カレンは、ずっと鳴り続けている呼び出し音に飽き飽きして切ってしまった。

「もう、扇さんも誰も電話に出ないしっ！」

行政特区日本が開始した翌日から誰とも連絡を取れない携帯電話

を直す。

本当のところ、ブリタニア側にもまだ居場所があるカレンを扇が戻そうとしているのだとは気づいていた。だが、まさか旧扇グループだけでなく、黒の騎士団の誰とも連絡が取れなくなるとは思ってもいなかった。

「アジトも移動しちゃってるし、どうしちゃったのよ皆」

ゼロの真意を確かめたくても黒の騎士団と合流することも出来ないカレンに出来ることは何もない。

カレンが黒の騎士団のエースであるを知っているスザクも密告をしていないから、こうやって学園とシュタットフェルトに戻ることが出来たが待っていたのは孤独だった。

「どうしたらいいの、お兄ちゃん……?」

紅月に戻ることが出来ず、シュタットフェルトのままにいるしかないのか。

「このままブリタニア人になれって? 冗談じゃないっ!」

断じてシュタットフェルトなんかではない。ブリタニア人でもないが、少なくともカレンは衣食住で困ったことはない。

アッシュフォード学園の級友達が本質に悪い人間であるとは思っていない。病弱設定のカレンを心配してくれるし、生徒会の者達は見ているだけでも面白い。

病弱という設定を守り続けて、何時かは日本人としての心を忘れてしまいたいことになることが怖かった。

母の愛に応える為にもブリタニアは破壊しなければならぬ。ならないのに、カレンはあまりにも小さいな人間でしかなかった。ゼロのように戦略的な観点に立って物事を見ることが出来ない。

「ゼロさえ、もう一度立ってくれれば」

「ほう、面白いことを言っているな」

決定的な一言を聞かれたとカレンが気づいて振り返ったそこには、変な眼帯を付けた短髪の男が立っていた。

「誰っ!」

誰何しながら相手を観察する。

着ている服は、ブリタニア人が着る一般的な服。黒い短髪と見えている右目は黒い。左目は変な眼帯で覆われている所為で分からないが、恐らく黒目だろう。

容貌はブリタニア系であることから見て、日系のブリタニア人なのか。

「私の名はジュリアス・キングスレイ。それよりも面白いことを言っていたな、ゼロと」

「聞き間違いじゃないの、ジュリアスさん」

「いいや、聞き間違いではないな。録音してある」

そう言ってジュリアスが懐から取り出したのは録音機と思われる物だった。

『ゼロさえー』

再生ボタンを押すとカレンの声が流れる。

「止めてっー！」

「おっと、下手に動かない方が良く。既にデータは他の端末に転送してある。私に何かあれば手の者がブリタニアに持って行くだけだ」

止めて録音機を奪おうとしたカレンの機先を制するように言ったジュリアスは勝利を確信した笑みを浮かべている。

「……………何が望み？」

他の端末に転送してあること、何かあった時に手の者がブリタニアに持って行くのかどうか、カレンには真偽を確かめる術はない。

カレンは苦手な交渉で以て勝利を獲得するしかなかった。

「話が早くて助かる」

ジュリアスの変装をしているルルーシユの交渉術にカレンが勝てるはずもない。

「私はブリタニアで成り上がる。貴様はその駒となるがいい」

真実と欺瞞を織り交ぜるルルーシユによつて雁字搦めに絡め取られたカレンが、やがて選択肢を全て奪われて駒へと落ちていくのにその時間はかからなかった。

## STAGE 4 特派

行政特区日本が始まった数日後の夕方、クラブハウスのリビングにて篠崎咲世子に手伝ってもらいながら折り鶴を折っていたナナリーは外出から戻って来た兄の雰囲気以前と違っていることに気が付いた。

「ナナリー、話がある」

ここ数日、外出の多かったルルーシユが改まって話とは何だろうと思いつつも、「何ですか、お兄様」と咲世子に折りかけの折り鶴を直してもらいながら聞いた。

「俺がユフィの手伝いをしていることは言っていたな」

「はい、スザクさんからお兄様をお借りしますと言われました」

「……………アイツは何を言ってるんだ」

ナナリーには見えないが頭を抱えたルルーシユは溜息を吐いて顔を上げる。

「当然だが俺達のことをユフィ以外のブリタニアの者に知られるわけにはいかない。それで別人として働いているわけなんだが」

その為の変装として髪を切ると言われた時はナナリーも驚いたものだ。

ルルーシユは目の見えないナナリーの為に、大きくなっても姿を想像しやすいように髪型を変えることはしなかった。周りに正体を知られないように変装の必要があるので、髪型を変えるぐらいはやって然るべきではあるが、ルルーシユの気遣いが嬉しかったナナリーとしては少し複雑だった。

「ジュリアス・キングスレイでしたっけ」

「ああ、経歴から何まで全部が偽物だけだな」

ルルーシユという人間が嘘で塗り固められた人間であるように、彼が扮するジュリアス・キングスレイもまた全てが嘘偽りで出来ている。

嘘から逃げられない己の宿業のようなものを感じていたルルーシユはナナリーに気付かれないうちに薄く笑った。

「別人として働いてもリスクは消えない。それでも俺が特区に参加しようと思った理由が分かるか？」

「お兄様が特区を手伝うのは、ユファイ姉さまやスザクさんに頼まれたからじゃないんですか？」

「それも勿論あるが一番の理由はお前だよ、ナナリー」  
「私？」

ルルーシユは何も善意から、ユーフエミアに絆されたからで特区日本に参加を決めたわけではない。

確かに黒の騎士団として争うよりかは血は流れないだろうし、ルルーシユもユーフエミアやスザクと戦わなくて済む。しかし、ルルーシユの裡に灯る復讐の炎はそんな生易しいものではない。もしも、ルルーシユが復讐よりも優先することがあるとすれば、妹のナナリーのことをおいて他にない。

「ナナリーの足を治せるかもしれない医者や、やっと見つかることが出来たんだ」

今までアツシユフォードが用意した医者にはか罹ることが出来ない状況では、ルルーシユが望む最先端の医療は望むべくも無かった。

ルルーシユが自分で調べた範囲内で行える治療法、リハビリを幾つも試していたが効果は殆どというほどない。

紅蓮式式や月下を開発したラクシャータ・チャウラーを黒の騎士団に招聘したのも、元は医療サイバネティクスの権威である彼女ならばナナリーの足も治せるのではないかと考えたからである。

ギアスで操っているのがナナリーのことをバラされる心配も無く、特区日本で確固たる地位を手に入れたルルーシユならばユーフエミアとスザクの協力もあれば秘密裏に手術を行えることも可能であった。

「……………」

ナナリーはルルーシユが治療法や医者を探していたことに察しはついていた。

二人で日本に送られて来てから献身的な介護を続けてくれたルルーシユには感謝しかないし、一人では日常生活を送ることも出来ないナナリーの為に多くのことを犠牲してしまっていることも自覚している。

「お兄様、私は……」

「不安なのは分かっている」

何を言うべきかも定まらないまま話そうとしたナナリーをルルーシユは優しく包み込み、だがそのまま受け入れはしなかった。

「このご時世と、ユフィの内とはいえブリタニアの組織に入っている以上、何が起ころうとも不思議じゃない。ナナリーには自分で逃げられる足を取り戻してほしいんだ」

ルルーシユだつてナナリーを置いて捕まったり死んだりする気は更々ない。だが、戦争や政争はルルーシユをしても何が起ころるか予測しえないイレギュラーが起ころるもの。

ラクシャータを手元に置けた今でなければナナリーの足を治せる機会は訪れないかもしれないという気持ちでルルーシユを逸らせた。「今は見えない眼も心因性のもんだ。足が動く様になれば、見えるようになるかもしれない」

コーネリアにもナナリーのことをユーフェミア並みに愛せとギアスをかけている。あの姉ならば例えナナリーのことを皇帝にバレたとしても、今度は味方になってくれるユーフェミアと二人で戦ってくれるだろう。スザクもいるのだから、ルルーシユが分が悪いとしても賭けに出る価値は十分にあった。

「手術の必要があるとか、そこまで考える必要はない。診察だけでも受けてみてはくれないか」

最愛の兄の申し出にナナリーは暫しの黙考の後、重い口を開いた。

ナナリーの返答を聞いたルルーシユは笑顔を浮かべたが、自身が最大の失策を犯したと気づくことはなかった。



全ての始まりは、行政特区日本が始まって一ヶ月と半月が経過した頃、特別派遣嚮導技術部の主任を務めるロイド・アスブルンドの一言から始まった。

「退屈だよ」

行政特区が始まって以来、殆ど起こらなくなったテロに対して特派が戦場に出張することもなくなり、ランスロットを動かせる機会が試験運転以外にパツタリと無くなったロイドは呟いた。

「僕としては有難いことですけど」

「そうですね、ロイドさん。平和なのは誰にとつてもいいことじゃないですか」

名誉ブリタニア人になって結果的に日本人を裏切った形になっているとはいえ、進んで同胞を殺したいわけではない枢木スザクとしては戦場に出るような機会がないのは嬉しいことである。

ナイトメア好きだが殺し合いがしたいわけではないセシル・クルーミーもスザクに同調する。

「折角、ランスロットを調整しても動かす機会がこうもないんじゃないや干上がっちゃうよ」

「基地内で動かせるじゃないですか」

「実戦でないと限界を見極められないでしょ?」

「でしよって言われても……」

「どうにもスザクは、こういう技術畑の人の気持ちが良い理解できない。」



アツシユフオード学園でもニーナは何時も小難しいことをして、スザクと碌に話が續かないし、スザクの部下という微妙な立ち位置に収まったルルーシユ扮するジュリアス・キングスレイが言うことも九割近くがチンプンカンプンなのだ。

「そんなに暇なら、ガウエインを私に全部押し付けなくて手伝ってくれませんか？」

「ランスロット以上に扱える人がいないんじゃないかねえ……」

あの行政特区の式典でガウエインを置き去りにしてゼロは姿を消した。

パイロットの痕跡が残らないようにコクピット部分を爆破する徹底ぶりだが、奪取される前は未完成だった部分が黒の騎士団の技術者によつて完成されており、その技術はブリタニアにもフィードバックさせる為に解析を急かされている。

徹底的な検査で爆発物などはないと分かっているけども、コクピットに爆弾を仕込んだことからシステマ的な罠が仕込まれている可能性も高く、どうしても解析作業には時間を擁していた。

「どうしてですか？ ガウエインって複座式なんでしょ。そこまで難儀する代物には見えませんが」

「動かすぐらいならスザク君でも出来るよ。但し、ガウエインの真価を發揮させようと思ったら、僕が知る限りではシユナイゼル殿下を乗せた方が手っ取り早いね」

「それ事実上、無理って話ですよ」

特派がシユナイゼル殿下の組織だとしても、幾らなんでも必要だからと第二皇子をナイトメアに乗せられるはずがないのでセシルも肩を落とした。

「でも、どうしてシユナイゼル殿下なら真価を發揮させられるのですか？」

スザクが知る限りで、シユナイゼルがナイトメアの操縦に秀でていくという話を聞いたことはなかった。

セシルもロイドの言に疑問を持っていない様子なので、気になって聞いてみた。

「ここだよ、ハンク」

そう言ってロイドが指差したのは自分の頭。

「頭？」

「ガウエインのドルイドシステムは最新鋭の電子解析システムなんだ。常人よりも高い状況判断力や演算処理能力を要求される。端的に言えば、馬鹿が扱っても宝の持ち腐れになる機体なんだよ」

そう言われればスザクにも納得がいった。

ブリタニアの宰相であるシュナイゼルの桁外れの智謀はE・U・を震え上がらせるほど。それだけの頭脳があればドルイドシステムを使いこなすことも可能なのだろう。

「でも、ゼロも使ってみましたよね」

「そうなんだよね……彼自身がシュナイゼル殿下並みの頭脳を持つているか、最低でももう一人がそういうことになっちゃおう」

その事実が何を意味するのか、ロイドの頭脳は直ぐに結論を出す。

「ゼロが消えてくれて良かったね。あのまま黒の騎士団が大きくなったら、本当にブリタニアを倒すことも出来たんじゃない？」

ブリタニアに対する忠誠心など欠片も無いロイドだが、シュナイゼルが敗れば研究が出来なくなるので敗けることは望んでいない。

「本当にゼロはどこに行ったんでしょうね。もう一ヶ月以上も動きを見せないなんて」

完全に仕事をする空気では無くなったので手を止めたセシルも会話に入ってくる。

「まあ、行政特区を認めちゃった時点で何かしても日本人の支持を失うだけだし、仕方がないんじゃないの」

「仕方ないって……」

「僕としては法の裁きを受けさせたかったですけど」

「でも、ユーフェミア様にはその気はないんでしょう？」

「はい……」

スザクは後になって皇籍奉還特権を使用してまでゼロを受け入れようとしたと聞いて、頭の中が真っ白になったことを思い出す。

結局、コーネリアと彼女達の母親の働きかけと、そして奇しくもゼ

口自身が特区に入らなかつたことで皇籍奉還の話は立ち消えた。しかし、ゼロを法の裁きにかけようとするならば、またユーフェミアが皇籍奉還特権を使う可能性が残っている。

「僕は平等主義も大概だと思っただけだね」

この話がどこからか漏れて、それだけユーフェミアは本気で日本人を救済するという本気が見えて賛同者は増えたが、やはり差別を寧ろ推奨しているブリタニア人はロイドのように冷ややかな面がある。

「私はみんなが仲良く暮らせるのは良いことだと思いますよ」

逆にセシルのように受け入れてくれる者も確実に増えていることがスザクは嬉しかった。

「あつ、そういえば」

あまりこの話を長く続けるのは良くないと思つて話題の転換を図ろうとしたスザクは、もしかしたらシユナイゼルに伍するかもしれない頭脳の持ち主が身近にいることを思い出した。

「それで私を呼び出したというのか、騎士スザク」

仕事中に上司であるスザクから呼ばれば赴かないわけにはいかない立場にあるジュリアス・キングスレイは、深い関係のあるガウエインを前にして実にイイ笑顔を浮かべていた。

「ご、ごめんなさい」

部下に凄まれて腰が引けているスザクは反射的に謝罪を口にする。「謝れば許されると思つているのですかな？ 本来、私が行っているものはあなたがやらねばならないというのに」

「返す言葉もありません……」

「これで予定していた行程が三パーセントも遅延してしまふ。あなたにこの責任が取れるというなら何も言うことはありませんが」

「うう……」

肩を竦めて身を縮めてやり過ぎそうとしているスザクと、ネチネチと言いながら喜悦の笑みを浮かべているルルーシュ扮するジュリアス。

普段の力関係が容易に透けて見える二人に、ロイドは面白そうに見てセシルは苦笑を浮かべているとこちらも対照的。

「テロも小康状態にある今は行政特区に力を入れるべきと」

「ああっ！ ルル……ジュリアスは頭が良いからロイドさんが僕に呼んでほしいと言ったんだよ。いやあ、いいな頭が良いっていうのは」  
逃げたね、逃げた、逃げる気か、と三者三様にスザクが話を逸らすのを簡単に見抜きながら、ルルーシユは嘗て自分が使っていたガウエインを改めて見上げる。

「ゼロが使っていたガウエインですか。これはまた懐かしい」

元より物に執着のないルルーシユだったが、この機体の特殊性もあつて少しは思い入れがあつた。

「へえ、まるで実物を前にも見たことがあるような言い方だね」

「私がどこからの出向かを考えれば自ずと察しはつくでしょうに」

ドルドシステムを扱える人間が左程多くないことは実際に使つたルルーシユだからこそ良く分かる。

ガウエインが黒の騎士団に奪取されて改造されたのは有名な話で、援助していたキョウトの下で為されたのであろうことは、このことを知っている者ならば容易に想像がつく。

そしてルルーシユ扮するジュリアスがキョウトからの出向であることは、その能力もあつて良く知られている。両者の因果関係を結び合わせれば誰も不審には思わない。

「じゃあ、ナイトメアの操縦もお手の物つてことか」

「流石にそこにいる騎士様には手も足も出ないでしょうが」

自身を天才と自負しているルルーシユといえど、スザクやカレンといったエース級やコーネリア達一流相手には単機では分が悪い。

ナイトメアの本領である近接戦闘がルルーシユには合わないし、そういう意味ではガウエインの機体コンセプトはルルーシユに合っていない。

「ガウエインにスザク君ほどの腕は必要ないし、物は試しでやってみようかジュリアス君」

ロイドの命令をルルーシユが聞く必要はない。

ジュリアスの上司はスザクではあるが、スザクは特派にも所属している。特派はシュナイゼルの旗下にあるので、ユーフェミアやコーネ

リアとは命令系統が違うのにスザクが特派の人間というのが話をややこしくさせていた。

目論見通りであるのでガウエインに乗り込もうと決めたルルーシュだったが、その前にスザクを見る。

「では、代わりに溜まっている仕事を騎士スザクにやってもらいましょう」

「それは仕方ないよね」

あつさりと安請け合いするロイドにスザクがムンクの叫び如き顔になったりするが自業自得だとセシルも止めはしなかった。

「——本当にドルイドシステムを使いこなしてるね」

スザクが絶望に沈んでいる間にドルイドシステム他、幾つかの機動実験を行ってガウエインから降りてきたルルーシュに向かってロイドは真意を掴ませ難い笑みを向ける。

「システムの制御に一杯一杯ですよ」

「余裕あるように見えるけど」

「外面を取り繕うのに慣れていただけです」

実際、ルルーシュを以てしてもシステムとナイトメアの操縦を両立させることは難しい。

「ただ、まあ、凡人では現状のドルイドシステムを有効に活用するのは不可能でしょう」

「出来る出来ないではなく、不可能と言い切るかい」

「私でさえ、このガウエインのように複座式でなければ戦場に出ようなどと無謀なことは天地が引つ繰り返つても思いません」

「だよねえ。幾らか簡略させないといけないか。それにしても適性がない者には扱えないだろうけど」

後に機能を限定化する事で扱いやすくしたウアテスシステムが開発される始まりの瞬間であるが、限定して戦力が下がったところで意味はないと考える二人にはどうでもいい話であった。

「優秀だっという噂は前から聞いてたけど、ジュリアス君の情報処理能力はすば抜けているね。どうだい、特派に来る気は無いかな？」

「天才であるロイド伯爵にそこまで見込まれるとは、光栄といった方

がいいのでしょいかね」

分野の違う天才であるルルーシユが言うところ凡人には嫌味にも聞かせるが、ロイドはいたくジュリアスを気に入ったようである。

「立場はスザク君の上を用意するし、シユナイゼル様の組織だから金に困ることも無い。退屈はさせないと約束するよ」

「最近の口癖が退屈だという人の言葉とは思えませんね」

「おっと、これは一本取られた」

部下に追い抜かれそうなスザクは物凄く複雑そうな顔で二人を見て、セシルはそんな彼らを微笑ましそうに見ていた。

「魅力的な提案ですが、この地を離れることはありませんので」

「土地に縛られたって良いことは何もないよ」

「人に縛られるのであれば悪いことではないでしょう」

「君も難儀な生き方をしているね」

「自覚はあります」

シユナイゼルを別とすれば、ここまでロイドと話が弾む人間も珍しい。

奇人変人を地で行くロイドは相手を怒らせることもあり、興味を失くしたらあっさりと言話を止めることも珍しくない。

だから、セシルも止めようとはしないし、スザクも自分をダシに使われても文句一つ言わない。後者に関しては口では絶対に勝てないから反抗することを諦めているのもあるが。

「協力はしますよ。対価は要求しますが」

「ドライだねえ」

「タダ働きはしない信条なもので」

見返りを求めない者はいない。求めないとすれば、他に何か思惑を隠していると誤認される。

「特派といえば、ユーフェミア様から行政特区に参加した者達との技術交流の打診がありましたか」

ルルーシユの行動に無駄はない。一つの行動に二つ、三つの結果を出す。

特派に来た目的はガウエインと、もう一つ。

「技術交流？ そんな話は聞いてないけど」

「つい、今日に上がってきた話です。私がおここに来たのもその話をする為です」

「へえ……」

そこで初めてロイドが僅かに表情を変えた。

「ユーフェミア様より、技術交流を行うかどうかは特派で判断しても構わないと指示を受けています。如何致しましょうか？」

全く話を聞かされていなかったスザクが一人シヨックを受けている中、ロイドは常の楽し気な笑みに戻って口を開く。

「特派にすることはナイトメア関連だね。主導したのは君かな？」

「私は頼まれただけです。仲介をしたのみです。そんな大それたことは、とてもとても」

聴くそして賢い、とルルーシュとロイドはお互いの仮面の内側を僅かに垣間見て同じことを思った。

「準備の良い君のことだ。大方、既に来てるんだろ？ その技術者たちは」

「ええ、彼らが作った機体とそのパイロット込みで」

笑みを深めたロイドも、呼びに行ったルルーシュが連れてきた技術者を見た時には流石に目を剥いた。

「ハロー、プリン伯爵」

「ら、ラクシャータさんっ!？」

ナイトメアはまだだが先んじてやってきた三人の内のリーダー格らしい技術者が軽く挨拶する姿に、ロイドよりもセシルの方が目を剥いて既知である知り合いの名を呼んだ。

「どうして、君が……」

「キョウトに協力しているのがバレちゃってね」

因縁のある相手にロイドも動揺を隠しきれない中、キセルを揺らしながらラクシャータ・チャウラーが軽く言った。

「で、運悪く捕まっちゃったのよ。お姫様の曲赦のお蔭で刑罰は受けなくて済んだけど、見逃してほしかったら協力しろってコーネリアに言われちゃって」

要は技術交流という名の脅しであると告げたラクシヤータの背後に、専用のトレーラーに乗せられた赤いナイトメアが特派のエリアに入ってくる。

「まさか、紅蓮っ!？」

赤いナイトメアと戦った経験のあるスザクは目を剥いている間に、彼らから少し離れた場所で停止したトレーラーから紅蓮式式が立ち上がる。

「ということは、パイロットは」

動いてランスロットの隣にハンガーに固定された紅蓮式式のコクピットからスザクの良く知る人物が姿を見せた。

「やっぱり、カレン……………でも、どうして」

「カレン・シユタツトフェルトです。よろしくお願いします」

紅月カレンは明らかに『不本意です』と表情と雰囲気に出しながらも、スザクが余計なことを言う前に挨拶をする。

当然、ロイドもセシルもスザクの様子には気が付いたが、彼らもラクシヤータの登場に冷静とはいえない。

「技術交流を行うかどうか。技術交流の期間は半年と見ていますがその後も続けるかどうかは都度、協議して決めるということはどうでしょう」

全てを演出したルルーシユは、全員の動揺を感じながら僅かに頬の端を上げるに留めて告げる。

「正式な通達と協議の場までには少し時間があります。ロイド主任、彼らはここに来たばかりですので施設の案内をして頂いても構いませんか？」

「……………ああ、いいよ」

協議の場では第三者の目もあるから話せないこともある。これはルルーシユが与える機会と分かりつつもロイドは乗るしかない。

「ジュリアス君、食えない奴だって言われるでしょ」

「こんな正直者を捉まえて何を言うのですか」

しらばつくれるルルーシユにロイドは肩を竦めてみせた。

「シユナイゼル殿下に良く似ているね、君は」



ルルーシユにとっては最大の罵倒に等しい言葉に、流石に表情が動いて眉を顰めてしまうのを抑えきれない。

「まさか、私などシユナイゼル殿下の足下にも及びませんよ」

そう、今はまだ勝てないにしても牙を研ぐ雌伏の時と自覚しているルルーシユは、頭を下げて顔を見られないようにしながら心の中の獣を押さえつける。

ロイドとセシルがラクシャータやカレン達を連れて離れた直ぐ後、青い顔をしたスザクがルルーシユに縋りついた。

「る、ルルーシユ……………カレンは」

「俺のことはジュリアスと呼べと言っただろ。カレンが黒の騎士団にいたことは調べがっている」

服に縋り付いて来るスザクを振り払い、しっかりと呼び方を訂正する。

「安心しろ、ブリタニア側には黙っている。まあ、あっちは不本意だろうがな」

「どういうこと?」

「迂闊な言動は控えろということだ。お前も、そしてカレンもな」

ラクシャータとカレンは替えの利かない駒だ。捨てるには惜しいから有効に活用する。

「周りに誰もいないと思ってても、どこにでも目はあるものだ。ボロを出せば突け込まれるだけだぞ、俺もお前も」

こうやって一応は上司であるスザクにタメ口を利くのも問題ではあるが、普段からスザクに対するジュリアスの扱いはぞんざい極まるので問題にはならない。

「カレンは何をやったの?」

「アツシユフオード学園の庭でゼロと叫んだのを偶然聞いてしまった。普通の団員程度なら見逃してやっても良かったが、調査の段階であの機体のパイロットと分かってしまったては無視するわけにもいかん」

悪戯をした犬が主人に気付かれてしまったような顔をしているスザクに、やはりルルーシユが真実を話すことはない。

初めから決めていたシナリオに沿って行動し、ギアスを行使しているルルーシユの矛盾を追求できるとしたら、同レベルの智謀を有する者しか不可能である。

「ジュリアスはカレンには嫌われてしまったが悪い扱いをする気はない。スザクの方で気を回してやってくれ」

「ルルーシユ……」

少し優しい感情を見せれば直ぐに絆される。ルルーシユに対する信頼の証でもあるが、疑念を抱いても信じたいと思う他人を優先するようになったスザクの甘さだった。

全てを欺くと決めたルルーシユにとって、幼き頃の親友であるスザクであっても例外ではなかった。

「うん、分かった。任せて！」

信頼の眼差しを向けてくるスザクと決して目を合わせないのは、ルルーシユの中にある微かな罪悪感からか、それとも……。

## STAGE 5 特区・日本

行政特区に入る際に可能な限りの身分証明と資格や免許の登録が求められたのは、仕事等を割り振る為と言われている。しかし、海外で取得した物はともかく、日本で取得した物は七年以上前に取得したということになり、有効性が疑問視されている。その為、実際に仕事を始める前などに講習などが行われるのは当然のことだった。

教員免許を持っていた扇要も自身の希望もあって、教員関連の人間が集められた講習会に参加していた。

「さて、諸君」

講習会に参加した全員が目を疑うほどに眼帯姿の男——ジュリアス・キングスレイが挨拶もそこそこに教壇に手を置いて、黒いカラーコンタクトを付けた右目で生徒よろしく席に座る教員候補達を見渡す。

「ここに集められた者は言うまでもなく教員免許を持つ者であるが、この七年の間に教師として働いていない者も多くいると思う」

扇にしても戦前は教師をしていて、敗戦後も暫くは学校を建てて勉強を教えていたがレジスタンス活動をしていたので、以前のように教えられる自信はない。講習会があつて助かったとは彼だけの秘密である。

「仮に君達が生徒だとして、そんな者達に教わって安心できるだろうか？ 私ならちゃんとした者に変えてくれと言うだろう」

一々動作が大仰な上に、明らかに若そうな見た目の割に真意を突くのだから優秀な人なのだろうとは思った扇は、その通りだと頷く。「しかし、そうなるBritaniaから派遣される者ということになる。それは君達も望むことではあるまい」

当のBritaniaから派遣されている扇達教員候補の指導係みいたいなものであるジュリアス扮するルルーシュが挑発的に言いながら唇の端を上げる。

「学校を開設するまで後数日ほどかかるだろう。その間に諸君らに

は、こちらで用意したカリキュラムを頭に叩き込んでもらう」

行政特区に来た者達の中には、戦前ならば学校に通っていた年齢の子供も多くいる。その者達の為に特区の責任者であるユーフェミアは学校を開校することを宣言していた。

入る際に申し込みをし、年齢や受けて来た教育等を考慮して振り分けられることになるが、完了するまでに教員側の教育も終わらせなければならぬ。

「基本的なカリキュラムは戦前の小学生のものが残っているので参考にするとして、学ぶのは小学生相当の子供だけではなく、ともに教育を受けられなかった者達も含むので覚悟はしておいてほしい」

日本が征服されて七年が経過しており、その間に教育を受けられなかった者達への再教育の機会も兼ねているので扇達に責任は重大である。

だが、ブリタニア側のカリキュラムを押し付けられるわけではないと分かると、教員候補達もやる気の炎を燃やす。

「では、まずは簡単なテストから始める……」

そこからはテストテストの連続。

最初は扇達ならば鼻で笑っても出来るようなレベルだがテスト毎にレベルが上がっていき、最後には死屍累々とした屍だけが机の上に残っていた。

「こんなものか。少しは期待していたんだが」

テスト中に採点を続けながら屍を作り上げた張本人であるルルーシュは、あまり振るわない結果を見て鼻を鳴らす。

「では、次は少しの休憩を挟んで一人一人に模擬授業を行ってもらう」  
三十分の休憩の後に行われた模擬授業も教員候補達の神経をすり減らした。

「評価は各自で付けてもらう。意味は今更言わせるなよ……」

始める前にルルーシュは生徒役の教員候補達に評価を付けさせ、自身は完全に沈黙して見ているだけだったのだから教師役をやる方としては堪ったものではない。

「次」

貴族よりも大柄な態度なのに、模擬授業の出来が良かったのか悪かったのかも分からないまま、次の教師役が教壇に上がらざるをえない。

「本日はここまでとする。明日は違う教科を行う。学校外に資料の持ち出しは禁止だが、図書館で書き写す分は自由だ」

物言わぬ屍となった教員候補達を見下ろしたルルーシュは、今回の為に使った教材類を纏める。

「私はここで席を外すが、残りの一時間は君達に与えよう。帰るなりなんなり好きにするといい」

規定就業時間よりも一時間前に終了し、教室から去って行くジュリアスを見送った扇達は顔を見合わせた。

特区日本の参加者は自給自足が出来るようになるまではブリタニアからの援助を受けることになっているが、だからといって甘んじて甘受しているだけではわざわざ特区を作った意味がない。

食料の配給などを受けるには一定の就業を行う必要があり、扇達がジュリアスの命令でテストを受けていたのもその一環である。

「どうする？」

「あっちが帰っても良いって言ってるんだし」

「疲れたから寝たいよ、俺は」

神経をすり減らした教員候補は互いの顔を見ながら誰も動こうとしない。

「なあ、皆。聞いてくれ」

奇しくも黒の騎士団から脱退する時と同じ状況になりながら、老若男女が揃った教室に留まっている者達に向けて扇が声を張り上げた。

「俺の授業で何かおかしいところはなかったかな？ 分かり難いか、こうしたらいいっていうのがあったら教えてほしいんだ。ちゃんと授業の形になっていたか自信なくて」

扇が率先して発言すると不安が他の者達も追従を始め、徐々に授業の改善案や行い方の討論が始まった。

「扇か。凡庸な男だが、だからこそこういう時に良く動く」

去ったと見せかけて、こっそり戻って教室の中を窺っていたルルー

シユは黒の騎士団の副指令だった扇の長所が發揮されている姿に目を細めた。

場の中心は別の人物達が握っているが、それでも扇が外に弾かれることはない。

決して集団を引つ張っていくリーダーのようなタイプではないが、潤滑油のような役割を果たす者がいると大分違うことは今のルルーシユにも分かった。

「お前はカレンを除けば俺を最初から認めてくれていた。その借りは返そう」

ルルーシユはブリタニアの組織に入った際に、特区に入ろうとしている扇と共にいる千草から、シャーリーが撃ったブリタニア軍人の血液を照合してヴィレッタ・ヌウの存在に辿り着いていた。

行政特区に入る際に、簡単な身元チェックが行われる。そこで扇と共にいた女は記憶を失っていたという話になって、身分証明書を持っていなかったので採取した血液で照合した際に、シャーリーが撃ったブリタニア軍人だと判明したのだ。

軍のデータベースでは行方不明だったので、行方が知れたらルルーシユに一報が入るシステムを構築していたら、まさか扇と一緒にいて記憶を失っているとは思ひもしなかったが。

「秘密を抱えていたのはお互い様だ。このまま何も知らないまま平穩に過ごすといい」

最初に信用してくれたよしみでギアスで千草のことを忘れさせ、秘密裏にヴィレッタ・ヌウの始末を既につけていたルルーシユは今度こそ教室から去って行った。



行政特区が成立してから早三カ月と少しが経過していた。

「ジュリアスさん、この案件に対して相談が」

「こちらでも少し行き詰って」

今や特区の中心人物となったジュリアス・キングスレイ扮するルルーシュの下へ訪れる者は日に日に多くなっていた。大体がルルーシュの処理能力を当てにした相談なのだが場所が問題だった。

三カ月で異例の昇進を果たしたルルーシュの執務室はユーフェミアの隣の部屋なのである。

「皆さん、ジュリアスの方に来るのですね」

隣の執務室からやってきたユーフェミ・リ・ブリタニアは、それとはとてもともぐ立腹であった。

「それだけ俺が優秀だということだ」

「否定はしませんけど……」

ジュリアスが休憩時間に入るので人の出入りが無くなる時間帯を見計らってやってきたユーフェミアは、ルルーシュが優秀だということとは骨の髄まで理解しているので物凄く何かを言いたい顔をしながら言葉を続けなかった。

「では、こう言った方が良いのか？ ユーフェミア副総督が予想以上に使えない人物だと」

「ルルーシュ、幾ら本当のことでも言っていないことと悪いことが」

「お前はその天然をどうにかしろ、スザク。後、俺はジュリアスだと何度言ったら分かる」

スザクの何のフォローにもなっていないフォローに涙をちよちよ切れさせながら、ユーフェミアは改めて優秀過ぎる義兄を見る。

「どうして、ジュリアスはそのままで仕事ができるのですか？」

「いや、どうしてって言われても。少し前まで学生をしていた副総督様に聞かれても答えられん」

一向に学習しようとしなないスザクの頭の中身を見てみたいと考えていたルルーシユは、根本的にどうにもならないことを聞かれて困った。

「そうだよ、ユファイ。ルルーシユみたいな規格外と比べたら駄目だつて」

ユーフェミアはエリアーの副総督に就任するまでは本国で普通とは言い難いが学生をしていた。ルルーシユのような規格外と比べてはいけないだろう。

「規格外なのはお前だろ、スザク。なんだあのナイトメアの変態機動は？ 本当に人間か？」

改修されたランスロット・エアキャバルリーの動作実験の時に、同じく改修されたガウエインの動作実験も同時に行われたのでルルーシユも参加したのだが、相変わらずスザクが本当に同じ人間なのか疑わしい動きをしていた。

「普通の人間じゃないか、ほら」

「ほらつて。壁を走るような奴を何時から普通の人間と呼ぶようになったんだか」

自分の体を見下ろして腕を広げるスザクに、マオの一件で壁を走つたのを見たことを思い出したルルーシユは少し遠い目をする。

「僕からすれば、あのドルイドシステムを扱うルルーシユの方が人間なのかどうか疑うよ」

一度試しに乗り込ませてもらったガウエインでルルーシユがドルイドシステムを操る姿を見たスザクは非人間を見るような目を向けて来る。

「あれこそ、情報処理能力さえあれば誰でも扱える代物だ」

「機能を限定したウアテスシステムでも適性が無いと使えないって話らしいけど」

要はどっちもどっちである、二人を見ていたユーフェミアは暗い目をしていた。

「普通つてどこに行ったのかしら？」

ユーフェミアが現実逃避気味に言う、ルルーシユとスザクが驚い



た目を向ける。

「皇女殿下に言われても」

「ブリタニアで異端なことを始めた奴が普通だと」

処置なしと首を振るスザクと、鼻で笑うルルーシユの姿にユーフェミアは膨れた。

「やっぱり私って頼りないのかしら……」

世間一般常識に当てはめて考えれば普通ではない自覚があるユーフェミアはプシューと膨れて頬を萎ませ、現状に対する不満と不安がない交ぜになった呟きが口から洩れる。

「ああ、頼りない」

実際、三カ月で行政特区日本の実権を握りつつあるルルーシユの目から見ればユーフェミアはお飾りの責任者に近い。

「ちよつと、ルルーシユ」

「だから、お前はいい加減にジュリアスと……もう、いい」

諫めようとするのは良いことだが設定を守ろうとしないスザクにルルーシユは諦めた。

「皆が俺の下へ来るのは、それに値している能力を示しているからだ。それは分かるな、ユファイ」

コクリ、と頷くユーフェミアを視界に収めながら、眼帯をしている左目で書類を見ながら手はサインを止めない。

ルルーシユにとって休憩時間とは一人で仕事に集中できる貴重な時間なのだから。

「信頼とは実績を示すことによつて得られる。あのコーネリアにしても戦場での結果ばかりがクローズアップされることが多いが、政務に關してはしっかりと行っているから部下から慕われているんだからな」

武力だけで持て囃される時代ではない。特にエリアーの総督という立場ともなれば、手を抜いたり投げ出したりすれば規律も保てないし、部下もついてこない。

「今のユファイは頼りない。それだけの能力と実績がないからだ。正直、今のユファイは皇族の地位が無ければそこの文官よりも能力で劣

る」

「ルルーシユ、そんな言い方は」

「まずは現実を受け入れ、そこからどうするべきかを考えるべきだ。認識を改めなければ何時までも成長はない」

行政特区の中心であるこの特庁において、職員達が責任者であるユーフェミアではなくルルーシユの所に多くやってくる時点で周りから向けられる目がどうなっているかは簡単に想像がつく。

「出来ない、能力が低いで止まるのであればお前もここまでだ、ユ  
ファイ」

この程度で止まるようであれば、そもそも行政特区を立ち上げるはずがないとルルーシユにも分かっている。

「止まるつもりはありません。ルルーシユ、私に仕事のやり方を教えて下さい」

それでいい、と頷いたルルーシユは一定の仕事をやりに終えてペンを置いた。

「俺にそんな時間はない。サインしてある書類から判断の傾向を読み取るなり、例えばここで一緒に仕事をして横で学ぶなりしろ」

「え？ この流れでそれを言っちゃうの」

漫画ならば師弟関係になるような展開でのルルーシユの手の平返しに、スザクが肩透かしを食らったような顔をしながら突っ込みを入れる。

「ただでさえ、ランペルージとジュリアス・キングスレイの二重生活を送っているというのに、更に俺に苦勞を背負えと言うのか」

ルルーシユだってまさかここまで深くにまで特区日本に関わる気は無かったのだ。精々が下っ端役員程度で裏から実権を握る程度に収めるつもりだったのに、想定以上に特区日本に関わる職員達の質が低く、このままでは失敗すると判断してこうなったのだ。

特派のロイドに気に入られた所為でウアテシステムの構築を手伝わされるし、自分でやったこととはいえ泥沼に嵌っている感は否めない。

「特区は私が始めたことです。ジュリアスと一緒に仕事をします」

「ユフイ……」

「無駄なプライドなど邪魔になるだけです。早速、机を運び入れましょう」

貴族でもない日系ブリタニア人に教えを乞うなど皇族のすることではない。特区日本を始めるにあたってナンバーズに慈悲を与えるなどと言われ、ただでさえ本国で下がっているユーフェミアの評価のことを聞いていたスザクは、止めるべきか迷っていたが当の本人はやる気に満ちた目をしている。

「スザクもどうだ？ お前はもう少し事務能力を身につけないと、その内に俺がユフイの騎士になってしまうぞ」

「あら、それも良いですね。ジュリアスが騎士になってくれれば私も嬉しいです」

「ええっ!?!」

冗談で言ったルルーシュの言を割と本気で捉えたユーフェミアがにこやかに告げると、武にばかり偏重している割に戦場に出る機会が無くて最近専ら警護が仕事になりつつあるスザクも慌てた。

「冗談はよせ、ユフイ」

「私としては結構本気ですよ。ジュリアスがいてくれれば心強いですもの」

「俺の事情を考えると言ってるのだ」

このままでは押し切られると判断したルルーシュは切り札を出す。「今でさえ、かなりの綱渡りをしているんだ。これ以上の責任は負えない」

「分かっていますよ。言ってみただけです」

ユーフェミアの理想を実現させる為にはルルーシュが騎士になってくれれば、とても頼りになることは事実ではある。武寄りのスザクと文寄りのルルーシュの二人が騎士として仕えてくれる姿は、とてもユーフェミアの胸を熱くしてくれる。

ただ、ナナリーのことやルルーシュが皇族であることを知られるわけにはいかないので、特区という箱庭の中での夢想到過ぎない。

「行政特区を広げて、経済特区や工業特区の構想もしてあるんです。

手伝わてくれますか、ルルーシユ?」

狭い箱庭でもルルーシユとナナリーを守るため徐々に広げて自由を獲得していくために、ユーフェミアは更なる構想を練っていた。

「先を見据えるのはいいが、今はまだ構想段階に留めておいてくれ」

「この行政特区を安定させてから、ですよね」

行政特区を発表した時のように先走るのではなく、今はまだその時ではないと判断が出来るようになっただけでもユーフェミアの成長は見取れる。

「個人的にも、今の時期にこれ以上の仕事が増えても困る」

ルルーシユとしても特区を拡大させておくことは必要と感じているが、ようやくユーフェミアの直属になってスザクから離れて部下も出来たことで減って来た仕事量を増やせない事情もある。

「ナナリーの手術が出来る医者も見つかったんですよ」

「隠れたままでは最新の医療を受けることが出来ない。ユフィには本当に感謝してるよ。お蔭でナナリーの足を治せる目途もついた」

「目途がついたのは良いことだけど、まさかその医者がロイドさんの知り合いだったことには驚いたよ」

「世の中、どこで繋がっているか分からないものよね。えっと、ラクシャータさんだったかしら」

全部お膳立てをしたのはルルーシユではあるが、ブリタニアの干渉を極力減らせる特区にユーフェミアが責任者としてしている意味は大きい。その騎士であるスザクも昔馴染みという、この環境でしかナナリーに最新の医療を受けさせる機会はなかった。

「図らずも表に立って実権を握る形になってしまったことは誤算ではあるものの、より表立って動けるとなれば悪いことではない。」

「毎日、ロイドさんと喧嘩交じりに意見をぶつけ合っているよ」

二人がやり合う所為で、ナイトメアの格納庫が静かになることはない。ルルーシユにユーフェミアの側近の仕事を任せて特派に向いている時に巻き込まれることが多いスザクはうんざりとした顔で苦勞を吐露する。

「二人とも天才なことに変わりはないが主義が大分違うからな」

「ぶつけ合って良い物を作ってくれるから文句は無いんだけど、周りを巻き込むのは本当に止めてほしい」

緩衝材のセシルも偶にその輪の中に入って三者三様に意見をぶつけ合う時などは、客観的な意見を求められてスザクまで引き込まれそうになる。

「ルルーシユは良いよね。口八丁手八丁で逃げれるし、巻き込まれても窮することが無いから」

ガウエインの調整やウァテシシステムの構築に協力しているルルーシユも特派に出向くことはあるが、スザクと違って困る状況になることはない。

三人と対等な話を出来る知性と、流石に付いていけない時は抜け出せる話術を持っているからである。

「あまり特派で問題を起こすとカレンに喜ばれるからな」

「ああ……」

ルルーシユ扮するジュリアスが特派に出向く度に物凄い目を向けているカレンの姿を思い出しているのだろう。スザクの顔が酸っぱい物を食べたような感じになっていた。

「黒の騎士団の方ならば正体を教えて差し上げればいいのに」

「秘密は、秘密を知る者が少ない方が良い」

つまりはカレンに真実を打ち明ける気は無いと暗に言っているルルーシユにユーフェミアは少し哀しげだった。

「特派の取り込み交渉も続いている。正式に異動が決まれば、少しは見直してくれるだろう」

「良くシユナイゼル殿下が認めてくれたよね」

「あの三人が作る技術は本国を上回っているからな。フロートユニットや飛翔滑走翼は俺から見ても素晴らしいと思えるものだ。変に崩すよりもブリタニアの利益になると判断したんだ。スザクも面倒な事態にならないですむんだ。感謝ぐらいしたらどうだ？」

シユナイゼルの牙城を切り崩す為に特別派遣嚮導技術部を一定期間の期限付きではあるが、正式にユーフェミアの傘下に収める交渉は纏まりつつある。ロイド自身も最良のデヴァイサーであるスザクの

下を離れる気は無いようなので交渉を手伝ってくれたお蔭でもあった。

「日本を離れないで済むのは助かるけど、あの三人に挟まれる未来は嫌だなあ」

スザクの愚痴を聞きながら、今日やるべき仕事を片付けたルルーシユは道具を手早く片付けて立ち上がる。

「あれ、今日はもう上がり？ 何時もより随分と早いね」

帰り支度を始めたルルーシユに、時計を見たスザクが既定の時間よりも早いことに気付いて問いかける。

「早引けの許可は既に貰っている」

もう冬に入って大分冷えてきたのでコートを羽織りながらルルーシユは答えた。

「今日、なんかあったっけ？ あ、ナナリーと何か約束でもしてるのか」

「二時間後にナナリーの手術がある。当初予定した仕事は終わらせているから問題はないだろう」

「はあっ!?!」

事前の申請があつたので早引けすることは知っていたユーフェミアも、ナナリーの手術が今日と聞けば驚かずにはいられない。

「全く、会長が修学旅行の計画を今日中に仕上げろなどと言われなければ、今日一日はナナリーの傍にいられたのに……」

ブツブツと言いながら、さっさと執務室を出て行くルルーシユの聞き捨てならない言葉にスザクは執務机に置かれた一番の上の書類を手取る。

「これ、修学旅行の日程表じゃないか」

ブチツ、と近くでユーフェミアの堪忍袋の緒が切れる音がスザクの耳に確かに聞こえた。

「ジュリアアアアアアアアアアアアス————ツツツツ!!!」

ルルーシユが仕事中に平気で生徒会の仕事や学校の宿題などを普通にやっていたとユーフェミアが知るまで後五分。



ナナリーの手術が行われている頃、中華連邦の外れの砂漠地帯にあるとある場所で、部下から報告を受けていた少年は薄らと笑った。

「へえ、ナナリーが手術をね」

ブリタニア皇宮にて同じ報告を受けた皇帝は僅かに眉を動かした。

「これは動かねばならんな。兄さんが何かをする前にビスマルクを動かすか」

事態はルルーシユの与り知らないところで動いていた。

## STAGE 6 最高にして最悪な

当初は誰もが上手く行くことはないと思われた行政特区日本が始まって半年が経ち、コーネリア・リ・ブリタニアから副総督であるユーフェミアに総督が変わるのではないかと噂されるほどにエリアーの情勢が落ち着いてきた。

「そういや、今日だっけ」

放課後の生徒会室にて、少し前に生徒会で行って来た修学旅行の下見の写真を纏めていたリヴァル・カルデモンドが顔を上げて言った。「なにが？」

隣でクリスマススの企画を任されて唸りながら考えていたシャーリー・フェネットが反応した。

「ナナリーちゃんの退院日」

「ああ、そっち」

二人して壁にかけられたカレンダーを見れば、しっかりと今日の日付の所に○がされている。

「ルルちゃんつたら見舞いにも行かせてくれないんだもんね」

モラトリウムを続けるべきか迷っているミレイ・アツシュフオードは会長席に凭れて窓の外を見ていた。

「どこの病院かも教えてくれないから調べても特区って話だから、どうしても私達も行き難いしね」

ウランの核分裂とウラン濃縮の可能性についての研究に行き詰っているニーナ・アインシュタインは特区否定派ではあるが、慕っているユーフェミアが発案者なので微妙な心境なのである。

「租界と比べても治安は穏やからしいから一度行ってみたいけどルルーシュの奴、最近付き合い悪いから」

「手術費用を稼ぐ為にアツシュフオードで仕事してるのよ。大目に見て上げなさい」

実際はジュリアス・キングスレイとして特区の実権を握っているの



だが、実情を知っているミレイらが口を閉じているのでリヴァルが知ることはない。

働いているのは事実ではあるので、以前のように遊びに行く機会は激減しているリヴァルへのフォローをするようにルルーシュに伝えようとミレイは決めた。

「賭けチエスで稼げばいいのに」

「そういうことで稼いだお金でナナちゃんの足を治したくないっていう兄心じゃない」

以前にルルーシュと出かける為に有り金を叩いてサイドカーまで買ったリヴァルの愚痴に、消息不明のゼロとルルーシュを結び付けられないまま半年も経ってしまったシャーリーが宥める。

「最近はずザクもカレンも特区の方に行っちゃって、生徒会も随分寂しくなっちゃったもんだ」

特に男が自分一人な時が多くなってしまったリヴァルとしては寂しさも大きい。

「栄転なんだから僻まない僻まない。まあ、あのカレンにナイトメアの適性があるなんて驚いたけど」

「薬を変えたら元気になったから半年前と随分と印象が変わったしね」

ゼロもいなくなり、ジュリアス・キングスレイによって特区に参加させられたカレンは黒の騎士団が解散したと風の噂で聞いて、抵抗活動は出来なくなったのもあって病弱設定が面倒臭くなって地を出すようになった。

そんなことを知らないシャーリーはリヴァルを宥めるミレイに苦笑しながら、活発になってきたカレンの変化が良い物であると思って笑顔を浮かべる。

「前は薄幸で儂げだったけど、大分変わったよな」

「元気になった証拠なんだから良いんじゃない。私は今のカレンも好きよ」

カレンの家庭事情や地については知っていたミレイとしては、ちよつと生意気で反応が面白い今の変化を歓迎している。

「この前、体育で男子以上の成績出してたけど、あれで病弱だったの？」

「元からそういうポテンシャルがあったってことでしょ。ナイトメアのパイロットになったんなら厳しい訓練もしてるだろうし」

流石に黒の騎士団のエースパイロットをやっていたことまでは知らないミレイも、当然の疑問を抱くニーナに対して想像でしか答えられない。

その訓練を風景を皆が想像していると、リヴァルの携帯電話が音を鳴らした。

「あ、会長。ルルーシュがナナリーを連れて直にこっちに来るって」

「じゃあ、出迎えの準備をしましょうか」

携帯電話を確認したリヴァルの言葉にミレイが音頭を取って、それぞれの作業の手を止めていそいそと片付ける。

見舞いは駄目でも退院祝いのお祝いをしたいと掛け合っていたミレイらの熱意に負けたルルーシュは計画の詳しい内容を伝えられてはいない。大体、察しはついてるだろうが。

「スザクとカレンも急な仕事さえ入らなければ参加できたのにな」

「ぼやかないの。リヴァル、くす玉はそっち」

「え、こっち？」

「違う違う、もう少し左だって。ああ、行き過ぎだって」

頼りになる男とミレイに思われたりリヴァルが気張って準備したが少し空回りしている感は否めない。

そんなこんなで最終の準備が進み、待ち望んでいると彼らはやってきた。

「二「お帰り、ナナリー！」三」

車椅子のナナリーを先頭にして部屋に入っているのを見て一斉にクラツカーを鳴らす四人。

吹き出した紙テープや紙吹雪が舞い散る中で、何時もとの違いに真っ先に気付いたのは観察眼があつてランペルージ兄妹と一番付き合いの長いミレイだった。

「あれ、ナナちゃん。目が……」

クラツカーから飛び出した紙テープや紙吹雪が二人に降りかかっている中で、ナナリーの目が開かれていることに気付いて開いた口を手で覆う。

「はい、見えるようになったんです」

この世の春とばかりに笑顔を浮かべるとルルーシュに車椅子を押ししてもらいながら、ナナリーも幸せそうに笑う。

「え？ え？ どういうこと？」

「良かったね、ナナリー」

「うわあ、私のこと分かるナナちゃん」

混乱しているリヴアル、厳然たる事実を受け入れて笑うニーナに、ナナリーに顔を寄せるシャーリー。

「シャーリーさん、ミレイさん、ニーナさん、リヴアルさん………想像していたよりも皆さん、ずっと大人です」

「あ、やべっ、俺泣きそう」

もうこれ以上は無いと言う満面の笑みを浮かべているナナリーの万感が籠った言葉に当てられたリヴアルは込み上がって来た涙を抑えるように目元を抑えて上を向く。

「良く分かるぞ、リヴアル」

うんうん、と何度も頷いて、ルルーシュは初めてリヴアルと共感した気がしていた。

「お兄様は大泣きでしたものね。まさか初めに見るお兄様の顔が泣き顔だとは思いませんでした」

七年と半年振りに見た兄の顔が泣き顔だったことが強い印象として残っていたナナリーは笑い声と共に暴露する。

「ルルーシュの泣き顔か。ちよっと見たかったかも」

「止めてくれ、ニーナ」

「ねえ、ナナちゃん。写真とか映像とかない？」

「残念ながら」

「会長」

揶揄われていると分かっているながらもルルーシュの顔は笑顔のままである。それほどにナナリーの目が見えることになったことが嬉

しいようだ。

「あれ？ 手術って目のやつだったのか。俺はてっきり足の方だと  
思ってたのに」

嘗てないほどに上機嫌なルルーシユにリヴァルは苦笑しながらも、  
今更ながらにナナリーが車椅子に乗っていることに気が付いた。

「手術したのは足だぞ」

「じゃあ、立てるのか？」

「まあ、待て。そう焦るな」

退院祝いの会の為に机が横に避けられた生徒会室の中央まで車椅子  
を押したルルーシユは、背負っていた鞆から器具を取り出してナナ  
リーの足に装着していく。

暫くの準備の後、下ろされたナナリーの足がしっかりと床を踏みし  
める。

「行きます」

ゴクリと皆が唾を呑み込んで見守る中、ルルーシユが支えている歩  
行器を持ったナナリーの腰が車椅子から離れた。

おおつ、と数人分のどよめきが生徒会室に響き渡る。

「どうですか、皆さん？」

数秒程度立位を維持し、疲れた様子で腰を再び下ろしてやり切った  
笑みを浮かべるナナリーにみんな言葉も無い。

「リヴァルじゃないけど、私も泣きそう」

苦労を知るだけに感動も一入なミレイに同意する者複数、というか  
全員がそうだった。

「良かったなあ、ナナリー。本当に良かったあ」

と、既に何度も見ているはずのルルーシユがボロ泣きしているの  
で、それに釣られているような気がしないでもないが感動は本物であ  
る。

「足腰の筋力が弱っているのでまだ少ししか立てないのですけれど、  
頑張れば歩けるようになると言われたのです」

実際、立って立位を維持できたのも腕の力に寄るところが大きい。  
七年の間に衰えた足の筋力では、まだ全体重を支えることは出来な

い。

「リハビリが大変だろうけど私達も手伝うよ、ナナちゃん。水泳とか  
どうかな？ あんまり足に負荷がかからないだろうし」

年代の女の子と比べても筋量が少なそうなナナリーの足を見た  
シャーリーが自身が所属している部活が助けにならないかと提案す  
る。

「お医者さんからも水の中なら負担も少ないし、同じことを言われて  
います。その時はお手伝いをお願いをしてもいいですか？」

「うん、喜んでやらせてもらおうよ！」

ようやく涙が引つ込んだルルーシユにリヴアルがティツシユを渡  
している間に美しい友情が花開こうとしていた。

「手術したのは足だよな？ なんで目が見えてるわけ」

「……………ナナリーの目が見えなかったのは精神的な物が原因だ。立  
てたという結果が精神に作用したんだと医者は言っていた」

決して人前で鼻を噛むような不作法はしないルルーシユは涙だけ  
を拭き、リヴアルに目が見えるようになった経緯を説明する。

「ボロ泣きしたんだろ」

「ああ」

初めて立って目が開いた時の感動を思い出ただけでルルーシユ  
は泣けてくる。

立つことが出来れば目が見えるかも、とは思っていたが本当に見え  
るようになるまでとは楽観視していなかっただけに、立った分も合わ  
せて涙腺がマツハで崩壊してしまった。

人生で一番恥ずかしいぐらいの姿でラクシャータにも呆れられる  
ぐらいに泣いてしまったが、それ以上に嬉しかったのだ。

「良かったな、ルルーシユ」

肩に手を置かれたルルーシユが感謝の言葉を返そうとした直後  
だった、天国から地獄に叩き落とされたのは。

「——失礼」

パンツ、と大きな音を立てて生徒会室のドアが外から開かれた。

ナナリーを驚かせる大きな音を立てた者に文句を言おうとルルー

シユが振り返ったところで、その顔を驚愕に染め上げた。

「お、オレンジっ!?!」

いるはずのない人物——ジエレミア・ゴットバルトの姿に声すら出せなかったルルーシユに変わって、驚きに染まったりヴァルの声が響き渡る。

左目に機械式のマスクを取り付けているジエレミアはルルーシユの姿を視界の中心に収めると、ルルーシユ達が気づかない程度にグツと足に力を込めた。

「御免……」

眩きの直後、数メートル以上離れていたにも関わらず三步で接近したジエレミアの拳がルルーシユの頬にめり込んだ。

「がつ!?!」

全く反応も出来なかったルルーシユが殴り飛ばされ、壁際に移動されていた机にぶち当たって崩れる大きな音に正気を取り戻した少女達の悲鳴が鳴り響く。

「これで私を貶めた分は返しましたぞ」

荒事に縁のないシャーリーは動けず、暴力に怯えたニーナをミレイが抱え、車椅子で動けないナナリーの前に立つリヴァル。

「貶めた、分……だと……?」

殴られた衝撃でグワングワンと揺れる視界の中で、机を頼りに体を起こしたルルーシユにジエレミアは感情を覗かせない右目で見下ろす。

「理由は言うまでもないでしょう。私はオマケに過ぎませんが」

「——お久しぶりです、ルルーシユ殿下」

次いでやってきた人物を見た時、今度こそルルーシユは叫び出したほどの驚愕を覚えた。

「な、ナイトオブワンっ!?!」

ブリタニア国民ならば誰もが知っている帝国最強の称号を持つビスマルク・ヴァルトシユタインの姿を見間違えるはずがない。

「私がやってきた理由は聡いあなたなら分かるはずです。無駄な手間は省かせて頂きたい」



「殿下、まさかそれが罷り通るとでも？」

「皇族の言うことには逆らえないのが貴族というものだ。特に母上の後援をしていたアツシユフオードは私の命令には逆らえない。違いか？」

然り、と閃光のマリアンヌを敬愛していたジエレミアは自分がアツシユフオードと同じ立場であつたならば、遺児の命令を何としても守り通しただろう。例え皇室に逆らうことになつてもだ。

「どうなのだ、アツシユフオードの娘よ」

「……………はい、我が祖父ルーベン・アツシユフオードとルルーシユ様の交わした契約では、そうなつたと聞いています」

もうルルーシユらの存在が帝国に知られてしまった以上、ミレイに出来ることはルルーシユがアツシユフオードを守ろうとしている展開に追従するしかない。

アツシユフオードが何時か貴族として返り咲くためにルルーシユ達を保護し、手元に置いていたと知つていても。

「ふむ…………」

ルルーシユの見上げる先で、ビスマルクは思案気に顔を上げられないミレイを見下ろしている。

(ここを潜り抜ける手は一つだけだ。ビスマルクをギアスで操り、ナリーを連れて逃げるしかない)

ジエレミアにはクロヴィス殺害の容疑をかけられたスザクを助ける為にギアスにかけている。となれば、後は帝国最強の騎士をギアスで操つてこの場を切り抜けるしかない。

「良かろう。陛下には私からも口添えをしておく」

「ありがとうございます」

別にアツシユフオードに何が何でも守つてほしかつたわけではない。大体、先に命令をして帝国に報告させないようにしたと言つたのはルルーシユの方だ。

全てを欺くと決めたのに失望する方が間違いで、頼つたことが間違いなのだど痛感しながら左目にしていた特殊なカラーコンタクトを外す。



「では、参りま」

「俺に従え！」

シャーリー達が様々な疑問を裡に秘めながらもナイトオブワンがいては表に出せない中、ようやくこちらを見たビスマルクの右目に向かって全力のギアスを放つ。

「イエス・ユア——」

「<sup>ギアス</sup>それは効かない」

一瞬、ギアスに支配されて命令を聞こうとしたビスマルクの背後に従っていたジエレミアがギアスキャンセラーを発動させ、ギアスが解かれる。

「大人しくして頂きましょうか」

「ビスマルク！」

ギアスが解かれたどうかはルルーシユには直ぐに分からない。再び踏み込んできたジエレミアの相手はルルーシユには出来ないの助けを求めるも、ギアスが解かれたからビスマルクに命令を聞く筋合いはない。

「成程、これが絶対遵守の力。凄まじいものです」

「お、俺のギアスをつ!？」

動かないビスマルクにギアスが効いていないことを悟るも既に遅い。元より格闘能力が低いルルーシユは簡単にジエレミアに床に抑え込まれる。

「お兄様っ!？ ビスマルク卿、これは」

腕を後ろ手に回され、ギアスが暴走している左目を床に強く押し付けられたルルーシユに我慢が出来ずにナナリーがビスマルクに物申す。

「手荒なこととはしたくないのですが、ルルーシユ殿下は今の状況を快く思っておられぬ様子。手荒に扱ってしまうご無礼をお許しく下さい」

「だからってこれは」

「お目が見えるようになったのですね。陛下も喜ばれることでしよう」

歩み寄ってくるビスマルクに会話をする気が無いと分かる話題変換の仕方に、ナナリーは彼女らしくなく顔を顰める。

「ナナリーに手を出すな……!」

ジェレミアに抑え込まれながらもビスマルクがナナリーに近づくのを見たルルーシユが拘束から抜け出そうとするが、身体能力だけでなく格闘技を修めているわけではないのでもがくだけしか出来ない。

「な、ナナリーに近づくな!」

説得は無意味と悟ったリヴァルが手近にあったナナリーが立つ時に使った歩行器を持って、帝国最強に向かって威嚇する。

ミレイはニーナに抱き付かれて動けず、シャーリーはジェレミアのギアスキャンセラーを受けてルルーシユによって消されていた記憶が復活したシヨックを受け止めきれていない。

「我らは皇帝の勅命で動いている。それに逆らうことがどういう意味か分かっているのか?」

「わ、分かっているよ!」

突発的な行動ではあった。後先を考えない若さでもあった。

「殿下がなんだ、皇子がなんだ。ルルーシユはルルーシユだ!!」

それを証拠にリヴァルの足は馬鹿なほど震え、目にも涙が浮かんでいる。

「俺の友達のルルーシユが嫌がってんだ! 味方してやるのが親友つてもんだろつ!!」

「リヴァル……」

事情は分からない。理由は知らない。それでもルルーシユは友達だからリヴァルは立ち塞がった。

「そんな物を持って帝国最強に抗おうとする者が嘗ていたか。いや、いない!」

得難き友情に胸を感動で打ち震わせながらも、帝国の勅命で動いているビスマルクに私情で逆らうことは許されない。

「ルルーシユ殿下は良き友を持った。名も知らぬ少年よ、その心意気は買おう!」

「そんな物に何の意味もないって教えてあげたら?」

フツと笑みを浮かべたビスマルクが浮かべて何かに気付いて振り返った後に聞こえて来た声に、皆の目が動く。

「V・V・様、何故ここに——」

「まあ、お互いさままってことで。勝手にジェレミアを動かしたことも何も言わないよ」

つまりは理由を話す気は無いと言うV・V・にビスマルクは苦み走った顔になるが当の本人は生徒会室に入って来て、抑え込まれているルルーシユの下へ足を向ける。

「やあ、久しぶりだねルルーシユ」

既知であるかのような呼び方だがルルーシユはこのような少年のことは知らない。

(いや、待て。V・V・といったか)

既知の人物に似た名前の響きに、少年の正体にルルーシユは直ぐに辿り着いた。

「まさかお前もC・C・と同じ」

「察しが良いのはシャルル譲りだね」

それ以上は具体的な正体を何も語らず、V・V・は懐から拳銃を取り出して屈み、ルルーシユの眉間に銃口を突きつける。

「嚮主V・V・、それは」

ギアスを使わせない為に必要があつてルルーシユを抑え込んでいるジェレミアが苦言を呈するが、V・V・が自身を裏切った者の言うことを聞く必要はない。

「ジェレミアは黙っててよ。君達と違って僕が欲しいのはC・C・の身柄だ。彼女は今、どこにいるのかな？」

マオと同じような要求だがルルーシユを取り巻く今の環境はあの時の比ではない。

「……………俺が言うとも？」

「その時は彼女達の命が代償となるよ」

銃口をミレイ達に向けられては、最初からルルーシユに選択権などない。

スザクとカレンが都合良く現れてくれるような奇跡もあるはずが

ないのだから。

「クラブハウスの俺の部屋にいるはずだ」

「ふうん、クラブハウスのルルーシユの部屋だって。早く捕まえてよ」  
耳に付けていたインカムで誰かに指示を出したV・V・は銃口をルルーシユから避けてナナリーへと向けた。

「おっと、手が滑った」

直後、パンと乾いた音が響き渡った。

「あ、あれ……？」

反射的に射線に割り込んだリヴァアルは歩行器を落とし、痛みの走る腹部を抑えた。すると、ジンワリと血が滲んでいく。

「V・V・様!? なにをー!」

「ごめんよ。手が滑っちゃったんだ」

V・V・は全てを分かった上で、これ以上はナナリーを害せないと諦めた。

「リヴァアルさん!?!」

己を守るために射線上に飛び込んだリヴァアルの背中が崩れ落ちるのを見たナナリーが手を伸ばすも届かない。

「リヴァアル——ッ!!」

撃たれて崩れ落ちたリヴァアルの姿にルルーシユは信じられない力を絞り出し、ジエレミアを振り解いて駆けつける。ジエレミアも怒りに満ちた顔でV・V・を見ていてルルーシユを追おうとはしなかった。

「リヴァアルッ!!」

ルルーシユがリヴァアルの下に駆け寄り、うつ伏せに倒れた体をひっくり返すと撃たれた腹部から流れ出た血が制服より滴り落ちた。

アツシユフォード学園の男子の制服は黒なので血は目立たないが、既にかかなりの血液が流れている。そして今も止まらない。

「なんだよこれ、すっげえ痛えよ」

「……………大丈夫だ。会長! 直ぐに救急車を!」

「え、ええ」

明らかに致命傷と分かってもミレイに指示をだし、血が流れる銃創

を抑えつけて止血を試みるが止まらない。

「V・V!!」

「痛っ!? 何をするのさ、ジェレミア」

「貴様は自分が何をしたのか分かっているのか!!」

我を取り戻したジェレミアは撃ったV・Vを殴り飛ばし、その胸倉を掴んで恍惚している顔を激怒している自身の顔に近づける。

「ちよっと手が滑っちゃったんだよ、ごめんごめん」

「謝って済むことだと」

「そこまでしておけ、ジェレミア。今は」

「くっ」

既にヘリコプターの手配をしているビスマルクに殴ろうとした腕を抑えられ、V・Vを放り捨てたジェレミアは倒れたリヴァルの下へ急いで向かった。

「変わります」

「何を」

「私は軍人になる時に医療講習を受けています。そんなやり方では駄目です」

ルルーシユの手を抑えてどけたジェレミアは強い口調で言い、服の袖に仕込んである剣を取り出してリヴァルの制服を切り裂き、銃創を見て顔を顰める。

「誰でもいい。保健室に行つて止血できそうな機材を片っ端から取りに行つてくれ。私では場所が分からない」

「私が!」

「私も!」

銃創は致命傷の部位にある。出血量も多く、このままではヘリコプターが来る前に出血多量で死亡すると判断したジェレミアの指示に従つて、シャーリーとミレイが保健室に向かって走る。

「リヴァル! リヴァル!」

ルルーシユの呼びかけに閉じていたリヴァルの目がようやくよく開いた。

「ははっ、最期が親友の妹を助けるなんて漫画みたい」

「馬鹿！ 変なこと言うな！」

ジェレミアがスカーフを解いて丸め、止血の為に銃創に詰めるが瞬間に血で染まる。

「ナナリー殿下、君！ ハンカチとかを持っていたら出してくれ！」

残ったナナリーとニーナに向けてジェレミアが言うのと二枚のハンカチが二人から手渡され、ジェレミアが血で染まったスカーフの上に重ねるが深紅が広がるペースの方が早い。

「君！ 変わってくれ！」

「ええっ!？」

「彼を死なせたいのか！」

ニーナの手を引っ張って傷口を抑えさせ、ジェレミアは生徒会室にある布を片っ端から集める。

「生きろ、リヴァル！ 駄目だ死ぬな！ 死ぬな！」

付いた膝を染めるリヴァルの血を感じながら、ルルーシュは『生きろ』とギアスをかけ続ける。繰り返し発動し続けたギアスが右目にも現れているとも知らずに。

「なあ、ルルーシュ……………俺達って親友だよな」

「ああ、ああ、俺達は親友だ！ だから生きてくれ！」

「へへっ、皇子と……………親友なんて、親父も……………驚くだろうな……………」

リヴァルは良く動かない手を懸命に動かすと、ルルーシュが強くその手を握り締める。でも、何故かりヴァルにはルルーシュの手の感触が良く分からない。

「幾らでも自慢したらいい！ だからだから——!!」

眠くて眠くて仕方なくて、リヴァルはそんなに必死になるなよと伝えることが出来ない。

ジェレミアが幾ら布を取り替え続けても血は止まらなかった。

「……………すまない」

目を閉じたリヴァルが呼吸停止したのを確認したがジェレミアは処置は止めなかった。

だが、ジェレミアが零した謝罪がりヴァルの今の状態を表している、察しの良いルルーシュは悟ってしまった。



STAGE 7 E. U. 戦線に異常有り

エリア11のアッシュフォード学園でナイトオブワンのビスマルク・ヴァルトシュタインによって捕らえられたルルーシュは、神聖ブリタニア帝国の首都ペンドラゴンに移送され、ペンドラゴン皇宮にある謁見の間へと連行されていた。

C・C・が着ていたのと同じ囚人服を着せられ、後ろに回されて固定された手を掴まれて第九十八代シャルル・ジ・ブリタニアの前へと引き出された。

「元第7皇位継承者ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。久しいなあ、我が息子よ。いや、今はジュリアス・キングスレイを名乗っていたか」  
皇帝の座す玉座以外は電源を落とされた中で、ただ一人だけ光に照らされながらシャルルは鷹揚に跪かされたルルーシュを見下ろす。

「き、貴様あー！」

怒りで人を殺せそうな憎悪に満ちた右目でシャルルを睨み付けるルルーシュの左目は眼帯によって塞がれている。

ブリタニアへの移送中に付けられた眼帯はルルーシュが作った物ではない。

「その眼帯には流体サクラダイトを仕込んである。正式な手順以外で無理に外そうとすれば、周りを巻き込んで爆発しよう。無論、貴様も死ぬ」

息子の体に爆弾を取り付けたシャルルは情を滲ませることなく、どこまで冷酷に告げる。

「そんなことはどうでもいい。答えろっ！」

ルルーシュにとって自分のことなど、どうでもいい。

「あのV・V・とかいう奴はどこにいる！ 奴を連れてこい。奴を殺させろ——っ!!」

忘れない。リヴァルの体から命の灯が消えて行く、あの感覚を。

忘れない。ルルーシュの親友の命を奪った、あの子供を。



忘れない。この憎しみはV・V・を殺すまで、決して消えることはないのだから。

「我が兄を貴様如きに会わせるはずがなからう」

「なん、だと？」

ルルーシユの憎しみを全身に受けても、全く揺らがなかったシャルルが放った言葉の中に看過しえないものがあつた。

「V・V・は我が兄、つまりは貴様の叔父に当たる」

耳に言葉が入って来ても頭が理解してくれない。

「——ははっ」

それでも体は正直だつた。

「くくくくつ、ははははははははははははハハハハハハ………つっ!!」

笑う。晒う。晒い続ける。

V・V・がC・C・と同じ不老不死であることには名前から察しがついていたが、まさか自分の叔父だとは気づきもしなかつた。

ビスマルクが敬称をつけていたから下手な貴族よりも立場が上だとは思っていた。ルルーシユの知る限り、シャルルの兄弟は全員死亡している。V・V・が皇帝シャルルの兄、つまりは皇兄であると誰が想像できようか。

「壊してやる」

ブリタニアという国が存在している限り、ルルーシユが望む世界が得られるはずがないと分かっていたはずなのに、一度でもブリタニアを内側から変えようと思つたことが間違ひだつた。

「貴様の全てを、ブリタニアに纏わる物を、この世から全て葬り去つてくれるっ!!」

「では、ナナリーを殺すでしょう」

憎しみに染まっていたルルーシユの頭が一気に冷やされた。

「ナナリーに手を出すな！　また俺から奪う気つもりか！　母さんだけでなくナナリーまで！」

ルルーシユとは別に移送されてナナリーの行方がどうなっているのは分からない。

憎しみだけで先行し過ぎて、ナナリーのことを頭の端に追いやって

いたルルーシユに先程までの勢いはない。

「それは貴様の出方次第よ」

自身の娘であるナナリーを餌としながらも、シャルルの表情にはさざ波一つ立たない。

「皇子でありながら反旗を翻した不肖の息子よ。しかし、貴様の存在が我がブリタニアに利益を齎しておる。まだ使い道はある」

軍事国家として経済を維持しているブリタニアは、ルルーシユ扮するゼロが作った黒の騎士団の跳梁が軍拡の良い口実になった。

「ジュリアス・キングスレイに貴族位を与える」

玉座に頬杖をついたまま傲然と見下ろすシャルルに何を言われても、ナナリーを人質に取られてはルルーシユに反抗は出来ない。

「存分に働き、儂の機嫌を取るが良い」

皇帝の命にルルーシユはYes以外に答えられる口を持っていなかった。

「護衛としてジェレミアとナイトオブブラウズを付けてやろう」

ジェレミアにはギアスを解除できるギアスキャンセラーの力がある。そのことはアッシュフォード学園でビスマルクにギアスをかけた際に解かれた経験からルルーシユも知っていた。

「ナイトオブブラウズまで？ はっ、よほど俺を警戒しているようだな」

「期待しておるのだ。ゼロとしてブリタニアを脅かしたその力、存分に発揮することをな」

首輪を繋がれようともルルーシユは従順な犬ではない。隙あらば飼い主に噛みつく猛犬であることを示すようなルルーシユに生意気な口ぶりに、初めて口元を緩めたシャルルは腕を振るった。

すると、振るわれた腕の先の地点に光が灯る。

「ナイトオブシックスに任命したばかりのアーニャ・アールストレイムだ。まだ若い腕は立つ」

演出っぽいやり口に鼻を鳴らしながら、ルルーシユは歩み寄ってくるまだ少女にしか見えないナイトオブブラウズを見る。

「久しぶりね、ルルーシユ」

初めて会ったはずのアーニヤが何故か親し気に話しかけて来たことにルルーシユは眉を顰めた。

「アールストレイム家のことは知っているがお前と会ったことはないはずだ」

流石に幼少の頃となると少し自信はないが、少なくともルルーシユが記憶する限りにおいて皇帝の前で親し気に話しかけて来るような知己はいないはずだった。

「あら、忘れちゃった？ まあ、この姿じゃ仕方ないか」

細く小さな体をクルツと一回転したアーニヤは悪戯気に笑った。

「お母さんよ。今はこの子の体の中にいるの」

「なっ!？」

「貴様は何も知らぬのだ、ルルーシユ」

目に赤い光を宿しながらアーニヤが告げた真実はルルーシユを打ちのめすに足る衝撃があった。

固まったシャルルの方を見れば、その両目にはギアスの紋章が浮かんでいる。

「全てを語ろう。七年前の真実を、貴様らが日本に送られた理由を。」

そして我が計画を」

シャルルは最も自身に似て近づいているルルーシユに、嘘を交えることなく全てを語った。



「アールストレイム卿」

E・U・を横断する線路を進む皇室専用列車。

車窓から眺める緑豊かな風景を楽しむことなく、手元の携帯電話に目を落としていたアーニヤ・アールストレイムは呼びかけられて顔を上げた。

「何？」

顔を上げた先には車掌が立っていた。

「後、三十分ほどペテルブルクに到着します。その御報告に」

皇室専用列車に配置されるだけであって車掌の動きに無駄は無く、相手に不快さを感じさせない態度で一礼する。

「分かった。ありがとう」

おざなりに対応しても怒ることなく、もう一度一礼して下がる車掌のことを直ぐに忘れたアーニヤは記録を取る気にはなれず、客室へと戻ることにした。

開閉スイッチを押せば自動で開くドアを潜って客室に入ると、重たい空気がアーニヤを包み込む。

「陰気」

「嫌いな奴の顔を見れば、陰気にもなる」

重たい空気を放つ張本人である伯爵位を持つジュリアス・キングスレイ卿——ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは眼帯に付けられた宝石の装飾を揺らしながら晒った。

客室内は皇室専用列車だけあって豪華ではあるが華美ではない。

デザインした者のセンスが存分に発揮された調和の取れた調度品の中で、一般人では逆立ちしたって買えない金額のソファに深々と座ったルルーシュが放つ空気は陰気そのもの。

「自覚があるなら少しは改めてほしい。こっちが滅入る」

重たい雰囲気と半年以上も一緒にいれば少しは慣れるもののはずだが、幼少期を知るだけにアーニヤとしても心穏やかではいられない。

「ならば、俺に顔を見せぬことだ。お互いにその方が楽だ。そうだろう、ジェレミア」

「私はジュリアス様の護衛ですのぞ」

偶に離れなければ気が滅入ってくるアーニヤとは違つて、片時も傍を離れようとしなないジェレミア・ゴットバルトは護衛の鏡だろ。う。

「護衛？ 監視の間違いだらう」

嘲るように言われても、ルルーシユの背後に静かに立つジェレミアは崩れない。

ジェレミアの配置は皇帝シャルルの命によるもの。幾ら絶大な権力を与えられたルルーシユといえども、たかが護衛を外すことも出来ない。

「ふん、つまらない奴だ」

自分から転属を願ひ出るように仕向けても、ジェレミアはまるで罰を求める咎人のようにルルーシユの傍を離れない。

あまりの強情さに、最近ではルルーシユの方が諦めかけている。

「アーニヤ、お前が来たということはペテルブルクにはもう着く頃合いか」

「うん、後三十分だつて」

アーニヤが客室に戻つてくるとすれば到着まで僅かだろうというルルーシユの推測は当たつており、行動が読まれていることに慣れたアーニヤも驚きもせず答える。

「ジェレミア、命令内容の復唱を」

「はつ、ユーロピア戦線の指揮を取り、E. U. を攻略せよとのことです」

今は主君であるルルーシユの命を受け、命令を復唱したジェレミアの聲が客室に響く。

「そしてユーロ・ブリタニアの動向の監視もか。確か本来はマリーベルのグリンダ騎士団が派遣される予定だつたはずだが」

ルルーシユが記憶している限りでは、今回の派遣は神聖ブリタニア帝国の皇女にして皇位継承権第8位であるマリーベル・メル・ブリタニアの指揮するグリンダ騎士団が選ばれていたはずだつた。

「彼らはエリア24のテロ鎮圧でダメージを受けた為、シユナイゼル殿下より我らに命令が下りました」

「また尻拭いか」

この半年間、秘密裏に皇帝よりルルーシユの正体を教えられたシユナイゼルから良い様に使われているルルーシユは機嫌悪げに鼻を鳴らした。

「それだけ殿下に信用されている証拠です」

「どうだかな。どうせこの間、チエスで負けた腹いせだろ」

ジェレミアはシユナイゼルを擁護するが、ルルーシユからすれば幼少の頃と違って勝率を五分に持ち込まれていることに対する嫌がらせとしか思えない。

「最近のシユナイゼル殿下はルルーシユ殿下とチエスをするのを楽しみにしていると、マルディーニ卿は言っていました」

「だからって、ペンドラゴンに戻る度にチエスの勝負仕掛けて来るのを止めさせろ。こっちは疲れているんだ」

シユナイゼルの息抜きに付き合わされ、負けで終わると腹いせのように任務を押し付けられてはルルーシユでなくとも堪ったものではない。

「私では宰相閣下の申し出を断ることが出来ませんので」

辺境伯では実質的なブリタニアのNo.2に逆らうことは出来ない。ことにその勝負に対してルルーシユ自身も前向きな姿勢を見せており、良い気分転換になっていると分かっているだけに。

「ちっ、これだからただの貴族は」

「じゃあ、皇族に戻れば？」

「それが出来たら苦労はしない」

ズバリと切り込んでくるアーニヤに、権力の力に煮え湯を吞まされてきたルルーシユも嘆息する。

「幾ら俺が結果を出そうとも、それはジュリアス・キングスレイの手柄となる。奴が認めない限り、俺はルルーシユを名乗れない」

ジュリアス・キングスレイに与えられた爵位は伯爵。

しかし、領地も持っていないければ直属の部下もない。当然ながら何の後ろ盾もない伯爵に強い力など無く、舐めたことをされた経験は一度や二度ではない。

そんな奴らには人を侮った相応の報いを与えたが、皇族の力があれば楽が出来ると思ったことも一度や二度ではない。

「殿下のしたことが諸手を上げて称賛できないからでは」

「命令は果たしている。文句を言われる筋合いはない」

「殿下……」

背後でジェレミアからそんな呟きが漏れてもルルーシュが顧みることはない。

文句なしの快勝ではなく、味方側にも損耗があったり、意図的と思えないほど敵を見逃したり、ジェレミアのナイトギガフォートレスが囿に使われて敵陣のど真ん中に取り残されて大破したり等々。

作戦目的は達成されているので誰も文句を言えないのに諸手を上げて称賛出来ないところである。

ジェレミアはルルーシュがわざとそうしていると分かっている、でもそうする理由も分かっているから二の句を告げずに黙るしかない。

「でも、結果を出しているのは事実。なんで、皇帝陛下は認めないの？」  
「当人に聞け」

とはアーニヤに言いつつも、その理由がV・V・対策であることをルルーシュは知っている。

Cの世界のことやラグナロクの接続まで嘘偽りなく話されて全てを知った上でルルーシュは反逆の牙を研ぎ続けている。

「そういうえば、聞きましたか？ エリアーの事」

何も知らないアーニヤがこれ以上、この話題のことを穿り返す前にジェレミアは咄嗟に話題を変える。

「何かあったのか？」

ジュリアス・キングスレイが皇族に見出されて本国に栄転したというのが嘘だとしても、彼の地に関してはルルーシュも無関心ではいられない。

「始動した工業特区や経済特区が成功し、各エリアからの視察の使者が絶えないと本国で噂になっています」

ユーフェミアの提案を、ルルーシュがジュリアス・キングスレイとしてプランを立てていたが実行に移す前に本国送りになった。自分

が計画していただけにその動向には流石に無関心ではられない。

「悪い意味で、だろう。ナンバースを差別するのが当たり前なブリタニアにとって、特区は根幹を揺るがす政策だからな。主導者がエリア11の総督となったユファイでなければ認められはしない」

本国に送る為の金を作る為に、ナンバースを差別しては生産性は上がらない。頭打ちになっている現状を打破する為に、目に見えて生産性を上げているエリア11のやり方を倣う者が出て来ることは自然の流れだった。しかも皇族が主導している計画なのだから倣おうとも責任転嫁も容易い。

「コーネリアもペンドラゴンにいる以上、ユファイを止められる者はいない。皇帝ならば簡単だが、奴にその気は無い」

「断言できるの？」

「ああ」

シャルルに政治に対する関心はない。止められる立場の宰相のシュナイゼルは特区を最初に認めた立場なので前言を翻したりはしない。No.1と2が止めようとしな以上はギネヴィアやカリィヌといった皇族、大貴族達ではユーフエミアを止められない。

権力など関係なく止められるとしたらユーフエミアの姉であるコーネリアだけだが、今は帝都ペンドラゴンにいる。ルルーシュがかけたギアスでユーフエミア並みにナナリーを溺愛しているので、文句は言っても特区は成功しているのでエリア11にまで赴いてユーフエミアを止めることはしないだろう。

「エリア11のことよりも俺達の方が問題だ」

懸案事項があつたとしても他人事に過ぎないエリア11よりも、これから向かう地の方が問題が多い。

「ユーロ・ブリタニアはブリタニアと名が付いているが、本国とはその方針は大きく異なる」

世界に覇を唱えるべく攻勢をかけているブリタニア本国とは違って、ユーロ・ブリタニアは市民革命によりブリタニアに亡命した貴族の末裔達が祖先の地を取り戻すことが目的である。

「向こうはこちらのやり方を受け入れぬと？」



「横やりを認めんだろう。まあ、これがある以上は押し通せる」

ソファの横に置かれた、常に携帯を義務付けられたアタツシユケースをポンポンと叩く。

「で、また摩擦を生むようなやり方で敵を作ると」

内外に敵を作るやり方で作戦を遂行するルルーシユに呆れながらもアーニヤは告げる。

「今回は大義名分もある」

皮肉気に笑いながらも否定しないルルーシユは懐から出した書状を机の上に投げる。

「これは？」

「エリアーから送られてきたものだ。読んでみるといい」

自分の口で言う気はないらしいルルーシユに息をついたアーニヤは机に放り捨てられた書状を手に取り、目を通す。

「長ったらしく書いてあるけど……」

「要は、E・U・で劣悪な扱いを受けている日本人を取り戻せだとき」

E・U・国内において、日本人改めイレヴンは敵性外国人という区分になっている。

日本がE・U・の敵国ブリタニアの版図に組み入れられたことで、

E・U・当局は当時様々な事情でE・U・国内にいた日本人を敵国の人間と見なし、彼等をシテ島に建設したゲットーへ收容した。他のナンバーズにはこの様な措置は取られておらず、民主国家とは思えない程の人権無視の姿勢を見せている。

「エリアーは衛星エリアに昇格して特区構想も成功している。民衆の人気取りと、人手不足を解消できる上手い手だ」

シテ島のゲットーには学校もあるので、ある程度の学力も保証される。即戦力とまではいかなくても、一から教育を施すよりかは楽だろう。

E・U・のイレブンの取り込みは、特区が上手く行けばやがて見えて来る人手不足を見越したルルーシユの策の一つではあったがユーフェミアは上手く利用しているようだ。

「E・U・に対する戦略は出来ている。つまらん勝ち戦だよ」

ゼロの時や黒の騎士団の時と違って補給などの心配をする必要もなく、戦略に集中できるのでルルーシュからすれば負ける要素を探す方が難しい。

「油断は禁物ですぞ」

「これは油断ではない。余裕だ」

ジェレミアに諫められようとも、ルルーシュは気持ちを改めるつもりはない。

「ナイトオブブラウズとジェレミア、お前までいるんだ。俺が敗れることはない」

問題はあれど、その能力に対しては全幅の信頼がおけるのでイレギュラーが起こっても対応できる自信がある。

「私はともかく、ジェレミアはジークフリートがないの？」

頼られて悪い気はしない。少し得意気そうなアーニヤにジェレミアもムツとしたようだ。

「ヴァインセント・ジークがある。問題は何もない」

「久しぶりのKMF戦だけど、扱い切れるといいね」

ジェレミアのナイトギガフオートレストリートは前回の作戦で敵陣に単機特攻させられてボロボロになり、今は大改修の真っ只中。

今回の作戦では、問題のなかったジークフリートの中身であるヴァインセントを乗機とすることになるが、ナイトギガフオートレスならばナイトオブブラウズ級でもKMFでの戦闘は久しぶりなジェレミアをアーニヤは揶揄する。

「ふん、次の戦いは市街地が多くなるのだからモルドレットは大人しくしておくのだな」

「む」

アーニヤの乗機モルドレットは凄まじい砲撃性能と防御力を誇る重量級KMFで、火力とパワーによる強襲戦闘を得意としている。

E・U・では市街地での戦闘が多くなると予想されるので、破壊力が強すぎて攻撃オプションがどうしても限られてしまうことをアーニヤも自覚している。

「何をやっている、二人とも」

ルルーシユが意地の張り合いをしている二人に呆れていると、車窓からペテルブルクの街並みをチラリと見たジェレミアが矛を収める。

「キングスレイ卿、水などは飲みますか」

「いらん」

護衛というよりは従者のようなことを言うジェレミアが切り替えたのを見たアーニヤは不満そうに顔を逸らしていた。

「はあ、降りるぞ」

スピードを落としている皇室専用列車がサントペテルブルクの中央駅に入ったのを見たルルーシユは立ち上がり、ジェレミアがアタツシユケースを持つ。

行動が早過ぎるルルーシユに呆れるアーニヤが先に立って歩いて客室を出て、皇室専用列車が止まるまでの間に入り口に辿り着いたアーニヤの前でドアが開く。

「長旅お疲れでしょう。直ぐに迎賓館にお連れします」

カンカンカン、と足音を立てながらアーニヤが列車から降りると、物々しいレベルの護衛に守られたサントペテルブルクの中央駅構内に立つ如何にも神経質そうな男が出迎える。

「初めまして、アールストレイム卿。ヴェランズ大公の名代として、お出迎えに参りました、ミヒヤエル・アウグストウスです」

「アーニヤ・アールストレイム」

握手を求めてきたので返すと、直ぐにミヒヤエルは手を引つ込める。

年若いアーニヤ個人が侮られているというよりは、アーニヤが所属するブリタニア本国に対して思うところがありそうなミヒヤエルに何か言う気は無かった。

「皇室専用列車でナイトオブブラウンズの騎士が護衛とは。お連れ頂いた方は大層、皇帝陛下の覚え目出度きお人のようですねあ」

露骨には態度に出さない大人なミヒヤエルは皇室専用列車を見て皮肉染みたことを言う。

「なんだ、迎えはこれだけか」

「ん？」

ジュリアス・キングスレイの皮を被ったルルーシュが列車から降りて来る。

帝国を象徴するナイトオブブラウンスの一人であるアーニヤを先行させてユーロ・ブリタニアの反応を見ていたルルーシュは、背後にジエレミアを従えて尊大な仕草で腕を振るう。

「私が帰還する時には、勝利に歓喜し、我が名を連呼する民が、このペテルブルクを埋め尽くすことになるだろう」

ユーロ・ブリタニアが最も好まない展開を煽るように告げて、自信家で憎たらしいほどの笑みを浮かべる。

アーニヤには、傲慢な言葉とは裏腹にミヒヤエル達の反応を冷徹に見据えるルルーシュがどうしても哀れに思えた。

「皇帝の命令により、これよりユーロピア戦線の作戦計画はこの私！ 軍師ジュリアス・キングスレイが全て執り行う！」

奇しくも、とある世界にてゼロが再び世に出た日に、ルルーシュはユーロピア戦線に降り立ったのだった。

## STAGE 8 軍師の謀

ユーロピア共和連合軍に属するレイラ・マルカルが指揮する特殊部隊WZEROは、ユーロ・ブリタニア軍に『ハンニバルの亡霊』と呼ばれている。

しかし、スロニム戦から一ヶ月が経過してもレイラ達の隊は帰還できず、それどころかワルシヤワの補給部隊に左遷された前司令官のピエル・アノウの嫌がらせによってIDを抹消されて路頭に迷ってしまふ。

そんな状況下、旅の老婆達と出くわしたアキト達は暫くの間共同生活を送る事となった。

「レイラ、優しくて良い子だから占ってあげよう。アンタの未来をね」  
少年少女が久しく体感していなかった穏やかな日々の中で、老婆達の中心である大婆様にそう言われたレイラ・マルカルは美しい眉を顰めた。

「未来ですか？」

「まあ、試して良いから受けてみな」

占いを信じているわけではないが、敢えて断る理由も無いのでレイラは占いを受けた。

馬車の中に入り、二人で向かい合ってカーペットの上に座りながら大婆様が良く分からない呪文のような物を呟きながら両手に握った石のような物を振る。

「昔、森の魔女に会ったんだね」

二人の間の床に敷かれた五芒星の陣が描かれた布の上に渦巻きが幾つも見られる石を転がした大婆様が徐に言った。

「魔女？」

魔女、という単語が肌を走る感覚にどこか覚えがあったレイラは単語を繰り返した。

「そうさ、アンタはその魔女に呪いをかけられた」

呪い、と繰り返したレイラの脳裏に記憶が蘇る。

父がテロで殺され、母も暗殺されて雪が降る中でレイラは一人で森を駆けた。

幼きレイラは凍った池に落ち、そのまま死ぬと思った。凍った湖面から抜け出すことも出来ずに意識が闇に沈もうとしたその時だった、森の魔女が現れたのは。

『生きたいのか?』

魔女としか思えない人だった。

雪と同じ色のローブを全身に纏い、フードを目深に被った人の声がレイラの頭の中に木霊する。

『力があれば生きられるか?』

生きたい、と只管に願ったレイラは魔女の手を取った。

『これは契約』

助け出されたレイラは魔女の手を握りながら凍った湖から離れる。

『契約すればお前は人の世に生きながら、人とは違う理で生きることになる』

夢幻のような姿と声がレイラの心身に響く。

凍えて消えかけていた命の灯に火をくべた魔女が、雪のように白い手で自らのフードを外す。

『異なる摂理、異なる時間、王の力はお前を孤独にする』

緑髪の魔女は悲し気な目でレイラを見る。

『その覚悟があるのなら、その力を使うがいい』

魔女から何かを与えられたような気がした。でも、その何か分からない。分からないが、魔女はレイラが力を使うことを望んではないのではないかと幼心に考えたことを思い出す。

『しかし、お前はまだ幼い。その選択はお前が成長するまで猶予を与えよう。一度使えば、もう後戻りは出来ないが使わなければ存在しなくなる』

物語の魔女のように年老いてもいなければ、寧ろ優しい声で告げて彼女は去っていた。

「あれは夢じゃなかった……」

ずっと夢だと思っていた魔女との遭遇を思い出したレイラの前で、石が僅かに傾いたのを見た大婆様は右手の人差し指を僅かに動かした。

「未来が変わった？ いや、より大きな闇が小さな闇を呑み込んだか」  
この瞬間に変幻する未来を感じ取った大婆様はピクピクと動く人差し指を抑える。

「どういうことですか？」

「アンタと似て非なる呪いを持つ者が未来を変えたんだよ」

大婆様のことからレイラは自分と同じように魔女に力を与えられた者がいることを悟る。

「その者からアンタは選択を迫られる」

予言者のように大婆様は続ける。

「選択……」

「その時が来れば分かると石は示している。決して間違えるんじゃないよ」

低く重く、あの時の魔女の時と同じく大婆様の声も何時までもレイラの頭の中に反響し続けていた。



カエサル大宮殿の客人の間でルルーシュ扮するジュリアス・キングスレイは瘦身の男と向かい合って座っていた。

「作戦の遂行中にチェスなどしてよろしいのですか、キングスレ

イ卿」

ルルーシユの前に座るシン・ヒユウガ・シャイングが言いながら  
チエスの駒を動かす。

「ユーロ・ブリタニアの兵は本国に負けず劣らず優秀だ。今の段階で  
私自らが動く必要はない」

白い衣装を纏うシンが白の駒を動かし、背後にナイトオブブラウンス  
のアーニャ・アールストレイムを従えた黒い衣装を纏うルルーシユが  
黒の駒を動かす。

「噂の天才軍師様に褒められるとは、我が軍の兵に教えれば喜ぶで  
しょう」

「成り上がりに過ぎん私程度に褒められて喜ぶとは思えんがな」

「謙遜を」

結果は出しているが後ろ盾も何も無い一代限りの伯爵に褒められ  
たところで喜ぶとは思えないと本気で思っているルルーシユの前で、  
シンは真意の読めない笑顔で駒を動かす。

「貴殿の作戦記録を参照しましたが見事なものでした。一度話をした  
いと思っていたものです」

「私もシャイング卿に二、三聞きたいことがある」

貴族が本音と建て前を使い分けることは良く知っているので、気を  
良くした振りをしながらルルーシユも駒を動かす。

「最近の戦闘記録に気になる物を見つけた。ハンニバルの亡霊のコー  
ドネームで呼ばれるユーロピアの遊撃部隊。シャイング卿、君はその  
詳細を知っているようだな」

シンの駒を動かす手が一瞬だけ動揺したように揺れたのをルルー  
シユは見逃さなかった。

「二ヶ月前のスロニムで戦闘しました。残念ながら打ち漏らしました  
が」

「打ち漏らした、か。才人である君にはらしくない言い訳だ」

悪手とまではいかないが、互角だった戦況を崩すには十分な一手を  
放ったシンに若さを見たルルーシユは内心で苦笑する。

「才人などと、私には過分な言葉です」



「ユーロ・ブリタニアの四大騎士団の一角である聖ミカエル騎士団の総帥に若くして成ったシャイング卿が才人でなくては、全ての者が凡愚となってしまふよ」

拮抗が崩れば後はルルーシユのしたい放題だった。

盤面は明らかにルルーシユ有利に傾いていく。

「マンフレディ卿のことは残念だった。一度、会ってみたいと思っていたんだが」

元々はナイトオブブラウンズの序列2位であるナイトオブツードだったが、自ら辞退しユーロ・ブリタニアに転籍したという異色な過去を持つ人物である。

「その言葉だけでも、きつとマンフレディ卿も喜んでくれるでしょう」  
ミケーレ・マンフレディがイスタンブルで自決をしたことは大きなニュースとなった。接触を図りたかったので自殺したと聞いた時、ルルーシユもその死を悼んだ。

「貴殿のヴェルキングゲトリクスも本来ならばマンフレディ卿が乗ると聞いたが」

「ええ、元はサグラモールと名付けられる予定の機体だったのですが、後任である私を受領した際に名前を変えました。あの機体に乗っているとマンフレディ卿に守られているように思えます」

しかし、ルルーシユにはマンフレディが自殺を図ったことに対して疑問を抱いている。

それだけではない。ここ数ヶ月のユーロ・ブリタニアでルルーシユの目を引く出来事が他にもあった。

ペテルブルグに侵攻してきたE・U・軍と戦闘になったこと、これ自体は問題ではない。作戦計画を察知していたことで進路を阻み、ペテルブルグ南西の街ナルヴァで包囲し、敵軍を孤立させた。問題は孤立した部隊を救出に來た突撃部隊によって、ユーロ・ブリタニア軍も多大な犠牲を強いられている。

(イレブンはどここの国でも扱いは変わらんか)

戦闘中のナイトメアを特攻させ、周りを巻き込む自爆を遂行させる指揮官の考えを理解しようとも、ルルーシユ個人の考えとしては好ま

しいものではない。

(ハンニバルの亡霊か、少しは楽しめそうだ)

スロニムでの戦術はルルーシュも少し感心させられたものがある。足りない戦力を有効に活用しようとする指揮官の苦勞が滲み出て来るような戦術は、黒の騎士団を発足した前後で最も厳しかった時代を思い起こさせてセンチメンタルな感情を覚えた。

「この私に掛ければユーロピア攻略などわけもない。戦略も後は詰みだけだ」

「キングスレイ卿の作戦であれば、マンフレディ卿の悲願でもあったユーロピアの攻略も直ぐでしょう」

追い込まれたクイーンを見捨てずに余計に劣勢になったシンを見るルルーシュの戦略に誤りはない。

「チエックメイトだ」

カツン、と白のキングに迫った黒のポーンの一手で勝敗は決した。

「お見事です」

「ふふつ、君はこのゲームで現実の世界と重ね合わせたのではないかな」

称賛してくるシンにルルーシュは含み笑いを漏らした。

こういう心理ゲームにおいて、指し手の好みや考え方は打ち手に如実に表れる。シュナイゼルなどはその内面の虚無さを示すように変幻自在であるが、シンの手には微かにその傾向が見えた。

「あの時、君がクイーンを見捨てていれば私は敗けていたかもしれない」

かもしれない、とあくまで可能性に留めているのが黒のクイーンを手の中で弄ぶルルーシュの自信の表れでもあった。

「どういう意味でしょうか？」

「君には見捨てることが出来ない者が、いる。違うかな」

シンが甘かったのではなく、単純にルルーシュの方が上回っていた。そう評するのは簡単だが、今この時点において見捨てること出来ない者がいないルルーシュに隙は無い。

「人は誰しもそのような弱みがある。親、子、友人、恋人、それとも兄

弟か」

今のルルーシュにとっては全てが縁遠きもの。だが、シンには違つたようで反応を見るルルーシュの目の前で目を鋭くする。

「……………キングスレイ卿、あなたが立てたバベル作戦を聞いた時、私は一人のテロリストのことを思い出した。エリアーでいたテロリストをね」

露骨に話を逸らしたシンに今度はルルーシュの方が動揺して、黒のクイーンを弄んでいた手を止めてしまった。

「キングスレイ卿の巧妙な作戦はそのテロリストの物と良く似ている。いや、そのものだ」

「それが？」

藪蛇を突き過ぎたルルーシュは表面上、冷静を装いながら問い返す。

「あなたは反逆者ゼロだ」

突きつけられた推論にルルーシュは苦笑を浮かべる。

「馬鹿げた推論だ。ブリタニアの敵であったゼロの正体がブリタニアの伯爵だったなどと、三文映画にもならないシナリオではないか」

黒のクイーンを盤面に戻し、足を組んだルルーシュにもう動揺はない。

「ゼロが消えたのは一年前、エリアーで特区が始まる時だ。その直後にジュリアス・キングスレイは特区に現れた。時期は合う」

しかし、シンの追及が止むことはない。

「特区での働きが認められ、皇帝によつて分不相応な伯爵位を授けられている。確かに成り上がりと称されてもおかしくないが、幾分過ぎる評価だというのが当初の大勢の見方だった」

せめて男爵にでもしておけば良かったのに、中途半端な爵位などにするから疑われることになる。

いきなり伯爵にされて、実績を積みまではかなりイビられてきたルルーシュもそれはそうだと納得せざるをえない。

「軍師として活躍したその能力は疑いようのないものだが、文官でしかなかったジュリアス・キングスレイの適性をどうやって見抜いたの

か………簡単だ、皇帝は如何なる方法を使ったかは知らないが卓越した戦略家であるゼロだと知っていたからだ」

そして何よりも、とシンが続ける。

「ナイトオブラウンズが護衛していることこそが何よりも証拠」

「それ以上の邪推は己の身を滅ぼすぞ、シャイング卿」

護衛であるはずのアーニヤが携帯電話を弄ってばかりで反論する様子もないので、シンを止める為に仕方なく自分で言うしかないルーシユだった。

「ユーロ・ブリタニアの貴族達にブリタニア本国と戦う気概はないだろう。下手な言動は本国を敵に回すことになる」

ルーシユとしては寧ろ敵対してくれた方が有り難いが背後にナイトオブラウンズがいる状況ではそう言わざるをえない。

「ジュリアス・キングスレイ、私はあなたに深い共感を覚えている。初めて会ったその時から」

パチン、とシンが指を鳴らした直後、三人がいる客人の間に繋がる大きな扉が外からナイトメアフレームによって破壊される。

「グラックスとサザーランド、ミカエル騎士団のナイトメアか」

客人の間に侵入してきたグラックスとサザーランド四機を座ったまま見上げるルーシユに驚きはない。

「シャイング卿、皇帝の使者である私がいる間にナイトメアで踏み込むことがミカエル騎士団の礼儀なのか」

更には銃を持った歩兵も入ってくるのを見たルーシユは、立ち上がって安全な位置まで下がって距離を取るシンに問いかける。

「反逆者であるゼロを捕まえようというだけです」

未だチェス盤の前から動かないルーシユに疑念を抱きながらも、シンは腕を上げて下ろした。

サザーランドが高価なカーペットを抉りながらランドスピナーの音を立ててルーシユに迫る。ようやくアーニヤも携帯電話を仕舞ったが、それ以上の動きはない。

「深い共感を覚えるか、私もだ。考えることは同じということかな」  
迫るサザーランドが左腕の近接戦闘用トマホークを振り上げたの

と同時に、聖ミカエル騎士団が侵入したのとは別の扉が外から開かれて、オレンジ色に塗装されたヴィンセント・ジークが現れる。

『我が主への無礼は許さん!!』

放たれたスラツシュハーケンによってトマホークが弾き飛ばされる。

「成程、そちらも備えていたということか」

天井に突き刺したもう一つのスラツシュハーケンを使い、一足でルルーシュの前に着地したヴィンセント・ジークのメーザーバイブレーションソードがサザーランドの右腕を切り落とす。

「アーニヤ、聖ミカエル騎士団は本国に野心有りを見た。敵を殲滅せよ」

「イエス・マイロード」

切り落とされたサザーランドの右腕が歩兵とルルーシュの間を遮る壁となり、間髪入れずに放たれたルルーシュの命令を受けたアーニヤが携帯電話を仕舞った時に取り出したナイトメアの起動キーをボタンを押す。

「相手はナイトオブブラウンズであろうと恐れることはない。見事、打ち取って家名を上げよー」

ヴィンセント・ジークに牽制されて、遠隔操作でやってきたモルドレッドに身軽な動作で飛び乗ったアーニヤを止めることが出来なかった。

グラックスに乗るシンの参謀であるジャン・ロウが顔を顰めながら味方を鼓舞する為に叫ぶ。

「ほう、ジェレミアと互角に戦うか。良い部下を持っているな、シャイング卿」

ナイトメアフレームではナイトオブブラウンズには及ばないにしても、そこらの兵よりも優れたパイロットであるジェレミアと互角に戦っているグラックスにルルーシュは驚きを露わにしながらシンに話しかける。

「オレンジ卿の姿がなかった時点で伏兵を疑うべきでしたな。私も、まだまだ甘い」

機体の世代差はあれども、聖ミカエル騎士団のサザーランドもチューンナップにチューンナップを重ねた特注品である。乗るパイロットも百戦錬磨のエースパイロット。一機は片腕を失っているとはいえ、四体一の戦力差。

アーニヤのモルドレッドは白兵戦に向いている機体ではないが、だからといって相手がエースパイロットであろうとも負けるような技量ではない。

「ナイトオブブラウنزの戦場に敗北はない」

機体特性、戦力差、そんなもので敗れていてはナイトオブブラウنزに成れるはずがない。モルドレッドのコクピットで誇りと共に眩かれたアーニヤに焦りはない。

「さて、もう一局行おうか」

結局、一步も動くどころか立ち上がることもしなかったルルーシュがシンに向けて言いながら盤面を戻す。

「豪胆だな、戦場の中において揺らがないとは」

「我が騎士達を信頼しているまでだ。そちらは違うのかな」

「まさか、我がミカエル騎士団に敗北はない」

モルドレッドのランドスピナーに轢かれた歩兵達の血が頬に掛かろうとも泰然自若としているルルーシュに、知略の差を思い知らされながらシンは逆転の一手を放つ為に誘いに乗って席に戻る。

「不躺な行為をしたのはこちらが先だ。先手は譲ろう」

シンに先手を譲られたルルーシュは薄く微笑み、黒のキングを動かした。

「ほう、キングを動かすか」

「王が動かなければ部下はついてこない。これは私の持論でね」

ナイトメアが戦う戦場から少し離れた場所で、二人の男が繰り広げるチェスの第二局が続く。

「君と私は本当に良く似ている、シャイング卿」

揺らがない。全てを読み切っていたジュリアス・キングスレイが揺らぐはずがない。

「血と死に満ちた世界。世界を憎み、人に絶望している。私と同じだ」

戦力差など、ナイトオブブラウンズの前では何の意味もない。一機、また一機とサザーランドがモルドレッドに沈められていく。

戦場ではただ強き者が勝つ。その理を時にひっくり返して来たゼロであるルルーシユは、己が有利な状況において余裕を崩すことはない。

「貴殿の心の闇が私には良く見えるぞ」

「……………面白いことを仰られる。あなたに私の何が分かるというのか」

モルドレッドの強さは際立っていた。サザーランドを相手にしながらもルルーシユに迫ろうとする歩兵を容赦なく轢き殺す。悪戯に犠牲を増やすばかりで、状況はシンにあまりにも不利。

「言っただろう、共感だ。分かる必要などない」

また一手、黒のキングが進んで白が追い込まれて行く。

一方的にシンが追い込まれて、今度は先程のように互角になることもない。仮に戦略家としては一歩も二歩も劣ろうとも、チェスにおいての彼我の実力差はさほどないはずだ。

にも関わらず、第二局でここまで追い込まれているとすれば、先程の一局目ではルルーシユが本領を見せていなかったか、それとも……………

（私が動揺しているともいうのか……………）

残る一つは打ち手であるシンの思考が乱されていること。立ち合っているシンにはルルーシユの手が劇的に変化しているようには感じないのだから、後者の理由が劣勢の原因である。

「あなたは危険だ、キングスレイ卿……………いや、ゼロ」

「良く言われる」

後少しで訪れる二度目のチェックメイトを前にして、モルドレッドと戦っていた三機目のサザーランドが沈む。一対一となれば碌な時間稼ぎも出来ないだろう。

そしてジャン・ロウのグラックスもジェレミアが操るヴィセント・ジークを相手にして満身創痍に陥っている。

「時間もない。ここで止めさせて頂こう」

ルルーシユがチェックメイトをする前に、下手に武器を取り出そうとすればモルドレッドが飛んで来るのでシンは一か八かで左目にギアスを発動させて殺そうした。

「ああ、これで終わりだ」

それよりも一瞬だけ早く、ルルーシユの右目にギアスの紋様が浮かび上がる。

「それは……っ!？」

「君と同じ力だ——我が軍門に下れ、シン・ヒユウガ・シャイング」  
二人の左右の目から放たれたギアスがぶつかり合い、より強い力が勝利して相手をねじ伏せる。

「チェックメイト、俺の勝ちだ」

ルルーシユは最後の一手を進めてチェックメイトをかける。

「私の負けです。我が主、何なりとご命令を」

立ち上がり、膝を付いたのはシン・ヒユウガ・シャイングの方だった。

「まずは聖ミカエル騎士団を止めてもらおうか」

「イエス・マイロード」

最後のサザーランドが沈められ、倒れたグラックスにメーザーバイブレーションソードを突きつけられているが、聖ミカエル騎士団総帥であるシンの言葉があるのとないのとは意味が違ってくる。

「マンフレディ卿の自決はギアスを使ったものだったという予測は正しかったな」

聖ミカエル騎士団を説得するシンの背中を見ながら、可能性の一つとして見ていたミケール・マンフレディの死の理由に納得がいったルルーシユは白のクイーンを指で弾いて倒す。

「ルルーシユ様」

大破したサザーランドからパイロットが全員降りたので、ルルーシユの護衛としてヴェイセント・ジークから降りたジェレミアが近くに来てくれる。アーニャはモルドレッドで見張りだ。

「ジェレミア、良くやってくれた」

「また使いましたね」



ジェレミアはジャン・ロウと何かを話しているシンの背中を見ながらルルーシュを責める口振りで暗喩を使う。

「これが一番面倒がない。殲滅戦などやりたくはないだろ？」

「ですが……」

「これ以上はマリアンヌに気付かれる。さあ、聖ミカエル騎士団と話し合いと行こうじゃないか」

ルルーシュは説教しようとしてくるジェレミアから逃げるように椅子から立ち上がり、嘆息を背中に感じながら聖ミカエル騎士団と共にいるシンの下へと向かうのだった。

## STAGE 9 全ては掌の上で

サントペテルブルグにあるカエサル大宮殿の作戦指令室は常ならぬ慌ただしい空気が広がっていた。

「バベル作戦遂行率65%を経過」

「情報拡散、更に進行しています」

「航行中のガリア・グランデがE・U・上空に到達しました」

複数のオペレータ達が作業する場所より高い場所にいるルルーシュ扮するジュリアス・キングスレイは薄く笑みを浮かべて進行状況を見守る。

「皇帝の飼い犬が」

「大公閣下まで呼びつけるとは」

「ふん、直ぐにボロが出る」

四大騎士団の長とユーロ・ブリタニア内で高い位置にある貴族達が背後で漏らす侮辱でしかない呟きを聞いてもルルーシュは気にしない。彼らの背後に下がっているアーニャ・アールストレイムもルルーシュ同様に気にしていないが、忠義に熱い男であるジェレミア・ゴツトバルトは自らの主君を貶める言葉を聞いて拳を強く握り締める。

(何を企んでいる)

聖ラファエル騎士団長アンドレア・ファルネーゼの内心の呟きが、ユーロ・ブリタニアにおけるジュリアス・キングスレイの評価である。

ユーロ・ブリタニアで、ジュリアス・キングスレイに好意を抱くものは恐らく誰一人としていない。ルルーシュ自身が傲岸不遜に振る舞い、周りに嫌われるような態度を取っているが理由の一つに過ぎない。

神聖ブリタニア帝国はイングランドを追われた女王とその廷臣。ユーロ・ブリタニアの貴族達は、そのイングランドと敵対関係にあったヨーロッパの貴族達を祖としている。

ユーロ・ブリタニアはブリタニアと名前を同じくしながらもその起源が異なり、E・U・に對する考えも違う以上、この時期に本国から派遣されたルルーシユを皆が邪険に思っている。

「ヴェランス大公閣下！御着座!!」

木槌の後に響く兵の声に、四大騎士団の長と貴族達が直ぐに立ち上がって振り返る。

ゆっくりとした足取りで作戦指令室に入って来たヴェランス大公は、背後にルルーシユ達をペテルブルグ駅にて出迎えたミヒヤエル・アウグストウスを従えている。

四大騎士団の長と貴族達だけではなく、作戦指令室にいる全ての兵達とナイトオブラウンズのアーニヤ、そしてジュリアス・キングスレイの護衛であるジェレミアも胸に手を当てて敬礼する。

しかし、ただ一人だけ敬礼しない者がいた。それだけではない。椅子から立ち上がることもせすに、足を組んだまま薄ら笑いを浮かべている。

ユーロ・ブリタニア宗主であるオーガスタ・ヘンリ・ハイランドの前にして不遜な態度をしているのは、ルルーシユ扮するジュリアス・キングスレイその人。

「不敬である！ 立たんか、キングスレイ卿!!」

ヴェランス大公の傍に控えるミヒヤエルがそう叫んだのも無理はない。

ここはユーロ・ブリタニア。ヴェランス大公へのルルーシユの態度は、ブリタニア本国で皇帝の前でしているような物。ただでさえ、本国への対抗意識を持っているミヒヤエルが激怒するのも当然のこと。

「私は皇帝陛下より全権を委ねられている。これが、その証拠だ」

敢えて不敬な態度を取っているルルーシユは足下に置いてあったアタツシユケースを開け、中から変わった形の杖を取り出す。

ルルーシユがその杖を取り、周りの者達に見えるように掲げると貴族達からどよめきが生まれた。

「インペリアルセプター……っ!?!」

真っ先に気付いたミヒヤエルが瞠目する。

神聖ブリタニア帝国皇帝の代行者である証が示すのは、ルルーシユの立場が決してユーロ・ブリタニアの盟主であるヴェランス大公に劣る物ではないということ。

「私の発言は皇帝陛下のお言葉とお思い、従ってもらおう!!」

迎合することも可能であるのに、敢えて反発を生むような態度と言葉にジェレミアがひっそりと息を吐く。

「部下が失礼した、キングスレイ卿。私からも謝罪する」

絶妙なタイミングで謝罪をしたヴェランス大公にルルーシユは鼻を鳴らす。

「言葉程度で不敬が許されると思っっているなら安く見られた物だな、皇帝の威を」

「……………深く謝罪する」

席から立ち上がってひれ伏したヴェランス大公を椅子の上から見下ろしたルルーシユは周りが内心で激怒しているのをしっかりと観察する。

「良いだろう。ヴェランス大公の謝罪を受け入れよう」

ルルーシユが鷹揚に領きながら無礼を働いたミヒヤエルを見るとヴェランス大公もその意を理解する。

「下がっておれ、ミヒヤエル。追って沙汰を下す」

「はっ」

きつとミヒヤエルは心の中でありとあらゆる感情が渦巻いているだろうが、決して表に出すことなくヴェランス大公の命に従って下がる。

「さて、ヴェランス大公。私がこうも拘るのはブリタニア皇帝の任を受けているに他ならない」

過大な評価だが、と謳うように嘯いて軽薄に笑う。

「先のミヒヤエル・アウグストウスといったか。私は彼の者に罰を望まない」

では、何を望むのか。

決まっている、このユーロ・ブリタニアでの力だ。

「代わりに、この作戦における全権を私に委ねて頂きたい。反論も反

「対も許さない絶対的な力を」

「それは……」

「逆らうというのですかな？　皇帝陛下より全権を委ねられたこの私に」

即答出来ないヴェランス大公に尚も言い募るルルーシユに遂に堪忍袋の緒が切れる者が現れる。

「貴様！　我が大公閣下に向かってなんとという」

聖ガブリエル騎士団の長であるゴドフロア・ド・ヴィヨンが逆上し、席から立ち上がってルルーシユの下へと足音も高く迫ったが、その間にジャンプ一つで着地したジェレミアが袖から出した剣を突きつける。

「キングスレイ卿に齒向かえば、皇帝陛下への逆臣の罪を免れないと知れ」

流れを誘導して仕組まれた場に参加させられる己が身を顧みても仕方のないジェレミアは、同じ護衛でありながら動く気のないアーニヤに代わって言わなければならなかった。

「この場はキングスレイ卿の命令に従うが大公閣下の為と思われま

す」  
ギアスによってルルーシユの軍門に入ったシンが立ち上がりながら告げると、他にも動こうとしていた貴族達や四大騎士団の内の残る二つの長も何も言えなくなる。

「大公閣下、どうか」

「シャイング卿……」

ヴェランス大公は決してルルーシユの言い分を認めただけではないが、場の流れるにシンの言うことが道理であった。

忸怩たる物を抱えようとも、先にミスをしたのはユーロ・ブリタニアである。

そして今もまた不敬を働こうとしたゴドフロア・ド・ヴィヨンの行動が足を引っ張った。味方であるユーロ・ブリタニア側であるシンが従うべきとの意見を出した以上、ヴェランス大公に否と言えるはずがない。

「キングスレイ卿、貴公に全権を委ねる」

全てがルルーシユの策略であると知りながらもヴェランス大公には従う他に道はなかった。

「承りました、ヴェランス大公。ジェレミア」

「はっ」

「下がれ、ヴィヨン卿」

「……………申し訳ございませんでした」

ゴドフロア・ド・ヴィヨンも自身の行動がヴェランス大公の決断の最後の駄目押しをしてしまったのだと悟ったから、ルルーシユの命令で剣を下げたジェレミアから離れて物凄い目つきで睨み付けながら席に戻る。

「始めて頂こうか」

既に場の流れは完全にルルーシユの物になっている。それでもこの場のトップは自分であることを示すようにヴェランス大公は主導権を取り戻そうと言葉を発した。

「焦ることはありません。直ぐに結果は出ます。あなた方とは違う」

一代で世界に覇を唱えるほどにブリタニアを強大にした皇帝シャルルや、戦略家としてシュナイゼルに伍するルルーシユに比べれば無能ではないが特別有能な男ではないヴェランス大公の無駄な努力を嘲笑うかのように、流れるように挑発を繰り返すジュリアス・キングスレイ。

「これより懦弱故に決戦を避けて引き籠るユーロピアを、戦場という処刑場に引き出してご覧に入れよう」

立ち上がったルルーシユは、自身には偶には役に立つ程度にしか思っていないインペリアルセプターを殊更に振る。

「さあ、舞台の開演だ」

言う通り、これは一つの舞台でしかない。

「諸君、楽しんで頂こう!!」

シンからユーロピアの情報を貰ったルルーシユが敗北する要素は一つもないのだから。

E・Uの地から遠く離れたエリア11の政庁の総督の執務室にいる四人が同じ映像を見ていた。

『ユーロピア共和国の市民へ告げる。我らは世界解放戦線、方舟の船団だ』

わざと荒くして撮影したであろう映像の中で、方舟の船団の物と目される旗を背景にしながらか背後から当てられる光の加減で人物像だけで人相の良く分からない人物が高らかに謳う。

『我々が北海の洋上発電所を爆破した。これがその証拠だ』

映像が切り替わり、空を飛ぶ巨大な飛行船から落とされたたった一つの爆弾で、北海の巨大な太陽光発電所が跡形もなく消滅する場面が映し出された。

「これは……」

映像を見ていたエリア11の総督であるユーフェミア・リ・ブリタニアには目を見張る。

北海はE・Uが治める場所である。幾らユーロピア共和国連合が敵国であろうとも、テロリストが防空網を潜り抜けてライフラインを突破するだけの能力を獲得したという事実は、一国を治めているユーフェミアとしては堪ったものではない。

本当にこの映像が真実だとするならば、だが。

『愚かしき文明に浸り、墮落という平穩に暮らす者達に神々の審判が下される』

再び映像は旗を背後に、そして北海に落ちたのと同型の爆弾を傍に置いた人物へと戻る。

『もう直ぐ、滅びの星がパリを襲う。悔い改めよ、それが君達が生き延びる為のただ一つの手段だ!!』

大仰な動作で、恐らく掲げた拳を握ったであろう直後に映像は終わった。

「……………なんというか」

「うん、イマイチ主義主張が良く分からない犯行声明だね」

カレンが頭を捻る横でスザクが率直な意見を吐露する。

「明確にどこを敵としているのか、何を目的としているのかさっぱり分からない」

言葉通りに受け取るならば文明によって墮落したパリの人々を殺したいのだろうが、何故パリの人々なのか、悔い改めれば生き延びられるような言い方もさることながら支離滅裂である。

「ネットではロンドンでバイオテロが起こったのだの、北海の海洋発電所の次はドイツだとか、大西洋艦隊とかデマっぽいのが溢れてるみたい」

携帯電話でネットを見るカレンの目にはどう見ても眉唾としか思われない物が散乱している。

「随分とユーロピアは混乱しているようですね。もしも、この人物の目的がそれならば見事と言う他ないでしょう」

「事実、混乱させる為にやっていることだからな」

ユーフェミアの意見を認めた、今まで黙っていた眼鏡をかけた黒髪の少女——変装をしたC・C。は繰り返し流されている映像の人物を見て目を細める。

「人を支配する最善の方法は恐怖だ。それも正体の見えない恐怖ほど人を圧する物はない」

似て非なるやり方ではあるが、恐怖に惑った人々によって幾度も死んだ方が楽になれると思える苦痛を味わわされてきたC・C。だからこそ断言できる。

流言飛語を流すだけで民衆は容易く暴徒となる。人間は不幸な出来事に強く反応し、事実を確かめずにその噂を広げる。ルルーシュがゼロとしてやっていたことは真逆だが、基本的なやり方は何も変わっていない

「このやり口はゼロと良く似ている。やっぱり彼が」

「そうだ、ルルーシュがゼロだ。そしてこれをやっているのも」

認めたくはないが認めざるをえないという顔のスザクに、固有名詞



を出したC・C・に事前に話を聞いていたカレンも目を見開く。

「本当にルルーシュがゼロだというの？」

「あれだけ言って、まだ信じていないのか」

「だって……」

カレンとしては一度は崇拝しているとまで言われるほどに心酔していたゼロを、どちらかといえば嫌いな部類に入るルルーシュであったなどと思いたくはなかったのだ。

「取りあえず、あれを行っているのがルルーシュで間違いはないんですね、C・C・さん」

「ああ、それは間違いない」

話が進まないのでゼロ＝ルルーシュを既定のこととして進めようとC・C・に確認を取るユーフェミアは、あの日の起こった全てをスザクやカレンに頼むのではなく、直接あの場にいた者達から聞いた。

「まだブリタニアに使われているのね」

きつと今でも妹のナナリーを人質にされてブリタニアの為に戦わされている腹違いの兄のことを想う。

「スザク、総領事館にいる黎星刻に連絡を」

「ユフィ……」

個人的な気持ちで言えば親友であるルルーシュを助けてやりたいが、ゼロであったことに騙されたという気持ちがないわけではない。

ユーフェミアがこれからする選択は一步間違えれば致命的な破滅を引き寄せることもあって、奨励することは出来ないスザクとしては安易に従えない。

「私は、決めました」

あの日、あの場所で。

特区日本が始まる前のG1ベースで持たれたゼロとの話し合いの後、笑みを含んだその声にユーフェミアは何と答えたか。

向けられた問いと答えを当人以外に唯一知るスザクは肩を落とした。

「命令です、枢木卿。黎星刻に連絡を」

「イエス・ユア・マジエステイ」

命令に応えるスザクが口にした言葉が示す物を理解したカレンが笑みを浮かべる。

カレンがユーフェミアに従うと決めたのは、その目的を聞かされたからでもあったから。

「ルルーシユなら態とユーロ・ブリタニアに反感を煽るやり方を取っているだろう」

ルルーシユの傍にいる者から情報を得られるC・C。が吉報を伝える。

「恐らくE・U。も左程持たずに落ちる。その時、ユーロ・ブリタニアはどのような対応に出るかな」

傍から聞いているだけでも分かるほどに、ジュリアス・キングスレイを派遣した神聖ブリタニア帝国に感謝するなんてことは絶対にないとC・C。は断言できる。

となれば、ユーロピア共和国連合を完全に併呑したユーロ・ブリタニアはその名を捨て去ってブリタニアに牙を剥く。

「ユーロ・ブリタニアにもコンタクトを取るべきと？」

「お前が望みを達成する為には必要な協力者だろ」

「……………ええ、そうですね」

ルルーシユがいなくなつてから如何に頼りきりだったかを自覚して急速に成長したユーフェミアは、一度天井を見上げて目を閉じる。「ロイドさんやラクシャータさん達にも手を借りて世界中に連絡を取ります」

目を開いて顔を戻したユーフェミアは既に覚悟を決めていた。

「取りますよ、ブリタニア皇帝の座を」

決定的な一言を告げたユーフェミアに従う二人の騎士を眺める外様に過ぎないC・C。は、繰り返し流され続ける動画に目を向ける。

いなくなつて初めて大切なことに気付く、ルルーシユもC・C。も。

「もう一度私の名を呼んでくれ、ルルーシユ」

まだ何も決められていない。ただ、その気持ちだけが半年もの間、ブリタニアの追っ手から身を隠し続けていたC・C。を突き動かして

いた。

方舟の船団は存在せずユーロ・ブリタニアの策であることを見抜いたレイラ・マルカルは恐怖の象徴である巨大飛行船への強襲作戦を決定して実行に移した、ルルーシユの読み通りに。

通信してきたユーロピア軍の將軍ジーン・スマイラスに強襲作戦の報告をして真実を公表するように進言した際に、ユーロピアの市民の混乱を沈める言葉を持っていたレイラは彼の思惑通りに動いた。

政府が行っているイレヴンへの弾圧、ブリタニアの思惑を看破したレイラが放つ自由の責任の演説は市民の心を動かした、嘗て父であるブラドロー・フォン・ブライスガウのように、全てはスマイラスの思惑通りに。

直後、突如として現れたユーロ・ブリタニア軍に拠点であったヴァイスボルフ城を攻撃を受けた時、レイラの手元の戦力は一つも残されていなかった。

『レイラ・ブライスガウが死んだ』

ワイヴァン隊の一人、成瀬ユキヤのハッキングで方舟であるガリア・グランデを乗っ取ってヴァイスボルフ城に急ぎ向かっている。時間を稼ぐ為の策を自室で練っていたレイラの目に映ったのがスマイラスの裏切りの映像だった。

「ユーロピアはスマイラス將軍の軍事政権が完全に掌握したようです」

レイラの自室を訪れた副指令であるクラウス・ウオリツクは酒を飲みながら晒う。

「將軍はブリタニアと取引したんだよ」

「証拠はあるのでしょうか？」

未だ生きているレイラを死んだと嘘をついたスマイラスの行動の

裏は簡単に察しがついた。

そしてユーロ・ブリタニアがユーロピアの国境線から遠く離れたヴァイスボルフ城にレイラがいると知って攻撃を仕掛けるとしたら、どうしても内通者の存在が必要になる。それがクラウスだった。

「俺がここの情報をブリタニアに売った。スマイラスは俺を通してブリタニアと取引したってことさ」

ユーロ・ブリタニアの攻撃から数時間が経過しても援軍が訪れる気配はなく、ユーロピアとの通信網どころかヴァイスボルフ城は外部とのネットワークを完全に断絶されている。

攻撃されたヴァイスボルフ城は壊滅し、生存者0。攻撃したユーロ・ブリタニア軍も壊滅、もしくは逃走した。後はデータ上のことを本当にしていまえばいい。それがスマイラスとユーロ・ブリタニアの取引。

「お嬢さんの医療費の為ですね」

「そこまで知ってて俺を泳がしていたんですか」

隠していたことをあつさりで見抜かれて舌打ちをしたクラウスは偽悪的に振舞う。

『自由の為に命を捨てることを躊躇うな、とは勝手に人を死んだことにした者が言うとは思えんな。君達も、そうは思わないかね』

レイラの端末が勝手に通信を行い、スマイラスではなく別人の顔を映し出す。

「なっ!? まさかハッキングか……っ!」

『ご名答』

画面に映る眼帯姿の男は予定にない行動に焦るクラウスの動揺を弄びながら続ける。

『私はユーロ・ブリタニアより全権を与えられた軍師ジュリアス・キングスレイだ。お初にお目にかかる、死んだはずのレイラ・ブライスガウ』

「……………あなたが方舟の船団の作戦を考えた人ですね」

ジュリアス・キングスレイなる者が真実を告げていると決まったわけではないが、レイラは直感的に画面に映る眼帯姿の男が全ての首謀

者である感じ取った。

『察しが良くて助かる。では、私が何の為に通信を行ったかも分かるかな?』

『降伏勧告と………スマイラス將軍を追い落とす為に私をユーロピア市民の前に出すこと』

『話が早いと楽で良い』

もしも、レイラがジュリアス・キングスレイの立場なら同じことを考える。

「スマイラス將軍は、このヴァイスボルフ城を孤立無援にさせれば、やがて落ちると考えている。間違っではないですけど、拙速すぎた。あなたのような人がいると予測出来ていない」

『私ならば確実に君を殺してから声明を出すな。部隊を派遣するのではなく、暗殺者を送って殺してから』

例えば、と続けてレイラの横に立つクラウドを見る。

『シュヴァルトツヴァルトのモグラの娘を人質に取ってな』

「お前……っ!?!」

『おっと、怒るなよ。まだ何もしていないだろう』

つまり、ジュリアス・キングスレイの要求にレイラがごねるようであれば、クラウドの娘を人質に取ってくるだろう。

『私からの要求はたった一つだ。それさえ叶えば君達の身の安全は保証しよう』

外道なやり口に目付きが鋭くなるレイラを愛でるように笑ったジュリアス・キングスレイが要求を伝える。

『我が軍門に下れ、レイラ・ブライスガウ』

レイラの中で、今まで欠片に過ぎなかったピースが次々と嵌っていく。

方舟の船団を落とす為に奇襲作戦を立てた自分、戦力を吐き出し、直後に襲撃を受けたヴァイスボルフ城。スマイラスの演説と、ハッキングして通信して来たジュリアス・キングスレイ。

『でなければ君達のみならず、ユーロピアをブリタニアのやり方に乗っ取って征服しよう』

ここまで精緻に戦略を描き切ったジュリアス・キングスレイの要求に、レイラの返事は一つしかなかった。



『ユーロピア軍とユーロ・ブリタニアの和平が成立しました!』

サントペテルブルグのカエサル大宮殿の客人の間でルルーシユと護衛の二人は、ここ数ヶ月の集大成ともいえる放送を見ていた。

『たった今、ユーロピアを代表してレイラ・ブライスガウとユーロ・ブリタニア宗主ヴェランズ大公の調印が行われております!』

「スマイラスも大したことはなかったな」

興奮している様子のアナウンサーの甲高い声が耳に響き、結果を既に知っていたルルーシユは放送を切る。

「ジュリアス様だからこそ、そう感じるのではないでしょうか」

「これだけ条件があればシユナイゼルでも簡単に出来る」

「基準が高すぎ」

今回、これだけ上手く行ったのはシン・ヒュウガ・シャイングにギアスをかけたからであるが、知らないアーニヤにはルルーシユとシユナイゼルならば簡単に出来ると言われても基準が高いと感じたのだろう。

「これで俺もお役御免だ。一度、本国に帰るのか?」

数ヶ月はいたユーロピアに大した感慨も湧かないルルーシユが背後に直立不動で立っているジェレミアに訊ねる。

「そのことについて、シユナイゼル殿下が調印式の後に通信をすると

のようですが、と」

「話をしていればってやつ？」

アーニヤの言うように丁度良いタイミングでジエレミアの端末から音が鳴り、操作して先程まで調印式を映し出してた正面に通信相手の姿を映し出す。

『やあ、ルルーシユ。元気かい？』

「シュナイゼル殿下、私はジュリアス・キングスレイです」

『おっと、すまない。うっかりしていた』

画面に映るシュナイゼルが本気で言い間違えているのか、わざとルルーシユの名を出しているのか。

明らかにわざとやっているシュナイゼルと何度もこのやり取りをしているので疲れた。

「最近、性格が変わってきてませんか？」

主にルルーシユにとって不快な方向に。

『そうかい？ だとしたら私は今の自分が嫌いではないよ』

何時も薄らと笑っている程度のシュナイゼルが妙に笑顔で機嫌が良いように見えて、ルルーシユとしては嫌な予感を禁じ得ない。

「早く本題を」

『では、ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアに次の指令を与える』

本題に入ったはずなのに何かがおかしいとルルーシユよりも早く気づいたのは、我関せず携帯電話を弄っていたアーニヤだった。

「ジュリアス・キングスレイじゃないの？」

『いいや、間違っていない。今日、今この時を以てジュリアス・キングスレイからルルーシユ・ヴィ・ブリタニアに戻ってもらう。そして中華連邦懐柔策の1つとして』

その言葉の意味の裏を探ろうとするルルーシユよりも早くシュナイゼルの指令が下る。

『——天子と政略結婚して中華連邦を乗っ取ってくれ』

「はあっ!?!」

シュナイゼルの指令を聞いたアーニヤが驚きのあまり携帯電話を落とす程で、張本人であるルルーシユとジエレミアの声がカエサル大

宮殿に広く響き渡った。



## STAGE 10 朱金城に舞え

ルルーシユは逃げた。結婚などする気は更々なかったもので、一時拠点としていたサンクトペテルブルグのカエサル大宮殿から取るものも取りあえず、着の身着のまま飛び出した。

シュナイゼルが言った、天子と政略結婚をして中華連邦を乗っ取るというのは理解している。ルルーシユの目的に沿うが今はまだその時期ではない。しかし、宰相であるシュナイゼルの命令は絶対である。幾ら皇族に戻ったルルーシユといえど逆らえない。だから、聞いてないことにして逃げ出した。

「それで三カ月も逃げれるのだからルルーシユも優秀だねえ」

中華連邦の首都である洛陽、その中心である朱金城にて、ブリタニア勢が逗留する迎賓館に文字通り連行されたルルーシユを出迎えたシュナイゼルは、呆れと感心を同時に滲ませた声を向ける。

「シュナイゼル宰相、仮にも皇族にこの仕打ちはないと思うのですが」  
背後に回された腕には手錠をかけられ、縄でグルグル巻きにされて椅子に座らせられているルルーシユは目の前で優雅にお茶を飲むシュナイゼルに不貞腐れた顔で漏らす。

「結婚が嫌だからって逃げ出した放蕩皇子には致し方ない処置だよ」  
「人的被害はありませんが物的被害は甚大ですからね」

シュナイゼルの一歩斜め後ろに立つ副官のカノン・マルディーニ伯爵の頬がピクピクと震えているのはルルーシユの見間違いか。

「対外的には訓練としてますので被害は計上出来ませんの、被害分を補填するにはシュナイゼル殿下の財政から出すことになります。ルルーシユ殿下にも責任は取って頂かないと」

途中から半ば意地になって逃げていたルルーシユもやり過ぎな自覚はあったが、だからといって人生に大きな転機を齎す結婚という一大事を前にして容易く領けない。

「俺にはユーロピアを統一させた功績がある。大体、中華連邦ほどの大国の元首と結婚するならば宰相やオデユツセウス殿下の方が相応

しい」

「オデユツセウス殿下はブリタニアの跡取り、シユナイゼル殿下は帝国の重鎮です。国を離れられるわけがないでしょう」

「ふん、どうせ結婚って言っても、実質は天子を本国送りにして人質に取るようなものだろう」

ブリタニア・中華連邦・ユーロピアの三大巨頭の大勢は崩れた。

ユーロピアを取り込んだブリタニアの勢力は中華連邦を除けば世界の殆どを呑み込んでいる。既に力の差は大きい中華連邦の元首である天子は人質としてブリタニア本国で暮らすことになり、逆らうことは出来ない。

「確かに当初は兄上が天子と結婚するという話ではあった」

逃げられないように椅子に縛り付けられているルルーシユに、穏やかに微笑みながらシユナイゼルは言い聞かせるに言葉を重ねる。

「外交姿勢を議論する席上で中華連邦の民の事情を知った兄上が内政干渉をしてでも介入すべき発言したことで、政略結婚の話が持ち上がったことは君も知っているだろう?」

「ええ、最初は言い出した兄上が天子の相手だったこともね」

まだルルーシユが特区にいた頃の話である。

E・U・方面の軍事的摩擦が予断を許さない段階に入ったところで、オデユツセウスの稚気ながらも射た発言に背を押されたものでもあったが、この談合が成った暁には事実上ブリタニア帝国が世界の過半を支配することになり、世界のパワーバランスにチェックメイトをかける決定的な一手となるはずであった。

「どうして、私なんですか? 皇族に戻ったとはいえ、中華連邦に見合うとは思えない」

ジュリアス・キングスレイとして多少の結果は出しているが、文句なしに褒められるとしたらユーロピアを統一させたことぐらい。その他の作戦に関しては態とツツコミどころが多い結果しか出していないルルーシユが政治の道具にされることに理解に苦しむ。

「幾らユーロピアを統一させたとはいえ、中華連邦は巨大な国だ。下手に侮れば足下を掬われぬというのに」

中華連邦の腐敗はルルーシユも耳にしているが侮つていい理由にはならない。しかし、シユナイゼルは穏やかに微笑むだけ。

「中華連邦の政治を握る大宦官達と密約を交わして、天子の政略結婚と領土割譲でブリタニアの爵位を与えることになっている。まあ、これは結婚相手がルルーシユに変更された理由ではないから横に置いておこう」

決して横に置いておいていい理由ではないが、ゼロとして中華連邦と交渉もしたことがあるルルーシユは大宦官の腐敗振りを知っていたので驚きはしなかった。

「天子と兄上の二人の年齢差がね。やっぱりネックになってしまおうんだよ」

まさかの思い当たらなかった理由にルルーシユは神聖ブリタニア帝国第一皇子の年齢を逆算して弾き出す。

「……………確かオデュツセウス殿下は三十行ってましたっけ」

「天子は十二、三歳だから流石に可哀想という意見もあったわけだよ。いや、兄上が悪いわけではないんだけど」

何か気まづくなつた二人の間に沈黙が下りる。

天子にもオデュツセウスにも責任はない。別にオデュツセウスがロリコンの気があつて内政干渉を申し出たわけでもないし、大宦官に勝手に決められたであろう天子にオジサン趣味があるわけでもない。

「というわけで、兄上と年齢の近い私もアウト。中華連邦の元首の相手ともなれば、やはり皇族でなければならぬ。年齢も近く、中華連邦が納得する程度の実績を出していたのが」

「それが私だったと」

「うん」

うんじゃねえよ、とは思いつつも、婚約者変遷の理由に納得してしまったルルーシユは項垂れた。

もしも、ナナリーが同じようにオデュツセウスのような一回り以上も年上の男と結婚するとなつたら、ルルーシユはギアスを大判振る舞いしてシャルルに右目でもギアスが使えるとバレたとしても後悔しないかもしれない。あくまで仮定ではあるが。

(ぶち壊してやる！ そんな結婚はぶち壊してやるぞ!!)

と、仮定ですらルルーシュを荒ぶらせてしまうのは余談である。

「E・U・がちよつと予想外な形で落ち着いてしまったし、ルルーシュにその責任を取ってもらおうと思つたわけさ」

征服ではなく、和睦という形でE・U・を併呑されてはユーロ・ブリタニアに反逆の芽を残してしまった。

そつ、と目を逸らすルルーシュは何も知らない振りをしていたがシュナイゼルに分からないはずがない。

「余計な仕事を増やしてくれた責任は果たしてくれよ」

E・U・の諸々や逃げる際に出した被害を盾に取られてはルルーシュに拒否権は与えられなかった。

中華連邦はユーロピアを併呑して世界最大の人口を誇っていた座をブリタニアに明け渡したとはいえ、連合国家として世界に名だたる国である。しかし、その実態はすでに老人と叫ぶといい。

国家の象徴たる天子、その地位を影であやつる支配層が専横を極めており、人民は貧困と停滞にその活力を奪われていた。

「今夜は夜会という話だが」

「婚約者のお披露目と顔合わせになります」

言外に三カ月も逃げなければ結婚式にまで扱ぎ付けられたのと言われているようで、未だに結婚することに納得のいつていないルルーシュは近くにいたカノンから顔を逸らした。

逸らした方に天子が座つていた。

「あ、あの……………よ、よろしくお願いします」

「……ちらいそ」

緊張はしているようだが怯えるまではいつていない天子に、アーニヤ以外の年下の少女と接するとナナリーを思い出してしまつて表

情と雰囲気を変えて言葉を返すルルーシュ。

「こんな不精な男と共にいるなどお嫌でしょうが、今暫くの我慢を」  
「いえ、そんな……」

能力に自信はあるが男としての自分を過小評価しているルルーシュの気遣いに、天子は膝の上に置いた手をギュツと握る。

「まだ年が近い人で少し安心しました」

今度はルルーシュの眉根が僅かに寄ってしまふ。

「それに神楽耶からも少しだけ話を聞いていたから、まだなんとか」  
「なんとか、とは何だろうかとルルーシュは考える。

我慢出来るのか、嫌悪が少ないのか、少し気になるところであったが他にも聞かなければならないことがあった。

「神楽耶と言うと、皇コンツェルンの皇神楽耶様ですか？」

「年が近いということを知り合う機会があつて………初めての友達なんです」

知っている名前が出て僅かに目を見開いたルルーシュが驚くほど意外な繋がりであった。

「輸外交渉の場でエリアーの代表だった桐原公と一緒にこの地を訪れた際に出会ったそうです」

変なことをしないようにシユナイゼルが派遣したカノンとは別に、普通の護衛として背後で控えていたジエレミア・ゴットバルトが耳打ちしてきたのに頷く。

「藤色の瞳の鬼によろしく、と伝言を頼まれたのですけど、鬼とはどういう意味なのでしょう？」

日本の伝承に登場する鬼のこともよく分かっているなさそうな天子に、神楽耶が八年前のことを覚えていると分かったルルーシュは苦笑を零す。

「日本に出て来る悪魔のような存在のことですよ」

「はあ……」

首を傾げて分かってなさそうな天子を見たルルーシュは悪い子ではないのだと分かり、少しだけ結婚をぶち壊す決心が揺らぎそうになる。

「カノン伯爵、私は少し離れる」

「殿下」

「この場合は、あくまで夜会。交流を深める為には何時までも座つていられないだろう」

立ち上がったルルーシユをカノンが止めようとするが、まだ二人の婚約のお披露目に過ぎないのだから分が悪い。

「天子様も行きましょう」

「え、でも趙ジャオ・ハオウ皓は動くなど」

「生憎と座つてばかりいるのにも飽きました。どうか私に付き合つて頂けませんか」

意地でも引き下がろうとしないカノン攻略の為に天子と共に行動しようと考えたルルーシユは跪き、手を伸ばす。

「どうぞ、天子様。趙皓には私の方から言っておきます」

「い、いいの？」

「はい」

仮にも婚約者であるルルーシユが膝までついてエスコートしようというのだ。天子の傍に控えていた黄ファン・シエン遷もブリタニアの機嫌を損ねるわけにはいかず、ルルーシユの意見を後押しするしかない。

黄遷に背を押された形の天子は戸惑いながらも椅子から下り、慣れない仕草でルルーシユの手を取る。

「では、行きましようか。足下にお気をつけ下さい」

背後にカノンとジェレミア、黄遷を従えながら二人は歩いて行く。すると、直ぐ近くにこちらに向かつていたシュナイゼルとアーニヤ、そしてシュナイゼルよりも色の濃い金髪を独特に編んでいるのが特徴的な青年が笑みを浮かべる。

「やはり、動いてしまったかルルーシユ」

「申し訳ありません、シュナイゼル殿下」

「いいよ、カノン。そろそろだろうと思っていたから丁度良い。彼を紹介しておこう、ルルーシユ」

青年はルルーシユの前に跪き、その右腕を胸に当てる。

「初めまして、ルルーシユ殿下。ナイトオブスリーのジノ・ヴァインベ

ルグです」

「噂は聞いている」

素っ気ない対応をするルルーシユの内心はとても良くない。

変わらずルルーシユの護衛であるアーニヤも合わせれば、この朱金城には帝国最強のナイトオブラウンズが二人もいる。シユナイゼルもいる以上は、これではルルーシユも迂闊な行動は取れない。

「ここは祝いの場だ。もう少し楽にしてくれ。天子様が怯えられている。私も虬張った対応をされても嬉しくはない」

「はっ、それでは」

添えられた天子の手に僅かに力が入ったのを感じ取ったルルーシユの言葉にジノは笑みを浮かべて立ち上がる。

「ところで、私の噂の部分について、お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「同僚のアーニヤから聞いてくれ」

ある種、皇族にするには不敵とも取れる質問を放って来たので、ボールをアーニヤに放る。

「後で存分に聞いておきましょう」

ボールを放られたアーニヤとしては堪ったものではなく、僅かに眉を寄せるといふ彼女にとつては物凄く嫌そうな顔をしていた。

「シユナイゼル殿下、ラウンズが二人とは随分と過大な護衛だと思うのですが」

まだ中華連邦は味方となったわけではない。警戒を続けるのは分かるが、友好的に歩み寄るといふならばナイトオブラウンズ二人は挑発されていると取られかねない。

「皇族二人になら、それほど過大ではないよ」

ルルーシユの意見は何故か却下された。

「うくん、最初はどうなるかと思っただけど、意外に似合ってるんじゃないかい」

シユナイゼルは微笑むというには少し邪な笑みを浮かべながら繋がっている二人の手を見る。

天子は僅かに頬を赤らめるが、ルルーシユからすれば妹をエスコー

トしているような気分なので恥ずかしがる理由はない。

「政略結婚を推し進めた人とは思えない言い草ですね」

「アールストレイム卿と一年近く一緒にいたのに何もしていないようだから、そつちの欲はないのかと思っただけだよ」

「俺を馬鹿にしていますか？ 買いますよ、その喧嘩」

肉体言語には全く自信はないが、ここまで虚仮にされてはルルーシュも拳を握らざるをえない。

「喧嘩を売られてるのは私の方じゃないの？」

ジュリアス・キングスレイの頃はともかくとして、徐々に携帯電話に何故かあった少年の写真に似てきた上に皇族だと分かって、もしかしたらと少し意識していただけにルルーシュの発言はアーニヤの琴線を悪い意味で刺激した。

「あ、えっと、シュナイゼル殿下は女性のエスコートを為さらないので？」

逃げたな、と身長差の関係で下から睨み付けるアーニヤから目を逸らしているルルーシュを見た全員が思った。

「特定の女性を伴うと周りが騒ぐのでね。中々、選べないんだよ」

「しかし、殿下の年を考えれば身を落ち着けても良いはず。はっ!？」

まさかオデュッセウス殿下とシュナイゼル殿下は異性に興味が無いのでは」

「ルルーシュ、それ以上言うなら私も拳を固めなければいけない」

人は、時に拳で語り合わなければならなくなる。そういう趣味のないシュナイゼルも常の微笑みを完全に消してこめかみに青筋を浮かべている。

「け、喧嘩は止めて!」

今にも殴り合いの喧嘩に発展しそうな皇族二人にどうしたものかと周りが困っていると、ルルーシュと手を繋いだままだった天子が精一杯に声を張り上げた。

(この話題には触れないようにしよう)

(仕方ないでしょう)

会話もせずにアイコンタクトで同意を得た二人は拳を収めた。



「ルルーシユ殿下」

本当にシュナイゼルには相手はいないのかと考えたルルーシユの思考を遮ったのは聞き慣れた、しかし最近は聞いていなかった声だった。

声の主の方を見たルルーシユの体が僅かに固まった。

「会……………ミレイ・アツシユフオードか」

「ご婚約おめでとうございます、殿下」

そこにいたのは青いドレスを身に纏ったミレイ・アツシユフオードであった。

動揺してしまい、思わず生徒会長と呼びかけたのを直して平静を装ったルルーシユの前でミレイは優雅に一礼する。

もう以前の関係には戻れないのだと自覚しながらも、一年近くぶりに再会できたことにルルーシユの胸は知らずに高鳴り、同時にあの樂園をぶち壊した元凶であることを自覚する。

「天子様、旧知の彼女と少し話をしたいのですがよろしいでしょうか？」

「え、あ、はい」

「アーニヤ、天子様の護衛を頼む」

「ん」

「ルルーシユ」

「何もしませんよ、何もね」

見張りであるアーニヤを自然と自身から離れさせ、困惑している様子の子の天子の護衛に付ける。

婚約者を前にして他の女性と話があるというのは褒められたものではない。苦言を呈そうとしたシュナイゼルに言い捨てて、ミレイを伴ってジェレミアだけを連れて迎賓館のバルコニーに出る。

「久しぶりですね、会長」

ジェレミアが二人から背を向け、会場内に顔を向けているのを見ながら小さな声でルルーシユは言った。

「ええ、そうね。もう、ルルちゃんとは呼べなくなっちゃったなあ」

「遠いところまで来てしまいましたよ、本当に」

二人の間を夜風が通り過ぎ、もう戻れない時間の経過を感じ取る。「聞いたわよ。随分と大活躍じゃないの。まさか我が生徒会から世界中に響くほどの有名人が出るなんて誇らしいわ」

核心を突かない互いを慮る言葉がどこか空々しい。

「こんな有名の成り方は誰も望まないでしょう」

「分からないわよ。人間、なんだって有名になりたいって思っているかもしれないんじゃない」

「俺は有名になんてなりたくなかった」

ルルーシユが本当に求めたのは、もっと有り触れたちっぽけな物だった。

今なら胸を張って、あの学園の日々だけで良かったのだと言える。何時だって、ルルーシユは失ってから価値に気付くのだから。

「ここには一人で？」

「アツシユフオード家はヴィ家の後援だから」

それは理由のようで理由ではなかった。

確かにアツシユフオード家はルルーシユの母の時代から後援につき、マリアンヌの死と共に衰退した。ナナリーの皇族復帰は未だ表には出されていないので、ルルーシユが皇族に復帰して婚約ともなればこの一番に駆けつけてもおかしくはない。

「ルルちゃん、少し痩せたんじゃない？ 元から細いんだから、もつとお肉を食べないと」

昔と何も変わらない言葉がとても嬉しくて、失った物の大きさをまざまざと見せつけられるようでルルーシユは泣きたくなった。

「逃亡生活では碌な物を食べられなかったもので」

「そんなに結婚が嫌だったの？」

「押し付けられると反発したくなる性質タチなもので………会長以外には」

最後に付け加えられた一言はミレイに届いていたのかいないのか、それは彼女だけが知ることだ。

また夜風の音だけが響く沈黙の後、重い口を開いたのはルルーシユだった。

「……………みんなは何て？」

この問題に対してだけはルルーシュは逃げることは出来ない。二人だけで話せる時間はそうはないから核心を突いた。

「それは——」

『神聖ブリタニア帝国、エリアー総督ユーフェミア第三皇女様ご到着！』

「何ッ!？」

ミレイが何かを言おうとした瞬間、迎賓館に響き渡った声が示す人物に意識を持つて行かれたルルーシュが驚愕の声を上げて振り返る。

バルコニーからではユーフェミアの姿は確認できないが、ジエレミアも驚いている様子だったので彼も知らなかったのだろう。

「私のことは良いから行ってきたら？」

「……………会長、話はまた後で！」

気になる。気になるがミレイの話も後には回せないという板挟みの中で背中を押されたルルーシュは、改造しまくって盗聴されないようにしている携帯電話の電話番号を紙に書いて渡してバルコニーを離れる。

「大丈夫、また直ぐに話せるようになるから」

バルコニーに残ったミレイがそんな眩きを漏らしているとは露とも知らず、ジエレミアを従えて皇族として無様に見えないように急ぎながら騒がしい夜会の会場に戻ると、ざわめきの主が階段を上って来ているところだった。

「ユファイ……………っ!？」

ユーフェミアの姿を見たルルーシュの口から驚きの声が漏れる。

「久しぶりね、ルルーシュ」

後ろに二人の護衛を従えたユーフェミアが微笑む姿はルルーシュの記憶の中と殆ど変わらない。

しかし、重みというのだろうか。向かい合っているとシャルルと対峙しているかのような圧迫感を感じる。

「シュナイゼル宰相もお久しぶりです。直接会うのは特区設立以来ですから、一年と少し振りになりますか」

「あ、ああ、見違えたよ、ユフイ」

シユナイゼルもルルーシュと似た所感を抱いたらしい。彼らしくもなく少しもつていた。

「通信では何度か話をしたけど……」

一人ごちた後、瞬きを繰り返したシユナイゼルは何かを納得したように頷いた直後、迎賓館の外から銃声が響いた。

「我は問う！」

バン、と迎賓館の扉が外から開かれ、数人の男を従えた長髪の男が叫ぶ。

「天の叫び、地の叫び、人の心！ 何をもってこの婚姻を中華連邦の意志とするか！」

偶々、階段の近くにいたルルーシュにも入り口から侵入してくる男の姿が見えた。

「血迷うたか、星刻！」

「黙れ、趙<sup>ジャオ・ハオウ</sup>皓！ 全ての人民を代表し 我はこの婚約に異議を唱える！」

階段下にいた大宦官である趙皓に叫び返した星刻は剣を抜き放ち、危険から逃れようと壁際に寄る招待客を無視して走り出した。

「ジエレミア、ミレイを！ アーニヤ、来い！ ジノは宰相を守れ！」

「「イエス、ユア・ハイネス!!」」

もしかしたら天子の婚約者である自分が狙われる危険があると考えたルルーシュも最善と思われる指示を下しながら天子を傍に引き寄せる。

カノンがシユナイゼルの前に出ているのを見ながら、ミレイを守る為にジエレミアが動いてくれたことに感謝の気持ちで胸を支配する。

「止めい！ブリタニアの方々に当たったら大事よ。取り押さえ」

「死ね、奸賊！」

「ぎゃああああああああつっ!?!」

足の遅い招待客を盾にして進み、指示を出していた所為で行動に移るのが遅れた趙皓の下へ凄まじい速さで接近した星刻が一刀の下に切り捨てる。

その瞬間、ルルーシユの頭に何かが落ちて来た。

手をやると何かの破片ようで、ルルーシユは頭上を見上げて、何か  
が屋根から天井を貫いているのを見つけた。階下の騒ぎに気を取られ  
てまだルルーシユ以外、誰も気づいていない。

「なんだ？」

咄嗟に天井を見上げたルルーシユは、大きさからして恐らくナイト  
メアフレームの刀剣系の武器らしき物が引き抜かれ、出来た穴から誰  
かが飛び降りたのを見て目を見開く。

迎賓館の天井はかなり遠い。数メートル以上の高さから飛び降り  
た人物にルルーシユが絶句していると、引き寄せられたことで偶々頭  
上の異変に気付いた天子が口にする。

「ゼロっ!？」

天子とほぼ同時に気付いたアーニヤが頭上を見上げたところでゼ  
ロが手に持っていた銃を撃った。

「くっ」

天子を抱えたルルーシユとアーニヤの間に正確に放たれた銃弾が  
自分の方へと向かって来るので、アーニヤは反射的に回避行動を取っ  
てしまう。

足元に打ち込まれた弾丸に天子を守っているルルーシユが踏鞴を  
踏んだこともあって、二人と一人の間の隙間が出来てしまった。

そこへ、間違いなく嘗てルルーシユが演じたゼロの衣装を纏った何  
者かが直ぐ傍に降り立つ。

「誰も動くな」

ゼロがルルーシユの眉間に銃を突きつける。ゼロに気付いた者も、  
銃が天子とルルーシユに向けられていた所為で誰も動けない。

「花嫁と——花婿を頂いていく」

伝説のテロリストであるゼロが再び世に出た瞬間だった。

## STAGE 1 花婿を奪還せよ

ルルーシュが目を覚まして最初に見たのが仮面だった。  
「ふんっ！」

世にも最悪な目覚めに身の危険を感じたルルーシュが思わず拳を放ってしまったも仕方がない。

「お、おおお……っ!？」

仮面にジャストミートしたが相手に効いた様子はなく、寧ろルルーシュの拳が大惨事である。

反面、仮面を被った人物は堪えた様子も無くルルーシュが寝ているベットを覗き込み続ける。

「大丈夫、ルルーシュ?」

「だ、誰だお前は!？」

人が痛みで悶えている中で呑気に聞いてくるゼロの正体を問い質す。

「あ、仮面被りばなしだったけ」

こつちが必死であるのにどこか空回りしているような空気に覚えがあったルルーシュは、仮面に手をやって外そうとしているゼロの正体に物凄く嫌な予感を覚える。

ウイーン、と機械音がして外された仮面の内側の顔はルルーシュが予想した通りだった。

「スザク……」

「久しぶりだね、ルルーシュ。元気そうで良かったよ」

一年近く前のことが随分と昔のように思える再会に微笑む枢木スザクと違ってルルーシュは容易には喜べない理由があった。

「何故、お前がゼロを」

しかし、ルルーシュの口からそれ以上の言葉は言えなかった。

ルルーシュがゼロであることを今も知っているのは自力で辿り着いたユーフェミアと、そして協力者であるもう一人だけだから、幾ら

スザクが相手とはいえ下手なことを言つて藪蛇を突くわけにはいかなかった。

「私がルルーシユがゼロであることを教え、その衣装を渡したからだ」  
シユツ、とドアが開いてルルーシユとスザクがいる部屋にC・C・  
が髪を靡かせて入ってくる。

「C・C・、お前まで」

皇帝の飼犬に成り下がったルルーシユの前によくぞ顔を出せたものであった。

「なんのつもりだ。今更、俺の前に出て来るなど」

「その様子ではシャルルから計画のことを聞いたようだな」

皇帝の前に引き出された時のことを思い出したルルーシユが敵意も露わにしていると、どこか悲し気なC・C・がベットの近くまで歩み寄る。

「信じられないかもしれないがお前を助けに来たんだよ、ルルーシユ」  
「俺を……何故？」

ルルーシユには理解できない。

マリアンヌの死後、皇帝に『生きていない』と宣告されたあの時から誰一人としてルルーシユを助けてくれた人などいなかった。いたとしても利己的な理由を抱えていた。

他人を信用できないからルルーシユは正体を隠し、その能力で人の信頼を得て来た。だから、ルルーシユはこんな変なタイミングで自分を助けに来る人物などいないと心の底から思っている。

「理由は自分で察しろ、馬鹿」

本気で分からない様子のルルーシユに溜息を吐きながら、人を信用できなくさせた責任の一端を間違いなく担っているC・C・は最後の一步を詰めた。

困惑しているルルーシユが体を起こして座っているベットに膝を乗せて体を伸ばす。

「おい、何を」

「黙ってる」

「っ!?!」

突然の接近に身を離そうするルルーシユの行動よりも早く、C・C・はごちやごちやと五月蠅い口を自身の唇で物理的に塞ぐ。

横に退いていたスザクが突然のC・C・の行動に頬を赤くしながらも、ルルーシユの為を想って顔をそつと逸らした。

「そんなに慌てなくてもいいだろう。もしかして誰かと比べているのか？」

唇を離して余裕を見せていたC・C・はルルーシユの目が泳いだのを見逃さなかった。

「何を怒っている？」

凶星だったルルーシユがC・C・に視線を戻すと、目の奥に苛烈な光が宿っていた。

「怒ってなどいない」

「いや、怒っているだろおっ!?!」

「知るか」

ナリタ攻防戦の後、シャーリー・フェネットに唇を奪われたことを思い出していたらC・C・の機嫌が目に見えて悪くなり、指摘したルルーシユを押し倒した。

「んな、ちよ……ああ……」

顔を逸らしていたスザクの耳にペチャクチャと湿っぽい音とルルーシユの喘ぎ声のようなものが聞こえたが、ゼロの仮面を見ることが好奇心を抑える。

「あ、こんなとこまでスライドするんだ」

スザクが現実逃避気味に意外に作りこまれているゼロの仮面に感心していると、C・C・カルルーシユのどちらかがぷはあと息を息を吸う音が聞こえた。そしてまた湿っぽい音とルルーシユの声が続く。

「——これで勘弁しておいてやろう」

それから暫くの後C・C・の声が聞こえたので、スザクが振り返るとルルーシユがベットでダウンしていた。

はあはあ、と息を荒げているルルーシユの腰の上に乗っているC・

C・が口元を拭っているのを見て、背筋がゾクツと来たスザクは女の恐ろしさを知った気分である。



「えと……………大丈夫、ルルーシユ？」

中性的なルルーシユが頬を赤くして息を荒げていると、その気もないスザクですらドキツとする艶やかさである。

「……………これが大丈夫に見えるなら医者に行くことを勧めるぞ」

口元をテカらせたルルーシユが袖で拭いながら言った。

「取りあえず助けに来たよ、ルルーシユ」

スザクは今までの全てを見なかったことにして再会からやり直すことにしたらしい。

「まずはこのピザ女から助けろよ」

先程まで襲われていた我が身の情けなさを噛み締めつつも、スザクほど受け流すことも出来なくてC・C・を指差す。

「僕には無理だ」

「そこで諦めて一体何から俺を助ける気だ」

珍しく場の空気を読んだスザクにルルーシユは憤った。もつと空気を読むなら別のシーンで発揮してほしかったものである。

「自分の人間関係ぐらいいは自分でなんとかしてよ。特にカレンとか、カンカンなんだから」

全く以てご尤もな意見だが、手助けの一つぐらいしてくれても罰は当たらないだろうと言いかけたルルーシユの頬をムギユツと挟む者がいた、C・C・である。

「私を無視するとは良い度胸だ。さつきよりももつと激しいことをするぞ」

間近で凄まれては経験の少ないルルーシユにNOとは言えない。

「もう一度だけ聞く。何故、また俺の前に姿を現した。俺がお前のコードを受け継げると判断したからか？」

ルルーシユが達成人になったことを知っているのはジエレミアだけであるが、ギアスを与えたC・C・ならば何らかの方法で分かったとしても不思議ではない。

シャルルから聞かされた話が全てとも思っていない。しかし、C・

C・の目的に関しては過去の彼女の言動からして嘘ではないと判断した。

「私の共犯者が心配だったからではいけないか」

「嘘をつくな」

「本当だよ。自分が嘘をつくからと他人も嘘をつくを決めつけるのはお前の悪癖だぞ」

「ぬう……」

人は嘘をつく生き物であるから相手をまず疑うこと、それがルルーシュの生きていく為の処世術であった。

C・Cに指摘された通り、悪癖であることは理解しているが改めることはきつと出来そうにもない

「今までのことを思えば難しいかもしれないが、少しは素直になれ」

例え悪意などない善意であっても疑ってしまうルルーシュに助言を送ってC・Cは腰の上から下りる。

ようやくC・Cが下りてくれたので、安堵の吐息を漏らしながらルルーシュは起き上がってベッドに端に腰かける。

「……………仮に俺を助けに来たとしてだ」

実の親にすら利用されて来たルルーシュには、もう見返りの無い人の善意など信じられない。

「何故、このタイミングで俺を誘拐などした？　というか、ここはどこだ？」

状況が落ち着いてきて、いい加減に聞かなければならないことを聞く。

周りを見渡せばどこかの一室のようだが、ルルーシュには見覚えがない。それに今まで気づかなかったが断続的な振動も感じる。

「ここは斑鳩、って言っても分からないか」

スザクが手の中の仮面を弄びながら苦笑する。

「アヴァロン級二番艦斑鳩。ロイドさん達が作った艦で、今は天帝八十八陵に立て籠もったところだから」

「待て、展開を飛び越えて理解が追いつかん」

誘拐された、今は斑鳩に乗って天帝八十八陵に立て籠もっていると  
言われても、その大事な間が抜けてしまっは意味が分からない。

「確かゼロ……………スザクに銃を突きつけられて」

朱金城の迎賓館で黎星刻が起こしたクーデター騒ぎの中に天井から現れたゼロに銃を突き付けられたことは覚えている。

「腹を殴られて気絶させられた、のか？」

妙にズキズキする腹部を撫でながら記憶を想起すると、銃を突き付けられた直後、腹部に衝撃を受けたと思っただけなら急速に意識が遠くなったことを思い出す。恐らくスザクに腹を殴られて気絶してしまったのだろう。

「ルルーシュって相変わらず弱いよね。もう少し鍛えた方が良いよ」

「身体能力お化けのお前と比べるな」

壁を走れるような人間と比べられてもルルーシュの方が困る。

「俺が意識を失った後、どうなった？ 天子様は？」

「……………もしかして本気で天子様に気があったの？」

「馬鹿か、お前は。一国の元首に何かあったら一大事だろうが」

例え政治の実態を大宦官に握られているとしても、対外的には天子が中華連邦の代表であることは間違いないからルルーシュが身の安全を心配することは当然のことで、そこに下世話な考えは微塵もない。

年下の少女である天子にナナリーを投影していいかと言われるば答えに若干窮するが。

「天子なら星刻の部下と別の部屋にいるぞ。勿論、怪我一つしていない」

「星刻……？ ということは、あのクーデター騒ぎは囿。俺と天子を誘拐する為の芝居か」

「流石はルルーシュ。僕らが三カ月もかけた計画をあつさり見抜くなんて」

あのタイミングでルルーシュ達が誘拐されたことを考えれば、察しの良い者ならば誰だって直ぐに気づく。

「半年前に方舟の船団っていうパリに爆弾を落とすって予告していた動画があったけど、あれはルルーシュだろ？」

「ああ、しかし、良く俺だと分かったな」

ユーロピア共和国を内部から切り崩す為の嘘のテロ予告動画は意

凶的に映像を荒くしてあった。光の当て具合も計算していたので、よほどのことがなければ個人を特定することは不可能のはずであった。「ゼロの手口そのものだったら、ゼロルルーシユであると知っている者なら直ぐに分かるぞ」

隣に座ったC・C。が近すぎず遠すぎない距離感の所為で何とも言えない顔をするルルーシユ。

「僕もゼロっぽいとは思ったよ」

「嘘つけ。私が言っても信じなかつたくせに」

「ルルーシユがゼロだとは思いたくなかつたんだよ」

そういえばスザクにゼロであることをバレていたのだと思い出したルルーシユは少し気まずい思いで顔を逸らす。

「まあ、ルルーシユがゼロだとしたら色々納得出来ることもあったんだけどね」

クロヴィス殺人の容疑をかけられた自分を助けたことや、なんといつてもユーフェミアが皇籍を奉還してでもゼロを特区に受け入れようとしたことに。

「……………すまん」

スザクが駆るランスロットには散々邪魔されてきたからルルーシユにだつて言い分はある。が、それでも騙していたことには違いないから謝罪を口にする。

「カレンじゃないけど、気絶させた一発でチャラにしてあげるよ」

未だにズキズキと疼痛が続く腹部だけで受け入れてくれるというなら安い物だろうと思うことにする。

「茶化すな。しかし、よく二人纏めて誘拐出来たな」

あの場にはナイトオブ라운ズのアーニャ・アールストレイムやジノ・ヴァインベルグがいた。ジエレミアにはミレイの護衛を頼んだが、幾ら体力バカのスザク一人では二人も抱えて脱出は難しいはず。「藤堂さんの斬月が直ぐに降りて来てくれたからね難しくはなかつたよ」

「待て」

幾らルルーシユの明晰な頭脳でも、知った名前の登場に混乱して追

いつかなくなってしまった。

「藤堂だと？ あの奇跡の藤堂鏡志朗が何故、中華連邦のクーデターに協力しているんだ」

特区設立と共に解体した黒の騎士団を抜けた藤堂とその部下である四聖剣が桐原の手で中華連邦に逃げたことは知っているが、どうしてこのクーデターに関わっているのかルルーシユにはさっぱり分からない。

「お前の所為だぞ、ルルーシユ」

「俺の？」

C・C・に指を突きつけられてもルルーシユには理由が思いつかない。

「ルルーシユ、君がE・U・を纏めちやっただろ。そして残るブリタニア以外の勢力である中華連邦の元首である天子様と結婚しようとしている。これは事実上、中華連邦を呑み込むに等しい。ユフィはそれを防ぐ為に桐原さんを通して藤堂さん達に協力を要請したんだ」

「そして黒の騎士団時代に中華連邦と代理交渉をしていた私が伝手を使って、天子に近すぎて大宦官によってエリアーに左遷されていた星刻と繋ぎを取って今回のことを示し合わせたんだ」

確かに三極であったユーロピアは併呑され、残る中華連邦も政略結婚によって呑み込まれんとしていた。

しかし、神聖ブリタニア帝国の皇女であるユーフェミアが防がんとした理由がルルーシユには分からない。

「事情は分かった。分かったが、どうしてユフィが動く必要がある。そしてお前達も」

「だから、ルルーシユが発端なんだよ」

堂々巡りである。自身の影響力を顧みていないルルーシユにスザクは溜息を漏らす。

「特区成立の式典の時、G1ベースで君はユフィに言ったよね。ナンバーズを区別するのはブリタニアの国是で変えらるれば皇帝になるしかないって」

「確かに言ったが……………まさか!？」

「ユフィは決めたよ、皇帝に成るって」

全てはルルーシユが戯れに放った言葉が発端だと知ったルルーシユは手で顔を抑えた。

「あれは、だが、いや」

「リヴァルが殺されて、でもその犯人は裁かれもしない。そしてナナリーを人質に取ってルルーシユを良い様に使う。コーネリア様から総督の座を継いで、エリアーで行われて来た虐殺のことも知って決めたんだ。ブリタニアの世界を変えるしかない、その為には自分が皇帝にならないといけないって」

スザクの言葉を安易にルルーシユは信じられない。

今まで、ルルーシユは人を疑って生きて来た。こいつだけは信じても良いと思って自身の命よりも大事だと断言出来たナナリーを任せられると判断したスザクもユーフェミアの騎士となった。例えユーフェミアに絆されたとしても、リヴァルの死で間違いだと思い知らされた。

「もう、一人で何もかも背負い込まなくてもいんだよ」

肩にスザクの手が置かれたルルーシユの荷が下ろされようとしている。

「最初から俺は何も背負ってはいない」

「素直じゃない奴」

C・C が思わず呟くほどに意地の張り具合で、これにはスザクも苦笑するしかない。

らしいと言えばらしいルルーシユの姿にどう説得したものか二人が悩んでいると、三人がいる部屋のドアが思い切り開けられた。

「ルルーシユ、目を覚ましてないでしょうね!」

パイロットスーツを着たままの紅月カレンが息を荒げながらそこに立っていた。

「か、カレン!?!」

「あ、起きてたんだ。じゃあ、丁度良いわ」

ゼロであったことやジュリアス・キングスレイとして脅したことなど、カレンには知られたらマズいことを幾つもしてきたルルーシユ

は、ニコニコと顔は笑顔だが邪悪な雰囲気を纏って拳を鳴らしながら向かって来ることに多大な恐怖を覚える。

「落ち着け、話し合おう。俺達はクラスメイトだったじゃないか」

「問答無用！ 歯を食い縛れ!!」

「ぐあっ!?!」

あまりの剣幕に横に避けたスザクと飛び退いたC・C。C。が逃げたことで、ルルーシュを両手を前に出してカレンを制止しようとしたが放たれた張り手が頬を抉る。

「ふん、拳じゃない分だけ感謝しなさいっ!」

カレンなりの優しい気遣いであったが、その甲斐もなくルルーシュの意識はあっさり途切れた。

「む、スザク君か」

「藤堂さん」

スザクがKMFデツキに入ると、出撃から戻ってきてデツキに固定された斬月から藤堂が降りてきたところだった。

「随分と早いですね。交代時間はもう少し後のはずでは?」

全く損傷していない斬月のエナジーファイラーの交換だけなので、手の空いている整備員からタオルを貰って汗を拭いてる藤堂に話しかけると、何故か遠い目をされてしまった。

「代わりに星刻が出た。戦闘は拮抗状態に陥っているから休憩がてらエナジーの補給に戻って来ただけだ。直ぐに戻る」

確かにラクシャータが設計した星刻の乗機である神虎がない。

「幾ら星刻さんが凄いといても藤堂さんが抜けて大丈夫なんですか

？」

「紅月が粗方片付けてしまったから敵も恐れて碌に近づいて来ようとならない。第九世代のナイトメアの相手など、俺でも御免だが」

「あの、僕の乗るランスロットも第九世代なんですけど」

「敵にも味方にも畏怖されるほどの力を持った自覚をしろということだ」

言われてスザクは、そうとは分からないほどに偽装されたランスロット・アルビオンと、月下タイプに偽装されている紅蓮聖天八極式を見上げる。

「凄い力であることは分かっていますよ。というか、流石にフロートユニットも付けていない鋼體と比べるのはどうかと思うんですが」

斑鳩の艦載戦力は全てフロートユニット、もしくは飛翔滑走翼を取り付けた第七世代以降の機体ばかりである。第九世代の二機を第五世代以下の鋼體では比べる気にもならない。

「鋼體の数と射程は脅威だぞ」

「それぐらいしか脅威になることがないと言っているようなもんですよ」

中華連邦の量産型KMFである鋼體はサザーランドにも劣るが生産性と射程距離においては他の追隨を許さない領域にある。

藤堂が乗る斬月はラクシャータが作った月下タイプの最新鋭機で、今までカレンが乗る紅蓮式式にしか搭載されていなかった放射波動機構が搭載されていて放射障壁で鋼體が撃った弾を確実に防御できるがエナジーが減る。

「鋼體の搭載火器じゃ放射障壁やブレイズルミナスを突破するほどの破壊力もないから、ごり押しでなんとかなるじゃないですか」

「紅月が完全にそうだった。が、なんとというか彼らが気の毒でな」

鋼體は数だけはいるので撃たれている弾数はかなり多い。避けるのも難しいほどで、ならば防御しながら突破するという方法をカレンは取った。

「殺さないように手加減出来るほどの力の差がある。完全に及び腰になっっている相手を無理に倒しに行くのも気が引ける」



「中華連邦を怯えさせた当の本人はルルーシユ皇子を気絶させてアタフタしてました」

「彼らが知ればどう思うだろうな」

首を置いていけ、とばかりに奮戦したカレンの所為で中華連邦は一定距離以上まで斑鳩に近づかなくなってしまった。

遠距離から砲撃してるが、斑鳩が入った場所は歴代の天子が眠る天帝八十八陵なので攻撃の規模は小さい。しかもブリタニアの皇族であるルルーシユを人質に取ったような物なので、余計に手が出しづらいのだろう。

「しかし、ルルーシユ皇子まで誘拐する必要があったのか？ 婚約を潰し、クーデターを成功させるなら天子だけでも良かったはずだ」

天子を誘拐することは仲間である星刻の望みであるが、ゼロールルーシユであることを藤堂達には教えていないので花婿まで連れて来たことに疑問を抱いても仕方ない。

「ブリタニア側を牽制するためです。現にシユナイゼルは何も手を出そうとしないでしょ？」

知己ではあるが全てを話せる関係ではない。

ユーフェミアの騎士として清廉潔白ではいられなくなったスザクは罪悪感を覚えつつも、必要な事であると建前を口にする。

「あのブリタニアならば第一皇子など直ぐに見捨てるものと思っただが」

ブリタニアは皇族間ですら競争を奨励しているので、同腹の兄妹以外は仲が悪いと藤堂は思っていた。

「それだけルルーシユ皇子に利用価値があるということなんですよ」

「かもしれんな」

囁くスザクを注視する藤堂は真意を問うことを止めて、汗を拭いていたタオルを手近にいた整備員に渡す。

「籠城戦にも飽きた。君が来たということは大宦官の居場所が分かったのだろう。早々に終わらせるとしよう」

星刻の部下からの報告で大宦官の居場所は判明している。

後は事前に示し合わせた通りに動くだけでいいのだが、まさか藤堂に見透かされていると思わなかったスザクは僅かに目を見張った。

「所詮、私達は君達に利用されているだけなのだろうが、嘘を突き通すならもう少し徹底した方が良いぞ」

助言とも苦言とも取れる藤堂からの言葉にスザクは僅かに申し訳なさげに眉尻を下げた。

その数十分後、神虎を操る星刻が大宦官を強襲し、中華連邦は天子の下へと全てが集約される。

## STAGE 12 血染めのルルーシュ

神聖ブリタニア帝国の帝都ペンドラゴンにあるペンドラゴン皇宮には皇族ですら立ち入りが禁止されているエリアがある。

「……………」

幻想的な空間で天空へと伸びる不可思議な棒を見上げる現皇帝シャルル・ジ・ブリタニアは背後に誰かがやってきたのを察しても振り返ることはなかった。

「また、ここに籠っているのかいシャルル」

シャルルに認められた者以外は知ることすら許されていない場所に立ち入った少年が気安げに話しかける。

「この黄昏の間になれば嘘に惑わされることもないからですよ、兄さん」

シャルルは背後にいる少年を兄と呼んだ。しかし、皇室の系図ではシャルルに兄がいた形跡はない。

「気持ちは分かるけど、もう少しでラグナレクの接続は成るんだ。時には我慢が必要だよ」

「我慢なら今まで十分にしてきました。もう何十年も」

シャルルが傲慢な話し方ではないというだけで帝国臣民は目を剥いて卒倒するだろう。それを当然の物と受け止めている少年——  
—V・Vは流れた月日を思い出すように目を細める。

「僕がコードを受け継いで長いからね。C・Cは短い方だと言うだろうけど」

「彼女は特別でしょう。私からすれば何時までも若い兄さんに羨望を覚えますよ」

「若いというより幼いだよ、これでは」

十代前半の見た目のまま成長することのない己が身に苦勞して来たV・Vとしての羨望と言われても困るだけだ。

「ところで、中華連邦のことは聞いたかい？」

「天子とルルーシュを婚約させることなら知っています」

幾らなんでもずっと黄昏の間に居続けることも出来ない。

中華連邦の取り込みは、皇帝であるシャルルの承認が無ければ宰相であるシュナイゼルだけでは進めることは出来ないのだから。

「あれはシュナイゼルが主導したことです、E・U・が落ちた以上、後の敵性戦力は中華連邦のみ。幾ら内側から腐つていようとも征服には時間がかかる。大宦官に爵位を与えれば、奴らは簡単に尻尾を振りましたよ」

E・U・が和睦という形で併呑されたが、シャルルとしてはユーロ・ブリタニアに宿る反逆の芽を摘み取ってから征服した方が都合が良かった。そういう意味ではルルーシュのやり口は、犠牲の少ない方法なだけに口を挟み難い。

「そつちはまあ、どうでもいいんだけど」

ラグナレクの接続という結果を齎す為に世界征服は必要な過程ではあったが、ことここに至って多少の反逆の芽があってもV・V・は気にしない。

彼が問題にするのはただ一つ、自身の同類であるC・C・の行方だ。

「天子とルルーシュの婚約の夜会にゼロが現れて二人を誘拐したらしいんだよ」

「なんですと……」

ゼロはルルーシュであると知っているシャルルも、流石に天子とルルーシュがゼロに誘拐されたと聞けば驚きを露わにする。

「しかし、ゼロはルルーシュですぞ。十中八句、そやつは偽物でしょう」

「僕もそう思うんだけど、じゃあ誰がゼロの振りをしているのかわかって話になっちゃうんだ」

「……………まさかC・C・と？」

あのルルーシュを強制的に本国に連れてきた時からマリアンヌが幾ら話しかけてもC・C・は応答しようとしないとシャルルは聞いていた。完全な一方通行で、僅かに反応を感じるだけであるがルルーシュのことを気にしているのは間違いないとマリアンヌが言ってい

たことを思い出す。

「かと思っただけけど、C・C・らしくないんだよね」

ルルーシユが高いギアス適性を有していることは間違いないが、C・C・にとつては替えの利く道具であるはずなのだというのがV・V・の見解だった。

「全く何で逃げるんだらうね。死にたいならシャルルに頼めば一発なのに」

「そうですね……」

未だにC・C・が自分達から離れた理由が分からないので、その点に関してはシャルルもV・V・に同意する。

わざわざルルーシユを育て上げるなど手間ではないがC・C・は頑として戻って来ない。

「それで二人を誘拐したゼロはどうしたのですか？」

「クーデターの部隊と合流したらしいよ。ただ、天帝八十八陵に逃げ込んだのと、ルルーシユも一緒だから大宦官も手を拱いているらしくて」

「シユナイゼルが現地にいるのでしたら、あ奴なら方策に二つや三つぐらい簡単に出しているでしょう」

「それが全然動いてないらしいんだ」

単純な策謀に関しては自身以上であるシユナイゼルに任せておけば上手くやると思ったシャルルだが、動かないと聞いて眉を顰めた。「妙ですね。シユナイゼルとルルーシユは最近は仲が良かったようですが」

ルルーシユが帝都に戻って来た時はシユナイゼルがずっと付きっ切りになっていることはアーニャを介してマリアンヌから聞いていた。

マリアンヌは悪影響があるから切り離せと言ってきたが、会う気がないなら絶対に会おうとしないルルーシユが付き合っているのなら好きにさせておきたいシャルルは静観の態勢を取っていた。

「変わったのかな、シユナイゼルが」

「その可能性はありますが……」

マリアンヌと出会ったシャルルのように、シユナイゼルもルルーシユと接したことで変わってしまったのかもしれないと、前例があるだけにV・V・はその可能性を否定しきれない。

二人が思案に暮れていると、黄昏の間にもう一人の人物――  
―ビスマルク・ヴァルトシユタインが現れた。

「陛下、V・V・様」

二人がいるのを見たビスマルクが跪く。

「口上は良い。何か報告があったのだろうか、面を上げい」  
「はっ」

一度頭を下げたビスマルクがシャルルの促しに畏まる。

「陛下は中華連邦の一件をどこまでご存知で？」

「兄さんからクーデターが起きたことと、ゼロにルルーシユと天子が攫われたことは聞いた。その様子からして進展があったか」

ビスマルク自身が報告に来たということはそれ以外に考えられない。

「はい、つい先程、大宦官が排除され、クーデター側が政権を握りました。それに伴ってシユナイゼル殿下から報告を預かっています」

「話せ」

「中華連邦の情勢を鑑みて婚約状態を続け、結婚は天子が成人してからに行うことになりそうだと」

報告を聞いたシャルルは腕を組んで考える。

「その理由は？」

「政権を握った一派が天子の年齢を理由に延期を強硬に申し出たようです。その代わり、かなりの譲歩を引き出したと」

一気に破談にしなかったのはブリタニアとの力の差を分かっているからであろうが、それまでの間に内部統制を行って反抗の力を蓄えることも可能な時間ではある。

天子の年齢を大体で思い出したシャルルは大した問題ではないと思考の隅に追いやる。

「まあ、良いだろう。どうせ、その頃にはラグナレクの接続が成っている。シユナイゼルに任せると伝えておけ」

「はっ」

承ったビスマルクは深く一礼して黄昏の間から去って行く。

その背中を見送ることなく天高く伸びていく棒を見上げたシャルルは隣に立つV・V・が考え込んでいることに気付いた。

「どうかしましたか、兄さん?」

問いかけの暫くの後、ようやく顔を上げたV・V・がシャルルを見上げる。

「少し気になることがあるから中華連邦に行つて来る」

「何をしに行かれるので?」

「確認したいことがあるんだ。何も無ければ直ぐに帰ってくるよ」

踵を返してビスマルクとは別の方向へと歩いて行くV・V・は途中で足を止めて振り返つた。

「もしも、シュナイゼルやルルーシュが僕達を裏切っているなら始末をつけるけど、いいよね?」

始末がどういう意味かを分からないほどシャルルは愚鈍ではない。そしてV・V・が気にしている何かがブリタニアへの裏切りという意味でなら、現時点において損とまで言える状況になっていないのでシャルルが言えるのは一つだけ。

「まだあの二人には利用価値があります。C・C・が見つかるまでは下手な動きは控えて下さい」

「ん、分かった」

まだ全ての準備が出来たわけではないので、シャルルの返答を了承して軽く答えたV・V・は暫く歩いて黄昏の間を出る。

「お帰りなさいませ、嚮主V・V・様」

中華連邦にあるギアス嚮団の黄昏の間から出たV・V・を出迎えたのはローブを目深に被つた嚮団員数名だった。

「丁度良かった。誰でもいいから口口を連れて来てくれないかな。仕事を頼みたいんだ」

「分かりました」

嚮主である自分には従順な嚮団員達の返答を聞くことも無く、歩き続けるV・V・はそこで一つのこと気が付いた。

「あつ、例えC・C. がいてもロロのギアスが効かないから一人じゃ連れて来るのは無理か」

あれでC・C. はかなり強い。流石にナイトオブブラウンスクラスではないが、ギアスが効かないロロではC・C. を見つけたとしても連行してくるのは難しい。

「こういう時に使えるプルートーンは二人のオズにやられちゃってるし、しようがない。僕も行くか。C・C. 用の麻醉銃はどこに直したっけ」

と、V・V. は頭を掻きながら自室へと向かうのだった。



次にルルーシュが目を覚ました時、今度の天井には見覚えがあった。

「迎賓館………さっきのは夢か」

ルルーシュの記憶にある朱金城の迎賓館にあるブリタニア勢の控え室の天井と合致したので、目覚める前に見ていたのは都合の良い夢だったのだろうと落胆する。

「夢ではないよ」

「へ？」

クーデター騒ぎに巻き込まれて意識でも失ったのだろうとルルーシュが体を起こすと、直ぐ傍の椅子に優雅に腰かけているシュナイゼルに話しかけられてらしくもなく呆けた顔を向けてしまった。



「クーデターは無事成功して大宦官は排除され、中華連邦の実権は天子様が握ることになった」

つまりは天子がルルーシユとの結婚を望まぬのならば簡単に破談に追い込むことが出来るというのに、政略結婚を主導したはずのシユナイゼルは何故か余裕を保っている。

「当初の予定とは違ったにも関わらず、随分と余裕そうで。天下に名立たるシユナイゼル殿下ならば、周りに悟られないように天子様を操る方法の三つや四つもあるのでしょうかね」

「いいや、何もないよ」

キョトンとした顔で言われてルルーシユは混乱するばかりである。

「どういうことですか？」

短い言葉に込められたルルーシユの混乱にシユナイゼルは面白い物を見たように微笑む。

「簡単なことよ」

ガチャリ、とドアを開けて部屋に入ってきたのはユーフェミア、その後ろにはスザクやカレン、C・C・にミレイの姿まであった。

「全ては私達が仕組んだことなの。全体の計画を立てたのはシユナイゼルお兄様だけよ」

「なに？」

全員が中に入ってドアを閉める際に、チラリと部屋の外にいるジノとアーニヤの姿が見えた。彼らが護衛なのだろう。

ルルーシユがシユナイゼルの方を見ると、彼は組んでいた足を解いて椅子から立ち上がった。

「皇帝陛下からルルーシユ達が生きていると聞いた時は良く生きていてくれたものだと思ったけれど、直ぐに何かがおかしいと気づいたよ」

刺々しいルルーシユの態度と、引き離されているナナリーのことである。

ルルーシユがブリタニアに対して反抗的なのは死んだとされてきた経緯とその後を考えれば容易に想像が付き、ナナリーに会わせないのもその罰であるとも推測を建てられたがジュリアス・キングスレイ

として偽名は特区時代から引き継ぐにしても、爵位を与えて戦場を転々とさせよという命令は少し不可解だった。

「独自に調べ始めた時にユファイから接触があったんだ」

「盗聴される危険もあったから当分は当たり障りのない話しか出来なかったけれど、ロイドさんとラクシヤータさんに特殊な回線を作ってもらった時にルルーシュが連れ戻された時の状況を教えたのよ」

「他にも色々と聞いたよ。ゼロであったことや皇帝陛下の双子の兄のことや荒唐無稽な計画のことをね」

そこまでのことを知っているのは、この場には一人だけ。

瞬間的にC・C.を見ると、左目を閉じて微かに首を振っていた。流石にギアスのことまで言っていないようで内心で胸を撫で下ろす。

「皇帝陛下が危険な研究にのめり込んで度々玉座を離れていたのは明らかだ」

ルルーシュが何度も気絶している間に陽が明けてしまったようで、シュナイゼルが立つ近くの窓が白み始めている。

「E・U. は併呑した。中華連邦も癌である大宦官を排除し、ルルーシュと天子様の婚約はこのままだから良い関係を築けるだろう。事實上、ブリタニアの敵はいなくなつた」

看過しえないワードがあつた気がするのだが誰も何も言わないのでルルーシュも場の空気を読んで口に出せない。

「世界はブリタニア一色に染まった。今後は内政に注力しなければならぬ状況で、この世界に興味を失つた男に王たる資格はない」

「それはシュナイゼル宰相が皇帝になるということでしょうか？」  
「まさか」

苦笑されたルルーシュにはシュナイゼルの考えが読めない。

「今までのブリタニアと違うと思わせるには私では不適任だよ」

「まあ、確かに」

「そこは否定してほしいところなんだけど」

「腹黒宰相と呼ばれているのをなんとかした方がいいかと」

「ははっ、これは一本取られたか」

超大国ブリタニアのNo.2に軽口を叩くルルーシュにミレイなどは

驚いているが、以前の次兄を知るユーフェミアには快活に笑うシユナイゼルの姿の方が驚きである。

「では、ユファイが皇帝になると？　しかし、それは」「流石にまだ早すぎるよ。まずは穏健派のオデュツセウス兄上に即位して頂き、何年かしたら後を継げるかもしれないね」

若すぎる、経験が足りない、まだまだ未熟、思慮が甘い等々と散々に貶された経緯があるユーフェミアが肩を落としており、スザクとカレンが慰めている。

「世界を統一したのならば差別政策は愚策だよ。ブリタニアとそれ以外では、どちらが多いかは誰にでも分かる。ナンバーズ政策を廃止して、ルルーシュが考案していた超合衆国構想に少しずつ移行していく。形は違うが世界統一政府となるか」

共犯者であるC・C・にだけ話していた超合衆国構想をシユナイゼルが知っているとなれば、漏洩したところは一つしかない。

「信頼を得るには秘密事を明かすに限る」

「魔女めっ！」

「どうせお前が抱えていてもしょうがない構想だろう」

空いた椅子に座って足をブラブラとさせるC・C・に言われたことも最もである。

ブリタニアの飼い犬であるルルーシュでは、どう足掻いても超合衆国構想は机上の空論にしか過ぎなかったのだから。

「世界統一政府といっても実態はブリタニアが上に立ち、それ以外が下になるだけのこと。それでは何も変わらない」

「少なくともここにいる者達とオデュツセウス兄上は父上の路線を引き継がない。父上の退位は決定事項なのだから、その後のことはその時に考えればいい」

シユナイゼルはルルーシュと同じく計画を立てて、問題が起こっても順次修正を加えながら当初の目的を達成するタイプである。にも関わらず、計画を立てずに動くなど信じられない。

「あなたは本当にシユナイゼル殿下なのですか？」

相手によって仮面を使い分けて自分のなかったシユナイゼルが言

うこととは思えない。

「ルルーシユは父上を許さないのだろうか？ 私が最も恐ろしく思い、最も愛したルルーシユの願いを叶えたいと思うのは間違いかな」

ルルーシユが幼少の頃、既に第一線で働いていたシュナイゼルはそれほど深い交流があったわけではない。それこそ、同じ異母弟であるクロヴィスに泣きつかれて何度かチェスの代打ちをしたぐらいだ。

とても愛らしい容姿の幼い子は、こと勝負事になると鮮やかに燃える混沌の炎が見え隠れしていた。既に仮面を使い分け、自分を見失っていたシュナイゼルには決して灯らない炎を見ながらのチェスは胸を躍らせた。

ルルーシユがエリアーで死んだと聞いて残念な思いをしていた。同じ炎を持つ者はいたが、ルルーシユほどではない。

その想いはルルーシユが生きていると分かり、何度もチェスをして勝つか負けるかはその時次第になった時、シュナイゼルはもう失いたくないと思わせるには十分なほどの自分の感情だった。

「気持ち悪い」

「ちよつとルルーシユ、そんな言い方」

シュナイゼルの愛が重くて率直な感想を漏らすと、幾ら気安く接しようとも帝国の宰相にあまりにもぶつちやけ過ぎるルルーシユをミレイは諫めようとする。

「ははっ、その通りだよ。これが私だ。愛しているよ、ルルーシユ」

「止める寄るな近づくなー！」

自分と同じ視点に立てて、しかし真逆の精神性を持つ異母弟に兄弟愛を拗らせたシュナイゼルが満面の笑顔を浮かべて近寄ってくるのを、ルルーシユは何としても阻止しようする。

「ジェレミアは、ジェレミアはどうした！」

こういう時に相手が皇族であろうともルルーシユを優先すると決めたジェレミアが頼りになるというのに、どうしていないのかとルルーシユは叫ぶ。

「この中華連邦にある嚮団という施設を抑える為にカノンと協議しているところだよ。もう直ぐ戻って」

流石に抱き付く気まではなかったシュナイゼルが笑いながら言うとして、突如としてその首から血が噴き出した。

「は?」

その声を上げたのは一体誰だったのだろうか。

ルルーシユはシュナイゼルの間近にいたので血を一身に浴びながら呆然としていた。

「兄上!」

直ぐに立ち上がり、崩れ落ちていくシュナイゼルの体を抱き留める。

「曲者だ! シュナイゼル殿下が襲われた! 誰か医者を!!」

誰かが何かを言っている。ルルーシユの耳は言葉が入って来ても理解しない。

「ルルーシユ、ゴメン!」

誰かがルルーシユの手からシュナイゼルの体を奪い、ベッドに寝かせて血が流れ続ける首筋にシーツを剥がして抑える。

真っ白なシーツがシュナイゼルの血によって染まっっていく。それはルルーシユにリヴァルが死んだ時のことを思い起こさせた。

「兄上!」

「下がって!」

何時までそうしていたのか、迎賓館に常駐していた医師も駆けつけて救命措置を施している中でシュナイゼルに駆け寄ろうとするが止められる。

「誰だ! 誰が兄上を!」

医療の心得など少ししかないルルーシユに出来ることは何もない。あの一瞬でどうやってかシュナイゼルの頸動脈を切り裂いた者を八つ裂きにせねば収まらない怒りがルルーシユを叫ばせた。

部屋にいるのはルルーシユと医者、看護師とシュナイゼル、そして口を押さえて震えているユーフェミアと彼女を守っているスザク、困惑しているカレンとミレイ、厳しい顔つきのジノとアーニャ  
.....

「C・C. がない?」



そしてピタリと止める。

「俺が間違っていた」

「ルルーシュ?」

スザクが恐る恐る訊ねてくるのをルルーシュは馬鹿みたいに澄み渡った頭で理解しながらも無視する。

「情けも、甘さも、迎合も、何もかも、間違っていた」

今ルルーシュの目に映るのは動かなくなったりヴァルの死に顔だった。

V・V・が自身の叔父であると聞かされた時に誓ったはずなのに、コソコソと準備をして少しの抵抗で満足していた。

「決めたはずだ。何もかもぶっ壊すと、奴に連なる全てを破壊すると決めたのに」

流れた涙が頬に付いたシユナイゼルの血と混ざりあつて、まるで血涙のように見えた。

「俺が、間違っていた」

世界ではない。間違っているのはルルーシュだ。流れるシャルルから受け継いだ血が、ルルーシュの存在が、多くの悲劇を生む。

「俺が、俺が、俺が!」

自己否定と共に胸の奥から熱い物が込み上げる。激情がルルーシュの体を食い破り、迸る。

「ダメ、ルルーシュ。それ以上は」

少しずつ歩み寄りかけていたルルーシュの心がまた離れていくのを感じたユーフェミアが止めようとするが、もうルルーシュの憎しみは止まらない。止まりようがない。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる」

既に決めてしまったルルーシュに迷いはない。

「ジノ・ヴァインベルグ、アーニヤ・アールストレイム、エリアー総督ユーフェミア・リ・ブリタニアには反逆の疑いがある。拘束せよ」

「ルルーシュ!?!」

「どうした、ナイトオブブラウズ。命令を果たせ」

裏切りとも言える状況に声を上げるスザクを無視し、ナイトオブブラウ

ウンズ二人に命令を実行するようにルルーシユは迫った。

「しかし」

「ユーフェミア皇女が連れて来た女性が部屋からいなくなっている。状況証拠に過ぎないが彼女がシュナイゼル殿下を襲った可能性が高い。状況を把握する為にも事情聴取は必要だ。その為に拘束することとは何もおかしいことではない」

明らかに正気ではなかったルルーシユに抗弁しようとしたジノだったが、語られた論理は理屈に合っている。

アーニヤは判断をジノに預けたよう動かない。

「申し訳ありません、ユーフェミア殿下とお付きの方々」

結局、ジノはルルーシユの意見を呑むことにした。

「犯人が分かるまで別室の方に」

皇族を手錠で拘束するようなことはしない。

しかし、皇族で宰相であるシュナイゼルが害されたのだ。慎重に慎重を期する必要がある、少しでも疑いがあるのならば精査の必要がある。

「行くんだ、ユファイ」

促されても動こうとしないユーフェミアに右目でギアスをかける。

「ええ、分かったわ」

「ユーフェミア様っ!？」

「ユファイ！」

「仕方ないわ。疑いが晴れるまでは私達は余計なことをしない方が良い」

ギアスをかけられたユーフェミアが今のルルーシユを放つて唯々諾々と従ったことにカレンとスザクが目を剥くが、仮にも主君の命を騎士二人が無視することも出来ない。

「ユーフェミア殿下がこう言っておられるのだ、さあ」

ルルーシユを放っておけないと分かっているも、ここでダダを捏ねてはユーフェミアの状況が悪くなるだけだった。それが分からないスザク、カレン、ミレイではないからジノに促されて部屋から出て行くしかない。



「シュナイゼル殿下!？」

入れ替わるようにシュナイゼルの副官のカノン・マルディーニが荒れた息で室内に入り、ベッドを血に染める主君の姿に息を呑んだ。

「カノン伯爵」

「ルルーシュ殿下、一体何が……っ!？」

シュナイゼルの血に塗れたルルーシュに名前を呼ばれたカノンはそちらを見てギクリと体が固まらせた。

「中華連邦にいるブリタニア軍のシュナイゼル殿下が持つ指揮権を私が引き継ぐ」

「で、ですが、ここにはユーフェミア殿下も」

明らかに普通ではないルルーシュに指揮権を渡してしまうのは危険だと感じ取り、同じ皇族で総督の地位にいるユーフェミアを理由に回避しようとする。

「彼女には本件に関与している疑いが有り、別室に拘束している。故に犯人を捜す為には私が指揮権を引き継ぐ。私に従え」

「分かりました。兵達にも伝えます」

途中でギアスを使い、カノンを支配下に置く。

「まずは、何を?。」

敵の本拠地は分かっている。問いかけて来るカノンに、ルルーシュの口が裂けるように開かれた。

「この中華連邦にあるギアス嚮団を、ただ一人も残さずに殲滅する」

一気に振り切れたルルーシュに、最早躊躇いはない。

## STAGE 13 暴かれた嘘

幼き頃にチエスで一度も勝つことが出来なかつたと、ルルーシユはシュナイゼルを目下の所、最大の敵と見ていたことをC・C・は知っている。

「ルルーシユは父上を許さないのだろうか？ 私が最も恐ろしく思い、最も愛したルルーシユの願いを叶えたいと思うのは間違いかな」

そのシュナイゼルから明け透けな好意を向けられてルルーシユが表情を歪めたのは絆されたからだ、嘗て特区成立の前にユーフェミアの信念に折れた時のことを知っているC・C・には分かった。

「気持ち悪い」

「ちよつとルルーシユ、そんな言い方」

ミレイが窘めているが、素直ではないルルーシユの照れ隠しの一種である。

帝国の宰相であるシュナイゼルを慮っているミレイと違ってユーフェミアなどは寧ろ微笑ましそうに見ている。C・C・も同じで、あのアツシュフオード学園で別れてからルルーシユの心に何重にも張り巡らせた柵が取っ払られていくのに満足していた。

（共犯者の私にまで敵意を向ける必要はないだろうに）

斑鳩での再会時、どう好意的に見ても敵を見るかのような態度であつたルルーシユに反発を覚えてディーブなキスマまでしてしまったが、後になってやり過ぎたと自分の心を持って余している人の気持ちが見分らない童貞坊やに不貞腐れたものである。

「ははっ、その通りだよ。これが私だ。愛しているよ、ルルーシユ」

マリアンヌからシュナイゼルの悪口を散々聞いていたので、まさかここまで愉快的な性格になっているとは思わなかつた。これもルルーシユの良くも悪くも人に影響を与える所為なのだろうかと思ふも益体もななく考えながら、シュナイゼルが両腕を広げてベットに座る義弟に近づく背中を見る。

「止めろ寄るな近づくな！」

こうまで過剰なまでの愛情表現をしなければルルーシュは人を信じられないと、その冴え渡る頭脳で理解しているのか、素でそうなっているのかは分からないが。

「ジェレミアは、ジェレミアはどうした！」

シャルルの監視役としてジェレミア・ゴットバルトが配置されているとは、シユナイゼルからユーフェミア経由で聞いていたので微笑ましい窮地に陥ったルルーシュが助けを求める名を聞いてC・C・は少し驚いてた。

マリアンヌから計画の全てやC・C・の目的を聞かされても人を信じているルルーシュに謝りたくなかった。

「この中華連邦にある嚮団という施設を抑える為にカノンと協議しているところだよ。もう直ぐ戻って」

シユナイゼルの言葉が不自然に止まった。

C・C・がルルーシュからシユナイゼルに視線を移そうとして、部屋の面々の動きが時が止まったかのように静止していることに気がついた。

「な」

にが、と続けようとした言葉は外から力強く開かれた扉に意識を引っ張られる。

「V・V・っ!？」

ドアを蹴破って室内に入って来た淡い金髪の少年が自分と似て異なるコードを持つV・V・であると気づいたが、突然の登場と不可解な状況にC・C・は反応しきれない。

「あっ!？」

「君の為に特別に誂えた麻酔銃だよ」

V・V・が手に構えた麻酔銃を避けることは出来ず、咄嗟に顔に飛んできたのを腕で庇うのが精一杯だった。

「大型動物も簡単に眠らせる麻酔だから無理はしない方が良い」

一瞬で襲って来る睡魔に抗おうとするも、意識が混濁して膝から崩れ落ちる。

なんとか倒れ込むのを手を差し出して堪えたが力が抜けていく。

「さあ、ロロ。裏切り者二人に報いを」

「はい」

V・Vに次いで室内に入ってきたナナリーとそう変わらない年齢の少年が懐からナイフを取り出す。

「ぎ、アス……」

ロロと呼ばれた少年の右眼に輝くギアスの模様に、まるで時が止まったかのように動かないルルーシュ達の異変の理由に見当がついても、麻酔銃の所為で指一本動かすのも億劫になっていた。

「まずはルルーシュからだ」

薄れゆく意識の中で鼓膜に届いたV・Vの言葉に、C・Cは躊躇いなく残った力を振り絞って舌を噛んだ。

噛み切れれば意識も完全に取り戻したのだろうか、麻酔に弱った力では痛みが感じる程度しか振り絞れない。しかし、それでも闇に沈みかけたC・Cの意識を引き戻し、足に力を籠める切っ掛けとなった。

「……っ！」

走ったというより飛んだ、飛んだというより一度は起こした体を投げだした。

表現はどうであれ、油断しているV・Vの横を飛んだC・Cはロロに体当たりして、今にもルルーシュの喉を掻っ切るうとしていたのを外させた。

結果的にせよ、ルルーシュの命を救ったC・Cの献身は動揺しながらも殺す手を止めなかったロロによって更なる悲劇を生むことになる。

「くっ」

ルルーシュがいる側にいたC・Cがロロを押ししたこと、その刃の標的がシュナイゼルに変わったのだ。振るわれた刃はシュナイゼルの首筋を薙ぐ。

「まだ動けたのか、C・C！」

ロロと共に倒れ込んだC・Cの背中にV・Vが更なる麻酔弾

を撃ち込んだ。

「ちつ、欲を掻き過ぎれば危険ということかい。C・C・に起きられたら面倒だ。撤退するよ」

今度こそ、抗い様も無くC・C・の意識は闇に完全に沈んだ。

「分かりました」

ロロは答えつつ、左胸の辺りを抑える。

効果範囲を迎賓館の一部とはいえ広大な範囲に広がっているので、ギアスの発動時に心臓が止まってしまうのもあってその負担は重い。

一度外に出たV・V・が持ってきたカートにC・C・を乗せて部屋を出る。

「よし、誰もいない。一度ギアスを解いていいよ」

「……はい」

廊下の端で身を顰めたV・V・に言われたロロがギアスを解くと心臓の負担も軽減する。

「嚮団員に迎賓館の近くの建物にナイトメアを運ばせている。そこまです逃げ切れば僕達の勝ちだ」

ギアス嚮団において嚮主の命令は絶対である。

嚮主であるV・V・の命令に逆らえるはずもなく、ロロは幼い頃から暗殺を命令されてきた時と同じく「はい」と答える以外の言葉を持っていなかった。

「待て、貴様達！」

迎賓館を抜け出す時にカートは邪魔になるので放置し、V・V・と二人でC・C・を抱えてよたよたと進んでいたロロの耳にありえない言葉が入って来た。

「ジェレミアかっ!? ロロ、アイツにはギアスは効かないよ。何をしても足止めするんだ！」

「………はい」

左目に機械的な装置を身に着けた男に表情を歪めたV・V・に命令され、広範囲に連続のギアスの使用に心臓の負担が限界に達していたロロは、口を開くのも億劫ながらもシユナイゼルの血が付いているナイフを再び取り出す。

「そ奴はC・C・!? V・V、また貴様か!!」

「行かせない」

背後でC・Cを小さな体で抱えながらナイトメアを隠してある建物に向かっているV・Vの命令を守るため、ナイフを構えて低い姿勢で飛び込んでいくロロ。

「逃げるか、V・V！」

ギアスの負担に弱っているロロの動きは精彩を欠き、ジェレミアは横っ飛びで簡単に避ける。

しかし、ロロも自分の体が不調を訴えていることに気付いているので避けられることは予想済み。間髪入れず、ナイフをジェレミアの身の右眼に向かって投げた。

「小癩！」

これにもあつさりとは反応したジェレミアだがナイフから身を守るために掲げた腕が結果的に自身の視界を遮ってしまった。

そこへロロがタツクルを仕掛ける。

反応出来たがロロがギアスを使った所為でギアスキャンセラーが発動した為、咄嗟の反応がコンマ数秒遅れてしまう。

「ぬっ!?!」

低い姿勢のまま足下に突っ込んできたロロの体当たりを受けてジェレミアも後方に倒れ込む。

「このジェレミア・ゴットバルトを舐めるな！」

体を捻って片手を付き、足に纏わりつくロロを蹴り飛ばしたジェレミアは自身の最大の敵であるV・Vが逃げた方向を睨みつける。

「い、かせま、せん」

ジェレミアにギアスをキャンセルさせられてもギアスをかけ続けるロロ。

体感時間停止とギアスキャンセルが連続で繰り返されては、この地に味方がやってくるのに時間がかかるし、何よりもギアスキャンセラの動力が切れてしまうかもしれない。

「少年、邪魔をするなら容赦はせんぞ」

「……………」

もう喋ることすら出来ない様子のロロの虚ろな様子を見たジェミアは覚悟を決めた。

「御免！」

袖から隠し剣を抜き放ち、一足で踏み込んでロロの体を貫く。

「死して尚、立ち続けたその覚悟だけは認めよう、少年。名を知れなかったのが残念だ」

心臓が止まるのが先か、剣が刺し貫くのが先だったかは分からないが、このような少年に命を捨てさせたV・Vへの怒りを胸に宿してジェミアは走り出した。

その場に横たえられたロロの体が動くことは、もうなかった。



C・Cの意識が戻ったのは鋭い痛みの所為だった。

「がっ!？」

両手足に走る激痛に口から呻きが漏れ、C・Cの意識はゆつくりと浮上する。

それでも麻酔の影響か、痛みとは裏腹に意識はまだ混濁している。

「あ、ようやく目が覚めた？」

まるで重度の船酔いに成ってしまった時のような酩酊感に苦しむC・Cに、傍で覚醒を待っていたV・Vは腰をゆつくりと上げる。

「致死量の気付け薬を使って麻酔から覚めるのが二時間か。良いデー

夕が取れたよ。活用先はないだろうけど」

台に物理的に固定されているC・C・の顔を覗き込んだV・V・は薄く笑う。

「……………ここは、どこだ？」

血が足りないのか、まだ麻酔が残っているかは分からないが、吐きたくても吐けないような気持ち悪い身体状態にあるC・C・はそれだけを口にした。

「中華連邦にあるギアス嚮団の本部だよ」

「私は、知らないな……………」

「嚮団を抜けた君に知らせる義務はないだろう？」

全く以てその通りではある。大体、C・C・にしても責める意図があつたのではなく、体の状態を回復させる為の時間稼ぎだから、どうでも良かった。

「ああ、そうだな。人の、手足に…………釘を打つような…………奴と、離れておいて、正解だった」

C・C・の手の甲と足に巨大な釘が打ち込まれて下の台に固定されている。先程からの鋭い痛みはこれが原因だった。

「また逃げられると面倒だからさ。幾ら再生能力があっても、これじゃあ逃げられないだろ？」

確かにC・C・は塵になっても時間をかければコードを受け継いだ時と何一つ変わらない肉体に戻る。しかし、釘などの物体で肉体を貫通したまま固定されると、再生しても肉と癒着してしまう。

これも物理的に引き抜けば放っておいても傷は治る。魔女狩りに遭った時に同じことをされたのでC・C・も良く知っていた。

「お前に、しては、良い…………アイデアじゃないか…………」

精一杯の皮肉である。

「どう致しまして」

C・C・の強がりを見抜いたV・V・は嘲笑を浮かべている。

そう、強がりだった。既に釘はC・C・の肉と癒着していて容易には外せそうにない。C・C・が逃げるのは不可能だと知っているのだ。



「さあ、シャルルの下へ連れて行き、そのコードを渡してもらおうよ。死を望む君も本望だろう」

今の自分の状況こそ俎板の鯉と言うのだったな、とスザクやカレンの下で潜伏している間に覚えてしまった日本の諺を思い出したC・C・は諦観を覚えた。

「おや、嬉しそうじゃないね」

ずっと長い間、望んでいた死が近づいているというのに覚えたのは諦観だったC・C・の表情は、どう見ても喜んでいようには見えな

い。「どうしてだろうな。死こそが望みだというのに、私にも分からない」  
分からないが、こんな死に方を前にして喜ぶ気にはどうしてもならなかった。

「まあ、なんだっていいよ」

自分達から離れて行ったC・C・に仲間意識などもう無くなったV・V・は気にしようとしなかった。

「死にゆく君と問答をしても意味はない。ないとは思うけど、ルルーシュがここにやってくるかもしれないしね。シャルルが直ぐに来れたら良かったんだけど、皇帝っていう立場も面倒だよ」

そう言ってV・V・が嘆息した直後だった。

「っ!？」

V・V・が立つ地面とC・C・が釘で固定されている台が大きく揺れた。

「なんだいつ!？」

「——嚮主V・V・！ ナイトメアが遺跡内に！」

部屋の外にいる嚮団員に呼びかけると、ローブを纏う彼らは室内に入って来て常に身に着けている通信機からの情報をV・V・に伝える。

「機体はフロートユニットを付けたサザーランドやヴィンセントとのことです」

「じゃあ、ブリタニア軍ってこと？ そんな早すぎる——」

直ぐにルルーシュの手の者と予測したV・V・はあまりの早さに

瞠目して、それだけ早く動ける夕ネに思い当たった。

「そうか、ギアスを……っ！ 眼帯を外したか、右目にも現れたのか知らないけど、やってくれるじゃないか」

ルルーシユの絶対遵守のギアスの汎用性を知るだけに、V・Vはギアスを使える理由よりも打開策を直ぐに模索する。

「C・Cを台ごと黄昏の間に連れて行く。君達、早く動かすんだ」「分かりました」

嚮団員はどんなに理不尽であろうとも嚮主の命令に逆らわない。

断続的に振動する床に難儀しながらC・Cの下へやってきた嚮団員達の内、一人が一瞬躊躇うように伸ばした手を止める。

「……………申し訳ありません、C・C様」

ローブで目元以外が隠れているので面相は分からないが、声からしてそこそこの年齢の嚮団員にC・Cは頬に入っていた力を緩めた。「いいさ、気にするな」

前嚮主であるC・Cのことを知っているということは殊更に嚮主に逆らうことはしないと知っているので、助けてくれると期待などしない。

「ねえ、C・C」

研究データを移すことも諦めたV・Vは、元々C・Cを台ごと運ぶ為に切り離しが出来るようになっていたのを外そうとしている嚮団員達を尻目に話しかけた。

「ずっと聞きたかったんだけど、どうして君は僕達の下から離れたんだい？ シャルルは君の望みを叶えてくれたのに」

固定具が外れ、人力で台ごと抱え上げられたC・Cはガクンと頭を揺らしながら考える。

「お前がマリアンヌを殺したからだよ」

「……………へえ、どこで分かったんだい？」

「分かったんじゃない。聞いたんだよ」

「誰に？」

「殺されたマリアンヌに」

黄昏の間に向かって動いていた嚮団員が足を止めたのは、V・V。

がマリアンヌを殺したとC・C・が言った時か、V・V・が否定しなかった時か、それとも殺された本人に犯人を聞いたというC・C・の言葉が放たれた時か。

「ほら、足が止まっているよ」

自分達は聞いてはならないことを知ってしまったと、嚮団員達は自分達の末路を想像しながらも、感情の感じられないV・V・の言葉に追い立てられるように進み出す。

自ら地獄への階段を昇って行くように、彼らの足は重い。

「まさかC・C・はCの世界にいる死者と話が出来るっていうのかい？ 知らなかったね。そんなことが出来るなら教えてほしかった」

「マリアンヌの体は確かに死んださ。だが、その精神はどうかかな？」

明らかに信じていない様子のV・V・をC・C・は哀れに思った。

彼は想像だにしていなかっただろう、自らの行いと嘘を弟であるシャルルが知っていることを。

「私と契約してもギアスは発現しなかったが、肉体が死亡したときに他者の心を渡るギアスが目覚めて居合せた行儀見習いに意識を転送していたんだ」

「馬鹿な、あの場には誰もいなかった」

「隅々まで確認したか？」

していないし、偽のテロリストがアリエス宮に銃弾を撃ち込む手筈になっていたからV・V・は直ぐに立ち去っている。

「ありえない。マリアンヌの意識が生きていて、僕が肉体を殺したというならシャルルはどうして責めないんだ」

マリアンヌの死を他人事としてシャルルに話していた。

二人が最も忌み嫌っていた嘘をついたV・V・をシャルルが許すはずがない。例えばマリアンヌの意識が生きていたとしてもだ。

「お前のコードが必要だったからだよ。私がいなくなった後に二つのコードがなければ確実性がないと分かった時、仮にV・V・を閉じ込めたとしても反抗的になってラグナレクの接続の時に変なことをされては何の意味もない」

これから死す者が生きている者を呪う言葉。

「マリアンヌの肉体は保存されているのは何故だ？ 意識があるのだから戻れる可能性があるからだ」

時間稼ぎにもならない会話を続けているのは単なる嫌がらせだった。

「偽の目撃者に仕立て上げられたナナリーが都合良く目が見えなくなったのは何故だ？ シャルルがギアスを使って記憶を操作したからだ」

後はV・V・の中で勝手に事実が繋がっていく。

「あの二人の息子であるルルーシュと私が契約したのは本当に偶然か？ そんな都合の良い偶然などあるものか。計画したのはマリアンヌで、私達は取引した」

事実かどうかなど、今この場でC・C・は証明できない。

「ありえない！ そんな非効率的なことなんて」

「ラグナレク計画はまだ途中だった。そして私は非協力的だったが取引に応じる余地があった。効率に拘る必要なんてなかったんだよ」

本当にありえないと断じるには、C・C・の理屈にV・V・は半ばまで納得してしまっていた。

どうしてマリアンヌの遺体を保存しているのか。その疑問をずっと抱え続けたV・V・に否定できる論拠はない。

「人は仮面を使い分ける。お前達はその嘘を嫌って、嘘を失くそうとした。でも、そんなお前達の間にも嘘があった」

どれだけC・C・の言葉を否定しようとも、V・V・がマリアンヌを殺したのは事実だった。そしてシャルルに嘘をついた事実もまた覆しようがない。

「どうしてお前達から離れたのかと聞いたな、V・V・。答えは簡単だよ。気づいてしまったからだ」

「気づいた？ 何を気づいたって言うんだい」

自分の矛盾に気付かないV・V・がC・C・は哀れに思えてならない。

「他人の嘘を認めないくせに、自分は平気で嘘をつく。お前達は自分が好きだけなんだよ」

子供達が大切だと言いながら死んでも構わない扱いをするシャルルとマリアンヌと同じように、V・Vも自分が好きなだけだとC・Cは断言した。

「……………不愉快だよ」

「凶星を突かれてか？」

「……………」

台に固定されているC・Cには流れていく天井しか見れないが、きつと今のV・Vが表情を歪めているのは言葉を返そうとしないことから予想がついた。

「たつた四人でも、こんなに食い違う。おこがましいことだったんよ、最初から全てが」

「関係ないね」

だとしても、もう止まることの出来ないV・Vに選択肢は最初から残されていない。

「嘘を失くすんだ。それが僕達兄弟の願いなんだから」

黄昏の間に繋がる地下の最下層に辿り着き、一直線に伸びる道へと続く両開きの扉をC・Cを抱えていて開けられない嚮団員の代わりに開けたV・Vは過去ばかりを見て足を進める。

「シャルルもきつと分かってくれる。あの姦婦を殺したのは正しかったんだって」

進む。過去の約束にしがみ続けるしか時に残されたV・Vの頭にはなかった。

例え嘘を見抜かれていたとしてもV・Vに止まるという選択肢はない。V・Vの人生は幼き頃に双子の弟と交わした約束を果たす為だけにあったのだから。

## STAGE 14 憎しみの連鎖

ギアス嚮団本部に向けて出立する前に負傷したジェレミア・ゴットバルトの下ヘルルーシュが訪れたのは、彼に辛うじて残っていたけなしの良心だったのか。

「……………ジェレミア、俺は行く」

「お待ちください、私も」

ベッドに横たわるジェレミアに静かに告げると、彼は慌てて傷だらけの体を押し上げて起き上がりうとして果たせない。

「その体では動けないだろう」

V・V・が駆るナイトメアの攻撃を受けて負傷・損傷したジェレミアの体ではギアス嚮団殲滅作戦には参加できない。

「あの時、私がV・V・を止められていれば」

碌に体を起こすことも出来なかったジェレミアにとってギアス嚮団は良い場所ではない。寧ろ自身を勝手に改造した忌むべき場所だ。だが、それでも主君と共に在る為に向かう覚悟は疾うに出来ていた。にも関わらず、大事な時に共が出来ないのは騎士の名折れである。

「しかし、ギアス嚮団に攻撃を仕掛けるとなればアーニャ……………マリアンヌ様にはなんと?」

「言う必要などない。アイツにはギアスをかけて既に俺の支配下に置いている」

それを聞いたジェレミアはまだ無事な肌を粟立たせた。

恐怖ではない。今までマリアンヌが表に出て来ても頑なに会話一つしようとしなかったルルーシュが今このタイミングでギアスを使った理由を、その振り切れてしまった姿を止めなければならぬと忠義の騎士は直感した。

「お前の所為ではない。後のことは俺に任せておけ」

「いいえ、任せておけません」

例えこの体がどうなろうとも今のルルーシュを向かわせるわけに

はいかないと、ジェレミアは確信していた。

「ルルーシユ様、憎しみで戦つても何も晴れはしません」

「ジェレミア、俺は」

「仕事であるならば、ルルーシユ様は俺とは言いません！」

短くとも最も苦しい時に共にいたジェレミアは知っていた。ルルーシユが仕事に徹するときは『私』という一人称を使い、『俺』と口にするときは個人的事情を優先した時であることを。

「事情は既に聞いています」

まさかシユナイゼルが半ばシャルルを裏切るようなことをするとは思ひもしなかったが、その理由がルルーシユの為であると言うのなら傷つけられればジェレミアも同じ怒りを抱く。

「その上で申し上げます、ルルーシユ様」

あの時、自身の怒りを優先させてルルーシユの友の命を奪う時間を作ってしまったことをジェレミアはずっと悔いていた。

怒りや憎しみは、人に判断を誤らせると知っていたから言わざるをえなかった。

「何が大切かを忘れないで下さい。でなければ、私と同じように間違えることになります」

今まで唯々諾々と従つて来たジェレミアの必死な言葉は深く深くルルーシユの心に突き刺さった。



ルルーシユの作戦は簡潔にして単純だった。悠長に準備をして浮遊航空艦でゆつくりと向かっていたらV・V・に逃げられてしまう。速度を優先したルルーシユが立てた作戦とは、フロートユニットを搭載しているナイトメアに予備のエナジーを持たせて直接向かうという無謀なものだった。

特定していたギアス嚮団の場所までギリギリで辿り着けるとルルーシユが弾き出した計算は示していた。

辿り着いてエナジーが切れて戦えなくても別に構わない。ルルーシユの目的は嚮団を混乱に陥れ、その隙に深部に侵入することだから。

『ようやく見つけたぞ、V・V・！』

ランドスピナーの音と共にスピーカーを通して放たれた声が聞こえて、後少して表面に幾何学模様が描かれた扉を前にしてV・V・達が通って来た扉が外から破壊される。

「っ!？」

遂に追っ手に追いつかれたV・V・は表情を強張らせた。

「その声は、ルルーシユか!」

現れたヴィンセント・ウォードに乗っているのがルルーシユだと気づき、咄嗟に懐に入れた銃を取り出しかけたがナイトメア相手に生身で闘ったところではたかが知れていた。

本来、ナイトメアは市街地といった場所だからこそ真価を發揮する。しかし、人間相手に真価を發揮する必要などなく、ランドスピナーが高らかに地を嘯む音を発して強襲する。

『C・C・を返してもらおう!』

武装を使う必要すらない。ヴィンセント・ウォードが徒手で逃げる暇もないギアス嚮団員を薙ぎ払い、C・C・を奪還するのに時間はかからなかった。

『死ななかりうが痛みはあるんだろ!』

簡単に嚮団員を排除してC・C・を取り返し安全な場所に置き、ルルーシユは今までの恨みを晴らすべくヴィンセント・ウォードにランドタイプのメーカーバイブレーションソードを持たせ、黄昏の間へと



逃げようとしているV・Vの下へと向かう。

V・Vが駆け込むよりも確実にヴァインセント・ウオードの方が早い。

後少しでV・Vの体をメーザーバイブレーションソードが貫くといったところで、突如としてヴァインセント・ウオードが止まった。

「なっ!?!」

この地に来るために先行部隊にルルーシユはいた。速度を重視し過ぎたことがここで裏目に出たのである。

「エナジー切れ!? くそっ、あまりに強行軍過ぎたか」

こうなればヴァインセント・ウオードから出て直接V・Vを倒すのみ。

銃を持ってコクピットから出たルルーシユは迂闊だった。

急に止まってナイトメアから降りるなど、エナジーが切れたと標榜するようなもので、指揮官としては経験を積んでも一兵卒としての経験がないルルーシユはV・V憎しで硬直化した考えが迂闊な行動を取らせてしまった。

「僕を見た目通りと侮ったね」

幼い体だからこそ、いざという時の備えとして一通りの軍事教練を受けたV・Vの銃の狙いは正確だった。

ルルーシユ本人としては隠れているつもりでも、微かに射線が通った右肩に命中する。

「ぐっ!?!」

右肩を撃たれて銃を取り落としながらヴァインセント・ウオードから落ちるルルーシユ。

「ルルーシユっ!?!」

C・Cが落ちたルルーシユに向かって走るV・Vの姿を見ても大きな釘で四肢を物理的に固定されては何も出来ない。

「君のことは嫌いではなかったよ、ルルーシユ。なんといつても子供達の中で一番シャルルに似ているからね」

「があっ!?!」

V・Vは言いながら地面に落ちたのも合わせた痛み呻く

ルーシユの撃たれた右肩を踏みつける。

「久しぶりにヒヤツとしたよ。でも、僕の勝ちだ。こんな目に遭うのはマリアンヌの子供の癖に調子に乗るからだ」

喉の奥で呻くルーシユの姿を見ることで、V・V・は恐怖に怯えた自分を忘れるようにとする。

銃撃された肩を踏みつけられた激痛の中でV・V・を見上げたルーシユは、憎しみの中でもジェレミアが引き止めた冷静さが本質を見透かした。

「……………くっ、はっ、ははははははは！ そのマリアンヌを殺し損ねた癖に良くも粹がるな！」

「黙れ!!」

「グウツ!?!」

より強く右肩を踏みつけて痛みに悶えさせてもルーシユの口は止まらない。

「マリアンヌは、生きています……………アーニャ・アールストレイムの中で。シャルルもお前の嘘に気付いている。V・V・、お前はただ利用されているだけだ！」

「黙れ！ 黙れ！ この呪われた皇子が！」

「凶星か？ どうだ、嘘を消すと言う口で今まで実の弟に嘘をつかれた気分は!!」

「黙れええええええええええええ!!!!」

C・C・にも刺激されたV・V・の弱い心の部分を怒号と共に言葉の刃を突き刺したルーシユにV・V・は銃を向ける。

「止めろ、V・V・!!」

C・C・が止めようと叫ぶも、無情にもパンパンパンと銃撃音が鳴り響く。

四発の弾丸全てがルーシユを襲い、その身体が何度か跳ねた。

「V・V・——っ!!」

パタリと一度は跳ね上がったルーシユの腕が再び床に落ち、力を失ったのを見たC・C・は叫びながら釘に打ち込まれた四肢に力を入れた。

「お前は……っ!」

ズブズブと釘の頭部部分が皮膚を抉る痛みよりもV・Vへの感情の昂りが勝っていた。

「殺してやるー! 絶対にお前を殺してやるぞ!」

腹部を血に染めたルルーシユの右肩から足を離して無駄な努力をするC・C。に哀れみの目を向けるV・V。

「馬鹿だね、僕らは不老不死じゃないか………一々、契約者に思い入れをする所為で永遠の生という呪いを渡すことが出来ない。C・C、やっぱり君は魔女を名乗るには甘過ぎたんだ」

コードを持つV・VやC・C。を殺すことなど不可能なのだ、たった一つの方法以外では。

「ルルーシユの死体を隠して、君のコードをシャルルに譲渡させる。そしてラグナレクの接続を果たすんだ」

まだ弾丸が残っている銃を徐々に拘束から抜け出そうとしているC・C。に向け、もう止まれなくなったV・V。は引き金に指をかけた。

「………勝手に、人を、殺すな………」

背後から聞こえて来た微かな声にV・V。の肩がビクンと跳ねる。

ありえなかった。ありえないはずだった。だが、それを言えばあの時のアリエス宮の時もアーニャ・アールストレイムがいるはずがなかった、マリアンヌがギアス能力を発現して精神を生き延びらせることもなかった。

「ぐあっ!?!」

血みどろのまま立ち上がったルルーシユは、後ろからV・V。の首に腕を回して全体重をかけて引きずり倒す。

「この、死に損ないがあっ!!」

「………ああ、俺は………放っておけば、死ぬだろう………」

弱い力を振り解こうとしたV・V。は自身の体の上に乗ったルルーシユの右眼に炯々とギアスの模様が浮かんでいるのを見て固まった。

「だが………お前の、コードさえ………あれば!!」

V・Vの首にかけられた手に力を籠める必要はない。ただ、手を伸ばすことだけに集中していれば、ルルーシユの体重で勝手にV・Vの首は締まる。

「や、止めろおおおおお!!」

ギアスは使い続けられれば、やがて暴走するが強靱な精神力で増大する力を押さえ込み、あくまで自身の意思で制御する術を勝ち取った者は達成人と呼ばれ、逆にコードユーザーからコードを強奪することが可能となる。

ルルーシユは自身の意志でギアスのオン・オフを行っている。つまりは達成人となっていた。

達成人のルルーシユならばV・Vのコードを奪える。

「があ、ぐっ……!?!」

運悪く倒れ込んだ時に銃を取り落としていた。貧弱な子供の体で成長が止まっているV・Vの力では全体重をかけているだけのルルーシユの手を払いのけることも出来なかった。

「あ……っ……」

そしてパタリとV・Vの手が地面に落ち、直後にルルーシユも崩れ落ちた。

どちらも動かない。

ルルーシユがコードを奪えたのか、それとも先に命尽きたのか。

「ルルーシユ!!」

ようやく右手を釘から引き抜いたC・Cは左手を持って力尽くで引つ張り、左手の次は両足も釘から抜く。

「あぐっ!?!」

急いでルルーシユの下へ向かおうとするが、釘から抜いたといつても穴は空いたままで立つことは出来ずに転げ落ちる。

これだけの傷を癒すにはC・Cの再生能力では半日はかかる。そんな時間を待ってはいられないC・Cは膝と肘で遅々とした速度で進む。

「ルルーシユ! ルルーシユ! ルルーシユ!」

まだどちらも動かない。どれだけ呼びかけてもルルーシユは動か

ない。

遠い。走ればあつという間に辿り着ける距離も今は遙かな遠さを感じる。

「——ルルーシユ!!」

それでも呼びかけを続けた声によくやく反応した者がいた。

「……………そんなにながり立てなくても聞こえている」

V・V・に重なり合うようにして倒れていたルルーシユの体がゴロンと横に転がった。

その拍子に、随分と昔の髪の毛の長さに戻って来ていた前髪が流れてルルーシユの額がC・C・の目に入った。

「お前、それ…………」

ギアスの模様が額に描かれているのを見たC・C・は絶句する。

「どうやらコードは奪い取れたようだ。お蔭で死に損なつた」

ハアツ、と大きく息をしたルルーシユの表情が歪む。

「くそつ、こんなに痛いのに死ねないなんて」

C・C・が散々味わつて来た死にたくなるほどの痛みにもルルーシユは泣きごとを漏らしていた。

「この、馬鹿っ!」

「馬鹿とはなんだ、馬鹿とは」

「馬鹿でなければド阿呆だ! 私がどんな思いで」

「……………すまん、C・C・のコードを受け継いでやれなかった」

違う違う違う。そんなつもりではない。全くないわけではないが、

C・C・の胸の内で荒れ狂う感情はそんなことが理由ではない。

「ここに来た時に私になんか構わずにV・V・ごと押し潰していれば、そんな目に遭わないかったのに」

「考えなかつたな、そんなことは」

だって、と少し幼い言葉遣いでルルーシユは続ける。

「もう、大事な者を失いたくなかつたんだ」

息を呑んだC・C・はルルーシユまで後少しの距離で地面に頭を

押し付けた。

「私は嘘をついていたんだぞ」

「知ってる」

「ルルーシュを利用していたんだ」

「知ってる」

「全部、知っていたのに何も言わなかった」

「知ってる」

「永遠の地獄を押し付けようとした」

「知っている。もういいか？ 血が流れ過ぎたのか、意識が途切れそうなんだが」

「ダメだ。寝るな、死ぬぞ」

「俺達は不老不死だろうが」

ここに他人がいれば呆れるほどの会話の内容だったが、本人達は至って本気で話していた。

「もう寝かせてくれ」

「何を言っている。まだ話すことが山ほどあるぞ」

「どうせ永遠の時間があるんだ。幾らでも話すことは出来るだろう」

その言葉が決定的だった。

這って辿り着いたC・C. は隠すようにルルーシュの胸に顔を埋めた。

「バカ……」

「痛いぞ」

撃たれた場所に近いところに顔を置かれた所為で痛みが半端ではない。

「服が濡れてて気持ち悪い」

決して寒さからではない理由で震えながら言うC・C. にルルーシュは文句を言う気はなかった。

宥めるようにC・C. の頭に手をやろうとしたルルーシュの耳に、ギギギと何かが動く音が入って来た。

「兄さん……」

億劫にそちらを見たルルーシュは黄昏の間の扉を向こう側から開いたシャルル・ジ・ブリタニアは目を見開いて、ルルーシュの近くでピクリとも動かないV・V. を見ていた。

「ルルーシユ、貴様のその額は兄さんの」

そしてルルーシユの額に浮かんでいるギアスの模様が示す意味を正確に理解し、シャルルはギリツと歯を食い縛った。

「遅かったな、シャルル。奴のコードは俺が奪ったぞ」

笑みと共に放たれた事実によりシャルルがあまりの怒りに思考が停止する。

「ああ、そうそう。マリアンヌはギアスで俺の支配下に入った。どうだ、全てを失う気分は？」

「ルルーシユウウウウウウウウウウウ!!」

「今はコードを奪われたら堪らないな」

シャルルが怨嗟の叫びを上げて走って向かって来るのを見たルルーシユは、流体サクラナイトが仕込まれている眼帯に手を伸ばす。

「すまん、C・C。」

了承を得る暇も無いのでC・Cに謝りながら、正式な手順を経なければ簡単に爆発する眼帯を力任せに引き千切った。

「っ!!」

走り出したシャルルがルルーシユの行為を見て足を止めた直後、眼帯が視界を染め上げるほどの光を発する。

そして大きな爆発が起こり、ただでさえ複数のナイトメアが突入したことで脆くなっていた遺跡の天井や床が次々と崩れて行った。

「陛下っ!!」

つい先程、黄昏の間を通過して中華連邦にあるギアス嚮団の本部に向かったはずのシャルルが慌てた様子で戻って来たことに、待機していたビスマルク・ヴァルトシユタインは目を剥いて駆け寄る。

「ぐっ」

「ご無事ですか、陛下!」

黄昏の間から転がり出るようにやってきたシャルルの体を受け止めたビスマルクは固まった。

「ルルーシユ……………ルルーシユッ!!」

何があつたか分からないが、傷だらけの体のシャルルは愛していた息子に向けてはいけないうるさの声を漏らし続ける。

黄昏の間で何があつたのかと顔を上げたビスマルクは再び目を剥いた。

「黄昏の間が、ない？」

たった今、シャルルが通つたはずの黄昏の間は無機質なコンクリートの壁となつてその姿を消していた。

「ルルーシュが眼帯の流体サクラダイトを爆発させた所為で向こう側の部屋が崩壊し、その衝撃が黄昏の間を破壊したのだ……」

同じ物を見たシャルルはゆっくりと立ち上がり、長年の夢を根本から崩された衝撃を真正面から受け止めて全身を震わせた。

激怒と憎悪、決して今までどれだけブリタニアが被害を被ろうともルルーシュへと向けたことの無かつた感情が次から次へと湧いて来る。

「ビスマルク、ルルーシュが兄さんを殺した」

感情を制御しきれないまま声に乗せてビスマルクの名を呼ぶと、帝国最強の男は体を固くする。

「し、しかし、V・V様にはコードが」

「既に達成人に成つていたのでだろう。奴の額にギアスの模様が浮かんでいた」

信じたくはないと顔に書いてあるビスマルクから離れて立ち上がったシャルルの目から涙が流れる。その目に炯々とギアスの輝きを強く灯しながら。

「奴はリアンヌにギアスをかけて支配下に置いたとも言つていた」

ルルーシュは何一つ嘘をつかなかつた。シャルルが望んだ嘘の無い世界そのままに、何一つ嘘をつかなかつた。

「……………ビスマルク」

「はっ」

嘘をつく理由などないルルーシュの言うことを信じたシャルルにビスマルクは跪き、こうなつてしまった運命を呪わざるをえない。

「僕はルルーシュの全てを壊す」



もしも、あのアツシユフオード学園でルルーシユをV・Vが出て来る前に連れ出させていけばと思わずにはいられなかった。

「あ奴がエリアーで作り上げた箱庭を壊せ」

もしも、ルルーシユがナナリーの手術を推し進めることなく、隠れながらギアスを成長させ続けていれば。

「今までルルーシユが出会って来た全ての者を殺せ」

もしも、V・Vがマリアンヌを襲うことなく、ルルーシユ達が今もブリタニアにいれば。

「まず、手始めに」

もしも、もしも、もしも……………。

仮定だけがビスマルクの裡に次々に降り積もって行つては、やがて意味を失くして消えて行く。

どこから間違えたのか、何を誤ったのか、それすらも分からないほどに無念の気持ちで胸が一杯になって苦しみすら覚えていたビスマルクの耳に、あまりにも非情な命令が下される。

「ナナリーの足を切り落とせ。その後、ルルーシユがやったという記憶を植え付ける」

シャルルの命令にビスマルクはYESとしか答える口を持っていない。

ルルーシユのようにジェレミアという止める人がいないシャルルの狂気はやがて世界を呑み込んでいき、V・Vが発端となった憎しみは止まることなく連鎖していく。

公式において第1皇子ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアは、帝国第2皇子で帝国宰相であるシュナイゼル・エル・ブリタニアを襲った犯人がいると思われる組織の拠点に自ら潜入し、そのまま帰って来ることはなかった

その最後の記録は、作戦<sup>M</sup>行動中<sup>I</sup>行方<sup>A</sup>不明で終わっている。

## STAGE 15 再誕

中華連邦で帝国宰相シュナイゼル・エル・ブリタニアが襲われてから一ヶ月後、突如としてブリタニア皇帝シャルル・ジ・ブリタニアが全世界に向けて放送を行った。

『人は、平等ではない』

ユーロ・ブリタニアによつて併呑されたE・U・で、未だ慌ただしい空気の流れる中華連邦で、襲撃犯の一部と見られる少年が見つかったことで疑いが晴れて帰国したエリアーで、誰もがその放送を見ていた。

『ブリタニアは未だ世界をその掌中に収めておらん。そして同じブリタニアの中においても、考えが異なる者がおる』

確かにブリタニアは世界一の強大国である疑いを持つ者はいない。『人は争い、競い合い、そこに進歩が生まれる。まだブリタニアは前へ進み続ける余地がある』

世界の殆どを版図に収めつつも、反抗の意を持つユーロ・ブリタニアやルルーシュの行方不明によつて婚約の話が流れそうな中華連邦。その二つが同盟してブリタニアに反逆すれば、生き残るのは容易ではないだろう。

『ブリタニアは世界を手に入れる！』

画面の中でシャルルが右手を大きく掲げる。

『戦うのだ！ 全てを蹂躪し、奪い、獲得し、支配する。その果てに我がブリタニアは輝かしい未来を手にするのだ!!』

ブリタニアの多くの将兵が見守る巨大なホールの中でシャルルの演説は続く。その心の内に未だ消えぬ復讐心を燃え上がらせて。

『E・U・を、中華連邦を、そしてブリタニアに逆らうエリアーを呑み込め!!』

名指しされた組織は厳しい面持ちでテレビを睨み付ける。

交渉の余地など無く、抗わなければ蹂躪されるだけ。消極策を取る

者を諫め、急ぎ戦争の準備を始めていく。

『オール・ハイル・ブリタニア!!!』

エリアーの政庁で父と戦うことに一度睨を伏せたユーフェミア・リ・ブリタニアもまたその名を切る決意をした。

最もシャルルの怒りを向けられているエリアーの総督であるユーフェミアは既に繋がりがあった中華連邦や手を伸ばしていたE・U・と同盟を結ぶことに成功した。

しかし、そちらのことが表に出ても、まず戦闘以外のところで話題を振りまいていた。

『私、ユーフェミア・リ・ブリタニアはこの度、我が騎士である枢木スザクと結婚し、ブリタニアの名を捨てます』

左手の薬指に付けられた指輪を見せつつ、ユーフェミアは厳しい面持ちで画面越しにいるであろう誰かに宣言する。

『そしてエリアーは独立し、今この瞬間より日本の名を取り戻すことを宣言します！　しかし、それは嘗ての日本の復活を意味しない。私達がこれから作る新しい日本は、あらゆる人種、歴史、主義を受け入れる広さで強者が弱者を虐げない矜持をもつ国家、その名は合衆国日本！』

ルルーシュが残していた合衆国構想を持ち出したC・C・より伝えられたこれらをユーフェミアは高らかに謳った。

『差別を推奨し、弱者を貶めるブリタニアを私は認めない。その名を捨て、ただ一人の人間としてシャルル・ジ・ブリタニアを糾弾します』  
ブリタニアに明確に反逆すると宣言したユーフェミアの放送に、追従する者が現れた。同じく名指しされたE・U・と中華連邦である。

『我ら中華連邦は日本と志を同じくする者』

何度も練習したようだが、それでもまだまだどたどしさを残しながら

も真摯な目が放送を見る者達を射抜く。

『たつた今より中華連邦は合衆国中華となり、日本と同盟を結ぶことをここに宣言します』

多少はどもりながらも言い切った中華連邦の元首である天子の後に映像が移り変わり、金髪の少女——レイラ・ブライスガウが画面に現れた。

『E・U・は自由と平等を貴びます。ブリタニアのやり方を容認することなど到底できません』

衆愚政治化が進んでいたE・U・はユーロ・ブリタニアに併？されたことでトップが事実上入れ替わり、半ば元首に近い立場にいるレイラは御輿であることを自覚しながらも持ち前の気丈さを失わない。

『合衆国中華と同じく、私達も合衆国ユーロとなりブリタニアの横暴を止める為に立ち上がらなければならないのです！』

一人の人間として、戦術指揮官としても、抗うことを決めて立ち上がったレイラにE・U・もまた覚悟を決めた。

『我ら合衆国はブリタニアの進行を阻む為、ここに共に戦うことを枢木ユーフェミアの名において宣言します!!』

最初の標的とされた日本が崩れれば、次は中華連邦、E・U・と呑み込まれるのは想像に難くない。

戦力が多い内にブリタニアと戦う為、三者は同盟を組んで太平洋上でナイトオブブラウズを中心とした軍と相對する。

「油断せずに倒す。ただそれだけだ」

「さあつて、一丁やるかね」

ブリタニアの技術も使われているE・U・軍と相對するのは、帝国最強と肩を並べるほどの轟傑であるナイトオブフォーのドロテア・エルンスト、エリア24に派遣されていたナイトオブナインのノネット・エニグラムの二人。

早々にブリタニアと決別することを選んだユーロ・ブリタニア改め、一つとなったE・U・軍で二人と相對するのは再会した兄弟であつた。

「俺に付いて来れるか、アキト」

「兄さんこそ俺に離されないように気を付けろ」

対ナイトオブブラウンスを想定して強化改修されたヴェルキンゲトリクスとアレクサンダの二機に乗り込むのはシン・ヒユウガ・シャイングと日向アキト。

間違いなく三極の中で最も数が多く激しい戦闘を繰り広げるE・U・軍。別の場所で繰り広げられる中華連邦軍が戦うのは、ナイトオブテンのルキアーン・ブラッドリーとナイトオブトウエルブのモニカ・クルシエフスキーの二人。

「さあ、お前の大事なものを飛び散らせろおっ!!」

「天子様をやらせるものか!!」

ルキアーンのパーシヴァルと黎星刻の神虎が激突する近くで、フローレンスに乗るモニカは因縁の相手と戦っていた。

「この機体はあの時の……っ?!」

「カンボジアで戦った機体の改修機か!」

テロリスト派遣組織ピースマークから依頼を受けて動いていたオルフェウス・ジヴオンは、以前にカンボジアで倒した機体の強化改修機であろうともエリアー1から意図的に流出された技術で強化改修された業火白炎で真っ向からねじ伏せんとする。

そして合衆国日本軍と相対するのは帝国最強のナイトオブワンであるビスマルク・ヴァルトシュタインとナイトオブスリーのジノ・ヴァインベルグであり、攻勢は苛烈を極めた。

「また日本を壊されるものか!」

構築された日本の絶対防衛線まで絶対に辿り着かせんと、シュタツトフェルトから紅月へと戻ったカレンが操る紅蓮聖天八極式が襲来してくるブリタニアのナイトメアをシャットアウトする。

「くっ、このナイトメアの性能にトリスタンでは歯が立たない」

「引つ込め、ブリキ野郎!!」

一向に戦線を突破できないブリタニアが乾坤一擲の目的で投入した、帝国最強の12人のみ与えられるナイトオブブラウンスの立場にいるジノですらカレンには対抗すらも出来ない。

「私が弱者だと言うのか……っ!」

生粋の貴族にして、最強の称号に上り詰めたジノはその翼を叩き折られて無様に退却することしか出来ない。その間に多くの将兵がジノという希望を残す為に踏みにじられていると分かっている。

「交代だ、カレン」

「私はまだやれるわよ、スザク！」

「だとしても、まだ戦いは始まったばかりだ。無理をするとろじやないよ」

「はいはい、相変わらずの良い子ちゃんね、アンタは」

紛うことなき日本を守るための戦いに奮起して、半ば戦場の荒んだ空気に酔ってしまっていたカレンにスザクは苦笑しつつ、前進したランスロット・アルビオンと入れ替わるように紅蓮聖天八極式を見送る。

「さて、僕の相手は」

カレンを見送ったスザクが前を見ると鬼神もかくやの紅蓮聖天八極式が下がったことで、この隙を狙って攻め込まんとブリタニアは大攻勢に出た。

「侮られてるか。でも、僕だってカレンには負けてないよ」

エナジーウィングを光らせて戦場の端から端へと空を疾走するランスロット・アルビオンも鬼神の如き強さで、その存在がブリタニアに強く刻み込まれる。

落とされているヴィンセントやガレスは、ブリタニアの技術者であるロイド・アスプルンドが作成したランスロットを元に設計され、その両機自体もロイドが設計者である。そのパイロットも含めて、下位互換機でしかないブリタニア勢は手も足も出ない。

世界で最も発展している技術力を有するのは日本であると、むぎむぎと見せつけられる形となった。

「ブリタニアの質も落ちたものね」

成す術も無く落とされるブリタニア勢の不甲斐なさに、ナイトオブラウンズでありながら裏切って日本に付いたと目されるアーニャ・オールストレイム——ルルーシユのギアスによって支配されたマリアンヌは、ロイドとラクシャータによって魔改造さ

れたモルドレット・バーサーカーで打ち漏らしの始末を行っていた。「まあ、この技術力の差じゃしょうがないか」

以前とは段違いに動けるようになったとはいえ、エナジーウイングといった第九世代にはまだ遠く及ばないモルドレットを操りながら息を漏らす。

マリアンヌは運良くランスロット・アルビオンに落とされずに抜けることが出来たヴェインセント・ウォードが向けて来たランスタイプのレーザーバイブレーションソードを簡単に躲し、軽量化・小型化されたシユタルクハドロロンで撃ち抜く。

「次はあなた自身が出て来るかしら、ビスマルク」

それはそれで面白いと思いつながら、一度エナジーの補給をする為に母艦であるアヴァロンに戻るのだった。

「あまり戦線はよくないようだな」

対日本の母艦であるログレス級浮遊航空艦で戦闘を見ていたビスマルクは鎧袖一触されている状況に、深い懊悩を顰めた表情で表現する。

「問題はあの三機のナイトメアか」

ランスロット・アルビオン、紅蓮聖天八極式、そして大分落ちるがモルドレットの改修機が日本の絶対防衛線に近づけない原因である。

「ギヤラハッドと同じく第九世代のナイトメアが二機と、あの動きはマリアンヌ様の物。並々ならぬ物があるが」

それでも帝国最強の看板を背負っている以上、ビスマルクに敗北することは許されない。

「どうなさいますか、ビスマルク嚮」

「一度戦線を下げる。何も問題はない。勝つのは我がブリタニア軍なのだからな」

本作戦の指揮官から尋ねられたビスマルクはニヤリと笑うのだった。



日没前に一度引いたブリタニア軍は、翌日の夜明けと同時に再侵攻を開始した。

「来るのね、ビスマルク」

ブリタニア軍の先頭に立つ黒と薄紫で塗装されたナイトメアに搭乗しているのがビスマルクであると察したマリアンヌは肌を粟立たせた。

「鮮烈なる初陣を飾るとしよう、ギャラハッド!!」

ランスロット・アルビオンと紅蓮聖天八極式のデータを元に作られた第九世代ナイトメアであるギャラハッドがエナジーウイングを輝かせながら単機で特攻を仕掛ける。

「ビスマルク!」

「マリアンヌ様と言えども!」

下手な雑兵では足止めにもならないと判断して仕掛けてきたのがマリアンヌだと分かっているにも、皇帝の意を受けて動く騎士でしかないビスマルクに迷いや躊躇はない。

「っ!」

最速で放たれたシュタルクハドロンを人間の如き動きで腕を跳ね上げて彼方を撃たせ、単なる拳を放つもマリアンヌはモルドレッド・バーサーカーを操作して衝撃を逃がす。

しかし、ただでさえ機体性能の差が大きい第九世代の壁を前に、技量で上回っていても及ばないのだと痛感させられる。

「逃げていては!」

「やられるというのっ!? この私が!!」

ナイトオブ라운ズではどれだけ良くても三手持ち堪えるのが限界の中で、マリアンヌは五手持ち堪えた。それでも機体性能の前に敗れ去るしかない。

「ナイトオブワン!」

「アイツさえ倒せば!」

そこへギャラハッドと同種のエナジーウイングを光らせたランス

ロット・アルビオンと紅蓮聖天八極式が強襲する。

「笑止！」

自らマリアンヌがビスマルクの実力を計る当て馬となったことを知らずとも、誰にも負ける気など無いから周りも警戒していた彼にとって奇襲は奇襲に非ず。

「小癩な手がこの帝国最強に通用などするものか!!」

ナイトオブブラウンズが操る第八世代のナイトメアすら容易に両断するランスロット・アルビオンのメーザーバイブレーションソードと紅蓮聖天八極式の呂号乙型特斬刀を素手で受け止めたギャラハッドにパイロットのスザクとカレンが目を見張る。

「未熟未熟未熟！」

必殺の武器が受け止められたことに動揺した二人の隙を見逃すはずもなく、両機をぶつけて放り投げたギャラハッドが背中に背負っていた大剣を引き抜く。

「これぞエクスカリバー、皇帝陛下自ら名付けられた剛剣なり」

「武器なんてなんでも一緒でしようか！」

武器は武器、機体は機体として、愛着はあれども名前に拘りのないカレンが紅蓮聖天八極式を猛らせる。

「全てを薙ぎ払え、エクスカリバー!!」

右肩に置いたエクスカリバーに不気味な光が奔り、物凄い速さで迫っていた紅蓮聖天八極式に向かって振り下ろされた。

「っ!?!」

エクスカリバーが振り下ろされる一瞬前に全身に奔った悪寒にカレンは紅蓮聖天八極式を急上昇させた。

その直後、振り下ろされたエクスカリバーから極大に伸びたハドロンの光が日本・中華連邦・E・Uの混成軍の一部を文字通り薙ぎ払った。

「そんなんっ!?!」

「ふんっ！」

カレンと同じく反応したスザクが見下ろした先では多数の艦船やナイトメアが、今度は逆側から振るわれたもう一振りによって更に被

害を酷くしていく。

「ナイトオブワンは私達が抑えるしかない！」

「分かっている！ 行くよ、カレン！」

「私に命令するな！ 私に命令して良いのは」

ゼロだけだ、と最後の言葉は超速度で激突したギヤラハッドに跳ね飛ばされたカレンの口から出ることはなかった。

「カレン!？」

「余所見しない！」

一瞬で立て直している間にギヤラハッドが、カレンに気を取られたランスロット・アルビオンに接近してエクスカリバーにハドロンプレードを纏って振り下ろして来ていた。

ランスロット・アルビオンがブレイズルミナスを展開して防ごうとする。

「一瞬も持たないなんて——」

ガラスが割れるような音と共にブレイズルミナスが突破されたところで、横合いからエクスカリバーに輻射波動を叩きつけたお蔭で僅かに軌道がズレて九死に一生を得た。

「助かった」

ブレイズルミナスが突破された瞬間、今までの人生が走馬灯となつて脳裏を過つたサクはランスロット・アルビオンを後退させながら、あの一瞬で溢れた汗に濡れた全身を震わせた。

「よくぞ耐えた戦士達よ」

ビスマルクに油断はない、慢心はない、焦りはない。

「しかし、お前たち以外はそうではない。所詮は烏合の衆。皇帝陛下のような者がいない貴様達では立て直せない」

一度崩れた軍勢はこの時を狙って攻撃を仕掛けたブリタニア軍を前にして恐慌状態に陥っている。

「ナイトオブワウンズの戦場に敗北はない。だが、ナイトオブワンには苦戦すらも許されぬ」

そしてピアスで閉じて封印してきた左目のギアスを発動し、その力を全開にして襲い掛かるギヤラハッドとブリタニア軍に押し込まれ

て行くランスロット・アルビオンと紅蓮聖天八極式の二機と混成軍。

「ゼロさえいれば……」

特区から志願して暁に乗り込んで戦線に出てきている玉城真一郎は泣き言のように漏らしていた。

「そうだ、奇跡の男ゼロなら」

玉城の泣き言を漏れ聞いた誰かが同調し、やがてその声は混成軍の間で大きくなっていく。

少しでも生に縋りつきたい彼らは浅ましいまでに希望を求めようとしていた。

ここで負ければ碌な抵抗も出来ずに日本が中華連邦がE・U・が蹂躪されて行くことだろう。誇りを奪われ、矜持を失い、人権すらも与えられず、何時か恵みが降ることを期待して、ただ生きることすらも地獄と思える日々が待っていると思えば死に物狂いにもなる。

「だけど、ゼロはいない」

スーパーヴァリスを破壊され、スラツシユハーケンも簡単に切り払われても戦い続けるランスロット・アルビオンのコクピットでスザクは苦渋に奥歯を噛む。

「ゼロはもうどこにもいないのよ」

エクスカリバーの間合いに踏み込むことは死を意味していた。かといって輻射波動砲弾を放ったところで容易く切り払われ、機動力はほぼ互角であつても未来を読むギアスを使うビスマルクは同じ第九世代の紅蓮聖天八極式を足下にも寄せ付けない。

「ゼロなんて最初からいないのよ！」

全ては幻想。一人の男がブリタニアと戦う為に作り上げた虚像に過ぎないと知っているカレンは叫んだ。

虚像は真実の姿を暴かれ、霞の空へと消えた。中華連邦に現れたゼロは偽物で、本物は地の底で眠っている。

『——違うな、間違っているぞ』

だから、そんな声が戦場に響くわけが無かった。

虚像は実像を結ぶことなく、幻想へと帰っていくはずなのに彼は再び世に出て来た、始めたことを終わらせる為に。

『私はここにいます』

戦場に現れた一体の巨大なナイトメアの肩に乗ったその姿は間違  
いなくゼロ。

『ブリタニア皇帝よ、お前は何も変わらなかった。どこまでも傲慢で  
浅ましい男よ』

そのナイトメアこそ、ジュリアス・キングスレイが乗ることを想定  
してランスロット・アルビオンと紅蓮聖天八極式とはまた別の進化を  
遂げたガウエインの発展機。

『強き者が弱き者を虐げ続ける限り、私は抗わねばならない宿命にあ  
る。だから、私は再び戻って来た』

黒と白と赤と、ガウエインの特徴が廃された塗装のナイトメアは手  
に杖を持っていた。まるで魔法使いの如く。

『聞け、ブリタニアの者達よ！』

マーリン、と名付けられたナイトメアの肩で、再びゼロとして表舞  
台に立ったルルーシュは高らかに宣言する。

『我が名はゼロ！ 弱者を虐げる強者の敵だ!!』

## STAGE 16 ナイトメア・オブ・ナナリー

V・Vの襲撃から三週間が経って、ようやく少しは動けるまでに回復したジェレミア・ゴットバルトは痛む体を押しして砂漠を進んでいた。医者に止められたが主君の危機に居ても立っても居られなくなったのだ。

途中までは有り金を叩いて交通網を利用して行けたが、砂漠地帯はそうもいかない。

半身に機械化の処置がされている身で灼熱の砂漠地帯を超えるのは、如何なジェレミアとも言えども容易なことではなかったが彼は見事に乗り越えてみせた。

「これがあのギアス嚮団とはな」

良い記憶など欠片もないギアス教団の本部が瓦礫の山と化していたことにジェレミアは寂寥感を覚える。

「ルルーシユ様……」

このギアス嚮団本部から戻らなかった主君のルルーシユを探しにやってきたジェレミアも、内部の広大さを知るだけに一人での捜索に気が遠くなる。

事前に命令されていた所為で早々に退却したブリタニア軍がいれば大分助かるのにと恨みたくもなる。

「いいや、私はルルーシユ様の第一の騎士。諦めるなどありえない」

僅かとはいえ諦めを抱いてしまった自分を恥じ、頬を叩いて一歩を生み出したジェレミアの足首を地面を突き破って伸びた手が掴んだ。

「ぎょっ!?!」

心構え以前に地面から手が生えて足首を掴むなど想定すらもしていなかったジェレミアの口から奇声が漏れる。

ジェレミアが固まっていると、足首を掴んでいた手の持ち主が地面を突き破って地上へと姿を見せる。

「ああ、死ぬかと思った」

「もう死なんだろうが」

次いで地面を突き破って現れた緑髪の人物は口から砂を吐き出しつつ突っ込みを入れて、三週間もかけて最下層から文字通り這い出して来たことで浴びることが出来る太陽を堪能する。

「そういう気分だということだ。ヴィンセント・ウオードに予備のエンジーファイラーが無かったら何年生き埋めになっていたことか………ん？ 誰かと思ったらジェレミアではないか」

同じく三週間ぶりに浴びる太陽に笑みを浮かべた黒髪の人物は、直ぐ近くでへたり込んでいるジェレミアに気付いて声をかける。

「る、ルルーシユ様？」

「他に誰に見える」

衣服が割とボロボロというか、簡素と言うには些か問題のある服装にジェレミアが震える体で確認すると、当のルルーシユには彼の混乱が理解できない。

「ああ、迎えに来てくれたのか。しかし、お前はベッドから動けぬ身だったのだろう。そうやって動き回れるということは、それほど時間が経ったのか」

「瓦礫の山に押し潰されて何日経ったかも分からなかったからな」

「こんなことなら、嚮団を潰した後は直ぐに戻れなどとカノンに命令すべきではなかった」

「お蔭で何回餓死したことか」

「ああ、不老不死も考え物だ」

当のルルーシユとC・Cは呑気に会話しつつも、一ヶ月近くぶりに浴びる太陽の光が眩し過ぎて目が眩んだようだ。

日陰に移動して休む二人に付き添ったジェレミアは自分が持つて来ていた予備の食料を渡す。

「美味しい。こんな貧相な物がここまで上手く感じるとは、日本が征服された後に潰れた民家から拝借した缶詰以来だ」

「何の缶詰だったんだ？」

「猫缶だ。意外に上手かったぞ」

「……………そうか」

C・Cが八年前の自分に同情して少し多めに食料を渡そうとし

たのをルルーシユは謹んで遠慮した。

「しかし、もう少しルルーシユに体力があれば、もう少し早く抜けれたんだがな」

「仕方ないだろう。それに餓死にも慣れてないんだ。大目に見ろ」

主君に対するC・Cの暴言を諫めるべきかとジェレミアが迷ったが、ルルーシユが不貞腐れたように言って顔を逸らすだけだったので機を逸してしまった。

「それはいいんだが」

体に染み込むような食料と水分に嬉し涙すら浮かべるルルーシユの体をジロジロと見たC・Cは意地悪気に笑う。

「コードがある以上は永遠にモヤシっ子のままだしな」

「はっ!？」

「そんなことにも気が付いてなかったのか」

頭が良いようで実は抜けも多いルルーシユに少し呆れたC・Cは、これは優位に立てるチャンスと思ってわざとらしく大きな仕草で首を左右に振る。

「仕方がないから私が色々と教えてやろう」

先輩風を吹かせるC・Cに、しかしルルーシユは逆らうと後が怖いと思つて「ぐぬぬ」と悔し気に唸る。

「……………それはそれとして、今後のことを考えなければならん」

憂鬱な気分を切り替えて今後のことに思考を巡らせた方が得策と判断したルルーシユは、話をすり替える。

「恐らく死んだことになってるんだだろうが、また表舞台に出るのは問題があるぞ」

「不老不死だというのがネックになるしな。下手すれば魔女狩りだ」

コードを奪ったことでルルーシユの容姿は変化しない。

髪を切ったとしても、コードを継いだ時の長さに戻ったらまた止まるらしい。そんな状態では表舞台に戻っても、やがて変わらない姿に訝しがられる上に排斥される可能性が高い。

「おいおい、考えるとして」

ルルーシユはジェレミアを見る。



「それで俺がいない間に何があった？」  
やがて動揺を収めたジェレミアはこの三週間の間起こったことを話し始めた。



発起人の枢木ユーフェミアはブリタニアの名を捨てたとはいえ、元皇族であつたから中には仲間とすることを厭う者もいた。

中華連邦の天子は幼く、政治を知らなさ過ぎる。

レイラ・ブライスガウは所詮、元ユーロ・ブリタニアの貴族達に担ぎ上げられた御輿に過ぎない。

劣勢に立たされた日本・中華連邦・E・Uの混成軍は対ブリタニアの為に立ったが誰一人として纏め上げられる者はいなかったのだ。混成軍はどこまでいっても寄せ集めの集団でしかない。

その中で突如として現れたゼロは、奇跡の男にして既に終わった男であるというのが世間の評価だった。それでも、本物であるのなら賭けてみようと思えるカリスマがこの男にはあつた。

「戦線を立て直す。三軍は私に指揮を預けろ」

ここに来るまでの間に構築した戦略から、ギャラハッドによって総崩れになった戦線を立て直すための戦術プランを抜粋して三軍の指揮官に送り付ける。

「これはジュリアス・キングスレイ？」

貴族や元E・U軍に完全に信用されていない状況では、窮地に

陥った状況を立て直すための指示を出しても従ってはくれない。そんな忸怩たる中で送られたゼロからのメールには既知の名があつて美しい眉を顰める。

「……………いいでしょう。今はその戦術に乗ってあげます」

メールにはレイラが行おうとしていたものと多少の差異はあれど、殆ど変わらない戦術プランが記されている。細かい差に関してはレイラとルルーシュの好みの違いでしかない。

味方を動かすのにゼロの命令というお題目があるのだから、ゼロの指示に従うことを選んだ。

「あの皇子、生きていたか」

ブリタニア帝国でナイトオブ라운ズを除けば最大の戦闘集団であるグリンド騎士団まで参戦してきた所為で分が悪い中華連邦の指揮官である黎星刻はルキアーノ・ブラッドリーと戦いながら微笑んだ。

「私も目の前の相手だけで手一杯だ。精々利用させてもらおう」

多少の恩のある相手であること、戦闘中なのでパツとしか見れなかった戦術プランに文句の付けどころがなかったので、代理で指揮を取っている周香凜にゼロに従うように通信する。

「ゼロ!? やはり死んではいなかった……」

末尾に添えられたC・Cの名が偽りであろうはずがないと、ユーフェミアは拳を強く握り締めた。

姉や異母兄と違って、元より戦闘における才能など欠片も無いと疑っていなかったユーフェミアは笑みを浮かべて迷うことなく指揮に入ることに決めた。

「日本軍に通達します！ 我らには奇跡が付いています！ 何も恐れることなどありません！」

出来なければ、出来る者に頼る。努力を怠る理由にはならないが、頼ることを迷うだけでも命が消えて行く状況でユーフェミアは己の保身を考えるような人間ではなかった。

「これで戦線は持ち堪えることが出来る」

コックピットに戻ったゼロに扮していたルルーシュは動き始めた

各軍の動きが指揮に従ってくれたことに胸を撫で下ろす。

「後はナイトオブワンを落とせばいいというわけか。しかし、本当に出来るのか?」

マーリンは元となったガウエインと同じく複座型のナイトメアになっっている。

前席に座ってマーリンを動かしているC・C・は帝国最強が操るギヤラハッドを見て本心から言った。

「やらなければならん。俺はセファイロトシステムに専念するから操縦は任せる」

「容易く言ってくれる」

ゼロの仮面を外し、特製のヘッドギアを被るルルーシユに頼まれたC・C・はペロリと緊張で渴いた唇を舐めて潤す。

「あの機動力では一瞬の遅れが致命的になる。誤るなよ、未来予測を」  
「俺を誰だと思っている」

ドルイドシステムを更に発展させたセファイロトシステムは戦闘状況を把握して戦局を導くための情報を解析して未来予知染みた予測を立てる。

ただ、セファイロトシステムはドルイドシステム以上に情報処理能力を必要としており、ルルーシユであっても対個人を相手にするには反射速度という一点において体が追いつかなくなる。

それを解決する為に、ナイトギガフォートレスの神経電位接続を参考に作り上げられた、ヘッドギアに内蔵された特殊な装置で思考を読み取る必要がある。

「奇跡を起こす男に不可能はない」

そしてその言葉を契機としたかのようにギヤラハッドがマーリンに襲い掛かろうとした。

『スザク』

声に出す必要はない。ルルーシユの思考を読み取ったシステムがランスロット・アルビオンに指令を下し、超人的な反応速度を持つスザクは考えるよりも先に機体を動かしていた。

「ぬうつ!」

ランスロット・アルビオンの動きをビスマルクは予知していた。予知していたが予想よりも動き出しが早い。

マーリンの前に陣取ってエクスカリバーを白羽取りしたランスロット・アルビオンの両手の間に、マーリンの絶対守護領域のエネルギーフィールドが展開されている。

「やあっ!!」

驚きもあつてコンマ数秒静止したギャラハツドの背中に回った紅蓮聖天八極式が右手の輻射波動を向けていた。

「させんっ!」

輻射波動を避ける為に機体を捻らせた先に、マーリンの杖があつた。

「ごあっ!?!」

咄嗟にエクスカリバーを抜いて盾にしたが、放たれたハドロンブラスターの衝撃は対G緩和システムであるビッグスコントロールを抜いてビスマルクを襲う。

『カレン』

「今までやられた分を返してあげるわ!」

設計当初より三人一組スリーマンセルで動くことを想定されていた三機には特殊なネットワークが構築されている。

セフィロトシステムによってルルーシュには、ビスマルクの近未来予知のギアスを上回る十秒近い先の未来が見えている。その未来予知をランスロット・アルビオンと紅蓮聖天八極式に送れば、同条件以上ならばマーリンと二人の力があれば十分にビスマルクを打倒できる。

「やられはせんぞー!」

とは言いつつも、エクスカリバーの間合いを十分に見極めて急上昇した紅蓮聖天八極式と入れ替わるようにメーザーバイブレーションソードを刺突の体勢で突き進むランスロット・アルビオンの姿はビスマルクの未来予知にはなかった。

「帝国最強は伊達ではないわ!」

ギアスが通じなかりうが問題ではない。展開したブレイズルミナ

スをメーザーバイブレーションソードに突破され、振り上げた膝先に食い込ませながらも、エクスカリバーの柄頭でランスロット・アルビオンを弾き飛ばす。

「その未来も見えている」

常に変幻する未来を見続けるルルーシユは一番近いC・C・に指しを下す。

「これは――」

ランスロット・アルビオンにトドメの一撃を加えようとすると、まるで予測していたかのように紅蓮聖天八極式が邪魔に入ってくる。

二機を押しして、仕切り直そうにもマーリンがその隙を狙って来る。連携はあれども、別個の攻撃しかしてこなかった二機がマーリンの指揮によって動く際には一つの肉体のようにギヤラハツドを狙って来る。幾らビスマルクといえど、天敵とも言える能力を有するマーリンも含めた第九世代三機の相手は厳しかった。

「皇帝陛下……っ！」

チエツクメイトが寸前であったビスマルクは奥歯を噛んで戦い続ける。

心の拠り所であり、仕える主君であり、ここでビスマルクが死ぬない理由であった。

「お父様なら死にましたよ、私の手で」

左手を輻射波動を受けて失い、右足をメーザーバイブレーションソードで切り落とされ、防ぎ切れなかった拡散構造相転移砲によって全身が傷だらけの中で、ビスマルクの耳に鈴を転がすような声が聞こえた。

「寂しがるといけませんから、あなたも死んでください」

ブリタニア皇帝シャルルの座乗艦であるグレートブリタニアのシグナルが消えていることに気付くことも無く、死角の方角の遠方から放たれたメガハドロンランチャー・フルブラストによってギヤラハツドごと消滅したビスマルクは幸せだったのだろう。

未来予測外からの攻撃に、ルルーシユは消滅するギヤラハツドを見ることがなくヘッドギア内で目を見開いた。

「あはっ、汚い花火ですね」

辛うじて消滅を免れたエクスカリバーが制御されないハドロン  
の暴走によって自壊した爆発を、彼女は楽し気にズレた評価する。

「まさか……………」

マーリンのセフィロトシステム繋がったルルーシユは、超々遠距離  
から放たれたメガハドロンランチャー・フルブラストを撃った者を特  
定しようと観測を行っていた。

しかし、観測を行う前からルルーシユには不思議な予感があった、  
この者を知っていると。

「まさか……………」

理由はない。根拠はない。なのに、ルルーシユは直感していた。予  
期していた。セフィロトシステムに依らない何かが予感させていた。

「まさか」

血の予感か、兄妹の繋がりが、或いは今まで築き上げてきた時間か。

黒でも白でも赤でもない、金色のナイトギガフォートレスから通信  
回線が開かれようとしているのにルルーシユは抗わなかった。

「ナナリー……………っ!？」

「次はアナタの番です、ゼロ」

ルルーシユの罪の象徴が残酷な笑みを浮かべて、シャルルによって  
切り落とされた膝下から機械に神経接続でナイトギガフォートレス  
に繋がれたナナリーがそこにいる。

「お父様の仇を討たせてもらいます、お兄様。さあ、死んでください  
!」

ナナリーはアツシユフォード学園の箱庭で向けられた笑顔のまま  
でルルーシユに宣言した。



ブリタニア帝国の首都ブリテンを出たばかりのグレートブリタニアのKMFデツキを占領する一機のナイトギガフォートレスのкокピットに乗り込んだシャルルは、目の前にいる娘に静かに語り掛ける。

「全てはルルーシュが悪いのだ」

頭の中に木霊する声がナナリーに語り掛ける。

この一ヶ月の間に何度も繰り返された文言が、モルガンのкокピットに響き続ける。

「お主の足を切り落としたのはルルーシュだ」

一度は取り戻した足の感覚が消え失せている。例え感覚が無くとも以前のように手を伸ばせばそこにあることもなく、無情にも膝下から切り落とされた先には機械が繋がっていた。

「憎いだろう、ルルーシュが」

ナイトギガフォートレス

K G F モルガン

第九世代として高い汎

用性を高めたギヤラハッドとは別に、ジークフリートを更に発展させた強固な装甲と爆発的な火力を持つ機動要塞にナナリーの足は繋がれていた。

膝下を切り落とした際に神経電位接続を行える処置が施されたナナリーの新しい足は、繋がったモルガンのユグドラシルドライブの稼働音を伝えて来る。

「今、あ奴はゼロとなって戦場にいる」

ナナリーは自身の足を切り落としたとされる諸悪の根源を思い知らせる為に何度も何度も、十や二十では利かない回数植え続けられた偽りの記憶に狂ってしまった支離滅裂な思考でシャルルの言葉を受け止める。

「殺すのだ。惨たらしく、陰惨に、自らの行いを悔いても、もう遅いの

だと思い知らせろ」

この一ヶ月の間、繰り返し行われて来た記憶改竄のギアスに抗い続けたナナリーの精神はボロボロになって、どうしようもないほどに致命的に壊れてしまった。

「母を狂わせ、この父に反逆した息子を妹であるお主が誅するのだ」  
ブリタニアに連れ戻されてからナナリーは父に謁見を求め続けた。  
知らされぬ兄の行方、リヴァルを殺した者を探そうとするもナナリーはあまりにも無力だった。皇女に戻っても名目上に過ぎず、権力も力もない。まだようやく立つことが出来る程度の小娘に出来ることは何もなかった。

何も出来ない自分を心配したコーネリアの力で、動かせるようになった足のリハビリとしてナイトメアの操縦を習うことが精々だった。それでも才能があつたのか、メキメキと実力を付けて行つたその足が無慈悲に切り落とされた。  
「憎み、蔑み、怒り、そして殺せ。全ては全てがルルーシユの所為なのだ」

最愛の兄が自分の為に必死に努力してくれたお蔭で取り戻した動く足は、今は無機質な機械に繋がれている。奪われまいと抵抗しても、数人がかりで押さえつけられては少女に過ぎないナナリーに逃げ出すことは叶わなかった。

「ルルーシユがクロヴィスを殺した」

時には真実も交え、大半の嘘を覆い隠す。

「ただ研究をしていただけの研究者たちを虐殺した」

見せられた映像と合わせて記憶が書き換えられる。

「コーネリアもルルーシユに操られていた、ギアスなる卑劣な力で、そして死んだ」

真実という毒が頑なに嘘を受け入れようとしなかったナナリーの頑強な心に少しずつ傷をつけ増やし、やがて大きな穴となって壊す。

「全てはルルーシユが悪いのだ」

最初は全く受け付けなかったナナリーも、繰り返される記憶改竄によって何が真実か分からなくなってくる。



それでもナナリーが兄を愛していることに変わりはない。

「まだ堪えるか。その精神力は我が娘ながら見事なものよ」

何度も何度も、昼夜関係なくシャルルの記憶改竄を受けさせられたナナリーは頑張った。既に狂い壊れてしまった精神でもシャルルが植え付ける記憶に抗い続けたのだから。

「ならば、その精神力を支える元を折るとしよう」

生体ユニットとして両腕と腰を操縦席に固定されたナナリーは開かされた目でシャルルの炯々とギアスの模様が輝く目を見させられる。

「ゼロがルルーシュを殺した」

新たな毒がナナリーに注ぎ込まれる。

ナナリーの心が完全に崩壊したのは、ルルーシュが再びゼロの仮面を被って世に出た瞬間だった。

## 最終話 全てがゼロになる

ルルーシユにとって、例え何があろうともあり得てはいけなかった。

ギアス教団の最下層にシャルルが現れたあの時、ルルーシユはマリアンヌをギアスで支配下に置いていたことを伝えていた。

今までの鬱憤を晴らす目的もあったが、あの状況においてシャルルが現れたこと自体がルルーシユにとって誤算だった。だからこそ、マリアンヌを取り戻したければルルーシユに逆らわない、最低でもナナリーには手を出さないと踏んだのに。

シャルルのV・Vへの想いを読み違えていたことに気付いても既に遅い。

「——ルルーシユ！」

「っ!？」

C・Cの呼びかけに自失していたルルーシユは我を取り戻し、目の前に迫る回避不可能としか言いようのない拡散ハドロン砲を絶対守護領域を展開して防ぎ切る。

しかし、幾らルルーシユ達が乗る第九世代と云えど、広範囲に広げられた拡散ハドロン砲の全てをシャットアウトすることは叶わない。

「さあ、避けて！」

ナイトギガフォートレス

K G F モルガンの下層に設置されたポットの装甲が開き、百近い大量のミサイルが放たれた。

「全軍避けるー！」

ルルーシユは全軍に向かって通信を放ちながら、拡散構造相転移砲を撃つが全弾は撃ち落とせない。

後ろに抜けたミサイルに対処しようとしたところに、モルガンは下層ポットを破棄してマーリンに向けてメガハドロンランチャーを撃ち込まれる。

「ぐうっ!？」

マーリンの絶対守護領域の防御力は全ナイトメア1と開発者のロイドとラクシャータが言っていたが、モルガンのメガハドロンランチャーを受けたコクピットがヒッグスコントロールを抜けて衝撃に揺らされて全身を固定されたルルーシユとは違うC・C・が呻く。

一瞬静止したマーリンの横を全く速度を緩めなかったモルガンが通過する。

「あははっー！」

再びの拡散ハドロン砲が放たれて混成軍のみならず、ブリタニア軍のKMFや艦艇を撃ち抜いていく。

「みんな、死んでください!!」

ランスロット・アルビオンや紅蓮聖天八極式のようにブレイズルミナスや輻射波動障壁がある機体や艦艇は防げたが、それでも衝撃は大きい。しかし、中には両者がいないのも多く、大きな爆発が次々に落ちた。

「見境も無く………もう、止めろっー！」

軍に関係なく目に付いた者に攻撃をするナナリーのことを知らずに止めようとスザクが背後から強襲するも、展開されたブレイズルミナスが破壊される一瞬の間に機体を捻らせたモルガンの電磁装甲を滑るようにメーザーバイブレーションソードが流れていく。

「五月蠅いカトンボですね!!」

本気でそう思っているナナリーはモルガンのコアユニットであるランスロットでハドロンブラスターを撃った。

「人の機体でっー！」

「鬱陶しいー！」

スザクは自身が長年使っていたオリジナルのランスロットをコアユニットとして見抜きながら回避行動に移るも、まるでその行動を読んでいたかのように、モルガンは拡散ハドロン砲を撃っていた特徴的なマニピュレーターで追撃する。

「トンボは羽を聳るー！」

超反応を見せたスザクは回避するがマニピュレーター先から伸びた、規模は小さいながらもギャラハッドのエクスカリバーが出したのと

同じハドロロンブレードがランスロット・アルビオンのエナジーウィングの片翼を貫いた。

直後、ナナリーは手元の機械を操作してハドロンの制御を意図的に解いて自壊させた。

制御を失ったハドロロンブレードが爆発する。

「うわああああああっ?!」

スザクはブレイズルミナスを展開して防御しようとするも、マリーリンと紅蓮聖天八極式も巻き込むほどの周囲一帯を覆い尽くすほどの大爆発の渦中にいたランスロット・アルビオンは耐えられなかった。「スザク……! このおっ!」

モルガンもハドロロンを自壊させれば撃っていたモルガンの片方のマニピュレータはただではすまなかった。爆発の寸前でマニピュレータをパージしても半壊に近いダメージを負っていた。

ボロボロになって落ちていくランスロット・アルビオンを追うマリーリンから視線を切ったカレンが乗る紅蓮聖天八極式が躍動し、モルガンのパージしたマニピュレータ側から攻め込む。

「お兄様を私から奪う紅い奴!!」

残ったマニピュレータからハドロロンブレードを形成し、紅蓮聖天八極式に向かって横合いに振る。

「そんな大振りが」

「磔、ドーン!」

簡単に避けた紅蓮聖天八極式が輻射波動を放つ体勢になったところで、自分ごと覆うように放たれたスラッシュハーケンが四肢に突き刺さる。モルガンとコアユニットごと貫くほどに深々と。

「バーンとビーン、ギャンとドウ!」

コアユニットの腰部から二本のレーザーバイブレーションソードを抜き放つと同時に自身のスラッシュハーケンごと紅蓮聖天八極式の四肢を切り落とし、コックピットに向かって伸ばす。

「カレンっ!」

あまりにも行動が早過ぎて介入の余地すらなく、貫かれる前に緊急安全装置を作動させてコックピットを排出したカレンの名を叫ぶ

ルーシユ。

「……………お前の妹は化け物か、ルーシユ」

ビスマルクのギアラハッドを除けば、間違いなくランスロット・ア  
ルビオンと紅蓮聖天八極式は世界最強である。損傷しながらも落と  
すのは、如何にモルガンの機体性能があつたとしても並のパイロット  
に出来ることではない。

「認められるものか……………」

ナナリーは幼少期、ルルーシユよりもよっぽど閃光のマリアンヌに  
似ていた。

「認められるものか」

聞きっぱなしの通信回線から聞こえるナナリーの言葉はまともと  
は思えない。

そうなた理由として思い至るのは、シャルルの記憶改竄のギアス  
を受けたこと。

「認められるものか!」

ルルーシユの心を激情が荒れ狂う。しかし、悠長にしていることは  
出来なかつた。

「来るぞ!」

バチバチと損傷箇所から電気を弾けさせながらモルガンが敵を探  
して移動を始めた。

「見えた見えた見えた見えた見えた!」

コアユニットの下の砲口が光を溜め、メガハドロンランチャー・フ  
ルブラストがマーリンに向かって放たれた。

「後ろの軍を……………っ!」

今、戦争はモルガンの暴走と旗艦であるグレートブリタニアのシグ  
ナルが消えて混乱しているブリタニア軍が下がったことで止まってい  
る。ゆつくりと両軍が後退を始める中で、未だ小競り合いを続けて  
いる中央部をメガハドロンランチャー・フルブラストが薙ぎ払ってい  
た。

「ナナリーを止める!」

「出来るのか、お前に!」

「やらなければならんだろ！」

どっちの道、これだけ両軍に関係なく攻撃を加えていては討伐の対象になることは避けられない。

ならば、ルルーシユ自らが戦うことを選ぶしかなかった。

「死んでよ。私を嘲笑う全ては消えて生まれちゃえ!!」

両軍が巻き込まれないようにしながら移動速度は第八世代より多少早いだけのマーリンを、大きな機体に似合わない機動力を持つモルガンが振り回す。

それは戦っているのではなかった。

犠牲を増やすわけにはいかない。ナナリーを狙わせるわけにはいかない。ルルーシユに出来る消極的な逃げだった。

「避けてるだけでは何時か落とされるぞ！」

「分かっている！」

永続的に絶対守護領域を張っていられるわけではない。自傷すら厭わないモルガンの攻勢に屈する可能性の方が高い。

ルルーシユが煩悶していると、センサーが接近してくるモルガンとは別の機体の反応を捉える。

「ナイトギガフォートレスの相手ならばお任せあれ！」

急行して来たジークフリートが回転しながらモルガンに体当たりを敢行する。

「後ろにバック！」

マーリンの相手をしていて反応が遅れたモルガンは、大質量のジークフリートに体当たりをされればブレイズルミナスも電磁装甲も持たないと判断して、自ら残っていたマニピュレータをパージしてコアユニットのランススロットがメーザーバイブレーションソードを投擲。

メーザーバイブレーションソードがパージしたマニピュレータを貫き、起こった爆発を利用してジークフリートの回転体当たりを避ける。

「前に進撃！」

「ぬうつ!？」

避けられたと知って回転を止めたところに突撃して押し掛かるモルガンに、激突の衝撃に首をガクンと揺らさせたジェレミアは歯を食い縛る。

「我が忠義の機体に触れるべからず！」

コアユニットであるヴィセント・ジークの手にメーザーバイブレーションソードを握らせ、目の前のモルガンのコアユニットに向けて振り下ろさせる。

「同類同属、私は嫌悪！」

ジェレミアを上回る反応速度で振り下ろされるメーザーバイブレーションソードを白羽取りしたナナリーによって簡単に奪い取られる。

「そんなっ!?!」

「生めよ増やせよこんにちわ！」

明らかに自分以上の反応速度にジェレミアが驚いている間に、ナナリーは奪ったメーザーバイブレーションソードをジークフリートに深々と突き刺す。

「さよなら、そしていただきます！」

離れ、その砲口に光を溜めてメガハドロランチャーを撃つ体勢になる。

「させない！」

撃つ一瞬前に身を翻して離れたモルガンのいた場所にシユタルクハドロロンが通過する。放ったモルドレッド・バーサーカーのマリアンヌは舌打ちをする。

「動けるジェレミア？」

「な、なんとか……」

「じゃあ、少し離れてなさい。そしてタイミングを合わせない」

大きく後退したモルガンが加速して向かって来るのを見たマリアンヌは手元のスイッチを切り替える。

「我が娘ながら良い反応だこと。だけど、まだまだ親には勝てないってことを教えてあげるわ！」

今までかけられていたリミッターを解除して、自身の体と機体の負

荷を無視した動きを見せるモルドレット。

機体名に冠されたバーサーカーの由来通りに、狂戦士の如く奔走するモルドレットに半壊しているモルガンも猛る。

「親殺しは二度目なり！」

「このおっ！」

極短時間に限って第九世代並みの性能を發揮するバーサーカーモードになったマリアンヌと互角の戦いを演じるナナリー。

しかし、所詮は機体のリミッターを解除して限界を超えさせた代償で得た力に過ぎない。

「くっ、アーニャじゃなく私の体ならもつと戦えるのに」

機体とまだ年若いアーニャの体が先に限界を迎える。

「ええいつ、一か八か！」

致命的な損傷を受けたジークフリートを放棄してコアユニットであるヴェンセント・ジークで飛び出していたジェレミアがフロートユニットで飛んでいる。

ナナリーと戦えないルルーシュが乗るマーリンに賭けるのはあまりにもリスクが大きい。だから、自分が危険を承知でリスクを冒した。

「おんぶに抱っこ!?!」

背後に回ってコアユニットのランスロットを羽交い絞めされたナナリーはそう叫んでいた。

「ジェレミア、ギアスキャンセラー！」

ナナリーの狂躁する理由はシャルルに植え付けられた偽りの記憶であると考えていたマリアンヌはジェレミアのギアスキャンセラーがあればと考えた。

ギアスによってルルーシュに下っているマリアンヌはギアスキャンセラーを受ければ、アーニャの体に移っている自身の消滅を意味しているとしてもルルーシュを勝たせる為なら自身のことなど二の次という思考をしてしまう。

「マリアンヌ様っ!!」

ジェレミアはマリアンヌの精神がギアスによるものだと知ってい





制御権を奪い返すも既に遅い。放たれたハドロンプラスターはランスロットの下半身を消し飛ばし、流石に制御を失った機体がバランスを崩して落ちていく。

『全軍に告げる。私はシュナイゼル・エル・ブリタニア、次の皇帝である』

海に落ちる前にモルドレッドが受け止めたが、ナナリーは先の一撃で衝撃で気を失ったのか動く気配がない中で、一帯にオープンチャンネルで男の声が響き渡る。

『前皇帝シャルル・ジ・ブリタニアは死んだ』

通信の主であるシュナイゼルが乗る空中要塞ダモクレスがこの宙域に現れる。

『ブリタニア軍よ、このダモクレスに集結せよ』

戦争は終わっていない。だが、シュナイゼルにはこの戦いを続ける理由はない。

「どうして」

ダモクレスに集結したブリタニア軍と混成軍は睨み合いを続け、やがて停戦交渉に入るだろう。その未来をセフィロトシステムを使わずに予見したルルーシュは呆然と呟く。

「どうして、こんなことになってしまったんだ」

その呟きを聞いたC・Cは静かに目を伏せた。



ルルーシユの予想通り、睨み合いを続けた両軍は停戦交渉を行い、戦争は終わった。

元より前皇帝シャルルの暴走から始まったこの戦争は、その死と共に呆気ない幕切れとなったのである。

「これからどこに行くんだ、ルルーシユ」

日本を離れてE・U・に渡ったルルーシユとC・C・はどことも知れぬ場所を歩く。

「さあな、取りあえずは各地のギアスの遺跡巡りだ」

自分の足で歩くルルーシユは、どこまでも続く草原に目を細めて答える。

「俺達のコードを解くヒントがどこかにあるはずだ。気の長い話になるだろう」

「何年かかることになるやら」

「それでもやるしかないだろう」

幸い時間だけは幾らでもあるのだからルルーシユは左程気負いはしない。

「シャルルのギアスで心を壊されたナナリーの傍には行けない。俺は邪魔になるだけだからな」

ユーフェミア達にも止められたが、ルルーシユはもうナナリーがいる日本には訪れないと決めている。

「後、俺のことはL・L・と呼べと言っただろう。ルルーシユは死んだんだ」

「ふん、格好つけが」

ルルーシユ・ランペルLelouch LamperougeだからL・L・とは安直であると思いつ

つも、ブリタニアに切られても名前だけは捨てなかつたルルーシユの覚悟を重んじたからこそC・C・はそれ以上何も言わなかつた。

「今日は歩くには良い日だ」

燦々と照り付ける太陽の光の下、ルルーシユとC・C・は歩き続ける。

ルルーシユとC・C・のその後についての記録はない。ただ、時折、悪を挫く奇跡を起こす男ゼロが世に出て来ることはあった。その傍らには何時も緑髪の少女の姿があったという。

## ト部生存✓

### 第一話 ト部は物申す

フレイヤによってトウキョウ租界が消滅し、一度撤退した黒の騎士団の旗艦である斑鳩。

ブリタニアの宰相が直接乗り込んでくるという一大事に幹部級が対処に手を取られている間、今まで無かった戦略兵器の登場に動揺が広がっている団員のケアに奔走していたト部巧雪は事務総長である扇要に呼び出された。

「ゼロの正体はブリタニアの元皇子ルルーシユ。ギアスという力で人を操るペテン師だ！」

この忙しい時に何の用だと思いつながら扇の執務室にやってきたト部に扇が開口一番に言った。

ト部は話の内容よりも扇の後ろにいるブリタニア人の女の方が気になるながらも、部屋の壁に背中を預ける心酔している藤堂鏡志郎を見るも彼は黙して語らうとしない。

「事実だ」

代わりに藤堂の横に立つ同じ四聖剣の千葉凧沙が答えた。

「……………」

心の主と定めている藤堂が否定せず、千葉も認めたとのならば虚言ではないと判断しながら扇を見る。

「それで？」

「え？」

率直に聞き返すと、扇が目丸くした。

「ゼロの正体がなんであれ、黒の騎士団の方針は何も変わらないはず。敵国の皇子だというには驚いたが何か問題でも？」

元よりト部はゼロの仮面の中の素顔を知っているし、敵国の皇子だということも察しがついていた。

ルルーシュが仮面を外している時にカレンやC・C・が迂闊に名前を呼んでいたことと、ナナリー総督が就任した時に彼女の来歴を調べた際に両者が繋がった。

扇達を知ったことには十分驚いているが、戦友と認めた男の裡にあるブリタニアと戦う気概を何度も見て来た卜部にとつては重大な問題ではない。

「ゼロはずっと俺たちを騙していたんだぞ！　ずっと俺たちを駒として」

「戦略家が兵士を駒として扱うのは当然のこと。仮に捨て駒にされたとしても、ブリタニアの脅威を跳ね返せる一助となれるのなら本望だ」

あのバベルタワーの戦いで、切り捨てるという発想だけではブリタニアに勝てないと言ったゼロの言葉に偽りはないと卜部は感じた。

仮にゼロに捨て駒にされたとしても、ブリタニアに対抗する合衆国を作った男は決して無駄な犠牲を出すことはないと信じている。

「第一、駒として使い捨てるというなら中華連邦でカレンを見捨てなかったことをどう説明する？」

後になって聞いた話ではあるが、優れたパイロットとはいえ一兵士に過ぎなかったカレンを見捨てると判断したデイトハルトの進言は最もと感じた。勿論、ゼロが言っていたようにインド軍が裏切っていた可能性も否定できなかったが、軍としてはカレンを見捨てる方が正しい。

結果はどうあれ、切り捨てることが出来なかったゼロの、ルルーシュの甘さを人として卜部は好ましいと思った。

「藤堂さん、さっきからどういうことですか」

卜部には反論出来ずに言葉に詰まっている扇が乱心したようにしか見えないが、藤堂が止めようとしないうことは彼も同意見なのだろうと思いつつ訊ねる。

「卜部、お前はゼロの正体を知っていたのか？」

問いに対する返答ではない。しかし、秘密事を抱えていたのは卜部も同じだった。

「ええ、知っていました」

ブリタニアの学生との立場を使い分ける必要があつて、時折C・Cがゼロの中身を演じていたことも含めて藤堂達よりも近い位置にはいた。

「あのバベルタワーの作戦でカレンやC・Cに教えられました。ゼロはブリタニアの学生であると」

「学生だと？」

「え、知らなかったんですか」

そこに驚かれるとは思わなかった卜部の方が驚く。

「俺も驚きましたけどバベルタワーで強く感じました、モノが違うと。年若かろうがブリタニア人であろうが日本を取り返せる力があればなんであろうと構わない」

現にゼロは中華連邦を味方につけ、合衆国を立ち上げて多くの国を味方につけた。

「ゼロは力を示し、結果を出した。その中身がなんであれ、ことここに至つてゼロを疑つても仕方ない」

「しかし、その力が、結果がペテンで得られたとしたら？」

「ペテン？」

眉を顰めた卜部に、厳しい面持ちの千葉は腕を組んで睨み付けるように見て来る。

「ゼロには、ルルーシュには人を操るギアスという力があるらしい」

「またSFみたいな話になりましたね」

幾ら藤堂が言ったとしても、とてもでは信じられる話ではなかった。

「人に命令を強制する力。強力な催眠術のようなものとのことだ」

「奇跡のタネがその力だと？」

「シユナイゼルから音声データで証拠を聞かされた。ゼロの奇跡にはギアスというタネがあつた。そのコピーがここにある」

千葉がポケットから端末を取り出してボタンを押す。

『ルルーシュ、君がユフイにギアスをかけたのか？』

『ああ』

『日本人を虐殺しろと?』

『俺が命じた』

少ない会話はそこで終わった。

まだ続きがあるものだと思つた卜部が千葉を見るも、彼女はポケットに端末を直している。先はないようだ。

「つまり、ゼロがギアスとかいうやつをユーフェミアにかけて、あの虐殺を行わせたと?」

「信じ難いかもしれんが他にもギアスをかけられた疑いのある事件、人物のファイルを見せられた」

仮にも敵国の宰相から与えられた簡単に捏造できる証拠を安易に信じたのかと呆れ顔の卜部に藤堂が近くの机に置かれていた簡易端末を取り、差し出してくる。

受け取つた簡易端末に表示されたデータに卜部は微かに目を見開いた。

「草壁中佐に、片瀬少将までか」

ペラペラと紙を捲り、見知つた者から見覚えのない人物の写真に驚く。

「……………成程、確かに高亥の変わり身等に関して疑問に思つていましたが、人を操れるというなら納得がいく面もある」

「あのロロとかいう訳の分からない奴や、生粋のブリタニアの貴族であるジェレミアが寝返つて来たことも全て説明がつくだろう!」

マジックのタネも明かされてみれば陳腐に感じると言うが、目の前でこうも憤っている扇を見ると驚きも冷めて冷静になつてしまう。

「ユーフェミアはルルーシユの腹違いの妹。身近な人間にギアスをかけている以上、私達も操られていないという保証もない」

そのことに関しては卜部も他人ごとではないのに千葉に何も言えない。

先程から扇の側にはとても立てる思考ではないが、容易に自身を操れる人間の傍にいたいかわれればN.Oと答える。

「確かにゼロには秘密が多い」

特に最近のゼロは秘密裏の単独行動も多く、あのトウキョウ租界が



消滅した後の言動には理解はすれども全く思うところがないわけではない。

「そしてもう一つ」

畳みかけるように藤堂が口を開く。

「ブリタニアは無駄な争いを避ける為に事前にフレイヤ弾頭のことをゼロに通告したと言っている。ランスロットに通信記録が残っているともな。しかし……」

「我らには伝えていない。例えブラフだったとしても、あのような兵器があるかもしれないという可能性は伝達しておくべきだろう」

続けた千葉の言葉に、今度こそト部は反論するべき論理を持つてはいなかった。

「俺は、彼を信じたかった………信じていたかった。でも、俺たちは彼にとつて……」

そう言つて落ち込む扇の肩に手を置くブリタニア人の女の姿を視界に留めながら、ト部はどこか白々しく聞こえる言葉が聞こえないように耳を塞ぎたかつた。

「ゼロさえ引き渡せば日本を返すとシユナイゼルも約束してくれた。一度は信じた仲間を裏切るんだ。せめて日本くらい取り返さなくては俺は自分を許せない」

何が正しいのか、何が間違っているのか、何も分からない中で扇のその言葉だけは看過できなかつた。

「ところで、デートハルトとラクシャータがいないのは何故？」

体の内側から湧き上がる感情を抑えつけて、改めて部屋にいる面子を見渡したト部は幹部ならばいるはずの者が二人いない理由を扇に問う。

「ラクシャータは紅蓮のチェックでシユナイゼルとの話し合いに参加していないから後で話す。デートハルトはゼロの擁護しかしないので席を外してもらっている」

らしいと言えばらしい行動をしている二人にト部は不思議な安堵を覚えた。

「それで、藤堂さん。あなたもこんな馬鹿げた茶番に何時まで付き合

うつもりで?」

「茶番だと?」

何も気づいていない様子の藤堂に落胆する。

「藤堂さんは統合幕僚長、千葉も俺も一部隊の隊長、扇も事務総長に過ぎない。俺達に黒の騎士団のCEOであるゼロのことを独断で敵国に引き渡す権限など、どこにもない!」

気が付けば卜部は叫んでいた。

「し、しかし、ルルーシュにはギアスが」

「そんなことはどうでもいい!」

それ以前の問題であると理解していない扇に卜部は言葉を叩きつける。

「ルール違反だと言っているんだ、扇事務総長。ギアスのことは関係ない、ゼロの正体もだ」

とても簡単な事だった。

どこの組織である極々簡単で当たり前前のこと。

「どこの世界に敵国のNo. 2の言うことを真に受けて軍のトップを引き渡す馬鹿がいる」

ゼロに非はあるだろう。

ゼロに咎はあるかもしれない。

しかし、扇がしようとしていることはそれ以前の問題だった。

「扇事務総長、あなたを背信容疑で拘束する」

「ふ、ふざけるな! どうして俺が」

「超合集国最高評議会の決議なしに、日本の返還を条件に黒の騎士団CEOを売り渡す約束をしたのは事実だろう! ブリタニアと内通したと言われても仕方のない状況だ!! アンタはそんなことも分らないのか!!」

ただ、事実だけを並べて糾弾すると扇もようやく理解が追いついたようで顔を真っ青にする。

「藤堂統合幕僚長、千葉隊長にも同様の嫌疑がかけられる。三人とも、この部屋から出ないでもらいたい」

「……………致し方なし、か」

卜部の叫びで、シュナイゼルからぶつけられた衝撃の事実を前に  
惑っていたと自覚した藤堂は深い息を吐く。

「すまん、卜部。どうやら俺は冷静さを失っていたようだ」

日本軍の上司であった片瀬少将の死にルルーシュが関わっていて、  
朝比奈のこともあつて冷静さを失っていたことを自覚する。

単独行動が多く秘密主義なゼロに不満を持っていたこと、朝比奈か  
ら齎された虐殺が行われたデータを見た藤堂はギアスのこともあつ  
て味方にしておくわけにはいかないと決めつけていた。

まずその前に総司令である黎星刻に報告し、合衆国日本代表にして  
超合衆国評議会議長である皇神楽耶に裁可を頼むべきであった。そ  
れが本来、軍として正しい在り方。藤堂達がしようとしていたのは私  
兵の理屈だったと遅まきながらに理解しても遅い。

「すまない」

直前までゼロを糾弾すべきと言っていた朝比奈の死もあつて思考  
が硬直化していた千葉も卜部に謝罪する。

「いえ……」

卜部は事前にゼロの素顔を知っていたことと、後で事実を知らされ  
たことで幾分客観的に事実を見ただけに過ぎないと自省していた。

「皇代表と天子様が来るまでお待ちを」

どの道、フレイヤなんていう大量破壊兵器の存在で戦略の立て直し  
が必要になってくる。

悠長に評議会を招集してから決議しては遅すぎるので、CEO  
のゼロと総司令の星刻で戦略を練り直し、評議会の代表として神楽耶  
と天子が裁可を下すことになるはずだった。

その前に敵と内通した疑いのある彼らの処罰を行わなければなら  
ないなど、少女達には気の毒すぎる。

「前後の状況も含めて全てを話して下さい」

扇と親しい態度のブリタニア人の女のことも含めて、と言外に滲ま  
せて卜部は部屋を出た。

「まずは、何をすべきか……」

部屋の外からロックをかけ出入りできないようにして、肩を落とす

て疲れた息を吐いたト部は考える。

「ブリッジに行つて神楽耶様達に仔細の報告をして」

その前に艦長である南やブリッジにいる者達にも扇達の背信行為について伝えなければならぬ。

「いや、デイトハルトに説明させて俺はシユナイゼルを追い出すことが先決か？」

考えが纏まらない。所詮、自分は隊を預かれても一兵卒の器でしかないということなのかと自嘲する。

「そのことも含めてデイトハルトとラクシャータに相談するとしてよう」

超合衆国成立以前の黒の騎士団内において、戦闘以外のことで頭を使える人間が日本人以外なことに悲哀を覚えながら歩き出す。

「初期からゼロに頼り切っていた弊害か」

自分達が考えるよりもゼロの方が何倍も早く、何倍も上手くことが運ぶからといって頼り切っていた怠慢を見せつけられた思いだった。

## 第二話 暗中模索

夕方になって急ぎ斑鳩に到着した皇神楽耶らは卜部巧雪から事情を聞き、自分達が独断専行をしていたことを自覚して大人しく従った藤堂達の事情聴取を行った。

「事情は全て聞きました」

まさかこんなことになるとは誰も思っていなかったと、神楽耶は年に似合わない重い息を吐き出して下がっていた顔を上げる。

「ハッキリ言えば、ゼロ様の嫌疑は黒の方に近いグレーといったところでしょうか」

軍艦として設計されたわけではない斑鳩には要人が過ごせるような貴賓室はなく、ゼロの私室以外で一番上等な艦長室であった。

艦長である南に頼んで部屋を借り、卜部と向き合ってソファに座る神楽耶は懊悩に眉間に皺を寄せる。

「やはり、ブリタニアの皇子であることが問題であるか？」

どうしてもそこがネックになってしまうと、卜部との問いに神楽耶が頷く。

「ええ、今公表されれば、それだけで超合衆国は瓦解するでしょう。そういう意味ではゼロ様が仮面を被ったのは致し方ない面もあります」  
所詮、超合衆国はゼロのカリスマと、出して来た結果から彼ならばブリタニアを打倒できると見越した各国の思惑があつてこそ纏まっている。

ゼロがただのブリタニア人であるならば、ここまで重大な問題にはなりはしれないと思うことに意味はない。

「下手をすれば、単なる皇族の後継争いと見られてもおかしくはない」  
神楽耶の隣に座る天子の後ろに立つ黎星刻が重くるしく言った。

「このことに関してはゼロ様……………ルルーシュ皇子に真意を確かめるしかないでしょう。真意次第では案がないわけでもありませんし」  
「ブリタニアの皇帝に成る気がないのであれば妙案があるか？」

「それ以前に——私の知る彼ならば皇帝に成る気は絶対にないでしょうけど」

「はっ。」

驚く卜部の顔を見た神楽耶は、ナナリー・ヴィ・ブリタニアがエリーアの総督に就任した姿の映像を見た時のように八年前の出会いを思い出していた。

「ルルーシユ皇子と知り合いだったのですか？」

目を丸くした天子の問いに神楽耶の顔に複雑な表情が浮かぶ。

「それほど深い話をしたわけではありません」

目を伏せて、八年前のことを回想する。

「どうしてルルーシユ皇子を元皇子とシユナイゼルが言ったか知っていますか？」

「そういえば……」

卜部も改めて言われて深くまでは考えなかった点に思い至る。

「その様子では、神楽耶様は知っていると？」

にしてはゼロの正体がルルーシユであると告げられた時の驚き様は最近会ったような感じではなかったのようによに卜部は思った。

「八年前のことです」

言葉にすれば漢字でたった三文字で終わってしまう過去を追想する。

「ブリタニアとの緊張が高まっている時期に、当時の日本国首相である枢木ゲンブと財界のフィクサーであった桐原泰三の下に皇子と皇女がやってきました」

表向きには留学とされたが鼻肩目に見ても外交手段、つまりは人質として日本に送られた二人との出会いを神楽耶は今でも昨日のことのように思い出せる。

「その皇子がルルーシユであると。しかし、それは」

「どんなに取り繕おうと人質であることは明白でした。当時の私は幼くてそんなことまでは分かりませんでした」

それでも色んな人達がルルーシユ達を見る目がどういうものであったかを子供ながらも察していた。

「ゼロの聡明さなら自身の置かれた状況を理解していてもおかしくはない。自分達がいるにも関わらず、戦端を開いた皇帝を、ブリタニア

を憎む理由は十分にある」

ゼロが立てた計略と超合衆国の構想を練れる頭脳を養うには何年もかかる。例え年齢が二桁になった程度の年であっても自身の境遇を理解できる知恵があると推定した星刻は思案気な表情を浮かべる。「そうか、桐原翁がゼロへの支援を即決したというのは正体を知っていたからか。ギアスなど必要ない」

ト部もようやく得心がいった。

多少の実績はあれど、どうして正体不明のゼロを全面的に支援すると決めたのか疑問だったのだ。桐原はルルーシユのことも知っているのだから、彼が正体を隠していることも、ブリタニアと戦う理由にも大いに納得がいったのだろう。

「いや、待て」

星刻は今更ながらのことが気づいた。

「ヴィ・ブリタニアとは、ナナリー総督と同じ……」

「妹君です、ルルーシユ皇子の。彼と共に日本にやってきた皇女はナナリー皇女でした」

あの暑い夏の日に孤高の光を灯した紫の瞳を持った鬼に守られていた車椅子の少女が八年の時を超えてエリアーの総督となった姿を見た時、神楽耶はルルーシユが生きているかもしれないと思った。ただ、ゼロの正体がルルーシユであるとまでは思い至りはしなかったが。

「兄妹の仲は良かったと思います。少なくとも私が知る限りでは」

何時間も話したわけではないし、二人が一緒にいるのを見たのはたった一度に過ぎないが。

「もしも大切な妹さんが目の前で死んだとすれば混乱するのも仕方ないですね」

言った天子ならば星刻、またはその逆のように。

ト部であっても、もしも藤堂がああのフレイヤの光に飲まれていたら、朝比奈が死んだことから逃げるように仕事に没頭することで心を紛らわしていた今ほどに冷静な状況にはなれなかっただろう。

「トウキョウ租界が消滅した後のゼロのあの時の言動にも一定の理解

はしよう」

点と点が繋がれば、怪しいと思つた疑問の幾つかが解決する。

ゼロだけがあのフレイヤに大切な者を奪われたわけではない。戦友が、もしかしたらもつと大事な者を失つた団員がいるかもしれない。

本来、軍のトップとはそのような状況になつたとしても、冷静に振舞つて見せなければならぬ義務がある。そういう意味では、掣肘すべきだった藤堂が撤退の指示を代わりに出したのは正しい判断だった。

「恐らくナナリー総督を奪うという作戦には私情が入つていたのでしよう。ただ、この点に関しては奪還した日本の政情を安定させる為には彼女が必要だったのは事実であると思います」

「政庁に攻撃するなというのは、些か行き過ぎではありませんが」

それにしたところで特区日本の象徴でもあるナナリーを害すれば、たとえ日本を取り戻したとしても民意を得られない可能性が高い。

カレンのこともある上に、フレイヤさえなければ紅蓮聖天八極式の活躍で勝つことは難しくはなかったのだから、政庁を攻撃しなかつたというのは結果的には正しかったことになる。

「それでも虐殺のことは看過できません」

零番隊の木下が朝比奈に残し、藤堂に託された任務のデータを見た星刻は厳しい面持ちで言った。

「我が中華連邦の領内で起きたことだ。何の話も通さずに勝手にされてはな」

任務が行われたポイントは中華連邦の領内を示していた。幾らまだ超合衆国が成っていなかったとしても、合衆国日本と同盟関係にあった中華連邦の元首である天子と実質的に国を動かしていた星刻に話が来ていないのが問題だった。

「でも、データを見る限りではブリタニアの施設の様子ですね」

「いたのは武装もしていない者達だけで碌な抵抗もなかったとあります」

女子供関係なく殺せというゼロの指示もデータに残っていたのも



問題である。

「ゼロは死なない兵士の研究・実験をしていると言っている。研究員やデータを抹消、全てを破壊し、焼き尽くせとまで」

今まで理性的なゼロとは思えないあまりにも非道な命令であった。

「しかし、些か解せない」

データに記されているゼロの言葉のある部分に星刻は眉を顰める。

「どこがですか、星刻？」

「実験体と思しき者を発見次第、高圧力ケースに全て封印せよという言葉です」

端末を手にとってゼロの命令の一部を表示して天子に見せる。

「ゼロは直々に検証するとまで言っていますが、常識的に考えて死なない人間はいません。研究・実験をしていたとしてもです。しかし、ゼロはあの場所でそのような者がいるとみていることは命令から見ても明らかです」

多少、寿命が延びたり、ジェレミアのように体を改造して死難くすることは可能だろう。だが、現実的に考えてそのような者達をゼロが検分するほどの理由が見えてこない。

「このことはゼロ本人に聞く以外にはないでしょう」

ト部が言うように、この場にいる者が幾ら考えても答えは出て来ないだろう。

「これは勘ですが、恐らくシュナイゼルが言っていたというギアスが関係しているのではないのでしょうか」

「可能性は高いかもしれませんが、やはりゼロ様に聞く以外に私達に方法はありません」

ト部の勘に神楽耶も賛同する。

未知なる力が本当に存在するかどうかの是非はともかくとして、星刻としては一つだけ言っておかなければならないことがあった。

「高亥の変わり身を見るにそういう力があってもおかしくはない。あの変わり様は明らかに不自然だった」

大宦官を排除し、あるべき地位と力を取り戻せた今となつては高亥のことに關して問題にすることはない。しかし、やはり高亥にしたよ

うに簡単に人を操れる者が近くにいるというのは良い気がしない。

「ギアスのことも含めて、聞くことは多そうだ」

結局のところ、そこに帰結することになる。

「出来れば話をする前に、もう少し情報を集めたい。誰かもつとゼロ個人に近い者に話を聞きたいな」

ゼロの頭の良さは星刻の上を行っている。妹を失って傷心している今ならば突け込める隙は多そうだが、事前準備は怠らない方が良いに決まっている。

「素顔を知っていたのは君だけなのか、卜部」

「いえ、俺以外には」

そこまで考えて卜部よりも詳しくそうな者以上に詳しくそうな者と超合衆国結成以前から会っていないことに気が付いた。

「C・C.は一体どうしたんだ？」

体調が悪いと聞いた覚えはあるが超合衆国結成と日本解放戦の忙しさにかまけて深く考えることはしなかった。

「あら？」

外からドアを叩くノックの音がして神楽耶が立ち上がった。

「ジェレミア・ゴットバルト、参上仕った」

艦長室に入って来たジェレミアは言葉以外は決して阿ることなく室内にいる者達を見渡す。

「ジェレミア卿、と呼んだ方がいいか」

「呼び方はなんとも。私はあくまでルルーシュ様の騎士に過ぎぬ」

ブリタニアの貴族でも、黒の騎士団の団員でもなく、ルルーシュに仕える者であると暗に明言したジェレミアに星刻は眉を顰めた。

「貴殿はルルーシュにギアスをかけられたのではないのか？」

クロヴィス殺害容疑で拘束された枢木スザクをゼロが助け出した際、豹変して全力で見逃したジェレミアのことがあるだけに異様な忠誠心に疑念は消えない。

「ふっ、過去のことだ。ルルーシュ様から授けられたオレンジは我が忠誠の名前となった」

意味不明だった。神楽耶にも天子にも、そして星刻と卜部にも良く

分からないが後者の二人に関しては全く共感する部分がないわけではなかった。

「私がルルーシュ様にギアスをかけられたことがあるかと言えばYE Sだ」

「ゼロと枢木スザクを見逃した時のことですね」

「然り」

話を進める為にジェレミアは星刻の問いに対する分かりやすい返答して、神楽耶に問いかけにはつきりと頷く。

「では、今はギアスにはかかっていないと?」

ジェレミアの言い方からするにそう捉えたト部は率直に訊ねる。

「今の私にはギアスを解除する力がある。後付けで与えられた力ではあるがな」

そう言ったジェレミアは機械仕掛けの目元を触る。

「どこからそんな力を? いや、聞いてはいけないものなら」

「構わん。これもまた私を構成する一つだ。安易に誇るものでもないが恥じるものでもない」

自身を勝手に改造したバトラーを恨んだこともあるが彼の皇族への忠誠心は本物だったと敬意を抱いている。ルルーシュの修羅の道にギアスキャンセラーが役に立つのなら己が力を忌避する理由は彼にはなかった。

「ギアスを解除する力があるということだが、具体的にはどうやってするのだ?」

ト部の問いにジェレミアは触っていた目元を指し示す。

「キャンセラー発動時に私を中心とした一定範囲内のギアスを強制的に解除することが出来る」

「ギアスにかかっていなければ何の影響もないということでしょうか」

「その考えで正しい」

聞いた神楽耶は一寸考え、同じように考え込んでいる星刻をチラリと見てジェレミアに視線を戻す。

「効果範囲はどれぐらいでしょうか?」

「今、使うとするならば机の手前辺りまでだ」

神楽耶の意図を読み取ったジェレミアも星刻を見る。

二人の視線の意図を正確に読み取った天子を見下ろしたものの、領いてジェレミアの申告から更に距離を取って部屋の隅へと移動する。

「ギアスを解除する力、私達に使って頂いてもいいですか？」

「よかろう」

元より主の代わりに釈明にやってきたと言っても過言ではないジェレミアに否はない。

「……………何も変わりませんね」

左目を覆っていたカバーが外れ、ジェレミアの左目が数秒だけ露出しても何も変化はなかった。

「つまり、ゼロは俺達にギアスを使っていないのか」

星刻も戻ってきて僅かに目を細める。

「ルルーシュ様は必要もなく不用意にギアスを使う方ではない」

つまりは、ルルーシュは必要があると判断すればギアスを使う男であるとも取れる。

「ギアスのカウンターの力ですが、あなたはどこでその力を？」

「私を改造したのはギアス嚮団という今はもう存在しない組織だ」

「ギアス嚮団…………」

また聞いたことのない組織が出て来て天子が単語を繰り返す。

「ギアスを研究・開発するブリタニアの組織である。が、さっきも言ったように今はもう存在しない」

「それは、ゼロが極秘裏に零番隊を動かして虐殺を行ったと解釈しても？」

「構わん。そして私も参加していた」

新たな情報が出て来たことで神楽耶は僅かに目を細めてジェレミアを見る。

「結果について多くを語ることはないだろう。私にはこの体にされた恨みがあり、ルルーシュ様には奴らを決して許せぬ理由があった」

「その理由とは？」

許せない理由、と聞いて天子は興味を引かれた様子だった。

「私にも詳しいことは話して下さらなかったがルルーシュ様の身近な方が弑されたと聞いている。それに私という刺客が失敗したと分かれば次の刺客が送られると推測するのは容易。先手を打つ必要があった」

「だからといって虐殺を指示するのは」

「それはそちらがギアスの恐ろしさを知らぬからだ」

彼らを知るルルーシュの絶対遵守のギアスにしても、使い方次第ではとても恐るべき力となる。

ギアスとは得てして一点特化の脅威が有り、たとえ知っていたとしても、知っているからこそ恐れるものなのである。

「ギアスは目を合わせることで効果を発揮するものが多いが、中には超常的とすら思える類いの物がある」

ロロの体感時間停止のギアスも、ジェレミア以外が効果範囲に入った時に発動されれば防ぐ手段はない。

「子供から大人まで、誰がギアスを使うのか分からない以上、ルルーシュ様の判断は間違っていない」

「碌な反抗もなかったとのことだ。降伏を呼びかければ良かったはずだ」

降伏勧告も行わず、一方的な虐殺を行ってはブリタニアがやっていることと何も変わらないと星刻が目で語る。

「戦力はあったが数はそこまで多くない。我らのもう一つの目的であったV・V・に逃げられては何の意味もない」

「V・V・？」

「不老不死の存在だ。皇帝とも近しく、作戦上、監視されていたルルーシュ様が正体を明かすことで奇襲は奇襲足り得た。奴だけは決して何があろうとも逃がすわけにはいかなかった」

ルルーシュへの忠義以外は淡々と答えていたジェレミアが初めて怒気を覗かせる。

「奴こそ皇族に巣食う小賢しい子供の姿をした悪魔。ルルーシュ様からナナリー様を奪った元凶だ。決して許すわけにはいかぬ」

そこで怒気を収めたジェレミアはゆっくりと口を開く。

「奴はもう死んだがな」

叶うならば、この手で殺したかったと微かな悔いを覗かせ、言うべきことを言ったジェレミアは部屋を出て行った。

### 第三話 その罪は重すぎた

ジェレミアと入れ替わるようにやってきた者が一人。

「紅月カレンです。神楽耶様、お話したいことが」

声を張り上げたカレンの言葉に、ジェレミアが残した情報が強く頭に残っていた神楽耶はどうするべきかと判断に困って星刻と卜部を見る。

「扇達の件でしょう………ゼロの素顔をカレンは知っていました。恐らく俺よりももっと深いことも知っているはずです」

扇・藤堂・千葉、そして玉城真一郎に背信の疑いがあるとして部屋に軟禁されて数時間。

前者の三人に関しては、他人に話したのが卜部が最初だったので周りに広まることはなかったのに、玉城は大々的にゼロが裏切ったと触れ回っていた所為で斑鳩のほぼ全員がこの一件を知ることになってしまった。

ブリタニアに捕まっている間に洗脳などされていないかの精密検査や改修された紅蓮の調査に手を取られていたカレンが知ったのは恐らく一番最後。

「分かった。彼女に聞いてみるとしよう」

この場において、まだ年若い少女二人よりも実質的な決定権を持っている星刻がカレンを部屋に入れることを決めた。

「失礼します」

パイロットスーツから黒の騎士団の制服に着替えたカレンが緊張の面持ちで室内に迎え入れられた。

特使を追い返したとはいえ、フレイヤで消滅したトウキョウ租界の被害とエリア11中に走る混乱を収束させなければならぬブリタニア軍と即時戦闘になることはないとして、カレンもパイロットスーツから制服に着替えることが出来た。

「良く来てくれた、紅月君。いや、この場合は無事だったことを喜ぶべ

きか、そうさせてしまったことを謝るべきだろうか」

「そんな、あの時は敵だったわけですし」

カレンがブリタニアで捕虜としての扱いを受けたのは、元は中華連邦で敵だった星刻と戦っている時に紅蓮がエナジー切れを起こして捕まったからであった。

状況が変わって今は仲間になったとはいえ、カレンが虜囚の辱めを受けた理由の一端に星刻が関わっていることは間違いない。だからこそ、星刻は無事に戻れたことを素直に喜んでいいものか、カレンに謝るべきかと対応に困ってしまう。

「かけてくれ。場合によっては長い話になるかもしれない」

取りあえず、謝った上で戻って来れたことを喜ぶことで終わりとして、カレンは卜部の隣を勧められて座る。

「早速だが本題に入ろう。君はゼロの正体を以前から知っていたな」

「……………はい」

星刻に問いかけられたカレンはそうとしか答えられなかった。

「卜部からは同級生だったと聞いたが」

「私も最初から知っていたわけではありません。あのブラックリベリオンの時に知りました」

「ほう」

予想もしていなかった返答に星刻の目が細まる。

カレンは話し過ぎたと理解したが、一度口にした言葉は戻らない。話し続けるしかなかった。

「最初にルルーシュがゼロではないかと疑ったのはシンジユク事変の直後です」

このことはC・C以外には話していないので星刻達だけでなく卜部も驚いた。

「通っていたアツシユフォード学園で彼から接触があったんです。その時の様子からルルーシュがゼロではないかと疑ったのですが」

一度疑いを持てば、シンジユク事変でのゼロの声と似ていると思っ

た。

「その時は違うと思ったと?」



「ルルーシユが一枚も二枚も上手だったということです。私はゼロとルルーシユを別人だと判断してしまっただけです」

正体を知られているとなれば処理するしかないと考え、接触を図った際にゼロから電話がかかってきたのは今となってはルルーシユの作戦だったということになる。

「私がゼロの正体を知ったのは、扇さんにいなくなったゼロの後を追えと言われて、あの時にトウキョウから離れる白兎…ランスロットの行く先にいるはずだと思って辿り着いた式根島近くの島です」

「式根島の近くの島………ブラックリベリオン前にゼロがガウエインを奪った時の島か」

「はい」

「確かその島にシユナイゼルもいたとゼロのレポートがあつたな。いや、すまない。話を腰を折ってしまった。続けてくれ」

ガウエインは特異な機体であつたから、ブリタニア軍が起動実験などを行っていたと記されていたが不明な点も多い。

「私が追いついた時、ゼロは枢木スザクと対峙していました。そしてスザクはゼロの仮面を撃ち」

あの時に受けた衝撃は今でもカレンの心の奥深くに残っている。

「仮面が剥がれた時、その顔は」

「ルルーシユ皇子だった、と」

詰まった言葉の先を神楽耶が代弁し、カレンは小さく頷いた。

「枢木スザクはゼロがルルーシユ皇子であると知っていたのですか？」

「疑ってはいたようですが確信はなかつたようです。私の目には学園にいる時の二人は仲が良い様に見えました。昔からの知り合いだから彼ではないと信じたかつたと言っていました」

二人いれば出来ないことなんてない、とルルーシユがスザクに向けて言った言葉をカレンは何故か思い出した。

「まあ、そこはいい。問題はどうしてもルルーシユがトウキョウから離れたかだ」

「それは」

知っているカレンは言おうとして口を閉じた。当然、星刻が見逃すはずがない。

目で先を促す星刻にカレンは言わざるをえなかった。この場での黙秘はルルーシユの立場を悪くするだけだとカレンにも分かっていたから。

「ルルーシユの妹のナナちゃんが攫われたからです」

ト部がそんな理由で戦場を離れたのかと、横で目を見開いているのを感じながらカレンは言葉を紡ぎ続ける。

「ルルーシユはナナちゃんを溺愛してました。星刻さんにとっての天子様のように、ルルーシユの行動の大元には常にナナちゃんが存在があります」

ブリタニアへの憎しみもあるが、ルルーシユの行動は全てナナリーの為にと帰結する。

「だから、ナナちゃんが総督になった時、戦えないから自暴自棄になってリフレインを使おうとすられました」

「そうか……」

百万のゼロを作って追放される前の一幕であったことは、星刻にはナナリーの総督就任時期から簡単に予測が付く。そしてリフレインを使おうとした理由も、自分をルルーシユに、天子をナナリーに置き換えれば気持ちも理解する。

「ゼロの行動原理は理解した」

幼少期に人質として日本に送られ、お構いなく侵攻されては見捨てられたと思っても不思議ではない。

日本人ですら大変だった戦後の混乱期を生き抜いた苦労を思えばブリタニアへの恨みが骨髓となるのが普通。敵国だったブリタニアから送られて日本での扱いがまともだったとも思えないので、日本人を利用しようとしても無理からぬ面もある。

あくまで手段でしかなかったブラックリベリオンで日本を解放するよりも、攫われたナナリーを救出することを優先した。

「もう一つ聞こう、紅月カレン。君はギアスのことを知っているか？」  
「はい………スザクがルルーシユに向かって言っているのを聞き、

C・C・から詳しく聞きました」

C・C・とは一緒に逃亡生活をしていたので話す機会は幾らでもあった。その時に聞いたのだ。

「C・C・？ 黒の騎士団にそのような者がいたのか？」

V・V・とジェレミアが言っていた者と名前が似ていると思いなから星刻は話を進める。

「以前の黒の騎士団でも明確な役職はありませんでした。ナリタ戦の後に現れて、そのままなんとなくゼロの側近のような形で、玉城などはゼロの愛人ではないかと言うほどでした。ただ、超合衆国前から病気だとかでゼロの部屋から出て来ることはないのです」

「ふむ、ギアスのことに関してはそのC・C・という者に聞いた方が良さそうだな」

ト部の説明に星刻は結局、同じ帰結へと至る。

問題は今もゼロの部屋にいますというならば、ルルーシュに知られずにC・C・だけを呼び出すことは難しいことだ。

部屋の近くに洪古を、ブリτζジから通路を周香凜に見張らせているがルルーシュだけでなく誰一人として部屋から出て来たという報告はない。

「君はルルーシュがユーフェミアにギアスをかけたという日本人の虐殺のことに何か知っているか？」

「いえ、ただ、一度だけC・C・に聞いたことがあります。その時、当初の予定とは大きく違ったとだけ言っていました」

「当初の予定？」

と、別に意味を問うたわけではない星刻は、もしも自分ならばどうしたかを考えた。

「そうだな。私と同じ立場でギアスが使えるならば犠牲はもつと減らしただろう。例えばユーフェミアに自分を撃たせれば、ブリタニアが騙し討ちしたとして簡単に暴動が起こる。撃たせる位置だけは指定しておけば大した怪我も無く、特区は失敗して多数の日本人を味方につけられる……………」

虐殺を指示させるのは、やはりあまりにも効率的ではない。自身を

上回る戦略家であるゼロが分からないはずがない。

「これはやはり直接聞かなければならんか。しかし、分からん。ゼロは枢木スザクに捕まり、皇帝によって殺されたことになっている。どうして皇帝はルルーシュを殺さずに学生に戻した？ まさか今更、情でも芽生えたか？」

帝位争いを推奨する皇帝の考えとはとても思えない。

「皇帝のギアスで記憶を消されていて監視もされていたから殺す必要もなかったのでは？ アツシュフオードに戻された理由は分かりませんけど、C・C.には分かっていたように思えます」

ルルーシュがアツシュフオード学園にしていると知って驚いたカレンとは対照的にC・C.は反応が薄かったように見えた。

元より安易に感情を表に出すような女でないことは一年間一緒に逃げ続けた間柄だけに良く知っていたが、それにしても驚きが無さ過ぎたから改めて考えてみるとC・C.は理由を知っていたのではないかと邪推してしまう。

「皇帝もギアスを使うのか……」

「世界は知らずにファンタジーで一杯だったようすな」

これには星刻だけに限らず、下部も遠い目をする。

「皇帝に記憶を改竄する力があるということを知れただけでも良しとしましょう。この様子では他にもいそうですけど」

上に立つ者としては頭の痛い話であると、神楽耶も遠い目をする。

「あ、あのー」

天子があわあわとしながら皆を慰めようとする中で、カレンが手を上げて発言を求める。

「扇さん達はどうなるんでしょうか……？」

初めから擁護することは確定としてルルーシュとの話し合いには自分も参加する気満々のカレンは目下気になる兄代わりの進退を訊ねる。

「藤堂統合幕僚長以下の者達については、シユナイゼルの言ったことが全て事実だとしたら減俸などといった処分に着ち着くでしょう」

玉城は別にして、藤堂や千葉は得難い人材である。事実無根であつ

たならば厳しい処分になるが、全て事実だった場合は軽い処分となるだろう。それでも戦争が続く間という枕詞を神楽耶は意図的に続けなかった。

「但し、扇元事務総長だけは別です。彼に関してだけは、弁解の余地はありません」

今のところ、大体のことは事実であるので藤堂達が重い処罰を受けなくて済むことをカレンは喜ぶべきかどうか表情の選択に迷っている中で、彼女には残酷な真実を聞かせなければならなかった。

「評議会の許可なく、独断でブリタニアと交渉して自分達の国を取り戻す為にCEOを売り渡そうとしたことは、超合衆国への明らかな裏切りです」

そして今回の一件を扇が事実上、主導したと取られてもおかしくない言動をしたことも合わせて、軽い処罰など与えようものなら身内轟崩と取られてもおかしくないレベルにある。

「それだけではありません」

カレンには厳しい話になるが扇には他にも嫌疑がかけられている。

このことに関して神楽耶に話させるのは酷だと判断した星刻が引き継ぐ。

「千草………ヴィレッタ・ヌウとブラックリベリオン前から内通していた疑いがある」

「千草？ ヴィレッタ？ 誰ですか？」

そんな人物が扇の近くにいたとは知らないカレンが眉を顰める。

「日本解放戦線の救出の後に負傷していたブリタニア人の女性がゼロの正体を仄めかすようなことを口にしたことから保護したらしい。しかし、彼女は記憶を失っていたために聞き出すことは出来ず、仕方なく保護を続けることにしたと。名前も分からなかったから千草と呼んでいたようだ」

「そんなこと聞いたこともありません……」

当然、ゼロも知らないはずだったろうし、カレンが知らない以上は他の者にも報告はしていなかったのだろう。

「この時点で問題は幾つもある。ゼロでなくとも他の幹部、最低でも

君か、他の女性幹部に保護を代わってもらわなければならない。幾ら第一発見者だとしても男が女性を保護し続けるなど言語道断。ゼロと何の関係もなかったら彼女を探している家族や友人がいてもおかしくない。軍人として以前に、人として問題のある行動だ」

ヴィレッタが記憶喪失を装っていた可能性もあるのに、扇は選択を間違えすぎた。

「あのブラックリベリオンの時、扇が千草なる者と会った後に撃たれたとの証言もある。その千草の人相はヴィレッタと一致している」「私、多分、その人に会っています。ブラックリベリオン前のアッシュフォード学園の学園祭で親しそうにしていました」

学園祭で扇と一緒にいた日本人ではなかった女性が件の千草、もしくはヴィレッタ・ヌウなのだと思つてカレンは顔を真っ青にした。

「より内通の疑いが濃くなったわけか」

ト部も扇の人の好きを知るだけに、騙されたのだと思いたかった。「その後の経緯は語ろうとしなかったが、続きはデイトハルトが語ってくれた」

星刻としても話していて気の良い話ではなかった。

「ゼロが極秘行動中、合衆国憲章の批准を急いでいる時に扇がその前の会議から様子がおかしく、それ以前から何かを隠していると踏んだデイトハルトは諜報部に扇の内偵を命令している。そして諜報部は扇がヴィレッタと秘密裏に会っているのを見つけた」

味方だった男を吊るし上げるなど好んでしたいことではない。好む好まざるを得ずしなければならぬのが星刻達の立場だった。

「ヴィレッタを捕縛し、デイトハルトは扇を副指令の任に戻した。まあ、このことに関しては報告は必要だが、報告を受ける立場の当のゼロがまた単独行動を取っていたのでは安易には咎め難いところがある」

デイトハルトは食えない男であった。明らかかな責があるのにトップであるゼロに報告できなかつたと言われれば追及しづらい面を残している。

「トウキョウ租界が消滅した後、乗り込んできたシュナイゼル達のド

サクサに拘束を脱したヴィレッタからゼロの正体やギアスのことを聞いて真に受けた。そう信じさせた面がゼロにあったせよ、仮にも敵国の人間と宰相の言ったことを藤堂に信じ込ませた最後の後押しと、自分からゼロの身柄と引き換えに日本を返すように迫ったと確認が取れている」

背信行為だけでなく、これでは内通していると疑われてもおかしくない。

経緯を聞いて何も言えなくなったカレンと、ここまでとは知らなかった扇の行為に卜部は顔を俯けるしかない。

「扇要はその権限の全てを剥奪、その身柄は評議会預かりとなります………未遂に終わったとはいえ、厳しい処罰が下ることは避けられないでしょう」

各自の証言、扇自身が話したことも合わせればそうなくても仕方なかった。

立场上、接することの多かった神楽耶も沈痛の面持ちだった。

「……………しんどいな」

ポツリと漏らした卜部の呟きはカレンの思いと同じものだった。

## 第四話 告解

トウキョウ決戦から帰還した後、ロロを追い出してからルルーシュは斑鳩内の自室のソファから一步も動いていなかった。

動けないのではなく、動く気力が湧いてこない。

「ナナリー……」

ルルーシュの行動の指針であり、原動力であった妹であるナナリーがフレイヤによってトウキョウ租界と共に消滅したことで、廃人になったかのように生気を失っていた。

ゼロの私室には艦長の南や副指令の扇であっても入ることは出来ない。パスを持っているのはC・C・カレン・ロロ、そしてジェレミアの四人だけ。

ロロを追い出し、ジェレミアはナナリーの搜索をしてきている。カレンは分からないが用がなければ訪れることはない。最後の一人は――。

「ご主人さま、服を脱いで下さい」

もう何時間もソファに座ったまま動かないルルーシュを心配したC・C・Cが、以前の彼女ならば決して言わないであろう下手に出た口調で話しかけて来た。

「えっ?」

理由は不明だが記憶喪失になって以前とは別人のようになっていくC・C・Cにルルーシュは鈍い反応で僅かに顔を上げる。

C・C・Cはルルーシュの傍に両膝をついて心配げにルルーシュを見ている。

「どこか痛いんですか? 手の届かない所なら、私が」

そう言ったC・C・Cが手に持っている絆創膏を見たルルーシュは唇の端を僅かに上げる。

「ああ、そうだな。手の届かないところか」

超合衆国結成後、あの異様な空間と運命を共にしたはずのシャルル



が現れたことに動揺したルルーシユは話しかけてきたC・C・に考え事を邪魔されてイラつき、振るった手が彼女が持っていたピザの皿を弾き飛ばした。

その際に割れた破片で指を切ったC・C・の治らない傷に貼った絆創膏の残りを箱ごと彼女に渡していた。

「まだ持っていたのか、それ」

「はい！ 便利ですよ」

屈託のない笑みを向けて来るC・C・を見る度に、以前の彼女はいないので思い知らされる。

「ありがとう。気持ちだけで十分だ」

同じ顔をしているだけの別人と思おうとしても、人の心はそう簡単に区別がつくものではないが純粋な善意だけに死んだような心に僅かな情動を覚えて礼を言う。

「ゼロ……………ルルーシユ、入ってもいい?」

扉の外から聞こえる声に顔を入り口に向けると、ルルーシユ以外には人見知りの傾向があるらしいC・C・は壁際の本棚の陰に隠れてしまった。

「いいぞ、カレン」

カレンの性格を考えれば寧ろ遅すぎるぐらいの来訪に入室の許可を出す。

「失礼する」

すると、二重扉が開いてカレンだけでなく、もう一人の人物も部屋に入ってくる。

「卜部?」

カレンの後ろで固い顔をした卜部が初めて入る部屋であっても興味深げに辺りを見渡すような不躰な行為はしなかったが、本棚の陰に隠れるC・C・に気付いて目を見張った。

「ご主人様、服を脱いでください。私 頑張ってみますから」

当のC・C・は卜部に見られていることに怯えながらも精一杯の勇気を振り絞って言った。

「はあっ!?!」

あの傲岸不遜なC・C・にご主人様と呼ばせたり、服を脱いで何を頑張るのかとカレンは目を吊り上げる。

「何やってたのよ、アンタ達は！ 私が捕まってる間に——」  
「ち、違うっ!!」

尚も言い募ろうとするカレンを制したルルーシュだが死んだ心では意欲が湧き上がらず、顔を伏して元の体勢に戻ってしまふ。

「このC・C・はその……………記憶を失っているんだ」  
「えっ？」

「俺の所為で。だからお前達が知っているC・C・は、もういないんだ」

思い起こせば、ルルーシュの存在こそが悲劇の元だった。

クロヴィスにユーフェミアと、腹違いとはいえ嘗ては親しかった兄妹をこの手で撃ち殺し、シャーリーもルルーシュの因果に巻き込まれて運命を弄ばれた。そして最愛のナナリーすらも。

「カレン、よく無事でいてくれたな。救助が遅くなってすまなかった」  
顔も上げず、声に情動はない。

それでも今のルルーシュが他人を気遣えること自体がありえないことだった。

「ルルーシュ」

シャーリーが死んで、ナナリーもいなくなり、C・C・も以前とは違う。

カレンには何と云えば良いのか分からなかったけれど、彼女だから伝えられることもあった。

「私ね、ナナリーと話したわ。私のこと、助けてくれたの」  
「そうか」

「あの、こんな時に言うのもなんだけど、私もお兄ちゃんがいるから」  
「カレン、悪いが」

気持ち的には続けても構わないのだが、あまりにも個人的事情が絡み過ぎるから卜部がカレンの肩を掴んで止めた。

「ゼロ……………いや、ルルーシュ皇子。二、三、君に聞きたいことがある」

ト部がゼロではなくルルーシュと呼んだことは別に問題ない。ただ、皇子と敬称を付けたことを除けば。

「何が聞きたい？」

どこから、誰から聞いたのかと考えたルルーシュは意味の無いことだと全てを諦めて問いを待つ。

逆にト部からすれば最低でも誰から伝えられたのかと聞かれるぐらいは思っていたのに、当のルルーシュは驚くほど素直に、そして無気力に問いを待っている。

「帝国の皇子であることを否定しないのか？」

「知られているのなら否定に意味はない」

本当にそうだろうか、とルルーシュの死んだ目を見たカレンは思ったが口に出すことはなかった。

「まあ、情報源が気にならないわけではない。カレンではなさそうだし、デイトハルトも喋る奴ではない。となれば、捕虜にしていたコーネリア辺りが脱走でもしたか」

一抹の興味はあったが然して知りたいと思っているわけでもないから口の赴くままに話していた。

「シュナイゼルだ」

「……………どうやら事態は随分と進んだようだな」

情報源がシュナイゼルだと明かされば自室で動いていない間に事態がルルーシュの手を大きく離れてしまったことを自覚しても、まだ活動への意欲が湧いてこない。

「大元の情報源はスザクか」

些か予想外の相手からの情報流出に僅かなりとも思考へのリソースを割いたルルーシュの頭脳が正解を導き出す。

「シュナイゼルに俺の正体が知られてしまっている。あのトウキョウ決戦でシュナイゼルを倒せなかった以上、黒の騎士団を切り崩そうとするのは当然か」

シュナイゼルと同じ立場だったならばルルーシュも同じことをするだろうから驚きはなかった。

相手の心理を読み切り、敗けない勝負しかないシュナイゼルのこの

手にルルーシユは自身の末路に見当がついた。

「初めは停戦交渉という名目でやってきた、シユナイゼル本人が」

「自信があつたのだらうよ。そうだな、トウキョウ租界を消し飛ばした重戦術級弾頭を持つていたんだらう」

「ああ、その通りだ。護衛のナイトメアがフレイヤ弾頭を積んでいたから捕まえることも出来なかつた」

ゼロであるルルーシユに連絡を取ろうとしても繋がらなかつた、とも捕捉する。

「俺の引き渡しを要求されたか？」

連絡がつかつたことを詫びもせず、ルルーシユは淡々と問う。

「最初は誰も、その要求に応えようとはしなかつた」

「ここからは又聞きの話になつてしまふが、それでも言わなければならぬト部は苦い物を食べた時のように顔で続ける。

「ギアスのことを聞くまでは」

「……………」

ルルーシユは眉をピクリと動かしただけで、それ以上の動きを見せなかつた。

「教えてくれ、ルルーシユ。皇族である君がゼロとなつてブリタリアと戦う理由を」

ト部の服に仕込まれた小型カメラを通して神楽耶達が見守る中で、ルルーシユはふうと重い息を吐いた。

「八年前、母を殺された」

一見関係ない様に思えても、ある程度の事情を後になつて知ることが出来た神楽耶は目を伏せた。

「元ナイトオブブラウンズとはいえ、庶民出身の母が亡くなつたことで後ろ盾も失つた俺達は人質として皇帝の命で日本に送られた」

「ナナリー皇女と一緒に？」

「ああ、護衛もなく、ほぼその身一つだけだな。後ろ盾のない俺達を外交の道具として利用しようとしたんだらう」

目と足が不自由な妹を抱えた、まだ年齢が二桁になつたかどうかの子供の苦勞は推し量ることすら出来ない。

「しかし、分からない。当時の日本とブリタニアの関係はかなり悪かったと記憶している。子供である君達をどうして日本に送るなんて」

「生きていない」

理解できない、とト部が続けようとするのをルルーシュは意味不明な言葉で遮った。

単語自体は理解できる。しかし、話の流れとしては意味不明であった。

「お前は、生まれた時から死んでおるのだ」

話の流れを打ち切っても、ルルーシュは今も記憶の奥底でジクジクと疼く傷を自ら開く。

「身に纏ったその服は誰が与えた？ 家も食事も、命すらも、全て儂が与えた物」

儂、という一人称を吐いたルルーシュの口から言葉が誰のものであるかは出自を考えれば鈍いカレンにも分かった。

「つまり、お前は生きたことは一度もないのだ。しかるに、なんたる愚かしさ………分かるか？ あの男にとって俺は、俺達の存在はその程度に過ぎない。だから、俺はアイツの全てを否定し、自分の力で生きてやると決めた」

一人で皇帝と対峙し、しかし何も出来ずに臆した愚かな過去。あの時の悪夢を見て飛び起きたことは一度や二度ではない。所謂、トラウマというものなのだろう。

「当時の日本国首相である枢木ゲンブが俺達を受け入れたはつきりとした理由は分からん」

国境線で睨み合い、軍拡と情報戦の真っ只中で当時の首相であった枢木ゲンブにとってルルーシュ達兄妹を受け入れる利点はなかったはずだった。

「名目通り人質として利用しようとしたのか、ナナリーと婚約しようとしていたこともあったからブリタニアに入ろうとしたのか、今となっては知る由もない」

「ナナちゃんと婚約!?!」

ルルーシユと同一年のスザクの父親となれば、確実にナナリーとは一回り以上は違う年回りなはずであった。

貴族間ではそれだけの年の差婚があると理解していても、好きな相手と添い遂げたい当たり前の願望があるカレンとしては承服できることではない。

「当然、破談にしたさ——俺とスザクでな」

その瞬間だけ、僅かに表情を綻ばせたルルーシユも直ぐに死んだ目に戻る。

「ねえ、ルルーシユ。あなたは私達を、日本をどう思っているの？」

ゲンブのこと、スザクのこと、ルルーシユが日本をどう思っているのか思い計ることが出来なかったからカレンは直接の問いをぶつけた。

「与えられた住居は土蔵だったし、俺は袋叩きにあったこともある。トドメにトップはロリコンときた」

好意的に捉えられる要素は皆無であった。

この場においてルルーシユが嘘をつく必然性はなく、ト部であつてもちよつと祖国が嫌いになりそうな心境である。

「ただ、まあ、あの時なら死んでも良かったかもしれないと今なら思う」

淡く笑つたルルーシユの目の奥に誰がいるかなどト部には知る由もない。

「ブリタニアと開戦して日本が敗れた後は？」

「俺達のことには死んだことにしてアツシユフオードの庇護下に入った」

「どうして？ ブリタニアに戻るって選択肢もあつたはずなのに」

「二度、外交手段として利用されたんだ。二度目がないと思うほど馬鹿じゃない」

間接的にそこまで頭が回らなかつた自分は馬鹿なのだろうかとかカレンは少し落ち込んだ。

「それでも身元が発覚すれば元の木阿弥だ。名前を偽り、経歴を偽造し、隠れるように過ごさなければならなかつた」

敢えてルルーシユは口にしなかったが、日本が戦火に巻き込まれる前に実際に暗殺者が送り込まれている。

ゼロとして立つてからも何時身元を暴かれるか、命を狙われるのかと不安を抱えて過ごさなければならなかった。

「そんな状況ではまともな職にもつけない。独自に金を稼いではいたが、たかが知れている。アツシユフォードも何時までも匿ってくれるか分からない。だから、俺は」

不安定な立ち位置を万全な物とする為にはブリタニアがどうしても邪魔になる。

ブリタニアの日本侵攻の時に死亡したことにしたから正規の戸籍なんて無い。そうなれば、パスポートは発行出来ない上に結婚も出来ない。将来、自由な職に就くことも不可能である。

匿ってくれたアツシユフォードも何時までも皇族に戻る気もない元皇子と皇女を匿ってくれる保証もない。下手に身元がバレたら、帝国内に叛意を疑われかねないリスクも抱えているのだから。

「ゼロという仮面を被ってブリタニアに反逆を始めた、と」

ルルーシユが反逆を開始した経緯を聞き、ある程度は納得した卜部は渋い表情を浮かべる。

「クロヴィスやユーフェミアもそうして殺したの？」

厳しい問いであると自覚してもカレンは聞かすにはいられなかった。

「目的を遂げる為に例外はない。たとえば昔は仲が良かったとしてもだ」

ルルーシユは過去の記憶を想起する。

あのアリエスの離宮で、クロヴィスは何度もルルーシユにチェスを挑んできた。負けたことはないが、傍から見れば仲が良かったと言えるだろう。その腹違いの兄をルルーシユは撃ち殺した。

「我ながら細い神経だったよ。クロヴィスを殺した後、思い出して何度も吐くなんて」

思えばギアスの力を得たことよりももっと、クロヴィスを殺したことがルルーシユにとっての大きな契機となった。

過去の繋がりを自らの手で切り払ったことでルルーシュはもう後戻りが出来なくなつたのだから。

「ギアスは？　ギアスを使えばクロヴィスを殺さずに隷属させることも出来たはずだろう」

「そんな都合の良い物じゃない。同じ相手には二度は使えないからな」

「つまり、既にクロヴィスにはギアスを使っていたのか？」

同じ相手に二度は使えない、という文言を頭に刻んだト部は質問を重ねるとルルーシュは薄く笑った。

「俺がブリタニアを壊そうとしたのは、ナナリーが安全に暮らせる世界を作ることと、もう一つ母を殺した犯人を見つけることだ。皇族であるクロヴィスなら何かを知っていると思つたが大したことは知らなかつた」

つまり、クロヴィスには母の犯人を知るかどうかのギアスを使つたと納得したト部。

「二人に一回しか使えないにしても、君ほどの頭の良さならもつと簡単に、より直接的にブリタニアに抗する方法もあつたはずだ」

ト部が考えられる範囲でも、ブリタニアの貴族の使用人等にギアスをかけて従わせて主の下へ連れて行かせ、ギアスをかける。似たような流れで次々とギアスをかけていけば、大きな苦勞もリスクも背負うことなくブリタニアと戦えるはずである。

「現実では仮面を被り、黒の騎士団を作るっていう回りくどい方法を取っている」

仮面を被つて戦鬪集団を作つて国家連合を作つてと、ト部からすればルルーシュのやり方は面倒臭い方法にしか見えない。

「ギアスの力は大きい。それに溺れれば目的を見失う。第一、俺が壊したいのはブリタニアの今の在り方と皇帝であつて、ブリタニアで暮らす人々に進んで危害を加えたいわけじゃない」

例外はないと言いながら手段を選んでいるのだと言うルルーシュの理屈に、ト部だけではなく聞いている神楽耶達にも意味が分からな

いだろう。



「私、ちよつと分かるかも」

卜部の隣でカレンがボソツと呟いた。

「学園に通ってた頃、体が弱い設定の私をみんな心配してくれてて、敵国の人間だって分かつてても憎むことは出来なかった」

彼らに悪意はなく、彼らに害意はなかった。それだけに無自覚な悪意があるのだとも知った。

「本当に、あの頃に戻れれば」

遠い目をしたルルーシュはここではない過去を想う。

まだ罪を背負う前、嘘を抱えながらも今ならば満ち足りていたと思えるあのアリエス宮を、学園の日々を。

## 第五話 ゼロという記号

もう戻れぬ安息の日々。ルルーシユの人生はあまりにも悲劇に満ち満ちていた。

「ユフィの時もそう思った、あの時に戻ればと。何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も!!」

ガン、とルルーシユは振り上げた腕で自分の膝を強く打った。

「教えてくれ、ルルーシユ。ユーフェミアに日本人を虐殺しろってギアスをかけたのか?」

「かけた。言い訳のしようもないほどにな」

結果はそうだとしても、皆が知るような過程では決してない。

「ユフィには神根島で正体を知られていた」

「えっ!?!」

自分よりも早くゼロの正体を知った者がいると知ってカレンが目を剥く。

「彼女は簡単にゼロの正体に辿り着いた」

七年振りの川口湖での対峙の際、仮面越しの対面で疑念を抱かれ、神根島で正体を知られた。

ルルーシユの迂闊な発言があったにせよ、普通ならば気づかない疑念から答えに辿り着けたのは単独ではユーフェミア以外にいなかった。

「学園祭でユフィが特区日本を明かしたのは俺達とアツシユフオードで会ったからだ」

ユーフェミアもまた無自覚な悪意でルルーシユの、ゼロの目論見を挫こうとしていた。だからこそ、ルルーシユも対抗する策を練って特区に臨んだ。

「特区会場で本来ならユフィをギアスで操って、持ち込んだセラミツクと竹で作ったニードルガンで俺を撃たせ、特区はゼロを騙し討ちする為の大掛かりな作戦だったとするつもりだった。だが、直接話した

ことで彼女は俺とナナリーの為に行動していたと分かり、俺を撃たせる作戦は取り止め、特区を活かした戦略を立てる約束をした」

皇籍奉還特権を使い、皇族であることを捨ててまでルルーシユを守ろうとしてくれた。

皇族でなくなることがどれだけ大変な事かを身を以て知っていたルルーシユだからこそユーフェミアの覚悟に絆された。

「なのに、予定外のこと起きた」

そう言つて左目に嵌めているコンタクトを外し、暴走したままの目を曝け出す。

「ギアスが危険な力だとは重々承知していたはずだった。絶対の味方であると慢心して、彼女ならば絶対に取りえない行動を取らせることが出来る力があるのだと冗談で言った」

日本人を殺せ、とギアスが暴走してしることに気が付かずに。

「そ、そんな冗談で言ったことまでギアスが発動してしまうなんて馬鹿なことがあるっていうの？」

「ギアスが暴走していることに気が付いていなかった。ユフィの異変に気付いて止めようとした時には遅過ぎた」

理由はともちっぽけで、カレンが思わず呆然とするぐらいにタイミングが悪かった。

「会場に向かったユフィは俺が持ち込んだ銃を撃ち、兵士達はギアスで操られていた彼女の命令に従って虐殺を始めた」

ルルーシユが冗談であんなことを言わなければ。

ギアスが暴走さえしていなければ。

スザクやSP達が気絶さえしていなければ。

兵士達が命令に従わなければ。

「せ、せめて私達にだけでも言ってくれれば……！」

「言つてどうなる？」

「……………それは」

カレンは言葉に窮しながらも、真実を教えられても戦えるはずがないと分かっているから何も言えなくなつた。

「会場でまだ生き残っていた日本人に言われたよ。救世主だと、希望

だど。俺は、背負うしかなかった」

様々なIFに最早、意味はない。

「罰を望むのは簡単だ。真実を公表し、俺を、ゼロを糾弾させればいい。だが、それをしてどうなる？」

ゼロと黒の騎士団は、後者が無くなっても前者が存在していれば日本人は希望を抱き続けられる。しかし、ゼロあつての黒の騎士団であつてその逆はない。

あの時、あの瞬間において、ゼロこそが日本人達の希望だったのだから。

「あの状況を最大限に利用するしかなかっただろう。あの時点で全てがゼロの責任であると知れば日本人は二度と立ち上がれなくなる」  
真実の重みに押し潰されそうになりながらも、卜部もルルーシュの選択こそが最適であつたと認める。

黒の騎士団こそが日本人達の希望だった。その中心にいたゼロこそが虐殺を命令したと分かれば、二度と希望を抱くことも出来なくなる。

「死んだ者達に報いるには進み続けるしかない。許されないことだと分かつていても」

最適だから傷つかないわけではない。最適だと分かつていて、修羅の道を進まなければならぬからこそ傷つくのだ。

「修羅の道だと覚悟していた。クロヴィスを殺した時から、シャリーの父親を巻き込んだ時から、俺に辿り着いたヴィレッタを撃つたシャリーリーの心を守る為に記憶を消した時から」

どれだけの犠牲を出そうとも、積み上げて来た犠牲の数だけルルーシュは止まることが出来なかった。

「あんなユフィは見たくない。あの時はギアスを解除することも出来なかった以上、更なる犠牲を出す前に俺が撃つしかなかった」

ルルーシュが知らず組み合わせていた手を離すと、強く握り過ぎて指の痕がしっかりと残っていた。

「これが事実だ」

「……………ゼロがトウキョウを離れたのは？」

何と言っているのか分からないト部は、次の疑問を口にする。

「ジェレミアに襲われたというのもあるがナナリーが攫われたからだ」

もうルルーシユに隠す理由はない。

「我々を見捨てたど？」

「優先度の違いだ。俺にとって日本解放よりもナナリーの方が優先度が高かった。ただ、それだけだ」

ギリツとト部の噛み締めた歯が鳴った。

「が、何も思わないわけではない。彼らには申し訳ないと思うし、今まで俺がやったことも考えれば碌な死に方はしないだろうな」

その報いが世界を敵に回してでも守りたいと思っていたナナリーの死だとするならば相応しいとすら言えるだろう。

「中華連邦でブリタニアの物と思われる施設で虐殺を行ったのは何故だ？」

ただ、妹との為に。ルルーシユの行動は一貫していた。それに納得できるかどうかは別にして。

「あそこはギアス嚮団と呼ばれるブリタニアの研究施設だ」

「ギアス嚮団？」

ジェレミアが話していた時にはおらず、初耳の単語にカレンは問い返していた。

「ギアスの存在が人を苦しめる。シャーリーは最後までギアスに翻弄されて殺された」

「やっぱり自殺じゃなかったのね」

スザクから聞かされたシャーリーの死の真相に目を見張ったカレンは目付きを鋭くする。

「誰？ 誰がシャーリーを殺したの？」

ブリタニアの鑑識は自殺と判断し、スザクはルルーシユを疑っていた。

「口ロだ」

「何っ!？」

「シャーリーの記憶が戻ったから殺したと、俺にハッキリ言ったよ」

名前を聞いてもカレンは誰のことか分からなかったが、虐殺の前後から黒の騎士団に参加していた口口を知るト部は幼い少年の顔を脳裏に思い浮べて目を剥く。

「ギアスが効かないジェレミアの情報で嚮団の位置は掴めていた。アイツだけは絶対に許さない！ ボロ雑巾のように使い倒して殺そうとして、その時を逃してしまった……………」

強く握られた拳は振り下ろす先がなく、怒りが長続きしないルルーシユの声だけが虚しく響く。

「ギアス嚮団に殲滅の指示を出したのは俺なりの贖罪であり、ブリタニアにギアスを使われる前に対処しておくためだった。そして嚮団にはブラツクリベリオンの時、ナナリーを攫ったV・Vもいた」

「V・V？ ジェレミアも言って名前だが、C・Cと名前の響きが似ているから彼女の縁者か？」

「二人は兄妹や親子ではないし、血縁もない」

ト部がもしやと考えた可能性は切り捨てられた。

「あの二人はコードと呼ばれるものを所有している。不老不死でギアスを与える力がある」

「じゃあ、ルルーシユにギアスを与えたのは」

「C・Cだ。シンジユクでカレン達のテロに巻き込まれた俺は毒ガスとされていたC・Cからギアスを与えられた。皇帝にギアスを与えたのはV・Vだろう」

これで謎とされて来たC・Cとルルーシユの関係性も見えて来た。

「V・Vを追い詰めた時、気が付けば異常な空間に皇帝と共にいた。理由は分からないが千載一遇のチャンスを見逃すわけにはいかない。ギアスをかけて皇帝を自殺させた。だが、奴は既にV・Vからコードを奪って不老不死になっていた……………」

もう驚くことばかりでカレンもト部も驚くに驚けなかった。きつと映像を見ている神楽耶達も同様だろう。

「そこへC・Cが現れた」

一瞬、痛みを持って放たれた言葉にカレンがルルーシユの顔を見る

も、目は死んだままだ。

「C・C・の望みは死ぬことだった。それが俺と契約してギアスを与えた理由だ。ギアスの暴走を超えて制御した達成人だけがコードを継承して、コードを持った者を殺すことが出来る」

「そんな、C・C・!!」

カレンが未だ本棚に隠れるようにして身を擧めているC・C・の名を叫ぶと、記憶の無い彼女は怯えてますます身を引つ込める。

「ブラックリベリオンの後、スザクによって捕まった俺は皇帝の前に連れ出され、記憶を改ざんされてアツシユフオード学園に戻された。本来ならば殺してしまった方が後腐れが無い。そんな無駄なことをしたのは、俺を囮にしてC・C・を誘き出す為だろう。話を聞いた限りでは。皇帝の計画にはC・C・のコードも必要だったようだからな」

そんなC・C・の姿をチラリと見たルルーシユは、やはり直ぐに視線を切つて俯く。

「……………最終的にC・C・は皇帝を裏切った。だが、あの空間から出た後、C・C・は記憶を失っていた。理由は、分からない」

だから、今のC・C・を責め立てたところで意味はない。

「皇帝は死んだと安心してた。もしくはあの空間に置き去りになったことでナナリーの安全は確保されたと俺は思い込んだ。超合衆国結成後、皇帝が姿を現すまでは」

この時点においてもルルーシユの中でナナリーの優先順位が一番なのは変わっていないかった。

「人質を通じる相手ではないからコーネリアがいても利用できない。超合衆国に俺の存在を明かしても黒の騎士団が瓦解して、ナナリーを助けても受け入れる国が無ければ何の意味もない」

打てる手を考えて、考えて、記憶を失っているC・C・との会話で一つの方法を取った。

「俺はスザクに助けを求めた」

「それは…………」

カレンにだつてナナリーを助けるにはそれしかないと思う。だが、

二人の関係性を知るからこそ、不安は大きい。

「失敗だったよ。スザクとの約束通り、俺は一人でエリア11の樞木神社に赴き——裏切られた!」

憤怒にルルーシユの肩に力が入る。

「隠れていたシユナイゼルの手の者に捕まえられた。またスザクは俺を売り払った!」

ルルーシユの身と引き換えにナイトオブブラウンズの地位を得たように、一度は心の底から信じられると思ったところで前例があっただけに裏切られたと思っても無理はない。

「俺はもう信じることを止めた。友情は裏切られたから」

嘗てとはいえ、命よりも大事なナナリーを預けても良いと思えた親友に裏切られたルルーシユは他人を信じることが出来なくなった。

「だから、トウキョウ決戦でスザクがフレイヤのことを言っても信じることが出来なかった?」

「……………ああ」

「俺も同じ状況になれば信じれたとは言えんな」

経緯を知れば納得するかどうかは別にして理解はする。

「それで」

十数秒後、無言の間を挟んでルルーシユが口を開く。

「俺をどうするのか。決めたか?」

「どうするって」

「殺すか、シユナイゼルに引き渡すのかってことだ」

あまりにも軽く自分の去就を口にするルルーシユの裡に広がる虚無を間に辺りにした卜部は唇を噛んだ。

「ナナリーのいない世界などに未練はない。好きにするといいさ」

自身の命とナナリーの命ならばどちらを選ぶと聞かれれば、即答でナナリーの命と答えるルルーシユにとって今の世界は全てが色褪せていた。

「ルルーシユ、これを被って」

カレンは自分ではなくシャーリーがこの場にいれば、ルルーシユはこのような馬鹿なことを言い出さないと確信を持って言える。



結局、自分ではシャーリーの代わりに、ナナリーの代わりも出来ないとかレンは知っていた。知っていたから彼女なりのやり方でルルーシユを発奮させる。

「ん？ ああ……」

目尻を吊り上げたカレンがテーブルに置きっぱなしになっていたゼロの仮面を持ち上げてルルーシユに手渡す。

「一体何のために？」

「いいから、早く被りなさい！」

「わ、分かった」

手渡された仮面を持って仁王立ちしているカレンを見上げると、急かされたことで訝し気ながらも被る。

「これで良いのか？」

「ええ、じゃあ」

仮面を被ったルルーシユに向けて一歩踏み込み、カレンはその右拳を振り上げた。

「この——大馬鹿野郎おおおおお!!」

「ぐはっ!」

カレンの固められた鉄拳がルルーシユをゼロの仮面ごと殴り飛ばした。

事態の流れを静観していた卜部が啞然とするほどに、文字通りに殴り飛ばされたルルーシユが背中から床に大きな音を立てて倒れ込んだ。

「だ、大丈夫か……？」

仮面の上から殴りつけたカレンの手と、仮面を被っても殴り飛ばされたルルーシユのダメージ、はたしてどちらを慮って言ったのか卜部にも分かっていなかった。

「へっ、平気っ!!」

真っ赤になって痛みにプルプルと震わせる拳を抱えたカレンは涙目を浮かべつつ、自分は何ともないと平然を装った。全然、装えてはいないが。

「……………ぐう、無茶をする」

当のルルーシユは殴られた衝撃によってグワングワンと揺れる頭を抑えながら体を起こす。

打ち付けた背中では痛い。ブラックリベリオンでスザクに仮面を撃たれて無理矢理に外された経験から防弾仕様になっていたお蔭で、衝撃はあつたものの殴られたダメージ自体は大したことはない。

揺らされた頭は気持ち悪くなるほどの気持ち悪さで、ルルーシユは仮面を外そうとした。

「外すな！」

カレンの大喝によってルルーシユの手は止まる。

「私はシャーリーみたいに優しくないし、ナナちゃんみたいに可愛くもない」

カレンは体を起こしたルルーシユの下へと、ズキンズキンと痛む拳を抱えたままゆつくりと歩み寄る。

「藤堂さんやト部さん達みたいに部下を率いることも出来ない猪武者よ」

個人の武勇だけは誰にも負けないと自負しているが、言ってしまうば個人で出来ることがカレンの限界だった。

「ギアスのことも、アンタの出自のことも、他の人よりは知っていたはずなのに何もしようとしなかった」

ルルーシユは信じず、ゼロを信じると言い切った。そのことに後悔はない。

後悔はないが、あのバベルタワーの一件以来、カレンはルルーシユに踏み込まなかった。ルルーシユから踏み込んでくれることを期待していた。実際、百万のゼロを作って中華連邦に渡った当初、ルルーシユは少しだけ歩み寄ってくれた。

「頼って甘えて、秘密を明かせないとしても無理ないぐらい私達は弱かった」

誰もがルルーシユに、ゼロに縋っていた。

ブラックリベリオンの時、ゼロがいなくなっただけで負けたほどに。

「アンタには日本人に夢を見せた責任がある。それは私達も同じよ」

もう、ゼロだけが希望なのではない。

ゼロが希望の中心にいるのは変わらないとしても、その規模を増した黒の騎士団にも相応の責任が求められる時が来た。

「ごめん、ルルーシユ。アンタ一人に何もかも背負わせてきた」

一度は神根島で見捨てた負い目もあった。

私的な事情よりも仕事を優先したなんていうのは言い訳に過ぎない。黒の騎士団の中で、C・Cに次いでルルーシユに近いところにいるなら何もしようとしなかった罪は重い。

「カレン」

カレンの熱は確かにルルーシユの心を震わせた。

「俺は、あの日からずっと嘘をついていた。生きてるって嘘を、名前も嘘、経歴も嘘、嘘ばかりだ」

それでも捨てられない物は多かった。

ルルーシユという名前も、ナナリーのこと、胸に常に燻り続けて来た気持ちも。

「全く変わらない世界に飽き飽きして、でも嘘つて絶望で諦めることもできなくて。だけど手に入れた。ギアスという名の力を……」

たとえギアスがなかったとしても、ルルーシユは何時か反逆を始めただろう。

過程も末路も違ったものになっただろう。ギアスはあくまでも反逆を始めるきっかけに過ぎないのだから。

「ずっと嘘を続けて来た。多くの人の人生を歪ませてきた。謝っても許されることはない」

己が望む通りに進める為にギアスで操った人々や、ルルーシユの行動によって人生を狂わされて来た者は多い。

「俺はどうやって彼らに償えばいい？」

ルルーシユが心の奥底に押し込めて来た罪悪感がそう言わせていた。

「私に分かるわけじゃないじゃないー!」

カレンにだって罪がないわけではない。

最前線で多くのブリタニア兵を殺して来た。嘘について抵抗活動

を続け、学園を占拠して一度は友達だった生徒会の皆にも牙を見せた。

「みんな大なり小なり罪を犯してるわ。償う方法なんて私にだって分かんないわよ。それでもまだアンタは、ゼロはブリタニアと戦う多くの人の希望なのよ！」

「俺は奇跡など起こせない！ 全ては計算と演出、ゼロという仮面は記号なんだ。嘘をつくための装置に過ぎない……」

「そんなこと、みんなが知るわけないでしょうが！」

枢木神社でスザクにも言ったことをもう一度繰り返し、諦めているルルーシュに向かってカレンはもう一回殴りつける。

「嘘が嘘だって分からなければみんなにとっては真実になるわ」

「俺に嘘を吐き通せというのか？」

嘘を本当にしてしまえば虚構も真実となる。

ルルーシュが騙ったゼロの正義の味方という仮面を貫き通せと、奇しくもスザクと同じことをカレンは言ってしまった。

「今度はその秘密を一人で背負わせたりしない。ルルーシュが背負っていた物を、私にも背負わせなさいよ」

嘗てルルーシュに最後まで騙しとおせと言った責任がカレンにはある。

「だとしても、俺にはもう嘘を吐き通す理由が」

「私を理由にしなさい」

完全に口を挟むタイミングを逃した卜部と、彼の服に仕込まれた小型カメラを通して神楽耶が見ていることも忘れていた様子のカレンは更に言い募る。

「シャーリーの代わりや、それこそナナちゃんの代わりにならないのは百も承知よ。でも、一度はゼロであることを止めようとしたルルーシュを引き止めたのは私だから」

ルルーシュがゼロを続けることを決めたのは、学園に戻って屋上で花火を上げていた生徒会のみなどと話したことが理由だったのだが言わぬが花なのだろう。

「爪の先から髪の毛まで私の全部をあげる。だから」

「……………まるでプロポーズみたいだな」

「ぶ、プロっ!?!」

そこまでは考えていなかったカレンはルルーシュに改めて指摘されて顔を真っ赤にしたが、口をギュッと引き結んでゼロの仮面に手を伸ばす。

「これは契約よ」

外した仮面を脇に置き、ルルーシュの頬に手を添えたカレンはその唇と自身の唇を重ね合わせた。

「……………もう俺の戦いはナナリーの為だけじゃなかった。分かっていたはずなのにな」

離れた唇を自嘲気味に歪めたルルーシュは一度きつく目を瞑り、また開いた。

「ありがとう、カレン。目が覚めた」

瞳に鋭気を取り戻したルルーシュは離れたカレンの脇に置かれたゼロの仮面を持って立ち上がった。

「あの日から俺はずっと彷徨っていたのかもしれない」

まだ仮面が必要なかった幼き幸福の日々から弾き出され、多くの者達と出会いと別れを繰り返して来た。

「名前も、経歴も、手に入れた力も、全部、俺にとっての本当を見つかる道だったのかもしれない」

今、ルルーシュの手に残った物は少ない。

答えは見つかっていた。誰に求められるでもなく、罪を償う道はたった一つしか残されていなかったからルルーシュは言わなければならなかった。

「カレン、素直に気持ちは嬉しいと思う。どれだけ感謝しても足りない」

「ルルーシュっ!?!」

恐らく勘違いしているであろう真っ赤になって悶えているカレンを置いて、背を向けて歩き出したルルーシュは執務机へと向かって目的の物を見つけた。

「罪は償わなければならない」

手を伸ばして、ペンボックスに差し込まれている万年筆を取り出す。

「俺という存在がシャーリーを殺した。俺という存在がナナリーを殺した」

シャーリーはルルーシユの傍にいたから、ギアスに纏わる争いに巻き込まれて死んだ。

彼女の一生を弄んだギアスとそれに関わる者を抹殺する為にギアス嚮団という存在自体をこの世から抹消した。これしか彼女に償う方法はないと思ったから。

「ギアスが罪と言うなら、もっと先に行うことがあった」

手の中の万年筆をクルリと向き変えて、筆先を上に向ける。

「まさか……っ！ 止めなさいっ!!」

ルルーシユが何をしようとするのか分かったカレンが止めようと床を蹴るがルルーシユの行動の方が早い。

「もっと、早くこうするべきだった!」

ルルーシユは、万年筆の筆先を自身の左目に突き立てた。

「ぐうっ!! ぬっ、ぎいっ!!」

後一步が足りなかったカレンの目の前で、呪われた力を宿した左目を自身の手で傷つけたルルーシユから血が迸る。

紅蓮聖天八極式の機体装甲の色と同じ真っ赤な血がカレンの頬に飛んできた。

「ゼロ、何を……」

「……………これは、ケジメだ」

突き刺した万年筆を抜き、痛みで全身を震わせながら卜部に答えたルルーシユは笑っていた。

「シャーリーもナナリーも死んだ。ルルーシユもギアスも、たった今死んだ。俺は——私はゼロだ」

血が流れ続ける左目をそのままに、ルルーシユはゼロの仮面を被る。

「悪いがカレン、君と契約は結べない。正義の味方に特別な者はいはいけないのだから」



カレンもト部も、ト部が持つ小型カメラを通して神楽耶達も置き去りにして、唯一残っていた名前すらも捨て去ったゼロが黒の騎士団CEOとして命令を下す。

「ルルーシユとしての私心を完全に消し去る為に」

正義の味方であるゼロとして完成する為に、ルルーシユは過去に決着を着けに行く。



## 第六話 掌の外

エリアー1のブリタニア軍の旗艦であるアヴァロンの貴賓室で、部屋に似合う豪華なソファに身を沈めざるをえないジノ・ヴァインベルグは目の前に座る男——帝国宰相シュナイゼル・エル・ブリタニアを睨み付けていた。

「シュナイゼル殿下、本気でスザクに皇帝陛下を暗殺させるおつもりですか？」

シュナイゼルの親衛隊二人に槍を突きつけられ、更にシュナイゼルの後ろに立つカノン・マルデー二伯爵に銃を向けられて身動きすら許されない中で問いかけた。

「ジノ。君は今のままでいいというのかい？」

同じナイトオブブラウンズである枢木スザクがトウキョウ租界をフレイヤで消し飛ばしたことで暴走し、己の目的の為に手段を選ばなくなったことを看破されたシュナイゼルから皇帝暗殺の命を受けた。

「だとしても、暗殺など……」

仕えるべき主を弑すべく動いているスザクを止められる存在であるシュナイゼルの叛意させようと会話を続ける。

「言っただろう。世界に興味を失くした男に皇帝たる資格はない」

シュナイゼルでは話にならないとジノは諦めた。

「コーネリア皇女殿下、あなたもこれでいいというのですか」

「私は……」

もう一人の皇族であるコーネリアに嘴を向けるも、ブリタニアの魔女とまで言われた苛烈な彼女の以前を知るジノからすれば瞠目するほどに態度をハッキリとしない。

「陛下はギアスのことを知っていた。いや、違うか」

二年もの間、自ら公職を離れて皇族たる義務を果たさなかったコーネリアは妹ユーフェミアの暴走の理由を探ろうと独自に動いていた。その果てにギアス嚮団に辿り着き、真実にも辿り着いた。

「ギアスの奥深くに通じていた。陛下ならばユフィの名誉を守れたはずだ。それをしなかった」

「しかし、そんなギアスなんて非科学的な」

ゼロの正体が元皇族であるルルーシュ・ヴィ・ブリタニアであることと、アツシユフオード学園に通っていたルルーシュ・ランペルージが同一人物であると聞かされ、更にはギアスなる超常の力もあると明かされたジノは、前者はともかく後者に関しては懐疑的であった。

「信じられないとしても無理はない。それほどに荒唐無稽な話だからね」

ギアスに対して疑念を覚えるのは至極当然なことであると良く理解しているシユナイゼルはジノの困惑を否定しなかった。

「陛下が政から離れているのは君も感じているはずだ。シャルルが皇帝のままが良いというのかな？」

実家が位の高い貴族であるジノは本国から情報を手に入れられるから皇帝が長く行方不明になっていたことも、政から遠ざかっていることも知悉していた。

「皇帝陛下が間違っているのならば臣下ならば正すべきです」

「言って聞くような人だど？」

思わない。元より簡単に意見や態度を翻すような皇帝であれば最初から侵略戦争も出来るはずがないし、ここまでブリタニアが強大になることもなかった。

「たとえ殿下が皇帝になったとしても、父王を殺した殿下をブリタニアの者達は決して認めません」

古来より子が親を殺して王位を篡奪したケースは多い。しかし、彼らには篡奪するに足る大義名分があった。

下克上や親殺しには何らかの理由が必要になる。真実であるかどうかは関係はない。でなければ、仮に篡奪して皇位を得ても人心が集まらなければハリボテの玉座に座ることになる。

「シユナイゼル殿下にはあるのですか？ 皇帝陛下を除けてまで自身が皇帝になる大義名分が」

「ないね」

「は……？」

ジノの問いかけに、父殺しを肯定出来るだけの大義名分など最初から存在しないシュナイゼルの返答にコーネリアが目を剥く。

「ど、どういうことですか兄上？」

呆然とした表情でコーネリアは問いを兄に向けていた。

「どうやら枢木スザクはフレイヤの被害に心を痛めて乱心してしまったようだ。三千五百万もの人を殺してしまったんだ、無理もない」

どれだけ政を疎かにし、シャルルには皇帝たる器はないとシュナイゼルが断じようと他の者には違う。

他国の人間がどれだけ皇帝シャルルを悪し様に罵ろうとも、ブリタニア国民にとつては嘗ては荒廃していた国を復興し、世界帝国を築き上げて過去にない繁栄を齎した英雄皇帝なのである。少し道を外れようと宰相に過ぎないシュナイゼルに大義は得られない。

「暴走して皇帝陛下を襲いに行くなんて馬鹿なことをしたものだ」

だが、シャルルが暗殺されれば話は別である。

祖国を侵略されたスザクには動機があり、ナイトオブブラウンスには皇帝に謁見できる絶好の暗殺の機会がある。

「スザクを、騙したと？」

「人間きの悪いことを言わないでくれ。彼が勝手に動いているだけに過ぎないのだから」

ナイトオブブラウンスは皇帝直属でありスザクはシュナイゼルの部下ではない。帝国宰相として命令権はあるが皇帝を殺して来いとは一言も言わなかった。

「あそこまで言っておきながらスザクの勝手な行動などと詭弁に過ぎません」

「彼は私の部下ではなく、父上の兵だよ」

「兄上、それはあまりにも」

「分かっている止めなかった君も同罪だ、コーネリア」

コーネリアは皇帝シャルルに不信感を持っていた。

ギアスを知悉していた皇帝シャルルならばユーフェミアの暴走を止めることも、汚名を濯ぐことも十分に出来たはずだから。

「黒の騎士団の取り込みが出来なかったのは残念だけど、ゼロであるルルーシユの正体を知って混乱が続くだろう。最悪、ルルーシユを受け入れて纏まるにしても時間はかかる」

如何なシユナイゼルと言えど、まさか自軍のトップを売り渡そうとする扇要のことは予想外だったが、黒の騎士団内に不協和音を残せたので予定通りである。

「コーネリアにはナナリーの説得を頼むよ。そうすればルルーシユを倒すのは難しくない」

多少の予想外は起こっているが全てシユナイゼルの想定内の出来事である。

腹違いの弟の過去とナナリーから直接聞いた話を合わせれば、シユナイゼルの中では戦い甲斐のある相手ではあってもルルーシユは与しやすい部類でしかなかった。

「既に賽は振られた。後は結果を知るだけだ」

優雅に足を組み、その膝の腕で手を組んで瞼を伏せたシユナイゼルにジノもコーネリアも続けられる言葉を持たない。

となれば、次に言葉を紡ぐとしたら二人以外となる。

「おや、もう果たしてしまったのかな」

ピピツとカノンの携帯端末が音を鳴り、シユナイゼルは薄らと笑みを浮かべた。

「……………なんですって!?!」

着信を告げる携帯端末を取り出して出たカノンは、明らかに興奮している感じの相手の大声に苦慮しながらもその内容に驚愕した。

「どうしたんだい、カノン」

カノンの反応に想定外の匂いを感じ取ったシユナイゼルが足を解いた。

「黒の騎士団の旗艦が式根島近くに現れ、グレートブリタニアが襲われていると」

妹を喪ったルルーシユがこれほど早く動けるはずがなく、最も可能性の低い行動を移すはずがないと過信していた。

「アヴァロンも直ぐに式根島へ」

「トウキョウ租界外の黒の騎士団が進軍を開始！」

暗殺だ何だと言っている場合では無くなつてシユナイゼルが式根島へ向かうように指示しようとした瞬間、新たなる情報が入つて来てシユナイゼルは事態が己の手を離れたことを自覚する。

「……………このタイミングの良さは」

シユナイゼルはルルーシュが己の手の平の上から飛び出していることを認めなければならなかった。



式根島に近い神根島に枢木スザクは単身で訪れた。

遺跡に通じる洞窟の手前で皇帝シャルル・ジ・ブリタニアを見つけ、たスザクは、強襲を仕掛けて手に持つ剣でギアス嚮団の生き残りと思われるローブを纏った者達を一刀で切り捨てる。

「ぐわっ!？」

致命の一撃を受けて倒れ込むギアス嚮団の生き残りに目を向けることなく、スザクは一心に名目上の主君を身長差の関係もあつて見上げる。

「——シユナイゼルの、差し金か」

入り口を煌々と照らす設置されたライトの下にいるシャルルに焦りといった感情は見受けられない。

「自分の意思です」

間違いなくブリタニア史どころか世界史に刻まれる男を前にしてスザクは怯まなかった。怯むような男が皇帝を暗殺に来るはずがな

いのだから。

「陛下、自分を取り立てて頂いたことには感謝しています。しかし、あなたには二つの罪がある」

元より友を売って手に入れた地位である。その友の妹を死なせた男に躊躇いや逡巡はないし、スザクの目的を叶える為の後ろ盾シュナイゼルを得た以上はシャルルに遠慮する必要はなかった。

「ほう、面白い。儂にどのような罪があるのか、言ってみるがいい」

皇帝シャルルが武に優れたという話をスザクは聞いたことが無い。

人を外れたと思えるほどの個人武勇を持つナイトオブブラウンズを前にして抗することは不可能であるはずなのに、シャルルには命を狙われている焦りが欠片も見えない。

(助けを待っているのか?)

スザクは手の中の剣の握りを変えつつ、その前に暗殺を済ませる為に話を進める。

「一つは、王たる責務を放棄したこと」

理由は不明だが玉座を離れて一ヶ月以上もの間、行方不明になっていたこと。

「そしてもうひとつ。ギアスに手を染めたこと」

「それが罪だと?」

ギアス嚮団なる組織を内側に置いて、その力の大半を掌中に収めていたことはナイトオブブラウンズになってから初めて知った。

「ギアスは、人の悪なるものを引き出します。そう。全てを知るあなたならユファイのことだって救えたはず。なのに見捨てた」

スザクが出会ったギアス能力者ユイザはシャルルを除けば二人。

目を合わせることで命令を順守させるルルーシュ、一定範囲の心の声を聞くことが出来るマオ。

彼らは自身の内側にある悪に惑わされ、破滅していった。そしてその周りの多くの者達も。

タイミング的にユーフエミアの命を救うことは出来なくても、その名誉を守ることは出来たはずだと、スザクはシャルルがルルーシュにギアスを使う瞬間を見た時から思い続けて来た。

「それがどうした?」

にも拘らず、シャルルはスザクの糾弾など子供の囀りと言わんばかりに見下し続ける。

「改める気は無いと?」

「くどい」

改めるならば、脅しだけに留めてスムーズにシュナイゼルへと譲位を行わせるつもりだったが、シャルルの目にある侮蔑を見たスザクも覚悟を決める。

「ならば」

剣を大上段に構え、シャルルの威圧に負けんと大きく息を吸い込む。

「この剣に、ルルーシュとナナリーの絶望も込めさせて頂きます………覚悟!」

最も二人と近かったスザクはもつと早くこうするべきだったと思っても遅いのかもしれない。せめて、自身が殺してしまったナナリーへの弔いになればと、シャルルに向かって剣を全力で振り下ろす。

「させんっ!」

振り下ろされた剣がシャルルを切り裂くその一瞬前に割り込んだ影にスザクは目を剥いた。

「ナイトオブワンっ!」

「ぬおっ!!」

割り込んで大剣でスザクの剣を受け止めたビスマルク・ヴァルトシュタインは着ている騎士服を筋肉で膨らませ、軽々と弾き飛ばす。「ヴァルトシュタイン卿! どうしてここに?」

シャルルの前に立つビスマルクから数メートル離れた場所に体勢を崩すことなく着地したスザクは、他にも伏兵がいるかもしれない可能性を考慮しながら問いかける。

「ギアスの事を知っているのは自分だけだと思っていたか?」

嘗てシャルルはナイトオブブラウンズでゼロの正体とギアスのことを知っているのはスザクだけだと言った。

「成程、ルルーシユの親らしい」

周りにも嘘をついていた息子に良く似ていると嫌な納得を小声で漏らす。

「残念だったな。おまえのような裏切り続けの男を、誰が信じるというのか」

ビスマルクの言うことは至極真つ当であった。

日本を裏切り、ユーフェミアを裏切り、ルルーシユを裏切り、ナナリーを裏切り、そして今もまたシャルルを裏切った。裏切り続きの男と言われても全然おかしくない。

「ビスマルク、俗事は任せる」

「イエス、ユアマジエステイ」

結局、最初から最後までスザクを顧みることのなかったシャルルはマントを翻して遺跡の方へと向かおうとする。

「待てー！」

何をするかは分からないが行かせてはならないと本能で直感したスザクが踏み込もうとする、その進路にすかさずビスマルクが割り込む。

「行かせると思うか、若造」

大剣を緩やかに持つビスマルクから放たれる威圧感に、まだ戦ったわけではないのにスザクは敗北を予感していた。

（いけない……僕にかかっている生きろというギアスがここは逃げろと叫んでいる。それほどまでに危険な相手か。ナイトオブワン！）

一年前に式根島でルルーシユにかけられた『生きろ』というギアスが発動し続けているのを感じたスザクは、対峙して分かる完成されたビスマルクの強さをまざまざと感じさせられても止まるつもりはなかった。

「しかし！弱さは捨てた！」

小細工は無用。真つ向から叩き潰さんと剣を掲げて飛び掛かった。

「愚かな……おまえの弱さこそが！」

「うっ」

「優しさという強さの裏付けであったものを!!」



スザクの全力を振るった大剣で軽々と弾き飛ばしたビスマルクは、強さの根源であつた矛盾を解消してしまった愚かさを嗤つた。

「そう、規範なき強さなどただの暴力。ならばここで死ぬがよい、枢木スザク」

興が乗つてまだ遺跡に向かわず、二人の戦いを見ていたシャルルの視線の先でビスマルクがスザクにトドメの一撃を振り下ろさんとしていた。

『力は、ただ力だ。理由を付けたがるのは後ろめたいからに過ぎん』

後少しでスザクを大剣が両断というところで、スピーカーを通したような三人以外の声が辺りに響き渡つた。

ボイスチェンジャーによって男か女かも分からない声を出す必要がある者を三人は知っていた。

「ゼロッ!？」

目の前で止まった大剣からスザクが後方に大きく跳び退きながら、声の主がルルーシュ扮するゼロであると不思議と直感したから叫ばずにはいられなかつた。

『迂闊だったな、皇帝』

ザパンツと海面を割って飛び出してきたのはゼロの乗機である蜃気楼。

何度も中華連邦とエリアー1を行き来できる巡航能力と、元であるガウエインから引き継いだゲファイオン・ディスターバーを応用したステルス機能のお蔭でブリタニア軍に気付かれずに式根島に到着した蜃気楼の登場と同時に空に紅蓮の華が咲いた。

空に停留しているグレートブリタニアの直掩のナイトメアフレームが赤い閃光が縦横無尽に走る度に破壊されていく。

「あれは紅蓮、カレンか」

ビスマルクを警戒しながら爆発が連鎖する空を見上げたスザクは、明らかに第八世代ナイトメアを上回る動きをするナイトメアが紅蓮聖天八極式しかないから直ぐに気づいた。

『寡兵で動くなど、狙ってくれと言っているようなものだぞ?』

スザクが紅蓮聖天八極式に気を取られている間に蜃気楼が右手の

ハドロンショットを放ち、洞窟の入り口を破壊する。

「陛下っ!!」

辛うじてシャルルの身を抱えて離れたビスマルクがホツとする暇もなく、彼のギアスが見せた未来を察知してシャルルを抱えて移動しようとする。その直後、ハドロンショットが再び放たれていた――

――その狙いはやはりシャルル。

放たれたハドロンショットは、洞窟前にいたスザクをも巻き込んで地面に着弾する。

「――っ?!」

咄嗟に更に飛び退いたスザクが無事だったのは、単純に狙いに入っていないかったからに過ぎない。

「……………不老不死の皇帝を守っても意味などないだろうに」

式根島の基地から発進したナイトメアフレームも紅蓮聖天八極式一機に翻弄されている。その爆発に照らされながら空中に浮かぶ蜃気楼からゼロがコクピットから出て、シャルルを突き飛ばしてハドロンショットの効果範囲から抜け出させることには成功したものの、自身は跡形もなく消し飛んだビスマルクの末路を見届ける。

「ルルーシュ―!」

兄妹の十字架を背負ったつもりだったスザクが見下ろすゼロの本当の名を叫ぶも、当の本人は無感動に見返すだけだった。

「ナイトオブセブンか」

スザクの存在を認めたゼロはコクピットに戻り、ハドロンショットを放って来る。

「ルルーシュっ?!」

まさか撃つて来るとは想像だにしていなかったスザクは走って避けようとするが着弾の衝撃までは避け切れない。

地面への着弾の衝撃で体が浮いた直後、衝撃によって地面が崩れ落ちる。

「うわっ!」

予期せぬタイミングで崩落した地面に巻き込まれ、頭に砕けた岩が当たった衝撃でスザクの意識が急速に遠のいていく。

「る、ルーシユ……」

奇しくもシユナイゼルによつて皇帝殺しの汚名を着せられただけで何も得られないという思惑からも抜け出しているのだと知らぬまま、スザクは氣を失つた。

## 第七話 皇帝失墜

ゆつくりと枢木スザクの意識が覚醒していく。

「起きたか、枢木スザク」

瞼を開いた時、天井のライトの光で視界がハッキリとしない中、あまり馴染みのない声をかけられてスザクはそちらを向く。

「C・C・？」

直接会ったのは特区会場での一度のみ。皇帝によって記憶を改竄されたルルーシュがアツシユフオード学園に戻された理由である魔女の写真を記憶に焼き付けていたので見間違えるはずがない。

「どうして君が」

「状況は把握できているか？」

ここにいるのか、と聞く前にC・C・に問われたスザクは周りを見渡し、自身が後ろ手に拘束されていることを自覚する。

C・C・が着ているのは黒の騎士団の制服を改造したものであること、意識を失う前に見た人物のことも合わせれば簡単に答えは出た。

「俺は黒の騎士団に捕まった、のか」

「正解だ」

ナイトオブブラウズであるスザクが敵に捕まるなど、最悪に近いパターンに陥つていると言えるだろう。

ベッドに寝かされている中で体を動かしてみれば、足も同じように繋がれている。手も手錠だけに留まらず、壁等に何かで繋がっている感覚があった。

ナイトオブブラウズはナイトメアフレームに乗らなくても人外染みた戦闘力を持つ。妥当な対応だろうと、体を起こしてベッドに座る。

「お前もつくづく運がないな」

身軽な動きを見せるスザクが座ったベッドの近くにある椅子に

座っているC・Cは彼を哀れむように、そして非難するように見つめる。

「どういうことだ？」

「皇帝を暗殺しに行つて、敵軍に捕まる男を不運と言わず何と云えば良いんだ？」

全く以て否定できない理由にスザクは沈黙する。

「まあ、それはどうでもいい」

スザクが運に見放されているのは今に始まったことではないが、どうでもいい扱いされるとそれはそれで傷つく。

「運が良くないくせにタイミングだけは良い奴だよ」

そう言つてC・Cは制服のポケットに手を入れて小型のリモコンを取り出した。

リモコンのボタンを押すと、壁のスクリーンに別室の様子が映し出される。

「皇帝陛下っ!？」

映つた映像の中では、スザクと違って拘束はされていないが明らかに黒の騎士団内部と思われる一室にいる皇帝の姿に瞠目する。

『待たせたな』

スピーカーを通して聞き覚えのある声のスザクの耳に入ってきた直後、その身分には合わない簡素過ぎるソファに腰を下ろしている皇帝の前に一人の少年が映つた。

「ルルーシュ……」

自分を捕まえたのはゼロであろうからルルーシュが現れるのはおかしい話ではないのだが、皇帝とセットで映像に映るとは予測など出来るはずも無かつた。

『さて、時間はたっぷりとある。俺の質問に答えてもらおうか』

ゼロに捕まり、斑鳩に連行された皇帝シャルル・ジ・ブリタニアは士官室に軟禁され、ほどなくしてやってきたゼロの仮面をしていないルルーシュの言葉に無表情を以て相對する。

「母さんを殺したのは誰だ？ 何故、お前は母さんを守らなかつた」

C・C 經由で渡つたはずの暴走しているギアスを隠すコンタクトを失くしてもしたのか、対面の椅子に座るルルーシュは左目に眼帯をしていた。

「おかしなものよ。人には真実を求めるか、ここまで嘘ばかり吐いてきたお前が」

まさか自分で左目を傷つけたなどとは想像だにせず、シャルルは鼻を鳴らして仮皇帝のベルソナ面を被つて答える。

「俺がゼロの仮面を被つたのは、母の死の真相を知る為。そしてナナリーが安全に暮らせる世界を作る為だ。その目的の一つを叶えようとしている中で嘘を纏う必要はない」

一拍呼吸の間を置いたルルーシュは足を組んでシャルルを見る。  
「母を殺した者の推測は立てていた。一つは、皇帝であるお前でさえ容易に手が出せない存在であること」

ルルーシュは右手を軽く掲げ、人差し指を立てる。

「だが、これは可能性としては低い。神聖ブリタニア帝国は絶対君主制。たとえ大貴族であろうとも皇帝の意が勝る」

「実の息子すら容易に捨てた男が周りに配慮するような性格ではないはずだ。」

「二つ目は、俺達親子を疎んでいた貴様自身が刺客を差し向けたという可能性だが、これもどうだろうな」

中指を立てたルルーシュは、この案にも否定的だった。

「俺達兄妹を日本に人質として送ったことを考えれば疎んでいたという可能性は否定できない。しかし、記憶の中においてお前と母の仲は良かったように思う」

子供には分からない摩擦などが母との間にあつた可能性もあるだろうが、ならばルルーシュ達も母と一緒に殺してしまえば良かった。しかし、わざわざ日本に送るといふ面倒なことをしている。

「他国の人間等が犯人ならば、それこそ徹底的に捜査されているはずだ。だが、そうはなっていない。何故か？」

一度は上げた中指を下ろし、人差し指だけを伸ばしている状態に戻す。

「二つ目の案でしかないだろう」

シャルルはルルーシユの言葉を聞いていないかののように目を瞑っていたが、そこでようやく瞼を開いた。

「貴様の推測を言ってみるがいい」

答え合わせをするかどうかは、その推測次第と暗に込められた言葉にルルーシユは右手を下ろした。

「母さんを殺したのはV・V・だ」

「……………」

シャルルは正誤を答えず、ただ沈黙を以てルルーシユを見つめ返す。

「V・V・は俺を呪われた皇子と言った。シャルルと呼び捨てにし、母に対して明確な悪感情の言葉を吐いている」

ギアス嚮団殲滅作戦において、KGFジークフリートに乗って自ら戦いに出たV・V・は『マリアンヌの子が調子に乗っても』やジェレミアがマリアンヌの名を出した時に『お前までその名を口にするか』と言っていたことをルルーシユは覚えていた。

「お前にギアスを与えたのは自分ではないとC・C・は言った。ギアスを与えた者、ギアスが効かない不老不死の存在を容易に敵に回すわけにはいかない。ギアスという存在に深く関わるV・V・がマリアンヌを殺しても表沙汰に出来るはずがないというのもあるが」

ルルーシユにとってのC・C・がそうであるように、シャルルにとってもV・V・がそうであるならば。

「もう一度だけ聞く。マリアンヌを殺したのはV・V・だな？」

アリエス宮の警備をしていたはずのコーネリアが外されたマリアンヌが下した命令の理由も、V・V・が母を殺すほどの動機も分からない。であるにしても、最も母を殺してシャルルが捜査しない理由を持つている人間をルルーシユは他に知らなかった。

「……………今より半世紀ほど前、儂と兄さんは地獄にいた」

突如として関係のない話を始めたシャルルに、ルルーシュは何も言わずに続く言葉を待つ。

「親族は全て帝位を争うライバル。暗殺が日常となった嘘による裏切りの日々……………皆、死んでいった。私の母もその犠牲となった。儂と兄さんは世界を憎み悲しみ、そして誓った。嘘のない世界を作ろうと」

C・CがV・Vをシャルルの最初の同志と言ったことを思い出し、ルルーシュは残った右眼を見開いた。

帝国貴族の間では、双子は忌み子として何らかの方法を以て対処されてきた歴史をルルーシュは思い出していた、たとえ皇帝といえども例外ではないのだと。

「つまり、V・Vは」

「儂の双子の兄だ」

V・Vは血縁上では叔父に当たるのだと理解したルルーシュの口からは失笑しか出なかった。

「それで、V・Vがマリアンヌを殺したことは否定しないのか」

「マリアンヌは死んではおらん」

「何？」

意味が分からないことを言い始めたシャルルに、ルルーシュは遂に頭の中身がトチ狂ったかと考えた。

「肉体は確かに死んだ」

「その言い方だと精神は死んでいないとも言いたいのか」

問いに対して無言を以て肯定するシャルルに考えを巡らせたルルーシュは一つの答えに辿り着く。

「ギアスカ」

肉体の死とは終わりを意味する。但し、時に常識を超えるギアスカならば精神だけでも生き延びることは出来るのではないかと推測を立てることが出来てしまう。

「マリアンヌはC・Cと契約したがギアスカは発現しなかった。資質が足りなかったのだろう。だが、肉体が死を迎えた時、初めて発動し



て精神だけで生き延びた」

ルルーシュは考える。考えて、もっと一番嫌な推測を思いついてしまった。

「幾らギアスでも肉体だけでは生きていけるとは思えない。まさか目撃者だったナナリーに乗り移ったのか」

「いいや、違う。ナナリーは兄さんが仕立てた偽りの目撃者に過ぎん。本当の目撃者は別にいたのだ」

新たな事実ルルーシュは視界が歪むのを感じた。

左目は治療は行ったにしても本来ならば安静にしていなければいけない傷である。痛み止めの注射を打ってまで戦場に出たルルーシュの体調は決して万全とは呼べないにしても、視界が歪んだのは怒りからだった。

「誰だ？ その目撃者は」

「ルルーシュよ、お前は既にエリアーでそ奴と何度も会っておる」  
「会っているだど？」

V・V がナナリーを偽りの目撃者に仕立て上げたのならば、本当の目撃者はV・V の関係者やテロリストなどではなくアリエス宮にいた人物となる。

母の死と妹を襲った悲劇と父から与えられたトラウマが大きすぎて、あの頃の記憶はそれらに集中していた。

落ちて着いて過去の記憶を掘り起こしたルルーシュは、八年前のアリエス宮にいた一人一人の顔と日本に来てから二度以上、会った人物を重ね合わせていく。

「まさか……」

幾らルルーシュが頭脳明晰で記憶力抜群であるとしても、出会った人物全てを覚えることは出来ない。だが、たった一人だけルルーシュが皇子であったことに近づいた者がいたことを思い出した。

「ナイトオブシックス、アーニャ・アールストレイム」

中華連邦攻略後、咲世子によって勝手にされた女生徒とのデートの約束をこなした後、アーニャに皇子時代の写真に写っているのがルルーシュなのかと聞かれた。

その後、色んなことが重なって頭の奥に追いやられていたが、シャルルの話と合わせればルルーシユもアーニヤが事件の一週間前に行儀見習いで来ていたことを連鎖的に思い出した。

「ギアスの力でマリアンヌはアーニヤの中に潜んで兄さんをやり過ごした。マリアンヌは意識を表層に上げた時、C・C・と心で話すことが出来る。事実を知ったC・C・は嚮団を兄さんに預け、儂達の前から姿を消した」

肉体は死んでも、精神が生きているのならば厳密にはいなくなったわけではない。

もしもルルーシユもナナリーが同じ状態になったのならば、C・C・を害しただろうかと考えて無為な思考を放り捨てる。

「儂は兄さんと話をした。しかし、兄さんは嘘をついた。嘘のない世界を作ると約束したのに」

今度こそ本当にルルーシユは失笑した。

「母さんの精神が生きていて嘘だと分かっていたのなら、どうしてV・V・を糾弾しなかった？」

「お前達の為だ」

ギアスの力を知悉しているV・V・ならばシャルルの糾弾を否定出来ない。マリアンヌという生き証人がいたにも関わらず、糾弾しなかった理由はルルーシユ達の為であるとシャルルは語った。

「ナナリーは偽りの目撃者とはいえ、事件の核心に関わる存在だ。兄さんにとっては生きていては都合が悪い。だからこそ、全てを守る為に目撃者であるアーニヤとナナリーの記憶を書き換えねばならなかった」

ルルーシユはシャルルが語る理屈を理解はした。

目が見えず、偽のテロリストによって歩けなくなったナナリーは情報弱者となり、あの慎重なV・V・でも生きていても真相には辿り着かないと判断して狙うことはないだろう。現にそうだった。

「では、俺達を日本に送ったのは」

「事件の起きたブリタニアの中枢から、儂の傍から離す為だ」

遠い異国の地に送られたナナリーには、少なくとも手掛かりを得る

可能性が限りなく低くなる。仮に真相に辿り着いたとしても、シャルルに伝えるには時間がかかる。

「同時にマリアンヌの遺体も密かに運び出させ、保存させている。体さえ残っていればマリアンヌが戻れる可能性があるからだ」

シャルルの行動は一貫していた。

嘘のない世界を作るという目的の下、シャルルはルルーシュに一切の嘘を吐いていない。

「だが、計算外のことが起こった。ラグナレクの接続には不老不死のコードは一つで良かったが研究が進むにつれ、もう一つのコード。つまり C・C がいないと100%の保証がないと分かった。マリアンヌがC・C を説得しようとしたが上手く行かなかった」

何時しか伏せていた顔でルルーシュは嗤った。

「C・C は全てを知っていたのか」

マリアンヌの死の真相も、ナナリーの目が見えない理由も、全てはルルーシュの空回りであることも。

分かっている、ルルーシュの傍に何食わぬ顔でいたのだ。

「C・C の願いは死ぬこと。そのことを知っていたマリアンヌがルルーシュ、お前のことを教えたのだ」

お前はC・C に裏切られていたのだと思い知らせる為にシャルルは言葉を重ねる。

「お前のギアス資質は現存するブリタニア皇族の中でも恐らく随一。下手をすれば儂をも上回るだろう」

「C・C が俺と契約したのは――」

「マリアンヌが計画し、C・C と取引した」

ルルーシュを絶望させ、引き込むために息子を絶望の洞へと突き落とす。

「もしも、ルルーシュがC・C の願いを叶えられないのならば儂達に協力する。そういう契約だ。この契約を、兄さんは知らないからC・C を釣り上げる為の餌とすることに納得した」

黄昏の間でC・C はルルーシュに向かって、お前は優しすぎると言って突き放した。ルルーシュではC・C を殺せないと彼女は分

かっていたのだ。

「俺がアツシユフオードに戻されたのも、C・C・との約束を違えない為……」

記憶を改竄してもC・C・がショックイメージを叩きこめば、思い出す可能性は高い。

黒の騎士団と行動を共にしていたC・C・がゼロを復活させる為にルルーシュと会おうとするのは不自然ではないから。

「アツシユフオードに敷いた、一見嚴重な監視体制も枢木スザクや兄さんを納得させるための物。ギアスを使えば監視体制を誤魔化するのは簡単なことだ」

ゼロを捕まえたスザクや、V・V・はゼロが再び現れればルルーシュを疑うだろうが、ルルーシュならば誤魔化すだろうと信頼もしていた。

「ルルーシュがC・C・の願いを叶えられたならば、それはそれで良い。その時は全ての真相を、C・C・からコードを引き継いで不死となったお前に話し、C・C・に代わってラグナレク計画に参加させる」

「……………俺が協力するだけでも?」

計画通りに打ちひしがれているルルーシュを前にしてシャルルは笑みを浮かべていた。

「お前の復讐はナナリーとマリアンヌの為。しかし、マリアンヌは死んではおらず、日本に送ったのも護る為だと知った。それでも、お前はこの儂を仇と憎むか?」

全ては親心であったのだから憎めるはずがないとシャルルは確信していた。

「……………」

俯いたまま顔を上げることが出来ないルルーシュは言葉を返さない。

「ナナリーを失い、C・C・に裏切られ、真実を知った今、救われるにはラグナレクの接続を果たすしかない。ユーフェミアもナナリーも望んでいた優しい世界を作るのだ」



かしくない状況にルルーシユ達があつたのは誰の目にも明らか。

「計画を優先したお前達は、もう俺達が生きていようと死んでいようと関係なかったんだ。だから捨てた。自己満足の言い訳だけを残して」

「違うー！」

「自分で言ったことだろう！ 死んだ者とも一つになれると！ 生きている人間を見ようとしていない!!」

立ち上がったルルーシユは否定しようとしたシャルルに指を突きつける。

「未来はラグナレクの接続、その先にある。ナナリーの言った優しい世界は」

「違うー！ お前達が言っているのは自分に優しい世界だ！でも ナナリーが望んだのはきつと他人に優しくなれる世界なんだ……」

シャルルと絶望的にまで分かり合えない感性にルルーシユは肩を深く落とした。

「始めから、間違っていた」

どれだけ言葉を尽くそうとも、思考を読めなくともルルーシユの気持ちに欠片も理解していないシャルルの顔を見て改めて決断する。

「スザクの言う通り、俺という存在が間違っていたんだ。世界にいるべきではなかった」

ブラックリベリオンの時、神根島で対峙したスザクに言われた言葉がルルーシユという根幹に響き渡る。

「これで未練は捨てた。ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアはここで死んだのだ」

ルルーシユの個人としての想いは、戦う理由は無くなった。

それでもルルーシユが為してきた罪は消えないのだから、ユーフェミアとナナリーが求めた世界を作る為には仮面を被って嘘を突き通すしかない。

「俺は、他の誰でもない」

仮面を被ると同時に個人を捨て去る。

シャーリーが死に、ナナリーを失い、ギアスを捨て去ったルルー

シユに残っていた柵は消えた。ここにいるのは、ゼロという記号。個人の想いなど抱かず、ただ弱者の味方としてある者。

「私は、ゼロだ」

最後までシャルルはルルーシユを理解できなかった。

『私は、ゼロだ』

ルルーシユは仮面を被り、二度と外すことはないだろう。それは枢木神社でスザクが望んだことだったはずだ。

「なんだ、あれは……」

映像がプツリと途切れた後、傷ましい姿にスザクの口から知らずに言葉が漏れる。

「ルルーシユの成れの果てだ」

その表情は悲しそうで、今にも泣きそうなほど哀しそうで、だがルルーシユを追い込んだ責任の一端を間違ひなく担っていたC・C.には何も言えなかった。資格がなかった。

「シャルルが言ったように、私はルルーシユを利用していた。全てを知っていないながら私自身の死という果実を得るためにあいつが生き残ることだけを優先して……」

「……………後悔を？」

そしてスザクもまたルルーシユを追い込んだ一人であった。寧ろルルーシユをゼロに押し込んだ原因とも言える。

「まさか、私は永遠の時を生きる魔女。捨てたんだ、人間らしきなんか……………私に出来るのはあいつを見届けることだけだ」

追い込んだC・C.の言葉はルルーシユには、ゼロになった彼にはもう届かないのだから。

「もう、あいつは迷わないだろう。世界の為に、弱者の為に、戦い続ける」

見届けることしかC・Cには出来なかった。

「お前は、どうする？」

黒の騎士団に捕まったスザクに出来ることは、そう多くない。

「俺は——」

スザクもまたルルーシュを追い込んだ責任を果たさなければならなかった。



なんとか黒の騎士団を振り切って神根島に向かったシュナイゼル・エル・ブリタニアは自分が後手に回ってしまったことを痛感する。

「皇帝陛下がゼロに捕まった、と」

「はい……」

撤退した斑鳩は黒の騎士団本体に合流し、容易には手が出せない中で式根島の基地で生存者から報告を纏めたカノンより聞いたシュナイゼルはアヴァロンの天井を仰いだ。

「間違いないのかい？」

叶うならば嘘であってほしいという願いは叶うことはない。

「クルシェフスキー卿から聞いた話では、陛下はヴァルトシュタイン卿と共に神根島に降りていたようです。そしてゼロの蜃気楼の反応があつたと」

グレートブリタニアが撃墜され、重傷を負いながらも生きていたナイトオブラウンズの一人であるモニカ・クルシェフスキーから聞き取った内容を伝える。

「ヴァルトシュタイン卿の手は発見できましたが、状況から見ても亡



くなられたと思われます。陛下は神根島をくまなく搜索しても発見  
できませんでした。死亡した痕跡も見られないとすれば」

「捕まったと考えるのが自然か。枢木卿も？」

「恐らく」

「……………厄介だね」

考え得る中でもかなり悪い状況に陥っている今にシュナイゼルは  
嘆息を漏らしていると、ピーピーと音が鳴った。

「どうしたの？」

「黒の騎士団から通信文が送られてきました」

「こちらに回してくれ」

「了解しました」

シュナイゼルが頼むと、手元の端末に黒の騎士団から送られて来た  
通信文が表示される。

「これは……………」

隣で通信文を見たカノンが絶句する。

「アッシュフォード学園で会談を望むか。皇帝を人質に取られては致  
し方ないね」

シャルルをブリタニア国民が英雄皇帝として称賛しているからこ  
そ、シュナイゼルは難しい会談になると予測していた。

「カノン、コーネリアに連絡を。ナナリーの説得を急がせてくれ」

ルルーシュの変遷を知る由もないシュナイゼルは、もう一度通信文  
に目を戻して思考に耽るのだった。

## 最終話 0から1へ

シャルルとの話を終え、ゼロとしての仮面を被ったルルーシュは影のように控えるジエレミアと共に医務室を訪れていた。

「何の用、ですか？」

先の神根島の戦いで横から乱入し、カレンの紅蓮聖天八極式に落とされたアーニヤ・アールストレイムがベットに寝かされた状態で拘束されたままゼロを見上げる。

「映像を見ていたのならば察しがつくだろう」

シャルルとの話し合いは、皇神楽耶達がいる艦長室とスザクが捕らえられている部屋とアーニヤがいるこの医務室に中継されていた。当然、アーニヤの意識が覚醒していたことは確認されているので映像を見ていないはずがない。

大体、敵であるはずのゼロルルーシュに敬語を使った時点で見ていると白状してしまっている。

「分からない。私には、何も分からない……」

四肢を開かれた状態で拘束され、手も足も先に袋を被せられている状態で目覚めたアーニヤはあまりにも多くの出来事が過ぎ去っていった理解が追いついていない。

斑鳩からアヴァロンに戻って暫くしてからの記憶が無く、気が付けば傷だらけでこの状態。そこに主君であるシャルルが自分の記憶を改竄していたなどと聞いて、覚えていない誰かが内側にいると知れば何も信じられなくなった。

「やってくれ、ジエレミア」

「……………本当によろしいので？」

医務室に入って来てからも影のように徹して言葉を発しなかったジエレミアが問い返す。

「やれ」

一言の命令にジエレミアは瞑目し、ギアスキャンセラーを発動させる。

カレンと戦い、一世代上の紅蓮聖天八極式を半壊に追い込みながらも敗れ去り、アーニヤの裡で気絶していたマリアンヌは呆気なく消え去る。

マリアンヌが表に出て来てもアーニヤの目が見ていたことには変わりない。今まではマリアンヌの記憶として脳内に処理されていたが消滅と共にアーニヤの欠けていた記憶と連結された。

「あ」

復活したとも言える記憶に、今までずっと抱えて来た恐怖から解放されたアーニヤの目から涙が零れ落ちる。

「あ、ありがとう……」

感極まりながらもアーニヤが礼を言うと、ゼロは取り出したハンカチを彼女に差し出す。

「代わりと言ってはなんだが、一つだけ頼みがある」



第二次トウキョウ決戦から三日後、未だフレイヤ被害の全容が掴めない中でアツシユフォード学園に二人の来客があった。既にその内の一人は来ており、残る一人を出迎えることになったミレイ・アツシユフォードは溜息を吐いた。

「まったく、リヴァルは……」

世界の趨勢を左右しかねない会談に自分のいる学園が指定されるとは予測もしていなかったリヴァル・カルデモンドから助けを請わ

れ、学生でもないのに理事長の孫として代理の案内人を務めることになったことに文句の一つも言いたくなる。

そうこうしている内に青空の向こうにブリタニアの軍艦であるアヴァロンが見え、スーツ姿におかしいところはないかと確認していると小型艇がこちらに向かって来る。

中庭に降りた小型艇から帝国宰相のシュナイゼル・エル・ブリタニアと側近のカノン・マルデーニ伯爵、その他護衛らしき人が数名降りて来る。

「ようこそ、アツシユフオード学園へ」

内心では面倒事に巻き込まれたことに文句を言いつつも、社会人として外面は笑顔で応対する。

「初めまして、ミレイ・アツシユフオードさんだね。ニユースは拝見させてもらっているよ」

「光栄です」

まさか自分の名前や職業まで知られているとは思わず、内心で驚くが礼をすることで表情を隠す。

「ゼロはもう来ているのかな？」

どうしてシュナイゼル以下、ブリタニア側の全員がサングラスをかけているのか分からないまま話は続く。

「はい、少し前に」

「彼は何か言ってだろうか」

「互いに護衛は一人だけ。会談場所には私が案内するようにと」

「そうか………では、カノンが来てくれるかい」

「分かりました」

局から特ダネを掴んで来いと言われているが、一つ間違えばアツシユフオードの家にも累が及ぶので、言われたことしかする気のないミレイは護衛が決まったと見るや早々に会談場所に向かって歩き出しました。

「ところで、ゼロの護衛は誰か知っているかい？」

少し歩くと雑談のようにシュナイゼルが話しかける。

「誰かまでは………ゼロと同じように仮面を被っておられましたか

ら」

あまり話し過ぎるのは良くないのだろうが、見たままを話す分には構わないだろうとゼロと共にいた仮面の人物のことを脳裏に思い浮べる。

「黒色のゼロとは対照的な白色で統一していましたね」

「ほう、体格はどうだろう」

「ゼロとそう変わらなかったと思います」

護衛にしては線の細い人だったとミレイは記憶していた。それこそ最後までゼロの近くにいたジェレミア・ゴットバルトの方が体格的には護衛らしかった。

「……………」と、ゼロの指定された場所はあそこです」

ゼロが会談場所として指定したのはルルーシュ達が暮らしていたクラブハウスのベランダテラスだった。

リヴァルからルルーシュが行方不明なことを聞いていたミレイの内で、ゼロの正体についてもしやという予測が立ったが努めて考えないようにした。

「私は、これで」

気にならないと言えば嘘になる。だが、ミレイはアツシユフオードを完全には捨てられない。その選択を取るが故に彼女はこの場を離れることを選んだ。

「久しぶりだな、シュナイゼル」

ベランダのテラスの椅子に座ったゼロは足を組みながら、対面に座ったシュナイゼルに機械で変声された声を向ける。

「つい、数日前に会ったばかりじゃないか」

「そうだな。トウキョウでの戦いではあなたに随分と煮え湯を吞まされたものだ。確か、フレイヤとか言ったか」

枢木神社で捕まえて通信画面越しに話をした言質を取りたかったシュナイゼルに対して、ゼロはしらばっくれる。

「それに随分と内を引っ掻き回そうとしてくれたものだ」

「私は彼らに事実を教えたに過ぎない」

「お得意の話術に嵌る方が悪いと？ 流石はシュナイゼル宰相閣下、

人とは見ている視点が違う」

シュナイゼルが黒の騎士団の内部攪乱をしようとしたことは事実であるが、人を嘲笑うかのようにゼロがパンパンと手を叩く様は些か挑発的に過ぎる。

「ところで、そちらの白い仮面の彼のことは紹介してくれないのかい？」

白い仮面の人物がシュナイゼルの予想の通りならば突け入る隙になるはず。

「白騎士だ。トウキョウの戦いの後で拾ってね。前の軍で余程酷い扱  
いを受けたらしい。大量殺人の片棒を担がされた上に、皇帝暗殺の捨  
て駒にされては顔を隠したくもなるだろう」

ククク、と喉の奥で笑った声も機械で変えられているので不気味に  
聞こえる。

「軍を脱走するのは重罪だよ」

「大量殺人と皇帝暗殺の命令を下した罪に比べれば大分軽い」

第二次トウキョウ決戦のブリタニア側の指揮官はシュナイゼルで  
あり、フレイヤは部下であるニーナ・アインシュタインが開発した物  
である。だから、フレイヤに関しては部下の一存でなどという詭弁は  
通用しないし、最低限の責任を取る必要がある。

「しかし、我が軍にはトウキョウ租界を消し飛ばす理由がない。黒の  
騎士団の策略ではないのかな」

「こちらにはランスロットがフレイヤを撃った映像がある。一機だけ  
でなく、何機もな」

スザクより開発者のことを聞いて、あの爆発の解析を行ったラク  
シャータ・チャウラーからブラックリベリオンでニーナが未完成のフ  
レイヤを使おうとしたことの確認も取れている。

そして開発者もこの学園で確保したのだからゼロの方が何歩も先  
を行っている。

「お互いに忙しい身の上だ。腹を探り合うのではなく、建設的な話し  
合いをしよう」

そう言ったゼロが懐から取り出したのは二つの携帯端末だった。

コツン、とテーブルに置かれた携帯端末の電源を入れていく。

「言った言わないの議論をするつもりはない。好きな方を使うといい」

「いや、こちらは自前の物を使わせてもらおう」

シュナイゼルが背後に控えているカノンに目配せすると、彼が懐に手を入れた。

「――余計な動きは慎んでおいた方が良い」

カノンがボイスレコーダー機能が付いた携帯端末を取り出すフリをして拳銃に触れた瞬間、ゼロと同じように機械で変えられた声が牽制する。

ビクリ、と顔を上げると白騎士が同じように懐に手を入れており、恐らくカノンが拳銃から手を離さなければ撃つと気配が物語っていた。

「……………何もしないわよ」

携帯端末を取り出してテーブルに置いて下がったカノンの動作に合わせ、白騎士も手を下ろした。その間にもカノンの心臓はバクバクと高鳴っていた。

「さて、こちらは皇帝シャルル・ジ・ブリタニアとナイトオブシックスであるアーニヤ・アールストレイムを捕虜としている」

会談の本題とも言える内容に踏み込み、口火を切ったのはゼロだった。

「我が方としては、些か信じられないな」

「証拠を見せろ、ということですか。至極最もです」

疑うのは自然であると、シュナイゼルの疑念を肯定したゼロは白騎士が持っていた鞆から一つの物を取り出してテーブルに置いた。

「アーニヤ・アールストレイムから預かりました」

「これは、騎士証か」

「帝国最強のナイトオブブラウンズともなれば特別製でしょう。偽造など出来るはずもない」

「真実、アーニヤに頼んで借り受けたナイトメアフレームの起動キーでもある騎士証は、ブリタニアの技術の結晶でもある機体を奪われな

いように複製不可能な作りとなっている。

事前に本人確認の方法としてアーニヤの騎士証を持ち込むことは通信文に触れられていたので、カノンも今度は拳銃には手を伸ばさず騎士証の確認が出来る機械を取り出す。

「……………間違いなく本物です」

「ふむ、預かってても？」

「構わない」

アーニヤ・アールストレイムの騎士証と機械が証明したがまだ偽造の可能性が完全に消えたわけではない。より詳細な確認を行う為にシュナイゼルが駄目で元々で申し出たらゼロはあっさりと認めた。

「しかし、皇帝に関しては何に本人確認できる物がない。なので、こちらで我慢してもらいたい」

次にゼロが取り出したのは数枚の写真だった。

「我が艦内で撮影した写真だ」

テーブルに置かれた写真を手に取ったシュナイゼルは僅かに目を細めた。

「確かに皇帝陛下だ」

写真の右下には撮影時刻が記録されており、少なくとも行方不明になった後に撮影された物と思われる。

こういう物ほど偽造が容易いので安易に信用することは出来ないが、手錠で縛られたアーニヤとの2ショットもあるので偽造にここまですの込んだことは普通しない。

「ブリタニアの要求を端的に言おう」

条件的に不利なのはブリタニア側であるから、シュナイゼルは敢えて余裕を見せながら口を開く。

「皇帝陛下及びアーニヤ・アールストレイムの即時返還だ」

「……………代価は？」

直球の要求に、一拍間を置いたゼロが問う。

「征服した全エリアの解放を約束する」

「少し弱いな」

「まだ足りない？」



超合集国の念願とも言える願いに対して、現ブリタニアの象徴とも言える皇帝とナイトオブ라운ズの代償としては弱いとゼロは深く頷く。

「各エリアの内政はブリタニアに依存している。抜ければ生活もままならぬ者も多いだろう」

一度は撤退してももう一度侵攻しない保証も無い。

黒の騎士団の軍を各エリアに配しても、それでは戦争が長引くだけで皇帝というワイルドカードを利用するには利点が少ない。

「そこで提案がある」

保証が無いのならば、保証せねばならないようにしてしまえばいい。

「全エリアの解放後、合集国憲章に批准してブリタニアにも超合集国に参加してもらいたい」

「それは……」

超合集国の決議は多数決で決める民主主義制となっているが、投票権は国の人口の多さによって比例しているため、大きな国であるほど多くの票を持つことになるなど急造ゆえの問題も多い。

ブリタニアは衰退した中華連邦を抜いて世界人口で一番多い。が、全エリアを解放した後では、ブリタニアとそれ以外では人口比が逆転する。

「参加させてもらおうか」

ブリタニアにとって悪い話ではなかった。

幾ら対ブリタニアの為に集まったのが超合集国とはいえ、必ずしも一枚岩であるとは限らない。人心の分離策はシュナイゼルの得意とするところで、民主主義に倣って過半数を得れば超合集国その物を乗っ取ることも容易い。

上手く行かなければ批准を取り消し、超合集国を出れば良い。今、シュナイゼルに必要なのは天空要塞ダモクレスを完成させる時間さえあればいいのだから。

「では、動議を行きましょう」

「何？」

「聞こえていましたね、神楽耶様」

『はい、確かに』

シュナイゼルが使わないと分かっても置きっぱなしになっていた携帯端末の内の一つから皇神楽耶の声が広がる。

『ブリタニアが全エリアを解放後、超合集国への参加に賛成の方はご起立を』

ガタガタ、と椅子を動かす音がボイスレコーダーから響き渡る。

『賛成多数。よって、超合集国決議第弐號として、全エリアを解放後にブリタニアが超合集国に参加することを認めます！』

「おやおや、これは一大事だ。皇帝陛下がいない間に宰相が勝手に決めてしまうなど」

シュナイゼルが手を出さないようにしっかりとボイスレコーダーを確保していたゼロの声には喜色が混じっていた。

「嵌めてくれたね」

「まさか」

『続いて、ブリタニア帝国宰相シュナイゼル・エル・ブリタニアの重戦術級弾頭による大量殺人の容疑で捜査を行うべきと進言させて頂きます。賛成の方はもう一度、ご起立を』

もう一度椅子を動かす音が続き、シュナイゼルの表情が明らかに歪む。

「動かないでもらおう、シュナイゼル閣下。民主主義に参加したのなら、そのやり方に従うのが筋だろう？」

あまりにも性急過ぎる展開に立ち上がりかけたシュナイゼルをゼロが制する。

「随分と用意がいい。まさか既に超合集国の代表達を集めていたとは」

「その為にわざわざ三日も空けたのでね。難しいことではなかったよ」

勿論、シュナイゼルはこれがブラフであることを疑っている。

個人が確定する声を出しているのは神楽耶だけで、彼女は黒の騎士団の密接な繋がりが有るからこのような小細工を取れる。つまり代

表現は集まってはならず、ブラフではないのかと。

(だが、本当の可能性もある)

ゼロが言ったように三日という時間は代表達が集まるには十分である以上、シュナイゼルの行動次第でブリタニアの命運が決まってしまう。

(条件が悪すぎた)

自身の失策もあれど、この三日という時間の中にシャルルを取り戻せというブリタニアからの突き上げもあり、シュナイゼルが取れる選択は限られていた。

「他人を従えるのは気持ちがいいかい、ゼロ」

皇帝シャルルがブリタニアに戻ろうとも、全エリアを解放して合集国に参加したとあつては旗色が変わっている。

今までシャルルが認められてきた弱肉強食の国是も、彼がブリタニアに勝利を齎していたからこそ受け入れられてきたのだから。

「何も感じないな」

「そうかい。これを見ても、そう言えるのかな」

早いがシュナイゼルは切り札を切ることにした。

テーブルに置かれているカノンの携帯端末を操作して映像を映し出す。

『お兄様……』

携帯端末の画面に表示されたのは、栗色の髪をした一人の少女――

――ナナリー・ヴィ・ブリタニア。

『本当に、お兄様がゼロなのですか？』

画面に映るナナリーの姿に、ゼロの後ろから見た白騎士がハッキリと動揺を露わにしたのをシュナイゼルは見逃していない。

――ナナリー総督、御無事で何よりです」

しかし、ゼロは指一本揺らすことなく、映像の中のナナリーを見据えて言ったのだった。

『え……あ……』

「ご無事だったということはシュナイゼル殿下に助けられたのでしような。特に怪我もないようで喜ばしいことです」

困惑しているナナリーに対して、至って平静に答えたゼロにシュナイゼルは己が策が失敗したことを悟る。

シュナイゼルの目から見てもゼロが演技しているようには見えな  
い。故に、今この場においてシュナイゼルが出来ることは何も無い。  
「ここまで、だな」

スザクとの会話の音声でルルーシユの声と確信したからこそシュ  
ナイゼルの意向に乗ったナナリーが困惑している画面を消し去り、こ  
のゲームが敗北したことを認める。

これ以上ないほどに追い詰められた時、常に負けないところでゲー  
ムをしていたシュナイゼルには死に物狂いで抗うような気持ちは湧  
いてこないのだから。

「どうやら決戦しかないようだ」  
超合集国決議の真贋を確かめる手段が今はない以上、そう言うしか  
ない。

「交渉は決裂、ということでしょうか？」  
「勝者は全て得て、敗者は全てを失う。我がブリタニアの国是を考え  
れば分かることだろう」

立ち上がったシュナイゼルは自身がブリタニアにおいても難しい  
立場に追いやられることを自覚している。

どのような選択をしようとも一緒ならば、勝つことで守るしか  
ない。

「戦場で会おう」

カノンを従えて去ったシュナイゼルの背中を見届けたゼロは、ふう  
と一つ息を吐いた。

「生きていたんだな、ナナリー」

仮面の強固さで動きに出なかつただけのゼロは、ルルーシユとして  
の最後の感情を表に出す。

「……………ルル」

「私達も行くのか、白騎士」

ルルーシユ、と名前を呼ぼうとした白騎士を遮り、ゼロも足を解い  
て立ち上がる。

「後は勝つだけだ」

その言葉通り、全てを捨て去ったゼロはどれだけの敵が立ち塞がるうともブリタニアに勝利するだろう。既に勝つだけの条件を揃えているのだから。



嘗てはエリアーとと呼ばれた日本がその名を取り戻してから十年余。

今や世界的英雄であるゼロは全ての要職から退き、あの特徴的な仮面すらも取り去って大分復興の進んだ町の中を歩いて行く。

「ところで」

背後からの夕焼けで道路に出来る影は二つ。その片方へと声をかけた。

「どうしてお前まで付いて来る？」

「今更、それを聞くか」

共に歩く禿頭の美青年の問いに妙齢の美女は呆れつつ答える。

「私達は共犯者だ。最後まで一緒にいるべきだ」

「お前との契約は既に果たしたはずだ。もう共犯者ではないだろうに」

と言いつつも男は女の同行を拒否まではしない。

先に立って歩く男の後を追いながら、女は仕事を終えて帰宅する者達の顔を見ながら遠い目をする。

「しかし、もう八年と十年か。時間が経つのも早いな」

ブリタニアの征服戦争が始まった日と、己の呪いが解かれた日からそれだけの年月が流れたのだと否が応でも自覚する。

「そうだな」

世間では意外なほど呆気なく終わつたと言われている戦争を終わらせた張本人である青年にとっては大した感慨もない。

「シユナイゼルの死刑も遂に決まっただって？」

「随分と時間がかかったがな」

父親の死と同じく、腹違いの兄の生死に関しても男は時間がかかった以上に抱く思いはない。

「反対に扇は出て来たらしいぞ」

「こちらは随分と早いな」

「戦後十年の恩赦だそうだ」

頼みもしていないのに報告してくる者がいるので、会話のネタとして話したが彼らにとっては十年も前の出来事なのだから深い関心はなかった。

「ナナリーも皇帝の座を次に譲るといいうし、みんな新しい時間を始めているのだな」

反対に女にとっては間違いなく今まで生きていた中で激動の十数年であつたから思うところは多い。

「最終的にブリタニアも超集衆国に参加して人々は対話のテーブルについた。もう、正義の味方は必要ない」

戦争に向いていたエネルギーは飢餓や貧困に向けられている。ゼロがそうしたのだ。だからこそ、青年はゼロの仮面を脱ぎ、市井へと下りることを決めた。

「ロロが随分と引き止めていたようだが」

シャーリー殺害の件で戦後に自首したロロは年齢と事情もあつたが数年服役し、出てからは身元を隠してゼロの秘書的なことをしていた。

「罪は償ったんだからアイツも俺から離れた方が良い」

揶揄する女に対して男は薄く笑った。

「で、当のお前はこれからどうするんだ？」

男はその問いには答えず、目的地を見上げて石畳の階段を上がつていく。

「……は……」

この近くに過去に一度だけ来たことがある女もようやく気づき、後を追って石畳を登る。

「待たせたか」

「いや」

十年前と同じく待っていた男に声をかける。

「ゼロはその役目は終えた」

「白騎士もまた同じだ」

ゼロと白騎士として、この十年間を共に戦い続けたからこそ二人は共にいれた。

だが、その役目を終えたのならば。

「さよなら、ルルーシュ」

枢木神社にいた男が銃を取り出し、女が止める暇もなく男に向かってその銃口を向けた。

バンツ、と陽を落とした夜空に銃声が響き渡った。

「もう、二度と会うことはないだろう。さよなら、スザク」

男は女と来た道に戻り、残った男は銃を取り落として満天の星空を見上げる。

「これでいいんだよな、ユフィ」

答える者はいない。それでも、嘗て枢木スザクと呼ばれた男は笑っていた。

## シャーリー生存√2

### STAGE 0 始まり

皇歴2009年、神聖ブリタニア帝国の帝都ペンドラゴンのアリエスの離宮を襲った悲劇からルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの苦難は始まった。

「神聖ブリタニア帝国第17皇位継承者ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア様ご入来!!」

まだ年齢が二桁になったところの少年——ルルーシュがたった一人で大勢の貴族達が見守る中、第九十八代唯一皇帝シャルル・ジ・ブリタニアに謁見する為に歩を進める。

「マリアンヌ皇妃はブリタニア宮で殺められたと聞いたが？」

「テロリストが簡単に入れる所ではありませんが」

母マリアンヌがテロリストに殺された話はまだ表沙汰になっていないにしても、情報収集に長けている大貴族達はあらゆる伝手を使って情報を手に入れている。

「では、真の犯人は？」

「恐い恐い、そのような話、探る事すら恐ろしい」

「しかし、母親が殺されたというのにしっかりとっておられる」

この中に母を殺した犯人がいるかもしれないという疑いを消せぬまま、それでも弱みは決して見せまいと胸を張って壇上で座して待つ父の下へと向かう。

「だが、もうルルーシュ様の芽は無い」

遙かに年少でありながらも、第三皇子であるクロヴィスを頭脳で上回っていたルルーシュに密かな期待をしていた貴族もいた。

マリアンヌは騎士とはいえ、庶民の出身。皇妃に成れたこと自体が奇跡のようなもので、後ろ盾のないルルーシュが皇帝に成った際に後援していれば権力を握ることも出来ると皮算用をしている者もいた。しかし、あまりにも博打が過ぎた。



「後ろ盾のアツシユフオード家も終わったな」

まだ幼い子供達だけでは皇帝になるところか謀殺されるか、体の良い取引材料になるだけ。

早くからマリアンヌを後援し、ヴィ家の後ろ盾であったアツシユフオード家も運命を共にするしかない。故に博打は失敗に終わったと、多くの貴族達は傍観者として笑う。

「妹姫様は？」

「足を撃たれたと……」

「お目も不自由に」

「心の病と聞きました」

「同じ事よ。政略にも使えない体」

事件の目撃者であるナナリー・ヴィ・ブリタニアは目が見えなくなつて、足も動かないとなれば政略にも使えないお荷物でしかない。皇族である以上は一定の生活は保障されても、理不尽に与えられる命令にも拒否できる力を身に着けることもまた出来ないことを示している。

全てを分かった上で、ルルーシユはたった一人で皇帝の前に立つ。

「皇帝陛下、母が身罷りました」

ここにいるのは父ではなく皇帝であると、はつきりとした区別を付けられていなかったルルーシユは両親の愛を疑つていなかった。

「だから、どうした」

疑つていなかったから、その返答をルルーシユは予想すらもしておらず、「だから？」と鸚鵡返しに問い返してしまう。

「そんなこと言うためにお前はブリタニア皇帝に謁見を求めたのか？」

次の者と呼ば。子供の相手をしている暇は無い」

信じられなかった。少なくともルルーシユが知る父は母にも妹にも、そして自分にも優しかった。

「父上！」

もっと近くで真意を問うべく壇上に上がろうとして衛兵に止められる。

「よう」

「イエスユアマジエステイ」

壇上に一步足をかけたところでルルーシユの首に銃剣を突きつけた衛兵を下がらせ、皇帝は玉座に座ったまま傲岸不遜に己が息子を見下ろす。

既に皇帝への不敬とも取れるルルーシユへの行動に貴族が内心で瞠目している中、当の本人は感情に突き動かされていた。

「何故母さんを守らなかつたんですか？ 皇帝ですよ。この国で一番偉いんですよ。だったら守れたはずです。せめて、ナナリーの所にも顔を出すくらいは！」

それがルルーシユの普通であり、当たり前であり、世界の全てであり、考えの及ばぬ器の小ささだった。

「弱者に、用はない」

ブリタニアの国是であり、シャルルの信条そのままの言葉が息子を打ち据える。

「弱者？」

母を失い後ろ盾を失ったルルーシユ達、目も見えず足も動けないナナリーは確かに弱者であった。

「それが、皇族というものだ」

「なら僕は、皇位継承権なんていりません！ 貴方の後を継ぐのも、争いに巻き込まれるのも、もう沢山です！」

ルルーシユには分からない理屈であった。

母を殺したテロリスト達は他の皇妃達や母を疎んでいる貴族達が送り込んだのだと疑っていた。皇族という括りでしか物事が見れないのならば、皇位継承権など捨ててしまえば争いに巻き込まれることはないと思いついた。

「死んでおる。ルルーシユ、オマエは産まれた時から死んでおるのだ」

子供ルルーシユの痼癩を一切の関心を寄せていない目で見下ろすシャルルが告げる。

「お前が自らの命を賭けて獲得した物は何か？ 身に纏ったその服は誰が与えた？ 住んでいる家は？ 日々の食事は？ 皇位継承権は

？ 全て儂が与えた物。畢竟、お前は生きていたとは言えぬわ！ 然るに、何たる愚かしき!!」

「ヒィー… うわぁ…っ?!」

玉座から立ち上がり、世界に覇を唱えている皇帝の威圧を前にしては齡十歳のルルーシュに耐えられるはずがなかった。

知る父の全ては偽りであったかのように覇気も露わな皇帝に、ルルーシュは少しでも遠ざかろうと後退ろうとして膝から崩れ落ちて尻餅をつく。

「ルルーシュ！ 死んでおるお前に権利など無い。ナナリーと共に日本へ渡れ。皇子と皇女ならば、良い取引材料だ」

尻餅をついて見上げるルルーシュを一切の情のない冷徹な眼差しで見下ろす皇帝が非情な命令を下す。

「あそこの総理、その息子は確かお前と同じ年。籠絡せよ、ルルーシュ」

分からない。ルルーシュには母と共にいる父と今の姿がどうしても重ならないまま、皇帝は訳の分からないことを言い続ける。

「皇族にしか為し得ぬ責任がある。ナナリー共々、神聖ブリタニア帝国の礎となるがよい」

分からない。分からない。目の前にいる男が父であることが、同じ人間であることが信じられない。

「さもなければ、お前達の居場所など世界のどこにもないと知れ」

そうして一度も皇帝は子供達ルルーシュとナナリーを顧みることなく、ナナリーの傷が癒えて一通りの動作訓練を終えると日本に送られることになった。

皇族の見送りとしては数は少ないだろう。そして真にルルーシュとナナリーのことを思ってくれている者は、きつと両手の指の数にも足りない。

「ルルーシュ……」

「駄目だ、ユファイ」

ルルーシュ達を案じてくれる数少ない者の中の一人、ユーフェミア・リ・ブリタニアが一步步み出そうとしたところで、姉であるコー

ネリア・リ・ブリタニアに肩を抑えられて止められた。

何故、とユーフェミアが姉の顔を見上げると、彼女はただ首を横に振るだけ。

ユーフェミアはルルーシュと仲の良かったクロヴィスならばと彼を見た。

「クロヴィスお兄様」

「すまない……」

クロヴィスもまたコーネリアと同じく首を振り、妹を見下ろして自分の無力さを嘆くことしか出来ない。皇帝の不興を買い、母や後ろ盾だったアツシユフォード家を失ったルルーシュ達に味方はいないし、なってくれる者もない。

第二皇子であるシユナイゼル・エル・ブリタニアにも皇帝の意向を覆せるほどの力はないのだから。

「ルルーシュ、本当にすまない。私にもっと大きな力があれば」

頭脳明晰であるシユナイゼルは多くの仕事を任されているが皇帝の決定を覆すだけの力はないことを悔やんでいた。

「兄上、そう言ってくれてくれるだけで十分です」

ユーフェミアの優しさも、コーネリアの気遣いも、クロヴィスの無念さも、シユナイゼルの気持ちも、しっかりとルルーシュは受け止める。

ここに集まった皇族の大半や貴族も儀礼程度の気持ちしかない。皇族という絶対的な権力を持っていても、皇帝の不興を買って半ば廃嫡に近い扱いを受けることになるルルーシュ達の二の舞になる危険があるから味方は出来ないのだ。他に大切な者達がいるのは誰も踏み込めないのだから。

全てを分かった上で、そしてナナリーを守れるのは自分しかないのだと知ったルルーシュの心はブリタニアから離れた。

「やようなら」

ルルーシュなりの決別と共に飛行機はブリタニアを飛び立ち、彼らは日本の地を踏むことになった。

ブリタニアから遠く離れたこの地ですらルルーシユ達にとっては安らげる場所ではない。

留学の名目で日本の総理である枢木ゲンブの下へ送られたルルーシユは自分達が体の良い人質であることを理解していた。

日本側のSPは付いていたが彼らはいくまでルルーシユ達に身の危険がないかを守る為に配置されただけで、歩けないナナリーの世話はしないしルルーシユもさせなかった。

「ナナリー、僕の肩に掴まってくれるか」

枢木神社へと続く長い階段の前に車から降ろされたルルーシユはナナリーを背負い、何十段もある階段を一步一步上り始める。

事件の影響で足を動かさないこともあつてナナリーの体重は同年代の少女よりも軽い。とはいえ、別段、鍛えていたわけではなく、運動よりもチェスといった知能ゲームを好んでいたルルーシユがナナリーを背負つて階段を上るのは容易なことではない。

「お兄様……」

日本の夏は暑い。ナナリーを背負つて階段を上るルルーシユの息は上がり、汗がダクダクと流れていく。

目が見えずとも、放散される熱気でルルーシユの疲労を感じ取ったナナリーが心配して声をかける。

「大丈夫。ちよつと足場が悪いだけだから。ナナリーも怖くないか？」

「はい、お兄様のお蔭で」

ルルーシユは決してナナリーに階段を上つているとは言わなかった。言われずとも察したナナリーも、見知らぬ者に抱えられるよりは遥かに安心できた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、くつ、はあ、はあ、はあ」

階段のところどころに周りを警戒するSP。見上げた階段の頂上に見える鳥居の下にいる四人の人物。

(あれが)

老人が一人と中年の男が一人、少年が一人と少女が一人。

彼らがこれから戦う者達と心に定め、ルルーシユは背中に感じるナナリーの温かさだけを頼りに進み続けた。

ルルーシユはそれからもずっと戦い続ける。

ギアスを手に入れ、ギアスによる悲劇を目の当たりにし、多くの人間を巻き込みながらもナナリーが安全に暮らせる世界を作るまで止まることは出来なかった。

## STAGE 1 過去からの刺客

ルルーシユがイケブクロにやってきたのは、来たる決戦に向けて準備の為である。

ギアスのこともあつて直接出向いた目的を早々に終え、後はアツシユフォードに帰るのみというところで枢木スザクと共にいるシャーリー・フェネットを見つけってしまった。

アツシユフォード学園の級友なので二人が共にいてもおかしくない。ただ、ナイトオブブラウズであるスザクが一ブリタニア国民でしかないシャーリーといえるのには邪推をせずにはいられない。

(どうしよう。スザク君を呼び出してみたけど、何を言えば。ルルもいるし)

(シャーリー、どういうつもりだ？ 誘ったのはスザクの方か?)

(リヴァルは、ルルーシユがずっと日本にいたと言っていた。機情の報告も白だと証言しているのにも、何故僕は信じられないんだ?)

共に歩きながらも、その心の内は互いの真意を探り合う三者三様の思惑が重なり合っている。

(言わなくちゃ、スザクくん。ルルはゼロで、お父さんの仇なんだから……)

自国の敵であるゼロルルーシユをナイトオブブラウズであるスザクに伝えることが当然の状況。

しかし、ルルーシユがいてはそれも出来ないシャーリーが心の中で煩悶している間に、三人は駅の屋上に出て嘗て東京と呼ばれていた場所を見渡せる場所に立っていた。

「境界線だな、ここは」

「租界とゲットー。でもなくしてみせる、何時か」

ブリタニアが牛耳る租界と、イレブンと呼ばれている日本人が多く暮らすゲットーを見ながらルルーシユとスザクがそれぞれ言った。

二人の会話とも言えないような一方通行な言葉に、シャーリーは最悪の想定をしていないことに気付いた。

(はっ!? 待って、この2人が共犯だったら………エリア11を日本に戻すために。そうよ、2人は昔からの親友で)

昨日から急に降って湧いたような様々なことがシャーリーの思考を悪い方悪い方に持って行く。

忘れてはならないこと、忘れるはずがないことを思い出したシャーリーを襲う欺瞞という仮面が剥がれ落ちる音が背後から二つ聞こえた気がして、肩をビクリと震わせて後ろに立っている二人の方に振りむいた。

「どうしたんだ、シャーリー」

普通ではないシャーリーの様子にルルーシュが一步二歩と近づく。

反対にシャーリーは後退り、ルルーシュの足が仮面を踏み潰した錯覚を真実として認識した。

「いやっ!?!」

嘘と仮面と欺瞞に満ちた世界に恐れを為したシャーリーは走り出した。

少しでもルルーシュやスザクから離れる為に、中心部にいる二人から反対の端の方へと。

女性としては背が高い方のシャーリーの腰の位置にある扉に手を付いて、スカートを履いているのに気にせず体を引き上げる。そのまま扉の上に立って振り返ると、ルルーシュとスザクが慌てた様子で駆け寄って来ていた。

「シャーリー!」

「来ないで! 嘘つき!」

シャーリーが後退りながら叫ぶと二人は刺激すると落ちかねないと認識してピタリと足を止める。

「みんな偽物のくせに! 私は……」

誰もが嘘というの名の仮面を着けている。

恐ろしい。何が本物なのかも分からず、少しでも二人から遠ざかるうとしていた後退っていたシャーリーの足が踏み場を失った。

「あ!?!」

ルルーシュはシャーリーがバランスを崩した瞬間には既に走り始



めた。

予想だにしていなかったスザクが目を見開いていて行動が遅れた瞬間には、塀に足をかけていた。そのまま、塀の向こうに身を躍らせてしまったシャーリーを追って最後の一步を蹴る。

その瞬間のルルーシユに論理的な思考など無かった。落ちていくシャーリーの腕を掴んだ自分もまた助かるまいという考えすらも浮かばないほどに。

「くっ」

「うつ……」

ルルーシユがシャーリーの手を掴んだ瞬間、ルルーシユの足を行動が遅れながらも異常な身体能力のスザクが塀から身を乗り出して掴む。

幾らスザクといえども片手だけで二人分の体重を支えるのは辛い。

「ぐう」

右手で掴んだシャーリーの手を決して離すまいと、左手でもしっかりと持つ。その瞬間、シャーリーが恐怖に閉じていた目をゆつくりと開いた。

「はっ!？」

目を開ければ下まで数十m近くあり、落ちればまず命はないという状況を理解する。

自分がとんでもないことになっていることを自覚して生唾を呑み込み、今も落ちないように掴んでくれている手を見上げれば、そこには必死な顔をしたルルーシユがいた。

「いや！ 離して！ 離して！」

「だめだ！ 離さない！」

特にルルーシユから離れる為に条件反射で動いていたシャーリーは暴れて手を離させようとするが、必死な声に動きを止める。

「俺はもう、失いたくないんだ。何一つ失いたくないんだ、シャーリー……」

今まで聞いたことのない声、見たことのない表情に嘘はなかった。嘘はないとシャーリーは直感した。

「うん」

「スザク！」

「うっ……くっ」

この手は信じられると思ったシャーリーが左手が手を掴むと、ルルーシュがスザクに呼びかけて徐々に引き上げられていく。

やがて引き上げられて九死に一生をえて、塀に凭れかかって息を整えるルルーシュとスザクを見たシャーリーは一年以上前のことを思い出していた。

「ねえ、前にもこんなことあったよね。ほら、二人がアーサーを捕まえようとして」

「ああ、そういえば」

「たしかにあつたな。そんなことが」

疲れているというのもあるだろう。

学園内ならばともかく、学園外で会ったからは碌に会話もしようとしなかった二人が僅かに目を合わせ、雰囲気も和やかだった。

「引き上げる役は何時もスザクくんだね」

「ルルーシュが上だったら、二人とも落ちてるよ」

「体力バカが。そこまで言うんだったら、落ちる前に助ける」

「無理言うなよ。あつ」

しかし、和やかな雰囲気も長続きしない。

笑っている自分に気付いたスザクが目を逸らし、そんなスザクにルルーシュもまたそっと目を逸らした。

（違う。一人なんだ………ルルは）

流れを見ればスザクがルルーシュを嫌っているように見える。

そして偽りの弟ロロ・ランペルージ、皇族だとかでエリアーの総督になっているナナリーのこと。少なくともシャーリーにはルルーシュが一人にいるように思えた。

「あつ」

何を言うべきか、何を聞くべきなのかシャーリーが決められない中で携帯電話の着信音が鳴った。

「ああ、ごめん」

シャーリーでもスザクでもない。一言断ったルルーシユが立ち上がり、着信に出る為に二人から離れて行く。

「大丈夫、シャーリー？ ケガとかしていない？」

「うん、ごめんねスザク君」

同じように立ち上がって遠ざかっていくルルーシユの背中を見ながら話しかけてくる厳しい面持ちのスザクの顔を見て、やはりルルーシユは一人なのだ。とシャーリーは強く感じる。

「何かあったのかい？ 友達からの電話ってわけじゃなさそうだけど」

それほど長い時間会話せず携帯電話を切ったルルーシユに向かって歩み寄るスザクの頭に軽くチョップを入れる。

「ダメだよ、スザクくん。親友でもプライベートっていうものがあるんだから」

頭を抑えて振り返ったスザクの鼻先に指を突きつける。

「あ、ああ、ごめん」

鼻先に指を突きつけられたスザクは心持ち顔を後ろにそらしながら謝る。

「そういうえば、二人で待ち合わせしてたんだよな」

「ヤキモチ焼いてくれた？」

少し予想外なシャーリーの返しに、ルルーシユは前会長であるミレイ・アツシユフォードの命令とはいえ付き合っている仲だということ。を思い出したルルーシユは頬を指で搔く。

「少しな」

「……っ!? あ、ありがとう、ルル」

予想外の返答に、自分で振っておきながら逆に恥ずかしくなったシャーリーは頬を染める。

「待ってくれないかな、先に……」

「ごめんね、スザク君」

電話の相手を知りたいスザクの機先を制して謝ったシャーリー。

「実はルルとの交際記念に何か贈ろうと思って、スザク君にプレゼントを選ぶのを手伝ってもらおうと思って呼んだんだ」

本当は全然違う理由なのだが、明らかに電話の相手はゼロと敵対しているはずのスザクが知るのはまずいと直感したシャーリーは嘘をついた。

「本当はサプライズで渡そうと思ったけど、スザク君といるとルルがヤキモチ妬いちやうからルルに選んでもらうね。わざわざ呼び出してごめん」

スザクの横を通ってルルーシユの腕を掴む。

「さあ、行きましょう、ルル」

「あ、ちよ、ちよつと……」

「スザク君にもお詫びの品を買ってくるから楽しみにしててね」

スザクは空気が読めないところがあるが、流石に恋人になった二人の邪魔をするほど野暮ではなかった。

「……………ルルーシユのギアスは同じ人間には二度使えない。だから、シャーリーにギアスは使えないはずだ」

結局、二人を見送ることしか出来なかったスザクは屋上に残って一人で考える。

シャーリーの変貌とギアスを結び付けることは出来ない。交際しているのにイマイチ好意を表に出さないルルーシユに精神が不安定になっていたのでと結論付けるしかなかった。

（スザクの追及を避けることは出来たが、ここは戦場に成る。シャーリーの安全を考えればベストな選択とは言えない）

アツシユフオード学園に現れたジェレミア・ゴットバルトの目的がルルーシユであるのは確実に、シャーリーから離れて安全を確保するのがベストである。

（どうする？ ジェレミアがここに来る前に準備を整えておきたいがシャーリーがいては）

シャーリーの安全もあるがジェレミアにギアスが効かないことを確かめる準備もしておきたいが、ベツタリと張り付かれています。それも出来ない。

「ルル、何か心配事？」

方策を考えていると、腕を抱えたままのシャーリーが顔を覗き込ん

で来る。

「いや、なんでもない」

「嘘」

「嘘じゃ……」

「だって、こんなに人気のない所に来てるのに全然気づいてないんだもの」

言われてルルーシユが辺りを見渡せば、最上階のエレベーターホールの前にいて二人以外には誰もいない。

反論できないルルーシユから腕を放して離れたシャーリーが二、三歩離れて向き合う。

「ねえ、ルルはゼロだよね」

「っ!？」

動揺でルルーシユの指先がピクリと動いた。

「何を言ってるんだ、シャーリー。俺は」

「私、全部思い出した」

一拍大きく呼吸をしたシャーリーにルルーシユは続ける言葉を持たなかった。

「ルルがゼロであることも、お父さんを巻き込んだこと、そして私の記憶を消したことも全部」

今度こそルルーシユは動揺も隠すことも出来ずに目を見開いた。

理由は分からない。ルルーシユの絶対遵守のギアスは余程下した命令に不服を抱かなければ反抗することすら出来ない強力な力である。しかも、仮に抵抗できたとしてもやがては屈服する。

シャーリーの記憶はルルーシユのことに關して一度完璧に消している。その後、皇帝によつて記憶を弄られたとしても、消された記憶が復活する兆候はなかった。

「そうか……」

としか、ルルーシユは返せなかった。

先程の自殺未遂は記憶が戻ったことで混乱したのだと理解が及び、ここに来てその告白をする理由がルルーシユを糾弾する以外には考えられなかった。

「私ね、記憶が戻って凄く怖かった」

そう理解したルルーシユは肩から力を抜いた。

シャーリーは散々ギアスに翻弄されて来た。肉親を失い、騙され、記憶を消され、記憶を弄られた。ルルーシユを断罪する材料は幾らでもあつたから、その資格は十分にある。

「偽物の先生、記憶のない友達……みんなが嘘をついてる。世界中が私を見張ってるような気がして」

そこでシャーリーは声のトーンを変える。

「ルルはこんな世界で一人で戦ってたんだね、たった一人で。だから私は、私だけはルルの本当になってあげたいって」

一度は広げた距離を自分で縮め、頭をルルーシユの胸にトンと当てた。

ドクンドクン、とルルーシユの早い心臓の鼓動が奏でる確かな生きている証をシャーリーは全身で不思議と感じ取っていた。

「シャーリー……」

「私、ルルが好き。お父さんを巻き込んだって分かってても嫌いにはなれなかった。ルルが全部忘れさせてくれたのに、それでもまたルルを好きになった。記憶を弄られてもまた好きになった。きつと、生まれ変わっても……これって運命なんだよ」

顔を上げたシャーリーの頬を赤らみ、目は潤んでいた。

「私も仲間に入れて。私もルルを守りたいの」

「……………駄目だ」

「なんで？ 私はルルの幸せを取り戻してあげたいだけなの。ナナちゃんだって、一緒に」

「気持ち嬉しい、本当だ。でも、ダメなんだ」

否定の言葉は小さかった。ルルーシユの近くにいたからシャーリーは数多の悲劇に見舞われて来た。今でさえ危険が多いのにもつと近くについて失ったらルルーシユは正気を保ってられる自信が無い。

「俺は罪に塗れている。敵も多い」

ユーフェミアを撃ったあの時からルルーシユは修羅の道を行くと

決めた。後戻りなど出来るはずもない。する気も、ない。

「シャーリーに何も与えることが出来ない」

過去が原因でルルーシュにとって、愛とは与えるものであり、得るものではない。

「私はルルの傍にいればそれでいい」

愛とは無償であり、打算ではない。利益ではない。損得ではない。シャーリーの愛に余分な物は何一つとしてなかった。

「一人になんかさせないから、一人で戦わなくていいんだよ」

触れられた手の優しさにルルーシュは意味も無く泣きたくなった。母が生きていた遠い過去には与えられていたであろう愛が胸に痛い。

「ラブロマンスはそこまでにしてもらおう」

絆されかけたルルーシュの頭が第三の者の声によって引き戻される。

ルルーシュがシャーリーを背後に庇いながら慌てて振り返ると、階段から大柄な男がゆつくりと上がって来ていた。

「ジェレミア・ゴットバルト……っ!？」

「然り」

チラリとルルーシュがエレベーターを見ると、電光掲示板はこの階ではなく大分下の階に示していることを示していた。階段はジェレミアの背後にあり、逃げる場所はない。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる」

シャーリーの前で使ってはならないと考える前に、彼女の安全を守る為にはギアスが効かないと分かっているでも使うしかなかった。

「どけー!」

「——私に、ギアスは効かない」

特殊なコンタクトを外して行使した絶対遵守のギアスは、ジェレミアの顔面の左側を覆うマスクの目元部分が開いた後、その効果を発揮しなかった。

「やはりギアスが効かない……っ!？」

「それだけではない。解除する力もあるぞ」

ルルーシユ達がいる場所は十分に効果範囲内。一度閉じた目元部分が広がり、ギアスキャンセラーを発動させる。

「……………何の変化もないということは、その少女はギアスにかかっていないようだな」

ジェレミアはルルーシユに守られているシャーリーを見る。昨日、知らずにシャーリーのギアスを解除していることを知る由もない。

「そうか、お前がシャーリーのギアスを」

反対にシャーリーの記憶が戻っている原因がジェレミアにあると悟ったルルーシユの頭は脱出方法を模索している。

「この子には何の関係もない。見逃してくれ」

「ルル……………っ!？」

「欲しいのは俺の命だろう、ジェレミア・ゴットバルト。誇りあるブリタニア貴族が、まさか自国民を害するはずがない」

ジェレミアがギアスキャンセラーを手に入れたのはギアス嚮団であり、その刺客として送り出された。それ以外にルルーシユには情報が無いからシャーリーを守る為に自分を差し出す以外になかった。

「否」

シャーリーが何を言っているのかとルルーシユの肩を掴んでいるのを無表情で見ながら、ジェレミアは否定を叩きつけた。

「今の私は敗残兵に過ぎない。オレンジという嘘で私を陥れ、戦闘中行方不明MIAとなり、軍籍も残っていない。そうしたのは貴様だ、ゼロ」

ギアスという呪われた力を使ってジェレミアを貶め、誇りを穢した憎き敵の名はゼロ。ルルーシユが扮する存在であるとV・V・Vから聞かされていたジェレミアには確かめねばならないことがある。

「問わねばならぬ、ゼロ……………いや、神聖ブリタニア帝国第11皇子ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアに」

「えっ？」

ジェレミアが語った身分とその名が示す物に気付いたシャーリーが目を見開いてルルーシユを見る。

当のルルーシユは苦々しい表情で何も言えない。



「ルルーシュよ。お前は何故、ゼロを演じる？ 祖国ブリタニアを、実の父親を敵に回す？」

問いに答えなければシャーリーも逃がす気は無いと、不動とも思える太い足でジェレミアは立ち塞がって退路を断っている。

シャーリーを逃がす方法を見つけない限りは時間稼ぎをするしかない。

「ブリタニアが間違っているからだ」

この問いに答えないわけにはいなくなり、ルルーシュはたとえばシャーリーに嫌われようとも本心を語った。

「俺の父ブリタニア皇帝は、母さんを見殺しにした。その為にナナリーは目と足を奪われた。たとえばブリタニアに戻ろうとも何の力もない俺達ではまた政治の道具にされるだけ。今のブリタニアが存在する限り俺達に未来はない」

一度あったことに二度目がないとどうして言えるのか。

「マリアンヌ様のごことは私も良く知っています。私もアリエス宮におりましたから」

「何っ?!」

「初任務でした。敬愛するマリアンヌ皇妃の護衛。しかし、守れなかった。忠義を果たせなかったのです」

悔し気に唇を噛み締めるジェレミアを見つつも、ルルーシュは安易には信じることは出来なかった。

この場では真偽を確認する術はない。だが、母の死を惜しんでいる男を安易に否定もまた出来ない。

「ルルーシュ様、あなたがゼロとなったのはやはりマリアンヌ様の為であったのですね」

敬称までつけてルルーシュを呼んだジェレミアが、仕えるべき主を見出した騎士の如く膝をつく。

ジェレミアの取った姿勢の意味を、元とはいえ皇子であったルルーシュが知らないはずがない。信じられないとばかりに目を見開いたルルーシュは震える唇を開く。

「お前は、俺を殺しに来たのではなく」

「私の主君は、V・Vではなくマリアンヌ様です」

ジェレミア・ゴットバルトが純血派を名乗ってエリアー1で辣腕を振るっていたのは有名であったが、あそこまで純血派となって日本に厳しかった理由にも納得がいった。

公的にはルルーシュ達は戦争のドサクサに死んだことになっている。日本側もブリタニア側も責任を相手に押し付けているが、死んだことにされたことは間違いはなくブリタニア軍人であったジェレミアが自国の言うことを信じるのが普通だった。

「あの時、日本に送られるお二人に無理にでも同行すべきだったと深く後悔していました」

軍務として見送ることしか許されなかったジェレミアはずっと悔いていた。

「今度こそ、ルルーシュ様に忠義を貫くことをお許し下さい」

たとえ祖国に背くことになろうとも、自分を陥れた相手であろうとも、ジェレミアの忠義は一欠けらも揺るぎはしない。

「俺は……」

猜疑心が強いルルーシュは忠誠を誓われようとも、そう簡単にジェレミアを信じられるはずがなく毘だと言われた方がよほど納得する。

「ルル、この人が言っていること嘘じゃないと思う」

しかし、それを言えばシャーリーだって同じだ。

彼女の父を殺し、ギアスの争いに巻き込んで記憶を消し、ルルーシュに近かったから記憶を弄られたにも関わらず、赦した彼女を受け入れようとしておいてジェレミアだけを拒絶する理由はない。

安易に信じるわけではない。この場においてはシャーリーの安全を優先して、内心で警戒は解かないまま思考を決着させる。

「……………分かった。貴公の忠節を受け入れよう、ジェレミア卿」

「はっ、有難き幸せ！」

「だが、まだ全面的に信用したわけではないぞ。信用してほしくば」

「行動で示して見せましょう」

「なら、いい」

ルルーシュの肩から力が抜けたのを感じ取り、シャーリーも一息を

ついた。

「素直じゃないね、ルルは」

「悪かったな」

自覚はあるルルーシユの横を通って未だ跪いたままのジエレミアの前に立ったシャーリーが手を差し出す。

「私は騎士とかじゃないけど、これからは仲間になるんですね。よろしくお願いします」

「うむ、よろしく頼む」

シャーリーの手を取りながらもスクツと立ち上がったジエレミアは二人の近い距離感を見て、「いや」と訂正を入れた。

「ルルーシユ様の恋人ならば未来の妃。お名前を聞かせて頂いても」

「え？ あ、えっと、そんな妃なんて……」

気を利かせ過ぎたジエレミアに体をシャーリーが恥ずかしさからクネクネと身をくねらせる。

「兄さん！」

そんな最中に屋上のヘリポートに降りて急いで救援に駆けつけたロロが現れ、どう見ても敵対していない場に動きを止めて目が点になった。

「……………どういうことなの、兄さん？」

ルルーシユとジエレミアがいるにしても、シャーリーがいるとは予想もしていなかったロロの声が自然と低くなる。

「ジエレミアとシャーリーが仲間になった。詳しくはアツシユフォードに戻って話そう」

ジエレミアからギアス嚮団の話も聞かなければならず、シャーリーの状況もロロ達に伝えなければならぬルルーシユは重く深い溜息を漏らすのだった。

## STAGE 2 嚮団対策会議

世界で最も注目されている人物であるゼロが立ち上げた黒の騎士団の旗艦である斑鳩には艦長を任された南佳高にも入れない部屋があった。それこそがゼロの私室である。

入室の許可が出されているのは主であるゼロを除けばたった二人、今は神聖ブリタニア帝国に捕まっている紅月カレンと最もゼロに近いC・C。だけである。にも関わらず、その部屋にはゼロであるルルーシュを含めて五人の人物がいた。

「随分とまた増えたものだな」

C・C。はブリタニアに居場所を秘す必要があるのでこの部屋で暮らしている。ここまで人が増えた例の無いこの部屋の先住民のようなC・C。にとって千客万来のような状況だが、流石に自堕落な恰好を見せられるほど女を止めていないのでインナーの上に黒の騎士団の制服を着ていた。

「放っておけ」

この部屋の名目上の主であるルルーシュは自身が連れて来た者達と協力して、C・C。が食べ捨てたピザの空き箱や紙コップを片付ける。

「兄さん、この本はどこに直すの？」

「後で俺が直しておくから本棚の前に置いておいてくれ」

C・C。が暇潰しに読んで後に片付けるのが面倒になって床に放り捨てられていた本を抱えた口口に指示を出す。

「僕が直すのに……」

「C・C。がピザを食べた後のベタベタな手で触っていないか確認しなければ気がすまん」

「ルルは変なところでマメだよな」

掃除機をかけているシャーリーが呆れと感心を滲ませつつ、流石に吸い切れない大きさのゴミを拾い上げる。

「ルルーシュ様、纏めたゴミはどう致しましょうか？」

シャーリーが拾い上げたゴミを自身が持つゴミ袋に入れてもらいつつ、分別まで指示して徹底させているルルーシユの庶民慣れに若干の悲しみを覚えていたジェレミアは気持ちを表に出さなまま聞く。「後でC・C.に出させる。掃除はこれでいい。さあ、座ってくれ」掃除を一切しないC・C.にも役目を振る名采配に一人感心するジェレミアを残して、ルルーシユは集まった者達に着席を促した。尚、C・C.はゴミを自分で出せと言われて物凄く嫌そうな顔のまま先に座っていた。

「……………何故、誰も座らない？」

促したのにC・C.以外の全員が自分に注目して一向に座ろうとしないので、ルルーシユは気まずさを覚えて視線が下がった。

「ルル<sup>兄さん</sup>が座つたら……………っ!？」

明らかにルルーシユの隣に座る気満々なシャーリーとロロの言葉が重なり、二人は顔を見合わせて視線が一瞬バチツと弾けた。

二人が熱を迸らせている理由を分かっているルルーシユが助けを求めてC・C.を見る。

「ジェレミアは座らないのか？」

「騎士が主君より先に座ることなどありえぬ」

C・C.はジェレミアに話を振っていてルルーシユを助ける気は無かった。寧ろ面白がつて二人のバトルを眺めている。

「分かった。座ろう」

自分が座らなければ話も出来ないので、ルルーシユは入り口から見て左側の長椅子の真ん中に座る。

「む」

途端に隣を座って確保したシャーリーとロロは、ルルーシユを挟んで火花を散らす。

滅多に見られないルルーシユを中心とし愁嘆場にC・C.がクツクツと喉の奥で笑う。

「こんなので良く斑鳩まで来れたものだ」

「……………蟹気楼でも、あの調子で少しだけ疲れた」

「お前もとことん苦労性だな」

「ルルーシュ様の為ならば、どんな地獄であろうとも天国と変わらぬ」  
そこまで言ったジェレミアですら『少し疲れた』と表現するほどの  
のだから、その苦勞が憫ばれるが他人を勞わる気持ちや殆ど持ち合わ  
せていない魔女は大して同情しなかった。

「確かシャーリー・フェネットだったか」

対面の長椅子に座っているC・C・は遠目に見たことは何度もあ  
るが、こうやって面と向かって話をするのは初めてだったはずなので  
確認の意味を込める。

名前を呼ばれたシャーリーが口から視線をC・C・に移す。

「はい、これからよろしく願いますC・C・さん」

曇り無き眼と笑顔を向けられたC・C・は心持ち顔を逸らした。

長き時を生きる魔女にはシャーリーの裡から溢れ出る光は目に毒  
なのであった。

「それは黒の騎士団に入るといふことか？」

「勿論です。ルルの傍に居るって決めましたから」

なんとなく話の流れ的に自分が聞かなければならないような気が  
したC・C・に追撃が入った。

「おい、ゼロ」

割とノックアウト寸前のダメージを受けたC・C・は据わった眼  
でルルーシュを見据える。

「シャーリーの記憶が戻った。理由はジェレミアのギアスキャンセ  
ラーだ」

ニコニコのシャーリーと黒い霧囲気の口口に挟まれたルルーシュ  
の無表情を装いながらの説明になっていない説明に、C・C・の顔か  
ら表情が消えたのを隣に座って見たジェレミアが口を開く。

「ギアス嚮団によって改造されて与えられたギアスキャンセラーの力  
をV・V・の命令で何度も使っていたのだが、恐らくその時に効果範  
囲に入ったのだろう」

忠義の人であるジェレミアはたとえ主君の情けない姿を見ようと  
も失望することはない。

美人と言って差し支えないC・C・にギロリと睨み付けられても

揺るがない、それが騎士である。

「つまりはV・Vの刺客と？」

「奴が私の主君であったことなど一度としていない」

所詮は偽りの忠誠であるのだからルルーシュの真意を知って鞍替えすることに良心の呵責は覚えない。

「シャーリーはルルーシュ様の大切な人である。守るならば身近にいてもらった方が有り難い」

シャーリーの意向を汲んでいないわけではないが騎士たるジェレミアにとつて守護とは直接的に身辺を守ることにある。

様呼びに恐縮したシャーリーの意向も汲んでいるジェレミアは騎士たる本懐を果たさんと静かに燃えていた。

「まあ、別に私はいいんだが」

「良くありません」

たとえシャーリーが黒の騎士団に入ろうとも、別に部下を持つてゐるわけでもないC・Cに大きな影響はない。少々、普通の少女の眩しさに目が眩むぐらいのもので実害は少ないが、絶対反対を標榜するほどではない。

しかし、ただでさえ自分以上にルルーシュに近づこうとしているシャーリーを疎ましく思っているロロには歓迎できる状況ではない。

「兄さんはゼロとして疑われているのに、シャーリーさんを黒の騎士団に入れたりなんかしたらボロが出る可能性が高くなる。そんな危険は冒すべきじゃない」

「機密情報局は既に掌握している。ヴィレッタが上手くやるだろう」

「あの女がそこまで信用できますか？」

現状でも割と危ない橋を渡っているのだ。ルルーシュが言ったヴィレッタもジェレミアがアツシュフオード学園に現れた際に助けを求めた前歴があるだけに信用に欠ける面があるとロロは見ていた。

「こつちには脅しのネタがあるんだ。ヴィレッタも馬鹿じゃない」

記憶を失っていた間とはいえ、黒の騎士団副司令の扇要と懇ろな関係になっていた過去はより上の爵位を求めているヴィレッタの足枷となる。

「だとしても、仮にシャーリーさんが黒の騎士団に入るとしても何を  
するんですか？ 大したことは出来ないでしょう」

「うう、否定できない……」

一高校生ではないシャーリーが、既にテロリストの域を超えて軍  
隊の領域に達している黒の騎士団に入っても出来ることは少ないだ  
ろう。特にトップであるゼロの身近にともなれば皆無である。

当の本人であるシャーリー自身にもロロの言葉は否定出来る要素  
を見つけられない。

「C・C.の部下……いや、上司にしてC・C.の面倒を見ても  
らうか？」

ルルーシュと違って体力に自信はあれど一般的な少女ではない  
シャーリーの出来ることを考えたルルーシュは絶賛混乱中である。

まさか後から入って来た少女が直属の上司になるなど、現在の地位  
に頓着しないC・C.でも看過できない案件であった。

「アホか、寝言は寝てる時に言え!!」

「良い案だと思ったんだが」

「最悪、シャーリーはそれでいいとしても、ジェレミアのことはどうす  
るのさ」

「……………」

後から入って来た者がトップの依怙鼻根で上司になるなど御免蒙  
るC・C.の叫びに気圧されているルルーシュにロロが更なる追撃  
を放ち、どんな立場に甘んじようとも主君から離れる気のないジェレ  
ミアの不動の体が視界の中でズンと根を張っていた。

「同時期にブリタニア人が入団して、片方が生粋の貴族の上に元純血  
派のリーダーだなんて、もう片方にも何かあると普通は考えるよ」

それこそギアスを使うしか周りを納得させる方法はないほど、  
シャーリーの立場は不安定になる。

蜃気楼のкокピットで火花を飛ばしあつたとはいえ、純粋にルルー  
シュに傷ついてほしくないロロなりの精一杯の気遣いであった。

「む、そうだな」

入団するという結果ありきで話が進んでいたので、そこまで頭が



回っていないなかったルルーシユも考え始めれば別の問題にも気づいて眉を顰める。

「嚮団のこともある。ジェレミアを刺客として送った以上、次の刺客が送られる前にこちらからアクシオンを起こすべきだ」

ジェレミアの言からするにV・V・も今のゼロが明確にルルーシユであるという証拠は掴んでいない。

しかし、先代のゼロは間違いなくルルーシユであったから、たとえ今のゼロであったとしても最も脅威なギアスが効かないジェレミアならば容易に近づけると考えたのだろう。

「俺個人の意見ではあるがジェレミアが傍にいてくれるのは有難い」

皇帝の手にギアスユーザーがいない保証はないので、ギアスキャンセラーを持つジェレミアの存在は代え難い。

何よりもまだジェレミアに全幅の信頼を寄せれていないので監視の意味もある、敢えて口には出さないが。

「私僕は？」

「では、問題を順番に片付けていくとしよう」

自分はと言う二人から目を逸らして言ったルルーシユは右手の人差し指を立てる。

「嚮団が、というよりもV・V・はジェレミアを刺客として送った。これは間違いないのだな？」

C・C・の隣に座るジェレミアに視線を向け、問いかける。

「ゼロが中華連邦に手を伸ばしたのは嚮団本部攻略の足掛かりにする為ではないかとの懸念があったようです」

「俺がゼロだという確信までには至ってはいないようだな」

「限りなく黒に近いグレーというところでしょうが。ですが、ルルーシユ様をアツシユフオードに戻した皇帝陛下の意向を無視することは出来ず、明確な証拠が無ければ行動に移すことはないと思われま

す」  
「ジェレミアがこちらに付いたのならば報告があるまでV・V・は動かないとして、タイムリミットはそう長くはない」

決して良くはない状況にルルーシユは難しい顔をして考える。

「嚮団の場所は？」

「場所から通信回線まで全てこちらに」

元ブリタニアの軍人であるジェレミアの用意は確かだった。

ジェレミアが懐から出した地図と秘匿回線の暗号が書かれた紙を受け取ったルルーシユは、こんなに簡単にいってよいものかと考えながら事前に口口から聞いていた地点からの予測場所に嚮団の本拠地があることを確認した。

「防衛戦力は無きに等しいので、黒の騎士団でも制圧は難しくはないでしょう」

「今は部隊を動かせん。俺達だけでやるべきだ」

黒の騎士団は合衆国構想の為にブリタニアと陣取り合戦をしているような状況である。

ゼロの直下である零番隊ならばルルーシユの命令だけで好きに動かせるが、嚮団の制圧作戦に参加させるのはあまりよろしい事態とはいえずにルルーシユは難しい顔をする。

「幾ら嚮団が研究機関とはいえ、非戦闘員は多いぞ。ギアスを知っているのはここに居る者を除けば、後はカレンだけだ。こんな少数で制圧するのは恐らく不可能だ」

ルルーシユとしてはギアスの力を余人に知られたくはないので、ここにいる面子だけで済ませてしまいたい。しかし、先代の嚮主であったC・Cの時代からして非戦闘員の数は多かったのだから、今代のV・Vが極端に減らしているとは思えなく、ルルーシユの案はとも賛成できない。

「だがな、C・C。どうやってあいつらを説得する？」

「それこそお前の仕事だろう」

一応、C・Cも明確な役職はないが黒の騎士団幹部の扱いになっている。だとしても騎士団員の説得その他はゼロが行った方が手っ取り早い。

「ただでさえ、ブラックリベリオンでのことや単独行動が多い俺に疑念を持っている奴がいるはずなのに、ブリタニアとの決戦を前にして可能な限りマイナス要素を作りたくない。特に星刻辺りに疑念を持

たれたら厄介だ」

だからといって黒の騎士団に掛かりきりになれば皇帝に気付かれる恐れがあるので単独行動は止められない。

「結局、どうするんですか？」

「……………当初のプランを修正する」

ロロの問いにルルーシュは初心に返ることにした。

「元々、嚮団は皇帝との戦いに利用するつもりでいた。それもV・V.を排除した後の話だったが」

V・V. 以外の嚮団員の説得は先代嚮主のC・C. に任せるともりでいた。

何らかの方法でV・V. を捕まえた後はC・C. に嚮団員を説得させ、説得できなければルルーシュのギアスで従わせるつもりだった。

「ある程度の情報流出は諦める」

一刻の猶予も無いというほどではないが、今は拙速が求められる。結果を得る為には妥協は必要だった。

「それはギアスのことを知られても構わないと？」

「俺に繋がらなければ問題はない。嚮団を手の内に収め、V・V. を抑えることが出来ればリスクに見合ったリターンは十分に得られる」

ロロのような暗殺に特化したギアスはそうないとしても、これから迎える本格的なブリタニアとの戦いを前にして背中を気にしたくない。

目の前の敵ブリタニアに集中できるリターンに対して、正式な命令として黒の騎士団を動かしてギアスを知られるリスクはあまりにも不透明ではあった。

「本部の場所と情報を俺が手に入れたのはジェレミアからの情報提供があったと黒の騎士団を誤魔化せる。人体実験をするような施設だ。正義の味方としての大義名分はある」

ジェレミアが仲間になる理由も違和感を失くせるとルルーシュは信じていた。

「オレンジ疑惑の発端のゼロを頼るって思うのかな」

ゼロと関わったばかりにスパイ容疑をかけられ、人生が転落したジェレミアのことを一ブリタニア国民として知るだけにシャーリーは少し懐疑的だった。

「ゼロに頼るほどブリタニアにされた仕打ちに恨みがあるとも言える。これもまた俺がどう言うかだな」

ジェレミアの顔を見れば明らかに普通ではない過程を辿って来たのだと分かる。

「作戦目標が人体実験を行う中華連邦にあるブリタニアの施設だと分かれば星刻も動かざるをえんだろう」

「しかし、どうやってジェレミアがお前まで行き着いたことにするんだ」

「……………」

ゼロは正体不明。その仮面の内側を知る者はいないとなつていたので、C・C.の言うことは尤もだとルルーシュは沈思する。

「カレンがいたアツシユフオードにやってきて、外部協力員だったシャーリー経由で俺の下まで話が来たことにしよう」

「その時に嚮団から追っ手がかかっていて私が黒の騎士団の外部協力員だったことにして、安全の為に本部任務にしたことにすればいいんじゃない？」

このままシャーリーとロロの話はうやむやにするつもりだったルルーシュの思惑を裏切るかのようにシャーリーが妙案を思いついてしまった。

これに、C・C.が感心した顔をした。

「カレンはゼロの右腕だ。リスクを負ってでも助け出そうとしたことは幹部なら誰でも知っている。そのカレンの学友で仲間ともなれば不審に思う者も少ないかもしれないな」

「C・C. うウウウウウウウウウウ!!」

「私は一般論を言っているだけだ。そう怒鳴るな」

ルルーシュ自身も納得してしまいそうになった案をC・C.が半ば賛成してしまった形に叫ばずにはいられなかった。

「私がいたら迷惑？」

「い、いや、そういうわけではないのだが……」

太腿に手を乗せて身を乗り出したことで無意識に少しだけ胸を腕に触れさせながらのシャーリーにルルーシユはタジタジである。

「迷惑だっではつきりと言ってやったら、兄さん」

女の武器を意識的に使っているわけではないが自分の領分を侵そうとしているシャーリーに、この泥棒猫がと言わんばかりにロロが据わった眼をしていた。

「モテモテだな、ルルーシユ」

騎士であるジェレミアは語らず、騎士ではないC・Cは二人の間で視線を彷徨わせているルルーシユを揶揄った。

「黙れ、魔女」

返したルルーシユの言葉には力が無く、その目は泳いでいた。

「……………シャーリーに関してはさっきの案で良いだろう」

「ルルフ！」

「兄さん!？」

喜ぶシャーリーとは反対に怒るロロ。

「ロロもシャーリーと同じように黒の騎士団の外部協力員という形にする。カレンが戻って来た時に説得しなければならんが俺も手伝うからシャーリーも頼む」

「それはいいんだけど」

と、ルルーシユからようやく体を離れたシャーリーがロロを見る。

「ロロってルルの血の繋がった本当の弟じゃないのよね」

皇帝に与えられた偽りの記憶はジェレミアのギアスキャンセラーで消されたとはいえ、共に過ごした記憶が消えるわけではない。ルルーシユにナナリーという本当の妹がいることを思い出したので、シャーリーもロロとどう接したらいいか分からず少し困惑していた。

「だとしても、僕は兄さんの弟だよ」

シャーリーの存在はロロにとって不愉快でしかない。どうにもルルーシユがシャーリーのことを遠ざけないことも苛立ちを積み重ねていた。

出来るならば殺してしまいたいくらいなのだ。最愛のルルーシュの手前では出来ない。

「ロロは皇帝、というかV・Vが俺の監視の為に派遣した偽りの弟だ」

ルルーシュとしてはボロ雑巾のように使い倒してから殺すつもりだったがシャーリーがいるとそれも難しい。悩ましい問題だった。

頑迷なロロとルルーシュの二人の顔を見たシャーリーは思案気に入差し指を顎に当てた。

「じゃあ、ナナちゃんとロロが結婚したら万事解決？」

その瞬間、ロロの脳裏に稲妻が落ちた。

「っ?!?!」

ロロだつて馬鹿ではない。ルルーシュがナナリーに向ける愛が自分以上であることは承知しているし、だからこそ隙を見つけて彼女を殺せばその愛が自分に向けられると疑いもなく信じていた。

ナナリーはルルーシュと唯一同じ血を共にしている。この事実を曲げようもない。しかし、家族という枠は必ずしもそうではない。

「僕の目が曇っていましたが、シャーリー……………いえ、これからはお義姉さんと呼ばせてください！」

ナナリーは女でロロは男である。そして世の中には夫婦という制度が有り、ブリタニアや日本でも変わらない。

唯一の愛を向けられる対象では無くなるが、合法的に義理とはいえずに成れる機会がここにあったとロロの目は晴れた。

「そんな、気が早いわよ」

ルルーシュの義弟になったロロに義姉と呼ばれる状況などシャーリーとルルーシュが結婚した場合しかありえない。照れ照れと頬を赤くしながらもまんざらではないシャーリーに、なんとなく外堀が埋められるているような気がしたルルーシュだった。

「順調に外堀を埋められているな」

揶揄うC・Cと違ってジェレミアはやはり黙して語らず。

「雑談はそれまでにして、ルルーシュ様」

黒の騎士団に入る予定が同じとはいえ、個人的感情ダダ洩れのロロ

とシャーリーと違って大人なジェレミアは一步下がって主君の状況を見ていた。

「黒の騎士団をブリタニアと戦えるほどにまでの巨大にするにしても、ゼロの正体を知るのがここにいる者とあの紅蓮のパイロットだけというのは少なすぎます」

「ルルーシユの身元を考えれば仕方なからう」

世界の半分以上を支配するブリタニアと戦うには黒の騎士団も相応に巨大になる。トップの座は変わらないだろうゼロの正体を知る者が片手の指の数で足りるというのは万が一の事態を考えれば良くないとC・Cも分かっていたが、ルルーシユの出自を思えば仕方のない面があると諦めていた。

「元とはいえ敵国の皇子がトップでは間違いなく瓦解するぞ」

「何も全員に知らせる必要はない。受け入れてくれそうな者はいないのでですか？」

最後はルルーシユに向けられた問いである。

「現状では黒の騎士団の主である日本人がいません。可能ならば二人、最低でも一人は味方に付けておいた方が良くと思われれます」

ロロはここにいる面子を見た。見事に日本人から見たら外国人ばかりであった。

シャーリーはカレンのことを思い出した。どちらかといえばブリタニア寄りの顔立ちである。

「俺の最終目的はナナリーと共に平和な日常で過ごすことだ。正体を知られては面倒なことになる」

「何かあった際に味方になってくれる日本人がいないのはリスク管理的によりしくありません。正体を知っても配慮し、黒の騎士団内で権力を持っていてルルーシユ様に理解のある大人はいないのでですか？」

ゼロの所為で一度明確に失敗しながらも、完全には部下に切り捨てられることのなかった過去を持つジェレミアの助言であった。

ルルーシユは自分で仮面を脱いで正体を見せることの出来た桐原泰三の有難さがよく分かった。危機管理の意味でもジェレミアの言うことは真つ当だったのでルルーシユは真剣に考える。

「口が堅く、権力があるとするならば藤堂辺りか」

玉城真一郎は最初から除外で考え、他人に追及されても言わないであろう人物を大人で限定すると、ルルーシユの脳裏に真つ先に浮かんだ顔が奇跡の男と呼ばれている藤堂鏡志朗であった。

「八年前、直接の面識はないがスザクを通して俺のことも聞いていたはずだ。ゼロになった事情を話せば分かってくれるかもしれない」

桐原との接点もあったとの話だから、そちら経由でルルーシユ達のことを聞いている可能性も高い。

藤堂は実戦部隊の主を担っている。中華連邦を引き込み、実戦の場からは離れているルルーシユと違って現場に出ているので下の者とも近い。ゼロに対する印象も手に入れやすいだろう。

「奇跡の藤堂ですな。実直な男であると聞いています。話をしてみる価値はありましょう」

一年前のまだ軍人だった頃の資料で藤堂のことを見知っていたジエレミアも反対はしなかった。

「他には誰かいますか？」

「大人となると扇辺りだが……」

「少し不安だな。あいつは人が良すぎる」

扇の長所でもある人の良さは、時に短所にも成り得る。黒の騎士団内においても人の良さで知られている分、何かの時に標的にされやすい危険もあったので避けることにした。

「後は、大人ではないが神楽耶だな」

「珍しい名前が出たな。いや、そうでもないのか？」

権力を持つていることには変わりないが、ルルーシユの口から扇を押し退けて信用出来るかもしれない面子の中に入って来たことにC.

C. も驚く。

「ゼロの妻だとか言ったことに絆されたか」

「ルル……」

「待て、誤解だ。あっちが勝手に言っているだけに過ぎん」

C. C. の揶揄いに慣れてしまったルルーシユが嫉妬しそうになったシャーリーを押し留める。



ロロは状況を見極めている。

「神楽耶とは昔に面識がある。向こうが覚えているとは限らんが」

八年前、初めて日本に来た時に登らされた石畳の階段の上で、鳥居の下にいた枢木ゲンブの後ろに隠れるようにして立っていた神楽耶のことをルルーシユは覚えていた。

抜群の記憶力を誇るルルーシユと比べて年少だったのと、数日しか枢木神社にいなかった神楽耶が覚えている保証はないが。

「その二人にギアスを使ったことは？」

「ない。最悪、ギアスで忘れさせればいいか」

候補は二人、藤堂と神楽耶と決めてこの話は終わりである。

「藤堂に俺のことを話して、さっきのカバーストーリーを話して協力を得るとしよう」

「話が矛盾しませんか？」

ロロの言う通り、ルルーシユの状況を話した後ではカバーストーリーのおかしさに気付くだろう。何せゼロであるルルーシユが同じアッシュフォード学園の学生なのだから。

「ギアス以外のこととは、真実を話すつもりだ。どうせなら徹底的にこちら側に引き込みたい」

シャーリーの黒の騎士団入りを止められない流れの中で、最悪の場合に彼女を守ってくれる人材が必要だった。

もしも黒の騎士団が分裂してルルーシユの敵と成れる求心力があるとすれば、人柄の良さと扇が担ぎ上げられて藤堂が軍を動かすか、星刻が動くかの二択である。

星刻は天子の一件で早々裏切るとは考え難く、あるとすれば前者。藤堂を味方に引き込めば、彼の人柄を考えれば最低でもシャーリーの安全は確保できる。

「藤堂の反応次第で神楽耶に話すかどうかも決める。藤堂が受け入れてくれれば、俺と藤堂の二人で嚮団のことを星刻に話す。ひとまずはこれで行く」

最後はルルーシユが方針を決めて話し合いは終わった。

「あの、C・C・さん」

早速、藤堂にアポイントメントを取ったルルーシュはゼロとなり、ジェレミアを連れて部屋を出て行った後、ロロは部屋の隅に纏められている本をパラパラと捲っている中でシャーリーがC・C・に話しかけていた。

「さんなどいらん。C・C・と呼べ」

様、と呼ばれたことは何度もあるし、まだアツシユフオードにいた時にナナリーにさん付けされていたがそれはそれ。

「じゃあ、C・C・。お願いがあるんだけど」

「順応力高いな、お前」

「私もシャーリーでいいよ。じゃなくて」

相手がOKしているんだからと素直に応じたシャーリーに少し驚くC・C・は続く言葉を待った。

「黒の騎士団って女の子の制服は肩だしなの？」

割とどうでもいい質問にC・C・の肩は落ちた。

## STAGE 3 嘘と本当と

大事な話をするならば通信ではなく直接話した方が良く、ジェレミアの助言を受け入れたルルーシユはサウジアラビアへとやってきていた。

藤堂達が泊っているホテルを訪れたルルーシユは仮面の内側で目を丸くしていた。

「千葉と二人で泊っているのか？」

案内された室内には二人が過ごしていた形跡があり、成人した男女が同じ部屋にいる意味を理解していたルルーシユは思わず問いかけていた。

「資金が無限にあるわけではないから節約の為だ。千葉には申し訳ないが」

「い、いえ、そんな私は藤堂さんと一緒なら……」

そんなの後はゴニョゴニョと口の中だけで言った千葉をチラリと見て、藤堂の言い分を素直に受け取ることにしたルルーシユは案内されるままにソファの一つに座る。その後ろには影のようにジェレミアが付き従っていた。

「忙しいところにすまない。今日は藤堂に話があつて来た」

「話というのは君の後ろにいる男について、でいいのか？」

「それもある」

もう存在しない日本解放戦線のメンバーだった藤堂は純血派のリーダーだったジェレミアのことを知っていた。

「それも、か」

ゼロの秘密主義は今に始まったことではない。

仮面の中身だけに留まらず、性別すらも不明な人物を前にして藤堂はベッドの端に腰を下ろす。

「神楽耶様をお呼びしたのも同じ要件だと？」

「説明の手間は少ない方が良く」

効率的なゼロらしい物言いではあるが問題は人選である。

(扇ではなく俺を選んだのには何か理由があると見るべきか)

藤堂は黒の騎士団でも人望・知名度の両方があるが、ことこういう秘密事を打ち明けて味方になつてもらうとするならば人の良い扇要の方が適任であるはずだった。

そうしないのならば、相応の理由があるのだと内心で推測しながらゼロの後ろに立つジェレミアを見た。

(生粋のブリタニア貴族が敵である黒の騎士団トップの傍で控えるなど、最もありえないことだがあの顔を見るにそのあり得ないことが起きる理由があつたのだろう)

左目辺りを覆う機械的なマスクと歩く姿から感じた左半身の違和感のことを考えれば、ゼロの傍にいる理由に幾つかの可能性が浮かび上がる。

藤堂が思考の海に沈んでいると、千葉が部屋のドアを開けてやってきた神楽耶を迎え入れる。

「わざわざお越し頂き感謝する、神楽耶様」

藤堂に遅れてソファから立ち上がったゼロが呼び出した当人らしく頭を下げる。

「夫が呼びとあれば世界のどこにでも駆けつけますわ」

入室する前からニコニコと笑顔な神楽耶がゼロの直ぐ近くまで歩み寄った。あまりに近い距離感にゼロが神楽耶から身を離しながら自身が座っていたのとは別のソファを勧める。

相手に不快感を与えない動作の自然さに慣れを感じた藤堂はゼロの評価を内心で修正する。

「誰も彼もが忙しい身だ。話は手早くするとしよう」

この部屋にはソファは二つしかない。一人掛けのソファに座るのはゼロと神楽耶の二人で、ゼロの後ろにジェレミア、神楽耶の後ろに藤堂と千葉が控える。

「このジェレミアを黒の騎士団に加えたい」

「……………ゼロ様の望みであるならば喜んで叶えたいところですが」

まだルルーシュがゼロとして立つ前からキョウトの一人としてエリアー11にいる重要なブリタニア人のリストの中に純血派であった

ジェレミアのことを知悉していた神楽耶は、チラリとゼロから視線を上げて明言はしなくとも分かる『否』を返す。

「ジェレミアの能力は既に知っているとと思うが」

ルルーシユとてジェレミアのことを持ち出せば反対意見の一つや二つあつて然るべきと考えていたが、基本的にゼロの言うことには反対しない神楽耶の反応を見れば想定は甘すぎたということなのだろう。

「能力では無く、何を為して来たかが問題だ」

「何かしらの事情があつただろうということは察するのですけどね」

厳しい面持ちの藤堂の後に少し困り顔の神楽耶が続け、千葉が口を開ける。

「大体、そのオレンジにはゼロに復讐する理由はあれど仲間になる理由はないはずだ」

ジェレミアを挑発する意図もあつたのだろう。僅かに体に力を入れていた藤堂と千葉を見ながら、至極尤もな理屈にルルーシユは仮面の内側で苦笑する。

「理由ならある」

最初からギアスのことを話すつもりはなく、事実を繋ぎ合わせて脚色した物を話すつもりだった。その為にルルーシユはゼロの仮面に手をかけた。

ゼロが何をしようとしているのかを察して三人が目を開く中、後ろに立つジェレミアの前で素顔が白日の下に晒される。

「……………成程、そういうことでしたか」

白哲の美貌の青年を目の当たりにした神楽耶は今までの疑問が氷解したかのように納得気な表情を浮かべていた。

「どういうことです、神楽耶様？ 彼のことを知っているというのですか」

「随分と昔、ほんの数度だけ会いました」

改めてルルーシユの顔を見た神楽耶は、記憶に今も深く焼き付いている紫の瞳を見据える。

「八年前……………そう、もう八年も前になるのですね。今でも昨日の

ことのように覚えていません、あの暑い夏の日のことを」

ただ登るだけでも大変な石畳の階段を神楽耶と変わらない年頃の妹をたった一人で背負った紫の瞳の少年を忘れるはずがない。

「まだ幼かった神楽耶様が覚えているとは驚きです」

「藤色の目をした鬼のことを忘れるはずがありませんわ」

二人の間だけで通じる話題に乗ることが出来ない藤堂を見たルルーシユは答え合わせすることにした。

「俺の名はルルーシユ・ヴィ・ブリタニア。マリアンヌ皇妃が長子にして、八年前に帝国により捨てられし皇子だ」

ルルーシユの本名と神楽耶と八年前に会っていること、帝国により捨てられた皇子という単語を脳裏で繋ぎ合わせた藤堂も答えに辿り着いた。

「そうか、だから桐原公はゼロを認めたのか」

藤堂の推測通りだとするならば様々なことに納得がいく、後一息でランスロットごとスザクを殺せた機会で撤退した理由にも。

「ど、どういうことですか？」

ルルーシユと直接会ったことのある神楽耶や面識はないが近い位置にいた藤堂と違って、何ら接点のない千葉には推測を立てることは出来ても理解が追いつかない。

「八年前、日本にブリタニアの皇族が留学していたことは知っているか？」

「そういえば、そんなこともあったような……」

当時既に緊迫していた外交状態もあって大々的なニュースにはならなかったので、ルルーシユ達が住んでいた枢木神社の近くに住む者達以外で知っている者は限られる。

「留学など所詮名目上に過ぎない。実際は人質だった」

そこら辺の詳しい事情までは話す気の無いルルーシユは要点を纏める。

「元皇族であり、ブリタニアに捨てられた過去がある。つまり、俺にはブリタニアを恨む理由があるということだ」

「それがゼロになった理由……」

「の、一つでもある」

千葉とは違つてある程度はルルーシユのことを知悉している二人は眉一つ動かすことはなかった。

「ナナリー総督、ですわね」

「ええ」

神楽耶の問いではなく断定にルルーシユは静かに頷く。

「彼女が表舞台に出て来た時、キョウトが監禁していたなどという事実はありえないので、もしやルルーシユ様はどこかで生きているのではと思つていました」

流石に神楽耶もルルーシユがゼロその人であつたなどとは予想も出来ていなかった。

「ブリタニアの発表は事実無根。八年前から一年前まで俺とナナリーは一緒にいました」

「一年前というと、ブラックリベリオンの時に戦線を離れたのは」

「ナナリーがブリタニアの手の者に誘拐されたからです」

今のところ、ルルーシユは何一つとして嘘を言っていない。

「追つたもののスザクに捕まり、皇帝の前に引き出されて記憶を弄られ、この地に戻された」

言いつつ、シャルルのギアスを受けた右目をそつと抑える。

「記憶を？」

「信じられない話なのも無理はない」

ギアスのことを話せないで、ここからは辻褃合わせの嘘が混じる。

「強力な催眠術のようなものらしい。恐らく俺にかけられたのは『皇族であること』『ゼロであること』、そして『妹がいること』を忘れさせられた」

神楽耶はともかくとして、あまりにも非科学的なことに藤堂と千葉の顔には容易に信じることは出来ないと書いてあつた。

「事実、俺は記憶を弄られてゼロであつたことを忘れて馬鹿な学生をやっていた。記憶を取り戻したのはバベルタワーの一件でのことだ」  
「ゼロが再び世に出て来た時のことか。しかし、ゼロほどの男を記憶

を弄れるかどうかは別にして放っておくのか？」

コクリ、と頷いて話を続ける。

「無論、機密情報局という部署が俺を常時監視していた。監視役を懐柔し、情報局のトップの弱みを握って支配下に置いておくから直ぐにブリタニアにバレる心配はない」

「懐柔や弱みを握るなど、出来ているのか？」

「藤堂の疑念は尤もだ」

大分、ゼロルルルーシユの今までの行動に納得がいつていたが、監視の人員は厳選されているはずで容易に懐柔したり弱みを握ることは不可能なはずだった。

「妹の代わりとして、監視役は俺の弟として身近にいた。が、家族の愛に飢えていたことで簡単にこっちに転げ落ちたよ。トップの弱みは意外なところで手にすることが出来た」

それが扇がこの場にいない理由でもある、と続ける。

「どういうことだ？ 扇がどう関係する？」

藤堂が分からないのも無理はない。ルルーシユも独力では辿り着けなかった。

「ヴィレッタ・ヌウ……………ブラックリベリオンの時に扇を撃った女だ。一時期、事情があつて扇と関係があつたらしい」

「聞き覚えのある名です。確かジェレミア卿と同じ純血派の」

神楽耶の問いに近い言葉を向けられても、ジェレミアは黙して語るうとはしない。が、今の場では沈黙こそが肯定を意味していた。

「ヴィレッタはゼロの正体を突き止めた功績で男爵位を得たが、一時とはいえ黒の騎士団幹部と通じた過去は消せない。折角手に入れた地位を捨てるよりも、俺に従う道を選んだ」

「正に外道の行いですね」

「軽蔑しますか？」

「いいえ、流石はゼロ様、ルルーシユ様ですわ」

人の弱みに付け込むのは悪いことではなく、弱みを見せることが悪いのだと権力者である神楽耶は良く知っている。

どちらかといえばゼロに不審を抱いている千葉は神楽耶のように



ルルーシユの言うことを全面的に信じることは出来なかった。

「しかし、やはり信じられない。記憶を弄ることなど出来るはずが」

「ユーフェミア」

ルルーシユが口にした日本人にとっての忌み名に千葉の口から続く言葉が止まった。

「副総督になる前はただの学生に過ぎなかったユーフェミアが突然、虐殺を指示したことをおかしいとは思わなかったか？」

「まさか、あの虐殺はユーフェミアの意図するものではないというのか」

「あの時、俺はユーフェミアの、ユフィの手を取った。おかしくなったのはその直後だ。何かに抗う素振りを見せた後、会場に戻って虐殺を始めた」

ただ、発端のギアスのことだけは避けて推測の余地を残す。

「話を戻そう」

ギアスのことを話せたら楽だろう。

ルルーシユの罪を告白できたのなら楽になれるだろう。

だが、まだまだ。ナナリーを取り戻せるその日が来るまでは、ルルーシユは舞台から降りるわけにはいかないのだから。

「ジェレミアは俺が日本に来る前に少しだけ付き合いがあった。だからこそ、オレンジの合図で一度だけ俺達を見逃すという契約を交わした」

ゼロが初めて世に出た事件、もう一人の当人であるジェレミアがこの部屋に入って初めて口を開く。

「私はルルーシユ様の母君であるリアンヌ皇妃に忠誠を捧げていた。しかし、護ることは出来ず、この日本に送られたお子方にも何も出来なかつた負い目があつた」

忠誠を誓った主君の為ならばどんな嘘であろうとも吐くことが出来るジェレミアの言葉が朗々と語られる。

「純血派を結成したのも、今度こそ皇族を守り抜く為。ナンバーズは皇族にとって不穏分子になりかねなかつたからな……………：枢木スザクの容疑が固まつた段階でルルーシユ様から接触が有り、クロ

ヴイス殿下を殺したのは自分だとも仰られた。ならば、後は私が泥を被ればいいのみ」

主君の為ならば泥を被っても構わない騎士の在り方に、侍足らんとしている藤堂はジェレミアの理屈に理解できるところがあつたのだろう。小さく頷いた。

「その後は敵としてナリタで戦い、敗れた私は戦闘中行方不明MIAの認定をされた最中、とある機関に移送されて体を勝手に改造された」

ギシリ、とジェレミアの強く握られた拳が音を立てる。

「勝手に体を改造したブリタニアが憎む敵となつた以上、亡き主君の子であるルルーシュに付くというか」

「今度こそ忠義を貫く。私が言えるのはこれだけだ」

藤堂を敬愛する朝比奈辺りと話が合いそうだな、と千葉は内心で思いつつ、ジェレミアが純血派として日本人にやってきたことを許せるわけではないが味方になろうという理由に納得した。

「神楽耶様」

ジェレミアに大きく共感できる藤堂が神楽耶の横に回って跪いた。

「日本人としてはジェレミア卿のやったことは許せるとは言えませんが、この忠義に関しては信じれる物と思います」

「……………黒の騎士団は弱者の味方であり、如何なる差別もしません。過去の行いを完全に問わないというのは難しいでしょうが信頼に値すると私も感じました」

これから黒の騎士団はもつと大きな組織になる。過去の遺恨など腐るほどあり、その一つ一つに拘っている者は纏まれる者も纏まれないことを神楽耶は知っていた。

「ですが、一部の者達から厳しい目を向けられるのは避けられないでしょう。味方となるのなら黒の騎士団として相応しい対応を求めます」

ジェレミアをして、神楽耶ほどの齢で清濁を合わせ飲める者を見たことは殆どいない。

「寛大な処置に感謝します」

混じりけの無い敬意と感謝と形に現す為、頭を軽く下げて胸元に手を当てた。

「神楽耶様、ジエレミアを受け入れてくれたこと私からも感謝します」  
「黒の騎士団の理念に従ったままです」

ルルーシユからも改めて感謝を捧げられた神楽耶は少し気恥ずかし気に笑った。

「さて、ここからが本題となる」

神楽耶が落ち着いたのを見計らい、ここまでが盛大な前振りであったので本題に入る。

「今までの本題ではないと？」

「俺は正体を明かす気は無かった。が、事情が変わったのだ」

本題と事情が密接に関わっていることを暗に示しつつ、ルルーシユは渴いていた唇を舐めて湿らせる。

「ジエレミアが再び俺と接触してきたのは、とある組織の刺客としてやってきたからだ」

その意味を反芻した千葉が目を見開く。

「まさかゼロに戻ったことを気取られた？」

「正確にはその疑いをかけられている」

ゼロは黒の騎士団の生命線であり、現在構築中の超合集国構想の軸を担う存在である。如何に危ういバランスで成り立っている存在かを強く認識した千葉がゴクリと唾を呑み込んだ。

「彼奴にもルルーシユ様がゼロであるという明確な確証があったわけではなからう。だが、あれほどのことを早々出来る者はルルーシユ様を置いて他にいない。だからこそ、ゼロに恨みのある私を刺客として送り、確証を得たかったと見ている」

その存在を見知っているジエレミアが嫌悪も露わに続ける。

「ルルーシユ様に仕えると決めた以上、裏切ることには何ら良心の呵責は感じんが一度でも刺客が送られたということが重要なのだ」

「ゼロがルルーシユ様である限り、何度でも疑いをかけられると」

「その度に刺客を向けられては、これから確実に起きるブリタニアとの戦いに差し障りを来たす恐れがある」

神楽耶達にもルルーシユ達が懸念していることに辿り着いた。

「ジェレミアの協力で、その組織と首魁の居場所は判明している」

「先手必勝、ということだな」

「話が早くて助かる」

二人の話からして、ゼロⅡルルーシユを疑っているのはジェレミアを刺客として送った組織のリーダーであると察しがついた藤堂がその意を汲み取った。

「話では単なる研究機関に過ぎないようだがブリタニア本国に俺の正体を伝えられる前にケリをつけたい」

「そういうことなら俺の部隊で」

「いや、気持ちだけで十分だ。敵の居場所は中華連邦にある。星刻に話を通せば、向こうが戦力を出してくれるだろう。後は零番隊がいれば対応出来るはずだ」

お前達に頼みたいのは別のことだ、とルルーシユは少し気まずげにゴホンと咳払いをする。

「ジェレミアがやって来た時に外部協力員にも俺の正体を知られてしまった。以前からの知己であったから引き込むことは出来たが」

奇跡の男に相応しい威圧を放っていたルルーシユが年相応の少年の顔で言い難げに頭を掻く。

「学生に過ぎない彼女は俺の為に黒の騎士団に入ると言って聞かない。もし、俺の正体がバラされた時に味方はいなくなるだろう。その時、彼女を守ってほしい」

ルルーシユは今まで誰にも本心から頭を下げたことはない。

そのルルーシユが小さくとも確かに頭を下げた。

「その方はルルーシユ様にとって大切な方なのですね」

「……………ああ」

頭を上げて問いに一瞬顔を歪めたルルーシユは、話題の張本人であるシャーリーがこの場にいれば小躍りしそうな返答を返す。

「この場合、三人官女ではなく四人官女になるのでしょうか？」

「はっ」

「こちらの話です」

大分前にC・C・とカレンにした話を思い出した神楽耶は笑って誤魔化し、後で必ず会ってみようと心に決める。

「その方を守ることを皇の名に賭けて確約します。藤堂さんもよろしくて?」

「断る理由は、ありませんな。千葉もいいな」

「はい」

未だに衝撃の事実の連続を受け止めきれているとは言えない千葉であったが、ルルーシュが言ったようにその外部協力員の少女が本当にただの学生だったのならば守らない理由はない。

「感謝する」

全てはルルーシュの掌の上のお話だったというだけ。今更、一つや二つの嘘を吐いた程度で罪悪感を感じるような細い神経をしていない。

ただ、少しだけ小さな小さな針がルルーシュの心に突き刺さるだけのことだった。

サウジアラビアから遠く離れた極東の地であるエリア11の政庁。

総督であるナナリー・ヴィ・ブリタニアがとある少女の見送りに、ヘリポートへとやって来ていた。

「アリスちゃん」

「ナナリー総督……」

「昔のようにナナリーと呼んでくれないの?」

金髪の髪をポニーテールにしたナナリーと同一年ぐらいの少女の見送りに、総督であるナナリーがやってくるなど異常事態ですらあった。

「すみません。もうアツシユフォードにいた頃とは違いますから」

淡く微笑みながらも、立場の違いが態度や話し方にまで影響するこ

とをアリスと呼ばれた少女は良く知っていた。

「こんな若輩の私に目をかけて頂いて感謝しています」

アリスはブリタニア人ではない。今はアリス以外が全員死んで無くなった特殊名誉外人部隊イレギュラーズの名の通り、生まれはE・U・ながらもブリタニアに籍を置いている。

「離れるのは少しの間だけです。機体の調整が終われば直ぐに戻ってきます。私はあなたの騎士ですから」

たとえ表向きは誰に認められないとしても。

「はい、待っています」

ナナリーの前から辞し、目的地である中華連邦のとある場所へと向かうへりに乗り込んだアリスは眼下の主君を何時までも見続けた。

「それで、私の機体はどうなるのかしら？」

ナナリーに向けていた温かい笑顔など欠片も無く、特殊名誉外人部隊イレギュラーズとして様々な修羅場を潜って来たアリスとしての顔で迎える嚮団員に問いを向ける。

「ヴィンセントの改修機になる予定だ」

「へえ、出来損ないのギアスユーザーに与えるにしては良い機体じゃない」

ギアスには適性がある。適性が無ければ、そもそもギアスが発現しない。だが、その適正は後付けで得ることが出来る。勿論、その代償はあった。

「で、機体名は何になるのかしら？　安直にヴィンセント・スピードとか？」

「嚮主V・Vから『マークネモ』と聞いている」

自身のギアスの効果から改修機の名前を適当に出したアリスに対して、聞かれたから答えたという風情で嚮団員は機体名を伝えた。

「誰でもないマークネモ、ね。私が乗る機体にピッタリの名前じゃない」

やがてナナリーどころか政庁すらも見えなくなったへりの窓から外を見下ろしたアリスの目は荒涼としていた。

## STAGE 4 嚮団包囲網

中華連邦の砂漠地帯にあるギアス嚮団の本拠地から数km離れた岩山が連なる一帯で、作戦の最後の詰めを行っていたルルーシユの下へジエレミアが馳せ参じていた。

「本当によろしいのですか？」

立っているだけで汗が滴り落ちる暑さの中、一瞬だけジエレミアの質問の意図が読めなかったルルーシユは瞬きをする。

「準備は滞りなく進んでいる。今更、止める理由が無い」

「いえ、我らがお傍を離れて大丈夫なのかと」

ジエレミアが気にしていたのは作戦の成否や準備具合などではなく、自分達がルルーシユの傍から離れるという一点に関してだった。「蜃気楼の中が一番安全だ。お前こそ型遅れのサザーランドを使う自分の心配をしろ」

ルルーシユの乗機である蜃気楼は絶対守護領域など防御力に優れた機体である、黒の騎士団の主力である暁よりも遥かに。こと嚮団側に強力な機体が無いと予想される中では蜃気楼に乗っている限りでは安全が担保されていると言っても良い。

反対に本作戦でジエレミアが乗るのは暁ではなく拿捕したサザーランド、その改修機。

ブリタニアの主力機になりつつあるヴィンセントと比べれば、どうしても機体性能で劣る。当然、黒の騎士団の主力機である暁にも遠く及ばない。

「使い慣れている機体ですので上手く扱って見せます」

暁は月下の後継機で、その前の無頼や無頼改はグラスゴーを改修した機体であるが世代を重ねたことで操作性も別物となっている。ブリタニア製の機体しか使ったことがないジエレミアにとって使い慣れた機体であるサザーランドを選ぶのは至極真つ当ではあるからルルーシユはそれ以上のことを言わなかった。

「分かった。だが、死ぬなよ」

「イエスユアマジエステイ」

ザクザク、と軽い体重で砂を踏む足音が近づいて来る。

ルルーシユが振り返ると、あまりの暑さに黒の騎士団の制服の胸元を軽く開けているC・C。C・C。がやって来た。

「暁も悪い機体ではないと思うぞ。このクソ暑い中で黒い機体など見ている暑苦しいが」

暑いのであれば冷暖房が完備してあるコクピットにいればいいものを、わざわざ出て来たC・C。C。に別の理由でルルーシユは仮面の中で眉を顰めた。

「探されている奴が迂闊に出回るな」

「ここまで来れば隠れても意味はないだろう」

制圧作戦間際なのだから隠れる意味は確かにない。

「ルルーシユ、お前茹つてないか？」

「……………黒が暑苦しいというなら、こんな格好をしている俺が一番暑いと今更気づくか」

「いや、なんかごめん」

「分かればいい」

暑いのである。熱いのである。

仮面の中は汗だく状態。真つ黒な衣装は太陽の光を存分に吸収し、普段はそこまで気にならないが仮面は炎天下では地獄の被り物であることを強く理解したルルーシユだった。

「蜃気楼の中にいればいいのに」

一人だけパイロットスーツを着たロロが自機であるヴァインセントの調整を終え、話を聞いて率直な感想を漏らす。

「通信では傍受される可能性がある」

「ルルーシユ様が倒れたら元も子ありません」

「後少しなら大丈夫だ」

つまり、後少し経ったら大丈夫ではないと言っているようなもので、ロロはギアスを使って周囲の体内時間を止めて仮面を外せばマシンになるだろうかと思案に考える。

「その二人、貧弱なルルーシユの為に手早くすませればいだろう」



に」

C・Cはギアスを使おうか悩んでいるロロと上着を脱いで長身を活かして影を作ろうとしているジェレミアに呆れつつ、せめて岩山の陰に移って日陰で話をする事で決着した。

「黒の騎士団、中華連邦の作戦目標はあくまでブリタニアの施設の制圧だ。だが、俺達は違う。今後の禍根に成り得るV・Vを確保する」

直接、陽射しを浴びていないだけ多少はマシになったルルーシュが話の主導権を握る。

「奴は死なない。つまりは殺して黙らせるということが出来ない。高圧力ケースに入れ、可能ならば誰にも知られずに隠匿したい」

「出来るのか？」

疑問を呈したのはC・C。

「これだけの戦力だ。恐らく捕まえるだけなら可能かもしれないが誰の目にも触れずにとというのは難しいんじゃないか」

「その為の僕だ」

鍵となるのは、ロロの体感時間停止のギアスにある。

「僕が誰よりも早くV・Vの下へ辿り着ければ、広範囲にギアスを使い続けければ周りに見られる心配はない」

「しかし、V・Vにギアスは効かない」

「それは私も同じです」

ロロとペアを組んで動くのはジェレミア。

ギアスキャンセラーの効果範囲を絞り、自身のみ限定すればロロのギアスの効果範囲内でもジェレミアは動ける。

「最悪、V・Vのこのことを見た者にギアスをかけて忘れさせる」

不確定要素になりかねない可能性もあるが、ここでV・Vを確保出来ればリスクを冒すだけの価値がある。

「各自、自分の役割を果たせ」

いい加減に限界になったルルーシュの言葉でそれぞれの機体に戻る。

「周香凜、そちらはどうか」

「部隊の展開は完了している。後は開始の合図を待つだけだ」

蜃気楼に乗り込んで真つ先に暑苦しい仮面を脱ぎ捨てながら、忙しい黎星刻に代わって中華連邦軍を取り纏めている周香凜と通信を交わす。

「後は俺だけか」

と言いつつも、下準備自体はルルーシュも既に終えている。

通信回線を開いて、メインモニターに初めて見るV・Vの姿が映った。

「やあ、ジェレミア。君にしては遅かったね」

V・V側の通信画面には、事前に録画しておいたジェレミアの映像を流していた。

返答を聞いたルルーシュは手元のタッチパネルを操作する。

『慎重策を取ったのはV・V様だと記憶していますか？』

「ルルーシュはシャルルに似て頭の良い子だからね。二重三重の罠があってもおかしくない。しかも、使い勝手の良いギアスともなれば警戒するのが普通だろう？」

『その所為でここまで時間がかかったのです』

「それはすまなかったね」

V・Vを直接知るC・Cやジェレミア、ロロから聞いた話から予測される会話を数パターン用意していた。

向こう側からはジェレミアが話しているようにしか見えないだろうが、実際にはルルーシュがV・Vの言葉から最適と思われるシーンを選んで流している。

『政庁周辺とアッシュフォード学園内にギアスキャンセラーをかけたましたが大きな反応は見られません。機密情報局の者ともギアスキャンセラー使用后、話をしましたがおかしな点は一つありませんでした』

「おかしいね。ルルーシュは絶対にゼロなのに」

ドルイドシステムを使用して、秘匿通信回線を遡ってV・Vの居所を掴もうとする。

中華連邦に隠れる為に防諜技術はかなりのようで、まず海外のサー

バーを幾つも経由してからこの地へと戻ってくる。

「ルルーシユのギアス適性値はシャルル並みだ。C・C・の目的を考えればルルーシユの傍を離れると思えない」

手動でも解析を行っていたルルーシユの手がピタリと止まった。

『皇帝陛下のギアスに掛かっている以上、ゼロに戻る可能性は低いのでは?』

C・C・の目的はルルーシユですら知らない。気にはなるが捕まえて尋問すればいいと考え、止めていた作業を続行する。

「ゼロのようなことを出来る人間が他にいると思う方がゾツとするね」

『確かに』

解析作業は進み、ギアス嚮団本拠地内部でV・V・の居場所が絞られて行く。

「僕はルルーシユがゼロであったとしても特別何かをするつもりはないんだ、C・C・さえ渡してくればね」

ジェレミアがいずれはV・V・と敵対すると決めてから記憶していた嚮団内部の地図に遂にV・V・の現在地が表示された。

「木下!」

捕まっているカレンに代わってゼロ直属の零番隊の隊長代行をしている木下に命令を発した直後、周囲の岩山から飛翔滑走翼で飛び上がった暁の集団が嚮団に向かって飛んで行く。

ルルーシユは蜃気楼を飛ばせながらジェレミアやC・C・、口口にはV・V・の現在地のデータを送る。

「嚮主V・V・!?! ナイトメアがっ! 黒の騎士団と思わます!」

画面の向こうで嚮団員と思われる慌てた声が聞こえ、ルルーシユが見ているV・V・の姿がブレて灯りが明滅する。

「……………そうかい、ジェレミアは取り込まれたわけか。君はルルーシユだね」

「観測者気取りの自分を恨むがいい」

周香凜にも指示を出して包囲陣を築かせながら、ルルーシユもまた蜃気楼を駆ってV・V・の下へと向かう。

ジレミアの映像を使う意味も無くなったので切ると、画面の向こうでルルーシュの顔を見たV・V。が表情を歪める。

「マリアンヌの子らしい卑怯な手だ」

「トウキョウ決戦でナナリーを攫い、神根島に俺やスザク達を集めて高みの見物をしていた奴が偉そうに」

「馬鹿な子供には躰が必要なようだね」

ブツリ、と蜃気楼が嚮団に侵入したのと同時に映像が途切れた。

「我らは黒の騎士団だ！ 諸君らを傷つける意図はない！ 抵抗せずはこちらに従って欲しい!!」

木下や零番隊の隊員、そしてゼロの声を録音した音声は嚮団内に鳴り響き続ける。

非戦闘員ばかりの嚮団員も多くては制圧に時間がかかり過ぎる。その為、V・V。の先代の嚮主であったC・C。に嚮団員を説得させるという選択肢もあったが、黒の騎士団内には何も知らぬ者が多い中ではリスクが高すぎた。

「本当にギアスの開発・研究するだけの施設のような」

突入したルルーシュの目にも、地上に降りた黒の騎士団の暁から逃げようとしている嚮団員が非戦闘員であることに改めて実感する。

「嚮団員がシャトルで逃げようとしているのを見つけた。こちらで対処するぞ」

「そいつらはデータを持っている可能性がある。出来るなら殺すなよ」

「無茶を言う」

C・C。専用のピンクの暁が端の方へと飛び立っていくのを尻目に、ルルーシュはV・V。がいると思われる中央の小高い建物に蜃気楼を向ける。

「兄さん、ギアス能力者ユーザーが——」

「ぐっ!?!」

口から通信が入った直後、まるで横合いからトラックに跳ねられたかのように蜃気楼が吹っ飛んだ。

「な、なんだっ!」

機体を立て直しながら宙へと飛び上がらせると、その足元を何が通過していった。

「これはゼロの機体……」

蜃気楼を吹っ飛ばした張本人であるマークネモを操るアリスは、一番目立っていた機体がブリタニア最大の敵である黒の騎士団トップのゼロの物であると看破して眉を寄せた。

「どうしてゼロがここに？」

蜃気楼が襲われたとみて、零番隊の内の三機がマークネモに襲い掛かるの視界の端に収めたアリスは機体を後方に下げる。

「良いところにいたね、アリス。そのまま僕達が逃げる時間を稼ぐんだ」

「……………了解、嚮主V・V。」

何かのkokopittoらしいところから通信を繋いで来たV・V。に否と言える力はアリスにはない。

ランドスピナーを使って近くの建物を駆けあがり、日本製ナイトメアフレームのストラッシュハーケンである飛燕爪牙をマークネモのブロンドナイフで真つ二つにしながら考える。

「この状況、利用できる？」

全力で戦闘になれば非戦闘員を巻き込むと分かっているから、互いに空いている戦闘距離を詰めることを敢えてしないアリスは呟いていた。

「中和剤の使用を許可する。このジークフリートと共に敵を一掃しようじゃないか」

「……………イエス、マイロード」

舌打ちを我慢しながらアリスが答えた瞬間、ドンと地面を突き破ってナイトメアフレームを遥かに超える巨大な物体が現れた。

「ジェレミア！ 確かこの機体は」

「はい、神経電位接続ですから私以外に動かせる者は……」

ブラックリベリオンの時、調整が万全でなかったジェレミアが暴走して乗り込んでゼロを襲った機体。半身が機械になったジェレミアでなければ神経電位接続を必要とするジークフリートを動かせない

はず。

「機械つていうのは誰でも動かせないと意味がないんだよ」

とはいえ、流石にパイロットとしても優秀であるジェレミアが神経電位接続を行って操縦した場合と比べると二段も三段も劣ることはV・V・も口にしなかった。

「V・V・ ウウウウウ！ 我が忠義の機体を!!」

「裏切り者に用はない。アリス、やれ!」

近くの建物にスラッシュハーケンを打ち込んで宙に浮かぶジークフリートに向かって跳んだサザーランドを大型スラッシュハーケンで迎撃したV・V・の命令に、アリスはマークネモに一つの命令を下した。

「わあああああああああああああああああ!?!?!?!」

首筋に打ち込まれる細胞抑制剤の中和剤が体に染み込んでいく度に、自身の体が違う何かに侵されて行く汚辱感にアリスは叫びを上げた。

「はあああ、中和限界は120秒。その間にケリをつける!」

乱れた息もそのままに、額にギアスの紋章を浮かび上がらせながらアリスはマークネモを動かした。

「二つ!」

まずは手近にいた黒の騎士団の暁をブロンドナイフで四肢を貫きながら廻転刃刀を奪い取る。

「二つ!」

ギアスの力で超高速に至った今のアリスが駆るマークネモの速度はナイトオブラウンズすらも超える。二機目の暁も為す術も無く一機目の暁から奪った廻転刃刀で両断する。

「三いつううううう!」

余人の目には姿すら映らずに三機目の暁を瞬殺したアリスのマークネモがようやく動きを止めた。

「この動き、アリスか!」

優先目標であるV・V・が乗るジークフリートに攻撃を仕掛けていたヴェインセントに乗っていた口口は記憶の中にある少女が繰り出

したギアスのことを思い出して、思わずその名を口に出していた。

その声は蜃気楼を標的にしようとしていたアリスの耳にも届いた。

「その声、ネブロス？」

「僕をその名で呼ぶなあああああ!!」

嚮団員時代の忌まわしい名で呼ばれたロロは激昂してアリスのギアスの天敵である体感時間を停止させるギアスを発動させた。

ロロが全力でギアスを発動させれば、この地下の大部分を効果範囲内に収められるし、実際にそうだった。だが、今の時点において余りにも浅慮過ぎた。

「僕達にはギアスが効かないのにな」

大半がロロのギアスにかかって動きを止めたが、コード所持者であるC・C・とV・V・には効かない。

ドルイドシステムと軍の指揮をしなければならぬ蜃気楼は乗り手が操作しなくても落ちはしない。しかし、全く動かない機体などただの的でしかない。

「馬鹿者!」

ジークフリートの反応にシャトルを破壊して急いで転進したC・C・が蜃気楼を庇ってジークフリートから放たれた大型スラッシュハーケンを受けて吹っ飛ばされる。

「くっ」

吹っ飛ばされていくピンクの暁直参仕様を目にして、これにはロロも冷静さを取り戻してギアスを解除せずにはいられない。

直後、マークネモがヴィンセントから大きく離れて距離を取る。

「相変わらず凶悪なギアスなこと」

ロロの体感時間を止めるギアスは、超高速で動けるアリスのギアスを完全に封じ込めるほどに相性は最悪。今回は助かったが次は上手く行かないと理解していたアリスに油断はなかった。

「アリス、僕の援護を。僕の近くにいればロロはギアスを使えない」  
「了解」

中和剤の効果は残り80秒と見てアリスはシナリオを組み立てる。  
「裏切り者の失敗作ロロの相手は出来損ないアリスに任せるとして」

適性値が低くて辛うじてギアスを発現したものの使用中には心臓が止まる口口と、適性値が足らずにコード所持者の細胞を埋め込んで細胞抑制剤で中和しなければギアスを発動できないアリス。

似て非なる二人をV・V・は皮肉っていた。

「あのピンクにC・C・がいるんだね。引きずり出させてもらおうよ」

先の行動から吹っ飛ばされて建物を薙ぎ払って墜落したピンクの暁直参仕様にC・C・が乗っていると判断したV・V・はジークフリートを動かす。

「させない！」

その射線に割り込んだ蜃気楼がハドロシヨットを放つが、ジークフリートは駒のように回転しながら弾き飛ばす。

「ちっ、電磁装甲は健在か」

「マリアンヌの子供が調子に乗るから！」

「何をっ！」

勢いに乗ってそのまま突進を仕掛けたジークフリートの攻撃を絶対守護領域を展開して防ぐも、彼我の重量差で簡単に弾き飛ばされる。

「ルルーシュ様に手は出させん！」

ピンクの暁直参仕様の直ぐ近くに落ちた蜃気楼に追撃をかけようとしているジークフリートに攻撃を仕掛けるジェレミアのサザーランド。

「ジェレミア、君はゼロを恨んでいたよね」

「然り、これで皇族への忠義もはたせなくなつたと考えたからな」

ヴェインセントの相手をしながらジークフリートに攻撃を仕掛けようとしている他の暁を仕留めているマークネモを横目に、飛び上がった直上から大型ランスで突き刺そうとして来るサザーランドの攻撃を躲す。

サザーランドは尚も諦めずに切り返してジークフリートの大型スラッシュハーケンを掴み、大型ランスを突き立てんとした。

「されど、仕えるべき主がゼロであったなら、マリアンヌ様の為にも！」



「お前まで、その名を口にするか！」

接近戦を仕掛けて来るサザーランドに乗るジェレミアの言葉に苛立ちを覚えたV・Vは電磁ユニットを作動させる。

「ぐわあああああああ!?」

電撃がコクピットの内部にまで浸透し、機械の体であるジェレミアの体を蹂躪する。

しかし、この時をこそ待っていたアリスは行動に出る。

「今！」

中和剤限界時間まで二十秒を切ったところで明らかに外装と違って守りの弱そうな電磁ユニットを見たアリスが口を振り切る。

アリスのギアスの速度に耐えられるように改造を施されたヴィンセント・マークネモは、ギアス発動時の速度はナイトオブラウンズをも上回っていた。

優れたパイロットではないV・Vが気付いた時には、廻転刃刀によって電磁ユニットが深々と切り裂かれた。

「なっ、アリスウウウウ!?」

「そんなに私が裏切るのが意外かしら。心までブリタニアに、ましてや嚮団に売り飛ばした覚えはないというのに」

ブリタニアが占領した国のナンバーズの中で、嚮団研究者の一人だったマッドによってコード細胞適性を認められて選ばれたアリス達は抑制剤という鎖で縛られながら特殊名誉外人部隊として戦って来た。

マッドが死に、戦場で生死を共にしてきた特殊名誉外部隊の仲間達も逝き、残るはアリスだけ。

忠誠心など初めから無く、隙あらばその首を取ってやると決めていた。今がその時。

「失敗作にも劣る出来損ないの分際で——」

「さよなら、V・V。あなたのことはマッドの次に嫌いだったわ」

ナナリーの下へ戻る為には黒の騎士団に捕まるわけにはいかないアリスはV・Vにトドメを刺すことなく、あっさりとは反転して撤退する。

「ジークフリートの装甲は破損した。全機、構えろ！」

蜃気楼の胸部が開き、ピンクの暁直参仕様がハンドガンを構え、サザランドが大型キャノンを、ヴィンセントがアサルトライフルを、団員達が乗る暁がバズーカを構える。

「ルルーシュ、この呪われた皇子め！」

「撃てっ!!」

この攻撃を受ければ損傷しているジークフリートもただではすまない。その前に蜃気楼を沈めようとするが、数秒早くゼロであるルルーシュの命令を合図に、大火力がジークフリートに向かって撃ち放たれた。

「ダメだ、このジークフリートはもう……………くっ!?!」

幾ら電磁装甲があるといっても破損した電磁ユニットから襲う衝撃にV・V・はジークフリートがそう長く持たないことを実感した。

地面に叩き落とされた衝撃で破損したコクピット前面から投げ出されたV・V・は大怪我を負いながらも歩き出す。

「黄昏の間にさっさと逃げれば」

戦闘の影響で瓦礫だらけの中を足を引きずりながら進むV・V・の道を阻む影が二つ。

「君達は……………コーネリアとバトレー」

戦闘のドサクサでバトレーの手助けで牢屋から逃げ出すことに成功したコーネリアがV・V・の前に立ち塞がる。

「確かV・V・といったか。バトレーから聞いたぞ、貴様がギアスの源の一人だとな」

黒の騎士団の包囲網を知り、なんとか脱出のチャンスを探がっていたコーネリアはギアスの源とも言えるV・V・を前にして晒った。

「僕をその拳銃で撃ったって何にもならないよ。今は黒の騎士団から、ゼロであるルルーシュから逃げることを優先するべきだよ。君だってそれぐらいは分かっているだろう?」

コーネリアが拳銃を向けて来ても、皇族であり軍人であるコーネリアならば何を優先して動くかを理解できるはずだと、今は言葉でしか何も出来ないV・V・が説得しようとする。

「ああ、分かっているとも」

V・Vは勘違いをしていた。いや、知っていたはずだった。

コーネリアが妹であるユーフェミアに向ける愛の重さが、皇族であることや軍人であることを大きく上回っていることを。

「滅せよ、ユファイの仇だ」

優秀な軍人であるコーネリアが撃った弾はV・Vの眉間を貫き、頭部を貫通する。

「こ、コーネリア……」

「流石は不老不死。この程度では堪えんか。だが」

負った傷のこともあって倒れ込んだV・Vの下へと歩み寄ったコーネリアは四肢を順に撃ち、残った弾の全てを顔面に撃ち込む。

幾らC・C以上の再生速度があろうとも暫くは活動不能に陥ってピクリとも動かないV・Vの横腹を蹴って反応がないことを確認したコーネリアは背後を振り返ってバトレーを見る。

「バトレー、こいつを縛り上げろ」

「い、イエス・ユア・ハイネス。一体どうするので？」

幾ら相手が不死身であろうとも無慈悲な行為に恐れを抱きながらも、逆らえば同じ目に遭うかもしれないという予感がバトレーを行動させた。

「私の叔父だと名乗ったV・Vを陛下の下に連れて行き、ギアスのことを問い質す」

シャトルで脱出しようとしていた嚮団員から聞き出した黄昏の間がある中央棟を見上げたコーネリアの目は憎しみに燃えていた。

## STAGE 5 赦し

アツシユフオード学園の生徒会室にいるのは二人。

「ごめんね、スザク君。忙しいのに手伝ってもらっちゃって」

二人の内の一人であるシャーリー・フェネットが作業を続けながら、もう一人である枢木スザクに言った。

「普段、中々手伝うことが出来ないからね。こういう時でも手伝えることがあるのは嬉しい」

シャーリーが纏めた書類をホッチキスで止め、段ボールに詰めていくスザクは言葉通り表情は穏やかだった。

「それに今はエリアーは安定しているし、書類仕事が得意じゃない僕は手が空いてるから」

「黒の騎士団も中華連邦に行っちゃったもんね」

一瞬、シャーリーの言葉に手を止めたスザクは平静を装って作業を続ける。

「しかし、また随分と書類があるね。政庁の一部署並みじゃないか」

「生徒会の引き継ぎだから。ミレイ会長………前会長が生徒会長をやっていた時期が長かったのとイベントの多さもあって、どうしても書類が多くなっちゃったんだって」

「ああ、納得」

アツシユフオードは巨大な学園で、ミレイが会長になってから多種多様なイベントを行っているので関係書類がどうしても多くなってしまう。

多種多様なイベントを可能にしていたのは会長であるミレイの発想力とカリスマ性、副会長であるルーシユの事務能力である。その副作用が多量の書類の山ではあるが。

「リヴアルが会長を引き継いだけど見てるだけでも大変そう」

「新しい生徒会のメンバーも選んでるんだって？ 会長は副会長のルーシユが引き継ぐって思ったけど」

「柄じゃないって。でも、本当は面倒臭がっただけだよ」

「ルルーシュらしい、のかな」

ゼロとして動くのに生徒会長などやってられるはずがないと二人は知っているので、核心を突かないまま話を続ける。

「当のルルーシュは？ 姿が見えないけど」

シャーリーは何も知らないとスザクは知っているはずだった。それでもルルーシュとの距離が近いはずだから明確な意図はなくとも、無意識の内に探りを入れる。

「口口とどっかに行っちゃった、私を置いて」

唇を尖らせて拗ねているように見えるシャーリーに嘘は無い様に思えたスザクは内心で首を振った。

自分が嘘を見抜くのが得意ではないと知っているから。

「二人でどこに行つたんだらうね」

「大学には行かないみたいだから、どこかの会社でも見に行つたんじゃない？ もう私達もここアッシュフォードを卒業した後のことを考えなきゃいけないし」

アッシュフォード学園を卒業した後のことなど考えたことも無かったスザクは当たり前前のことを告げられて鼻白んだ。

「卒業した後のことか……」

スザクは今後のことを考えても、ナイトオブワンになつて特権を行使して日本を取り戻した後のビジョンを思い描けずにいた。

「スザク君はナイトオブブラウズだもん。将来は安泰だね」

「どうだろう」

皇族に次ぐ地位を持つているといっても、その地位は決して盤石ではない。

ナイトオブブラウズとは勝利し、強さこそが全て。戦場で敗れることがあれば、自分よりも強い者がブリタニアから現れれば地位から引きずり落とされる未来しかない。

「僕はナンバーズ出身で追い落とされないように毎日必死だから」

侮られることは多々あり、貴族に下に見られることも決して少なくない。

表立ってないのは帝国最強を担うナイトオブブラウズの地位が

あつてこそ。地位を追われるほどの失態を起こせば、その瞬間にそれ見たことかと攻撃されるのは想像に難くない。

「そういうシャーリーは学園を卒業したらどうするんだい？」

どうしても自分の話は血生臭くなってしまうのでシャーリーに話を振った。

「ルルのお嫁さん……なんちゃって」

頬を赤く染めて恥ずかし気に顔を逸らすシャーリーの当たり前の願いに、スザクは自分が如何に平穩から遠く離れた場所にいるかを突きつけられているようだった。

「働かないのかい？」

昔からお嫁さんになるのが夢だったもの。それにルルなら未来のことまで考えて一杯稼いでくれそうだから

「簡単に想像できるよ」

ナナリーの為だけに世界に名を轟かせていたブリタニアに戦いを挑もうとしたルルーシュだ。尽くされるよりも尽くすことに喜びを感じるタイプなので、スザクには二人が家庭を営む姿が比較的容易に想像できた。

ただ、その未来が訪れるかはあまりにも未知数過ぎた。

「ねえ、スザク君」

「なんだい」

ユーフェミアの命を奪ったゼロであったルルーシュが幸福になることを心から望めないスザクの本心を知らずともシャーリーは少し悲しげだった。

「私は、私はルルが好き。スザク君は嫌い？」

その問いは今のスザクにはあまりにも重い。

「僕は……好きだった」

「今は？」

「……………」

過去形で語ったスザクにシャーリーの追及は止まらず、何も知らないはずの彼女には何も言えずに沈黙を返す。その沈黙こそが何よりも雄弁に今の心情を語っていることにも気づかず。

「変だと思ったんだ。前はあんなに仲がよかったのに。ケンカでもしたの？」

ただの喧嘩だったならばどれだけ良かっただろうか。

ルルーシユは許されなかったことをした、決してスザクにとって許すことが出来ないことを。

「許せないんだ」

何も、話せない。

話せないから、そんな抽象的なことしか言えない。

「……………許せないことなんてないよ。それはきつとスザク君が許さないだけ。許したくないの、きつと」

我知らずにユーフェミアの血に染まった体を幻視して手元を見下ろしていたスザクに、シャーリーは子の全てを包み込む母のような声で言った。

「私はもう、とつくに許したわ」

スザクが見上げた視線の先でシャーリーは聖母のように淡い微笑みを浮かべている。

「シャーリー、君は……………」

「手伝いに来たぞ、スザク」

「……………」

決定的な言葉がスザクの口から漏れようとした直前、生徒会室に入ってきたのはスザクと同じナイトオブブラウズであるジノ・ヴァインベルグとアーニャ・アールストレイムの二人。

「じ、ジノ、アーニャまで」

リヴァルの指導を受けながら大分砕けた物言いをするようになってきたジノが気安く、アーニャは無言のまま室内に入ってきた。

「何か手伝えることはあるか？」

「ううん、もう終わるところ」

「え、もう？ これなら女の子と話さずに先に来たら良かったか」

「その女の子達に恨まれそうだから私としては大助かり」

「おっと、これは一本取られた」

先程の空気などないかのようにシャーリーがジノとが気安く話し

ているのをぼんやりとスザクは見ながら、最後の書類を段ボールに詰めて収納する。

「ジノとシャーリー、仲いいね」

異性への好意ではなく、純粹な友人への対応をしてくれるシャーリーにジノも楽しく話せているように見えた。

「リヴァル先輩でも固いところがあるのにシャーリー先輩は普通に接してくれるから俺も話しやすい」

「ちよつと話し方が貴族っぽいだけで普通の男子と全然変わらないよ。あ、貴族だっけ」

「後、ナイトオブラウンス」

最後にアーニヤが付け足してオチがついたところで、シャーリーが偏見無くその人を見て話してくれる有難い存在であることをスザクも改めて自覚する。

「ルルーシュ先輩は良い人を捕まえたよ。いや、捕まえられたのか？」

「言い得て妙」

「もう、止めてよ二人とも」

「照れなくても良い」

必要が無ければ一日中、口を閉じていることもあるアーニヤもシャーリー相手には少し饒舌になるような気がする。

「ところで、シャーリーに聞きたいことがある」

ブリタニアの多くの人達がシャーリーのようであったならば、世界はきつと平和だろうなと現実離れた想像を膨らませていたスザクは珍しいアーニヤの行動に目を丸くする。

「聞きたいことって私でいいの？」

「一番素直に話してくれそうだから」

理由になっっているようになっっていないような微妙な理屈に、シャーリーは少し考えるような顔をした後に頷いた。

「これを見て」

そう言ってアーニヤがシャーリーに手渡したのは彼女が何時も弄っている携帯電話だった。

携帯電話の何を見るのだろうかと受け取ったシャーリーが画面に



目を落とすと、位の高そうな服を着た中性的な少年が花壇の前で二輪の赤いバラを持って立っていた映像を目にする。

「わあ、可愛い子」

ズボンを穿いていることから男の子であると見たシャーリーは感嘆の息を漏らしながら、知っている人物との類似性に気付いた。

「ルルに似てる?」

「やっぱりそう思う」

紫の瞳、そして髪の毛の長さは違うが顔つきがルルーシユに酷似していたので思わずそのまま口走ると、アーニヤも我が意を得たりと頷いた。

「ルルーシユ君には自分じゃないって言われた」

よくよくシャーリーは画面を見て、高貴な服装からしてブリタニアにいた頃の写真であると察しがついた。皇族の次にブリタニアの象徴であるナイトオブブラウズに自分であると言えるはずがないとも知っている。

「本当にルルーシユ先輩に似てるな。なあ、スザクもそう思うだろう」  
長身を活かして斜め上からシャーリーが持つ携帯電話の画面を覗き込んだジノも同じ所感を抱き、ルルーシユと昔馴染みなのだとリヴァルから聞いていたのでスザクに話を振る。

「ん、ああ……」

ルルーシユが皇族だったことを知っているスザクは困った。直ぐに写真の主が幼い頃のルルーシユ本人であることに察しがついたので、ここで安易な否定は逆におかしいので返答を濁す。

「アーニヤはどこでこの写真を?」

「分からない」

幼い頃のルルーシユとアーニヤの繋がりが分からない。写真をどうやって撮ったのかと聞くも、本人であるアーニヤは首を横に振った。

「分からないってことはないだろう。それとも他の誰かが携帯電話を使ったのか?」

「それも分からない」

ジノの当然の疑問に悄然と肩を落とすアーニヤに、スザクとシャーリーは顔を見合わせた。

「この携帯電話には、九年前に私が書いた日記がある。でも私にはこの記憶がない」

「えっ」

「他にも一杯。私の記憶と、データとしての記録が違っているの」

九年前から抱えているアーニヤの悩みを聞いて、何かの病気ではないかと考えたのはジノ一人だけ。

(まさか皇帝陛下のギアス？ でも、なぜアーニヤに?)

アーニヤの症状は皇帝の記憶改竄のギアスを受けたと仮定すれば全てが納得がいく。

しかし、九年も前のただの少女であったはずのアーニヤが皇帝のギアスを受けなければならぬような理由に見当がつかない。

「それだけじゃない。今でも記憶がずれることがある。中華連邦で戦った時も、いきなり……」

「アーニヤちゃん」

皇帝のギアスを受けているだけでは説明できない症状にスザクも困惑する中、アーニヤを安心させるようにシャーリーがその手を取った。

「私には何も出来ないかもしれないけれど」

自分が自分でないような違和感、世界の全てが嘘をついているような恐怖をシャーリーも感じたことがあった。

そんなシャーリーを引き戻してくれたのは、温かな手の温もりと強さ、そして捨て鉢になって逃げていた心を繋ぎ止めてくれたのはルーシユの言葉だった。

「出来るだけ力になる」

何も出来ないかもしれないけど、何もしなくて良い理由にはならない。

「頭の良いルルなら何か良い解決方法を見つけられるかもしれない。一度、相談してみるね」

「……………ありがとう」

無力なのかもしれない。それでも味方でいてくれるならアーニヤは礼を言わずにはいられない。

そのシャーリーが放つ慈愛の光があまりにもユーフェミアに似ていて、スザクは彼らを直視できなかつた。



「皇帝陛下、何を?!」

バンバンバン、と何度も銃声が轟いて、先に倒れていたコーネリアの近くにバトレーと彼の部下が倒れる。

「兄さん、大丈夫ですか?」

娘や配下を撃つたことよりも双子の兄の心配をする皇帝シャルルは、放り出された形になるV・Vの傍らに膝をついて背中と頭を支えながら言った。

「……………ああ、くつ……………コーネリアにはやられたよ」

両手足は縛られたままで、コーネリアによって両目を撃たれて未だに視力は戻っていないがシャルルの声は聞こえていた。

「良く来てくれたね、シャルル。やっぱり最後に頼りになるのは兄弟だ」

「二つだけ聞かせて下さい、兄さん」

流石にV・Vも旗色が悪く何も出来ない中で焦燥を覚えていた。その中で救ってくれたシャルルに礼を言おうとして遮られた。

「ルルーシュに刺客を放つたというのは本当ですか?」

目が見えないから今、シャルルがどのような顔をしているのかわからない。

ただ、声だけは不自然なほどに平坦で、事実だけを確認するような問いにミチミチと肉が再生していく奇妙な感覚の中で笑みを浮かべる。

「お蔭で仕返しされちゃた。虎の子だったギアスキャンセラーも取られちゃってアリスにまで裏切られちゃうし、良いところ全くなしだよ」

目が見えないから、シャルルが怒りから歯を食い縛っていることにも気づかない。

「ははっ、でも収穫もあった。ルルーシュがゼロだって分かったんだ。ナナリーも騙していたんだ、あいつは。嘘をっていたんだよ」

「嘘をついたのは兄さんだ」

キツパリと切り捨てるように言い切ったシャルルにV・Vは続ける言葉を持たなかった。

「兄さん、僕は知っている」

一度ならば、あのリアンヌを殺したという嘘ならば、精神だけでも生きていたから許そう。肉体も保存してあるから、もしかしたら戻れる可能性もあるから。

「あなたがリアンヌを殺したことを」

「シャルル、違うそれは……」

二度目はない。

言い訳も、赦さない。

「ルルーシュは僕が監督すると言ったはずだ。兄さんもそれを認めた」

「だけど、C・Cがいなければ僕達の計画は」

「兄さんは、嘘をついた」

そこにどんな理由があろうとも、たとえシャルルの為であったとしても、嘘をついたという一点だけが問題なのだ。

「これは一時の別れに過ぎない。ラグナレクの接続が成れば、また会える」



## STAGE 6 関係の名

ギアス嚮団内部上空を飛び回っている蜃気楼のコクピット内でもルーシユは苛立ちを滲ませていた。

「まだV・Vは見つからないのか？」

「申し訳ありません。搜索しているのですが中々……」

ジークフリートとの戦いで乗っていたサザーランドの電気系統の一部が損傷したので放棄して降りたジェレミア・ゴットバルトは通信機を手に、黒の騎士団と中華連邦の混成軍によって複数の場所に集められた嚮団員の中にV・Vがいなかったかを確認して回っていた。

「ロロ、C・C、そっちはどうか？」

「駄目だ。見つからない」

「ごっちもだよ、兄さん。隠し通路も通った形跡はなさそうだよ」

元はギアス嚮団の先代嚮主だったというC・C、嚮団員だったロロならば外部の者が知らない通路を知っているだろうから期待していたのだが結果は芳しくない。

「生体反応が多すぎる。これでは絞り込めない」

この嚮団に攻撃を仕掛けたのは、大枠としてはV・Vを捕縛する為と言ってもいい。

V・VはC・Cと同じ不老不死の存在。コードやギアスのことを言えない以上、見た目的には年少の少年でしかないV・Vを捕まえるにはこの四人で探すしかないのだが人手が足りなすぎる。

殲滅作戦を取っていれば、絶対に死なないV・Vを搜索するのはもう少し容易かっただろうが今更後悔しても遅い。

（一度全員を外に出して改めて探すか？ いや、それに乗じて逃げられたら意味がない）

広大な嚮団内部には隠れる場所が山ほどある。

搜索の為の色々な方法を頭の中で検討しては却下していく。最優先は身柄の確保であり、逃亡される危険性がある方法を取るわけにはいかない。

「ゼロ様」

ルルーシユがああでもないこうでもないと考えながら、よりよい選別方法を模索しているとジェレミアから通信が入った。

「V・V・を発見しました」

「そうか！ よくやった！ 場所は」

「黄昏の間と呼ばれる、V・V・が良かった場所です。ですが……」

「元の場所に戻っていたのか。直ぐに向かう！」

ジェレミアが言葉を濁した理由に気が逸っていたルルーシユは気付くこともなく、通信先から場所を特定して蜃気楼を動かしていた。

蜃気楼がV・V・がいると思われるポイントに到着するとジークフリートとの戦闘での流れ弾が当たったのか、都合良く機体ごと中に入れそうな大きな穴が壁に開いているのを見つけた。

穴を通って建物の中に機体ごと入り、着地した蜃気楼から下りるとジェレミアが駆け寄って来る。

「良くやったジェレミア。それで、V・V・は？」

「あちらに」

ジェレミアが指差した先にV・V・だったものはいた。

広大な空間の奥、見様によっては玉座や祭壇にも似た作りの廊下に仰向けで寝かされている。顔面には銃創と思われる多数の傷跡があり、再生する様子もない。

「死んで、いるのか……？」

ピクリとも動かないV・V・に歩み寄ったルルーシユは訝し気に胸の上で指が組まれた物言わぬ遺体を見下ろす。

「私がここに来た時には既に息はありませんでした」

ルルーシユの斜め後ろに控えながらジェレミアが発見時の状況を説明する。

(V・V・はC・C・と同じ不老不死のはずだ。死ぬはずがない)

しかし、現実として息をしていないのは事実で、何らかの策や罠の類でないことは明らか。

不老不死の人物が死ぬという事実を前にしてルルーシユは仮面を被ったまま首を振って現実を受け入れようとして、視界の端に過った

人影に意識が向いた。

「あれは？」

V・V・ から少し離れた場所に、まるで何かから逃げようとして背中から撃たれたように地に伏している数人の男達がいた。

「バトラー・アスプリウス………元はクロヴィス殿下の側近で、周りの者達はその部下です」

そう言ってルルーシュから離れたジェレミアはうつ伏せのバトラーを仰向けにして、胸に上で指を組ませる。

「バトラー、私をこのような体に改造した憎むべき男。だが」

取り出したハンカチでバトラーの口から流れている血を拭き取る。

「皇族に対する忠義は本物だった。ならばこそ 私は決意しよう。バトラー、君を尊敬すると！」

憎むべき敵であろうと尊敬に値する点があるならば認め、その最期を穢してはならないと背中まで語っているジェレミアに、そういう考えもあるのかとルルーシュは感心していた。

ルルーシュにとつて敵はどこまで行っても敵であり、味方ですら全幅の信頼を置ける存在はかなり少ない。優秀過ぎるからこそ下手な人間には尊敬の念を抱くことが出来ないルルーシュにとつて憎むべき敵を尊敬できるジェレミアの思考経路は理解し難いものがある。

（俺には出来ないな）

ただ、そういう考えもあるのだとルルーシュは自分には出来ないと思いつつも否定はしなかった。

「ゼロ様」

ルルーシュが物思いに耽っている間にバトラーから離れたジェレミアが戻って来ていた。

「状況的にバトラーは何かから逃げようとして撃たれた様子で、体温からして死後殆ど経過していません。V・V・ を殺したのがバトラー達なのかは分かりませんが、銃が無い状況からして第三者が先程までここにいた可能性が高いと思われます」

「しかし、この近辺には俺達の他に生体反応はなかったぞ」

「ええ、私が来た時には既に人の気配はありませんでした。他の通路



は瓦礫で塞がっていたので行き違いになるはずはないのですが……」  
消えた犯人なんてミステリーが現実起こった場合、都合良く探偵は現れてくれない。探偵役を出来る頭脳を持つルルーシュだが今は他に考えることが多い。

「ジェレミアが知らない通路があるのかもしれない。そうなると嚮団幹部の線が濃くなるが」

「V. V. が死んでいる理由が分かりませんね」

「C. C. と同じなら、この程度の傷で死ぬはずはないんだが」

今まで散々致命傷を受けて来たC. C. が生きているのを良く知っているので、顔面に複数の穴が開いた程度で死ぬとはルルーシュにはとても思えない。

「C. C. の見解を聞きたい。ジェレミア、C. C. をここに呼んでくれ」

手元に通信機が無かったルルーシュはもう一人の不老不死者であるC. C. を呼ぶようにジェレミアに命令して蜃気楼に向かって歩き出す。

「私はもう一度、周囲の生体反応を調べ——」

直ぐ近くにあった蜃気楼に下に辿り着き、コックピットに上がる為に必要なタラップを手を持った瞬間、部屋の奥のギアスの紋様が刻印された壁から光の筋がルルーシュに伸びる。

「ルルーシュ様!？」

ジェレミアの叫びにルルーシュが振り返るも光の筋は既に両足に絡み付いていた。

(これは神根島の!?)

一年前、神根島の遺跡で同じような光に包まれた時と同じ何かに引き込まれる異様な感覚。

ルルーシュの目が視界に眩んだ直後、元に戻った視界は先程とは激変していた。

「な、なんだここは?」

先程までいたのは地下にある遺跡を利用した建物の中である。断じて雲の上に浮かぶ空中神殿のような場所ではない。

「ホログラムや幻影ではない……」

ではギアスかと言われれば疑問が残る。

直ぐ傍には蜃気楼があり、タラップを持つ感触は現実そのものである。

「その通り！」

未だ変化を受け止めきれていないルルーシユの瘦身を揺るがすような大喝が空間全体に轟いた。

ルルーシユの知らぬ声ではない。寧ろ魂にまで刻み込まれている類いの声に、ルルーシユは声が聞こえた階段の向こうに目をやる。

「このシステムこそ、アーカーシヤの剣。ナイトメアなど無粋なものよ」

「き、貴様は……!?!」

ブリタニア第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアはルルーシユが幾度も脳裏に思い描いた傲岸不遜そのままの目で見下ろす。

「久しいな、我が息子よ」

言葉には息子に向けるような親愛の情はなく、ただただ絶対者としての威厳をその身に纏っていた。

「時は来た、贖いの時が」

意味の分からないことをほざくシャルルから視線を逸らさないまま思考を加速させる。

ルルーシユがゼロの仮面を被っている以上、互いにギアスはかけられない。

(奴が何故ここにいる?)

ルルーシユは動かなかった。動けなかつたのではない。

動揺はあった。だが、第三者の存在がいることを事前に推測していただけに、シャルルの登場は寧ろ点と点を繋ぐ線となり、ルルーシユに思考を生む切っ掛けを与えて冷静さを取り戻させた。

(この空間にいれば生体反応を感知できないのだろう。奴がV・Vを殺したのは間違いはない。だが、今になって何故V・Vを殺した?)

いや、待て。不老不死を殺せるのか?)

思考がどこまでも連続していくが答えは出ない。

答えの出ない迷路を彷徨ったルルーシュは目前の脅威を排除すべく、銃を取り出して銃口をシャルルに向ける。

「答える！ 母さんを」

どうして守らなかった、という問いは冷静になった頭が思考から排除し、未だV・V・Vのことを追い出せない中で両方を結び付けた。

「母さんを殺したのはV・V・Vか！」

放った問いはルルーシュの思考外にあるものだったが、先の戦闘でV・V・Vと交わした会話から意外に的外れではないのではないかと自分で納得する。

「……………何故、そう思う？」

「V・V・Vは明らかに母さんを嫌っていた。憎んでいた節すらある」

V・V・Vはルルーシュのことを常に『マリアンヌの子』と言っていた。ジェレミアがその名を口にしたことに激昂していた姿には一方ならぬ憎悪を感じた。

「ブリタニアにおいて絶対的な権力者である皇帝の妃を殺されたのならば徹底的に捜査されて然るべきだ。幼い俺は母さんを疎んでいた他の皇族や貴族によるものと思っていたが、V・V・Vなら碌な捜査が行われなかったことにも全て説明がつく」

シャルルにギアスを与えたというV・V・Vは、クロヴィスや皇族の中でも高い地位にいるはずのコーネリアですらも知らなかったギアス嚮団という表に出ない組織のトップに収まる謎の人物。

ギアスの力を考えれば、庶民出のマリアンヌを殺したからといって捕まえるには惜しいとでも思ったのだろうとルルーシュは推測した。

「どうなんだ、シャルル・ジ・ブリタニア！」

銃を構えて胸元を狙いつつ、棒立ち状態のシャルルに答えを求めらる。

「お前は他の者にはない力、ギアスを持っている。その力で聞き出せば良からう」

銃口が微かに揺れる。

（どうする……………奴の言う通りにギアスを使うか？ だが、畏の可能性もある）

ゼロの仮面の左目部分を開け、ギアスを使おうとすればどうしてもシャルルと目を合わせる必要がある。

シャルルのギアスは記憶を改竄するタイプで、発動条件はルルーシュと同じく相手の目を見てかける。もしも、少しでもギアスの発動が遅ればルルーシュの記憶が改竄される。そのリスクを負ってでもギアスを使う価値が9年前の真実にあるのか。

「どうした。それでも儂の子、ブリタニアの皇子か?」

明らかにシャルルはギアスを使わせようと誘っている。

「そんな見え見えの誘いになど乗るものか!」

引き金を引いた。銃はその機構に従って銃弾を吐き出し、無防備に立つシャルルの胸に狙い通りに突き刺さった。

衝撃と痛みは確実にシャルルのギアスの発動を遅らせるはず。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命ずる!」

背中から倒れていくシャルルを追うように、階段を駆け上がるルルーシュは仮面の左部分を開けて特殊なコンタクトを外してギアスを発動させる。

視線を合わせたのは一瞬。だが、その一瞬があれば十分。

「俺の命令に答えろ!」

背中から倒れこんだシャルルの下に辿り着き、絶対遵守の命令を放つ。

ルルーシュの銃の腕は決して良くは無いので、撃たれてもシャルルは即死していなかった。

「あのテロ事件の首謀者は誰だ?」

頭に銃口を向けながら問いを放つ。

「に、兄さんだ……」

「兄さん、だと? 名前は?」

ルルーシュの知る限りではシャルルに同腹の兄弟はいない。

嘗てはいたかもしれないが、シャルルが皇帝になるまで皇族間で血で争う時代の中で失われている。何故なら親・兄弟・親戚に至るまで殺し尽くしてシャルルは皇帝になったのだから。

「……今は、V. V. と……名乗っている……」

即死はしなかったが胸に銃弾を受けたので流石に息が荒い。痛みは相当の物のはずで、治療を受けなければ早々に死ぬだろう。

「C・C・と同じく本名ではないと思っていたが」

まさかV・V・が伯父であるとは思いつかなかったが、少年期に不老不死になったのなら現在のシャルルとの見た目の差異は当てにはならない。

「だが、何故だ。何故、V・V・は母さんを殺した？ 一体、何の理由があつてテロなんてものを起こした？」

「……………マリ、アンヌ……………は……………兄、さん……………は……………」

矢継ぎ早の問いにシャルルはゴボリと口から血を溢れさせて、肝心のV・V・の目的を話すことなくガクリと力尽きた。

「おい」

呼びかけてもシャルルは動かない。

「おいー」

拳銃を落として肩をどれだけ揺さぶつても、事切れたシャルルが動くはずがない。

「……………殺してしまった。こんなにもあつさり」と

V・V・も死んだ。シャルルも死んだ。これではV・V・がどうしてマリアンヌを殺すほどに憎んでいたのかを知ることが出来ないだろう。

「ナナリー、母さん……………」

仮面を外したルルーシュは長年の悲願を成し遂げたというのに、胸に湧き上がったのは喜びでもなければ爽快感でもない。

「俺は、俺は……………うおおおおお——つつつつ!!」

胸に湧き出る異様な不快感にルルーシュは叫んだ、落とした仮面が響かせた音よりも大きく叫ばずにはいられなかった。

「——親の安眠を妨げるとは悪い子だ」

喉も裂けよとばかりに叫んでいたルルーシュの耳に決してありえははいけない声が届いた。

「なっ!!」

「躩けてやらんといかん、ルルーシュ！」

死んでいたはずのシャルルがガバツと起き上がる。

「生きている?! そんな! 確かに死んでいたはず」

驚きから数歩後退ったルルーシュは知っていた、こうやって死んだはずの人間が蘇る前例を。

逆に蘇るはずの者が死んでいたのを見ていたからこそ、答えに辿り着いたことで我を忘れるほどには動揺しなかった。

「そうか! 貴様はV・Vのコードを」

「儂はギアスの代わりに新たな力を手に入れた」

どうやったかは分からないがコードとは移せるもの、不老不死とは継ぐことが出来るのだと容易に検討がついたルルーシュは『死ね』とかけようとしていたギアスを使うのを止めた。

落としていた拳銃を拾って大きく距離を取り、無駄だと知りながら銃口をシャルルに向ける。

「真っ向から向かって来たその意気や良し。剣でも銃でも何を以ってしても無駄と分かっているのならば、王道で来るがいい。王の力を継ぎたいのであれば!」

世界に覇を唱えんとしている皇帝の覇気に吞まれながらも、不老不死のコードは引き継ぐことが可能であると認識したルルーシュは如何にして蜃気楼の下へ辿り着くかを考えていた。

(不老不死であろうと、それ以外は大して人間と変わらない。蜃気楼で掴んでしまえば)

人間にとってみれば万力の如き力のナイトメアフレームの拘束からは抜け出せない。元よりV・Vは捕まえて高圧力ケースに封印する予定だったのだから、対象がシャルルに代わっても何の問題もない。

「尚も策を弄そうとするか。その策を根底から覆してやろう」

父親としての直感からか、ルルーシュの次の行動を読んだシャルルが動く。

足下から伸びて来た装置にシャルルが手袋を外した右手を翳した直後、ルルーシュの視界の中の景色が激変する。

「な、なんだこれは!」

空中神殿とはまた別の世界にルルーシュはいた。

幾何学模様が浮かぶ仮面と回る多数の歯車に覆い隠された異様な世界に、ルルーシュはもう一度幻影を疑った。

(違う。持っている銃の感触は決して幻なんかではない)

足場は無いのにルルーシュはしっかりと立てている。思考は鮮明で、意識はしっかりとしていた。肉体の感覚もある。

先程までいた場所と同じ。見える世界が変わっただけだがルルーシュの動揺は大きくなっていく。

「人は真実を望みながら、他者には己を偽る仮面を被った姿を見せる」  
周りを見渡していたルルーシュの視界の中に忽然とシャルルが出現する。

意味は無いと知りながらも銃口を向けるルルーシュを傲然と見下ろすシャルル。

「ルルーシュよ、お前はそのゼロの仮面を被って何を得た？」

「手に入れた！　ただの学生では到底手に入れない軍隊を！部下を！領土を!!」

「代わりに多くの物を失った。平穏な日常を、この父を同じくするクロヴィスを、そしてユーフェミアを」

得た物に対して失った物は帳尻が合うのかと、父親が子に向けるにはあまりにも冷ややかな眼差しにルルーシュの肩がビクリと震えた。

「ナナリーも何時失うか分からない状況を作り出して、これがお前の本当にしたかったことか？」

「そうさせた貴様が何を言う！」

グリップが軋む音が鳴り、銃を持つルルーシュの手に力が籠められる。

「行動には必ず責任が伴う。責任転嫁は見苦しいぞ」

ゼロの仮面を被り為した結果と被害は、たとえそうさせたのがシャルルだとしても罪はルルーシュにある。

「マリアンヌの死の真相を知りたいと言ったな。仮面を被って嘘を吐き続けながら人には真実を望む。これを滑稽と言わずなんとする！」  
喝破にルルーシュは何も言い返せない。たとえ何を言ったとて、そ

れこそ言い訳にしかならないと分かっているから。

「人は誰でも嘘を吐いて生きている。俺もそうしただけだ!」

「無駄に知恵をつけただけの愚か者め。周りがしているから自分もするなど幼稚な子供の論理に過ぎん」

ルルーシユが纏っていた仮面という名の虚飾が剥がされる。

「嘘など吐く必要はない。何故ならお前が儂で、儂がお前なのだ。そう、人はこの世界に一人しかいない。過去も未来も人類の歴史上、たった一人……」

「二人? 何を言ってる——」

ここに来て突然、論調を変えたシャルルの変化に対応できないルルーシユを置いて事態が変遷する。

「シャルル」

異様な空間内にはルルーシユとシャルルしかいなかった。そこへシャルルを諫めるかのように名を呼ぶ涼やかな声にルルーシユは覚えがあった。

歯車が動いて空いた隙間から黒の騎士団の制服を纏っているC・

C・が対峙している二人の対角線上に歩み寄る。

「C・C・!」

現れたC・C・の名を呼びながらも、ルルーシユは彼女がこちらの呼びかけに一度視線を向けただけでシャルルに顔を向けたことに眉を顰めた。

「遊びの時間は終わりだ。私にとってそれにもう価値はなくなった」

それ、がルルーシユを指すことは一目瞭然だった。

理解できない事象と現象に振り回され、冷静さも知性も働かなくなっていく。

「それを籠絡して私を呼ぶ必要もない。私は既に此処にいる」

ゼロの仮面を被ってからC・C・だけは常にルルーシユの傍にいた。誰が裏切ろうが、誰を裏切ろうが、彼女だけはルルーシユの味方だった。

「そうだな、C・C・。お前の願いは儂が叶えてやる」

「C・C・の願いを知っているのか?」



契約時、C・C・は代価として自身の願いを叶えろと言い、ルルーシユはその取り引きを呑んで王の力を得た。しかし、幾度C・C・に願いを問い質してもはぐらされて来た。

推測は出来る。予想はしていた。だけど、彼女の口から願いの内容を告げられたことはなく、答え合わせの出来ない推測や予測に意味はない。

シャルルは知っていて、ルルーシユはC・C・の願いを知らない。この現実だけが今ここにある。

「ルルーシユ。今こそ契約条件を、我が願いを明かそう」

こんな時に、こんな時だからこそC・C・は己が願いを口にする。

「我が願いは死ぬこと。私の存在が永遠に終わることだ……………驚かないのだな」

「予想はしていた。不老不死の存在が望むことなど、死者との再会や永遠を終わらせることが物語の定番だとシャーリーが言っていたからな」

陳腐というには当の本人は切実な願いなのだろう。

ルルーシユは『死』を予想していながらも、どうやっても死なないというC・C・の不死性に選択肢から外していた。しかし、C・C・が不老不死と聞いたシャーリーが言ったことと、同じはずのV・V・の死を目の当たりにしたことの合致が答えを導き出してしまい、ルルーシユから驚きを奪っていた。

「只の小娘に見抜かれていたとは…………」

どこにでもいる極々普通の女子高生に悠久の時を生きる魔女の願いを看破されていたことにC・C・は夢げに笑む。

「分かっているのならば話は早い。簡潔に説明しよう。ギアスの果てに、能力者は力を授けた者の地位を継ぐ。つまり、私を殺せる力を得る」

その笑みの意味を理解する間もなく、C・C・は表情を切り捨ててルルーシユを見据える。

「V・V・を殺した皇帝のようにか？」

「シャルルのように強靱な精神力で増大するギアスの力を押さえ込

み、あくまで自身の意思で制御する術を勝ち取った者を達成人と呼ぶ。達成人は逆にコードユーザーからコードを強奪することが可能となる。V・Vや、そして私からも。数多の契約者は誰一人として、ここまで辿り着けなかった」

C・Cの目も表情も、ルルーシュから見ても極寒の氷の如き固さを以って揺らがない。

「私が死ぬ為にはコードを受け継げる器、達成人を作り上げる必要があった。その為にルルーシュ、お前と契約して今までギアスを使わせ続けてきたが、もうその手間を踏む必要は無くなった。ここに達成人のシャルルがいるのだから」

「馬鹿な！ お前は死ぬ為に俺と契約し、今まで傍にいたと言うのか？」

「そうだ」

ルルーシュの脳裏にギアスを得てから今に至るまでのC・Cと過ごした日々が過る。

多くの物を得て、それ以上に多くの物を失ったルルーシュに寄り添ってくれたC・Cの温もりの全てが偽物だったとは思えないし、思いたくない。

「俺を利用して、死ぬために生きてきたと？」

「この世の節理は、そこにある。限りあるもの、それを命と呼ぶ」

「違う！ 生きているから命のはず！」

「同じことだ。死があるから、人は生を自覚できる」

「言葉遊びだろう、そんなものは！」

「しかし、人は死ぬ。どれだけ辛くとも何時かは必ず死という終わりがあるから生きていられる。終わらない生は、この世の全てを地獄に変える」

永遠に生きるとは、永遠に狂い続けることと同義である。怒り、哀しき、後悔、絶望、人を壊してしまうものなんて幾らでもあるのに、永遠の寿命を持ったら、ずっと正気でいられる可能性はゼロである。

おかしくなる機会は幾らでもあるから、一度狂えば命ある限り狂いつぱなし。これが永遠という名の呪い。

如何なる非業の死、如何なる不慮の最期、如何なる無念の末路を迎えようとも永遠の生を宿命付けられるよりも幸いである。永遠という言葉の意味をよくよく考えてみるといい。永遠という言葉の重みを、よくよく知るといい。

死もまた一つの救いの形であると永遠の命を背負わせてから初めて気づく。

「だとしても、この世に生まれた理由が、意味があるはずだ！」

聡明なルルーシユは安易な感情論を廃して理性的に思考した場合、C・C・の言うことが至極真つ当だと理解してしまう。しかし、人は機械のように割り切れる物ではないから感情で物を言ってしまう。

「そんなものは、後付けの思い込みに過ぎないと他の誰よりも分かっているだろうに」

「死ぬだけの人生なんて哀しすぎる！」

「死なない積み重ねを人生とは言わない。それはただの経験だ」

ブリタニア皇族として生まれ、棄てられ、生まれた国に反逆をしているルルーシユだからこそ反論の余地を見つけられなかった。

「お前に生きる理由があるのなら私を殺せ。そうすればシャルルと同等の戦う力を得る」

一日前には冗談を言い合い、小さな口喧嘩をしたことが幻想であったかのように冷たい声でルルーシユに選択を迫るC・C・。

ルルーシユには身内と言っていい仲だったC・C・を自身の欲望の為だけに切り捨てることは出来ない。

「さようなら、ルルーシユ。お前は優しすぎる」

最後の選択を迫ったC・C・は動こうとしないルルーシユに失望したように肩を落とした。

見限られた、諦められたと言葉と態度が物語る中でルルーシユは言わずにはいられないことがあった。

「待て、C・C・！ 何故俺と代替わりして死のうとしなかった？！

俺に永遠の命という地獄を押し付けることだって出来たはずだ！

俺を憐れんだのか?! C・C・！」

シャルルがこの仮面と歯車に覆われた異様な空間を作り出した時

と同じ装置が足下から伸びて来て、C・C・C・がそれに手を伸ばすのを見たルルーシユが叫ぶ。

一瞬、ビクリと身を震わせたC・C・C・が何を思ったかはルルーシユには分からない。何故ならば確かにあった足場が突如として消失して為す術もなく落ちていく。

「うわああああああああああ——つつつつ!!!」

原初の恐怖に突き動かされた叫びを上げたルルーシユの!視界からあつという間にC・C・C・とシャルルの姿が消える。

落ちていゝるのならば何時かは地面へと辿り着くはず。

「えっ?」

意識が途切れたのか、浮遊感唐突に消え失せてルルーシユは何事もなかったようにその場に立っていた。

「(っ)は……」

夢か幻を見ているような気分で辺りを見渡すと、どこかの都会から遠く離れた田舎といった風情の村や町の通路にいるのが分かった。

ふと、前を見ると通路の向こうからボロボロの服を纏った少女がフラフラと今にも倒れそうな様子で歩いて来る。

「お、おいー!」

そして遂には倒れていく少女を咄嗟の反応で駆け寄って受け止めようとしたが、抱こうとした手は少女の体をすり抜けてしまった。

「無駄よ。これは私の記憶、干渉はできない」

背後からの聞き覚えのある声に振り向くと、色づく世界の中でルルーシユと同じく色の無いC・C・C・に良く似た誰かがそこに立っていた。

「C・C・C・……いや、違う?」

姿形、声もC・C・C・そのものであったが皮を被った別人だという認識がルルーシユの認識を支配する。

「あなたは 誰?」

「ルルーシユだ。お前の……」

問いにルルーシユは直ぐに答えられなかった。

友達、仲間、恋人………どんな言葉であろうとも自分とC・C・C・

の関係とは遠く離れた領域にあるように思えたからだ。

『あなたに生きるための意味はあるの?』

どこかの教会でC・C・の運命が捻じ曲がる。その光景をルルーシユは見る。

『わかりません。でも、死にたくないんです!』

『では、契約をしましょう。生き延びる力をあなたに授けましょう。その代わり、何時の日か私の願いを一つだけ叶えて頂けますか』

そしてルルーシユはC・C・の過去を、始まりの始まりを知ること  
で今まで曖昧にしてきた関係に名前をつけることを迫られる。

## STAGE 7 共犯者

ルルーシユはC・C・の始まりを見る。

ギアスを与えられ、己の思うがままに扱う様は嘗ての自分を見てい  
るようですらあった。違いがあるとすれば、C・C・のギアスは愛さ  
れるだけでルルーシユの絶対遵守のように直接的に傷つく者がいな  
いということだろう。そして大きな挫折を最後の時まで一度も味  
合わなかったこと。

「私の存在は彼女にとって自分自身のピリオドを打つための道具。た  
だ それだけだった」

愛されるギアスの所為で本当の愛が分からなくなった少女が信じ  
たのはギアスのかからないシスターだけ。

但しそれにも理由があった。

コードユーザーが己の永遠を終わらせえる為には一定以上のギア  
スを持つ誰かを犠牲にしなければならない。シスターは少女のこ  
とを利用し、自らの目的を達成した。そして生まれたのは裏切られた少  
女——不老不死の魔女となったC・C・だった。

「道具だとしてもあそこまで何度も刺す必要はない。地獄を終わらせ  
るにしてもやり過ぎだ」

シスターは少女にコードを押し付け、取り出したナイフで何度も滅  
多刺しにした。少女の悲鳴が今も耳に木霊している。

「痛みは我慢出来るようになっても慣れることはない。だからこそ、  
シスターは試した。本当に彼女がコードを受け継いでいるかを」

「死んで蘇らなければコードの継承を確認することが出来ないのか  
？」

狂ったように笑いながら何度も少女を刺す光景は傍目に見ても心  
地良い物ではない。眉間に皺を寄せているルルーシユは聞かずに  
いられなかった。

「コードを渡した者には実感はある。しかし、万が一でもコードが引

き継げておらず、自殺をして死ぬなければその間に逃げられてしまう。もう一度、器を探して育て上げるのはこれ以上ない苦痛でしかない。シスターは最も簡単に安全に確認する方法を選択した」

「殺しても死なないかどうか、か」

死に至る損傷を負えば、生きとし生ける者は必ず死ぬ。

確かにこれ以上は無理簡単な方法ではあるが、相手を刺し殺すなど普通の人間ならば躊躇うし、実行に移そうとは思わない。

「まともな方法じゃない。もっと穏当な方法もあったはずだ」

とルルーシュは言いつつ、それだけシスターの精神状態が普通ではなかったのだと理解していたから言葉が虚しく響いていく。

「結果が全て。過程に拘ったところで意味はない」

「耳に痛いな……」

今までのブリタニアとの戦いで結果を重視して過程をないがしろにしてきただけにルルーシュは身につまされる思いである。

「これでコードの継承は成された。永遠は私に引き継がされ、彼女はここにいる。でも、あなたはまだここにいない」

我が身を振り返っていたルルーシュは意味が理解できず首を捻る。

「逆ではないのか？ 俺はここにいるぞ」

「間違っていない。彼女は過去となり、あなたはそうではない。私にとつてあなたは過去ではなく現実の人なのよ」

ルルーシュはここにいて、シスターは遥か過去に死んでいる。しかし、C・C・に似た者が言っているのは死んで過去となればここにいて、現実を生きているルルーシュはまだいないということなのだろう。

言い方が紛らわしいと思ったことは口にしないことにした。

「さあ、どうなんだろうな。俺はアイツに見切られた。何を思っただんな所に送り込んだのかは分からんが」

途中経過がどうであれ、C・C・はルルーシュを選ばずシャルルを選んだ。結果として良く分からない空間からもっと良く分からない空間に落とされ、何故かC・C・の過去を見させられている。

状況に流されるしかないルルーシュは諦観と共に、壁にかけられて

いる過去を切り取った絵を見上げる。

「ここに送って来たということは一時でも何かからあなたを守ろうとしたんだと思う。私にとって、あなたはよっぽど大事な人なのかしら？」

「ありえないよ。ありえるはずが、ない」

「もしも、あの場所でC・C. がいないままシャルルと対峙していたらどうなっていたかを考える。」

シャルルはV・V. のコードを継承して不老不死になっているので剣も銃も効かない。ルルーシュは蜃気楼で拘束をすることを考えていたが変な空間に移された所為で叶わなかった。舌戦でも圧倒劣勢に立たされた中でC・C. は現れ、ここに送られて彼女の過去を見させられている。

「俺は守られたのか？」

「類推はすれども私には私が何を考えているのかは分からない」  
「頼りにならないな」

何故、今になってC・C. が急にルルーシュを見切ったのか、少し考えれば馬鹿でも分かる。

「……………」つだけ聞きたい」

そしてC・C. の過去を、ギアスに溺れて末のコードの継承の瞬間を見させられたのもまた意味がある。

「C・C. はギアスの果てに契約した相手の不死を受け継いだ。だが、今のC・C. はギアス能力を持っていない。コードを受け継いだ時、ギアス能力者はその力を失うのか？」

「ええ」

「やはり、そうなのか」

ゼロの仮面を取った後でもシャルルはルルーシュに記憶改竄のギアスを使わなかった。C・C. の記憶でも彼女が以前はギアスユーザーであったことから、コードを受け継ぐとその能力を失うことは想定範囲内であったから驚きはない。

「馬鹿な女だ」

ここに送られたのはシャルルの手からルルーシュを守る為。ル



ルーシユを見切っていたというならもつと前にシャルルの下へ行くことは出来たはずなのに、それをしなかったのは何故か。

ルーシユではシャルルに負けると考え、こんな所に送って過去を見せたのは自分を嫌ってほしかったからだ。

コードを受け継ぐあの凄惨な光景は契約者の末路でもある。他人事ではなく、全く同じ未来が待っているのだと思えば良い想いなど抱けるはずがない。

「俺を憐れんだつもりか。舐めるなよ」

わざわざ自分の記憶を見せる必要なんてない。あのシスターのよう  
に決定的な瞬間まで隠し続けていれば良かったのだ。今更、利用さ  
れた程度で不貞腐れるほどルーシユは真つ当な性根をしていない。

「俺を元の場所へ戻してくれ。C.C.に言っ  
てやらなければならぬ  
いことがある」

「戻ろうと思えば戻れる」

あつさりと言われてルーシユは面を食らった。

「ここは思考によつて事象を動かす世界。強く願えば元の場所に戻る  
ことが出来る」

「思考に干渉しているというのか？ また非科学的な」

それを言ったらギアスもコードも十分に非科学的であったので今  
更かと考えることを止め、大きな歯車と仮面の世界ではなく最初の空  
中神殿を脳裏に強く思い描く。

「戻る前に聞かせてほしい。あなたは、私の何？」

空中神殿から歯車と仮面の世界に移行する時と同じように足下に  
光が生まれて視界が眩む中で問いが発せられた。

「あいつは俺の――」

もう答えは出ている。C.C.に似た誰かに関係の名をルーシユは自信を持って告げる。

巨大な歯車と幾何学模様が浮かぶ仮面が混在する異様な空間を作り出したのはルルーシュを委縮させる為である。当の本人がC・C・に別の空間に送られたので元の空中神殿へと二人は帰還した。

「シャルル、何故今になってV・V・のコードを奪った？」

雲があるのに微動だにしない変化のない世界で唐突にC・C・が訊ねた。

前を向きながら隣に立つC・C・の方へと視線を落としたシャルルは僅かに目を細めた。

「質問に意味があるのか？　これから死に行くというのに」

「そう、だったな……」

望んでいたことのはずなのに言葉が詰まったC・C・は自分のことなのに戸惑った。

「喜んでいようには見えんな。望んでいたのだろう、永遠の生の終わりを」

シャルルの言うとおりでであると自問しても、心に突き刺さった棘は消えてなくなつてはくれない。

「最後だからこそ思うところが多ただけだ。マリツジブルーみたいなやつだ」

「結婚したことがない奴が何を言うか」

「……………プロポーズされたことは何度もある」

「昔はモテたはみつともないぞ」

例えが悪かった。自分で墓穴を掘ってしまったC・C・はシャルルから向けられる冷たい視線に顔を逸らす。

「女には秘密が多いものだ」

「そうか」

妻が108人もいるシャルルは言葉少な気な答え、それ以上の追及をしてこなかったので寧ろC・C・は何か負けたような気がして惨めな思いを抱いた。

「私を憎む人も、優しくしてくれた人も、全て時の流れの中に消えていった。果てることのない時の流れの中で……」

こんなつまらない話をすることも終わるのだ。C・C・はやつと待ち望んだ時が来たはずなのに、ちつとも晴れやかな気分になれない自分に驚く。

思い出すのは生きていることが辛い日々ではなく、どうしてカルルーシユと二人で話した口喧嘩にも似た内容ばかり。

「だがその苦しみの日々も、長い旅は今日ここで終わるのだ」

シャルルから終わりを宣言されて引き寄せられたC・C・は胸に走る痛みを瞼を伏せた。

死に至る痛みなど何度も経験しているから臆しは無い。ただ、目を瞑ってその時を待っていれば直ぐに終わる。なのに、目尻に浮かぶ雫が指し示す物は迷いか、後悔か、その名をC・C・は知らない。知ろうとしない。

「C・C・!!」

今となつては誰よりも耳に馴染んでしまったその声にC・C・は咄嗟にシャルルを突き離そうとしていた。

彼我の体重差からC・C・の方が動いてしまったが、その場に残ったシャルルの上空に思考エレベーターに干渉して帰還したルルーシユが拳を固めながら落ちて来る。

「歯を食い縛れっ!」

シャルルが頭上を振り仰いだ時には既にルルーシユの拳が間近に迫っており、避ける暇もない。

「ぐあっ!?!」

咄嗟のことであつたから碌な反応も出来ず、幾ら不死身であっても痛みも衝撃も消えない。殴り合いに慣れていないルルーシユでも全体重をかければ、武断で鳴らしたシャルルであっても殴り飛ばすことは難しくない。

シャルルを殴り飛ばしたルルーシユは不格好に着地しながらも鼻を鳴らす。

「ふん、少しスッキリしたぞ」

「くっ……ルルーシユ——ッ!」

見下ろしていた者に見下ろされるほど屈辱的なことはない。特に

普段は誰からも傳かれる皇帝であるシャルルにとっては一入であるう。

口の端から流れる血はコードの作用で直ぐに止まったが、殴られた衝撃で脳が揺れているのか目の焦点が揺れていて直ぐには動けない。

「やはり、この空間そのものが思考に干渉するシステムか」

この空間神殿はイメージしても具体的にどこに現れるかまでは考えていなかったルルーシュが現れたのは、二人がいる場所の近くだった所為で微妙にズレてしまったが結果オーライである。

空間移動よりも、より正確にイメージすれば歯車の空間で落としたはずの銃が手の中に出現する。

ルルーシュは思考エレベーターの仕組みを掌握しつつあった。

「ルルーシュ、何故……」

思考エレベーターの理解を深めつつあるルルーシュの背中を見ながらC・C.には理解できなかった。

何故ならば見たはずだからだ、C・C.がコードを継承した場面を。それが何を意味するかを分からないほど愚かでもない無いはずだからこそ、この場でまるでC・C.を守るかのようにシャルルの前に立つ姿が信じられなかった。

「お前と契約し、俺は王の力を得た。その代価であるC・C.の願いを叶えていない。勝手に契約を反故にするのは感心しないな」

「馬鹿を言うな。私の願いはシャルルが叶えてくれる。お前が再び出て来るなど」

騙し、利用する為に契約したことを憎んでいるはずだとC・C.は疑いもしない。

「これから望んで死にたいという割には冴えない顔をしている」

だからこそ、徐々に回復しているシャルルを警戒しながら背後に庇っている形のルルーシュは横目でC・C.を見て言った。

「本当に死にたいなら、最後まで笑い笑って死ね。自分で笑えないなら俺が笑わせてやる。俺は知っているぞ、お前のギアスを、本当の願いを」

「なんだその理屈は、私の願いは死ぬことだと」

「黙れ、魔女。言い訳は効かん」

C・Cの過去を知った上で、騙して永遠の地獄を押し付けようとしていたことを全て理解しながらルルーシュは言い切る。

「お前は一人じゃない。俺達は共犯者、お前が魔女なら俺は魔王となるだけ。永遠の地獄程度に屈するなら最初から修羅と分かっていた道を選んだりはしない」

友達、仲間、恋人………どんな名前を付けようともしつくりと来なかった。

最初から言っていたではないか、共犯者と。何時かは変わるかもしれないけれど、今はそれでいいとルルーシュは思った。

「ルルーシュウウウウウウウウウウウウウウウウウー！」

遂にシャルルが起き上がり、修羅にも似た形相でルルーシュを睨み付けて来る。

「これ以上、お前に何も奪わせるものか！」

この世界にはシャルルの方が深く関わっている。ルルーシュも理解を深めてはいるが過信はしない。

「蜃気楼！」

突如として視界外現れた巨大な四角のブロックがルルーシュを押し潰さんと迫るが、離れた場所に屹立していた蜃気楼がパイロットも乗っていないのに両手を上げて内蔵されているハドロン砲を放つ。

「何たる愚かしき!! ルルーシュ!!」

思考エレベーターを完全に制御しているシャルルと違ってルルーシュはまだ不完全。敢えて蜃気楼の制御を手放し、ハドロンショットを乱射して空中神殿を破壊させる。

「手を離すなよ、C・C・！ 飛ぶぞ!!」

未だ戸惑っているC・Cの手を掴み、その身体を抱きしめて空中神殿から飛び降りた。

「何を……!?!」

「元の空間に、ギアス嚮団に戻る！ 俺から離れるな！」

C・Cとシャルルが空間移動の際に使用した制御盤がハドロンショットで消滅した直後、響き渡る空間の破裂音の中で落下時特有の

血も凍る感覚が身を包み込む。

C・Cはルルーシユの腕の中で肩越しに見える壊れていく世界を見た。全ては幻想であるから存在しない星は見えない。何もなく、どこにも到達できないというのに、この身を包んでくれる温もりがあれば、もう何も恐れるものはなかった。

「くっ」

落下は唐突に終わった。

気が付いた時には地面に仰向けで横たわっていたルルーシユは頭痛のする頭を抑えようとして、上に重く押し掛かっている存在に気が付いた。

「重いぞ、C・C。起きたのならどけ」

「……………デリカシーの無い奴だ。もっと優しい言葉がかけられないのか」

ルルーシユが腕を動かすとC・Cがピクリと動いたのは分かっていたから、意識を取り戻しているのは確か。

人一人分の体重をかけられた正直な感想であろうが、老化しないとはいえ見た目年齢が変わらないC・Cの認識はまだまだ若い。重いと言われて好い気はしない。

「生憎、魔王なものでな。優しさなんて物を期待する方が間違っているぞ」

「共犯者には気を使うものだ」

「なら、お前も気を使ってさっさとどけ」

今更、遠慮して気遣うなど、逆に気にするだろうというルルーシユの配慮があるだけにC・Cも軽い文句で済ませて横にどく。

起き上がったルルーシユは未だ収まらない頭痛に眉を顰めながら、傍に転がっていたゼロの仮面を拾い上げる。

「話したいことは色々ある。が、今はここを出てからにしよう」

「ああ……………ん？」

様々なことを聞かれるだろうと頷いたC・Cだったが、直後に起こった体を揺らした大きな振動にバランスを崩しかけて立ち上がりかけた膝をもう一度ついた。

「地震か？」

「にしては断続的過ぎる上に強弱の差が大きい。これは……」

直ぐには気付かなかったが大きな揺れと小さな揺れが小規模に起こっている。地震と言うには妙な揺れ方を身近で良く知っていたルーシユがこれまた直ぐ近くに操り人形を失った人形のように倒れている蜃気楼の下へ行き、コックピットを開く。

コックピットの中に手を伸ばして通信機を取り出して耳につけた。

「ロロ、ロロ、聞こえるか？ こちらはゼロ」

ヴィンセントがあつたので一応はゼロの親衛隊である零番隊に預かりになったロロに通信を繋ぐと直ぐに返信があつた。

『兄さん!? 良かった無事なんだね!』

通信機の向こうから戦闘をしていると思われる音に紛れそうになりながらもロロの喜色に満ちた声が響く。

蜃気楼のシステムを立ち上げながら手招きでC・Cをコックピットに引き寄せて通信を聞かせる。

「ああ、もしかして戦闘をしているのか？ しかし、誰と」

『兄さんと連絡が取れなくなった直後にブリタニア軍が攻撃を仕掛けて来たんだ! V・Vやアリスとの戦闘でこっちのナイトメアが減っていて、周香凛と中華連邦も応戦しているんだけどこのままじゃ押し切られる!』

二人乗りのガウエインと違って蜃気楼に二人で乗るのはかなり窮屈だった。

「蜃気楼に戦術データを送れ。俺も前線に出る」

『了解!』

と、言った直後にはロロから戦術データが送られてきてスクリーンに表示される。

「もう届くか。仕事が早いな、ロロは」

「感心してないでお前も自分の機体に戻れ。ちつ、まずいな。この戦力差では押し込まれる」

「残念だが私の機体はジェレミアに任せてある。ほら、ここで戦っているぞ」

明らかに彼我に差があり過ぎるマーカー数に撤退を検討していたルルーシュは言われてスクリーンを見れば、C・C・の暁直参仕様のマーカーが確かにブリタニアの機体マーカーの一つを消しているところだった。

「仕方ない。しっかりと掴まっているよ」

「分かっている」

些か窮屈だが蜃気楼はドルイドシステムを使う関係上、紅蓮式式等と比べればコックピットは広めに作ってあるのでC・C・も乗れないこともない。C・C・に言つて蜃気楼を動かす。

「しかし、どうするのだ？ この戦力差では、お得意の奇策も難しくかろうに」

「この場所にもう用はない。下手に黒の騎士団や中華連邦にギアスの情報を与えたくない。素直に撤退するさ」

その言葉通り、ブリタニアの攻勢に押された形ではあるもののゼロの指示によつて撤退が為された。

中に突入した零番隊はV・V・のジークフリートとアリスのマークネモとの戦闘に合わせ、ブリタニア軍との戦いもあつて副隊長の木下も含めて殆ど帰らぬ人となった。



## STAGE 8 作戦後の一幕

中華連邦領、黄海に浮かぶ潮力発電用の蓬莱島に黒の騎士団の本部がある。

その蓬莱島にある本部ビルの一室にて、黒の騎士団の首領であるゼロは名目では天子を上位に据えながらも実質的に中華連邦を動かしている黎星刻と向かい合って座っていた。

「すまない、星刻。兵に多くの犠牲を出してしまった」

向かい合わせのソファに座り開口一番、ゼロの仮面を被ったルルーシュが頭を下げる。

同盟者とはいえ、彼我の戦力差は圧倒的。頭を下げるという形で謝辞を示しているルルーシュに星刻は頷いて受け入れる。

「ブリタニアの施設に攻勢をかけると決まった時点である程度の損害は織り込み済みだ。謝罪の必要はない。寧ろ君達の方は大丈夫なのか？ 隊が壊滅状態だと聞いたが」

ギアス嚮団強襲作戦において中華連邦の代表として同行していた周香凜から報告を受けていた星刻はゼロに頭を上げさせながら聞く。

「今回の作戦は私の我儘から始まったと言ってもいい。痛いところではあるが、呑み込むしかない。しかし、共闘関係にある君達にまでそれを強いることは出来ない。非難は甘んじて受けよう」

「中華連邦にこの件でゼロを非難する理由はない。寧ろ我が国の領内の問題に黒の騎士団を巻き込んだこちらこそが謝罪せねばならないだろう」

内心では私心で真つ黒な作戦だったルルーシュは外面を取り繕って仮面を被り、星刻も領内に秘密裏にあった施設の作戦で黒の騎士団の隊が壊滅した責任を負う訳にもいかなかったので外面上は自国の兵を喪った責任を追及しきれない。

互いの立場故に、このままでは謝罪合戦になってしまうと判断した二人は話を前に進める。

「ブリタニア軍によって施設は壊滅状態、人員も同じく。辛うじて

残っていた機械から吸い上げたデータからは何らかの人体実験をしていたことは確認されている」

データの全てに目を通し、ギアス関連の文言は削除して隠滅した情報を渡した張本人であるルルーシュは何食わぬ顔で報告する。

「私も確認した。随分と非人道的な行いで、合衆国入りを渋っていた各国首脳を説得する材料にはなった」

「征服した地の民のみならず、自国民すらも平気で実験材料にする国だ。嫌悪を抱くのが普通だ」

失った兵達に見合う価値があったとは上に立つ者として口にしないが、使える物とはことんまで使い尽くすルルーシュである。

「ジェレミア・ゴットバルトの件も壊滅した零番隊の代わりとして配置されると聞いたが」

やはり突っ込まれるか、とギアス嚮団強襲作戦前にジェレミアを正式に黒の騎士団に迎え入れていたルルーシュは組んでいた腕を解き、右手を軽く上げる。

「今回の作戦は彼の情報提供によって成り立っている。何か問題でもあるか？」

「エリアーレ………日本で純血派として辣腕と振るっていた男だ。ナンバーズ排斥の急先鋒だった過去を持つものをとてではないが信用できない」

ジェレミアは大貴族の出身で、自身も辺境伯の地位を持つ。純血派と呼ばれるブリタニア人至上主義グループを率いていた男が、よりにもよって反ブリタニアの急先鋒であるゼロの親衛隊に入るなど常識的におかしいと星刻が語る。

「ジェレミアの体のことは知っていると思うが」

「改造処置を施されているらしいとは聞いている」

実験適合生体として体を弄られたジェレミアは、そうした者達に恨みを持っていると付け加えて続ける

「ブリタニアが本人の意思を無視して行ったことだ。死んだことにされて、軍籍も剥奪されているらしい」

「それで裏切ってこちらに付くと？ よりにもよって君に」

「オレンジ疑惑を植え付けた私の味方になるとは普通は思わないだろう。しかし、前提が違うのだ」

「ほう」

クロヴィス暗殺の疑いをかけられたスザクを逃がす為のゼロたるルルーシュが発したオレンジに関しては完全なハツタリであり、そもそも存在しない。

これはブリタニアへの牽制、更にはジェレミアの心の隙を突くための何重にもおける策略である。そして、仕掛けたトラップが発動し取り乱したジェレミアを狙い、ゼロは『私達を全力で見逃がせ』というギアスを掛けて見逃させた。

傍目には「オレンジ」なる機密の公表を恐れたジェレミアが隠蔽のために必死でゼロを逃がしたかのように映ったため、皇族殺害の重罪人を逃がした責任を問われるだけでなく、『オレンジ疑惑』なる嫌疑までかけられることとなる。

「つまり、ゼロ。君とジェレミアには噂通り繋がりがあつたと解釈しても構わないのかな」

そう疑われるのは仕方のないことで、黒の騎士団幹部からも同じ意見が出た。

「その通りだ。彼は私の仮面の内側を知る数少ない者だ。とはいえ、協力関係はあの一度に過ぎないはずだった。実際、ブラックリベリオンの時も私を狙って来て戦線を離脱させられた」

厳密には誘拐されたナナリーを追ってルルーシュが勝手に戦線を離脱したのだが、暴走していたジェレミアと戦ったのは嘘ではない。

ジェレミアは黒の騎士団との対面時に自身が暴走し、ゼロを襲ったことを謝罪している。

「人体実験を受けたことでブリタニアを切り、ゼロに付いたと。事情は理解するがスパイである可能性の方が高そうだが」

真実を折り混ぜることで相手に嘘を信じ込ませる。

ギアスは一度しか効かないし、現にジェレミアはその後の戦いでゼロと戦い続けている。

「人生観が変わる程の体験をすれば変遷もありえないものではないだ

ろう。が、今回の作戦で恨みを晴らしている。ブリタニアに戻ろうとする可能性もあるのではないか？」

「ジェレミアは生粋の騎士だ。一度決めたことを覆したりはしない。とはいえ、やはり信用に欠けるのは仕方ないだろう。だからこそ、私の下につけた」

明確に敵だった経緯もあり、同じブリタニア人でもデイトハルトと違い、生粋の軍人であったジェレミアが仲間になるからといって即座に受け入れられるものではない。

ブラツクリベリオンでのことを消化できない者もいるので、黒の騎士団の指揮系統から独立してゼロ直属の個人戦力として動く立場に落ち着いたのは状況的に仕方ない面もあった。

「随分と信頼しているようだ。回収したナイトギガフォートレスを改修し、ジェレミアの専用機とするプランもあるとか」

V・Vが乗っていたジークフリートはブリタニア軍による人体実験を隠匿する為の攻撃に巻き込まれた。

神経接続の必要性もあって操縦者がかなり限られる機体ではあるが、V・Vが操つても多くのナイトメアフレームを相手に出来たように強力な機体である。捨ててしまうには惜しく、直せばまだ使えると判断されて今はラクシャータ・チャウラーが修理と改造を施している。

「使える機体であるし、放棄するには惜しい。神経接続を必要とする故、他にパイロットを宛がうことが難しいという理由も大きい。疑うならばジークフリートに爆弾を仕掛けるなり、ジェレミアに監視をつけるなりすればいい」

「裏切ることはない、それだけの信頼をゼロは彼にかけているか」

「ああ」

自信を持って言い切ったゼロに星刻も覚悟を決めるように一度を瞼を閉じた。

「分かった。だが、もしもの時は」

「私が責任を持つ」

星刻が言うように強力な機体であるが、やはりブリタニアの騎士で

あつたジェレミアが完全に味方に成つたことを信じれてはいないよ  
うなのでルルーシユはそう言うしかない。

「超合衆国の結成を前に懸案が解決したのは喜ばしいことだ」

中華連邦を味方に付ける前でも世界の三分の一を支配していたブ  
リタニア。幾ら列強であつた中華連邦を味方に付けようとも国力の  
差は大きい。ことに大宦官の勢力を排除した今の中華連邦は弱体化  
している。

勢力の平定は済んでいるが、黒の騎士団と中華連邦だけでブリタニ  
アと戦えると思つていなかったルルーシユが立ち上げたのが超合衆  
国構想だつた。

「見事と言つておこう。これで対ブリタニアを標榜できる」

ルルーシユが作り上げた超合衆国構想とは、ブリタニアに脅威を覚  
えている国や植民地となつたエリアの抵抗勢力を取り込み、反ブリタ  
ニア同盟を作り上げようという計画である。

ギアス嚮団強襲作戦で一部の兵を前線から引き揚げた所為で一時  
停滞していた、攻勢を強めるブリタニアとの陣取り合戦に似た己が勢  
力に引き寄せる戦いはある程度の決着を見た。

「その前にゼロ、君に聞いておきたいことがある」

超合衆国が正式に世間に公開される前に、超合衆国の中軸になる中  
華連邦の人間として星刻は対ブリタニアの矢面に立つゼロの真意を  
確かめなければならなかつた。

ゼロが有能であることは疑う余地のない事実である。だが、逆に有  
能で在り過ぎることが多くの人間に疑念と大きな懸念を抱かせてし  
まうのも仕方のない面があつた。星刻がこれから発しようとしてい  
る言葉も当たり前の疑問である。

「君はあのブリタニア皇帝のように、世界に覇を唱えるつもりか？」

「それはない」

ルルーシユは仮面の中で苦笑しながら、星刻の懸念を言葉少な気  
に否定する。

「懸念は理解できる。超合衆国の構想者、そして黒の騎士団のトップ  
である私に全くの疑念を抱かない者などいないだろう」

黒の騎士団がここまで成り上がったのは、ゼロのカリスマ性と結果を示し続けて来たことが大きい。

ブリタニアに対抗する勢力を作り上げたゼロの非凡さは誰もが知るところであり、世界を二分する勢力のトップに上り詰めたにしてはその真意を窺い知れる者は殆どいないに等しい。現に反ブリタニアでありながらも他国が超合衆国に即座に加入しなかったのも、ゼロの野心を恐れてのことである。

「私としては大宦官を排除出来たこと、天子様を救ってもらった二つの恩がある。が、その言葉を信用するにしても、ジェレミアのことだけではなく君にはあまりにも謎が多すぎる」

「同意しよう。自分で言うのもなんだが仮面で姿を隠した者を全面的に信頼できるはずもない」

名前も姿も覆い隠した者がトップに立てば、誰だって疑念を抱かずにはいられない。

「だが、私が仮面を被るのも故あつてのこと」

誰が元とはいえ、敵国の皇子をトップに擁するか。ルルーシュがブリタニアと戦うにはゼロの仮面が必要なのだ。

「世界に覇を唱えるつもりも、中華連邦を乗っ取る気もない。第一、私は統治に魅力を感じない」

「仮にブリタニアに勝利すれば世界を手に入れることも容易いというのにか？」

「だとしてもだ」

数多の為政者の統治にもどかしい想いを抱いたことはあるし、自分ならばもつと上手く出来るという確信がルルーシュにはある。

だが、出来るからといってやりたいかはまた別の話である。

「信用され難いのは承知している。無理もないということも。しかし、私は今まで散々統治者達の苦勞を目にしてきたのでね。一国ですら大変だというのに、世界ともなれば想像も出来ん。いらぬ苦勞を背負う気は無いよ」

信じてもらうことは恐らく出来ないだろう。ゼロは戦略家としては謀略型で、かつ上昇志向も強い。そういう人間が得てして信義より

も大望を、調和よりも野心を優先しがちである。

仮面で姿を隠すゼロの真なる目的が、世界に覇を唱えるつもりなのだと考えてもおかしくはない。

しかし、覇道突き進むブリタニア皇帝を憎悪しているルルーシュは彼と同じことを望むのを拒否する。何よりも、ルルーシュが望むのは世界などよりも大事で、もつとちつぽけなものだ。

「だが、人は権力を持てば変わるものだ」

最初から腐っている人間は恐らく少ない。権力を持てば、理想を語っていた口でやがて人々を傷つけていくようになる。権力の魔力は容易く人を変えてしまうのだ。

多くの超合衆国入りに難色を示した権力者達を説得した秘策を星刻にも告げる。

「ふむ、ではブリタニアを打倒した暁には、予定されている黒の騎士団CEOの座と超合衆国におけるあらゆる地位から退くことを約束しよう」

「それは……っ!?!」

星刻にとって予想もしていない言葉であったのだろう。絶句している気配に苦笑を浮かべたルルーシュに権力にしがみ付く理由などない。

「今の段階では口約束に留まるが、ブリタニアを倒して戦後処理を終えれば仮面の英雄は必要なくなる。寧ろ」

「邪魔になる、か」

「英雄など普通の日常には不要なもの。素性不明・真意不明の者など厄介でしかない」

ナナリーの安全を保障し、超合衆国がブリタニアに対してやり過ぎなければルルーシュがゼロの仮面を被り続ける必要もない。

「超合衆国に各国が参加を内々に表明したのもそれが理由か」

「ブリタニアを脅威に感じているのはどこも同じだ。一国や数国だけで対抗できないのは自明の理。だが、超合衆国には私がいた」

強いカリスマ性とブリタニアに対抗できる力を示したゼロが戦後には自ら消えるのならば、世界に覇を唱えられる立場を手に入れられ

るかもしれないと思っただろう。

「危うくはないか？ 戦後に超合衆国で内乱が起こるぞ」

絶対的な指導者がいなくなれば、残った者達で椅子取りゲームが起こって内部分裂を起こす可能性が高いことを星刻は危惧していた。

「その可能性を摘んでから去るつもりだ。最後まで責任は果たすとも」

内乱に発展しなくても超合衆国の中軸である中華連邦が調停に走らざるをえないだろうし、そうなれば変な思惑に囚われている暇もないだろうという思惑もルルーシュにはある。大局的な見地ではルルーシュに一步劣る星刻もその未来が見えたからこそ渋面にもなる。

ルルーシュの行動が最善と分かっているからこそ非難も出来ないし、回避することも難しいと分かっているだけに特に。

「仮に内乱に発展したとしても、私が再び仮面を被ることになる。それは彼らにとっても望むことではないだろう」

三度、立つようなことになればゼロの存在は絶対の物となる。

そうなれば民衆は政治屋ではなくゼロをこそ指導者として祭り上げることは想像に難くない。だからこそ、超合衆国に参加した者達も軽挙妄動は控えるだろうとルルーシュは考えていた。

「君がそこまで考えているならば、私が言うことはもうない」

一般的ではないゼロの考えを聞いた星刻は一応の納得をして頷く。「では、もう一つ聞いておこう。決議第壹號で日本解放戦が選ばれた理由を教えてください」

超合衆国が成った暁に施行されている決議の一つ目は日本解放戦となっている。複数の国が同盟を結んでの最初の一戦が日本である理由を星刻は訊ねた。

「まずはエリアーと、日本の解放が世界的にも多くの影響力を及ぼすことになるのは理解している」

個人の意思によって同盟の向かう先が決定されるのは喜ばしいことではないと暗に込めた星刻にルルーシュは腕を組んだ。

「ゼロと黒の騎士団が生まれたのが日本であることは世界的に周知の事実だろう。日本ではなく他のエリアから、となれば日本はどうした



という声はやはり出る」

超合衆国の唯一の軍隊となる黒の騎士団は日本で生まれ、ゼロも日本で立った。その事実は世界的にも有名でもある。

「そしてエリアーを一番に選んだのには、今の彼の地にも理由がある」

「矯正エリアから途上エリアに昇格したことか」

「それだけに留まらず、そう遠くない内に衛星エリアにも昇格するだろう」

「また随分と早い」

総督であるナナリーが行政特区・日本を立ち上げる時に黒の騎士団をゼロとして国外追放させたことで不穏分子は減っただろう。その分だけ内政はやりやすくなっただろうし、ルルーシユも陰ながら支えていたのだがナナリーはこちらの思惑を超えていた。

「これまで日本人に対して圧政のみしか行ってこなかった総督達と比較して、融和政策を取るナナリー総督は私にとっても好ましい。だが、日本人のブリタニアからの独立の気概を失わせかねない」

ナナリーがナンバーズに対して善政を振るうのは、戦後のことを考えれば問題ないどころか大いにプラスになる。

総督として表舞台に立つてしまった以上、戦争で負ければ敗戦国の将として扱われてしまう。しかし、融和政策を推し進めたナナリーは年齢と体のこともあって悪い扱いにはされ難い。

とはいえ、現状のナナリーはルルーシユの想定を超えてやり過ぎてしまった。

「今、日本を解放しなければ、ゼロが立ったはずの日本の民衆がブリタニアに従わされてしまう。他の国を解放しても、日本は解放できないとあってはゼロとしての骨子が揺らぐ。ゼロとしての骨子が揺らげば、黒の騎士団にも影響が出るだろう」

「あの総督にゼロともあろう者が随分と悩まされてるようだな」  
「笑い事ではないぞ」

目も見えず、立つことも出来ない者がエリア総督になったことは有名な事なので星刻も知悉しているが、一人の少女に世界が揺り動かさ

れている滑稽な状況に笑みを漏らした。

「今、日本を解放しなければ後手に回らざるをえない。その事態を避けたいがための日本解放だとは理解したし納得もした」

笑みを収めて組んだ手で口元を隠した星刻は次の話題へと移る。

## STAGE 9 信頼

星刻との会談を終えたルルーシュは黒の騎士団の旗艦である斑鳩に戻って来た。

「お帰りなさい、ルルーシュ」

ギアス嚮団強襲作戦によって修正を余儀なくされた戦略のステージを先に進める為、文字通り睡眠時間を削って行動していたルルーシュを迎えたのはシャーリー・フェネットの笑顔であった。

「ただいま、でいいのか？」

挨拶としては間違っていないはずだが背後でドアが閉まったのを確認してゼロの仮面を取るルルーシュは少し照れ臭げだった。

ルルーシュが仮面を何時もの場所に吊るしている姿を見るC・C. はニヤリと笑って便乗することにした。

「ルルーシュ、ご飯はまだ食べていないのだろうか？ ご飯にするか？」

先に風呂に入るか？ それとも」

ソファに座っていたC・C. は悪戯気な笑みを浮かべて立ち上がり、ゼロの私室なので当然ながらあるベッドまで行つて端に腰かける。

「わ・た・しを食べるか？」

「何言つてんのC・C.!?」

足を組んで太腿を見せつつ艶やかに笑いながら言うと、まさかの発言に顔を真っ赤にしたシャーリーが全力でツツコミを入れる。その間にルルーシュはマントを脱いで控えていたジェレミアに渡していた。

ジェレミアは受け取ったマントをハンガーで吊るす。

「男は疲れすぎると逆にムラムラとするらしいからな。一肌脱いでならぬ服を脱いで発散させてやろうと言っているだけだ」

今時珍しい純朴な反応を見せるシャーリーを揶揄う意味も込めながら、これ見よがしに首元を開ける。

「駄目エエエエツ!!」

「そう頭ごなしに否定されてもな。なんならお前も交ざるか?」  
「え!?!」

物理的に阻止をしようとベッドに駆け寄ろうとしたシャーリーはその提案を聞いてピタリと足を止めた。

なんだかんだでC・Cのことは嫌いではないし、寧ろシャーリーの知らないことを沢山知っていて態度もデカいから姉のような立ち位置に収まっている。

(交ざる? 初めては夜景の綺麗なホテルで食事をしてからロマンチックに三人でなんてそんなフシダラなでもC・Cは経験豊富そうだからいてくれたら心強いかも)

恋する乙女は心中で大暴走をかましていた。

変なところで器の大きさを見せながらも大絶賛暴走中のシャーリーの目がグルグルしだしたところで、ジエミアが大きめに咳払いをする。

「楽し気なところ悪いが、ルルーシュ様だけではなく私もいることを忘れないでほしいな」

「だが、見ていて楽しい見世物だっただろう?」

「人を見せ者扱いするのは……」

一人で百面相をしているシャーリーが煩悶していた姿は見ていて楽しいので安易な否定は出来ないジエミアが言葉を濁したところで、ようやく当の本人は揶揄われていることに気付いて別の意味で顔を真っ赤に染める。

「ま、また私を揶揄ったのね!」

当然ながら揶揄われた本人であるシャーリーにとってみれば面白いはずがない。

「シャーリーは揶揄い甲斐があるからな」

「だからって……!」

「C・C、そこまでしておけ。あまり騒いではルルーシュ様の邪魔になる」

戦略スクリーンを見ているルルーシュが二人の言い合いに巻き込

まれるのを恐れて知らんぷりを決め込んでいるのを分かった上で  
ジエレミアは言った。

「邪魔になるのなら自分で言えばいいだろう。言わないのなら邪魔に  
なっていない」

気位C.C.が高い猫に折角の気遣いを無視され、主も可能ルルーシュな限り関わる  
のを遅らせようとして聞こえないふりをしている。ジエレミアに味  
方はいなかった。

「ルルも黙ってないで何か言つてよ！」

育ちシャーリーの良い犬に話の矛先を向けられたルルーシュはビクリと肩を  
震わせ、諦めたように座っていた椅子をクルリと回して振り返る。

チラリと助けを求めてジエレミアを見ても、先に見捨てていただけ  
に同じことをされただけだった。

「落ち着け、シャーリー。そうやって反応するからC.C.に遊ばれ  
るんだぞ」

「だって……」

「C.C.も人で遊ぶな」

「じゃあ、お前が相手をしてくれるのかルルーシュ？」

「なんでそうなる」

二人の仲を仲裁していたはずが代わりに標的にされそうになって  
ルルーシュはげんなりと表情を歪めた。

どうにもギアス嚮団強襲作戦から戻って来てからは妙にテンショ  
ンが高いというか周りに対して遠慮が無くなったというか。主な被  
害者であるルルーシュはC.C.のペースに巻き込まれれば疲れる  
ことは間違いないのでシャーリーを見る。

「シャーリー、なにか俺に聞きたいことがあるんじゃないのか？」

ギアス嚮団が名実共に壊滅したことでシャーリーの身に迫る危険  
がかなり減ったことは以前に伝えているので、今更改まってルルー  
シュに聞きたい理由に心当たりが無かったので話を変える意味合い  
も込めて訊ねる。

「あつ、そうそう。正確には私じゃなくて他の人のことなんだけど」

結局、シャーリーはC.C.と同じ肩出しタイプの黒の騎士団制服

を選び、そのポケットから携帯電話を取り出す。

シャーリーの話の胆がその携帯電話にあると察したルルーシュは話がしやすいように部屋の中央にあるソファへと移動する。主君<sup>ルルーシュ</sup>第一のジエレミアと、仲間外れにはされたくないし話に興味もあったC・C・もソファに集まった。

ちなみにロロはナナリー奪還の為の前準備の下調べでエリア11に残っているのでこの場にはいない。

「ギアス嚮団に攻撃を仕掛ける前に私はアツシユフオードに戻ったじゃない。その時にアーニヤちゃんから相談を受けたの」「あのナイトオブシックスが？」

真面目な学生であるシャーリーは普段からサボることも多いルルーシュと違っていなければ目立ってしまう。全員が蓬萊島にいる時は篠崎咲世子に影武者をしてもうが、ギアス嚮団強襲作戦時はそうはいかなかった。スザクが学園に登校する予定だったのでシャーリーは学園に残った。スザクは敵ではあるがシャーリーに手を出しはしないだろうという推測に基づいた信頼で。

何故かアツシユフオード学園に編入して来た帝国最強のナイトオブラウンズの二人の内の一人が、まさかその時にシャーリーに相談を持ち掛けた現実を即座にルルーシュは受け入れられなかった。

「リヴァルがミレイ会長の後を継いで生徒会長になってから私も手伝ってことは知ってるでしょ？」

「ああ、俺も手伝いたいとは思っているんだが」

「流石に三足の草鞋は無理だから止めといた方が良いと思うよ」

ミレイ・アツシユフオードが生徒会長を辞した後、大勢的には副会長だったルルーシュが後を継ぐと思われていたが黒の騎士団の活動が本格化している中では仕事をこれ以上、抱え込むことは物理的に難しい。

消去法でリヴァルが会長になり、引継ぎはともかくとして運営の手伝いすらも出来ない現状には申し訳ないとルルーシュも思っていたのである。その分だけシャーリーが生徒会からは離れたもの手伝っていることは聞いていた。

「ジノ君とアーニヤちゃんも生徒会を手伝ってくれてるんだ。その縁で話すことも多いし」

ジノが学園にいる間は社会的立場を忘れてフランクに接してほしいと言っていたことはルルーシユも聞いていた。

「天下のナイトオブブラウンズを君にちゃん付けとは……」

ジェレミアが唾然とした口調でボソリと呟いた。

ルルーシユもリヴァルとジノが仲が良いことは見知っていたし、フランクなジノと明るく物怖じしないシャーリーが仲良くなるのはおかしいことではない。ジェレミアのようにブリタニアの騎士の頂点であるナイトオブブラウンズを特別視したりはしないが気持ちは良く分かる。

「随分と仲が良いんだな」

「ヤキモチ妬きはみつともないぞ」

「黙れ、C・C。人を茶化すな」

「私としては妬いてくれた方が嬉しいけど」

「だ、そうだ」

「ぬう……」

言い合いをしているのも遠慮がないからで、基本的にC・Cとシャーリーは仲が良い。翻弄されることの多いルルーシユはこの時も先程まで言い合いをしていた二人に言い包められてしまった。

「それでナイトオブシックスの相談内容は？」

下手に抗弁しても旗色が悪化するだけだと学んでいるルルーシユは話を先に進めることにした。

「多分、昔のルルだろうっていう写真のデータを貰ったの」

「本当は俺じゃないのかって話か？ 前に本人に否定したはずだが」

そう言っただけでシャーリーが差し出した携帯電話にはルルーシユの幼い頃の写真の映像が表示されている。

シャルルに記憶を弄られて皇族だった頃の頃を忘れさせられていることになっているので、何があっても認めるわけにはいかない。皇帝には記憶を取り戻していることがバレているとしても、ゼロであることを疑っているスザクに知られれば今の安寧が崩れる。

「やっぱりルルだったんだ」

「悪いがそれが相談事なら俺は否定することしか出来ないぞ」

「違う違う。知りたいのは、この写真を撮った状況の方」

「そんなことを知ってどうするんだ？ いや、待て」

言われて考え、直ぐにおかしいことに気付いた。

「俺は何時そんな写真を撮られた？」

最初にアーニヤに写真を見せられた時はシャーリーから隠れていた状況だったのと、よりにもよって敵であるナイトオブブラウンズに訊ねられたので思考を回している余裕が無かった。直ぐ後に女生徒達に追い回されたり、翌日にはキューピッドの日やら、ジェレミアの来襲やギアス嚮団強襲作戦も重なって完全に頭の中から飛んでいた。

しかし、よくよく考えてみればルルーシュ自身にはそのような写真を撮られた覚えが無かった。

横合いから覗き込んだC・C。がシャーリーの携帯電話を手に取り、写真を撮るしげしげと眺める。

「服装からしてルルーシュが皇族だった頃なのは間違いない。本当に記憶にないのか？」

「後ろの花壇からして撮られたのはアリエス宮にあった花壇だ。だが、俺には花壇の前で、しかも後のナイトオブブラウンズに写真を撮られたような覚えはない」

写真のルルーシュの大きさから考えて、マリアンヌが暗殺される前の一年以内の出来事であることは分かる。しかし、ルルーシュ本人には幼い頃にアーニヤ・アールストレイムと会った記憶はない。

「本当に断言できるのか？ 子供の頃のことだろ」

普通ならば何年も経てば会った人物の名前や顔など覚えていられるものではない。実際、C・C。は長く生きて来て余程印象深い者でなければ忘れてしまっている。

「皇族時代に会った人物は余程小さい頃でなければ大体は覚えていられる。この年齢の頃ならば全員の名前を言ってもいいぞ」

C・C。とルルーシュでは、まず前提からして違う。

皇族時代はあらゆることが多大な影響を及ぼすことがあり、接触す



る人物には細心の注意を払って来た。特にルルーシユの場合、王妃であり母のマリアンヌは平民出身だったから他の貴族出身の王妃達から良く思われていなかったからこそ会う人物に警戒していたのだから。

常人を遥かに超える頭脳を持つルルーシユには幼い頃に出会った大抵の人物を諳んじられる自信があった。しかし、その自信は直ぐに木端微塵に打ち砕かれる。

「恐らくこの写真はアールストレイム卿が撮ったものでしょう。彼女ならば撮る機会は一度ぐらいあったはずですよ」

自信を木端微塵に打ち砕いたのは第一の臣を自認するジエレミア・ゴットバルトその人である。

「なに？ どういうことだ、ジエレミア」

「アールストレイム卿は、あのテロの一週間前から行儀見習いとしてアリエス宮にいました。ルルーシユ様とも年も近いですから接触の機会はあったはずですよ」

「……………記憶にないぞ」

アーニヤがアリエス宮にいたと言われてもルルーシユの記憶には全く影も形もない。

「マリアンヌ様を喪うなど多くの出来事が起こった故、前後のことが記憶に残っていないとしても致し方ないことです」

テロによってマリアンヌが殺され、ナナリーも下半身不随と母の死のショックで目が見えなくなった。一度もナナリーの見舞いに来なかった父シャルルに警備が手薄だった等の不審点から真相と責任の追求の為に直訴するも一蹴され、ナナリーと共に人質として日本の枢木ゲンブ首相の下へ送られた。

日本に送られたのはナナリーの傷が癒えた後ではあるが、怒濤の出来事がルルーシユの身に一気に起こったのはC・C・でも否定しきれないこと。

「他に印象的な出来事が連続すれば、その他の些末な出会いや人物のことは記憶に残らないのかもな」

「ルルーシユ様の頭脳を以ってしても限界があったのでしよう」

ルルーシユはなんとかして思い出そうとするが、どれだけ記憶を掘り返そうとしても当時の記憶は陰惨なものばかり。アーニヤのことは影も形もない。ない、はずなのにどこか引っ掛かる。

記憶を注意深く精査する。日付を徐々に遡り、どこで何をしていたかを思い出していく。

「思い出した。確かに俺はナイトオブシックスに会っている」

とはいえ、微かな残照のようなものだが。

こうやって切っ掛けがあっても時間をかけなければ思い出せないレベルの記憶にシャーリーが興味深げに顔を近づける。

「仲良かったの？」

「大した話はしていない。確か父親に携帯端末を買ったから写真を撮らせてもらえないかと頼まれ受けただけだ」

他にも話したかもしれないがルルーシユの記憶にはそれだけである。

「しかし、ナイトオブシックスの相談事とは一体？ 学園に通う一生徒が皇族であることを疑っているのであれば由々しき事態」

「いえ、そんな大それた………本人にとっては重大なことなんですけど」

「奥歯に物が挟まった物言いだが、結局のところどうということなんだ？」

ジェレミアにとってみればルルーシユ第一なので、最悪の事態にはアーニヤを暗殺する心積もりでいたりする。怖い顔をしているジェレミアに気後れしながらも、アーニヤの悩みは関係のない者には大きな理由ではないことを知っているシャーリーに先を促すC・C。

「アーニヤちゃんには、この写真を撮った記憶が無いって、携帯電話で付けていた日記とかも。他にも記憶と記録が違っていたりすることが一杯あったんですって」

頷いたシャーリーがアーニヤの悩みをそのまま伝えると、直ぐにルルーシユには心当たる節があった。

「他の誰かが携帯電話を使ったのでなければ、皇帝のギアス記憶改竄を受けたんだらう」

とまでは、シャルルのギアスがかけられた相手の記憶をある程度思い通りに改変できることを知っていたればルルーシュでなくとも直ぐに思い至る。

「俺もゼロや皇族だったことを忘れ、妹ではなく弟しかいないと誤認させられていた。奴のギアスなら一部の記憶を消すことぐらいわからないが」

「何故そんなことをしたか、ですね」

同じ答えに辿り着いたジェレミアもその疑念にぶち当たる。

「ナイトオブラウンズになってからなら分かるが、話を聞くに九年前からとなるとますます分からん。アールストレイム家がそこまで重要とは思えんし、ナイトオブシックス……………アーニャは他に何か言っていたか？」

シャルル  
ギアスによる被害者という見方が加わってくると画一的に敵と見なすことも出来ず、ルルーシュも呼び方を変える。

「え？ うーん、今でも記憶がずれることがあるとかも言ってた」「なに？」

ルルーシュの眉がピクリと動く。

何故ならばシャルルのギアスを受けているだけでは説明できない症状だったからである。それほどに何度もギアスを受ける必要性があると思えず、何か他の要因かと思考が走る。

「中華連邦で戦った時も、いきなり……………で遮っちゃったから続きは分からないけど、これってなんだろう？」

ルルーシュもジェレミアもシャルルのギアスで説明できない症状に返す言葉を持たない。

「何か分かるか、C.C.？」

「……………シャルルのギアスが原因とは一概には言えない状況なのは確かだろう。後は何とも言えないな」

9年前、記憶がずれる、中華連邦……………一連の単語を頭の中に浮かべて正解に辿り着いたC.C.は敢えて真実を口にしなかった。

ルルーシュも気づかず、話を続ける。

「C.C.でも分からないとなると、後は俺がギアスをかけて聞き出

すのが一番手っ取り早いが」

「やっぱり難しい?」

「ナイトオブブラウンズの前でギアスを使うのは避けたい。万が一がないとは言いい切れんからな」

「そっか……」

ギアスはその力の関係上、ナイトオブブラウンズの中でも知る者は少ないとしても、残念そうなシャーリーには申し訳ないが今のルルーシュにはアーニヤの為に危険を冒す理由がない。

「ブリタニアを下してギアスを使うタイミングがあれば吝かではない」

「素直じゃない奴」

何も出来ないと気落ちした表情のシャーリーに気を回したルルーシュの対応にC・C・が苦笑する。

「コホン………現状ではその未来に到達する可能性は低い」

切り替えるように咳払いをしたルルーシュがC・C・を睨み付けるように見る。

「ブリタニアの動きは皇帝不在を示している。俺達と違ってあの空間に取り残されたようだが」

「シャルルもコードの持ち主だ。一時的に戻って来れないに過ぎん」

ぬう、と以前にも聞いた内容にルルーシュは眉に皺を寄せて唸る。

「あの空間、Cの世界だったか………のことは良く分らんがギアス嚮団にあった扉と神根島の扉は良く似ている。他にもあるのか?」

「世界中に幾つか。ブリタニアにもあるから今頃、お抱えのギアス研究者達が悪戦苦闘している頃だろうよ」

V・V・とは別の研究者達を確保しているはずだと推測するC・

C・に反論する者はいない。

「じゃあ、今にも戻って来てナナちゃんを人質にすることもあつてこと?」

ルルーシュから一連の事情を聞いているシャーリーもブラツクリベリオンの時から数えれば一年以上もナナリーと直接会っていないだけに心配も大きい。

「私としてはその可能性は低いと思うんだが」

「あの男ならば平気でやる」

「と、この男が頑迷に譲らん」

軍人であったジェレミアからすれば、より効率的な思考をするルルーシユの意見に賛成なのだがシャルルと知己であるというC・C.の意見も無視できないので沈黙を選ぶ。

「隠し事の多い魔女の言うことを全面的に肯定できん  
「ルル」

その言葉は流石に看過できないとシャーリーが名前を呼ぶ。

「すまん、C・C.。言い過ぎた」

口が過ぎた自覚もあったルルーシユもバツが悪い表情で微かに頭を下げる。余人にとってはただ少し頭を傾けた程度にしかなかったら、殊勝な態度を見抜いたC・C.は気にするなど言わんばかりに手を振る。

「隠し事が多いのは事実だが女の秘密を探ろうとするのは感心しないな」

笑みを浮かべて諧謔を交えてしまうのは最早C・C.の癖なのだろう。

「皇帝達がしようとしているのは死者を含めた全人類の意識の融合で間違いないんだな」

C・C.に付き合っていると話が脱線するので本題を切り出す。

「どういうこと？」

「シャーリーにも分かりやすく言うんだな、自分と他人を隔てる壁を取り払って、相手も自分であるという世界にするということだ」

「お前は俺で、俺もお前ということだろう」

一発で理解したルルーシユと違ってシャーリーにはその説明でも分からないように頭を捻っている。

「分かりやすく言うなら嘘に意味がなくなる世界だ」

相手に理解してもらおう為、C・C.は更に噛み砕いて説明する。

「そもそも人は何故、嘘をつくの？ それは己の内面だけは他者に透視されないという大前提があるからだ。他人には知られない自分

だけの真実。それがあからこそ、人は嘘をつけるし、嘘をつく必要性も生まれる」

ここで自分と他人を隔てる壁が取り払われたらどうなるかを続ける。

「壁がなくなり、全ての人間が同じ『自分』を持つことになる。多くの意識が溶け合うことによつて生まれた、たった一つの意識だけが人類全ての総意となる。そら、『自分』一人しかないのだから嘘に意味がないだろう」

イマイチ想像がつかないらしいシャーリーと違って、他人に知られたくない秘密の多いルルーシユは露骨に嫌な表情を浮かべている。

「嘘は他人がいて初めて成り立つ物。だが、現実的にそのような状態を受け入れられるものなのか？」

「そうは言うがな、ジェレミア。世界の質自体が変わり、人間という生物種そのものが生まれ変わるに等しい中で常識すら変わるんだ」

大人としてより広義な視点で物を見るジェレミアにC・C.はとある人物が語ったことを思い出す。

「例えるなら今まで猿として生きていたのに突然、猫になるようなものと考えてくれ。猿として生きていた時の常識はなくなり、猫としての常識を拒絶できない。受け入れたくないという感情そのものが猿の常識であつて、猫となつてしまえば猫の常識に意識が切り替わる」  
そんなことが受け入れられるはずがないという意見自体が通用しなくなることにルルーシユは下げていた顔を上げる。

「空想のような世界だが、あんな思考で物理に干渉するような世界を造り出している時点で不可能とは言えんな」

「計算上では、とつくが」

今改めて聞いたシャルル達がやろうとしている計画にルルーシユは少し遠い目をする。

「『自分』しかないのならば、争いは無くなる。誰だつて自分が痛い思いはしたくない」

「争いが激減するのはメリットの一つだな。もう一つのメリットは死者との邂逅がある」

ピクリ、とシャーリーが反応する。

「人とは、集合無意識がつけた仮面。嘘の意味が無くなる世界を造るということとは、元あつた摂理<sup>神</sup>に代わるルールを造り出すということ。即ち神殺し」

シャーリーの反応に何も言う資格の無いルルーシユはC・C・の話<sup>神</sup>を座して聞く。

「細かい理屈は省くが、意識の共有が始まれば死者達の記憶や心の統合も為される。再び死者達と心を交わすことが可能になるというわけだ。シャルル達はこれをラグナレクの接続と呼んでいた」

C・C・は基本的にルルーシユに聞かれたことには素直に答えている。聞かれたことだけ、には。

「アーカーシャの剣、コード、ギアス、三者三様の本質を合わせてCの世界に働きかけることで生者は意識の共有を果たし、死者の心や記憶は生者に寄り添い、世界はその状態で固定化される」

「失われた人達が戻ってくるか？」

「少なくともその心はな。行き着く先は輪廻と個の否定、失われたものの再生及び固定。生者は一つになり、そして死者とも一つになる」

ここで一度話を終えたC・C・は難しい顔で考えているルルーシユを改めて見る。

「シャルル達は嘘を嫌っていた。皇位争いで色々あつて、その思想に行き着いたらしい。この計画を発動するには二つのコードが不可欠で、私は自らの自死の為に彼らに協力していた……」

その世界が良いのか、悪いのかは誰にも判断が下せない。何故なら今の世界よりも傷つく人は少なくなるのだから。

「……でも、私は寂しい世界なんじゃないかなって思う」

この中で最もその世界を求めると思われたシャーリーが口にする。「私も死んだお父さんと話したいよ。でも、その世界での優しさは他人を想つての物じゃない。どこまでいっても自分に向けられたもの。それって寂しいことだと思ふんだ」

言ったシャーリーが手を伸ばしてルルーシユに触れる。

「分かり合いたい、相手を理解したいって思うのは他人がいてこそだ

から……ごめんね、分かり難くて」

「いや、十分だ」

指先が少し交わる程度の温もりにルルーシユは強い目を取り戻す。「人は何故、嘘をつくのか。それは何かと争う為だけじゃない。何かを求めるからだ」

何時もの流れるような弁舌ではなく、一つ一つ自分が口にする言葉の意味を確かめるようにゆっくりとした口調で続ける。

「ありのままの良い世界とは変化がない。生きるとは言わない。完結した閉じた世界。俺は嫌だな」

想像しても嫌悪しか湧かない世界と、今の世界を想う。

「俺はずっと嘘をついていた、生きてるって嘘を。名前も嘘、経歴も嘘、嘘ばかりだ。全く変わらない世界に飽き飽きして、でも嘘って絶望で諦めることも出来なくて……」

何のことはない。ルルーシユはルルーシユである限り、足を止めることなど決してあり得ないと再認識しただけ。

「俺は俺である限り、奴らの世界を否定する。やることは何も変わらない」

知ったところでルルーシユの行動には何の影響もない。より具体的に指針を得たに過ぎない。

「さしあたって、皇帝が戻って来たらナナリーが危険だ。他の事に気は回せん。超合衆国の成立を急がせているが、こればかりはどうにもならん」

「ナナリー様を誘拐する案もありましたが総督府の警備は嚴重です。仮に忍び込めたとしても連れ出すのは不可能に近いでしょう」

「仮に成功しても、今となってはナナリーも公的な立場を得ている。今までのように隠れ住むことは出来ん」

ナナリーが皇女に戻り、エリアーの総督として目覚ましい活躍を果たしたことでルルーシユが取れる選択肢が自ずと狭まってしまっている。ジェレミアが言うように総督府の警備を潜り抜けるのは難事で囚われている紅月カレンの居場所すら分かっていない状態。

「スザク君に協力してもらおうのは？」



ああでもない、こうでもない、と三人が意見を出す中、シャーリーがどうしてこんな簡単なことを思いつかないのかと軽く言った。

「あいつは俺を皇帝に差し出してナイトオブセブンになった男だぞ。協力など」

「私はスザク君ならナナちゃんを助けてくれるって信じてる」

裏切り、裏切った仲であるからこそルルーシュがスザクに頼ることなどありえない。C・Cもジェレミアもルルーシュの心情を良く理解しているからこそ、その選択肢を無意識に排除していた。しかし、シャーリーにとつては事情を聞いても、スザクは学友でルルーシュの友達という意識が強くナナリーと仲が良かったのも知っていた。だからこそ、臆せずにルルーシュにとつての禁じ手を勧めることが出来た。

「ルルが心を込めて話せば、きっと助けてくれるよスザク君は」

このまま超合衆国の話を進めたところでナナリーを奪還するまでは常に危険が伴う。合理的に行くならば尤もな選択に、ルルーシュは直ぐに返答できない。

「……………少し考えさせてくれ」

「うん」

今直ぐに差し迫った危機ではないから即答できないルルーシュに小指を絡めたシャーリーは優しく微笑んだ。

懊悩しているルルーシュに気付かれないようにジェレミアに近づいたC・Cがそつと囁く。

「ジェレミア、頼みがある」

その様子から主君には言えない秘密事と察したジェレミアが頷く横で、C・Cは悲し気な眼差しから決意を滲ませていた。



ルルーシユ扮するゼロが仕掛ける超合衆国成立に向けて外交合戦を繰り広げているシュナイゼルは珍しい客を迎えていた。

「これはコーネリア。今まで行方知れずだった放蕩皇女が突然の登場だね」

ブラックリベリオン後から自らの意志で行方を晦ませていたコーネリアが自らの前に突如として現れたことに驚きつつも、如才なく出迎えたシュナイゼルは朗らかに微笑む。

「……………帝国宰相にお話があります」

「聞こう」

姿を晦ませていたのはユーフェミア関連のことだという推測は容易く、今になって現れた理由を聞くこともなくシュナイゼルはコーネリアに先を促す。

「ゼロはルルーシユです」

「ルルーシユというと、9年前にエリアー1で死んだあのルルーシユ？」

「兄上ならば不審に思ったはずです。ナナリーが生きていたのならルルーシユがいないのはおかしいと」

驚きはある。しかし、寧ろあの異母弟ならばと納得する面も多々あり、シュナイゼルに表面的な驚きは見られない。シャルルによつて記憶からV・V・の存在を消され、整合性を保つ為にギアスの根源がルルーシユであると意図せず置き換えられたコーネリアはシャルルの予想を超えた行動をとる。こうしてシュナイゼルの下へ向かうなどシャルルの予定にはない。

「ブラックリベリオンではぐれたと聞いてはいるけどね。裏はあると思っていたが」

「ルルーシユはゼロです。今も、そして昔も。ギアスという力を

使ってユフィを貶めた憎き男……っ！」

暗い目で見つめてくるコーネリアの内にある記憶がシャルルによって書き換えられていることなど気づくはずもない。

「詳しい話を聞かせてくれるかい？」

その後、先代のゼロを捕まえた功績でナイトオブブラウンズになったスザク、ルルーシユとの過去の繋がりがシユナイゼルの調査に明らかとなり、監視がつけられるようになるのに時間はかからなかった。

## STAGE 10 魔女の愛

ルルーシュは超合衆国の結成を前に眠る暇がないほどに忙しい。アツシユフォード学園でルルーシュの身代わりをやってくれている篠崎咲世子と入れ替わる余裕がないほどに。

「ルルーシュ、蜃気楼を借りてもいいか？」

条約の締結や会談に折衝など方々を飛び回る中で、ようやく一段落ついて纏まって空いた数時間の間に睡眠を取ろうとしていたルルーシュにC・C・Cが何でもないことのように訊ねた。

「いいが、何に使う気だ？」

「もう何日もシャーリーと会えていないんだ。久しぶりに顔を見たいし、ナイトオブシックスの件があっただろう。直接確認するとまではいかんだろうが遠目に様子を窺うだけでも何か分かるかもしれない」

シャーリーが斑鳩に来る場合、篠崎咲世子に影武者となってもらった時が多い。ここ数週間はルルーシュの影武者に専念してもらっている。シャーリーはエリアーから出られない。C・C・Cがシャーリーと話をしたのは、ギアス嚮団強襲作戦後の一時だけなので数週間も顔を合わせていないことになる。

「お前、自分が狙われている自覚があるのか？」

末端はともかくとして、シャルルの手の者や恐らくはスザク等もC・C・Cの身柄を探しているのは間違いない。勝手知ったるアツシユフォード学園とはいえ、敵がいる地に自分から向かうなどありえない。

「安全には細心の注意を払う。なんなら監視にジェレミアをつけてもいいぞ」

言われて影のように付き従うジェレミアを見れば小さく頷いていた。

「どうせ表には立てない私達には殆ど仕事が無いんだ。ルルーシュも懸念は少しでも減らしておきたいだろ」

「確かにそうだが……」

「いい加減、斑鳩に閉じ込められるのも飽きた。決戦の前に気分転換をさせろ」

「そっちが本音か!」

C・C・C・C に対する信頼は最初から低い、特に日常では。今は非常時ではないので悪い意味で裏切ってくれないので思わず大声を上げてしまう。

結局、C・C・C の我儘をルルーシュが跳ね除けた前例は無きに等しく、極度の疲労と寝不足も重なっている中では幾度かの問答の後に先に折れるのがどちらかなど火を見るよりも明らかだった。

「……………ジエレミア、しっかりと監督を頼む」

「イエス・ユア・マジエステイ」

物凄く心配そうな主君に内心を悟らせぬまま、ジエレミアはC・C・C の思惑に乗ってアツシユフォード学園に向かうのだった。



ブリタニアに占領支配されているエリア11に入ること本来ならば不可能であるが、ルルーシュが状況によって31もの通路を設定してあるのでC・C・C とジエレミアが乗った蜃気楼が通るのは拍子抜けするほどに簡単な事だった。

「懐かしいな」

アツシユフォード学園にあるルルーシュ達が生活していたゲストハウスは嘗てC・C・C も短い期間ながら暮らしていたことがある。

郷愁を感じるほど思い入れはないはずなのに、C・C・の口は勝手に動いていた。

ルルーシユの部屋は最近家主が留守にしている所為で若干埃っぽいものの、物の配置などはC・C・がいた頃から特に変わっていないのでより過去を思い出すのかもしれない。

「過去は何時だって美しくあり続ける。そうは思わないか」

ルルーシユのベッドに座って呟いたC・C・の言葉は本来ならば他に誰もいない部屋に無為に消えていくはずだった。

「同感だけど少しぐらいは私がいることに驚いてほしいものだわ」

「お前相手に一々驚いていたら身が持たんよ、マリアンヌ」

C・C・が声の聞こえた方に顔を向ければ、何時の間にか部屋の入り口にナナリーとそう年の変わらない少女がアツシユフオード学園の制服を着て立っている。

違う名前で呼ばれようとも、そちらが真名であるかのように笑みを浮かべたアーニャ・アールストレイムはニヤリと笑った。

「本当に久しぶりね、C・C・。急にCの世界を通して呼び出して来るものだからビックリしたわ」

アーニャの裡に潜む別人物の魂——ルルーシユとナナリーの母にして、皇帝シャルルの后妃であるマリアンヌ・ヴィ・ブリタニアは悪戯気に笑った。

「ちゃんと学園にいる時を狙ったんだ。手間を取らせていないのだから文句を言わないでほしいな」

「文句なんて言わないわよ。ふふ、でも直接会うなんて何年振りになるのかしら」

「私としてはCの世界を通して話をしてるから久しぶりという感じはしない」

「人間、会って話さないと実感は湧かないもの。だから、久しぶりで良いのよ。私が殺されてからになるから9年振りの再会になるのだから、もう少し喜んでくれても良いんじゃない？」

相変わらずの我が道を行くマリアンヌの物言いであるが、実際にそれを口に行っているのが自身よりも見た目で年若い少女となればC・

C.としては感覚に狂う。

「旧交を温めるにしても、そっちは良くてもこっちは見た目からして別人で戸惑うんだ。また他人の体を勝手に使っているのか？」

マリアンヌはアーニャであれば決して浮かべない質の笑みを浮かべ、アツシユフオード学園制服のスカートを摘まんで持ち上げる。

「仕方ないじゃない。魂だけの私はこの子の体を使わなければ、表立って動くことも出来ないんだから」

パツとスカートから手を離すマリアンヌは若干苛ただし気ながらもニンマリと笑う。

「私自身の体と比べたら否が応でも劣るけど、やっぱり若さがあると違う。女が永遠の美を望むのが良く分かったわ」

「……………言葉に棘を感じるのだが」

「あら、失礼。無意識の発露みたいなものだから気にしないで」

艶然と笑ってはいるが不老不死で十代の若さのまま永遠を生きているC. C. に対する嫉妬が僅かながらもあることを否定しないマリアンヌだった。

「それでルルーシユのことで話があるということだけど、私達の下へ戻る気になったのかしら？」

Cの世界を通して伝えられた再会の約束に、ルルーシユの横やりがあつたとしても一度はシャルルの手を振り払ったC. C. を警戒して一定距離を保つマリアンヌ。

「戻るなんて話はしていないだろう。ルルーシユのことがそんなに心配か」

「まさか、私がそんなに理想的な母親だと思っていたの？」

「思っていないが、ならどうしてここに来たんだ？」

ルルーシユのベッドに座ったままマリアンヌと決して目を合わせることがせず、C. C. は寧ろ無感動に訊ねる。

元よりつつけんどんな対応をすることの多いC. C. の珍しくない態度を気にしないマリアンヌは腰に手を当てた。

「私とあなたの仲だから聞きたいことは一つだけ……………あなたが今でも私達の味方なのかってことよ」

「なにが言いたい」

二人の間にあつたのは、離れていた時間に等しい溝。そして物理的に遠い二人のいる位置が心の距離を物語っていることも互いに承知していた。

「単刀直入に聞いわ。私達から離れたのは何故？」

ルルーシュが生まれる以前に彼女らは出会い、同じ目的を胸に抱いた同志だったはずなのに、マリアンヌの肉体が殺されたアリエス宮の悲劇を切っ掛けにC・C・は姿を消した。

「V・V・が私を殺したから？ そんなことは理由にならないはずよ。シャルルならあなたの願いを、死にたいという思いを叶えてくれたのに」

マリアンヌは思い違いをしている。C・C・は彼らの理想に共感したわけではなかった。結果的に死ぬるならなんでも良かったのだから。

「マリアンヌ、どうしてV・V・はお前を襲ったのだと思う？」

どれだけ親しくなろうとも、幾らマリアンヌに振り回されようとも、V・V・とコードについて語ろうとも、シャルルのルルーシュ達に対する不器用過ぎる愛情を向ける姿を見ようとも。

C・C・の決意は変わらなかった。

同志を、友を得ようとも死にたいという根源的な欲求を解消すること出来なかった。

「さあ？ 私がいるとシャルルが変わってしまうとか言ってたけど」

C・C・は外様だった。志が同じなはずの彼らのことを外から見ているからこそ分かることがあった。

「そうだな。アイツは馬鹿だよ」

マリアンヌは元より確固たる『自分』があつて変化などしないから理解出来ないことだろう。変化に取り残される怖さも、変わることが出来ない自分に対する絶望も。本人も自覚していなかったV・V・の秘めた想いも、きつと知りもしない。

「報いは受けたわ。一度は見逃してあげたのに、またルルーシュに刺客を向けたんだもの」



マリアンヌをその手にかけてV・V・はその死に関わっていないと恍けた。嘘の無い世界を共に誓ったシャルルに。

一度は許そう。肉体は死んだとはいえ、肉体の死を切っ掛けとして人の心を渡るギアスに目覚めたマリアンヌの精神はアーニヤの中で生きている。だが、二度目はなかった。

「だから、シャルルはV・V・のコードを奪った」

それは愛故の行動なのだろうかとC・C・は思った。

裏切ったと言うにはC・C・はV・V・の気持ちが理解できてしまったから。

「後はC・C・のコードさえあれば完全なラグナレクの接続が出来る。あなたは死ぬるのよ」

「……………お前は引き止めたりしないんだな」

「死んだ人とも一つに成れるんだもの。そんな必要はないわ」

その言葉が決定的だった。

「私はルルーシユを利用していた。全てを知っているながら私自身の死という果実を得るために、あいつが生き残ることだけを優先して……………」

ルルーシユの枕を取って抱きしめたC・C・は懺悔するように告白する。

マリアンヌの死の真相も、シャルル達が望んでいることも、自分達が日本に送られた理由も、全てを知っているながら話すことなく、ルルーシユが破滅へと進んでいくのを期待して待っていた。

「永遠の時を生きる魔女が後悔を？」

「懺悔だよ。魔女と嘯っていながら人間らしさを捨てきれなかったようだ」

今でも死を望む気持ちは変わらない。変わらないが、前よりも切実ではなくなった。

「今となっては枢木スザクに共感を覚えるよ。あいつは私に似ていた」

父・ゲンブを殺したスザクはある一点においてC・C・と良く似ていた。

「あの主君を裏切り続ける男にあなたが似てるって？ どこが？」

「死を望みながら死ねないところだ。だが、今は違う」

孤独だったルルーシユが少しずつ皆に歩み寄り、一丸となって戦っていく姿は理想を語り合っていたシャルル達と比べても美しかった。その輪の中に確かにC・C・もいるのだから。

「今の私は生きていたい。ルルーシユが見るものを私も共に見たいんだ」

「C・C・、あなたは……」

枕をベッドに置き、立ち上がったC・C・は信じられないと目を見開いているマリアンヌと視線を合わせる。

「……………やはり裏切るのね、V・Vと同じように。ルルーシユに付いて、私達を裏切るというの？」

同じ女であるからこそ本人もまだ明確に自覚していないC・C・が変化した理由に得心がいったマリアンヌは鼻を鳴らす。

「裏切る？」

ルルーシユに付くとはそういう意味であるが、ここに来てでもマリアンヌの思い違いにC・C・は苦笑を浮かべようとして失敗した。

「違うだろ、マリアンヌ。私はお前達の願いに賛同しただけで、計画を推進する同志ではあっても別に理解者ではなかった」

裏切る以前の問題だ。嘘の無い世界という結果に至る過程で生まれる死という副産物が目的であるC・C・は目的を同じくはしていない。

契約によって互いを利用し合う。離れた場所から見ればそんな関係だった。

「ルルーシユの目的であった復讐は、ナナリーと……………殺されたマリアンヌ、お前の為だったんだよ。その死の真相を暴き、報いを受けさせる為に」

ルルーシユにとって、マリアンヌは良き母親だった。無為に殺され、シャルルが碌な捜査もしなかったことから全てが始まった。

「私を殺したV・V。はもう死んでる。ナナリーのことも、いいえ今までの全てを知ればルルーシユも私達に協力してくれるはずよ」

親である自分達に逆らうはずがないとマリアンヌは疑いもしない。

マリアンヌには分からないだろう。ルルーシュがどれだけの思いで行動に移し、そして失って来たかを。

「知れば傷つくだけだ」

「必要があつてのことよ」

V・V がいる限りマリアンヌは決して表に出ることは出来ない。一度殺した者が生きていると知れば、シャルルが知る前に今度こそ存在すらも抹消しようとして来るだろう。それは偽りの目撃者にされたナナリーも同じこと。

「必要だからと割り切れるものではない。皆が自分と同じと思わないことだ、マリアンヌ」

「同じと思つたことはないわ。煩わしいと感じるだけよ」

「死んでも変わらない女だな」

「私という女はそう簡単に変わるモノではないという良い証明だわ」

マリアンヌは偽らない、己を、他者を、身内にも。

見せる全ては事実であり、告げる言葉は紛うことなき真実なのだから。ただ、見せも言ひもしないことが幾つかあるというだけ。

「偽りの目撃者に設定されたナナリーは真実を隠すための駒でもあつたけれど同時に不安要素でもあつた。ナナリーを情報弱者にして真実に辿り着く可能性を低くしてV・V から狙われるのを防ぐ為にシャルルのギアスで記憶を変えて光を奪うしかなかった」

V・V の計画に巻き込まれて、ナナリーは足の自由を奪われた。ナナリーの安全の為に必要だつたから、仕方なかった。だけど、本当にそうなのか。

「シャルルが二人を日本に送つたのも、私の暗殺事件に深く関わり過ぎたナナリーをV・V から護る為よ」

敵地であつた日本に送られれば、二人がどのような扱いを受けるのか分からなかったはずがないのに。

「じゃあ、どうして日本に侵攻した？ 護る為と言いながら危険に晒したのは何故だ？」

C・Cは理由を知っている。いや、マリアンヌを良く知るC・Cは理解していた。

「計画を優先したお前達は、死んだ人とも一つになれると知っていたからルルーシユやナナリーが生きていようがいまいが、さして関係なかったんだ」

「それは違うわっ！ 私は」

「お前自身が言ったじゃないか、『死んだ人とも一つになれる』と。現にお前達はルルーシユ達を助けようともしなかった」

C・Cの望みが死であり、友人である彼女の自死を止めない理由をそう語っていたのを引用するとマリアンヌも抗弁出来ずに沈黙する。

「それどころか、自力で生き延びたルルーシユを利用しようとする提案して来たな。私の願いを叶えられる高い資質を持った者がいると」

当時、C・Cは契約して読心のギアスを得たマオと共に暮らしていたが精神的に脆弱過ぎて達成人に成れる可能性はほぼ無いに等しく諦めかけていた。

「ラグナレクの接続にはV・Vのコードだけでは足りない。だが、私はお前達と共に歩む気は無かった。それでも達成人に成れる可能性があるならと提案に乗った」

ブリタニア皇族の中でも随一のギアス資質を持つルルーシユのことを教え、契約していたマオでは己が目的を果たせないと諦めたC・Cは口車に乗った。

ルルーシユがC・Cの願いを果たせたらそれで良し。その場合はルルーシユを計画に参加させる。願いを果たせなければ、もう一度シャルル達に協力する。そういう取引をした。

二度捕まったのにルルーシユがアッシュフォード学園に戻されたのはその為だ」

ブリタニアに捕まったルルーシユがエリアーに返されたのも、その取引があったから。

スザクやV・Vに怪しまれないように、機密情報局に監視させていたが嚴重である必要も無かった。マリアンヌ達にとっては、ルルー

シユをC・C・の下に帰せれば良かったのだから。

「こんなことをルルーシユが知れば壊れる」

愛する母と憎むべき父は最初から結託し、自分を利用して目的を達成しようとしていた。

シャルルとマリアンヌと、そしてC・C・の掌で踊って数多の命を奪い、人生を狂わせてきた呵責はルルーシユを壊しかねない。

「その前に私がお前を殺そう」

真実の重みがルルーシユを押し潰すのならば、そんな真実を葬ることをC・C・は決めたのだ。

「出来るというのあなたに？」

アーニヤの肉体を殺されればマリアンヌは他人の体に渡る。しかし、この場にいるのはマリアンヌとC・C・だけ。コードの持ち主であるC・C・にギアス能力は効かない。

しかし、マリアンヌは焦りも慌てもしない。

マリアンヌの体に比べれば格段に劣るとはいえ、アーニヤもナイトオブラウンズ。格闘技を修めているとはいえ、身体能力は同年代の少女と大差ないC・C・に後れを取るはずがない。だからこそ、C・C・の意味があるとも思えなかった話に付き合ったのだ。

「知っているか、ギアスは消せるんだ」

「オレンジ君の力のこと？ 彼のギアスキャンセラーのことは知悉しているわよ。その効果範囲もね」

V・V・はギアス能力者に対する切り札とでも呼ぶべきギアスキャンセラーの力をシャルルにもすっかりと報告していたようで、室外からは効果範囲に入らない立ち位置を維持している。

「今の私には厄介な力ではあるけど効果範囲はそれほど広くない。気配は掴んでいるから近づいて来たら逃げるわよ」

「ナイトオブワンにも成ろうと思えば成れた女にしては弱気なことを言うじゃないか」

現ナイトオブワンであるビスマルクにチラリと聞いた話で挑発するように口にする、マリアンヌは分かっているかないなとばかりに肩を竦める。

「流石に消されるのはね。死ぬような思いは一度だけで十分」

「何度も死んで来た私にそれを言うか」

「死んでも生き返れる不老不死と比べること自体が間違いじゃない」

「戦闘力がカンストしている奴にだけは言われたくない」

「この体だと生前には全然遠く及ばないのよね。素質は悪くないけれど、やっぱり自分の体の方がいいわ」

「ナイトオブブラウズになっておいて良く言う……」

良くも悪くも遠慮のない言い合いが出来る手合いは中々いない。最近ではシャーリーと今はいないカレンも似たようなやり取りは出来るが、二人はマリアンヌほどに弁は立たないのでC・C・が上に立つことの多い。対等な立場で話が出来ると同性というのは気が楽ではある。

たとえお互いの立ち位置を変えながら必殺を狙っている間柄であつたとしても。

「戦えば私が勝つ。でも、不老不死のC・C・を殺したところで意味はない。こうして張り合つても意味はないわ。一体、何が目的？」

現在はナイトメアフレームでの強さが第一としても、無手でも無類の強さがなければナイトオブブラウズには成れない。確かにC・C・も徒手空拳ではかなりの実力を持つが、武器を隠し持っているとしても戦えば確実にマリアンヌが勝つ。

C・C・は不死。戦つて殺したとしても蘇るのでは意味がなく、不毛なやり取りに嫌気が差したマリアンヌが問いかける。

「お前を殺す準備をしていると言つたら？」

「悲しいことを言うのね」

「堪えていなくせに」

「まあ、ね。でも、悲しいことは確かよ。知っているでしょ、私は「嘘をつかない、か」

「私は自身を偽ることが大嫌いだから」

真実を口にせず表情や態度で相手に意図的に誤解を抱かせることはあつても、マリアンヌは決して偽りや嘘を口にしない。たとえば偽りを口にしたとしても本人がそれを自覚していない場合に限る。

『死んだ人とも一つに成れる』……ええ、ルルーシユ達を助けようとしなかったのはそういう気持ちがあったのでしょね。結果的に見捨てたとも言える形になったのは事実よ」

自覚をすれば直ぐに過ちを認めることも出来る。

偽りをせず、間違いを認め、騎士としてはこれ以上ない強さを持つマリアンヌを慕う者が多い所以でもある。

「でも、違う選択を出来たとしてもV・V・Vがいる以上は、あの子達を全面的に助けることはきつと出来ない」

「少しの助けでも大分違っただろう。どうして最初からそれが出来ないんだ」

どのような過程を経ようともルルーシユも同じ選択をしただろうと予測出来てしまうから、やはり親子なのだと感じる。

「私は理想的な母親には成れないし、成るつもりもない」

少し自嘲的に笑うマリアンヌ。

確固たる『自分』を構築してしまっているマリアンヌは己を変えられない。変えようとすることも出来ないと自分を見切っている。

「シャルルが権謀術数渦巻く宮殿嘘つき達の集まりの中で徐々に倦み疲れて行く様を、ずっと見て来たわ。C・C・Cがいなくなつて、V・V・Vも絶対的な味方じゃない。私もこの子の体にいるから好きな時に会えるわけじゃない。ルルーシユ達も守る為とはいえ、遠ざけた。唯一皇帝といつてもその実は孤独なのよ」

何の事情も知らずに捨てられた形だったルルーシユからすれば、きつとあまりにも身勝手な言い分に殺意すら覚えるだろう。

「絶対的な信頼を寄せていたV・V・Vですら嘘をつく。やがてシャルルが世界に失望してしまう前に、一刻も早く計画を完遂する必要があった。たとえルルーシユ達を犠牲にしたとしても」

大切なたつた一人の為に何を犠牲にしたとしても、己が目的を完遂させる。その精神性はやはりルルーシユに良く似ている。というよりもルルーシユが良く似ているのだろう。

「ルルーシユがお前達の世界を望まないとしてもか」

「私が一度決めたことを曲げると思つて？」

「思わない」

実にマリアンヌらしい反応にC・C・は苦笑を浮かべる。

『自分』を変えられないマリアンヌはそこで表情を一変させ、言われなくても分からないほどに微かに膝を曲げた。

「話はここで終わり。さよなら、C・C。――」

一足で窓を破って割れる位置にいたマリアンヌが動こうとして、まるで時間が静止したかのようにピタリと止まった。

「ああ、ここで終わりのようだ」

ここら一帯の生物がその動きを止めている中で動いている二人の内の一入であるC・C・は悲し気に呟いた。

徐々に走っている足音が近づいてきて、ボタンと大きな音を立ててドアが開かれた。

「頼む、ジェレミア」

走って現れたジェレミアはアーニヤの体にいるマリアンヌを見据える。

「申し訳ありません、マリアンヌ様。私は……」

唇を噛み切らんばかりに表情を歪めながら足を進め、嘗て主君と認めたその人を発動し続けているギアスキャンセラーの効果範囲内に収める。

「なっ――」

効果範囲内に入ったことでギアスが解除されてCの世界へと還るその一瞬間、超反応でジェレミアを認識したマリアンヌも刹那では何も出来ない。

肉体を殺され、その精神もまたV・V・が深く関わった力が殺す。

「さようなら、お前のこと好きだったよ」

末期の言葉すら残せずCの世界へと還ったマリアンヌが体から消え去り、力を失ったアーニヤの体を抱き留めたC・C・は、シャルル達によって人生を捻じ曲げられたもう一人の被害者を哀れみながらルルーシュのベッドへと寝かせる。

「マリアンヌ様は逝かれたか」

C・C・が全てを話して協力してもらったジェレミアは感情の失



せた顔で眠るアーニヤの姿を見下ろす。

「ああ、Cの世界に還った……………すまん、お前には酷なことをさせた」

主君と定めたマリアンヌを精神とはいえ直接手にかけてさせたことを謝るC・C。

「……………マリアンヌ様は八年前に亡くなっておられる」

ゲストハウスの外でC・Cが隠していた盗聴器を通して二人の会話を全てを聞いたジェレミアは言葉少なに答えた。

最初はジェレミアも真実を認めなかったが、語られた真実の重みに目を閉じて息と共に吐き出した。

「礼ならばロロに言ってるやるといい。本来の任務を置いてまで協力してくれたのだ。あやつがいなければ成し遂げることは出来なかった」

ジェレミアがそう言った後、顔色が悪いロロが随分と遅れて部屋に入ってくる。

「終わっ、たんですか？」

「ああ」

C・Cが頷くとロロは緊張から解放されたように息を吐く。

「これで兄さんが苦しむことはないですね」

C・Cはルルーシュに残酷な真実を知らせぬ為にジェレミアに協力を求めた。しかし、マリアンヌの消去はC・Cとジェレミアだけでは難しい。それでロロの時間停止のギアスに目をつけた。

ジェレミアと違ってマリアンヌに思い入れは無いが、ルルーシュの目的を知るだけでもしも兄を害する存在であるのならばロロは決して躊躇わない。

シャーリーを通してアーニヤが学園にいる日を予め調べ、ルルーシュの予定を調整してジェレミアと共にアツシユフォード学園にやってきた。そこで事前に呼び出していたロロと合流し、事情を説明して二人にはC・Cが仕込んだ盗聴器で判断を下してもらおうという計画。

数百メートルの効果範囲を持つロロの時間停止とジェレミアのギアスキャンセラーの合わせ技は、ギアスが効かないC・Cのような

例外を除けばマリアンヌでも回避することは出来ないとの見立ては正しかった。

「C. C.こそ、良かったのか？ 友だったのであろう、マリアンヌ様は」

幻想は幻想のまま、知らないでいることの方が幸せなこともある。今の主君であるルルーシュを想うことで気持ちを入れ替えたジレミアが顔を上げて問いかける。

「自分でも言ったじゃないか。マリアンヌはもう死んでいたんだ」

真実は闇に葬り去られる、C. C.の罪もまた。

ルルーシュと共にいる限り、罪の意識が消えることはないかもしれない。

「それでも私は選んだ。シャルルやマリアンヌではなく、ルルーシュを」

どちらかを選ぶ必要があり、C. C.はルルーシュを選んだ。その結果の痛みは受け入れるしかない。

「このことは決して誰にも明かさぬよう頼む。ルルーシュにも、絶対に」

「無論だ」

「分かっている」

この場にいる三人だけの秘密にすることにジレミアとロロも異存は無いのでしつかりと頷く。

そうしている間にルルーシュのベッドで寝かされていたアーニヤが小さな呻き声を上げた。恐らくそう時を置かない間に目覚めるだろう。

「この人はどうするの？ 今なら簡単に殺せるけど」

「確かに排除しておけばルルーシュ様の障害を一つ取り除ける。だが、彼女はギアスの被害者。私としては説得して仲間に取り込むことも可能であると思う」

物騒なことを考えているロロだが、この場でナイトオブブラウンズの一角を苦勞することなく排除できたならばルルーシュの為になると考えている。

ギアスに翻弄されて来たジェレミアとしては、ロロの論理を正しいと認めつつもアーニヤ排除の論調には同意し難い。

「……………殺す必要はないだろう。少し説明するだけで皇帝への忠誠が揺れるはずだ」

決して慈悲の心に目覚めたわけではない。仲間を引き込めるならばそれはそれで良し。最悪でも戦場で迷えばどんな強者でも弱くなり、死ぬ可能性が高くなる。ナイトオブブラウンズが死ねば士気に大きく関わるだろうから影響は計り知れない。

「魔女としての本領発揮と行こうか」

真実という毒で人を誑かす魔女の顔でC・C・は笑った。

## STAGE 1 小さな変化

ブリタニア軍浮遊航空艦アヴァロンのナイトメア格納庫で、ナイトメア開発チームであるキャメロットの主任であるロイド・アスプルンドと副主任のセシル・クルーミーの二人が一体のナイトメアを見上げていた。

「いやあ、トンデモナイものになっちゃったねえ」

「ロイドさんが限界まで性能を上げようとするからでしょう」

「アマネセールやサグラモールの実働データに触発されちゃって。セシル君だってエナジーウィング付いたりノリノリだったじゃない」

赤いナイトメアを見上げ、魔改造の限りを尽くしてしまった二人は互いに責任を押し付け合う。

「ははは……」

ノリに任せてやってしまった自覚があるだけにセシルの口から噎れた笑い声が漏れる。

どっちもどっちであることは互いに自覚の上。

話題を穿り返しても良いことは何もないと判断し、ロイドは赤い機体の隣に立つ白い機体に視線を移す。

「それでミサイルキャノンと機体バランスのシミュレーションは終わった？」

「ええ、まあ取りあえず一通りは」

ノリノリで魔改造を加えた赤い機体の時とは違い、自分達が設計・開発を行った我が子のような機体の話になるとトーンダウンするセシルにロイドは苦笑する。

「特殊武装だけに、フロートユニットの調整は更に行わなければなりませんけど本当に必要なんですか、ランスロットにこんなモノが？」

追加された特殊武装は、ロイドやセシルが求める白い機体ランスロットの設計思想からは最も縁遠いはずの物。

当初の想定ではフロートユニットすら考えられていなかったのも、エアキャヴァルリーやコンクエスターに強化改修して空戦機動力は

上がったも地上戦闘に限れば寧ろ機動性はダウンしている。そんな中で特殊武装を積めば更に落ちることだろう。

技術者としての誇りプライドを持つセシルとしては、上司の命令でもなければ搭載することを断固拒否する代物であったからだ。

「シユナイゼル殿下は僕達には分からないことを見通している方だから、スザク君にフレイヤを預けるのにも何か意味があるんじゃない？」

ロイドもセシルも世間では天才と称される十分な頭脳の持ち主であり、実績も上げている。それでもシユナイゼルが何を考えているかは分野も違うこともあって理解できないことが多い。

「フレイヤ………実験映像とデータは見ましたけど、使い方を一歩間違えれば勝利ではなく破壊と殺戮しか生まない兵器です。抑止力として、敵に対するデモンストレーション的に使用するのであれば、まだ理解も出来ますけど」

「戦術兵器に戦略兵器を搭載する意味や、一個人でしかないパイロットに託す是非を論じたところで意味のある相手じゃないよ」

紳士然として上司としては理想的な存在ではあるが、あまりにも完璧で語る言葉は論理的過ぎて隙というモノが存在しないシユナイゼル帝国宰相を思い出す。

悪く言えば人間味が感じられず、人を個人ではなく数で見ているとすら感じてしまう。

「文句を言うだけ無駄だど？」

「そうそう、シユナイゼル殿下上司の命令には逆らわない方が無難だよ。どうせ拒否しても第二、第三の手は準備されてるだろうし、僕らは僻地に左遷されるだけ。ほら、こっちが損するだけで何の意味もない」

論理で上回ることが出来ず、より論理的な理屈に屈するしかないのだと語るロイドに尚もセシルは諦めずに食い下がる。

「フレイヤを持ち出すよりも、この紅蓮タイプエイトの調整を終わらせてスザク君を乗せた方が勝率は上がると上申すれば」

論理的に思考する人間は、他に利がある方策があると知ればそちらに方針を変えるかもしれないと一縷の希望を託す。

「乗りこなせば、ただの一機で戦況を変えることが出来るのは否定しないよ。でも、デヴァイサーがね」

「スザク君がいるじゃないですか」

「じゃあ、ランスロットには誰が乗るのさ」

元々、ランスロットはロイドの嗜好からハイスペックのみを追求して開発された機体で操縦は極めて困難となっており、適合率の高い人間が搭乗者として必要となる。適合率94%という高い数値を持ち、かつ所属が緩く特派がスカウト可能だったスザクがデヴァイサーとなつた経緯がある。

結果を出して来たことで、高い適性値を持つ者を余所から引っ張つて来ることは出来るだろうが、決戦が間近と呼ばれている状況でそんな悠長な手間が認められるはずがない。

「こ、コーネリア様とか!」

「あの方の腕を信用していないわけじゃないけど、僕らが作った機体をそう簡単に扱えると思うかい?」

「……………思いません」

最近、行方不明だったコーネリアがエリアーに戻つて来ていてエース級の腕前を知っているが、エアキャヴァルリーを経てコンクエスターとなつて強化されているスザク専用にチューンされている今のランスロットを乗りこなせるとはセシルにもとても思えなかった。

「こうなつたら紅蓮タイプエイトの方にスザク君以外を乗せるしか……………」

「誰を? このクラスになると乗れるとしたらナイトオブブラウンズぐらいだろうけど、みんな自分の機体があるしね」

パイロットが足りないという、結局は同じ結論となる。

「可能性で語るなら捕虜にした紅蓮のパイロットか、机上のデータ上ならスザク君と同レベルのマリーベル皇女殿下なら扱えるだろうけど」

元々の紅蓮のパイロットである紅月カレンであるならば使いこなせる可能性が高い。どちらも今現在のデータではないが、スザクと同じく数値上ではナイトメアの操縦技術でオールSを記録したマリー

ベル・メル・ブリタニア皇女ならば或いはという可能性があった。

ただ、捕虜が味方になるはずもなく、後者にも問題がある。

「どっちも現実的じゃないですね。グリンダ騎士団も、どうせ来るならマリーベル殿下も来てくれれば全て解決したのに」

「腹心のグリンダ騎士団がエニアグラム卿の指揮下に入るなんて力技がされてるんだから、あつちはあつちで色々ゴタゴタしてるんじゃないの？」

エリア24の総督であるマリーベル・メル・ブリタニアの軍拡傾向に第二のユーロ・ブリタニアになる可能性がある、ブリタニア本国でも危機感を募らせていた。ナイトオブナインであるノネット・エニアグラムが大グリンダ騎士団の監視のためにエリア24へと赴いていたのは有名な話であった。

皇帝不在の中では事実上の最高権力者である宰相であるシユナイゼルの指示とはいえ、総督直属の騎士であるグリンダ騎士団がナイトオブラウンズに指揮下に入ってエリアを離れるなど越権行為も甚だしいが政治的なモノは見る者が見れば直ぐに分かる。

「大体、僕らにはアルビオンも完成させなきゃいけないんだから、紅蓮タイプエイトこいつちまで完成させるのは多分無理だよ」

ヴァルキリーもコンクエスターもオリジナルのランスロットを強化改造したに過ぎない。現在の最新技術を搭載しても100%の力を発揮することは難しく、よりマッチングする後継機アルビオンが開発されており、同時進行で紅蓮タイプエイトまで完成させるのは如何にロイド達であっても難しい物があった。

「二人で何の話をしてるんですか？」

このままではお蔵入りの可能性も出て来た紅蓮タイプエイトを見上げていた二人に、格納庫に現れた枢木スザクが声をかけた。

「ランスロットにフレイヤを載せたり、紅蓮のこととか色々ね。スザク君には紅蓮を使ってもらうなんて話もしてたんだ」

「えっ、僕が紅蓮に？」

ロイドの思いがけない話に敵として戦い続けて来た紅蓮は、鹵獲したとはいえやはりカレンの機体という認識が強かったスザクは予想

外の提案に思わず聞き返していた。

「紅蓮はカレンの機体じゃ」

「今は鹵獲してうちのものだよ」

ロイドに楽し気にそう言われても、あれだけ戦った相手を即座に味方と判断できるほどスザクは器用な人間ではない。

表情の選択に困っているスザクに、セシルも自分でも言い訳がましいと思いつながら口を開く。

「ごめんなさいね。私もついつい乗っちゃって、ロイドさんと一緒に気付いたら趣味の世界に……」

「趣味？」

スザクには良く分からないことを言うセシルの言葉に紅蓮を見上げれば、以前とはかなり意匠が違う。

「要は改造しまくったことですか」

自分なりに解釈したスザクにロイドが苦笑する。

「ラクシャータのマシンだから弄り易くて。そしたら誰も乗れない物になっちゃったんだ」

「ロイドさんらしいって言えばらしいですけど」

ロイドが言うラクシャータというのが誰のことかは分からないが、ロイドが作る機体に他の人が乗れないことは初期のランスロットの頃からの付き合いであるので珍しいことではないと知っていたスザクも驚くことはなかった。

「あの……ロイド先生、ランスロットの件ですが」

それでも自分が紅蓮に乗るはずだったのだと聞かされて機体を見上げていたスザクの耳に、アッシュフォード学園から大分様子が変わったニーナ・アインシュタインが現れてロイドに話しかけていた。

「フレイヤのことだよ。シュナイゼル殿下から聞いてるよ」

当のロイドは、常の人を食ったような態度の彼にしては珍しく静かな声で訊ねた。

「それだけの理由はありません。一次制圧圏内に含まれた物質はフレイヤのコラプス効果によって完全に消滅しますから」

「あなたはそんな物をスザク君に撃たせるつもり？ よりにもよって



エリアー1で」

騎士として数多の戦場を駆け巡っていたスザクですら聞いていてもゾツとする内容だった。もしもセシルが言わなければスザクがニーナを問い質していたことだろう。

「スザク、まだイレヴンと同族意識があるの？ 私は あなたにフレイヤを委ねたい」

「僕に、背負えと？」

セシルの言葉をそう捉えたニーナが、信頼というにはあまりにも歪んだ目の奥の光を輝かせてスザクを見る。

「ユーフェミア様の騎士でしょ、あなたは」

イレヴンを虐殺しろと命じたユーフェミア、そのユーフェミアを殺したゼロは仇である。

ニーナはゼロを日本人だと思っているのだろうか、騎士ならば主の命令を遂行しろ、騎士ならば仇を取れと言っているのだろうか。どちらの意味を言っているのだろうかと考えたスザクは、しかしどちらであつても最終的な結果は変わらない。

「あはあ、ニーナくん」

即座に答えずにニーナから目を逸らしたスザクの前でクルリとロイドが一回転する。

「この矛盾はさ、スザクくんだけじゃない、君を殺すよお」

楽し気な言葉とは裏腹にどこまでも冷めた眼差しで告げたロイドにニーナは僅かに怯んだ。

空気が重くなつたと感じる中で、誰かの携帯端末が着信を告げるようにコール音を鳴らす。

「すみません、僕です」

その場にいる面々が一齐に自身の携帯端末を確認するよりも早く、スザクは振動する自身の端末に気付いて言った。

携帯端末を取り出して小さな画面に表示されている相手の名を見たスザクは傍目に分かるほどはつきりと表情を変えた。

「出ないのかい？」

呼び出し音は続いているのに、何故か出ようとしないうスザクにロイ

ドが声をかけた。

「出ますよ……………少し離れます」

背を向けて離れたところで受信ボタンを押して通話に出たスザクの声はロイド達には聞こえない。

通話をしながら格納庫から出て行ったスザクの背が見えなくなつたところで、ようやくついたセシルの一息の音が妙に響いた。

「随分と深刻そうな感じでしたね。誰からだっただんでしよう」

「さあ？ 色々と複雑だからね、彼も」

戦場にいる時のような雰囲気のスザクを心配するセシルに対して、極論すれば自分の作品を動かせればそれでいいロイドは気にしていない。

スザクと特別親交が深いわけでもなく、研究者でしかないニーナには何も言えるはずもない。

「あれ？ スザクがここにいて聞いてただけじゃないのか？」

何か居た堪れなくなつてその場を去ろうとしたニーナの背後に若い男が立っていた。

「ヴァインベルグ卿、スザク君ならつい先程出ていきましたが」

驚きも合わさつて慌てて飛び退いたニーナを横目に、ナイトオブスリーであるジノ・ヴァインベルグに身を正して答えるセシル。こういうことは傍若無人なロイドには任せられないのでセシルが対応するしかないのだ。

「行き違いになつたかな」

「お急ぎであれば呼びますが」

「いや、公務じゃなくて個人的なことだから、そこまでしてもらわなくてもいい。しかし、どうするかな」

ニーナがそそくさと退散していくのを尻目に、彼女と殆ど繋がりもないジノは気にすることもなく困つたように後頭部を搔く。

「差し支えなければ」用件をお聞きしてもよろしいですか？ 私達にも何かできるかもしれません」

ロイドがあからさまに嫌そうな顔をしているが、セシルとしてはスザクと仲良くしてくれるジノが困っているなら手助けしたい思いで

申しでる。

「うーん……」

身内の恥を晒すような用件だったので、ジノも言おうか言うまいか迷う。が、一人では解決できない問題を前にして困っていたのは確かなので話すことにした。

「ナイトオブシックスが、アーニヤが学校どころか公務にも出ないで部屋に閉じこもったままなんです。どうしたものかと相談に」



恐らく、予想される決戦を前にシャーリー・フェネットが黒の騎士団の本部である蓬莱島に逗留している斑鳩に来れるのはこれで最後となるだろう。

スザクに連絡するというルルーシュに気を使って部屋を出たが、知り合いの少ない艦内にシャーリーが行ける場所はなかった。

ナイトギガフォートレスの調整に行っているジェレミア・ゴットバルト、シャーリーが来る前から食堂に行つたまま戻って来ないC.C.、エリアーで機密任務に向かったままのロロ。知り合いは全て用がある様子。

斑鳩に来て、ナイトメア格納庫からルルーシュの部屋までしか行き来をしないシャーリーに行き場はなかった。

当てもなく廊下を歩いていると、向こう側から黒の騎士団には珍しいブリタニア人がやってきた。

「君は、ゼロの……」

食事が載ったお盆を持ったデートハルト・リートはシャーリーを見て目を細めた。

「こんにちは、お食事ですか？」

「いや、これは」

普段団員と接する機会もないのだから積極的に交流しようとしてシャーリーから話しかけると、マズいところを見られたかのように一瞬だけ眉を顰めたデートハルトだったが、彼女の存在は時期合いから見ても丁度良いと判断した。

「捕虜の食事だ。何時もなら部下がしているのだが手が空いてなくてね。良ければ君も一緒に来てもらっても構わないかな」

「え、私もですか？」

「捕虜は女性でね。男の私だけでは無用な疑いを招いてしまう。手伝ってくれると有難い」

「……………分かりました。一緒に一緒にさせてもらいます」

デートハルトが言うことは尤もで、丁度シャーリーも手持ち無沙汰なこともあって了承する。

黒の騎士団に名目上は入っていると云っても何もしていないに等しいから、付き添いだとしても仕事が与えてもらうのは嬉しかったのだ。

「助かる」

二人で連れ立って歩きながら、シャーリーはふとルルーシュから捕虜がいるなどと聞いたことがないことを思い出した。

「捕虜っていたんですね。私、初めて聞きました」

「ゼロにも伝えず、私のところで止めている情報だから君が知らぬのも無理はないだろう」

言っていることを意味をシャーリーが理解したところで、デートハルトは「君が考えているようなことではない」と言った。

「この捕虜には複雑な事情がある。ゼロには対ブリタニアに専念してもらおう為に組織の中の問題はこちらで対処しようといっていたが、超合衆国成立を目前にしてゼロにも報告しようとしていたところだ」

「複雑な事情、ですか？」

「身内の恥を晒すことになる。詳細はここでは話せん」

つまりはシャーリーも自分は聞かない方が良いのかもしれないと考えた。

結局は黒の騎士団に名は置いていても、ルルーシュ個人に付いているだけで団員と言いつても難しい自分が口を出すべきではないと判断して聞くことはしなかった。

「……だ」

デートハルトに付いて捕虜がいるという部屋に着くも、空室に拘束しているようでネームプレートには誰の名前も書かれていない。

お盆を預かり、ナンバーキーを押してカードキーを通してドアを開けたデートハルトに次いで室内に入ると、電気が点いていない所為で薄暗い。

「え？」

捕虜はベッドに座っており、入室に気付いて入り口に顔を向けた。その顔にシャーリーは見覚えがある。当たり前だ、ついこの間まで毎日学園で顔を合わせていたのだから。

「シャーリー!？」

「ヴィレッタ先生!？」

両者とも最も出会うはずの無い場所で再会したことで驚きが口について出る。

「知り合いかね？」

「学校の先生………だったはずの人です」

「ほう」

明らかに既知と分かる様子にデートハルトは訊ね、シャーリーを横目に見る。

「どうしてヴィレッタ先生が」

ヴィレッタとしてはそのことには触れてほしくない。

「それは私の台詞だ。まさかお前が黒の騎士団だったとは………いや、ルルーシュの為に私を撃つたぐらいだ。当然のことか」

ブラックリベリオン前、ゼロの正体に辿り着きかけていたヴィレッツ

夕をシャーリーは撃った。その後、扇要に拾われて紆余曲折有り、今の状態に繋がっている我が身を振り返って泣きたくなかった。

ルルーシュがゼロに戻ったのならば、シャーリーが黒の騎士団にいてもおかしくないと言っばちになる。

「そのことはごめんなさい！」

幾らルルーシュを守る為とはいえ、人を撃ったことは悪いことである。罪を償う気はあるし、謝らなければならなかった。

「なら、私を助けて」

「彼女にはそんな権限はない」

ルルーシュはゼロのことを知っていながらも曖昧にも出さず、デイトハルトは冷徹に告げる。

「どうやら二人には何やら因縁があつたようだ。シャーリーと言ったか、君には悪いことをした」

「そんな私は」

「捕虜に負い目があるなら接するのは危険だ。この件はゼロにも報告させてもらう。後のことは私がやるから君は戻りたまえ」

有無を言わさぬ口調でお盆を取られて部屋から追い出されそうになる。

「シャーリー、私を撃つたことはもう気にしないで良い。学園で辛く当たってしまったてすまなかつた」

デイトハルトがドアを閉める刹那、ヴィレッタは全てを諦めた顔で言った。

「ヴィレッタ先生！」

ドアを叩いても内側からももう開くことはない。

それでも諦め切れずに何度も叩いていると、廊下の向こうからラクシャータ・チャウラーの下で行っていたナイトギガフォートレスの調整を終えたジェレミアがやってきてシャーリーに気付いた。

「こんなところで何をやっている、シャーリー」

「ジェレミアさん!? ここにヴィレッタ先生が！」

「なに？」

嘗て純血派として轡を並べていたヴィレッタのことはジェレミア

も無視できない。

「場所を変えよう。詳しく話を聞きたい」

が、黒の騎士団においては人体実験によってブリタニアに恨みを抱いていると伝えられても、エリアーで純血派として様々な行動を取っていたジエレミアは潜在的な敵扱いされているので、ルルーシユの為にも万が一にも問題は起こせない。

「でもー」

「私達が問題を起こせばルルーシユ様に迷惑がかかるのだぞ。自重したまえ」

大人としてシャーリーを諫めれば、彼女も一時の激情で失っていた冷静さを取り戻す。

場所を変えて人通りの少ない通路で事情を聞いたジエレミアは澁面を浮かべる。

「ルルーシユ様には報告するが、恐らく状況は何も変えられないだろう」

「なんで！」

「ディートハルトのしていることは、ルルーシユ様に報告していないことを除けば真つ当な対応だからだ。もしも捕虜がヴィレッタでなく、見知らぬ誰かであつたら君は同じ思いを抱くか？」

シャーリーがここまでヴィレッタを気にするのは、知り合いであることと嘗て彼女を撃った負い目があるから。ジエレミアの言うことは至極真つ当だった。

「彼女には私も負い目がある。悪いようにはしないと騎士の誇りに賭けて誓う。だから、君も軽拳妄動は慎むように」

「はい、分かりました……」

ジエレミアはシャーリーよりも多くの経験を積んだ大人で、騎士の誇りまで賭けてくれたのだからこれ以上何も言えるはずもない。

シャーリーは、あまりにも無力だった。

## STAGE 12 決議の裏側で

アーニャ・アールストレイムにはアツシユフォード学園のクラブハウスにあるルルーシユの部屋を訪れた記憶はない。だからこそ、目覚めた時に見知らぬ場所で会ったことのない人物がいたら警戒もする。

しかし、まさかその人物に長年の悩みが解消されるとは予想だにしていなかった。

『記憶と記録の齟齬はギアスが原因だ』

ギアスという単語に聞き覚えはない、少なくともアーニャの記憶の中では。

『その原因は取り除かれた。その様子だと体に乗っ取られている間の記憶はあるようだな』

ない、はずなのに知っていた。

記憶を振り返ってみれば、自分では無い自分が知っていた。

「この記憶は何?」

分かっている。そのことを話している自分がなんと呼ばれているか、分かっているながら知らない振りをしていった。

「この記憶は誰の?」

分かっているながら分からない振りをする。

「マリアンヌ様、皇帝陛下……」

思い出そうとすれば引き出せる自分では無い誰かが話している記憶が蘇り、今までに信じて来た物が崩れていく。

「私は何を信じればいい?」

記録と違うところを思い出そうとすれば記憶も想起して、齟齬は埋まった。しかし、今度はその記憶が自分の中にいたマリアンヌが代わりに行動していた所為で、そのことをシャルルも承知していたとなればアーニャのブリタニアへの思いも変わってくる。

「ルルーシユ、様がゼロ。二人もそれを知っていて利用している」

たった一週間、それも少ししか接したことのないルルーシユ皇子。



行儀見習いとしてアリエス宮に行つてから殆ど会話のしたことのない相手だ。思い入れは、殆どない。ただ、二人に利用されていた状態に共感を覚える。

「ナイトオブブラウンズとしての正しい行動は一つ」

帝国貴族であるアールストレイム家として、ナイトオブブラウンズとして、ゼロを捕まえることが正しい行動であるとは理解している。たとえ正しいと理解しても、人間としての感情がそれに沿うことに躊躇いを覚えさせる。

「私はどうしたらいい……?」

気持ち的にはルルーシユの味方をしたいぐらいにシャルルとマリアンヌに失望しているが、ブリタニアで生まれ育ってきたアーニャは帝国貴族でありナイトオブブラウンズでもあるから簡単に祖国は捨てられない。

二律背反とまではいかなくても安易に行動を移ることを躊躇わせ、アツシュフオード学園に登校することも碌に公務にも出ずに自室に引き籠っていた。

『こちらは蓬莱島上空です。合集国憲章批准の式典が今、正に始まるうとしています』

点けっぱなしだったテレビから聞き覚えのある声がして顔を向けると、リポーターがアツシュフオード学園で良くしてくれた元生徒会長であるミレイ・アツシュフオードだった。

『つまり、この合集国憲章を批准することで我が国に匹敵する巨大な連合国家が誕生する、という訳ですね。分裂したEUの一部も入ることですから国力は強大です。EU脱退国は、ポーランド、イタリア、ルーマニア……』

「ミレイ会長……」

『これら各国代表を説き伏せたのは 黒の騎士団なんです。ということとは、連合の指導者はゼロ。つまり、ブリタニアの敵となる可能性が高く、現在キュウシュウ、チュウゴク、ホクリクを中心に軍の配備が……』

『ブリタニアに勝つ為にルルーシユ様が作った超合衆国。でも、ル

ルーシユ様の目的には意味がない」

マリアンヌはルーシユ達がアツシユフオードに保護されていたことを知っていた。知っていて放置していたマリアンヌの記憶をアーニヤも共有しているから、複雑な目でテレビを見てしまう。

「入るぞ、アーニヤ」

直後、ドアがノックされて返事をするよりも早くジノが部屋に入ってきた。無遠慮に部屋に入って来たジノにアーニヤは眉間に皺を寄せる。

「女性の部屋に断りなく入ってくるのはどうかと思う」

感情表現に乏しいアーニヤにとっては睨み付けているつもりでも、その本人の周りが周りだけにジノにとっては微風にもならない。足の踏み場を探しながら口を開く。

「そう言うなら女性らしく部屋を片付けてほしいものだ」

「それは女性蔑視」

「言い過ぎは謝罪するが、清潔な環境を維持するのは人として常識の範囲と思うぞ」

言われて辺りを見渡してみれば食べかけのお菓子の袋や飲み物の空き缶や空き瓶が無造作に転がっていてぐうの音も出ない。

「片付ける」

「是非、そうしてくれ。足の踏み場もない部屋にいては一息も吐けない」

言い返したいが、正論な上に口達者ではない自分の口ではジノには勝てないのには目に見えているので黙々と片付ける。

『放送をご覧の皆様、只今47カ国全てが合衆国憲章への批准を終えました。続きまして……』

「ナナリー総督やシユナイゼル殿下と共に謁見の間で見ていたのでは？」

粗方片付け終わったところでジノがここにいる理由が気になった。

黒の騎士団はブリタニアの目下の大敵である。大々的な式典を行うと分かっているのならば、謁見の間でみんなで見るとは。エリア1の重鎮も含めて集まっているはずだから、何故かアーニヤの部屋に

やってきたジノの目的が分からない。

「スザクの姿が見えなくてね。アイツのことだからもしかしたらここに来てるかもと思って来てみたんだが」

「前に来た時から来てない」

「とは、分かっていたのだけれど一応確認に来たわけだ」

引き籠るようになってから理由をつけてはアーニヤの様子を見にも来ていたので、ジノの今回の行動には納得がいった。

「顔色は大分良くなったようだ。迷いはまだ消えていないようだけれど、そろそろ公務にも出て来れそうか？」

「……………まだ」

最初は病欠ということとで公務に出なくても見逃されていたが、流石に長過ぎる上に医者に診察を受けていないのでアーニヤの立場が危うくなっているのは言われなくても分かっていた。

ナイトオブブラウズであろうとも職務放棄をして安住としていられると考えるほどアーニヤも耄碌していない。

「今はまだ何も決められない」

それでも引き籠っているのは今のブリタニアの為に働くことが出来るのかと、自分でも決めかねているから。

「心配させてごめん下さい。感謝してる」

皇帝と元皇妃の所為で人間不信になってしまったアーニヤも、こうまで心配してもらえば悪い気はしない。ボソリと小さく言ったアーニヤにジノが顔を向ける。

「そういうことは面と向かって言っしてほしいものだな」

「知らない」

ジノとアーニヤがそんなやり取りをしている間にテレビでは式典が進んでいた。

『……………場合、この憲章に基づく義務が優先することとする』

一国で打倒できるほどブリタニアは弱くもなければ小さくもないから、対抗する為に連合国家構想を打ち立てることを予想した者は多いだろう。しかし、国ごとに形成された軍隊はどうしても連携を欠き、烏合の衆にしかかなりえない。

結局は机上の空論として消えて行く定めにあるはずだった。

『最後に、合衆国憲章第17条。合衆国憲章を批准した国家は固有の軍事力を永久に放棄する』

「正気か？」

超合衆国の最高評議会議長にして、合衆国日本代表である皇神楽耶が宣言するのを聞いていたジノが目を剥いているのを横目に見ながらアーニヤは静かにテレビを見つめ続ける。

『その上で各合衆国の安全については、どの国家にも属さない戦闘集団、黒の騎士団と契約します』

軍を黒の騎士団として統一し、指揮系統を一本化することでブリタニアと対抗する軍隊とする、合衆国構想のネックになりがちな点を排除したルルーシユの策だった。

『契約、受諾した。我ら黒の騎士団は超合衆国より資金や人員を提供してもらおう。その代わり我らはすべての合衆国を守る盾となり、外敵を制する剣となろう』

幾ら資金や人員を超合衆国に依存したとしても、黒の騎士団が暴走した際に止められる機関がないのも問題だった。かといって個々で動けばEUを分断したシユナイゼルの餌となる。

烏合の衆を纏め上げるために権力が黒の騎士団のトップに立つゼロに集約されていた。

「また超合衆国も無謀な方法で纏まったものだ」  
「でも、合理的」

CEOとして黒の騎士団にトップとして立つゼロが理性的な人間で、情勢を無視した暴走など行わない良識を持った人間であると信じられない。しかし、ルルーシユにはギアスがあり、その目的が世界征服などではなくマリアンヌの死の真相とナナリーが安全に暮らせる世界を作る為と知っているアーニヤには、EUを切り崩したシユナイゼルと戦う為にはこの策しかない判断する。

『それぞれの国が武力をもつのは騒乱の因。超合衆国では最高評議会の議決によってのみ軍事力を行使します』

画面の向こうでマイクを持った天子の甲高い声がスピーカーを通して

して部屋に響き渡る。

『それでは、私から最初の動議を行う前に一つだけ』

天子に代わって皇神楽耶の顔が画面一杯に広がる。

『争いは何も生み出しません。強者が弱者を虐げるのではなく、全ての人が手を差し伸べ合えるような世界になるように――』

――我々は神聖ブリタニア帝国との対話を望みます』

「これは、また……」

「超合衆国の規模はブリタニアに匹敵する。対等の立場で交渉を求め  
ている」

超合衆国はブリタニアとは違うのだと世界に示す為に、神楽耶は交渉のテーブルを用意する気があると告げた。

『――ゼロよ』

神楽耶が映る画面にノイズが奔り、数秒後に神聖ブリタニア帝国第九十八代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアが玉座に頬杖を突く姿が映された。

「皇帝、陛下……」

シャルルが突如として画面に現れたことで、何の心の準備もしていなかったアーニヤの心が揺れる。

『小癩なり。だが、面白い選択だ』

ハッキングにて通信回線を乗っ取ったシャルルは言葉とは裏腹な、つまらなさげな態度で全てを見下す。マリアンヌによって体に乗っ取られた時のアーニヤを見る愛し気な眼と違い、どこまでも冷ややかに。

『三極の一つEUはすでに死に体。つまり貴様の作った小賢しい憲章が世界をブリタニアとそうでないものに色分けする。単純、それ故に明快。故にこそ超合衆国は我が神聖ブリタニア帝国と対等の力を得た』

『――超合衆国はブリタニアと対等のテーブルに着いた』

またもや画面がブレ、次の瞬間には左側にシャルルが、反対側に画面の男ゼロが映って静かに告げる。

『望んでいようがいまいが戦争は起こる。だが、戦争以外の方法で問

題を解決できる方法があるのならば、そちらを取るべきである。我々は、超合衆国は理性ある人間として対話を望む』

『ほう、交渉によって何を望むというのだ？』

頬杖を突いたままではあるが楽し気に唇を歪めたシャルルに対して、仮面を被るゼロの変化は分らない。

『神聖ブリタニア帝国が今まで征服した全エリアの解放、そして今まで各国が貴国によって被って来た損害賠償を支払って頂きたい』  
「無理だな」

つまりはブリタニアが世界に戦争を吹っ掛ける前の状態に戻し、与えた被害に値する弁償を求めたゼロの言葉が現実的ではないとジノが一刀の下に言葉を放った。

『下らん』

差別を助長し、競い奪い獲得し支配することを容認しているシャルルの一言に集約した否定に、寧ろ皇帝らしいとすらアーニヤには感じた。

世界を自国一色に染め上げんとしているブリタニアの頂点に立つ男が、そのような提案を呑むはずがない。

これはきつとブリタニア国民の大半がそうであろうと、シャルルに隔意を抱いているアーニヤにすら簡単に予想がつく。そしてそのことは嘗ては皇子だったルルーシユにも分かっているはず。

『この場で特定のエリアの解放を匂わせ、小癩な超合衆国を崩すことは容易い』

しかし、それは剛腕を以て覇道を突き進んできたシャルル皇帝のブリタニアらしくない方法である。それこそ自身で評したように小癩なやり方だ。

『世界を二分する神聖ブリタニア帝国と超合衆国。戦いとは全てを得るか全てを失うかに集約する。単純に行こうではないか』

『つまり、交渉する気ない？』

『原初の真理とは弱肉強食なり』

画面の中でシャルルは頬杖を止め、初めてニヤリと獰猛に笑った。  
『この戦いを制した側が、世界を手に入れる。挑んで来るがいい、ゼ

ロ』

『己が弱者となった時、同じ台詞が言えるか見物だな、シャルル』

交渉は決裂し、お互いに宣戦布告は済んだ。

出番を終えたかのようにゼロが後ろに下がると同時に、画面の中心に神楽耶が映る。

『我が合衆国日本の国土は他国により蹂躪され、不当な占領を受け続けています。黒の騎士団の派遣を要請したいと考えますが賛成の方はご起立を』

超合衆国に参加した代表達が神楽耶の動議に賛成を示す為に席から全員が起立する。

『賛成多数。よって、超合衆国決議第壱號として黒の騎士団に日本解放を要請します！』

『いいでしょう。超合衆国決議第壱號 進軍目標は……………日本!!』

議長である神楽耶から決議の結果を受け、ゼロが腕を振るいながら日本がある方へと指差すと同時に歓声が起ころ。

『ゼロ!』

式典会場のどこからか湧き上がった誰かの声が連鎖し、それは瞬く間に蓬萊島全体に伝染し、会場を揺るがすほどの響きとなる。

『オール・ハイル・ブリタニア!』

エリアー1政庁でもブリタニア人達が叫んでいるのか、アーニヤの部屋にまで声が届く。まるで対抗するかのように画面の向こうでもゼロの名が叫ばれる。

『ゼロ!』

『オール・ハイル・ブリタニア!』

連鎖する二つの叫びが、世界はたった二つの色に塗り潰されたことを示していた。

「……………直にこの地は戦場となるだろう」

ゼロとブリタニアを歓呼する叫びは今も続いている。激動を予感させる中でジノがぼそりと呟いた。

「お前はとうするんだ、アーニヤ?」

ナイトオブラウンスとして、ブリタニア貴族として、その責務を果

たす気があるのかと問いかけるジノにアーニヤは何も答えられない。「ジノは」

ふと、アーニヤは訊ねたくなつた。

階級には大分差はあれど同じ帝国貴族で同じナイトオブブラウンズという立場。更に年もそれなりに近いジノにだからこそ聞きたいことがあつた。

「何の為に戦っているの？」

「聞いたのは私のはずなんだが………まあ、いいか」

質問されたのに質問で返す不躰をしている自覚はある。答えてもらえなくて当然と思つていたがジノの反応は違つた。

「要は戦う理由ということだろう。簡単だ。私がジノ・ヴァインベルグだからだ」

意味が分からない。意味が分からなくて首を捻つていると、自覚があるらしいジノは苦笑を浮かべる。

「ブリタニアで生まれ、育ち、今がある。ヴァインベルグ家として、ナイトオブブラウンズとして、祖国の為に戦うことに否と考えることはない」

大半のブリタニア人がそうであるように、祖国が強く強大になることを悪いこととは思わない。侵略し、制圧することは悪ではなく、自分達が強いからこそ正しいのだと信じている。

「ブリタニアが間違つているとしても？」

「何かと問題を抱えていることは否定しないが間違つているとはな」

名門貴族で自身も家柄に頼らずにナイトオブブラウンズになつたジノは、きつと敗者になつたことがないのだろう。

国内の問題は争い競い常に進化を続けている証拠。競い、奪い、獲得し、支配した果てに未来があることに何の疑いもない。アーニヤだつて自分では無い別人が体を勝手に使い、あまつさえ皇帝と元皇妃が犯人であると知らなければ疑問を抱くこともなかった。

「私は……」

続く言葉をアーニヤは呑み込んだ。決してナイトオブブラウンズが口にしていい言葉ではなかつたから。



「カレンもそうだけど、アーニャも何に迷っているんだ？」

今のジノにはカレンがシユタツトフェルトよりも紅月の名を選んだ理由もきつと分かりはしないのだろう。そんな諦めがアーニャの口を閉じさせた。



未だ盛り上がる式典から離れたゼロに呼ばれて後をついて歩く藤堂鏡志朗は今更ながらに違和感に気付いた。

(小さい……?)

藤堂の所感ではゼロの、正確にはルルーシユの身長はもう少しあったような気がする。

仮面の男の中身を知っても接し方に変わりはない。それでも自分の子供でもおかしくない年齢の少年の姿を目で追っていることを本人は気付いていなかったが。

殆ど私的な話をしてこなかったゼロに所感をそのまま告げるのは失礼に当たるので、藤堂は人のいない通路に入ったことに気付いても口を開かなかった。

「この辺で良いか」

ゼロが足を止めたので藤堂も止まる。

振り返るゼロと相対すれば、仮面を被っていることも考慮してもやはり身長に差異があるような気がする。所感は気の所為だと言われればそれまでだが、この時の藤堂にはゼロが常とは違うという不思議

な確信があった。

「君は誰だ？」

迂遠なのは好まない藤堂が率直に問いかけると、ゼロが仮面の中で笑う機械を通した声が響く。

「上手く演じたつもりだが気づかれていたか」

そう言っつてゼロが仮面に手を伸ばし、外すと長い髪の毛が広がっていくのを見た藤堂は瞠目する。

「C・C……姿が見えないと南達が言っていたが」

以前にも何度かゼロの衣装を着ているだけに違和感の少ないC・Cは、狭い仮面の中に長い髪の毛を押し込んでいた頭を振って広げ、枝先を手で整える。

「何時からゼロに」

「式典の前からだ。声は録音してある物を状況に合わせて流していた。最初から別人などマジックショーでもやらない手法だろ？」

仮面を藤堂に投げ渡し、マントを脱いで襟元を緩めたC・C。C・Cがこともなげに言う。

「……………何故だ？ この式典が今後を左右することは彼にも分かっているはず。C・Cが扮していても上手くいったが、こんないらないリスクを取るなど彼らしくない」

「どうしても外せない用事があるんだそうだ」

「外せない用事、だと？」

少なくとも藤堂が知る限りでは、この式典以上に大事なことがあるとはとても思えなかった。

「そのことも併せて、あいつからお前に伝言を預かっている。『もし、俺が戻らなかつたら藤堂、お前がゼロを引き継いでくれ』だそうだ」

「何っ!? それはどういうことだ!!」

最も大事な一戦を前にして戦線離脱を仄めかす伝言を伝えられても困惑しかない。

「私は伝言を預かって伝えただけだ」

掴みかかろうとして、C・Cが恐らくまだ10代の少女であることを思い出して思い留まる。

動揺は収まらないものの、深呼吸をして冷静さを取り戻した藤堂が口を開く。

「理由を教えてください。俺などがゼロには成れないし、こんな状態では戦えない」

「今後のプランを纏めたファイルを預かっているが、まあそうだろう。ゼロはルルーシュだからこそ奇跡の男になる。後を継げと言われても困るだけか。それに藤堂にも全く関係のない話でもない」

自分で納得したC・C.は壁に寄り掛かって顔だけを向けて藤堂を見る。

「まず事前情報として言っておこう。ルルーシュのことが皇帝に知られた」

「……………それは」

「ルルーシュはナナリーが危険に晒されると考え、守る為に枢木スザクに会いにエリア11に向かった」

先の伝言と合わせれば、戻って来れない可能性があるるとルルーシュが考えていることが分かる。

先代のゼロという言い方は変だが、スザクはゼロを捕まえて皇帝の下へ連れて行ったという。妹を守る為に自身を利用してナイトオブ라운ズの状態を得たスザクを頼ることはしたくなかったはずである。

「危険を承知でゼロとして立って皆を救い導くことより大切なことだと?」

「ルルーシュにとって、ナナリーは何よりも優先する対象だ」

それが全てであると、C・C.は言葉少な気に語った。

藤堂は手の中にある仮面が虚構であり、その虚構を自分が背負うのだと実感して足場が崩れていくような感覚を味わった。